

# 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(4)

前橋市元総社町小見地区、群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・  
中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵  
文化財発掘調査報告書 8分冊中の第4分冊。

一 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第33集一

本文編(2)

1990

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



資料	財形 島根埋藏文化財	01-320
	調査事業団保管	49-2
No. 2-65	平成 2 年 7 月 12 日	(6)



# 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(4)

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第4分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第33集 —

本文編(2)

1990

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 第2節 北側調査区

### 第1項 J区の検出した遺構・遺物について

J区は当遺跡の北限である牛池川に面する調査区であり、東西約65～80m、南北約85m、面積約6,100㎡が対象地域である。台地上は南側の調査区から連続する平坦な面を形成しており、基準の標高は、130.50mであり、台地上と河川敷微高地との比高差は約4.9mである。台地北縁の崖線は調査区東側から調査区外にかけて溝状に入り込んでおり、この部分に微高地が形成されている。微高地の形成については、河川敷トレンチ調査の項で詳述するが、FAまたはPPF-1に伴う洪水堆積物によって形成されたものと考えている。

台地上の遺構分布はI区等と比較して特に密なものではないが、H区北半からI区にかけて展開する遺構密度の高い部分と連続するものであり、崖線の間には約15m幅で遺構空白部が認められる。また、既に上野園分僧寺・尼寺中間地域(1)で報告した、弥生時代の集落はこの地域に形成されている。

台地上の遺構の主体は竪穴住居跡であり、既に報告済みの弥生時代の住居跡を除くと44軒が検出されている。その中には、北東または南西の主軸方位を有する一辺が6～8mの比較的大型のものが顕著にみられる。また、大型住居跡は互いに重複する例は少なく、小型の住居跡との重複が多いことが特徴である。これらの大型住居跡の中でJ区第10号住居跡は、一辺が8mに達する特に大型に属するものであるが、カマド構築に際して特異な方法を取っている。それは燃焼部下面に地山から切り出した凸字形の構築材を据え、その両側に同質の袖構築材を立て、さらにその上に天井構築材を乗せるというものである。また、第9号住居跡のカマドは、住居掘り込みが比較的深かったことや、社の敷地内で耕作を受けにくかったことによるものか、非常に残りの良いものであり、煙り出しの立ち上がりまでが検出されている。

その他の遺構としては、2間×3間の総柱の掘立柱建物跡が1棟調査区西寄りに検出されており、当区の台地上部分では単独で存在するようにみえるが、当調査区南側のI区に展開する掘立柱建物跡群に関連するものと考えられる。また、土坑や溝状遺構は調査区南西部に重複して検出されているが、明確に性格の捉えられるものは無かった。

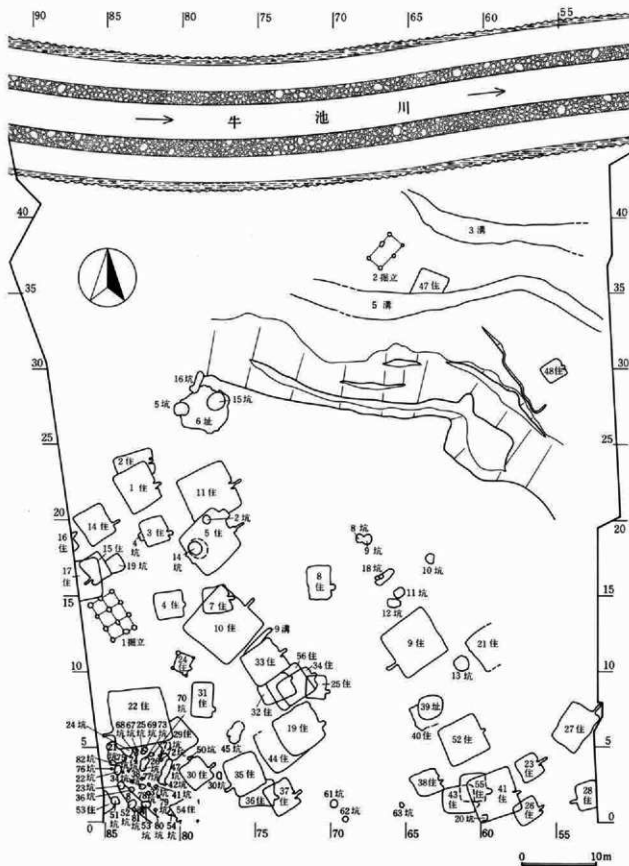
河川敷では、竪穴住居跡が2軒と1間×2間の掘立柱建物跡が1棟の他、微高地縁辺に沿って掘削された溝状遺構及び微高地中央を横断する溝状遺構が検出された。特に微高地縁辺を巡る第3号溝状遺構は、浅間B軽石によって埋没したことがわかっており、時期を知る上で重要である。微高地部分を除く河川敷の調査は河川改修によってほとんど実施することができなかったが、浅間B軽石下の水田があった可能性がある。

遺構の時期は、古墳時代後期から平安時代までのものがみられるが、主体は古墳時代後期(6世紀～7世紀代)のものであり、大型住居跡の大半はこの時期に属している。

遺物は、土師器と須恵器の坏・碗・壺等が主体であり、南側調査区で多量に出土している瓦はきわめて少ない。また、当区一軒当たりの遺物出土量は、先に報告したF・G・H(第11号溝状遺構以南)区住居跡の遺物出土量と比較して約2倍以上の出土量があり、その中で土師器の占める割合が多い。出土量に関しては住居跡の規模に関係するというよりは、遺構所属時期によるものと考えられる。

特殊な遺物としては、第14号住居跡から出土した畿内産土師器坏がある。これは畿内との直接的な交流を示す遺物であり、第28号住居跡から出土した在地産暗文土師器坏などの出現を探る上で重要と考えている。さらに、第10・34号住居跡からは器種不明の特異な須恵器が出土している。これらの遺物については第5章でそれぞれ問題提起をしたので参照願いたい。

第4章 検出された遺構・遺物

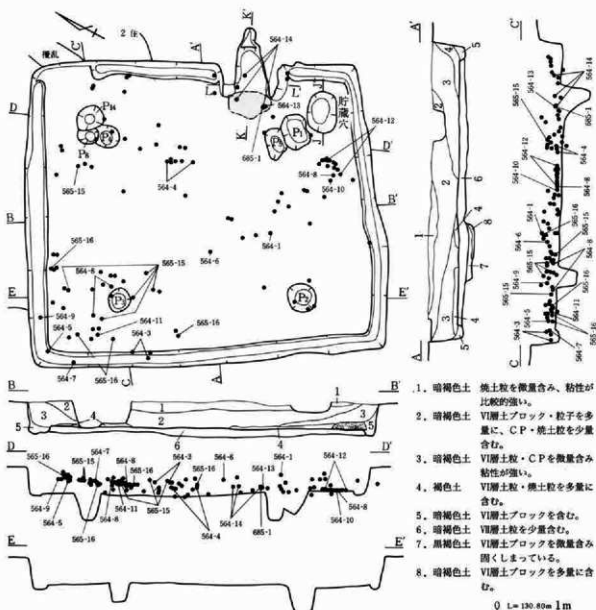


第561図 J区遺構配置図



## 竪穴住居跡

遺構名称	J区第1号住居跡	位置	20~23-J-81~84グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	4.35m×5.73m	主軸方位	東-28度-北
備考	北側で第2号住と重複し、セクションから2号住→当住居と考えられる。柱穴は最終使用はP <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4ヵ所。壁溝は北コーナー部を除き全周する。貯蔵穴は東コーナー部で楕円形を呈する。				
カマド	位置・形状	東壁南寄り	主軸方位	東-28度-北	
規模	全長112cm	屋外長56cm	屋内長56cm	袖間幅107cm	燃焼部幅49cm 煙道幅8cm
備考	壁を凸字形に掘り込み、掘り方両肩部から先端に角柱状載石を据えて袖を構築している。煙道部は燃焼部から約15cmの段を有して短く伸びている。掘り方は半円状で中央に支脚を据えるビットがある。				

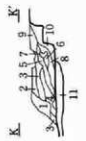
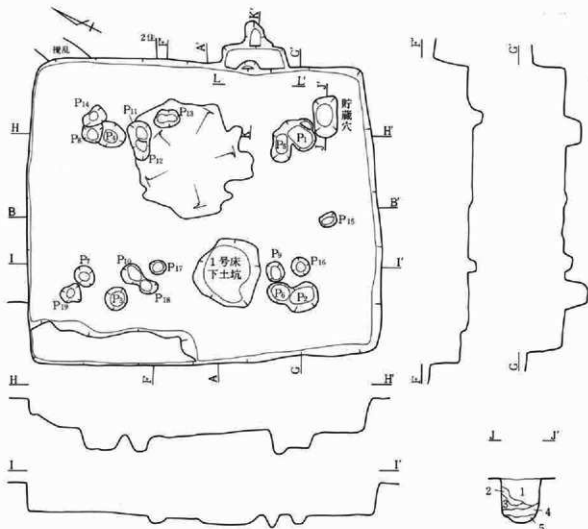


第562図 J区第1号住居跡実測図(1)

1. 暗褐色土 粘土粒を微量含み、粘性が比較的強い。
2. 暗褐色土 VI層土ブロック・粒子を多量に、C・P・焼土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 VI層土粒・C・Pを微量含み粘性が強い。
4. 褐色土 VI層土粒・焼土粒を多量に含む。
5. 暗褐色土 VI層土ブロックを含む。
6. 暗褐色土 VII層土粒を少量含む。
7. 黒褐色土 VI層土ブロックを微量含み固くまっている。
8. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。

0 L=130.80cm 1m

第4章 検出された遺構・遺物



0 L=130.00m 1m

貯蔵穴

1. 暗褐色土 焼土粒・炭化物を微量含む。
2. 暗褐色土 焼土粒・炭化物及びVI層土ブロックを微量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。
4. 暗褐色土 VII層土ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 粒子・ブロックを含まない。

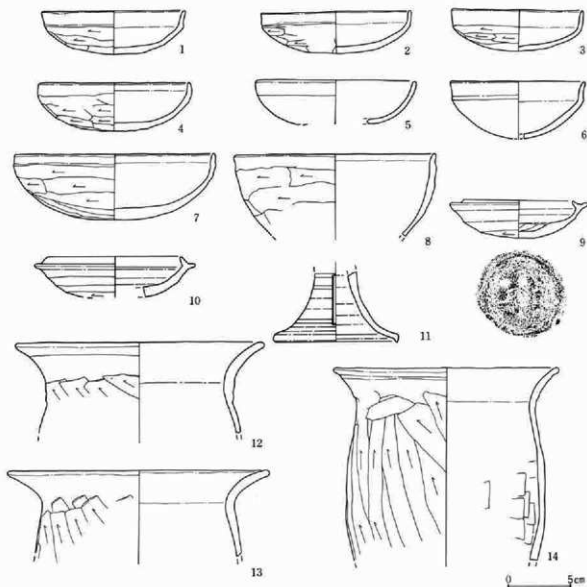
カマド

1. 暗褐色土 焼土粒・白色粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土粒を微量、白色粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 焼土粒を多量、白色粒を微量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒・VII層土ブロックを含む。
5. 暗褐色土 焼土大粒を多量に含む。
6. 暗褐色土 焼土粒・白色粒を少量含む。
7. 赤褐色焼土層

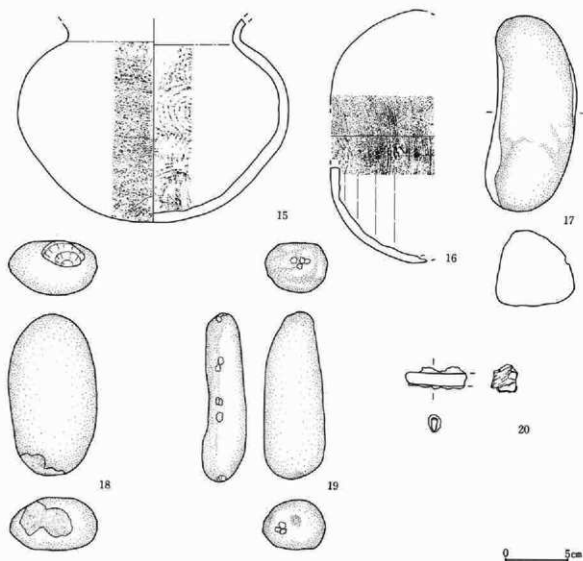
8. 黒色土 焼土粒・白色粒等を全く含まず、粘性が強い。
9. 暗褐色土 3層に近似するが、焼土粒の含有量が多い。
10. 暗褐色土 焼土粒・炭化物をわずかに含み、粘性が強い。
11. 暗褐色土 10層に比較して焼土粒・炭化物の含有量が多い。
12. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・VI層土ブロックを含む。
13. 暗褐色土 焼土粒を少量、VII層土ブロックを微量含む。
14. 暗褐色土 焼土細粒・白色細粒を多量に含む。
15. 暗褐色土 焼土細粒・白色細粒を微量含み、14層に比較して黒味が強く、粘性が弱い。
16. 暗褐色土 11層に近似。
17. 暗褐色土 焼土粒・白色粒を非常に多く含む、しまりが強い。
18. 暗褐色土 17層に近似するが、黒味が強い。

第563図 J区第1号住居跡実測図(2)

所見 炭地段階の柱穴と見られる $P_1 \sim P_4$ の周辺からは、15本のピットが検出された。これらの一部は位置関係から柱穴であった可能性が強く、 $A - P_1 \sim P_4$  (径約35~40cm、深度約28~39cm、柱穴間距離東西約2.6m、南北約3.0m)、 $B - P_5 \sim P_8$  (径約30~35cm、深度約30~41cm、柱穴間距離東西約2.3m、南北約3.0m)、 $C - P_9 \cdot P_{10} \sim P_{11}$  (径約27~37cm、深度約23~41cm、柱穴間距離東西約2.0~2.2m、南北約2.2m)の組み合わせが想定できる。3組共にほぼ同方位であり、規模・確認状態から $C \rightarrow B \rightarrow A$ の建て替えが考えられる。つまり第1段階(C)から第2段階(B)では拡張を伴い、第2段階(B)から第3段階(A)では同規模のまま柱穴位置の変更をしていることになる。掘り方は全面に一定レベル下がっている他、カマド正面の西壁近くに径約1.05mの楕円形プランの土坑が見られた。遺物はほぼ全面から出土している。全体の傾向としては北側から土層堆積に沿うような垂直分布が認められ、これと対照的にカマド周辺のもの、床面とほとんど間層を挟まず出土している。カマドは比較的良好な残存状態であるが、右袖は袖石が抜かれ、南壁近くに廃棄されていた。また、掘り方段階で左袖袖石の据え方寄りにピットが検出されていることから、この位置に支脚があったことは明らかである。



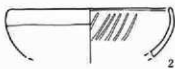
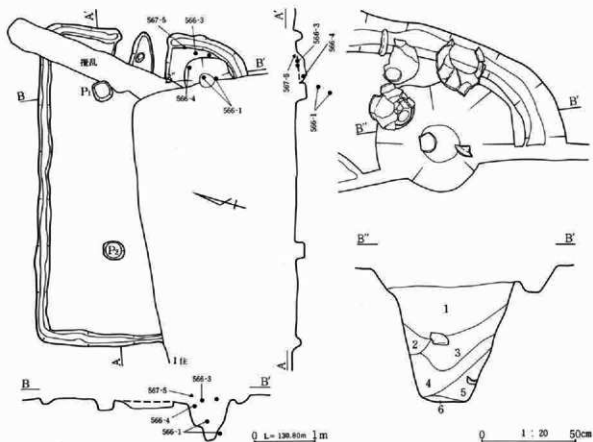
第564図 J区第1号住居跡出土遺物実測図(1)



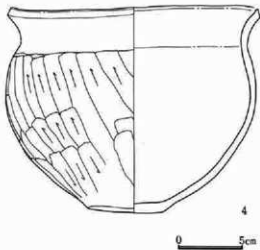
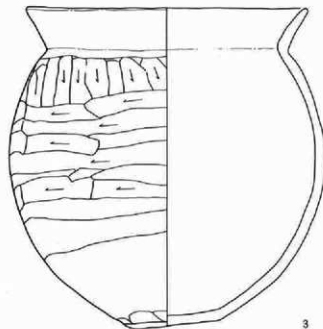
第565図 J区第1号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第2号住居跡	位置	22~24-J-81~84グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	5.06m×3.33m	主軸方位	東-17度-北
				残存深度	約7cm程
備考	南側約3/4は第1号住との重複で失っている。壁溝は全周すると思われ、柱穴は北側2本が残存した。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈する。遺物はわずかで貯蔵穴からの出土である。				
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央	主軸方位	東-12度-北	
規模	全長 ?cm	屋外長 ?cm	屋内長 ?cm	袖間幅 95cm	燃焼部幅 30cm
				煙道幅	?cm
備考	カマド底面のみ検出で壁外の状態については不明である。燃焼部は極めて狭く、袖が住居内に長く伸びるタイプである。また、中央左寄り円礫が支脚として設置されていた。				

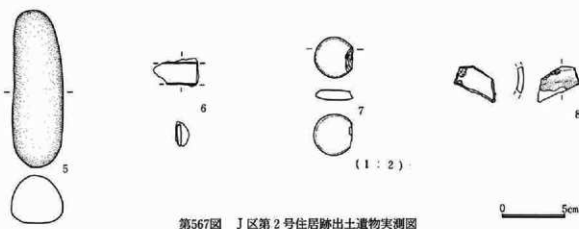
所見 当住居跡は第1号住居跡との重複によって南側約3/4を失っており、このため検出した柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2本だけである。規模はP<sub>1</sub>が径約30cm、深度約18cm、P<sub>2</sub>は径約30cm、深度約15cmで、柱穴間距離は約2.55mである。遺物は第565図-1・3・4、第567図-5が貯蔵穴内及び周辺から出土している。また、第567図-7・8の青磁片と碁石が覆土中から出土していることから、土坑等との重複が考えられる。



1. 暗褐色土 焼土粒・VI層土粒を微量含む。
2. 褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土 1層と比較してやや明るい色調でVI層土粒を多量に含み、焼土粒を全く含まない。
4. 暗褐色土 1層と比較して焼土粒が多い。
5. 暗褐色土 焼土粒・炭化物を微量含む。
6. 灰白色土 VII層土ブロック主体。

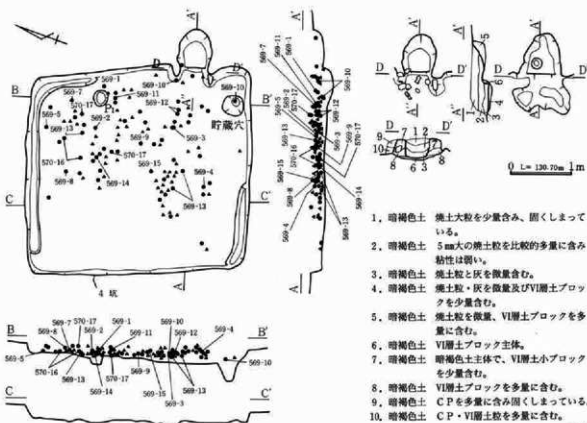


第566図 J区第2号住居跡・出土遺物実測図



第567図 J区第2号住居跡出土遺物実測図

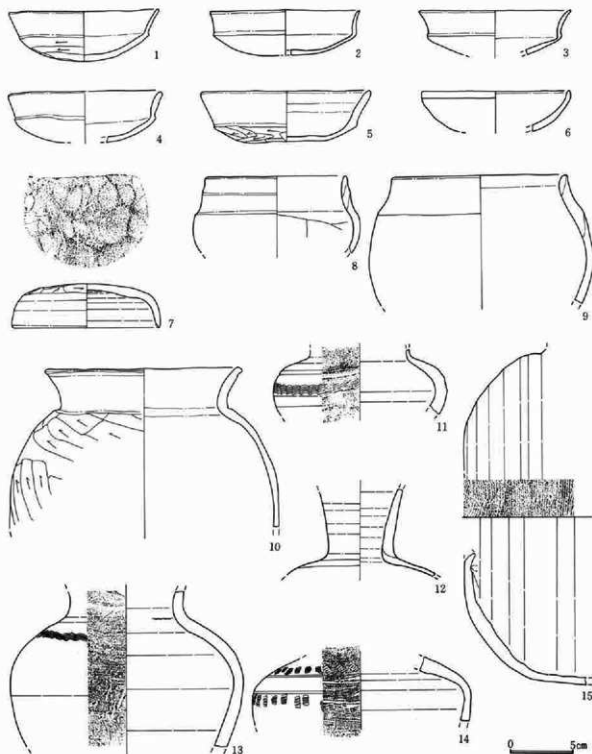
遺構名称	J区第3号住居跡	位置	18~20-J-80~82グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	3.30m×3.58m	主軸方位	東-23度-北
				残存深度	約19cm程
備考	床面は平坦で、壁溝は北壁及び南壁の一部に沿って見られた。柱穴は無く、貯蔵穴は南東コーナー部やや西寄り、径約35cm、深度約30cmの円形である。				
カマド	位置・形状	東壁南寄りに偏在する。		主軸方位	東-19度-北
規模	全長 88cm	屋外長 56cm	屋内長 32cm	袖間幅 79cm	燃烧部幅 43cm
				煙道幅	?cm
備考	壁外に馬蹄形に掘り込み、内側に短い袖を付設している。検出時袖材・支脚は見られなかったが、掘り方時に袖部及び燃烧部左寄りにピットが見られることから、廃棄時に抜き取られた可能性が高い。				



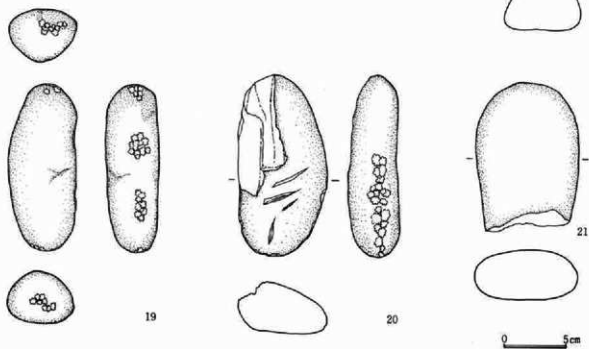
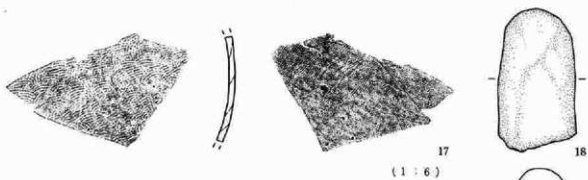
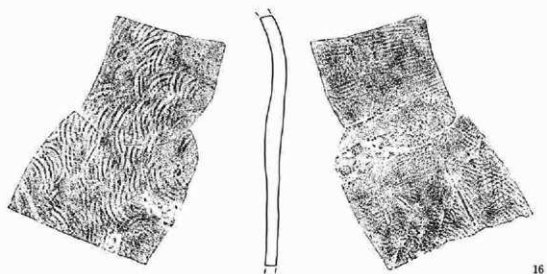
第568図 J区第3号住居跡実測図

1. 暗褐色土 焼土大粒を少量含む、固くしまっている。
2. 暗褐色土 5mm大の焼土粒を比較的多量に含む粘性は弱い。
3. 暗褐色土 焼土粒と灰を微量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒・灰を微量及びVI層土ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 焼土粒を微量、VI層土ブロックを多量に含む。
6. 暗褐色土 VI層土ブロック主体。
7. 暗褐色土 暗褐色土主体で、VI層土小ブロックを少量含む。
8. 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含む。
9. 暗褐色土 C Pを多量に含む固くしまっている。
10. 暗褐色土 C P・VI層土粒を多量に含む。

所見 遺物は東側に特に多く、床面との間にわずかな間層を挟んで出土している。遺物の主体は竈で、他の遺物と重なりあっており、投棄されたような状態を示している。また、貯蔵穴の上面から、第569図-10が口縁部を斜め上方に向けた状態で出土した。貯蔵穴入口部に土器口縁部を埋設した例は、H区などでも例が見られることから、この場合も埋設されていたものと考えられる。



第569図 J区第3号住居跡出土遺物実測図(1)

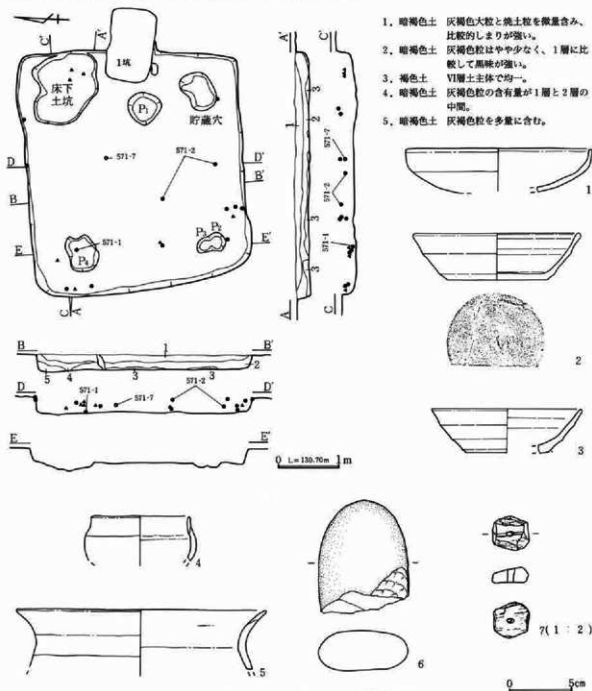


第570図 J区第3号住居跡出土遺物実測図(2)



遺構名称	J区第4号住居跡	位置	13~15-J-79~81グリッド内
平面形態	隅丸方形	規模	3.85m×3.43m
		主軸方位	東-2度-北
		残存深度	約25cm程
備考	当住居は、他の住居との重複は認められないが、後代の長方形土坑によって、右袖部を除いてカマドの大半が攪乱されている。柱穴は無く、貯蔵穴は南東コーナー部に検出した。		

所見 床面の精査段階で、カマド正面及び西壁に沿う位置にピットを検出した。この配置には規則性が認められることから、特にP<sub>2</sub>~P<sub>4</sub>は柱穴として機能した可能性も否定できない。遺物はそのほとんどが2層中のものであり、ピットや床下土坑の周辺から多く出土している。



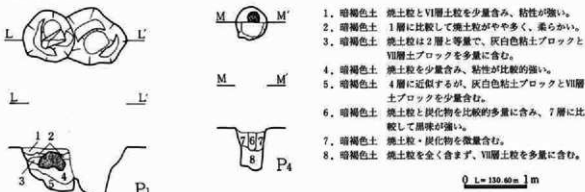
第571図 J区第4号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	J区第5号住居跡	位置	16~20-J-76~80グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	6.58m×6.45m	主軸方位	東-41度-北
備考	壁溝はカマド部を除いて全周し、柱穴は4本である。貯蔵穴は東コーナー部に楕円形を呈し、上位に中段を有する。規模は長径約100cm、深度約75cmである。北東壁のカマド北側に方形張り出しを有する。				
カマド	位置・形状	北東壁南寄り		主軸方位	東-34度-北
規模	全長217cm	屋外長184cm	屋内長 33cm	袖間幅 ?cm	燃焼部幅 68cm 煙道幅 17cm
備考	壁外に凸字状に掘り込み、一段段を有して煙道を約134cm延ばしている。袖石・支脚等の有無については、掘り方段階においても痕跡すら見られない。灰は右側に掻き出された状態を示している。				

所見 当住居跡は、北側で第11号住居跡と重複している。確認状態及びセクションから11号住→当住居という関係が考えられる。南西壁近くでは大型で円形の第14号土坑が重複し、この掘り方は当住居跡の床面下に及んでいる。廃棄時における柱穴は、確認状態からP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本であったことがわかる。しかし掘り方段階でこのP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>に近接して、内側に60cm前後の深度を有する円形ピットが検出された。これらはその位置関係から前段階の柱穴と見られるが、P<sub>5</sub>としたものは他に比較して浅く、位置も内側に若干偏在することから、P<sub>1</sub>が2時期の重複と考える位置関係からの説明がつく。この前提に立てて柱穴配列を見ると、A-P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>(径約45~50cm、深度約61~79cm、柱穴間距離約3.3m)、B-P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>~P<sub>4</sub>(径約38~45cm、深度約65~75cm、柱穴間距離約2.8m)の2組が想定でき、B→Aという最低一回の建て替えが考えられる。この建て替えに際しては、主軸方位に変化はほとんど見られないが、規模が若干拡大された可能性がある。その他当住居跡を特徴付けるものとして、南西壁ほぼ中央部壁外に検出した2本のピットとカマド北側に検出した方形の張り出しがある。前者のピットは壁に接するように平行しており、約135cmの間隔で、遺構確認面からの深度はそれぞれ約23cm、26cmである。こうした位置関係は偶然的所産とは考えられず、当住居跡に伴う施設であるのは明らかである。ここではその性格を決定付ける積極的な根拠には欠けるが、カマドの正面という位置関係等から入口施設と見るのが最も妥当と考えている。張り出しは当初別遺構と考えていたが、壁溝が連続して廻っていることから付属施設と考えた。掘り方は、住居跡全体が約8cm程度下がる他、中央部に2ヵ所大型の床下土坑が検出されている。遺物はほぼ全面に見られ、垂直分布においても床面から確認面まで高密度で出土している。

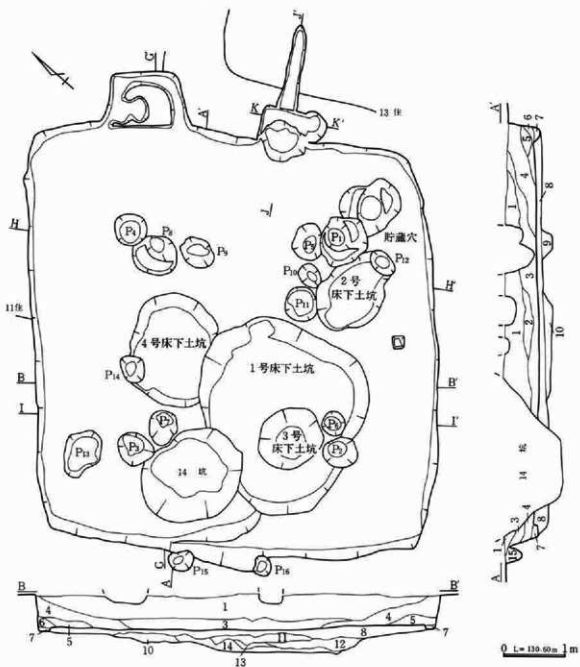
カマドは表中記載の通り、支脚・袖石等の痕跡は掘り方の調査においても検出されておらず、袖石が使用されていなかったことは確実である。また、検出した灰面のあり方から、袖は住居内に突出していなかった可能性が高い。



第572図 J区第5号住居跡柱穴断面図

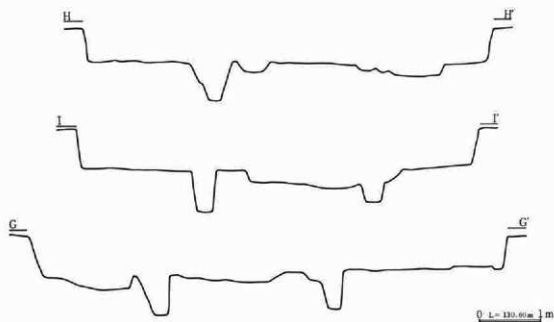


第573図 J区第5号住居跡実測図(1)

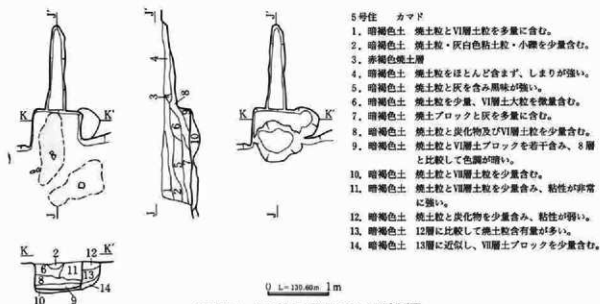


- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含み、粘性は比較的弱い。</p> <p>2. 暗褐色土 1層に比較して焼土粒と炭化物の含有量が多く、VI層土粒を多量に含み、しまりがある。</p> <p>3. 暗褐色土 1層に比較して明るい色調で、焼土粒とVI層土ブロックを少量含み、しまりが弱い。</p> <p>4. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量、VI層土粒を比較的多量に含み、粘性が弱い。</p> <p>5. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含み、粘性が比較的強い。VI層土粒の状態から、壁の崩落と考えられる。</p> <p>6. 暗褐色土 5層に類似するが、焼土粒がごく微量含有されている。</p> <p>7. 暗褐色土 焼土粒とVI層土粒を少量含み、比較的しまりが強い。</p> | <p>8. 暗褐色土 焼土粒とVII層土ブロック（灰白色粘質土）を比較的多量に含み、固くしまっている。</p> <p>9. 暗褐色土 8層と比較して焼土粒の含有量が少なく、VII層土ブロックを含まない。</p> <p>10. 暗褐色土 暗褐色土とVII層土ブロックの混土で、固くしまっている。</p> <p>11. 暗褐色土 焼土粒を微量、VI層土粒を比較的多量に含む。</p> <p>12. 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、VI層土粒を多量に含み、11層に比較して、粘性・しまり共に弱い。</p> <p>13. 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、VI層土ブロックを比較的多量に含む。</p> <p>14. 暗褐色土 VI層土ブロック及び8mm大のVII層土粒を多量に含む固くしまっている。</p> |
|--|--|

第574図 J区第5号住居跡実測図(2)



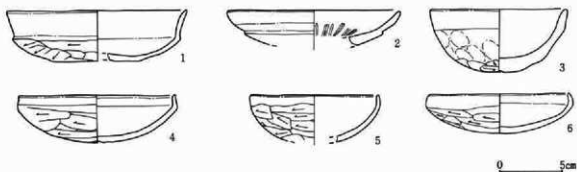
第575図 J区第5号住居跡実測図(3)



5号住 カマド

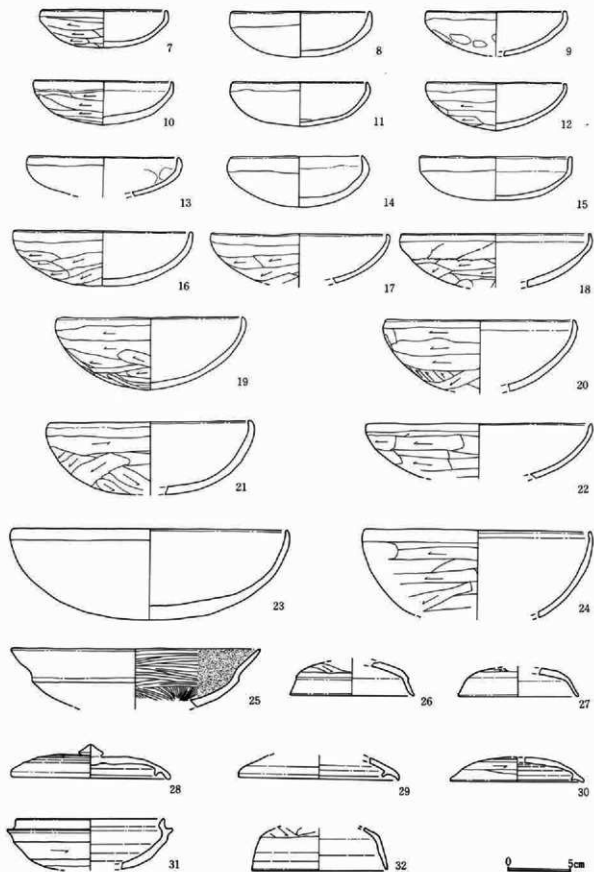
1. 暗褐色土 焼土粒とVI層土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 焼土粒・灰白色粘土粒・小礫を少量含む。
3. 赤褐色焼土層
4. 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、しまりが強い。
5. 暗褐色土 焼土粒と灰を含み黒味が強い。
6. 暗褐色土 焼土粒を少量、VI層土大粒を微量含む。
7. 暗褐色土 焼土ブロックと灰を多量に含む。
8. 暗褐色土 焼土粒と炭化物及びVI層土粒を少量含む。
9. 暗褐色土 焼土粒とVII層土ブロックを若干含み、8層と比較して色調が暗い。
10. 暗褐色土 焼土粒とVII層土粒を少量含む。
11. 暗褐色土 焼土粒とVII層土粒を少量含み、粘性が非常に強い。
12. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含み、粘性が弱い。
13. 暗褐色土 12層に比較して焼土粒含有量が多い。
14. 暗褐色土 13層に近似し、VII層土ブロックを少量含む。

第576図 J区第5号住居跡カマド実測図

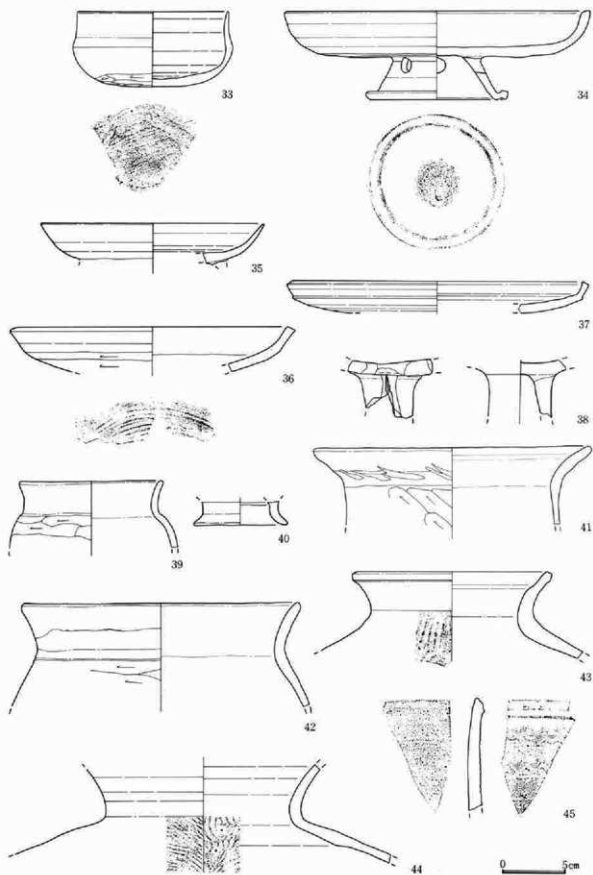


第577図 J区第5号住居跡出土遺物実測図(1)

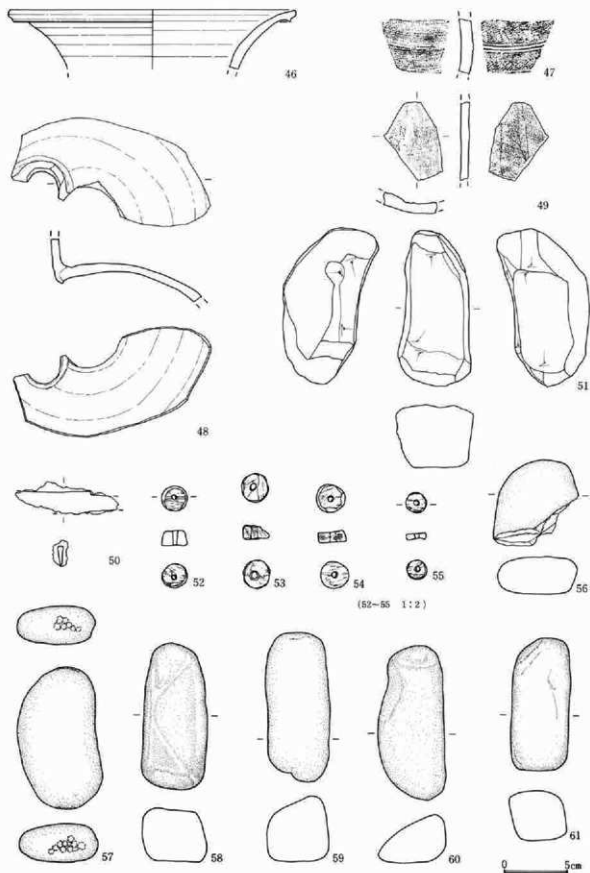
第4章 検出された遺構・遺物



第578図 J区第5号住居跡出土遺物実測図(2)



第579図 J区第5号住居跡出土遺物実測図(3)

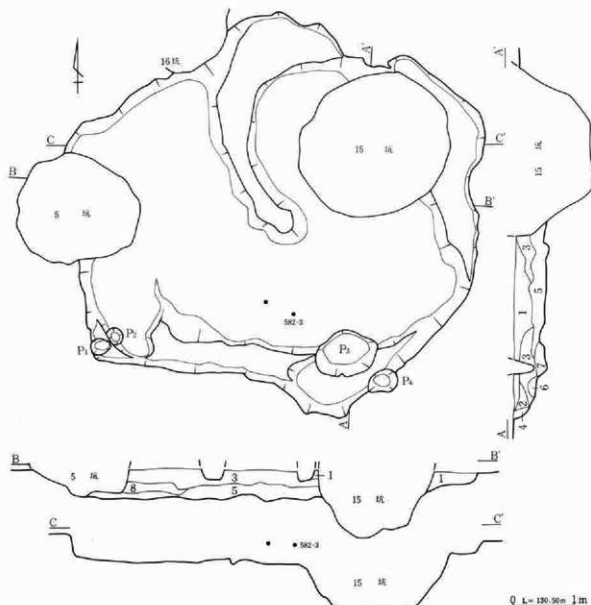


第580図 J区第5号住居跡出土遺物実測図(4)



遺構名称	J区第6号址	位置	25~28-J-76~80グリッド内		
平面形態	不整形	規模	6.65m×6.42m	主軸方位	-?度-
備考	平面形態等から住居跡とは考えられない。底面は全体に平坦であるが、北壁中央から東側に内湾した低い堤状のものがある。2基の遺構の重複とも考えられるが、いずれにしても性格は不明である。				

**所見** 当址は台地が牛池川に向かって落ちる際に位置している。南北セクションから南側で重複が見られるが、重複遺構の形態、性格等は不明である。当址の時期については、覆土の状態から古墳時代以降のものであることは確かであるが、特定はできない。遺物は覆土中位からごくわずかに出土した。

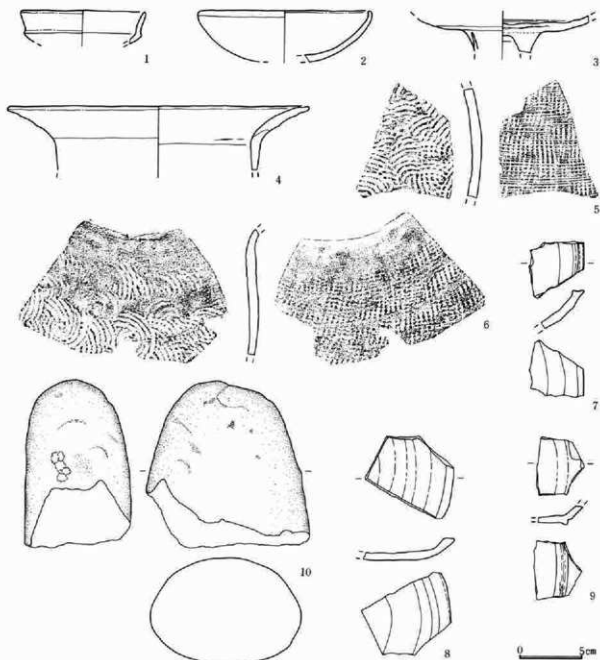


1. 暗褐色土 C Pと2cm大のFPを少量含み、固くしまる。
2. 褐色土 VI層土と暗褐色土の混土で、粘性は弱い。
3. 暗褐色土 I層に比較してC Pが細粒でさらに少ない。
4. 褐色土 VII層土、壁の崩落土。

5. 暗褐色土 C Pは2層に比較して多く、粘性がやや強い。
6. 黒褐色土 C Pはほとんど含まず、しまりが非常に強い。
7. 暗褐色土 C P大粒を均一に含み、粘性が比較的強い。
8. 暗褐色土 C Pを少量、粘土粒を微量含み、粘性がやや強い。

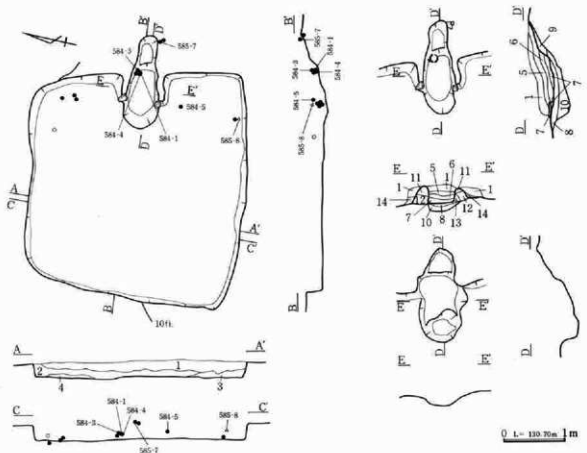
第581図 J区第6号址実測図

第4章 検出された遺構・遺物



第582図 J区第6号址出土遺物実測図

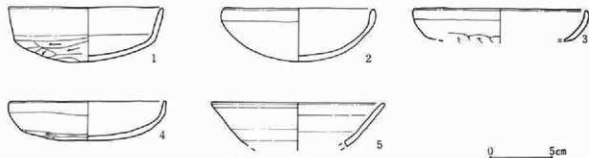
遺構名称	J区第7号住居跡	位置	13~15-J-76~78グリッド内				
平面形態	隅丸台形	規模	3.70m×3.45m	主軸方位	東-16度-北	残存深度	約28cm程
備考	北壁に比較して南壁が長く台形状を呈するため、東壁を基準にした主軸方位では東から若干北に振れるが西壁を基準とすると、ほぼ東に向いている。壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出されていない。						
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央			主軸方位	東-7度-北	
規模	全長145cm	屋外長	59cm	屋内長	86cm	袖間幅	67cm
						燃焼部幅	46cm
						煙道幅	18cm
備考	壁外に凸字形に掘り込み、肩部から袖を屋内に延ばし燃焼部を構築している。袖石は角柱状の載石である。支脚は未検出で掘り方時にも痕跡は見られなかった。掘り方で焚口部に円形ピットを検出した。						



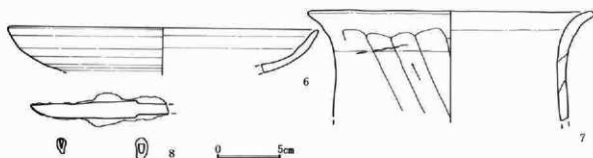
1. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量、VI層土粒を多量に含み、粘性は弱い。
2. 暗褐色土 1層と比較してVI層土粒の含有量が少なく、黒味の強い色調を呈する。
3. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量、VI層土粒を含む。
4. 暗褐色土 ごく微量の焼土粒を含み全体に灰色を帯びる。
5. 暗褐色土 VI層土粒と焼土粒を多量に含む。
6. 暗褐色土 焼土粒を比較的多量に、炭化物を少量含み、粘性は弱い。
7. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
8. 暗褐色土 焼土粒を少量、灰を多量に含む黒味の強い色調を呈し、粘性が比較的強い。
9. 赤褐色土 焼土粒及びブロックで構成される。
10. 暗褐色土 焼土細粒・大粒を多量に含み、粘性は弱い。
11. 暗褐色土 焼土粒を多量に含み、粘性はなし。
12. 暗褐色土 焼土粒はII層と比較して、細粒と量も少ない。
13. 暗褐色土 焼土粒を少量、灰を多量に含み、8層に近似する。
14. 暗褐色土 VI層土粒を少量含み、1層と比較して黒味の強い色調を呈する。

第583図 J区第7号住居跡実測図

所見 当住居跡は第10号住居跡と重複している。遺構の検出及び残存状態から10号住居→当住居という前後関係であるのは明らかである。遺物は大半がカマド内からの出土であり、覆土中からの出土はごくわずかである。

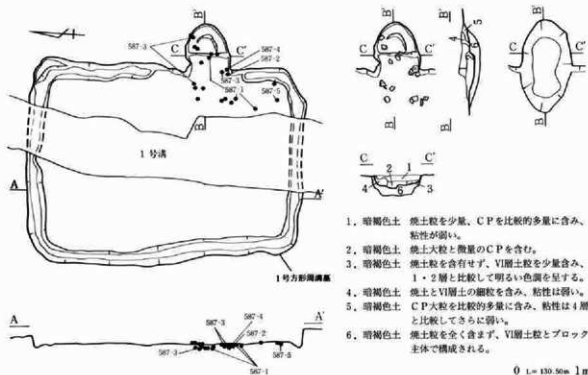


第584図 J区第7号住居跡出土遺物実測図(1)



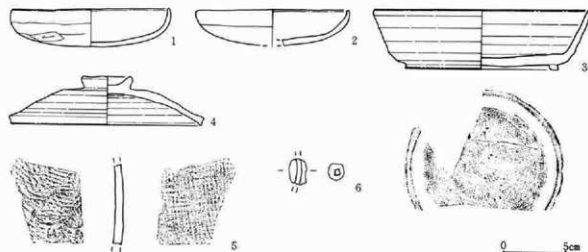
第585図 J区第7号住居跡出土物実測図(2)

遺構名称	J区第8号住居跡	位置	15~17-J-69~71グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	3.16m×4.40m	主軸方位	東-1度-北
				残存深度	約19cm程
備考	中央部に南北に第1号溝状遺構によって削平を受けている。壁溝はカマド部を除き全周する。柱穴、貯蔵穴等は、精査した結果も検出されていない。				
カマド	位置・形状 東壁南寄り			主軸方位	東-3度-北
規模	全長145cm	屋外長 71cm	屋内長 74cm	袖間幅 ?cm	燃焼部幅 60cm
				煙道幅	?cm
備考	壁を中軸に長楕円形の掘り方を有し、袖は見られない。燃焼部は壁外で煙道部と思われる部分との境には約7cmの段差が見られる。掘り方においても袖材、支脚の据えた痕跡は検出されていない。				



第586図 J区第8号住居跡実測図

所見 当住居跡は当調査区の標高の一番高い部分に位置している。確認面と現表土との比高差はあまり無いが、遺構の残存状態はあまり良くない。これは住居構築時における掘り込みの深さが浅かったことに起因するものと考えられる。遺物はカマド周辺の床面に集中して出土している。



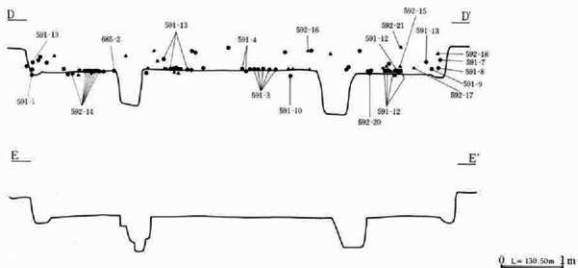
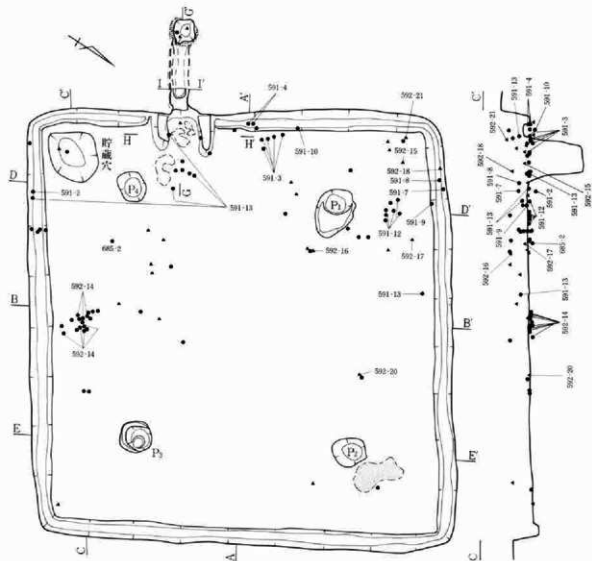
第587図 J区第8号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第9号住居跡		位置	9～13-J-62～66グリッド内				
平面形態	正方形	規模	6.85m×6.75m	主軸方位	西-34度-南	残存深度	約45cm程	
備考	壁はほぼ垂直の状態、柱穴は4本検出した。壁溝は一定の幅及び深度を有し、カマド部を除き全周見られた。貯蔵穴はカマド南側の南コーナー部で、一辺約75cmの方形で、深度は約83cmである。							
カマド	位置・形状	南西壁や南寄り			主軸方位	西-33度-南		
規模	全長212cm	屋外長148cm	屋内長	64cm	袖間幅	96cm	燃焼部幅	48cm
					煙道幅	31cm		
備考	袖は粘土混じりの土で構築され、支脚、袖石共残存していないが、掘り方時に掘え方がそれぞれ検出されている。煙道はトンネル状に掘り抜いており、煙り出し部は円形で、垂直に立ち上がっている。							

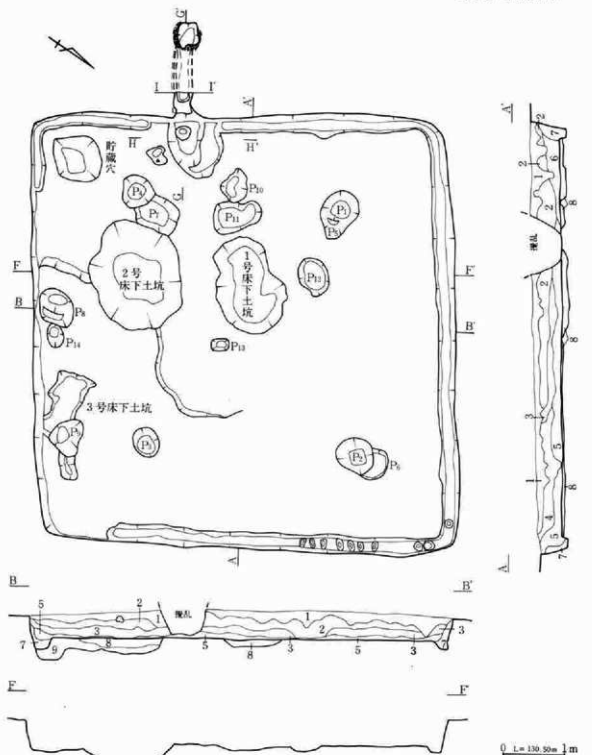
所見 当住居跡は他遺構との重複は無く残存状態は極めて良好である。土層の堆積は、上層の一部が不整合な状態を示しており、すべてがいわゆる自然堆積とは考えにくい。柱穴は掘り方段階でも同規模どうしの重複は見られず、柱穴位置の変更等を伴う建て替えは無かったことがわかる。しかしP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>の3カ所には柱穴に比較して非常に浅いピット状のものが重複したような状態を示している。これらはセクションの観察からはほぼ同時に埋設しており、また、柱穴に向かって傾斜していることなどから、柱材の抜き取り痕ではないかと考えている。床面は平坦で全体に堅くしまっているが、特に顕著な部分は見られない。その他掘り方段階で南東壁に沿って検出したP<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>は、径約55cm、深度約30cmの略円形で、約2.1mの間隔を有していた。これは位置関係から第5号住居跡例のような入口施設の痕跡ではないかと思われる。掘り方は南東壁付近が壁溝底面の深さまで下がる他にはほとんど見られず、カマド正面に2基の床下土坑（1・2号土坑）が検出されただけである。遺物は住居西半の床面から比較的多く出土している。特に北西壁に接するように出土した土師器の高杯3点（591図-7・8・9）は、壁の上から転げ落ちたような状態を呈している。

カマドは、煙道部から煙出し部の残存状態は当遺跡の中で最も良好である。これは「神明宮」と呼称されている神社の境内にカマドがかかり、後世の擾乱を受けにくい状況が幸いしたものと思われる。袖等の壁より屋内側の残存はあまり良好でなく、袖の一部と燃焼部及びカマド前面左側にわずかに薄く灰面を検出しただけである。また、廃棄に伴い袖石等の抜き取りが行われたようで、表中記載の通り掘り方に痕跡を残している。煙道は燃焼部から段を有して約143cm程壁外に掘り込まれている。煙道部底面は煙出し部に向かって緩い傾斜を有し、側壁から天井にかけてはアーチ状を呈している。このアーチ部及び煙出し部周囲は高熱を受

第4章 検出された遺構・遺物



第588図 J区第9号住居跡実測図(1)

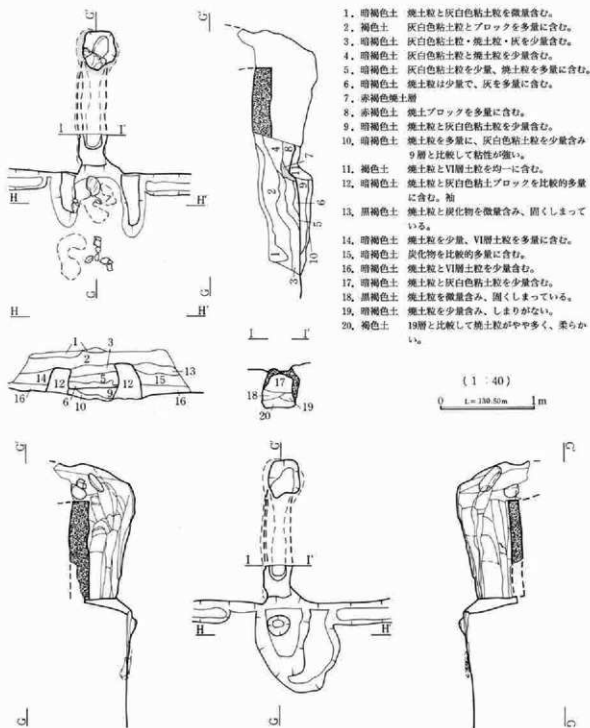


- |   |  |
|---|--|
| <p>1. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む固くしまりが強い。多数の擾乱を受けている。</p> <p>2. 暗褐色土 VI層土細粒と炭化物を少量含む、I層と比較して粘性が強い。</p> <p>3. 暗褐色土 VI層土細粒とブロックを多量に、焼土粒を少量含む粘性がやや強い。</p> <p>4. 暗褐色土 VI層土粒は微量で、焼土粒を少量含む、他に比較して黒味が強い。</p> | <p>5. 暗褐色土 VI層土粒は微量で、炭化物の含有量がやや増し、柔らかい。</p> <p>6. 暗褐色土 焼土粒と灰白色粘土ブロックを多量に含む、粘性が強い。コマダからの流出土？</p> <p>7. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含む。壁の崩落土？</p> <p>8. 暗褐色土 VII層土粒とブロックを多量に含む。</p> <p>9. 暗褐色土 VI・VII層土ブロックと黒色土ブロックを多量に含む。</p> |
|---|--|

第589図 J区第9号住居跡実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

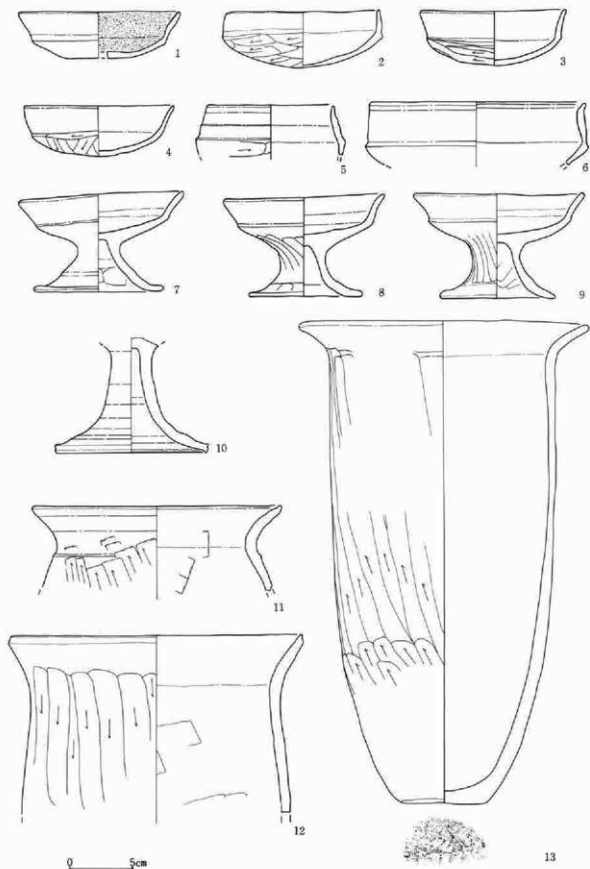
けたものと思われ、厚く焼土化していた。この煙道部の土層は、大きく上層と下層に2分することができる。上層は1層であるのに対し、下層は3層に分離できる。これは下層が使用中に堆積したものであり、上層は廃棄後比較的短時間のうちに堆積したものとみることができる。その他、側壁に残った横位の工具痕は顕著である。煙出し部は径約35cmの円形で、残存深度は約85cmである。この中層には、上面から落ち込んだような状態ではほぼ完形の坏（591図-1）及び襪が出土している。煙出し部の蓋として機能したものであろうか。



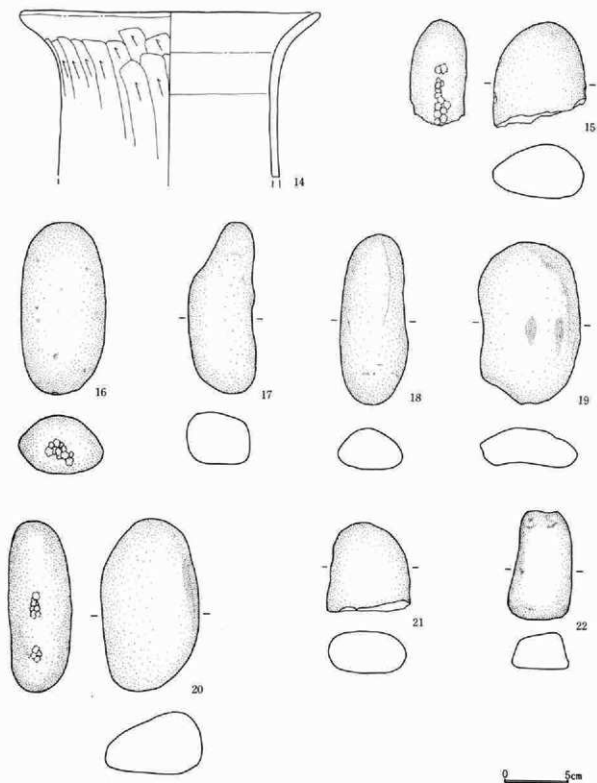
第590図 J区第9号住居跡カマド実測図



第2節 北側調査区



第591图 J区第9号住居跡出土遺物実測図(1)

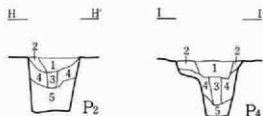


第592図 J区第9号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第10号住居跡						
位置	10～15-J-74～79グリッド内						
平面形態	隅丸方形	規模	7.80m×8.00m	主軸方位	北-41度-東	残存深度	約51cm程
備考	壁はほぼ垂直で、壁溝は一定幅、深度で断続的に全周する。床面は平坦で部分的な硬化は認められない。柱穴は4本検出し、深度は約78～87cmである。貯蔵穴は東コーナー部で2段の掘り込みである。						
カマド	位置・形状	北東壁やや南寄り			主軸方位	北-43度-東	
規模	全長255cm	屋外長137cm	屋内長118cm	袖間幅	89cm	燃焼部幅	61cm
						煙道幅	19cm
備考	焚口部から燃焼部にかけて凸形形の載石を敷き、その肩の部分に角柱状の載石を袖材として立てている。袖石前面には天井石が転落していた。支脚は載石で燃焼部中央に2本検出した。その他本文で詳述						

所見 当住居は大型に類するもので、掘り込みも深く残存状態も比較的良好である。北コーナー部で第7号住居跡と重複しているが、前述のように確認状態から新旧関係は当住居→7号住居である。土層の堆積状態は、壁際から徐々に埋没した状態を呈しているが、これが自然の営力によるものであるかは不明である。柱穴は掘り方段階でも4本以外には検出されておらず、第9号住居同様柱穴位置の変更を伴うような建て替えは考えられない。また、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>の土層断面には柱痕と思われる層が観察された。貯蔵穴は表中記載の通り、長径約135cm、短径約83cm、深度約16cmの楕円形の掘り込みの中央部に、径約70cm、深度約35cmの円形の貯蔵穴を穿っている。掘り方で顕著なものは南西壁に接して検出した4号土坑である。163×66cmの略方形で、深度は約12cmである。遺物は住居中央部に多く出土しており、大半は覆土中位からのものである。

カマドは、当遺跡において他に例をみないような構築法をとっている。つまり焚口部及び燃焼部にあたる部分に、約150×100cm、深度約15cmの長方形の掘り方を穿ち、そこに長辺約100cm、短辺約53cm、肩部幅約35cm、厚さ約18cmの凸字形の載石を据え、その同肩にあたる部分に約20×10cm、高さ約30cmの角柱状の載石を立てて袖構築材としている。この袖石上には約80×30cm、厚さ約15cmの平面長方形、断面五角形状の載石の天井石を乗せていた。したがってカマド前面及び底面は載石を組み合わせて構築されており、古墳の石室構築に見られる切石組積的な技法で構築されている。また、燃焼部中央には2本の円柱状載石を約30cmの間隔をもってやや内傾ぎみに立てて支脚としていた。この支脚のあり方は器設部が2連であった可能性を示唆するものである。煙道は煙出し部に向けて緩い傾斜をもって上っており、天井部の一部は焼土化して崩落せずに残存していた。また、確認時においては燃焼部から煙道部の間に段差は見られなかったが、掘り方段階では明確な段を有していた。煙出し部は径約22cm、確認面からの深度約44cmの円形プランのピット状で、煙道部底面からさらに約18cm下がっている。以上のようにカマドの構築は住居構築段階で位置、形状共に決められていたと思われ、その後の変更を受けた痕跡も認められない。このことは前述の建て替えについての所見と矛盾していない。

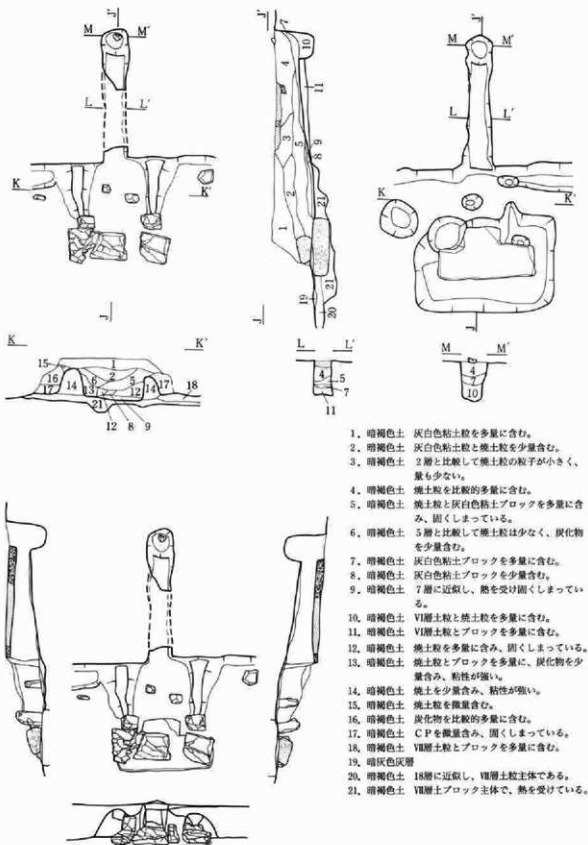


1. 暗褐色土 C Pを多量に、VI層土粒を少量含む、しまりが弱い。
2. 暗褐色土 I層と比較してVI・VII層土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土 VII層土粒を少量含む、他層と比較してやや暗い色調を呈する。
4. 暗褐色土 VI層土ブロックは少量で、VII層土ブロックを比較的多量に含む。
5. 褐色土 VII層土粒を多量に含む。

0 L=130 70m J m

第593図 J区第10号住居跡柱穴実測図

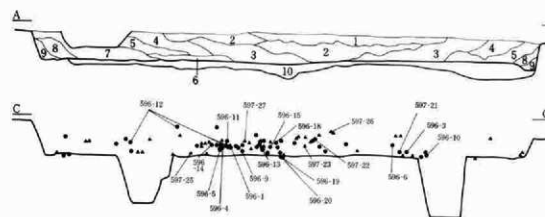
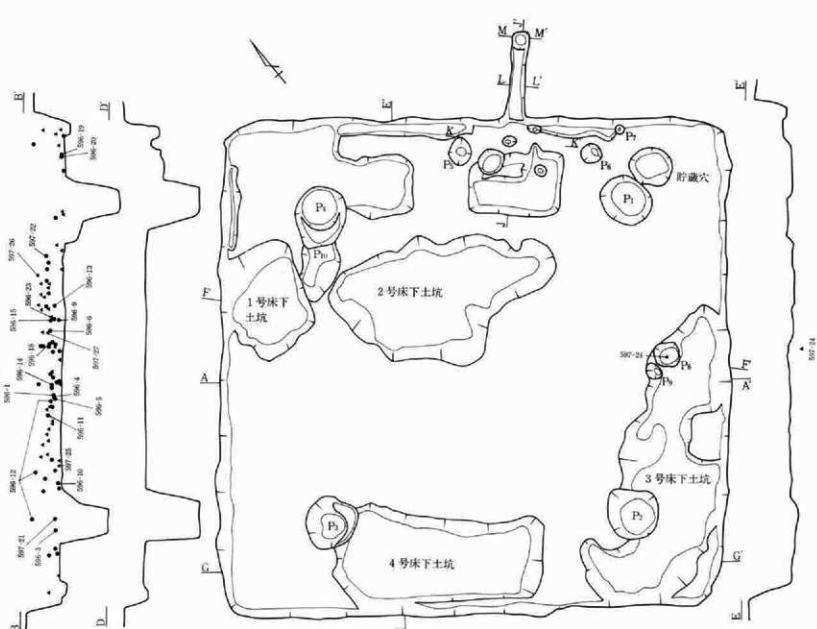
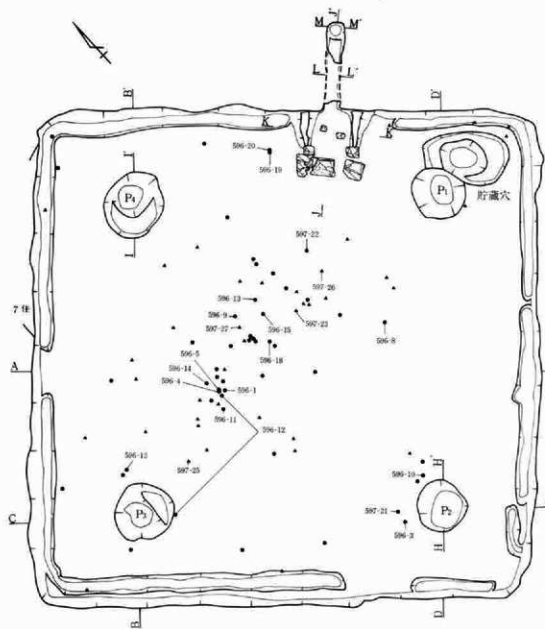
第4章 検出された遺構・遺物



1. 暗褐色土 灰白色粘土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土 灰白色粘土粒と焼土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 2層と比較して焼土粒の粒子が小さく、量も少ない。
4. 暗褐色土 焼土粒を比較的多量に含む。
5. 暗褐色土 焼土粒と灰白色粘土ブロックを多量に含む。固くしまっている。
6. 暗褐色土 5層と比較して焼土粒は少なく、炭化物を少量含む。
7. 暗褐色土 灰白色粘土ブロックを多量に含む。
8. 暗褐色土 灰白色粘土ブロックを少量含む。
9. 暗褐色土 7層に近似し、熱を受け固くしまっている。
10. 暗褐色土 VI層土粒と焼土粒を多量に含む。
11. 暗褐色土 VI層土粒とブロックを多量に含む。
12. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。固くしまっている。
13. 暗褐色土 焼土粒とブロックを多量に、炭化物を少量含む。粘性が強い。
14. 暗褐色土 焼土を少量含む。粘性が強い。
15. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。
16. 暗褐色土 炭化物を比較的多量に含む。
17. 暗褐色土 CPを微量含む。固くしまっている。
18. 暗褐色土 VII層土粒とブロックを多量に含む。
19. 暗灰色灰層
20. 暗褐色土 18層に近似し、VII層土粒主体である。
21. 暗褐色土 VII層土ブロック主体で、熱を受けている。

(1/40) 0 L=130.70m 1m

第594図 J区第10号住居跡カマダ測図



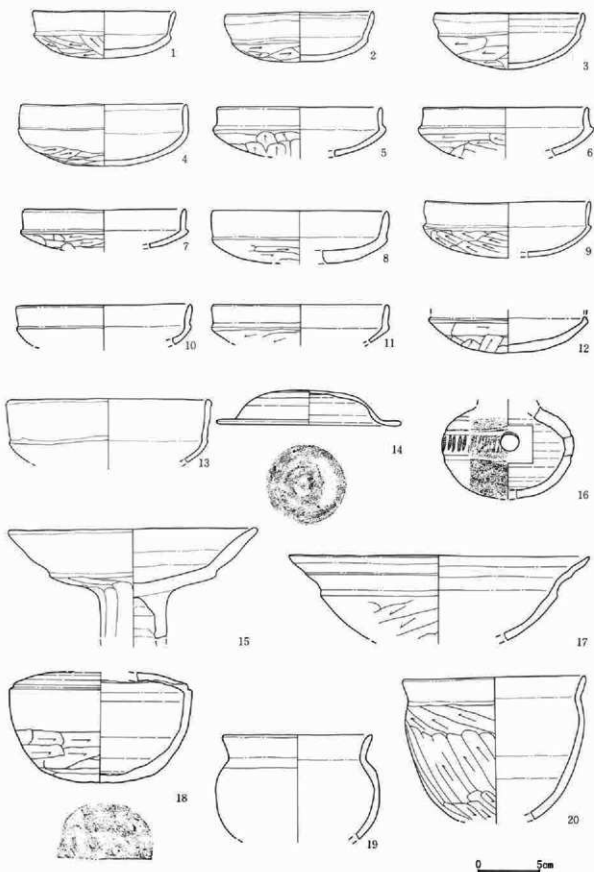
1. 暗褐色土 VI層土粒を多量に、C Pを均一に含む。
2. 暗褐色土 C Pを多量に、VI層土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 C PとVII層土ブロックを少量、炭化物を微量含む。
4. 暗褐色土 C PとVI層土粒を微量含む。
5. 暗褐色土 C Pを多量に、VII層土粒を少量含む。
6. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。
7. 暗褐色土 C Pを多量に、VIII層土ブロックを少量含む。
8. 暗褐色土 C Pを多量に、VIII層土粒を微量含む。
9. 暗褐色土 C P・VI層土粒を少量含む。
10. 暗褐色土 VI・VIII層土ブロックと暗褐色土の混土。

0 L = 100 70m J m

第595図 J区第10号住居跡実測図

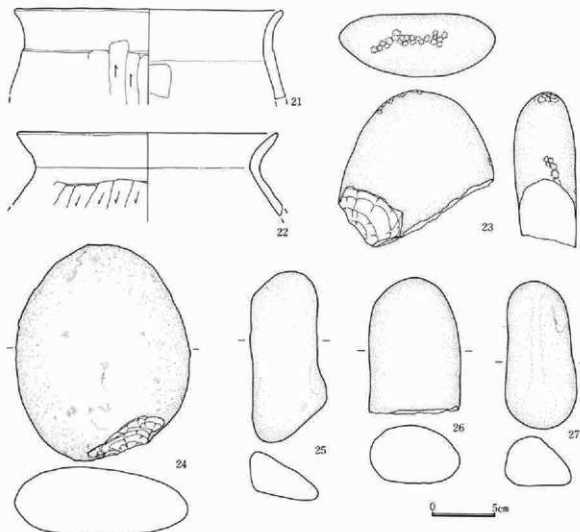


第2節 北側調査区



第596図 J区第10号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

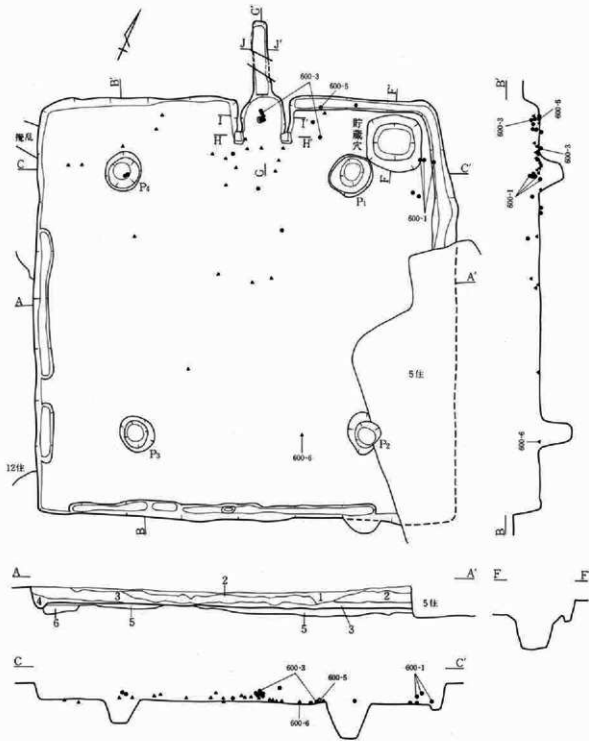


第597図 J区第10号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第11号住居跡	位置	19~23-J-76~80グリッド内				
平面形態	正方形	規模	6.73m×6.70m	主軸方位	東-27度-北	残存深度	約25cm程
備考	壁溝はカマド東側では連続し、他は断続的なあり方を示している。柱穴は4本で、掘り方段階でも他には検出されていない。貯蔵穴は東コーナー部で、一辺約85cm、深度約54cmの方形である。						
カマド	位置・形状	北東壁中央わずかに南寄り			主軸方位	東-30度-北	
規模	全長192cm	屋外長118cm	屋内長74cm	袖間幅91cm	燃焼部幅60cm	煙道幅18cm	
備考	袖は先端に角柱状の載石を袖石として構築し、第10号住居跡同様天井石があったことがわかる。燃焼部中央左寄りに載石の支脚がある。燃焼部はちようど住居壁まで、段を有し煙道が壁外に延びている						

所見 当住居跡は南コーナー部で第5号住居跡と重複している。新旧関係はセクション及び確認状態から判断して当住居→5号住居である。当住居に比較して5号住居は約15cm床面レベルが低く、したがって重複部分は全く残存していない。柱穴及び貯蔵穴はいずれも上半がロート状を呈している。掘り方段階では大小のピットの他4基の不整形床下土坑(1~4号土坑)を検出したが、他例に漏れず機能を推定するような資料は見られない。遺物はカマド内及び貯蔵穴の周辺からわずかに出土しただけである。

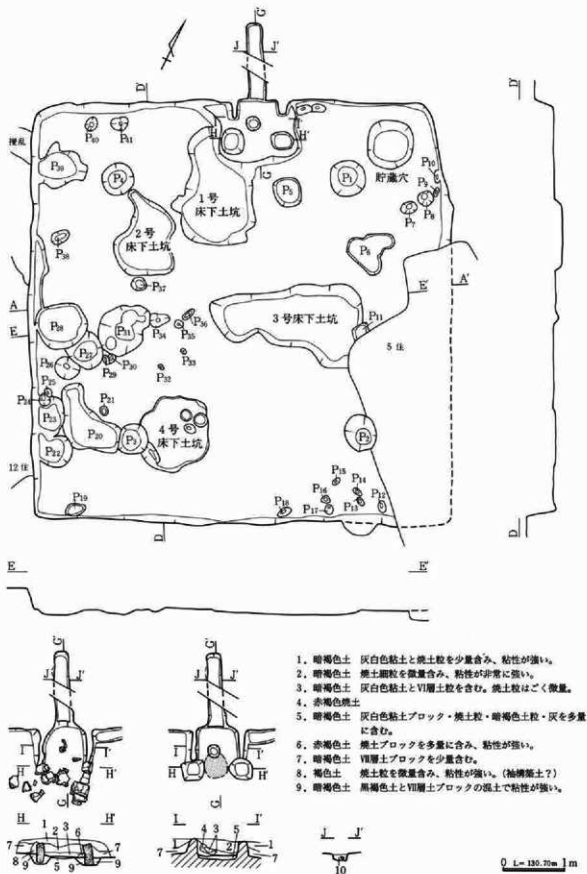




1. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含み、固くしまっている。
2. 暗褐色土 VI層土粒とブロックを多量に含み、1層と比較して粘性が高い。
3. 暗褐色土 VI層土ブロックは2層と比較して小さく、VI層土粒も量が少ない。
4. 暗褐色土 VII層土ブロックとVI層土ブロックを含み、3層と比較して柔らかい。
5. 褐色土 VII層土ブロックとVI層土ブロックを少量含む。
6. 茶褐色土 VI・VII層土粒を少量、炭化物を微量含む。

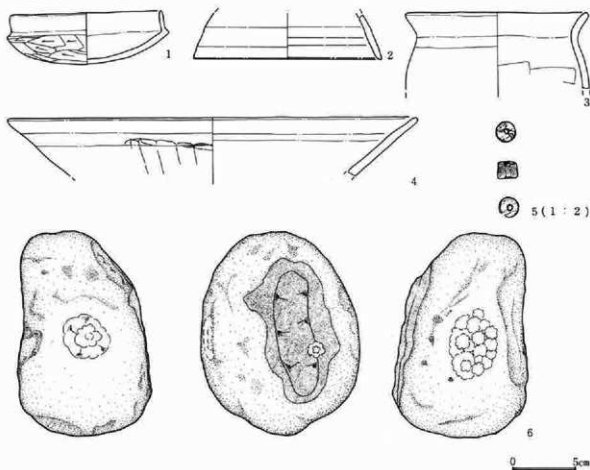
0 L= 100.70m ] m

第598図 J区第11号住居跡実測図(1)



第599図 J区第11号住居跡実測図(2)

カマドは残存深度が浅かったにも拘らず、袖石・支脚・天井石が残存した。袖石は一辺約35cm、深度約15cmの方形掘り方内に約12cm埋設されていた。この袖石の上には天井石が乗せられていたことは明らかであるが、カマド前面にばらばらの状態で検出されている。これらは自然に崩れたものとは考えられず、住居廃棄に伴い破壊されたものと思われる。その他、掘り方段階で支脚の前面のVII層土が直径約35cmの範囲で焼土化して検出されている。



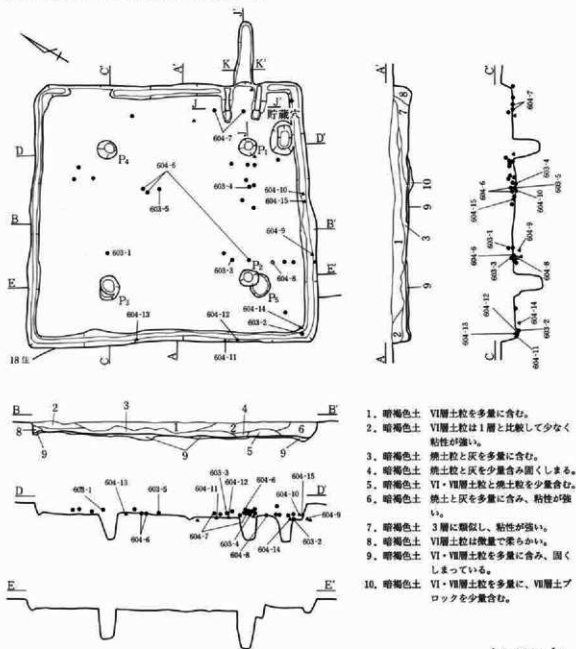
第600図 J区第11号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第14号住居跡	位置	18~21-J-84~87グリッド内				
平面形態	正方形	規模	4.02m×4.50m	主軸方位	東-32度-北	残存深度	約30cm程
備考	壁溝はカマド部・北東壁の一部を除き全周する。柱穴はP <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4本で掘り方段階でも他に検出されていない。貯蔵穴は長方形で南東壁に接し、コーナー部よりやや西寄りに位置している。						
カマド	位置・形状	北東壁南寄り			主軸方位	東-28度-北	
規模	全長153cm	屋外長	95cm	屋内長	58cm	袖間幅	60cm
		燃烧部幅	33cm	煙道幅	21cm		
備考	平面形及び構築法は第11号住居跡とほぼ同じである。袖は先端に載石の袖石を据え、支脚は検出されていないが、燃烧部やや左寄りに据え方が検出された。煙道は燃烧部から段を有し、壁外に延びる。						

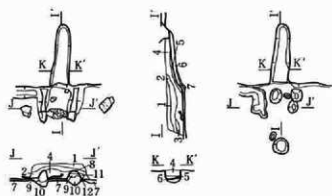
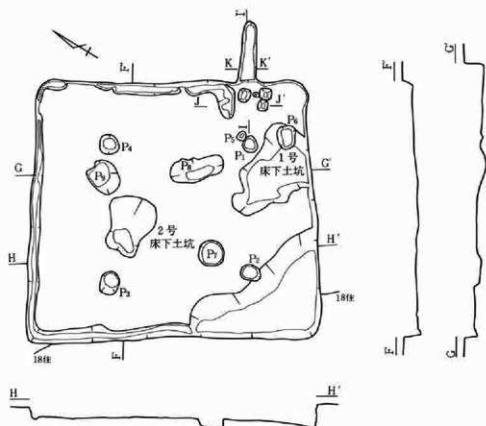
所見 当住居跡は調査区西側に位置し、当該期の遺構と重複は見られない。当住居跡の覆土下層には不自然な堆積状態が窺え、埋め戻しが行われた可能性が示唆される。掘り方の調査では床面精査段階で検出した柱穴P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>(規模は径約26~30cm、深度約36~58cm、柱穴間距離東西約2.1m、南北約2.2m)以外のピツ

トを数本検出しているが、配置等に規則性は認められず柱穴に代わるものではなく、柱穴位置の変更を伴うような建て替えは考えられない。貯蔵穴規模は約35×52cm、深度約40cmで、上部に屈曲が見られる。遺物はカマドとP<sub>1</sub>付近の床面近くから比較的多く出土している。特に中央部及びP<sub>1</sub>近くに破片で出土し、接合してほぼ完形の状態になった暗土土師器杯(604図-6)は、畿内産と考えられる製品である。その他、カマド焚口部には土師器甕(604図-7)が転倒した状態で出土した。

カマドは表中に記載した通り第11号住居跡のカマドと形態等に共通性が窺える。規模的にはやや小さいが平面形は相似形である。支脚は残存していなかったが、燃焼部中央左寄りに径約20cm、深度約15cmの円形の掘え方が見られることから、この位置に円柱状の載石を支脚として据えていたことは明らかである。ただ天井石は全く検出されておらず想定するに止めたい。



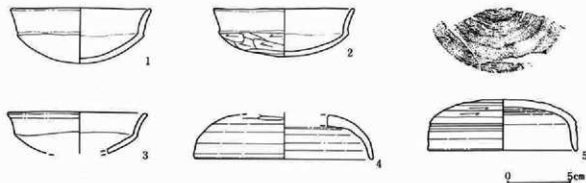
第601図 J区第14号住居跡実測図(1)



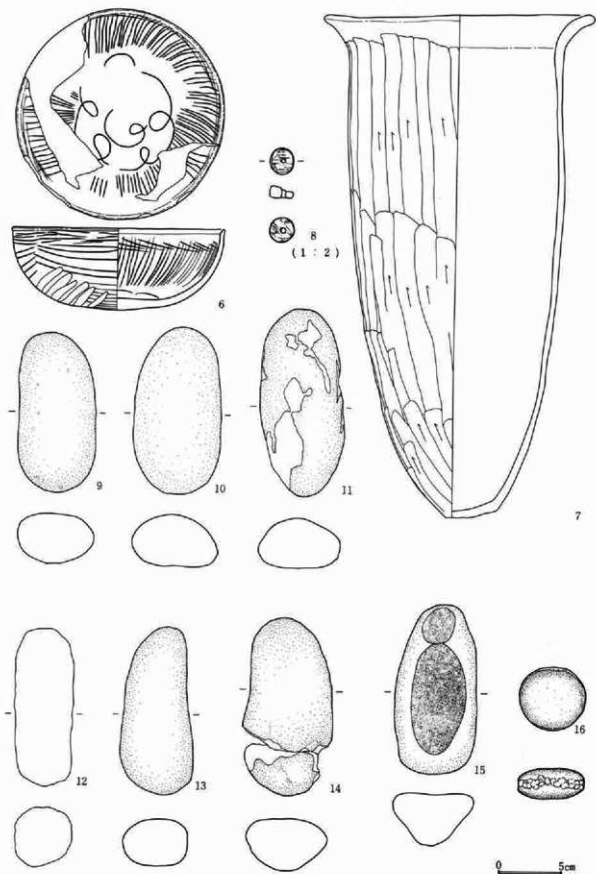
1. 暗褐色土 焼土粒・C P・VI層土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 焼土粒・C P・VI層土粒を微量含む。
3. 黒褐色土 焼土粒を少量含み、粘性が強い。
4. 暗褐色土 焼土粒と灰を比較的多量に含む。
5. 暗褐色土 焼土粒は少量で、灰を含有しない。
6. 暗褐色土 VI層土粒を多量に、焼土粒を少量含む。
7. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に含む。
8. 暗褐色土 VI層土粒を少量含み、粘性が強い。
9. 暗褐色土 焼土粒とC Pを少量含む。
10. 暗褐色土 焼土粒とVI層土粒を少量含む。
11. 暗褐色土 焼土粒とVI層土粒を多量に含む。
12. 暗褐色土 焼土粒を微量含み、粘性が強い。

0 120.00m 1m

第602図 J区第14号住居跡実測図(2)

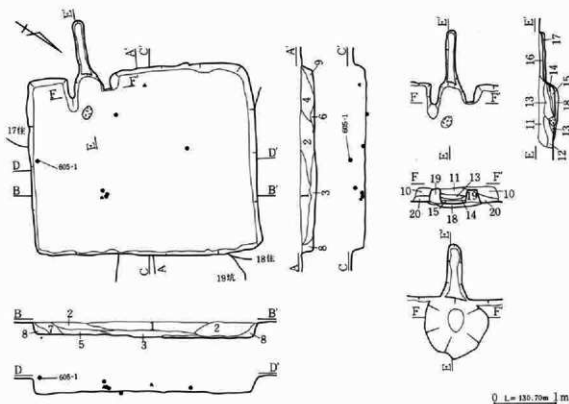


第603図 J区第14号住居跡出土遺物実測図(1)

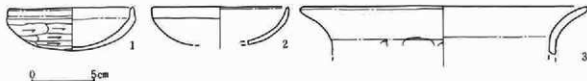


第604図 J区第14号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第15号住居跡		位置	15~17-J-84~86グリッド内			
平面形態	長方形	規模	3.01m×3.60m	主軸方位	西-37度-南	残存深度	約23cm程
備考	壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されておらず、掘削されなかったと考えられる。床面は平坦で硬化は見られない。遺物は住居中央部からわずかに出土しただけである。						
カマド	位置・形状	南西壁南寄り			主軸方位	西-41度-南	
規模	全長142cm	屋外長	87cm	屋内長	55cm	袖間幅	?cm
						燃焼部幅	39cm
						煙道幅	9cm
備考	燃焼部には円形の浅い掘り方を有し、壁から袖を延ばして構築している。袖石・支脚は検出されず掘り方で痕跡も見られないことから、無かったと判断した。煙道は燃焼部から段を有し掘り込んでいる。						



1. 暗褐色土 CP・VI層土ブロック・炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 焼土大粒・灰・炭化物を多量に含む。
3. 暗褐色土 CPを少量、焼土粒・炭化物を微量含む。
4. 暗褐色土 3層と比較して炭化物の量がきわめて少ない。
5. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量含む、しまりが強い。
6. 灰白色土 炭化物を微量含む粘質土。カマドの突出粘土?
7. 暗褐色土 CP・焼土粒・灰を少量含む、しまりが強い。
8. 暗褐色土 炭化物を多量に含む柔らかい。焼土粒はなし。
9. 暗褐色土 焼土粒を微量含む、しまりが弱い。
10. 暗褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む、固くしまっている。
11. 暗褐色土 灰白色粘土・VI層土ブロックを少量含む。
12. 暗褐色土 焼土粒を13層と比較して多量に含む、しまりが弱い。
13. 暗褐色土 焼土粒を微量に含む。
14. 暗褐色土 焼土ブロック(粘土化)を比較的少量に含む。
15. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を含み、しまりが弱い。
16. 暗褐色土 灰白色粘土粒を少量含む。
17. 暗褐色土 焼土ブロックが18層と比較して多く、灰を含まない。
18. 暗褐色土 焼土粒と灰を少量含む。
19. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。袖
20. 暗褐色土 10層と比較して各粒子の含有量が少ない。

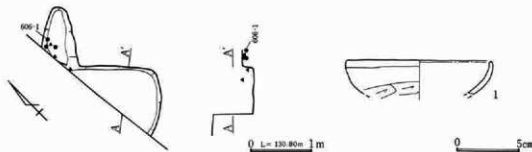


第605図 J区第15号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

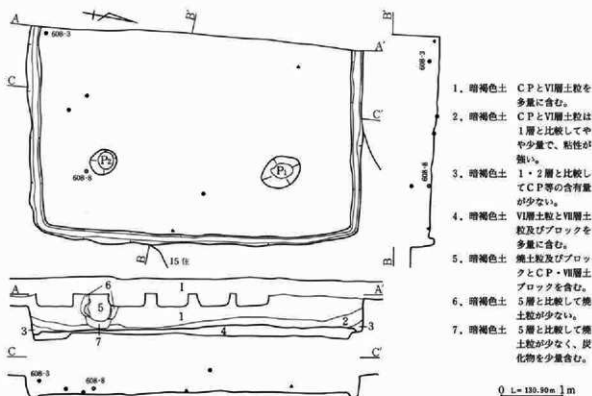
遺構名称	J区第16号住居跡	位置	18・19-J-86・87グリッド内		
平面形態	隅丸長方形?	規模	-m×-m	主軸方位	東-44度-北
				残存深度	約17cm程

所見 当住居跡は調査区西際位置し、カマドの一部及び東コーナー部を検出した。柱穴の有無は不明であるが、壁溝・貯蔵穴は無かったものと考えられる。カマドは燃焼部が壁の外に位置するタイプと思われ、当住居跡出土遺物の大半はこの位置から出土したものである。また、調査区断面に自然礫が一個検出されているが、位置的に右袖石と考えられる。



第606図 J区第16号住居跡・出土遺物実測図

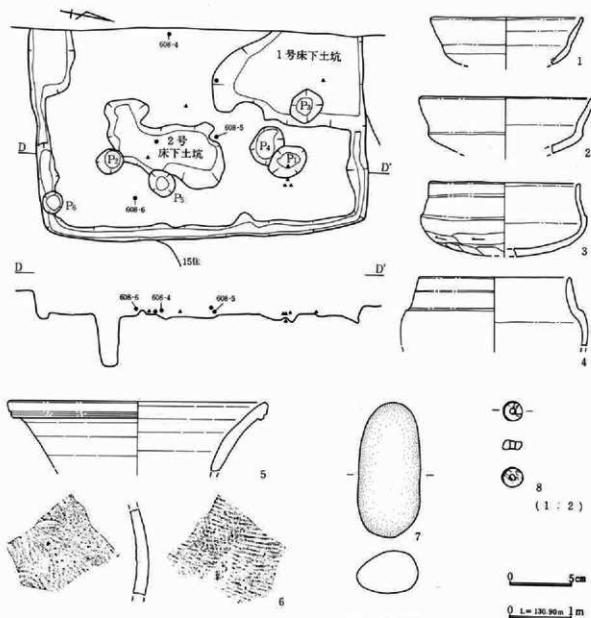
遺構名称	J区第17号住居跡	位置	14~17-J-85・86グリッド内		
平面形態	正方形?	規模	-m×5.31m	主軸方位	東-10度-北
備考	壁溝は全周すると考えられ、柱穴は床面精査段階では検出できず、掘り方の調査で2本検出した。また、検出した壁にはカマドの痕跡は見られないことから南西壁に設置されているものと考えられる。				



第607図 J区第17号住居跡実測図



所見 当住居跡は西半が調査区外にかかり未調査である。北東コーナー部で第15号住居跡と重複しており、確認及び遺構残存状態から、新旧関係は当住居→15号住居である。また、西セクション面南寄りにカマド煙道部断面が検出されており、西側にさらに一軒の住居跡が重複することがわかるが、15号住居との関係は判然としない。遺構の掘り込みは、西面セクションから確認面よりさらに上層であることがわかるが、後世の耕作によって層の特定はできない。掘り方の調査では2本の柱穴の他に4本のピット及び2基の床下土坑を検出した。遺物は床面からよりも掘り方段階で出土したものが多し。



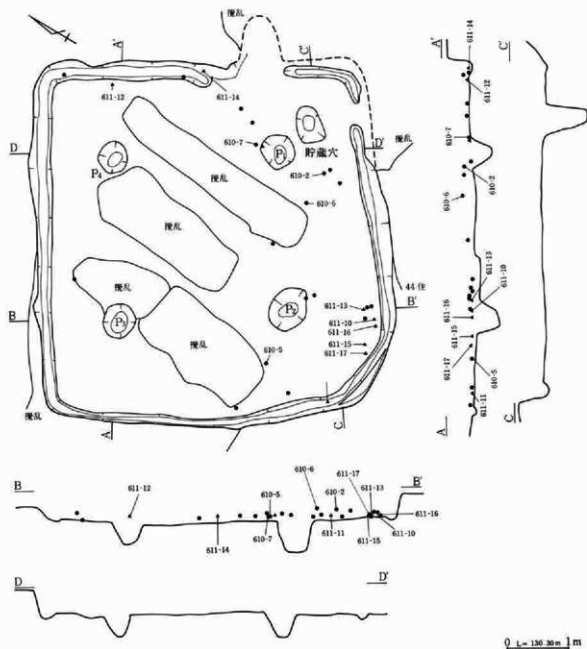
第608図 J区第17号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	J区第19号住居跡	位置	4～8-J-70～73グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	5.79m×5.65m	主軸方位	東-30度-北
		残存深度	約42cm程		
備考	壁溝はほぼ全周し、柱穴はP <sub>1</sub> ～P <sub>4</sub> までの4本である。貯蔵穴は東コーナー部に位置し、規模は約58×40cm、深度約67cmの長方形である。カマドは北東壁南寄りと考えられる。				

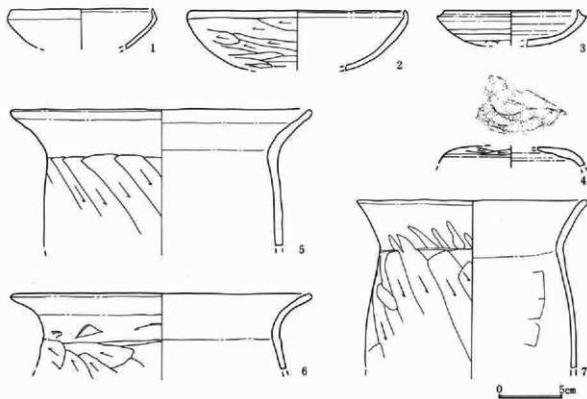
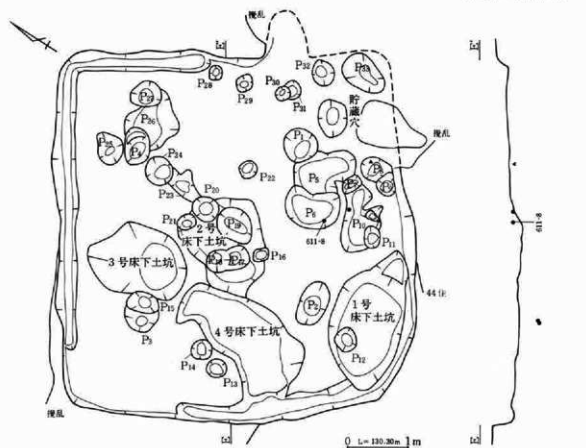
#### 第4章 検出された遺構・遺物

所見 当住居跡は東コーナー部付近で第46号址と、南西部で第44号住居跡と重複している。46号址は覆土中に浅間B軽石が入っており、中世以降の遺構であることがわかる。また、44号住居は確認状態及び残存状態から当住居跡に先行すると思われる。したがって新旧関係は44号住居→当住居→46号址である。掘り方の調査では大小のピットが多数検出されているが、柱穴と重複しているのは一カ所だけであり、その他のピットに規模及び配置の上に規則性は認められない。このことから柱穴配置の変更を伴うような建て替えはなかったものと判断した。遺物は床面からわずかに浮いた位置に面的な広がりが見られた。

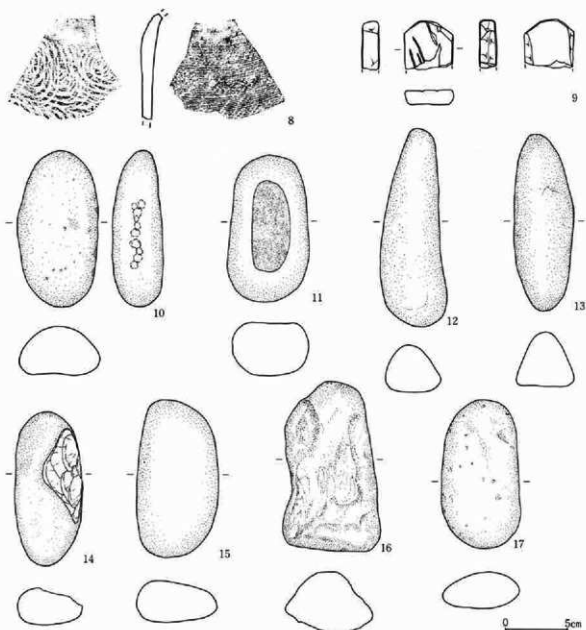
カマドは46号址との重複によって失われ焼土や灰面等は全く検出されていないが、北東壁南寄りで壁溝が切れている部分があり、掘り方段階で支脚及び袖石の据え方と思われるピットが検出されている。



第609図 J区第19号住居跡実測図



第610图 J区第19号住居跡・出土遺物実測図



第611図 J区第19号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第21号住居跡	位置	9~12-J-57~60グリッド内				
平面形態	正方形?	規模	-m×5.92m	主軸方位	東-?度-北	残存深度	約12cm程
備考	北東側方は未検出。柱穴はP <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4本で、P <sub>3</sub> としたものは貯蔵穴と考えられる。壁溝は南西壁及び北西壁に一部検出した。						

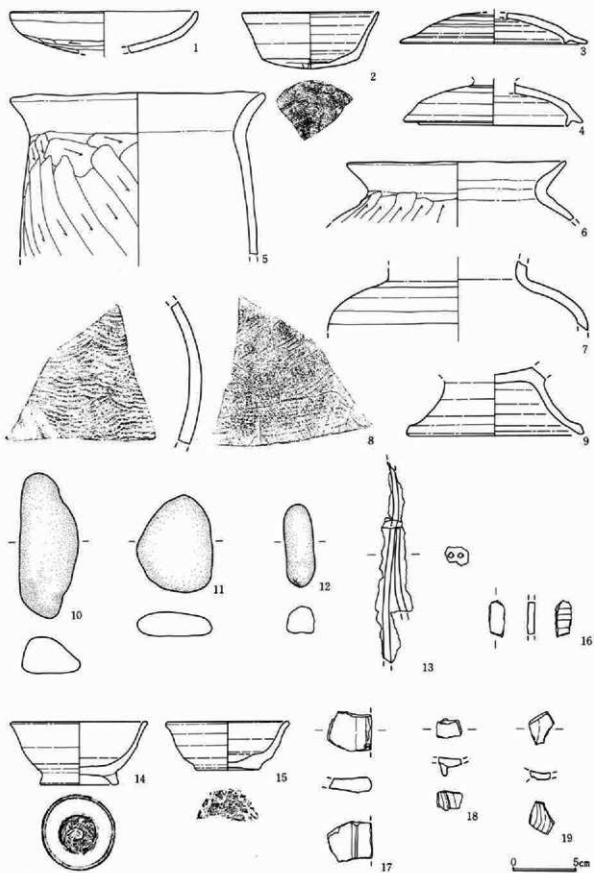
所見 当住居跡は台地の落ち際に位置し、河川敷中段に降りる農道による擾乱を受けている。したがって検出したのは西側の床面に近い部分だけである。柱穴は掘り方段階においても上記の4本以外検出されなかった。貯蔵穴はP<sub>3</sub>を想定したが、カマドを北西壁に想定すると反対側のコーナー部に位置することになり、当住居跡のような平面と主軸方位を有するタイプには少ない例である。また、P<sub>3</sub>を貯蔵穴と仮定すると、南東壁とP<sub>3</sub>間の距離が著しく長くなり、平面形が不自然となる。したがって遺物分布に若干の矛盾はきたすも

の、南西壁南寄りで壁溝が屈曲する部分とP<sub>3</sub>を結ぶラインに南東壁を想定することができる。遺物はP<sub>3</sub>の周辺に集中して出土しているが、この位置は擾乱の激しい部分に近く、当住居跡の埋没段階のままであるか不明である。



第612図 J区第21号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



第613図 J区第21号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第22号住居跡	位置	4～9-J-80～84グリッド内				
平面形態	隅丸方形	規模	7.38m×7.52m	主軸方位	西-10度-南	残存深度	約59cm程
備考	壁溝は下幅約15cm、深度約8cmでカマド部を除き全周する。柱穴はP <sub>1</sub> ～P <sub>4</sub> の4本である。貯蔵穴は南西コーナー部に検出され、規模は径約95cm、深度約125cmの円形プランで、ロート状に開口する。						
カマド	位置・形状	西壁南寄りに偏在			主軸方位	西-13度-南	
規模	全長203cm	屋外長158cm	屋内長45cm	袖間幅108cm	燃焼部幅48cm	煙道幅18cm	
備考	壁外に凸字状に掘り込み、肩の部分から屋内に袖を延ばして構築されていたものと考えられる。煙道部の残存は良好であったが、屋内側は袖石、支脚等残存していない。						

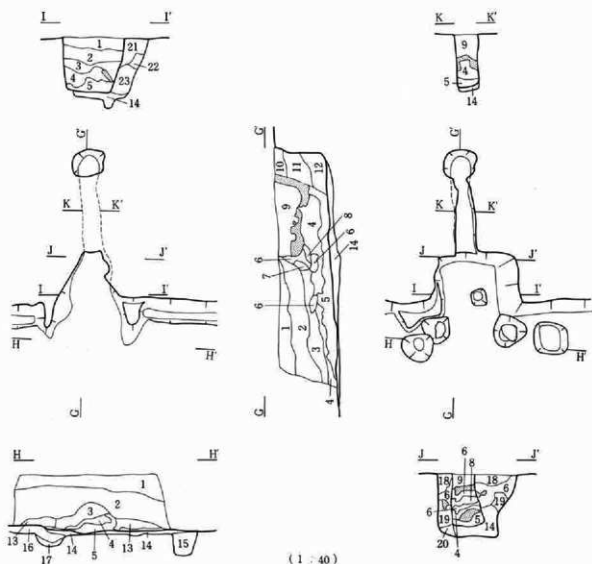
所見 当住居跡は南東コーナー部で第29号住居跡と重複している。新旧関係は遺構の検出状態及び残存状態から29号住居→当住居と考えられる。掘り方の調査では、2基の床下土坑(1・2号土坑)の他、大小のピット及び壁溝状の溝を検出した。これらの内P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>の4本のピットは位置及び規模等から柱穴と判断した。したがって当住居跡にはA(P<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>)、B(P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>)の2組の柱穴配列があることになる。柱穴規模は、Aが径約47～59cm、深度約53～73cm、Bが径約39～44cm、深度約25～34cmであり、柱穴間距離はAが東西約4.5～4.6m、南北約4.2m、Bが約3.7mである。この2組の柱穴配列は検出状態から時期差とみられ、B→Aという関係が考えられる。また、Bの配列はAの配列の中に取まる上、主軸方位がほぼ同じであることから、偶然の重複ではなく、B→Aへの拡張例であるのは明らかである。Bの柱穴配列の時点の平面プランは、掘り方時に検出した壁溝状の溝及び小ピット列を壁溝と想定すると、南北壁で約30cm、東壁で約90cm内側に入った位置が想定され、西壁への拡張は行われていないと思われる。これは柱穴位置の変更が東寄りにより顕著に行われていることからわかる。また、Bの柱穴配列に伴うカマド痕跡は、掘り方段階でも全く検出されなかったが、カマドに作り替えの痕跡が見られることは、西壁及びカマド位置の変更が行われていないことを物語る。

遺物は床面出土のものは多く、特にP<sub>3</sub>の南側に通称「萬福石」と呼ばれている礎(617図-21・22・25・29)が5個床面に張り付くように出土した。その他の遺物は全て被片資料であり図上復元されたものが多く、カマドから貯蔵穴周辺にかけて比較的集中して出土している。

第616図19・20は青磁の破片であり、時期的にも当住居跡に相伴するものとは考えられず、後世の土坑等が重複しているものと思われる。

カマドは煙道から煙出し部の残存が良好なのに対し、屋内側は袖の一部が残存したにすぎず、住居廃業に際して支脚・袖石等の抜き取りが行われたことがわかる。煙道部天井は厚く焼土化し、煙り出し部の立ち上がり部も焼土化しており、明瞭に捉えることができた。掘り方の調査で、凸字形カマド掘り方と住居壁との交点に位置して袖石の据え方と考えられる対のピットを検出したが、重複が認められることから作り替えが行われたことがわかる。残存状態からは内側のピットが最終使用のものと考えられ、この2組の袖石据え方が上記の建て替えのそれぞれA・Bに対応するものと考えている。燃焼部は支脚据え方の位置から壁外に位置しており、凸字形掘り方中央右寄りに一辺約15cm、深度約10cmの方形を呈する支脚据え方が検出された。袖は据え方の位置からも屋内にほとんど延びていなかったものと考えられ、燃焼部の位置からも矛盾しない。

第4章 検出された遺構・遺物



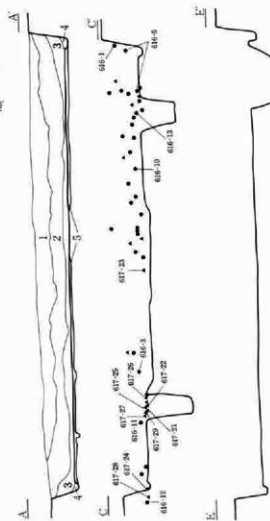
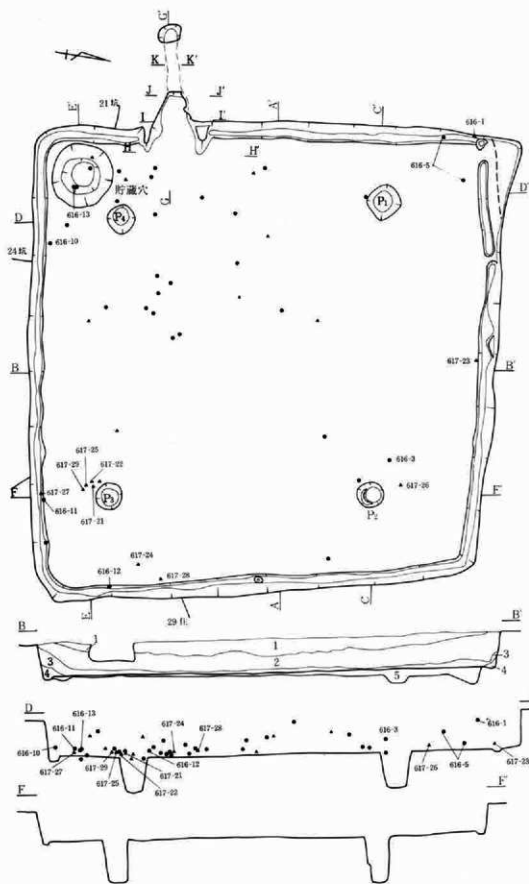
(1:40)

- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 暗褐色土 C Pを多量に、焼土粒・VII層土ブロックを少量含む粘性は弱い。</p> <p>2. 暗褐色土 C Pを多量に、焼土粒・VII層土ブロック・灰白色粘土ブロックを少量含む、粘性が強い。</p> <p>3. 暗褐色土 1・2層と比較して焼土粒の量・灰白色粘土ブロック含有量が多い。</p> <p>4. 黒褐色土 灰白色粘土ブロック含有量が多く、粘性が非常に強い。</p> <p>5. 赤褐色土 焼土粒・灰・炭化物を多量に含む、粘性は弱い。</p> <p>6. 暗褐色土 4層と比較して灰白色粘土ブロック含有量はさらに多く、粘性も強い。</p> <p>7. 暗褐色土 3層と比較して焼土粒の含有量が少なく、粘性も弱い。</p> <p>8. 暗褐色土 2層と比較して焼土粒の含有量が多い。</p> <p>9. 暗褐色土 1層と比較してC Pはやや多く、焼土粒が少ない。また、土色の黒味が強い。</p> <p>10. 暗褐色土 9層に近似。</p> <p>11. 暗褐色土 C Pを少量、焼土粒を多量に含む。</p> | <p>12. 灰褐色土 C P・焼土粒共に含有しない。粘性は弱い。</p> <p>13. 暗褐色土 灰白色粘土ブロックを多量に含む粘性は強い。土色は4層に近似する。</p> <p>14. 暗褐色土 VI・VII層土粒を微量含む、焼土粒を少量含む。部分的に灰を多量に含む。</p> <p>15. 暗褐色土 焼土粒を微量、VII層土粒・ブロックを多量に含む。</p> <p>16. 暗褐色土 VII層土粒を多量に、焼土粒を多量に含む、粘性がやや強い。</p> <p>17. 黄褐色土 VII層土主体で、粘性が強い。</p> <p>18. 暗褐色土 9層に近似。</p> <p>19. 暗褐色土 C Pを少量含む、粘性が強い。</p> <p>20. 茶褐色土 VI・VII層土粒・ブロック主体。</p> <p>21. 暗褐色土 C Pを少量、焼土粒を微量含む、粘性が弱い。</p> <p>22. 暗褐色土 C Pを微量、VI層土粒・ブロックを多量に含む。</p> <p>23. 暗褐色土 C Pを少量、焼土粒・VII層土ブロックを多量に含む粘性が比較的強い。</p> |
|--|--|

0 1 = 130.86m 1m

第614図 J区第22号住居跡カマド実測図

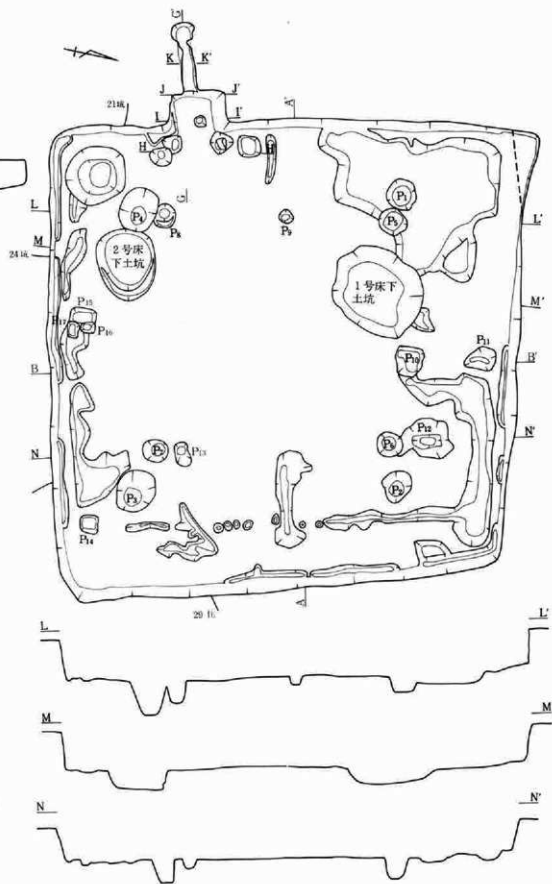




1. 暗褐色土 CFを多量に、VI層土ブロック・焼土粒・炭化物を少量含む。短柱が多い。
2. 暗褐色土 CP・焼土粒・炭化物は1層と等量で、VII層土ブロックが多い。
3. 暗褐色土 1・2層と比較して、CP・VII層土ブロックは少なく、焼土粒・炭化物が多い。
4. 暗褐色土 VII層土粒を多量に含む。
5. 暗褐色土 CPは微量で、VII層土ブロックを多量に含む。

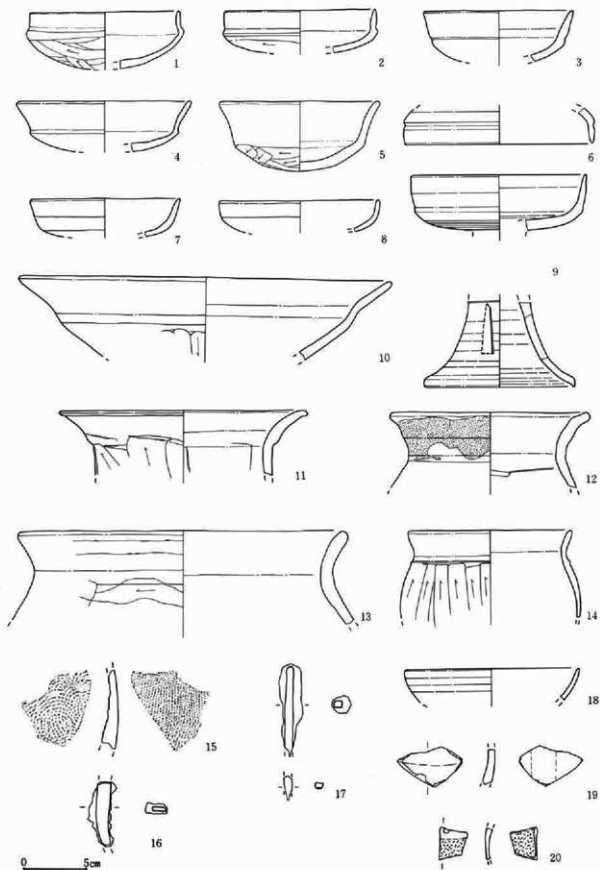
(1) 1:130.86m 1m

第615図 J区第22号住居跡実測図



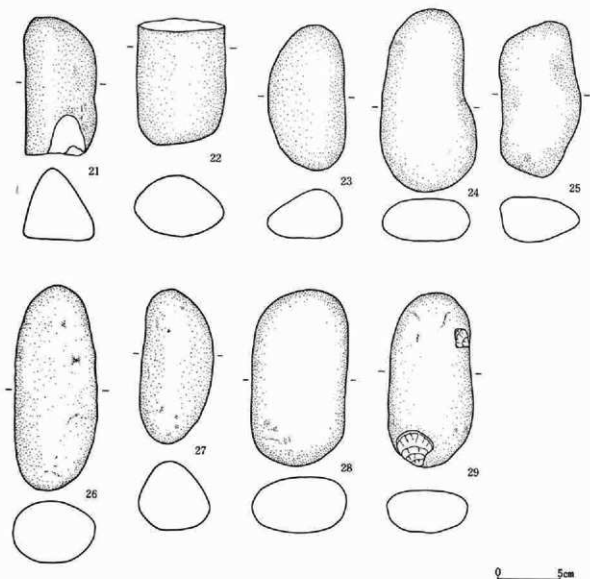


第2節 北側調査区



第616图 J区第22号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

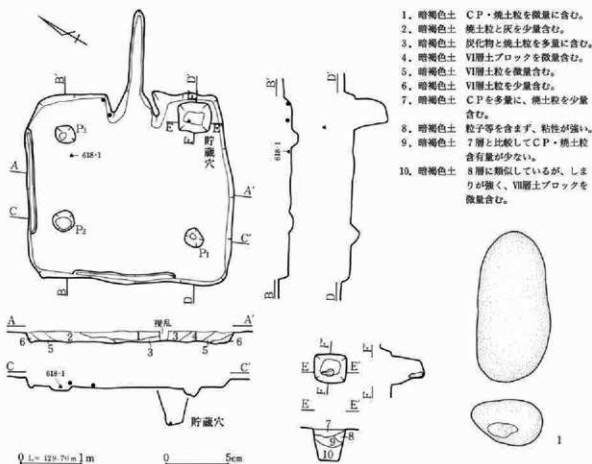


第617図 J区第22号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第23号住居跡		位置	2～4-J-55～57グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	2.92m×3.30m	主軸方位	東-30度-北	残存深度	約17cm程
備考	壁溝は北西及び南西壁の一部にみられ、柱穴は3本検出した。貯蔵穴は東コーナー部で長方形を呈し、規模は約45×53cm、深度約53cmであり、底面から礫が1個出土した。						
カマド	位置・形状	北東壁中央部			主軸方位	東-28度-北	
規模	全長184cm	屋外長135cm	屋内長	49cm	袖間幅	95cm	燃焼部幅 42cm 煙道幅 15cm
備考	袖は焼土粒を含む暗褐色土で構築され、袖石等の構築材は見られない。燃焼部の掘り方は円形で浅く、支脚の据え方は検出できなかった。煙道は燃焼部からわずかに段を有して壁外に長く延びている。						

所見 柱穴は $P_1$ ～ $P_3$ の3本で貯蔵穴西側に想定される位置には全く痕跡もみられない。柱穴規模は、径約30～32cm、深度約7～12cmで非常に貧弱である。柱穴間距離は $P_1$ ・ $P_2$ 間約2.1m、 $P_2$ ・ $P_3$ 間約1.9mである。

第2節 北側調査区

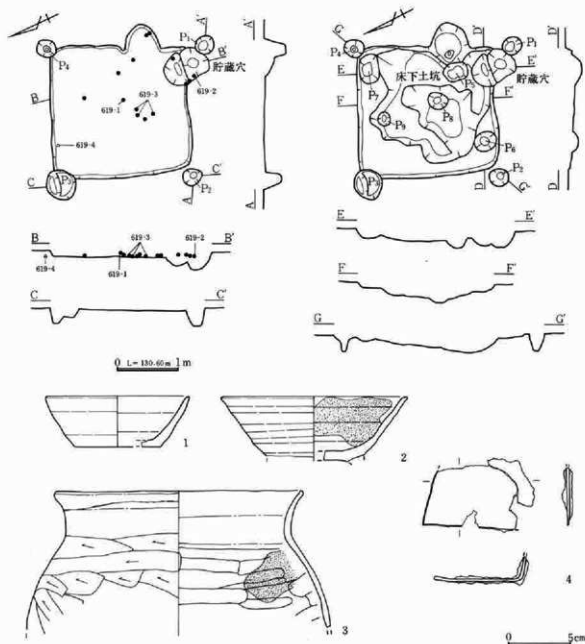


第618図 J区第23号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	J区第24号住居跡	位置	9～11-J-79・80グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	2.10m×2.25m	主軸方位	東-25度-南
備考	壁溝は無く、柱穴はコーナー部壁外に4本検出した。貯蔵穴は南東コーナー部で円形のピットが2本重複したような状態で壁外に突出する。床面に硬化はまったく認められない。				
カマド	位置・形状	東壁南寄り		主軸方位	東-20度-南
規模	全長 45cm	屋外長 45cm	屋内長 0cm	袖間幅 ?cm	燃焼部幅 50cm
備考	壁外に馬蹄形に掘り込み、屋内に楕円形の掘り方を設けている。掘り方中央には円形の小ピットが見られることから支脚の存在が予想される。袖は屋内に突出した形跡は見られない。				

所見 当住居跡の規模は他の住居跡の号以下で、床面積は1人分のスペースとしか考えられず、しかも主軸方位・柱穴配置等はこれまで検出された住居跡と全く違っている。しかしカマドが痕跡程度ではあるが残存していること、及びわずかではあるが鉄器(619図-4)を含めた遺物の出土のみられたことは、ここが生活の場であったことを意味している。また、床面等の遺構の状態は長期にわたって恒常的に使用されたとは考えにくいものであり、他の住居とは性格が異なるものであると考えている。柱穴は壁外柱穴とでも呼称すべきもので、柱穴規模は、径約30～44cm、深度約23～33cmであり、柱穴間距離は東西約2.1m、南北約2.3～2.5mである。出土した鉄器は板状の一端が折り曲げられたもので完全な状態ではなく、また、刃部が付けられた痕跡はみられず、工具と考えられるが器種は不明である。

第4章 検出された遺構・遺物

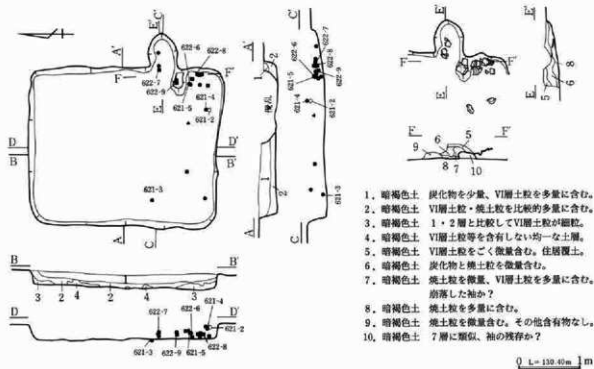


0 L=130.60m ] m

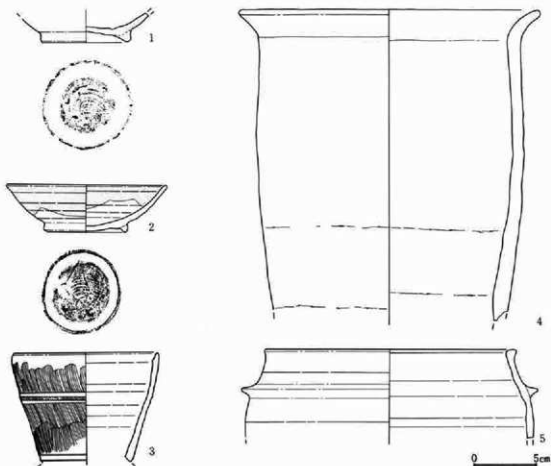
0 5cm

第619図 J区第24号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	J区第25号住居跡	位置	8・9-J-70・71グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	2.52m×3.02m	主軸方位	東-1度-南
				残存深度	約24cm程
備考	壁はほぼ垂直で残存状態も良く、床面は平坦で硬化は見られない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。遺物は、カマドの南側コーナー部に羽釜が集中して出土した。				
カマド	位置・形状	東壁南寄り	主軸方位	東-0度-南	
規模	全長 61cm	屋外長 61cm	屋内長 0cm	袖間幅 1cm	燃烧部幅 29cm
				煙道幅	1cm
備考	カマドは壁外に掘り込んで燃烧部を構築するタイプと考えられる。右袖部が残存しているように見えるが、遺物を残したことによるものである。壁への取り付け部に袖の痕跡は無く、支脚の有無も不明。				

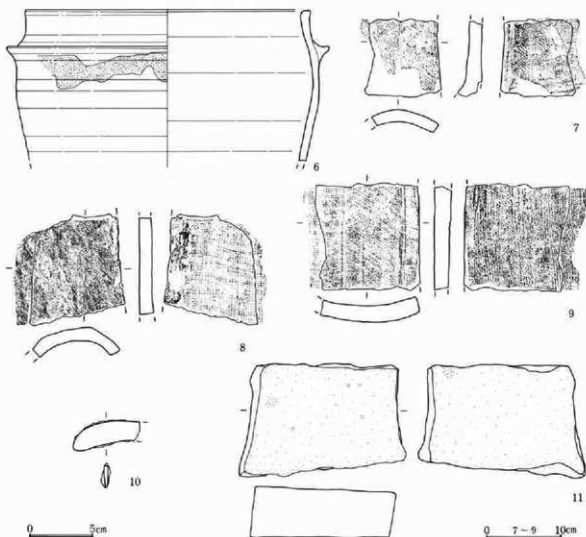


第620図 J区第25号住居跡実測図



第621図 J区第25号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

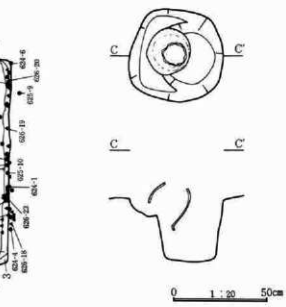
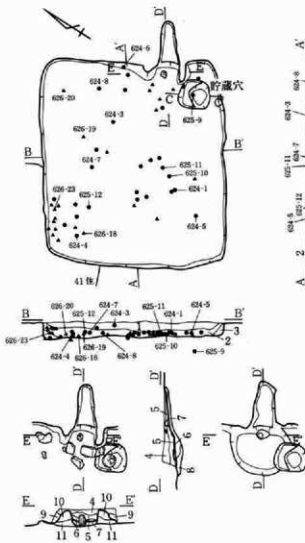


第622図 J区第25号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第26号住居跡	位置	49-I-1-J-55~57グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	3.24m×2.41m	主軸方位	東-32度-北
				残存深度	約22cm程
備考	西コーナー部で第41号住居跡と重複し、遺構残存状態から41号住居→当住居と考えられる。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴は東コーナー部に検出した。				
カマド	位置・形状	北東壁南寄り		主軸方位	東-32度-北
規模	全長 98cm	屋外長 67cm	屋内長 31cm	袖間幅 75cm	燃烧部幅 35cm 煙道幅 20cm
備考	貯蔵穴にまで及ぶ楕円形掘り方を有し、袖はカマド前面床面で検出した角柱状の載石を構築材としていたものと判断した。支脚は燃烧部中央左寄りに位置し、掘り方でも支脚据え方は明確に捉えられた。				

所見 当住居跡の貯蔵穴は、約50×45cm、深度約7cmの長方形プランの南側を、径約32cm、深度約32cmの円形に掘り込んでいる。この中段の位置から底部を欠損した土師器甕(625図-9)が逆位の状態で出土している。この土器は床面検出段階ですでに胴部下半が床面上に露呈していたもので、口縁部を下にして安定しており、床面から転倒してこのような状態になったとは考えにくい。その他の遺物は、礫を主体として床面からわずかに浮いた状態のものが多い。

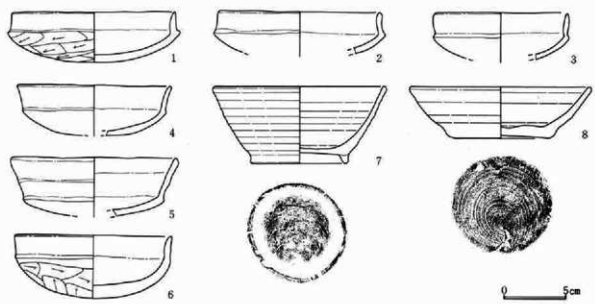




1. 暗褐色土 CPを多量に含み、固くしまっている。
2. 暗褐色土 1層と比較してCPの含有量は少なく、粒子がやや大きい。また、粘性が強い。
3. 暗褐色土 2層と比較してCPの含有量は減少し、粘性が増す。
4. 暗褐色土 CPと焼土粒を少量含み、固くしまっている。
5. 暗褐色土 CPは細粒で、焼土粒は含有量は少ないが粒が大きい。
6. 暗褐色土 5層と比較して焼土粒が多い。
7. 暗褐色土 炭化物を少量、焼土粒を多量に含み、粘性が強い。
8. 暗褐色土 7層と比較して焼土粒の含有量が少なく、VII層土粒を多量に含む。
9. 暗褐色土 VII層土大粒を多量に含む。
10. 暗褐色土 VII層土細粒を多量に含み、非常に固くしまっている。
11. 暗褐色土 VII層土細粒が10層と比較して少量で、粘性が強い。

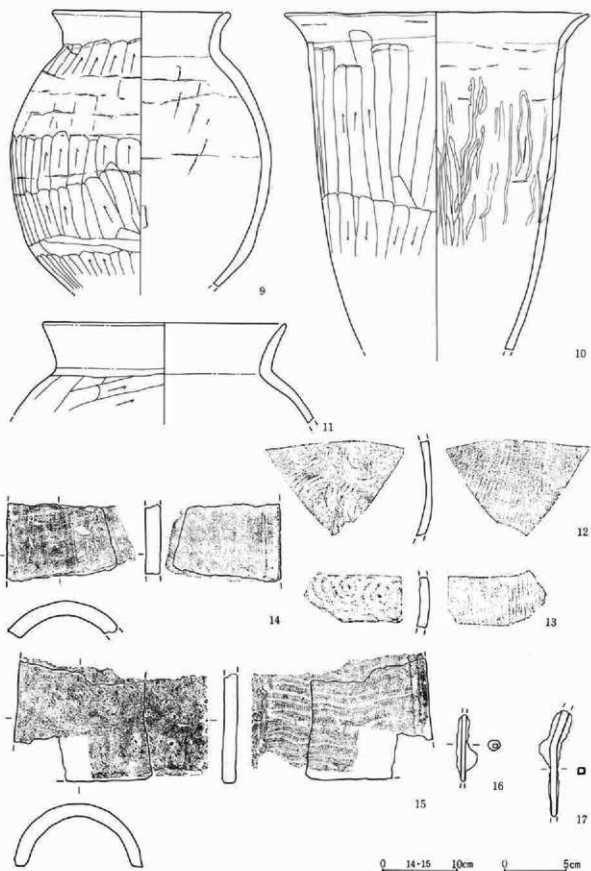
0 L=129.80m m

第623図 J区第26号住居跡実測図

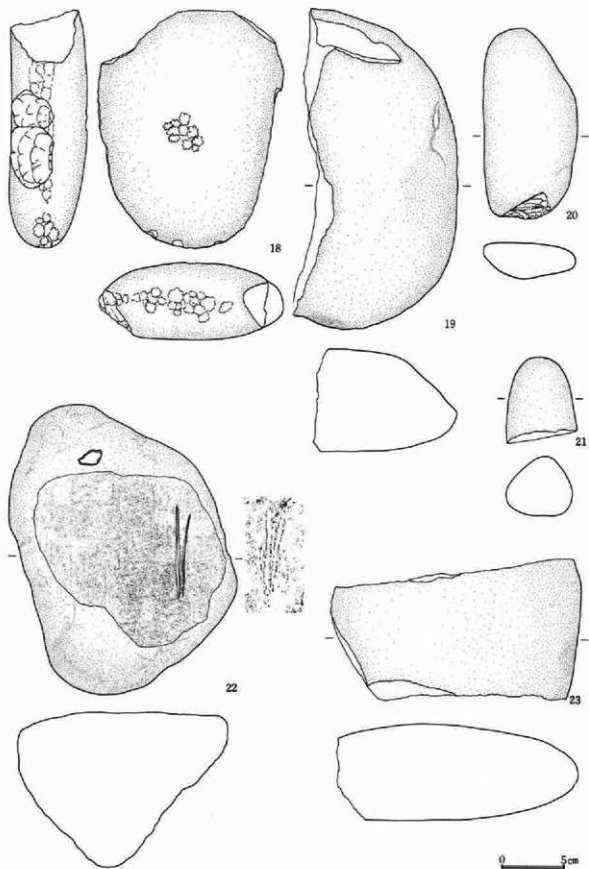


第624図 J区第26号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



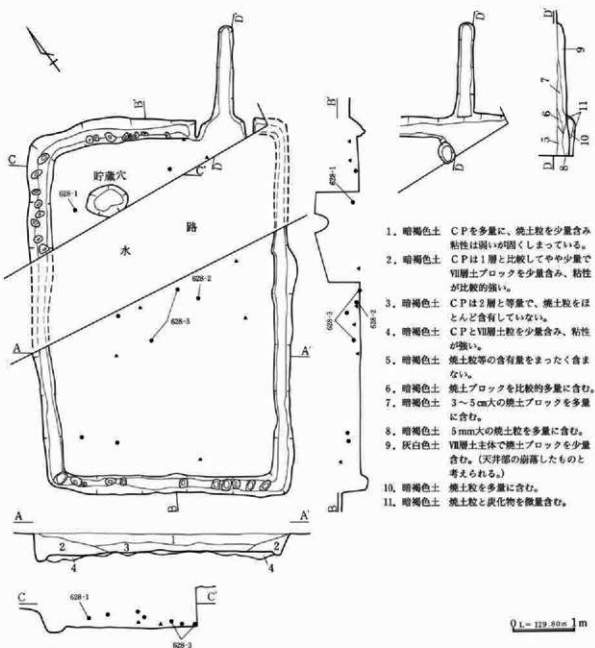
第625図 J区第26号住居跡出土遺物実測図(2)



第626図 J区第26号住居跡出土遺物実測図(3)

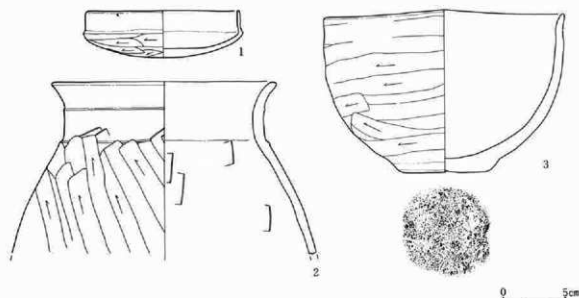
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	J区第27号住居跡		位置	4～8-J-52～55グリッド内				
平面形態	長方形	規模	5.93m×4.15m	主軸方位	北-35度-東	残存深度	約34cm程	
備考	農道にかかるため前後2回の調査を行った。また、農道南側の用水路ははずすことができず住居は二分された。壁溝は全周し、小ピットが見られる。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。							
カマド	位置・形状	北東壁南寄りに偏在			主軸方位	北-36度-東		
規模	全長	1cm	屋外長	145cm	屋内長	1cm	袖間幅	1cm
					燃烧部幅	65cm	煙道幅	16cm
備考	壁外に煙道を約140cm掘り込み、壁から内側に袖を延ばし凸字形に構築している。袖構築材は検出されていないが、掘り方段階で残存袖の延長上に楕円形ピットが検出され、袖石の存在が予想される。							



1. 暗褐色土 CPを多量に、焼土粒を少量含む  
粘性は強いが固くしまっている。
2. 暗褐色土 CPは1層と比較してやや少量で  
VII層土ブロックを少量含む、粘性  
が比較的強い。
3. 暗褐色土 CPは2層と等量で、焼土粒をほ  
んど含有していない。
4. 暗褐色土 CPとVII層土粒を少量含む、粘性  
が強い。
5. 暗褐色土 焼土粒等の含有量をまったく含ま  
ない。
6. 暗褐色土 焼土ブロックを比較的多量に含む。
7. 暗褐色土 3～5cm大の焼土ブロックを多量  
に含む。
8. 暗褐色土 5mm大の焼土粒を多量に含む。
9. 灰白色土 VII層土主体で焼土ブロックを少量  
含む。(天井部の崩落したものと  
考えられる。)
10. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
11. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を微量含む。

第627図 J区第27号住居跡実測図



第628図 J区第27号住居跡出土遺物実測図

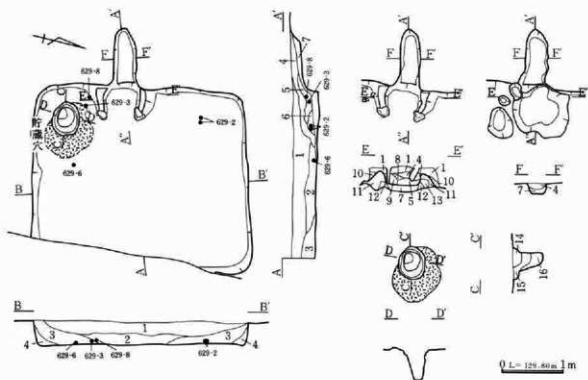
所見 当住居跡を検出した部分は、VI層土が黄褐色のロームではなく非常に粘性の強い暗褐色土であり、遺構の残存状態は良好であった。壁溝内の小ピットは、南西壁に沿う部分及び農道下の調査で検出した部分で検出されたが、他の部分にもあった可能性が高い。掘り方は全体に壁溝底の深さまで下がるもので、ほぼ平坦である。この段階においても柱穴・貯蔵穴は検出されず、未調査部分にあるとも考えられないことから、当住居跡には無かったものと判断した。遺物は中央部にわずかに出土しただけである。

遺構名称	J区第28号住居跡		位置	0～2-J-52・53グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	2.87m×3.45m	主軸方位	西-10度-南	残存深度	約38cm程	
備考	南東コーナー部は調査区外で未調査。壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南西コーナー部で、径約55×40cm、深度約47cmの楕円形でロート状の開口部を有する。また、周囲に白色粘土が検出された。							
カマド	位置・形状	西壁中央やや南寄り			主軸方位	西-13度-南		
規模	全長145cm	屋外長	92cm	屋内長	53cm	袖間幅	80cm	
					燃焼部幅	45cm	煙道幅	24cm
備考	壁外に煙道を約90cm掘り込み、壁から屋内に袖を延ばして凸字形に構築している。袖は先端に磔を据えている。燃焼部・焚口部に灰等は未検出。掘り方は燃焼部に浅い掘り込みが検出された。							

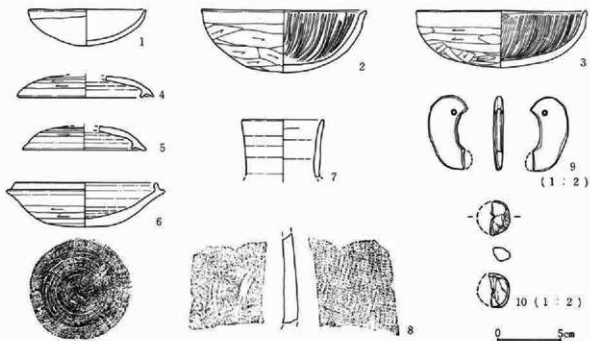
所見 当住居跡は、暗褐色粘質土（VI層）面でC/P混じりの暗褐色土が充填し検出された。掘り方は全く認められず、したがって床面上で検出されていない柱穴・壁溝は当初から掘られなかったものと考えられる。貯蔵穴は開口部がロート状を呈し、そこから円筒状に掘り込まれている。また、南西コーナー部に面する部分を除いて幅約30cmの帯状に灰白色粘土が貼られている。粘土は直に床面にごく薄く貼られたものであり、周堤状を呈することはなく、水の侵入を防ぐような機能は考えにくい。貯蔵穴に何らかの施設を持つ例としては、灰白色粘土を使用した周堤状の施設を持つH区第26号住居跡の他、貯蔵穴周囲を掘り下げたH区第79号住居跡等がある。

遺物は覆土内出土を含めても少量である。その中でもカマド付近から出土した第629図-9の勾玉の石製模造品は当区画内ではこの1例だけであり特異なものである。

第4章 検出された遺構・遺物

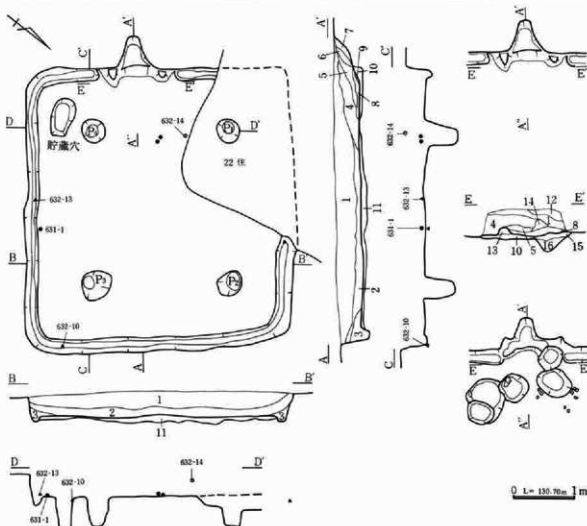


- |                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| 1. 暗褐色土 C Pを多量に含み、粘性が比較的強い。          | 9. 暗褐色土 8層に類似し、粘性が強い。                     |
| 2. 暗褐色土 C Pは1層と比較して少量で、粘性は増す。        | 10. 暗褐色土 C Pを多量に、灰白色粘土ブロックを含み、粘性・しまり共に強い。 |
| 3. 暗褐色土 C Pは2層と同量であり、VII層土ブロックを少量含む。 | 11. 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、灰白色粘土粒を少量含む。         |
| 4. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を少量含み、粘性が強い。          | 12. 暗褐色土 焼土粒と灰白色粘土の混土。                    |
| 5. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に、灰白色粘土粒を少量含む。     | 13. 暗褐色土 灰白色粘土大粒を多量に含む。                   |
| 6. 暗褐色土 焼土大粒を多量に、炭化物を少量含む。           | 14. 暗褐色土 C Pを多量に含み、粘性が強い。                 |
| 7. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を比較的多量に含み、粘性が強い。      | 15. 暗褐色土 C Pは14層と比較して少量で、VII層土粒を含む。       |
| 8. 暗褐色土 焼土粒・炭化物をまったく含まない。            | 16. 暗褐色土 含有量は15層に類似するが、土色の黒味が強い。          |



第629図 J区第28号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	J区第29号住居跡	位置	4~7-J-78~81グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	4.50m×4.25m	主軸方位	西-40度-南
				残存深度	約40cm程
備考	西コーナー部は第22号住居跡との重複で不明である。壁溝はカマド部を除き全周し、柱穴はP <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4本である。貯蔵穴は南コーナー部で、約62×35cm、深度約50cmの長方形プランである。				
カマド	位置・形状	南西壁中央やや南寄り		主軸方位	西-40度-南
規模	全長 77cm	屋外長 51cm	屋内長 26cm	袖間幅105cm	燃烧部幅 55cm 煙道幅 23cm
備考	壁外に凸字形に掘り込み、肩の部分から袖を屋内に延ばしていたものと考えられる。肩に対応する位置に袖石据え方と考えられる径約40cm、深度約18cmの円形ピットを検出した。灰面等は未検出。				

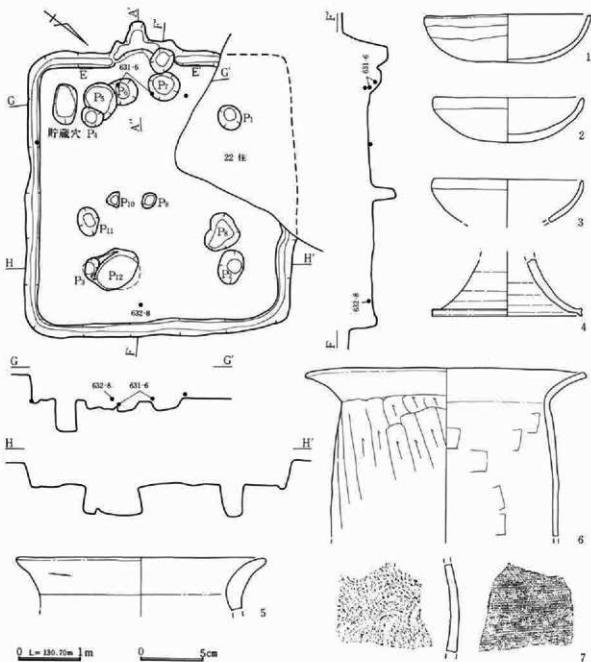


1. 暗褐色土 C PとVII層土ブロックを多量に、焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 I層と比較してVII層土ブロックが減少し、CPを含む黒色土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 VII層土粒を多量に含む。
4. 暗褐色土 VII層土ブロックとCPを少量含む。
5. 褐色土 VII層土ブロックを多量に、焼土粒を少量含む。
6. 赤褐色土 焼土ブロック及び粒子を多量に含む。
7. 暗褐色土 焼土粒を比較的多量に含む、粘性が強い。
8. 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に含む。
9. 暗褐色土 VII層土ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
10. 暗褐色土 焼土粒と灰を多量に、VII層土粒を少量含む。
11. 暗褐色土 VII層土及び黒色土ブロックを多量に含む、粘床
12. 暗褐色土 VII層土ブロックとCPを多量に含む。
13. 灰褐色土 VII層土粒・炭化物・焼土粒を少量含む。
14. 暗褐色土 VII層土ブロックと焼土粒を微量含む。
15. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・VII層土粒を含む。
16. 暗褐色土 灰を多量に含む。

第630図 J区第29号住居跡実測図

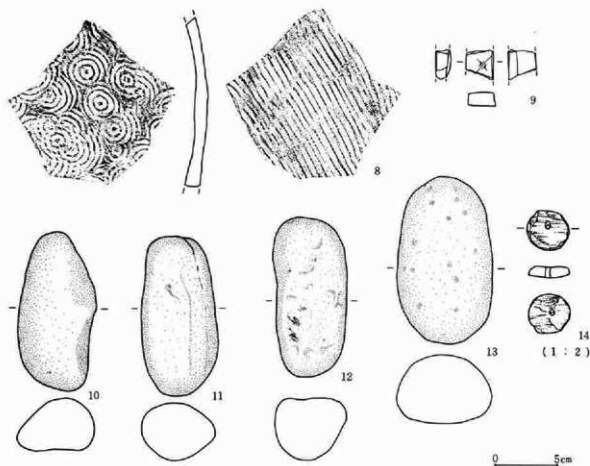
第4章 検出された遺構・遺物

所見 当住居跡は前述のとおり第22号住居跡と重複し、残存状態及び確認状態から当住居→22号住居と考えられる。柱穴は $P_1 \sim P_{14}$ (規模は、径約35~40cm、深度約44~48cm、柱穴間距離は、東西約2.4m、南北約2.3m)とほぼ同規模であり、重複するピットはいずれも浅いものが多く柱穴とは考えられないことから、当住居跡において柱穴位置の変更を伴うような建て替えは捉えられない。 $P_{12}$ は断面形が台形状を呈して特徴的であるが、柱穴( $P_9$ )と重複していることから同時存在とは考えられない。また、中央にみられる $P_9$ は一辺約20×23cm、深度約38cmの方形を呈し、検出状態から当住居跡に伴うことは明らかであるが、機能は不明である。遺物出土はごく少なく、第632図-10・13の礎が南北壁溝に接して、第631図-1の土師器環が壁溝上から出土した。また、白玉(第632図-14)がカマド右袖前面の床面から浮いた状態で出土している。



第631図 J区第29号住居跡・出土遺物実測図



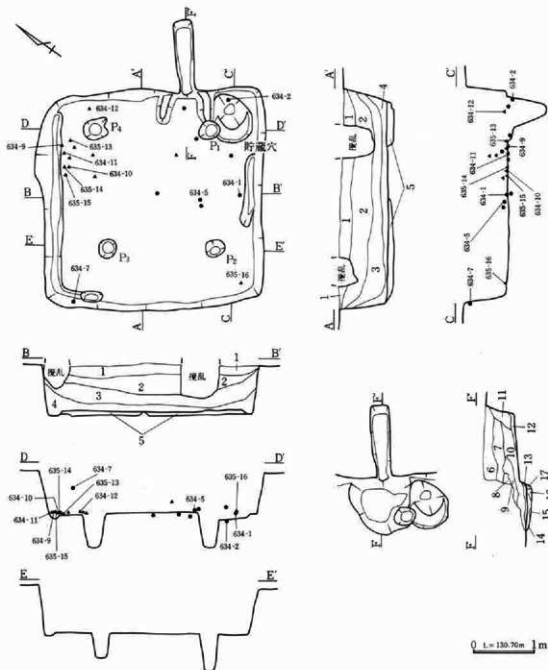


第632図 J区第29号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第30号住居跡		位置	2~4-J-77~80グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	3.52m×3.45m	主軸方位	東-37度-北	残存深度	約75cm程
備考	壁は垂直で残存状態も良好である。壁溝は北西壁及び南東壁に沿って一部分検出した。柱穴は4本貯蔵穴は東コーナー部にあり、径約74cm、深度約64cmの円形で、西側に中段を有している。						
カマド	位置・形状	北東壁南寄り			主軸方位	東-40度-北	
規模	全長165cm	屋外長114cm	屋内長 51cm	袖間幅102cm	燃焼部幅 41cm	煙道幅 22cm	
備考	北東壁から壁外に約110cm煙道を掘り込み、間隔を置いて袖を屋内に延ばし燃焼部を構築している。袖の先端部は柱穴(P <sub>1</sub> )に接しており、袖石等の構築材は使用されていない。						

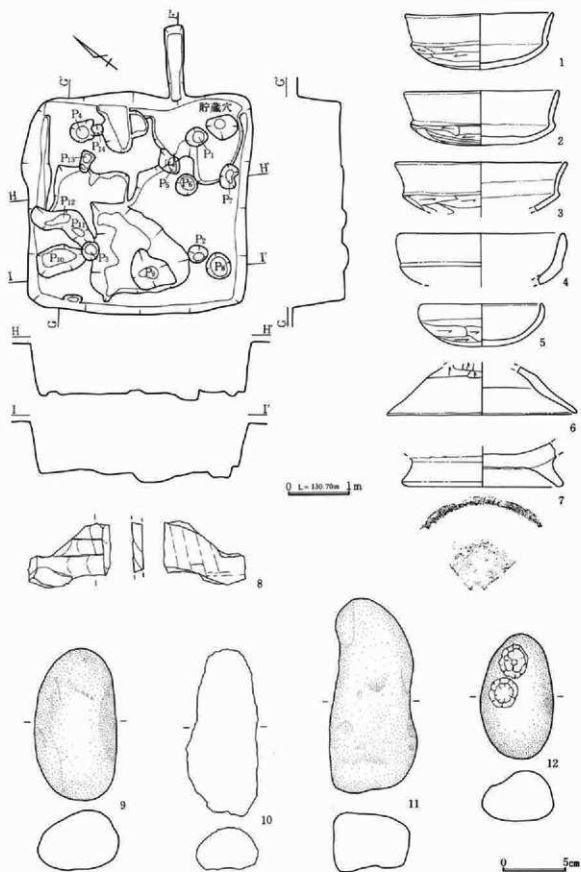
所見 当住居跡は第29号住居跡と平行する位置関係にあり、他の住居跡と重複は見られない。確認はVI層上面であるが、掘り込みは非常に深く残存状態は良好である。柱穴は床面精査時には確認できず、掘り方段階の調査で検出した。柱穴としたのはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本で、他に柱穴と考えられる配列が認められないことから、規模の拡大を伴うような建て替えは考えられず、カマドにも造り替えが見られないことから、一時期のものである可能性が高い。柱穴規模は、径約31~35cm、深度約38~58cmで、柱穴間距離は、東西約1.9m、南北約1.7~1.9mである。遺物は、床面直上から出土したものは少ないが、北西壁溝際に第634・635図-9~15の7点の礫が床面に貼り付くように、2点づつ並べられたような状態で出土した。また、第634図-2の土師器環は貯蔵穴中央上層から、口縁部上向き状態で出土した。

第4章 検出された遺構・遺物



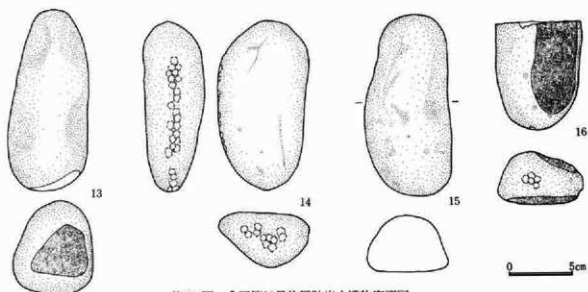
- |  |   |
|--|---|
| <p>1. 暗褐色土 C Pを多量に、焼土粒・炭化物・VI・VII層土ブロックを少量含む。</p> <p>2. 暗褐色土 1層と比較してVI・VII層土ブロック含有量が多く、土色の黒味が強い。</p> <p>3. 暗褐色土 C Pは少量で、VI・VII層土ブロックを多量に含む。</p> <p>4. 暗褐色土 1層と比較して含有物の量が全体に多い。</p> <p>5. 暗褐色土 C P・VII層土粒を少量含む、粘性が強い。</p> <p>6. 暗褐色土 C Pを多量に、焼土粒・VI層土粒を少量含む。</p> <p>7. 暗褐色土 6層と比較して焼土粒が多く、炭化物も含む。</p> <p>8. 暗褐色土 7層と比較して焼土粒含有量がさらに多い。</p> <p>9. 灰褐色土 VI層土ブロックと焼土ブロックを多量に含む。</p> | <p>10. 灰褐色土 VI・VII層土ブロックを多量に、焼土粒・炭を少量含む、粘性が強い。</p> <p>11. 暗褐色土 VI層土粒・ブロックを多量に含む。</p> <p>12. 暗褐色土 VI層土粒・VII層土ブロック・焼土粒を少量含む。</p> <p>13. 暗褐色土 10層に類似するが、灰のブロックを含む。</p> <p>14. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・VI層土ブロックを多量に含む。</p> <p>15. 黄褐色土 VII層土ブロックで構成される。</p> <p>16. 黄褐色土 VII層土ブロックで構成される。</p> <p>17. 暗褐色土 14層に近似する。</p> |
|--|---|

第633図 J区第30号住居跡実測図



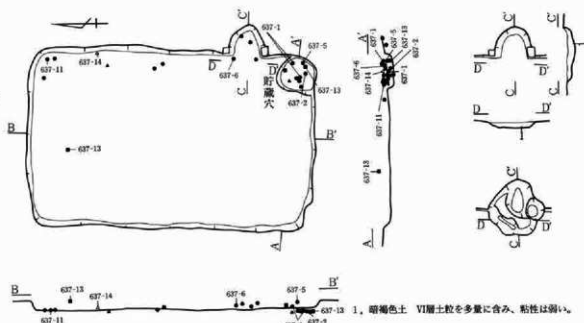
第634図 J区第30号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

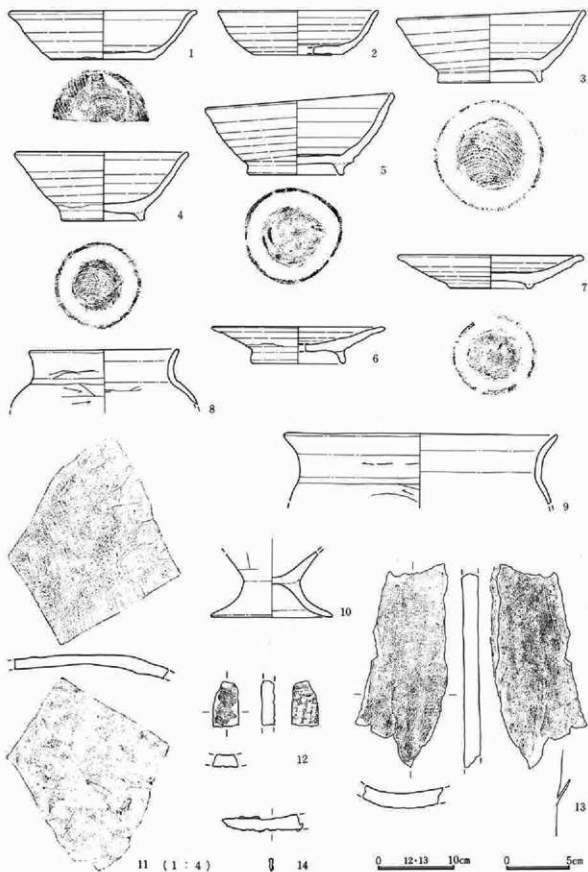


第635図 J区第30号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第31号住居跡	位置	7~9-J-77~79グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	2.87m×4.59m	主軸方位	東-2度-南
				残存深度	約15cm程
備考	VI層上面で検出したが残存状態は不良である。柱穴は無く、南東コーナー部に円形プランの貯蔵穴を検出した。規模は径約60cm、深度約10cmであり、遺物の大半は貯蔵穴内の出土である。				
カマド	位置・形状	東壁南寄りに偏在		主軸方位	東-2度-南
規模	全長 50cm	屋外長 50cm	屋内長 1cm	袖間幅 70cm	燃焼部幅 40cm
				煙道幅	-
備考	壁外に馬蹄形に掘り込み、壁取り付き部に角柱状の載石を袖石として据えている。したがって袖が屋内に突出せず、燃焼部は壁外に位置する。焚口・燃焼部に灰・焼土等は検出されなかった。				



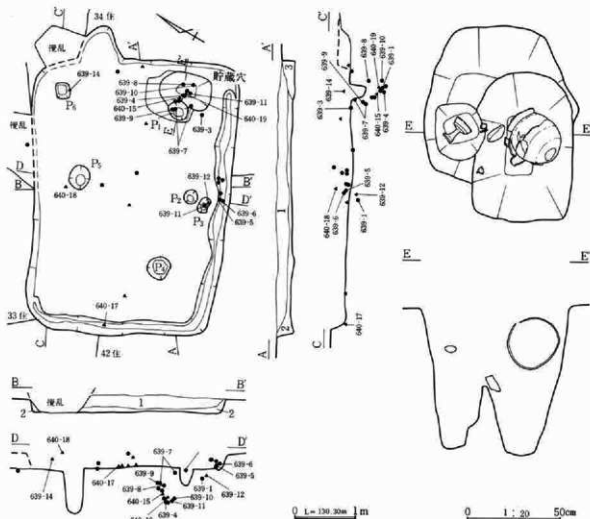
第636図 J区第31号住居跡実測図



第637图 J区第31号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第32号住居跡	位置	7~10-J-72~74グリッド内
平面形態	隅丸長方形?	規模	4.30m×3.28m
		主軸方位	東-25度-北
		残存深度	約22cm程
備考	壁溝は西・南側に検出され、貯蔵穴は東コーナー部に長方形を呈し、規模は約83×53cm、深度約79cmである。遺物は貯蔵穴中層から上層に集中して出土している。		

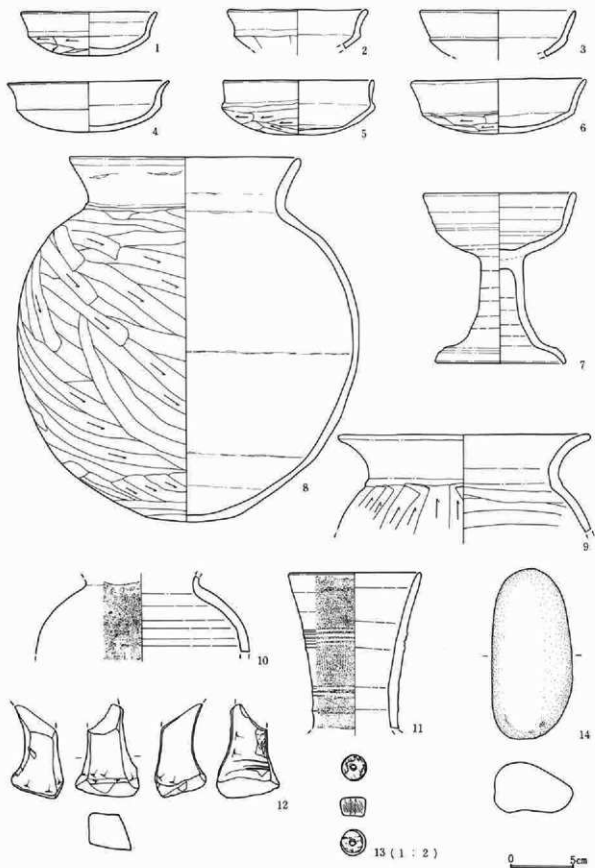
所見 当住居跡は北側で第33号住居跡と、西側で第34号住居跡とそれぞれ重複している。遺構確認状態及び残存状態から、33・34号住居→当住居と考えられる。当住居跡のカマド部分は攪乱を受けており、北東壁北寄りに痕跡を検出した。柱穴は南東壁に平行して検出したP<sub>1</sub>（径約30cm、深度約79cmの円形）・P<sub>2</sub>（径約35cm、深度約49cmの円形）の2本が可能性として考えられるが、対応する北西壁側にはP<sub>3</sub>（25×20cm、深度約25cmの方形）1本が検出されたのみで、平面形態及び規模の点で同一視することはできない。遺物は表中記載のとおり、第639図-8の土師器甕が口縁部を斜下方に向けて出土し、その他第639図-7の須恵器高坏がP<sub>1</sub>上層中に横位に、第640図-15・19の礫が貯蔵穴中層から出土している。



1. 暗褐色土 C Pを多量に、炭土粒・炭化物を少量含み、粘性は弱い。
2. 暗褐色土 1層と含有物の種類・量は同じであるが、土色が黒味が強く、粘性も強い。
3. 暗褐色土 C Pを多量に含み、珪質土（灰白色粘質土）ブロックを含む。

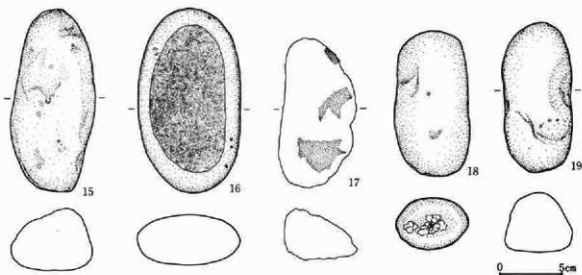
第638図 J区第32号住居跡実測図

第2節 北側調査区



第639图 J区第32号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

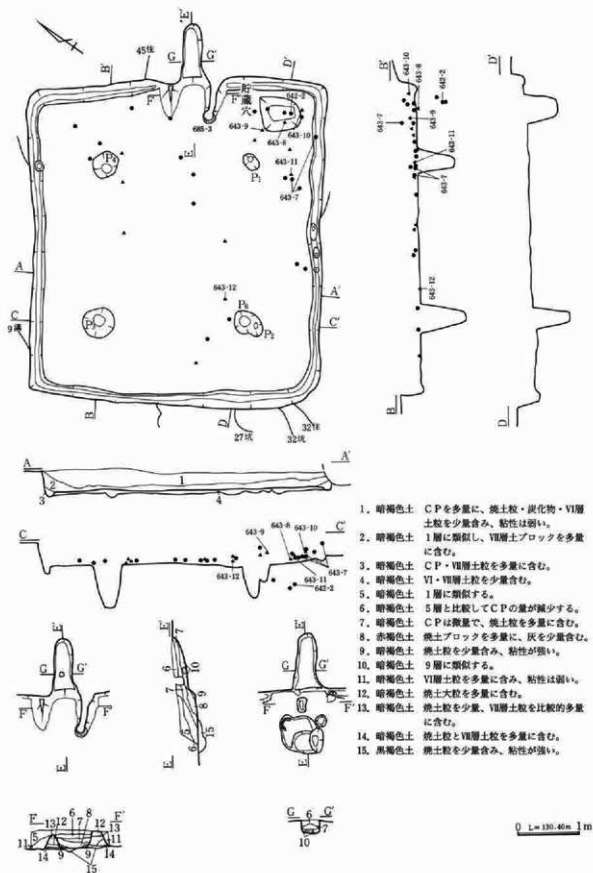


第640図 J区第32号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第33号住居跡	位置	9~12-J-72~76グリッド内		
平面形態	長方形	規模	5.74m×4.65m	主軸方位	東-37度-北
		残存深度	約31cm程		
備考	壁溝はカマド部を除いて全周し、柱穴はP <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4本である。貯蔵穴は東コーナー部で長方形プランを呈し、規模は、約62×53cm、深度約50cmで、底面付近からわずかに遺物が出土した。				
カマド	位置・形状	北東壁ほぼ中央		主軸方位	東-37度-北
規模	全長148cm	屋外長	83cm	屋内長	65cm
		袖間幅	97cm	燃焼部幅	41cm
		煙道幅	22cm		
備考	燃焼部から段を有し、煙道を約85cm壁外に掘り込む。袖は先端に土師器壺を逆位に据えて構築している。支脚は石製と考えられるが、掘り方で燃焼部奥左寄りに据え方のビットだけを検出した。				

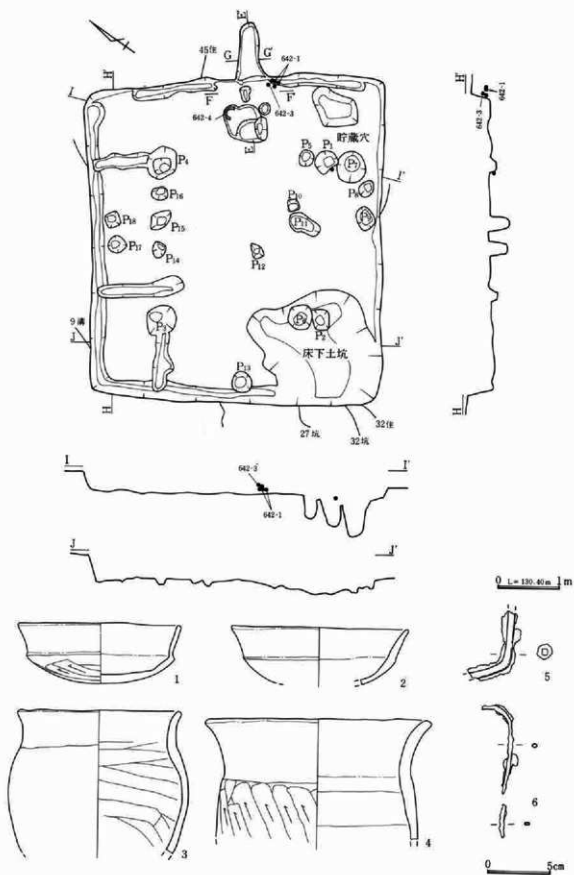
所見 当住居跡は南側で第32号住居跡と重複しているが、前述のように確認状態から当住居→32号住居と判断した。廃棄段階の柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>(規模は径約32~45cm、深度約46~78cm、柱穴間距離はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が約2.5m、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>が約2.6m)の4本と考えられるが、掘り方の調査でP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の内側にP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>(規模は径約26・37cm、深度約40・56cm、柱穴間距離は約2.5m)を検出した。この2本の柱穴は位置関係から先のP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の柱穴配列と同時に存在したとは考えられず、建て替え例として捉えられる。つまりA(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)とB(P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>)の柱穴配列であり、検出状態からB→Aという前後関係と思われる。Bの柱穴配列における柱穴間距離は、P<sub>4</sub>・P<sub>3</sub>間でP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>間に比べて約30cm短くなっている。また、P<sub>1</sub>と重複するP<sub>7</sub>(径約47cm、深度約60cmの円形プラン)は、位置関係及び規模の点からB柱穴配列の貯蔵穴と考えられる。このことから当住居跡においては南側への面的な拡張がされたものと考えられる。その他掘り方の調査で、北西壁とP<sub>8</sub>を結ぶもの、及びこれに約2mの間隔で平行するものと、南西壁とP<sub>9</sub>を結ぶ3本の間仕切状の溝を検出した。また、P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>を結ぶライン状にはP<sub>14</sub>~P<sub>16</sub>(径約25cm、深度約24~38cm、ビット間距離約40~65cm)の3本のビット列があり、間仕切状の溝とビット列で西コーナー部から北西壁に沿って2カ所の長方形区画を構成している。さらに北西壁中央部の長方形区画内中央壁寄りに、先のビット列と同規模のP<sub>17</sub>・P<sub>18</sub>(径約25cm、深度約30~34cm、ビット間距離約40cm)の2本のビットが検出された。したがってこれらが一つの施設を構成していると考えられるが、その機能について云々する積極的な根拠がない。遺物はカマド周辺の床面近くから比較的多く出土している。



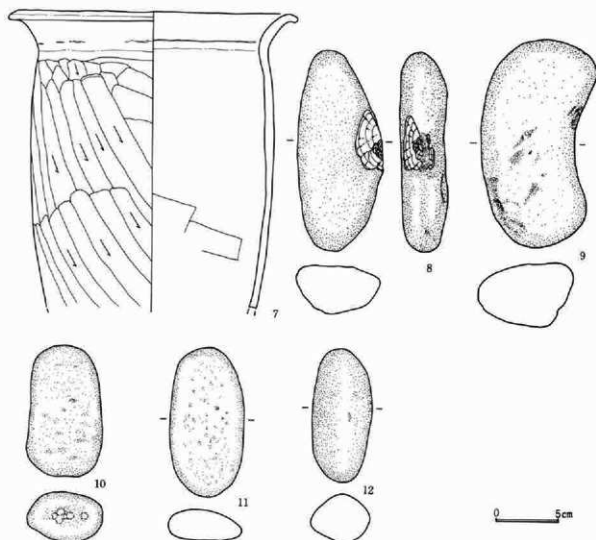


第641図 J区第33号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



第642図 J区第33号住居跡・出土遺物実測図



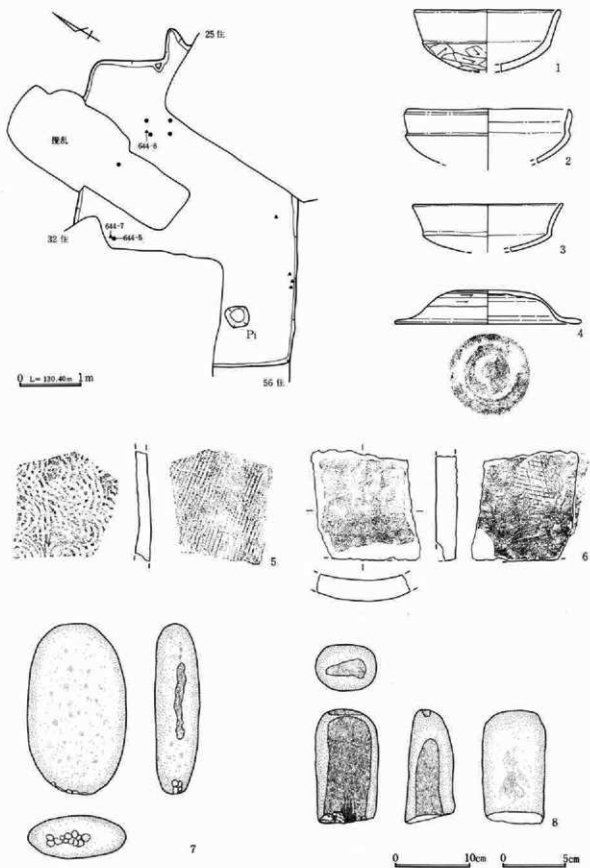
第643図 J区第33号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第34号住居跡	位置	7～10-J-70～73グリッド内				
平面形態	長方形?	規模	4.81m×3.53m	主軸方位	東-29度-北	残存深度	約23cm程
備考	第25・32・56号住居跡と重複し、検出状態から56号住居→当住居→25・32号住居と考えられる。また、中央部は攪乱を受けているため残存状態は不良である。壁溝・貯蔵穴は不明で、ピットを1本検出。						

所見 カマドは北東壁中央やや北寄りに位置し、第25号住居跡との重複によって右袖部以南を失っている上住居残存状態の悪さを反映してカマドの最下部だけを検出したものと思われる。カマド構造は袖石等の構築材は無く、規模的にも貧弱なものである。さらにカマド内の充填土層にも焼土・炭化物等は微量であり、継続的に長期間使用されたものか疑問がある。

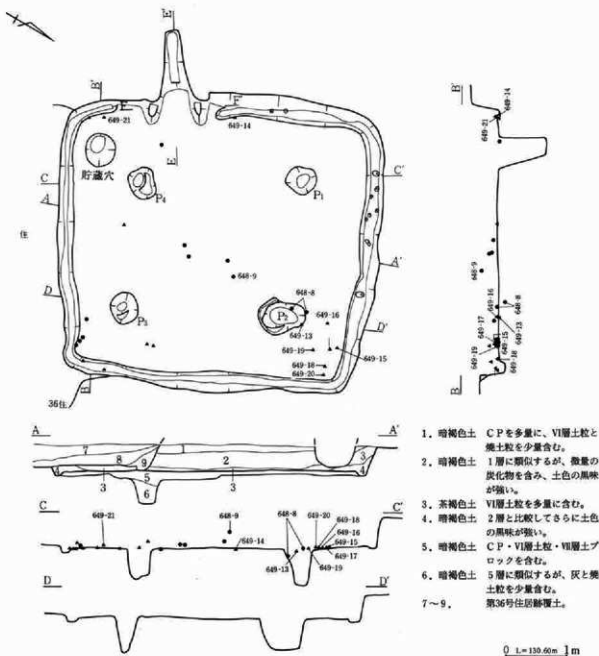
遺物出土はごくわずかであるが、第10号住居跡で出土している器種不明の須恵器(第596図-14)と同じ製品(第644図-4)が一点出土している。この遺物は床面近くから出土しているのは確かであるが、調査時図化以前に取り上げてしまったため出土位置を特定することができない。また、この遺物は重複する第25号住居跡から破片が出土しており、表中記載の当住居跡と第25号住居跡の新旧関係の傍証となっている。

第4章 検出された遺構・遺物



第644図 J区第34号住居跡・出土遺物実測図

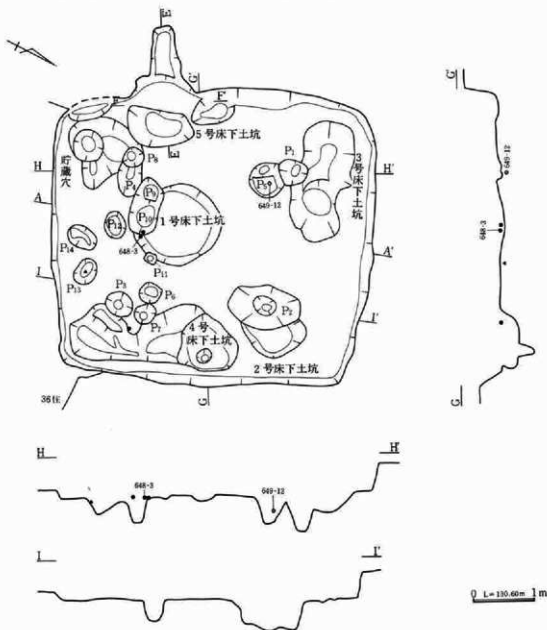
遺構名称	J区第35号住居跡	位置	1～4-J-74～77グリッド内		
平面形態	隅丸方形	規模	4.73m×5.15m	主軸方位	西-25度-南
				残存深度	約40cm程
備考	第36号住居跡と重複する。壁溝はカマド部分を除き全周する。柱穴はP <sub>1</sub> ～P <sub>4</sub> の4本で、掘り方で重複が見られる。貯蔵穴は南コーナー部で円形を呈し、規模は径約46cm、深度約75cmである。				
カマド	位置・形状	南西壁南寄り		主軸方位	西-33度-南
規模	全長150cm	屋外長105cm	屋内長 45cm	袖間幅100cm	燃焼部幅 43cm 煙道幅 13cm
備考	壁外に凸字形に掘り込み、肩部から袖を屋内にわずかに延ばして燃焼部を構築しており、左袖部に土師器甕を伏せて使用していた。燃焼部は比較的狭く、焼土・灰等の残存は認められない。				



第645図 J区第35号住居跡実測図(1)

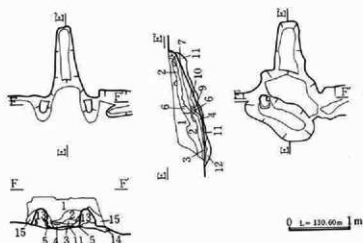
第4章 検出された遺構・遺物

所見 当住居跡は南側で第36号住居跡と重複している。確認段階で主軸方位の違いから当住居→36号住居と判断し、2軒同時に調査した。その結果、2軒通しの土層断面及び遺物出土状態から、上記の新旧関係を確かめることができた。柱穴は、床面精査で検出されたP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>(規模は径約40~48cm、深度約47~58cm、柱穴間距離は東西約2.1m、南北約2.6m)の4本と考えられるが、掘り方の調査で先の柱穴に接するようにP<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>(規模は径約33~55cm、深度約43~62cm)の4本のピットを検出した。この中で位置関係からP<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>の3本は、P<sub>3</sub>を共通することによって方形の柱穴配列を想定できる。したがってA(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)とB(P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>)の2組があり、確認状態からB→Aという関係が考えられる。このことから若干主軸方位にずれがあるが、ほぼ同規模の中での建て替えがなされたものと思われる。その他カマド正面の住居中央及び各コーナー部に浅い床下土坑を検出した。遺物は床面から浮いた状態で出土したものが多く、北コーナー部床面に貼り付くように第649図-13・15~20の礫が出土している。



第646図 丁区第35号住居跡実測図(2)

第2節 北側調査区

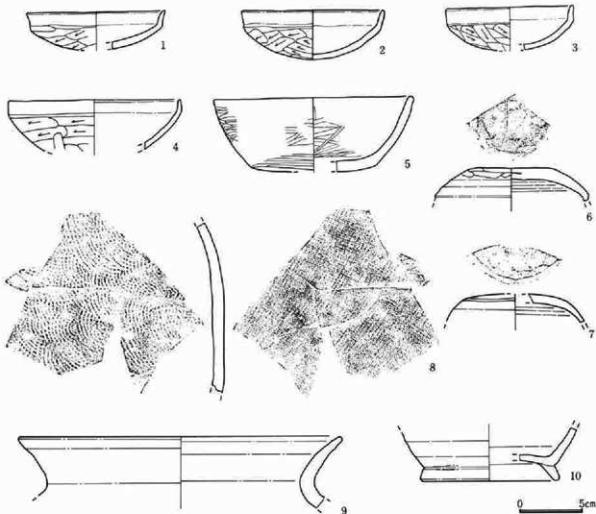


11. 暗褐色土 焼土粒・灰白色粘土ブロック・CPを少量含む、粘性が強い。  
 12. 暗褐色土 11層と比較して焼土粒含有量は少なく、VII層土ブロックを少量含む粘性が強い。

1. 暗褐色土 CPを多量に、VII層土粒・灰白色粘土ブロック・焼土粒・炭化物を少量含む粘性が弱い。  
 2. 暗褐色土 1層と比較して土色の黒味が強く、焼土粒含有量が多い。  
 3. 暗褐色土 灰白色粘土粒は少量で、焼土粒を多量に含む。  
 4. 暗褐色土 灰白色粘土粒・焼土粒・炭を少量含む。  
 5. 暗褐色土 焼土粒を多量に、炭・炭化物を少量含む、粘性が強い。  
 6. 暗褐色土 灰白色粘土ブロック・焼土粒を多量に含む、粘性が強い。  
 7. 暗褐色土 焼土粒を多量に、灰白色粘土粒・炭化物を少量含む。  
 8. 暗褐色土 焼土大粒を多量に含む、粘性は弱い。  
 9. 暗褐色土 焼土粒を微量、VII層土粒を多量に含む。  
 10. 暗褐色土 8層と比較して焼土粒は少なく、VII層土粒を微量含む。

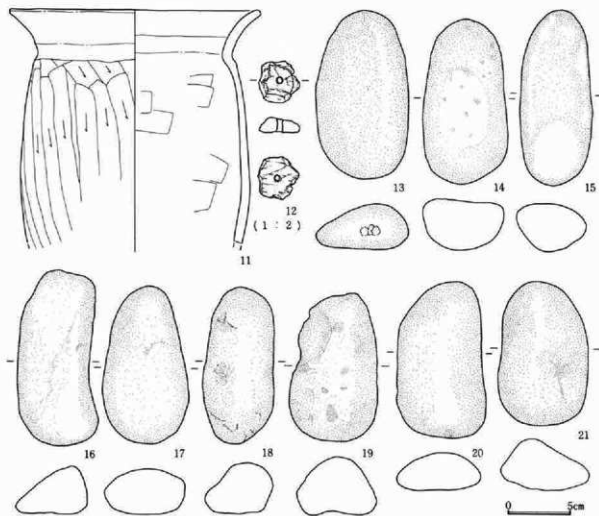
13. 暗褐色土 11層に類似する。袖  
 14. 暗褐色土 12層に類似する。  
 15. 暗褐色土 1層と比較して焼土粒含有量が多い。

第647図 J区第35号住居跡カマド実測図



第648図 J区第35号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



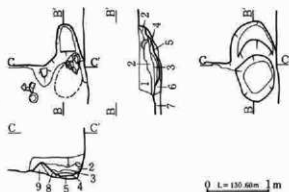
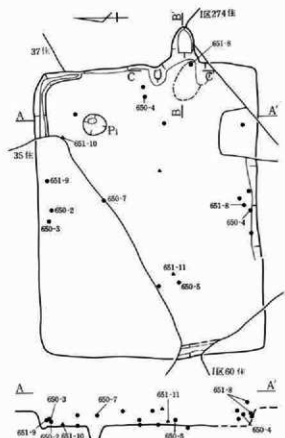
第649図 J区第35号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第36号住居跡	位置	1~3-J-73~76グリッド内			
平面形態	隅丸長方形?	規模	4.62m×3.48m	主軸方位	東-3度-北	
		残存深度	約22cm程			
備考	南側は農道下にかかり、狭い範囲の2次調査で検出したため明確に捉えることができなかった。壁溝は北東コーナー部及び西壁にわずかに残存していた。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。					
カマド	位置・形状	東壁南寄りに偏在			主軸方位	東-1度-北
規模	全長 95cm	屋外長 63cm	屋内長 32cm	袖間幅 1cm	燃烧部幅 48cm	煙道幅 21cm
備考	壁内に煙道を短く掘り込み、屋内に袖をわずかに延ばして構築。袖構築材掘り方段階でも痕跡も見られない。燃烧部に灰・焼土等の面は見られなかったが、第651図-8の土師器壺が潰れて出土している。					

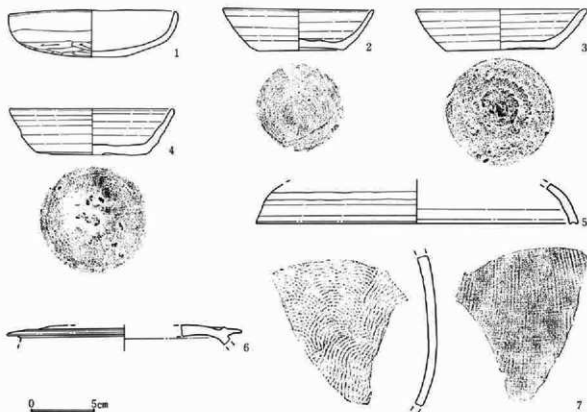
所見 当住居跡は北側で第35号住居跡、東側で第37号住居跡と重複している他、南側でI区第60・247号住居跡との重複が見られる。

新旧関係は、セクション・主軸方位・遺構検出状態等から35・37号住居、I区60・247号住居→当住居と考えられる。第35号住居跡との重複部分で平面プランが完全でないのは、当住居よりも掘り込みの深い第35号住居跡と同時調査したためである。南側は農道下にかかり、2次の調査で検出したため、プラン等を完全に把握することができなかった。遺物はカマド周辺及び第35号住居跡との重複部分に比較的多く出土している。

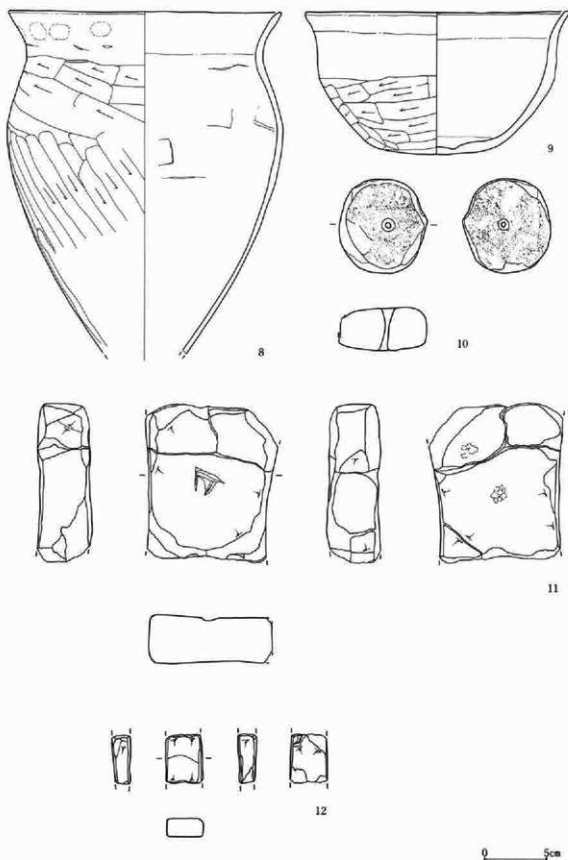




1. 暗褐色土 C Pを多量に、焼土粒・VI層土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 1層と比較して焼土粒含有量は増し、土色の黒味が強く粘性も強い。また、炭化物を微量含む。
3. 暗褐色土 2層と比較して焼土粒含有量はさらに増し、灰を少量含む。粘性はやや弱い。
4. 暗褐色土 焼土粒・灰を多量に含む。  
※ 4層と5層の間に灰色灰層が認められるが、層厚約1cmであり図上に表現できなかった。
5. 暗褐色土 C P・焼土粒を少量含む。灰は検出されなかった。
6. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・C Pを少量含む、粘性はやや強い。
7. 暗褐色土 6層に類似する。住居廻り方光裏土。
8. 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に含む。粘性が強い。
9. 暗褐色土 8層に類似するが微量の焼土粒を含む。



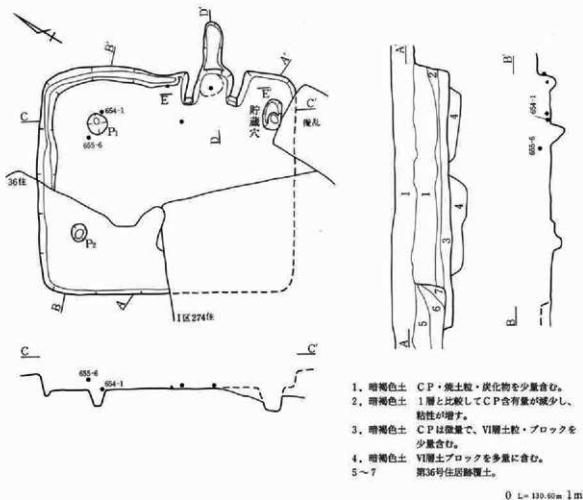
第650図 J区第36号住居跡・出土遺物実測図



第651図 J区第36号住居跡出土遺物実測図

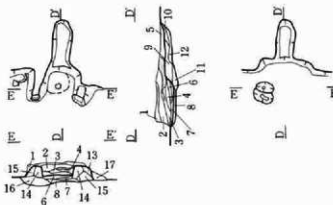
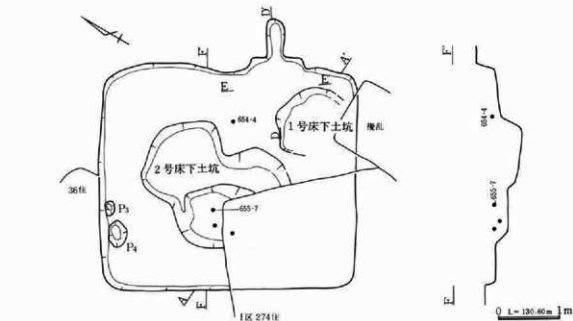
遺構名称	J区第37号住居跡	位置	0～2-J-72～74グリッド内		
平面形態	隅丸長方形?	規模	3.61m× - m	主軸方位	東-33度-北
備考	壁溝は北コーナー部付近だけに検出したが、本来は全周したものと考えられる。貯蔵穴は東コーナー部やや内側で長方形を呈し、規模は約48×30cm、深度約38cmである。柱穴はP <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> か?				
カマド	位置・形状	北東壁南寄り		主軸方位	東-34度-北
規模	全長132cm	屋外長	79cm	屋内長	56cm
		袖間幅	96cm	燃焼部幅	42cm
		煙道幅	21cm		
備考	壁外に煙道を約75cm掘り込み、壁から屋内に袖を延ばし凸字状に構築。袖先端には角柱状載石を据えている。燃焼部には灰・炭化物・焼土が多く検出されている。また、煙道入口上に焼土ブロックを検出				

所見 当住居跡は西側で第36号住居跡と重複する他、南側でI区第247号住居跡と重複している。新旧関係は遺構の検出状態及び残存状態から、当住居→I区247号住居→36号住居と考えられる。調査は南半が農道にかかるため、時間をおいて2回おこなった。北半においては柱穴と考えられるビットP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>(径約31、26cm、深度約23、15cm)を検出したが、南半の調査では対応する位置にビットを検出することはできなかった。掘り方の調査で東コーナー部及び住居中央部に円形土坑を3基?検出した。遺物はP<sub>1</sub>の周辺と、掘り方面からごくわずかに出土した。



第652図 J区第37号住居跡実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



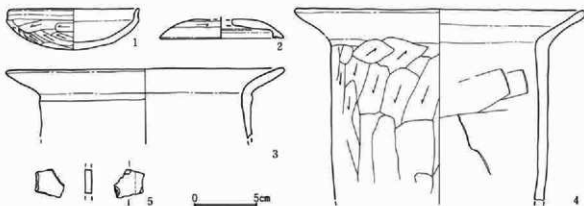
10. 暗褐色土 焼土ブロック・灰白色粘土ブロックを少量含む。  
 11. 暗褐色土 灰・焼土粒を比較的多量に含み、柔らかい。  
 12. 暗褐色土 灰・焼土粒等を全く含まず、柔らかい。  
 13. 暗褐色土 灰白色粘土粒を少量含み、焼土等を含まない。  
 14. 暗褐色土 暗褐色土主体で、灰白色粘土ブロックを微量含む。

1. 暗褐色土 CP・焼土粒を少量含む。  
 2. 暗褐色土 1層と比較して焼土粒含有量が多い。  
 3. 暗褐色土 2層と比較して焼土粒含有量がさらに多い。  
 4. 暗褐色土 3層と比較して土色の黒味が濃く、焼土粒含有量はさらに多い。  
 5. 暗褐色土 焼土粒・炭化物を多量に含み、柔らかい。  
 6. 暗褐色土 焼土粒・灰を多量に含む。  
 7. 暗褐色土 焼土粒・灰を微量含み、固くしまっている。

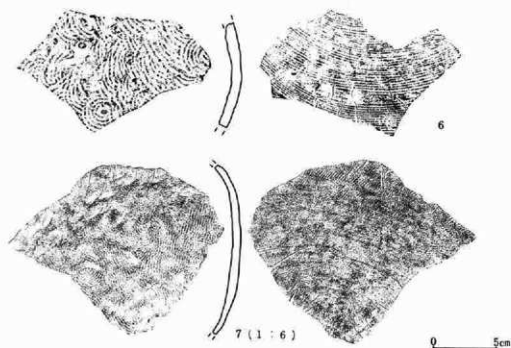
※ 7層と8層の間に灰層が2面検出されている。

8. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。  
 9. 暗褐色土 焼土ブロック・灰白色粘土粒を多量に含み、土色がやや明るい。  
 15. 暗褐色土 灰白色粘土ブロックを少量含む。14層に類似。  
 16. 暗褐色土 灰白色粘土主体で、焼土粒を少量含む。  
 17. 暗褐色土 CP・炭化物を微量含む。

第653図 J区第37号住居跡実測図(2)



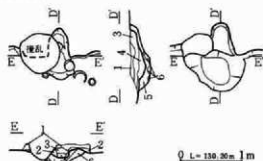
第654図 J区第37号住居跡出土遺物実測図(1)



第655図 J区第37号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第38号住居跡	位置	1~3-J-62~64グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	3.50m×3.25m	主軸方位	東-22度-北	残存深度	約18cm程
備考	壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴は東コーナー部に検出した。規模は径約35cm、深度約35cmで、円形を呈する。西コーナー部には円形土坑が重複しているため、張り出したようなプランになっている。						
カマド	位置・形状	北東壁南寄り			主軸方位	東-23度-北	
規模	全長 80cm	屋外長 45cm	屋内長 35cm	袖間幅 -cm	燃焼部幅 -cm	煙道幅 -cm	
備考	カマド左側は擾乱を受けている。右側袖部には第658図-4の土師器甕が逆位の状態で据えられている。左袖部に検出した障は袖構築材とは考えられない。灰・焼土等の検出は無い。						

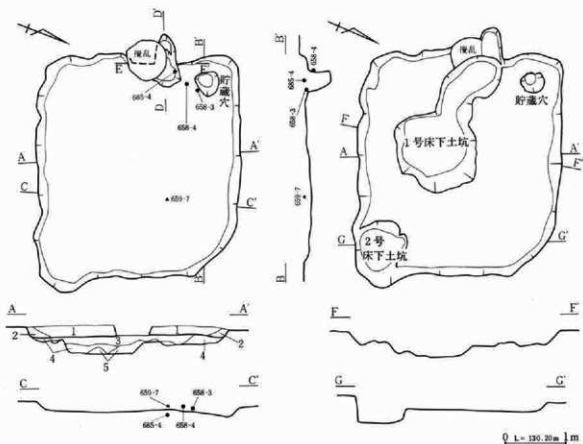
所見 当住居跡は当該期遺構との重複は皆無であるが、掘り込みが浅く残存状態が悪い。掘り方はほぼ全体に及んでいるが、顕著なものは中央部に見られる径約1.25m、深度約23cmの円形を呈する床下土坑である。遺物は、カマド袖材として検出した土師器甕(第658図-4)と、貯蔵穴の開口部際から正位の状態です出た土した須恵器高坏(第658図-3)が出土状態の明確に捉えられたものであり、当住居跡に伴うと考えて良いと思う。



第656図 J区第38号住居跡カマド実測図

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含み、粘性が弱い。
2. 暗褐色土 1層と比較して焼土粒は大量で含有量は多く、粘性がやや強い。
3. 褐色土 焼土粒は微量で、VI層土小ブロックを少量含み、粘性がやや強い。
4. 黒褐色土 焼土粒をほとんど含有せず、灰が主体で粘性は弱い。
5. 暗褐色土 VI・VII層土粒を比較的多量に含み、粘性が弱く柔らかい。
6. 褐色土 VII層土ブロック主体。

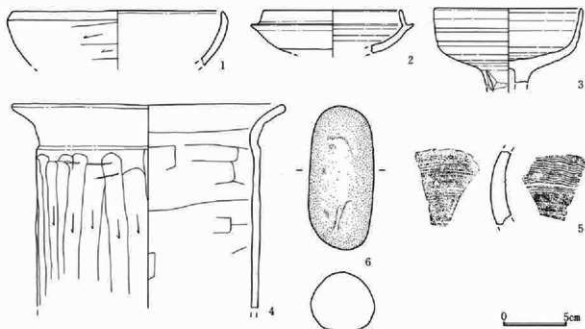
第4章 検出された遺構・遺物



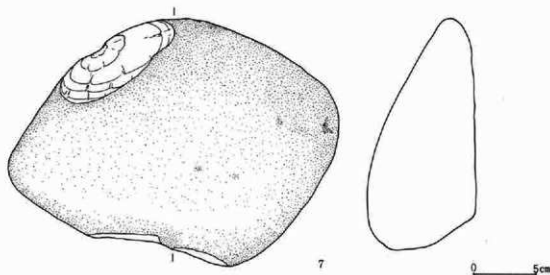
1. 暗褐色土 CPを多量に、炭化物を少量、VI層土ブロックを微量含む。
2. 暗褐色土 VI層土粒を多量に含み、1層と比較して土色がやや明るい。

3. 暗褐色土 黒色土とVI層土ブロックの混土。
4. 黄褐色土 VII層土粒・ブロック主体で構成される。
5. 暗褐色土 VI層土粒とVII層土ブロックを多量に含む。

第657図 J区第38号住居跡実測図



第658図 J区第38号住居跡出土遺物実測図(1)



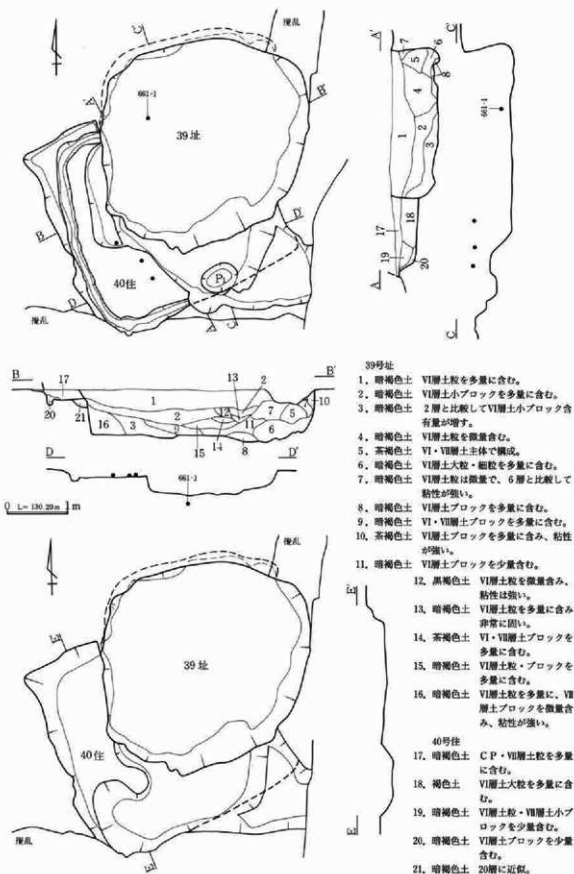
第659図 J区第38号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第39号址	位置	6～8-J-62～64グリッド内					
平面形態	円形?	規模	3.15m×	- m	主軸方位	-	残存深度	約72cm程
備考	南側で第40号住居跡と重複し、断面観察から40号住居→当址と考えられる。底面は平坦でピット等の付属施設は見られない。北側壁部にオーバーハングがみられる。							

遺構名称	J区第40号住居跡	位置	6・7-J-62～64グリッド内					
平面形態	隅丸長方形?	規模	- m×	3.18m	主軸方位	東-20度-北	残存深度	約16cm程
備考	北で第39号址と重複し、南は溝との重複するため全体像を捉えることはできなかったが、壁溝が見られ、また、形態も整っていることから住居跡であるのは確実である。							

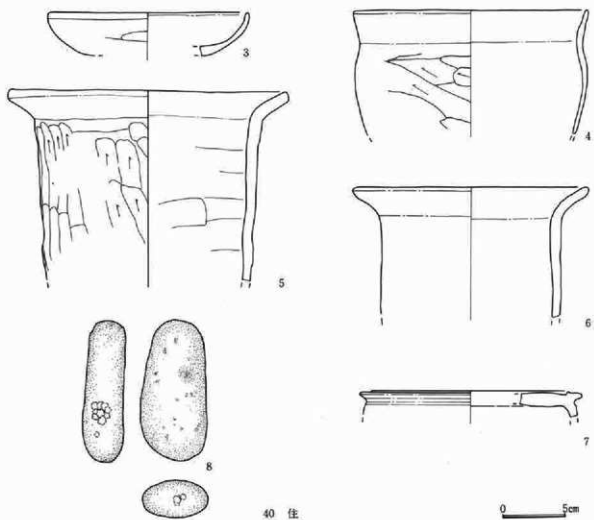
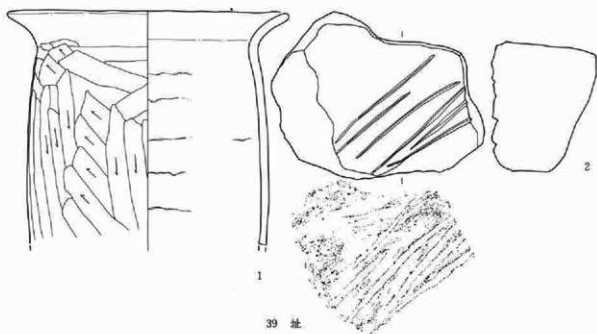
**所見** 第39号址は方形に近い円形を呈し、掘り込みはⅦ層土中に達している。当遺構が掘り込まれたのは、セクション面の観察から第40号住居跡が完全に埋没した時期以降であるのは明らかである。壁は表中記載のとおり北側でわずかにオーバーハングがみられ、南側から西側にかけてはほぼ垂直に立ち上がっている。また、セクション面の状態は西側から南側が比較的自然堆積に近い状態を示すのに対して、北側から東側にかけてはⅥ・Ⅶ層土ブロック主体の土層が複雑に堆積しておりその違いは明瞭である。この片側の複雑な堆積は、Ⅵ・Ⅶ層土主体の土層が遺構中央部中層にも及んで認められることから、単純に開口状態でのオーバーハングした壁の崩落とは考えられず、一見自然堆積にみられる部分も人為的に埋め戻されたものと考えられる。つまりオーバーハングの顕著にみられる部分では壁の破壊を伴ったことが想定される。底面から約15cm浮いた状態で出土した土師器甕(第661図-1)は潰れた状態で出土したものであるが、時間的に第40号住居跡に伴う可能性が強く、掘り出した土を埋め戻したことによって入ったものと思われる。底面はⅦ層面に平坦に構築され、貼床的なものは認められない。また、底面上に生活を感じさせるようなものは全く認められない。いわゆる性格不明の遺構である。

第40号住居跡は、第39号址との重複で%以上を失っているが、北東壁にカマドをもつ住居跡と考えられる。壁溝は全周すると思われるが、柱穴は平面規模からして無かった可能性が高い。遺物は残存した床面に接してわずかに出土した。



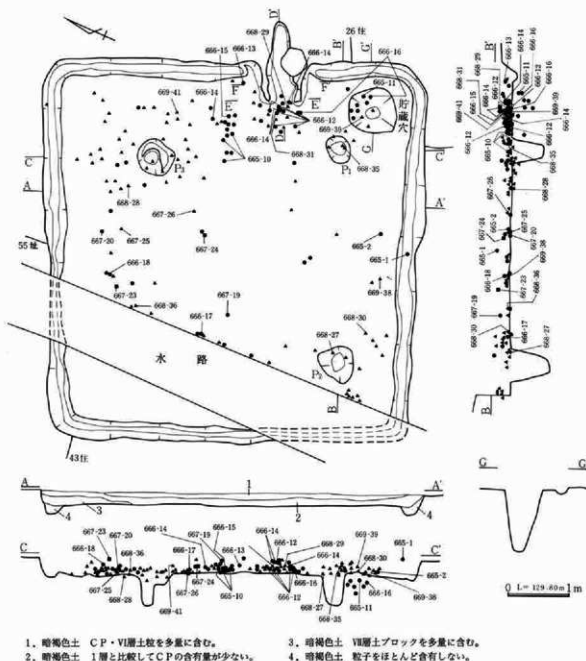
第660図 J区第39号址・第40号住居跡実測図





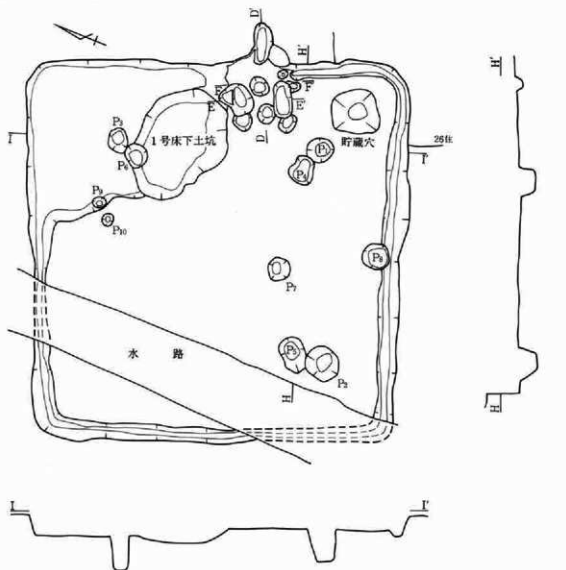
第661图 丁区第39号址·第40号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第41号住居跡			位置	0~3-J-57~60グリッド内			
平面形態	隅丸方形	規模	6.04m×6.07m	主軸方位	東-20度-北	残存深度	約20cm程	
備考	壁溝は全周し、上幅約30cm、下幅約15cm、深度約10cmである。柱穴はP <sub>1</sub> ~P <sub>3</sub> で、1ヵ所は水路の下で未検出。貯蔵穴は東コーナー部で、約75×69cm、深度約103cmの長方形プランである。							
カマド	位置・形状	北東壁南寄り			主軸方位	東-24度-北		
規模	全長128cm	屋外長	64cm	屋内長	64cm	袖間幅	75cm	
					燃焼部幅	34cm	煙道幅	22cm
備考	壁外に煙道を55cm程掘り込み、煙道部の側壁の延長上に袖を延ばしているため、燃焼部は狭い。袖は石を芯として暗褐色土で構築されている。掘り方では支脚の掘え方と考えられるピットを検出した。							



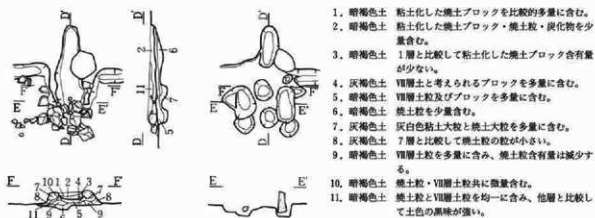
第662図 J区第41号住居跡実測図(1)

所見 当住居跡は、西側の一部が農道にかかるため2次の調査を実施した。また、農道東側の用水路は最後まで撤去することができず、この部分は未調査である。西側で第43・55号住居跡と重複している。当住居跡東側部分の調査時に農道際でカマドを1基検出し、これが位置関係から第55号住居跡のものと見られることから、当住居→55号住居である。柱穴は未調査部分のものを除いて $P_1 \sim P_9$ の3本を検出したが、掘り方の調査で先の柱穴の内側に接して $P_4 \sim P_6$ を検出した。したがって当住居跡にはA( $P_1 \sim P_3$ )とB( $P_4 \sim P_6$ )の柱穴配列があることになる。Aの規模は径約31~48cm、深度約49~61cm、柱穴間距離は約3.3mである。Bの規模は径約34~40cm、深度約19~50cm、柱穴間規模は東西約2.9m、南北約2.7mである。Bの配列は完全にAの配列の内側に入り、主軸方位も一致することから偶然の重複とは考えられず、建て替えの例として捉えることができる。また、カマドの調査で袖石及び支脚据え方に2時期の掘り方が認められるものが、前述のA、Bに対応するものと考えらる。したがって残存状態や確認状態からB→Aへの、おそらくは規模の拡大を伴う建て替えと見ることができる。遺物は拳大から人頭大の礫が主体で、床面からほとんど間層を挟まず、壁際に沿って多く出土している。



第663図 J区第41号住居跡実測図(2)

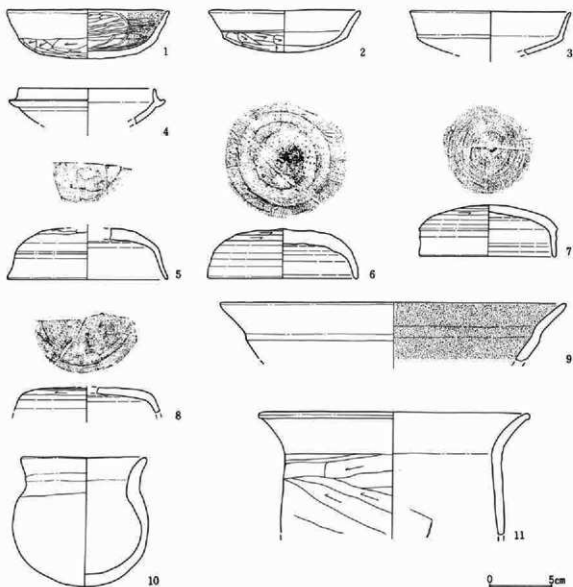
第4章 検出された遺構・遺物



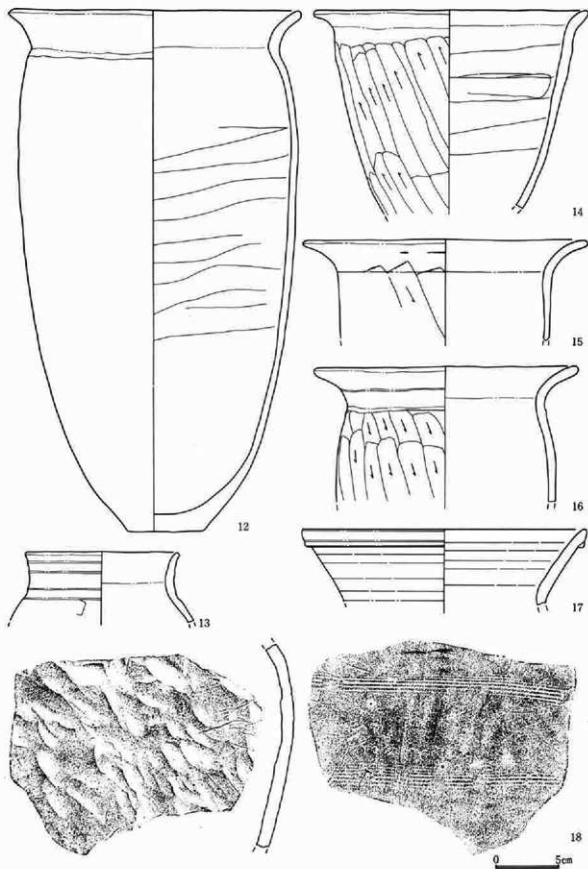
1. 暗褐色土 粘土化した焼土ブロックを比較的多量に含む。
2. 暗褐色土 粘土化した焼土ブロック・焼土粒・炭化物を少量含む。
3. 暗褐色土 1層と比較して粘土化した焼土ブロック含有量が少ない。
4. 灰褐色土 VII層土と考えられるブロックを多量に含む。
5. 暗褐色土 VII層土粒及びびブロックを多量に含む。
6. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
7. 灰褐色土 灰白色粘土大粒と焼土大粒を多量に含む。
8. 灰褐色土 7層と比較して焼土粒の粒が小さい。
9. 暗褐色土 VII層土粒を多量に含み、焼土粒含有量は減少する。
10. 暗褐色土 焼土粒・VII層土粒共に微量含む。
11. 暗褐色土 焼土粒とVII層土粒を均一に含み、他層と比較して土色の黒味が強い。

第664図 J区第41号住居跡カマド実測図

0 L=100.00m 1m

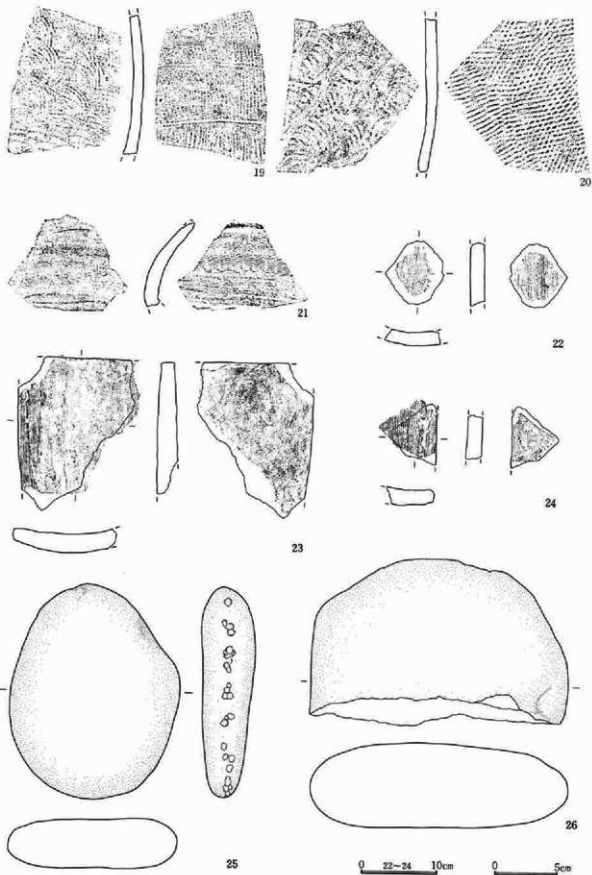


第665図 J区第41号住居跡出土遺物実測図(1)

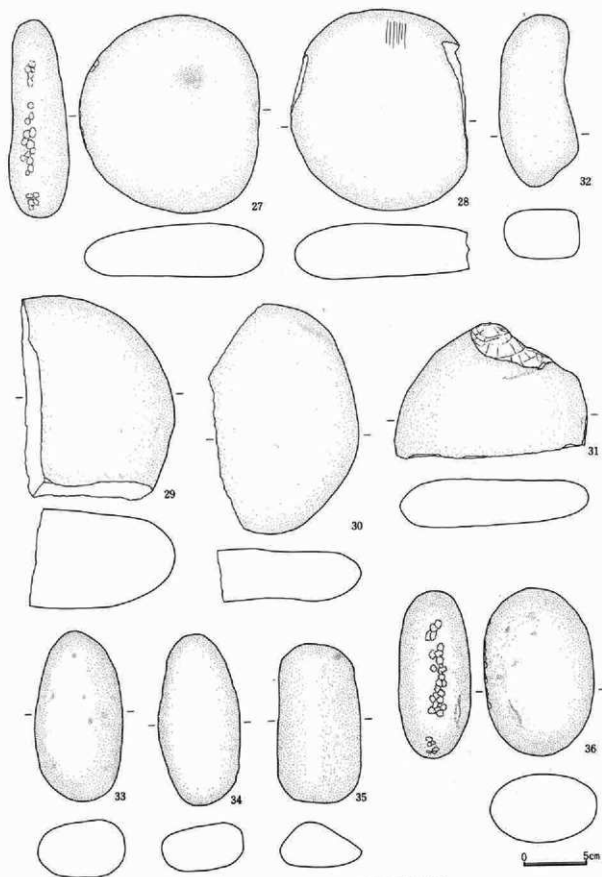


第666図 J区第41号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

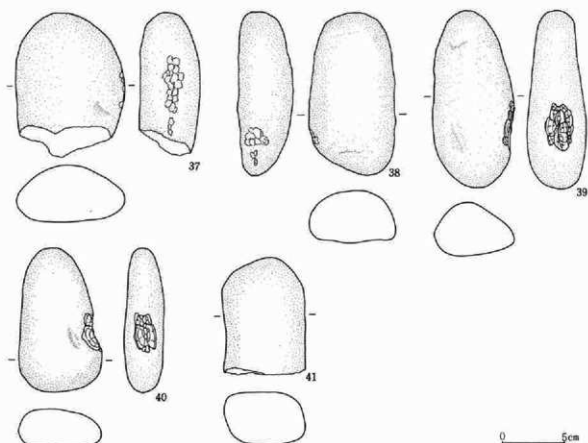


第667図 J区第41号住居跡出土遺物実測図(3)



第668图 丁区第41号住居跡出土遺物実測图(4)

第4章 検出された遺構・遺物



第669図 J区第41号住居跡出土遺物実測図(5)

遺構名称	J区第43号住居跡	位置	0～2-J-60～62グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	- m×3.61m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約28cm程

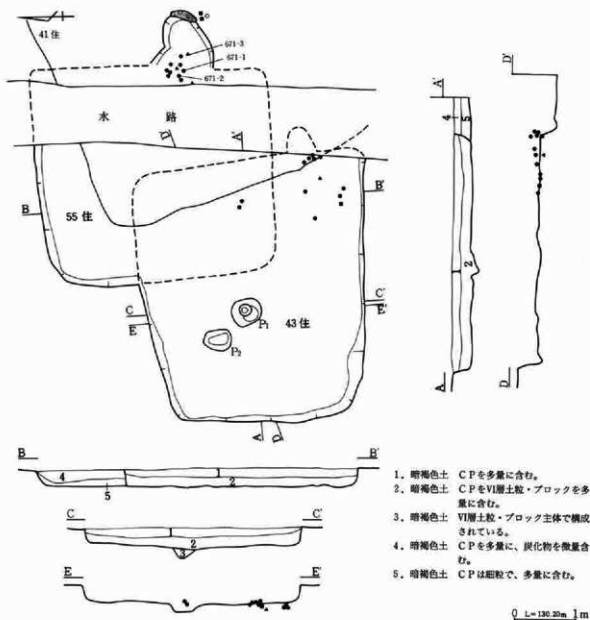
遺構名称	J区第55号住居跡	位置	1～3-J-59～61グリッド内				
平面形態	隅丸長方形	規模	- m× - m	主軸方位	東-3度-北	残存深度	約25cm程
備考	北西コーナーを含む北壁の一部を検出した。カマドは第41号住居跡の調査で検出したもので、同時に検出したものではない。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。						

所見 第43・55号住居跡の2軒は重複して農道部分の調査で検出したもので、東側で第41号住居跡とも重複している。セクションの観察から55号住居→43号住居と考えられ、前述の第41・55号住居跡の関係を合わせると、41号住居→55号住居→43号住居という関係が捉えられる。

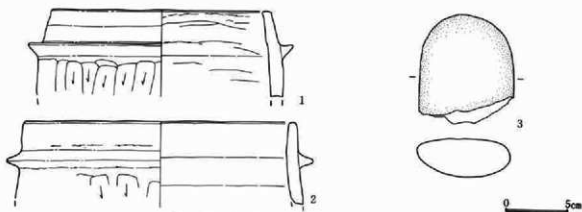
第43号住居跡は東西に長軸を有する隅丸長方形プランを呈すると考えられる。カマドは用水路の未調査部分にわずかに痕跡を検出しただけで、実質的な調査はできなかった。しかし観察した限りでは袖に自然障を使用した比較的貧弱で残存状態の不良なカマドであった可能性が高い。

第55号住居跡のカマドは第41号住居跡の調査に伴って用水路東側で検出調査したもので、西側部分とのつながりを完全に捉えられたわけではない。しかし平面プランとカマド位置関係から当該住居に伴うものであることは明らかである。こちらも第43号住居跡のカマド同様、焼土等も明瞭に残存せず貧弱なものである。以上のカマドの残存は上記新旧関係を裏付けている。





第670図 J区第43・55号住居跡実測図

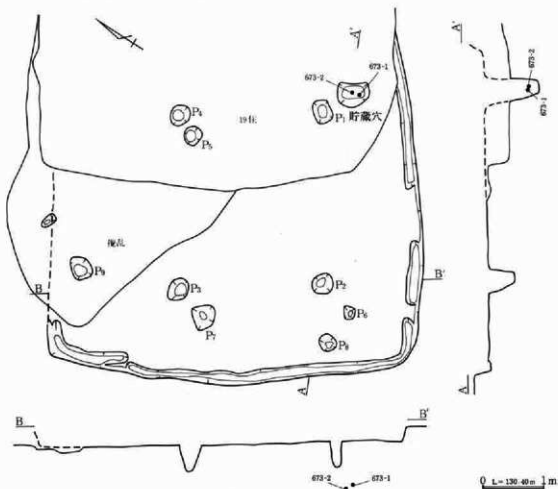


第671図 J区第55号住居跡出土遺物実測図

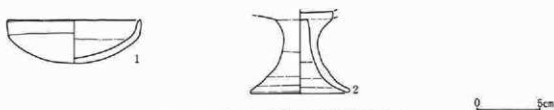
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	J区第44号住居跡		位置	3～6-J-71～75グリッド内			
平面形態	正方形	規模	— m×5.91m	主軸方位	東-31度-北	残存深度	約22cm程
備考	東側で第19号住居跡と重複し、カマドをうしなっている。壁溝は全周すると考えられ、貯蔵穴は東コーナー部で長方形を呈し、規模は約50×35cm、深度約84cmである。柱穴はP <sub>1</sub> ～P <sub>4</sub> の4本である。						

所見 当住居跡は第19号住居跡と重複し、遺構の残存状態から当住居→19号住居の関係である。床面精査段階に検出した柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>（A配列）の4本であるが、掘り方段階で検出したP<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>（B配列）も規模・配置から柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>に対応する柱穴は未検出であるが、第19号住居跡の床下土坑との重複部分に位置すると思われる。この2組の柱穴配列はわずかに南北にずれるが、主軸方位がほぼ一致し、壁・床面に重複の痕跡が認められないこと等から、建て替え例と考えられる。Aの柱穴規模は、径約28～33cm、深度約38～46cm、柱穴間距離はP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>間が約2.3m、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間が約2.7mである。Bの柱穴規模は、径約19～36cm、深度約32～35cm、柱穴間距離はP<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>間が約2.2m、P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>間が約2.7mであり、A・Bとも同規模である。この柱穴位置の変更は、柱穴と壁との距離関係から、南東及び南西壁の一部はB配列におけるプランをそのまま使用して、北西壁方向に約50cmの拡大を伴ったことが想定できる。また、貯蔵穴は他に同規模のものは見られず、掘り直しはされなかったものと考えられる。遺物は床面から礫が出土した他、貯蔵穴内から第673図-2の須恵器高坏が出土した。



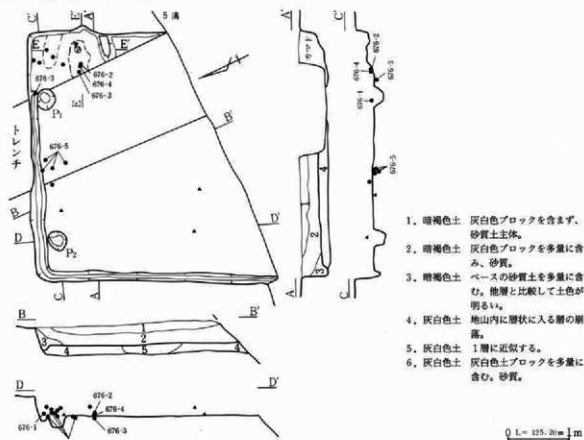
第672図 J区第44号住居跡実測図



第673図 J区第44号住居跡出土遺物実測図

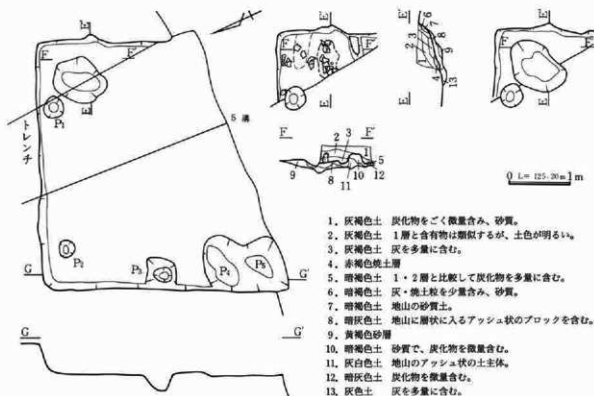
遺構名称	J区第47号住居跡	位置	35・36-J-62~64グリッド内	河川敷			
平面形態	方形	規模	3.90m × - m	主軸方位	東-23度-南	残存深度	約31cm程
備考	南側は第4号溝状遺構との重複によって失っている。壁溝は全周するものと考えられ、柱穴は検出されていない。貯蔵穴は未検出である。北壁に接して検出したビットP <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> は柱穴であろうか？						
カマド	位置・形状	東壁北寄りに偏在			主軸方位	東-23度-南	
規模	全長 65cm	屋外長 10cm	屋内長 55cm	袖間幅 -cm	燃焼部幅 -cm	煙道幅 -cm	
備考	残存深度が浅いため、煙道の延び等は不明である。袖は右袖だけ残存し、砂質な暗褐色土で構築され、燃焼部に当たる位置に灰面及び中央部に支脚と思われる礎を検出した。						

所見 当住居跡は牛池川河川敷に張り出した低台地中央部に位置している。壁・床面共にこの台地のベースとなっている砂質土であり、覆土は暗褐色土で確認は比較的容易であった。遺物はカマド部分から北壁に沿って破片主体で出土した。

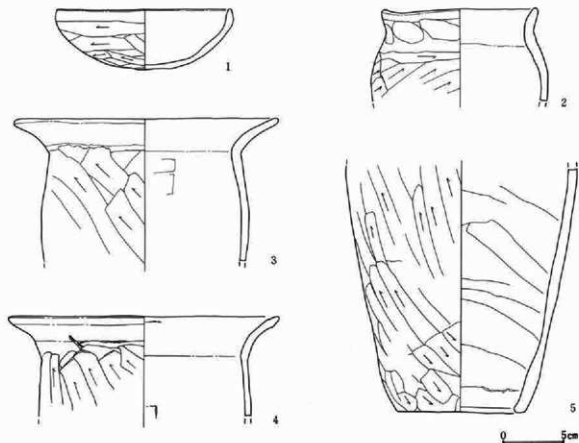


第674図 J区第47号住居跡実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



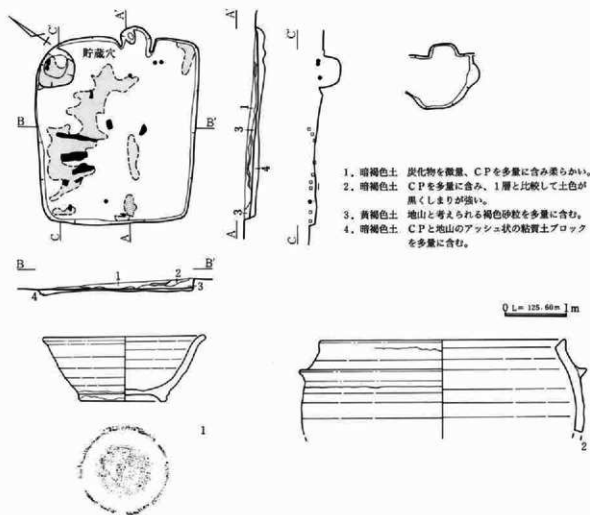
第675図 J区第47号住居跡実測図(2)



第676図 J区第47号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	J区第48号住居跡	位置	29・30-J-54~56グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	2.95m×2.57m	主軸方位	東-35度-北
				残存深度	約14cm程
備考	壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は北コーナー一部で円形を呈し、規模は径約55cm、深度約32cmである。住居ほぼ全面に炭化物が層を成し、最長65cmにおよぶ炭化材が含まれている。				
カマド	位置・形状	北東壁中央南寄り		主軸方位	東-33度-北
規模	全長 38cm	屋外長 17cm	屋内長 21cm	袖間幅 57cm	燃燒部幅 35cm
				煙道幅	1cm
備考	壁外に半円状に掘り込み、屋内にわずかに袖を延ばしている。したがって燃燒部は壁外の部分と考えられる。燃燒部にはわずかに焼土・炭化物が検出された。袖石・支脚等は検出されていない。				

所見 炭化物層は約5cmの層厚を持ち、多量の焼土を含んでいる。また、床面と4~5cmの間層を挟み、住居跡中央部では水平堆積するが、壁際では上がっており、住居廃棄段階と炭化物層の堆積段階には若干の時間差があることがわかる。この炭化物層中には炭化材が検出されているが、出土状態には規則性が窺え、住居外から廃棄されたものとは考えにくい。したがって住居廃棄後ある程度時間が経過した段階で、上層が焼け落ちたのではないかと思われる。遺物はカマド付近からわずかに出土した。



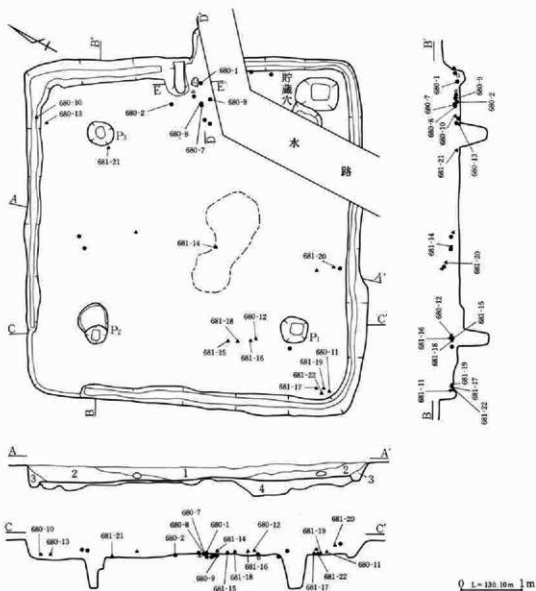
1. 暗褐色土 炭化物を微量、CPを多量に含み柔らかい。
2. 暗褐色土 CPを多量に含み、1層と比較して土色が黒くしまりが強い。
3. 黄褐色土 地山と考えられる褐色砂粒を多量に含む。
4. 暗褐色土 CPと地山のアッシュ状の粘質土ブロックを多量に含む。

第677図 J区第48号住居跡・出土遺物実測図

0 5cm

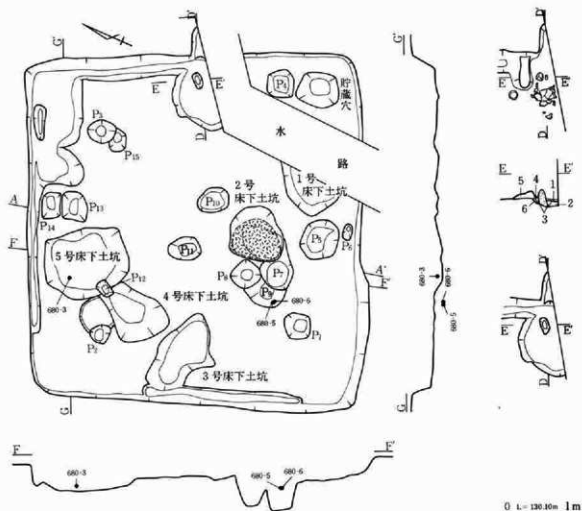
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	J区第52号住居跡		位置	3~7-J-59~62グリッド内			
平面形態	正方形	規模	5.67m×5.34m	主軸方位	東-28度-北	残存深度	約26cm程
備考	壁溝は西コーナー部を除き全周検出し、柱穴は水路にかかる1本を除いてP <sub>1</sub> ~P <sub>3</sub> の3本が確認された。貯蔵穴は東コーナー部で約55×57cmの方形を呈し、深度は約69cmである。						
カマド	位置・形状	北東壁ほぼ中央			主軸方位	東-29度-北	
規模	全長 -cm	屋外長 -cm	屋内長 -cm	袖間幅 -cm	燃烧部幅 -cm	煙道幅 -cm	
備考	南側は水路にかかり未調査である。壁から煙道を掘り込み、屋内に袖を延ばして構築されており、燃烧部のかなり左寄りに礎を支脚として立てていた。						



1. 暗褐色土 CP・炭化物・VI層土ブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 1層と比較してCP含有量はやや少なく、VI層土ブロックが増加する。
3. 暗褐色土 CPをほとんど含まず、VI層土ブロックを多量に含む。
4. 暗褐色土 焼土粒・灰・VII層土ブロックを少量含む。

第678図 J区第52号住居跡実測図(1)



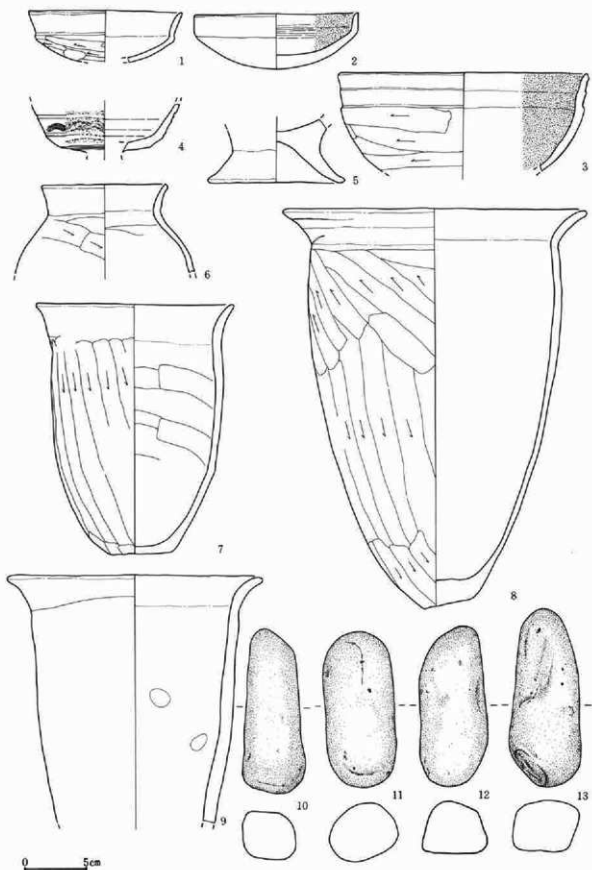
- |                            |                         |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 暗褐色土 灰・焼土粒を多量に含み、粘性が強い。 | 4. 暗褐色土 焼土粒はなく、灰を多量に含む。 |
| 2. 暗褐色土 焼土粒を微量、VI層土粒を少量含む。 | 5. 暗褐色土 C P・焼土粒を少量含む。   |
| 3. 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。         | 6. 暗褐色土 焼土粒を微量含む。       |

第679図 J区第52号住居跡実測図(2)

所見 床面精査時に検出した柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の3本である。規模は径約36～42cm、深度約42～46cmで、柱穴間距離は約3.2mである。掘り方段階でもこれらの柱穴に対応するピットは検出されておらず、柱穴からの建て替えは想定できない。しかし貯蔵穴のすぐ北側に約41×41cm、深度約69cmの貯蔵穴と相似形の方形ピット(P<sub>1</sub>)が検出され、形態・規模及び位置的にみて当住居跡に伴う前段階の貯蔵穴と考えられることから、住居一部の作り替えが行われたものと考えられる。その他床面精査時住居跡中央やや南寄りで検出された灰面下から、不整形土坑1基(2号床下土坑)及び円形ピットが2基(P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>)並んで検出された。その中で2号床下土坑には灰白色粘土が意図的に貼られたと思われる状態で層状に検出された。同様な例は、既報告のF区第45号住居跡、H区第71・126・145号住居跡等に見られ、検出住居数からすればごくわずかな軒数であるが、時期を越えて見られるようである。また、この灰白色粘土層は土坑底面に貼られた例や、中層から上層にかけての例があり、すべてが同じ目的でなされたものであるか疑問がある。また、北西壁に接して2基並んで検出したP<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>は同規模・相似形であり、入口等の施設に係わるものと思われる。

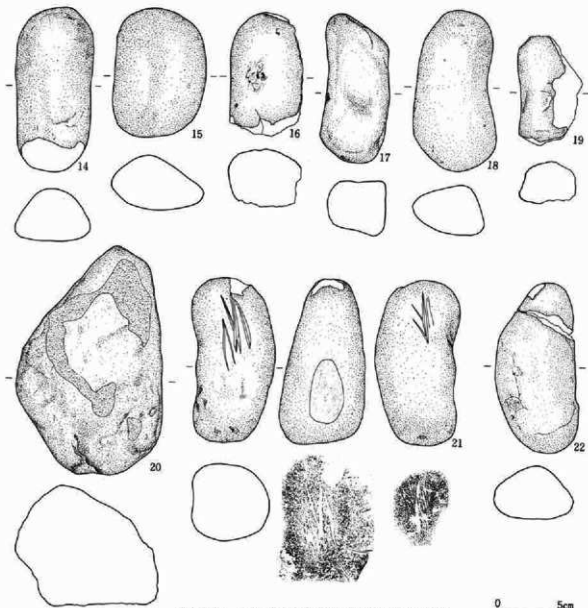
床面出土の遺物は中央部分が薄く、周辺に比較的多く見られる傾向がある。

第4章 検出された遺構・遺物



第680図 J区第52号住居跡出土遺物実測図(1)



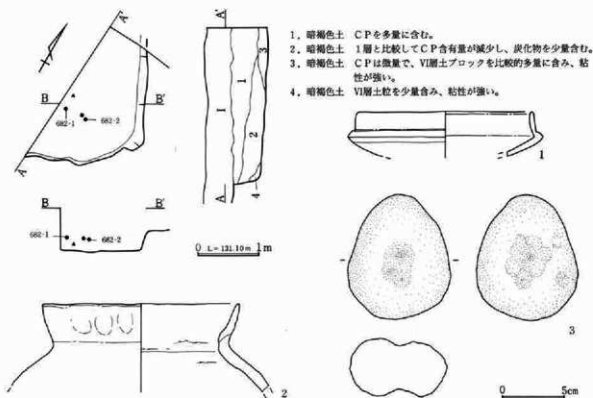


第681図 J区第52号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	J区第53号住居跡	位置	0~2-J-84・85グリッド内				
平面形態	隅丸方形?	規模	- m × - m	主軸方位	西-28度-南	残存深度	約32cm程

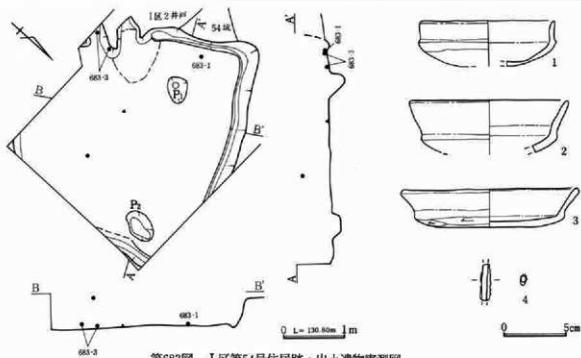
所見 当住居跡は調査区の南西際で検出したもので、大半は調査区外に位置している。北側で土坑状の掘り込みと重複するため一部形態が曖昧であるが、この重複部分に北コーナー部が位置するものと考えられる。検出した南東壁と北東壁はほぼ直角を構成し、壁は垂直に立ち上がり面も平坦であることから本来は隅丸方形に近い整形をしていたことは容易に想像できる。また、セクション面の状態はいわゆる住居跡の埋没状態と同じであり、このことも当遺構を住居跡と判断した要因である。以上のことから当住居跡は南西壁にカマドを有する、隅丸方形プランの住居跡と考えられる。検出部分では壁溝・柱穴等は全く認められないが、平面規模から柱穴は未調査部分にも無い可能性が高い。遺物は床面からの出土は見られず、若干浮いた状態でわずかに出土した。

第4章 検出された遺構・遺物



第682図 J区第53号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	J区第54号住居跡	位置	0・1-J-78~80グリッド内		
平面形態	正方形?	規模	- m × - m	主軸方位	西-31度-南
				残存深度	約38cm程
備考	当住居跡は奥道部分の調査で確認したもので、確認面の違いから両側部分では検出できなかった。カマド近くで検出したピットは柱穴ではなく貯蔵穴と考えられ、径約30cm、深度約26cmの円形である。				

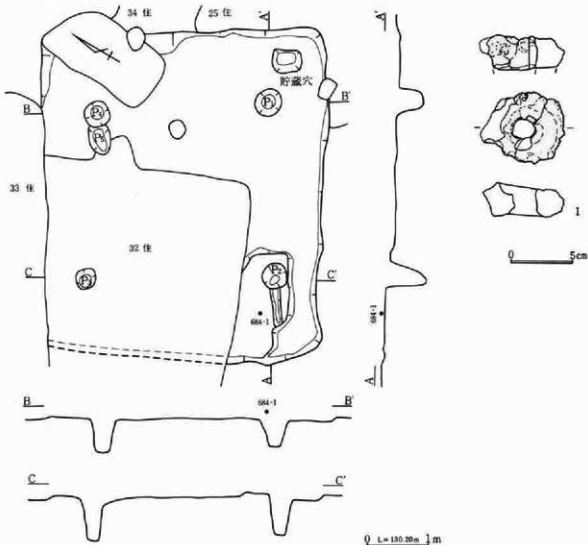


第683図 J区第54号住居跡・出土遺物実測図

所見 当住居跡は南側でI区第2号井戸跡と重複しており、セクション面の観察から当住居→I区2号井戸跡という関係と考えられる。カマドは南西壁の中央部と考えられ、煙道部分等の残存が悪く全体像は分かりにくい。袖は両側とも屋内に延びていたものと思われるが、構築材等は見られない。燃焼部から焚口部には比較的に広い範囲で灰面が確認されている。

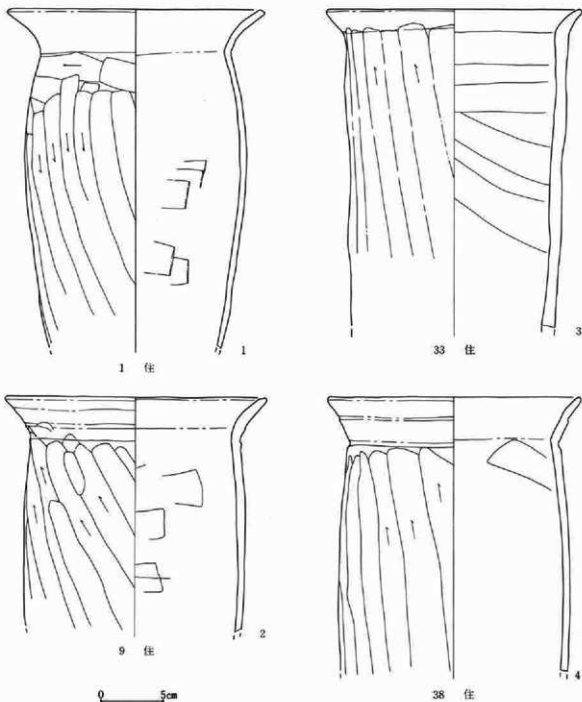
遺構名称	J区第56号住居跡	位置	7~10-J-71~73グリッド内		
平面形態	隅丸長方形	規模	5.25m × - m	主軸方位	東-33度-北
				残存深度	約6cm程
備考	当住居跡は第25・32~34号住居跡等の掘り方時に検出したもので、カマドは北東壁と考えられるが、痕跡も見られない。柱穴はP <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4本で、貯蔵穴は東コーナー部で約46×35cm、深度約43cmである。				

所見 当住居跡は前述の住居跡との重複によって、極めて残存状態が悪い。わずかにP<sub>2</sub>付近に床面と思われる面が残り、この部分から第684図-1の竈の羽口が出土している。新旧関係は検出状態から当住居→他の住居と考えられる。柱穴規模は径約32~40cm、深度約43~63cmで、円形を呈し、柱穴間距離はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間が約2.7~2.8m、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間が3.0mである。また、柱穴に変更された痕跡は認められず、柱穴位置の変更を伴うような建て替えは考えられない。



第684図 J区第56号住居跡・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物



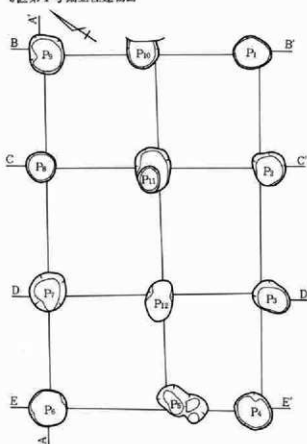
第685図 J区住居跡出土遺物追補

J区住居跡遺物追補

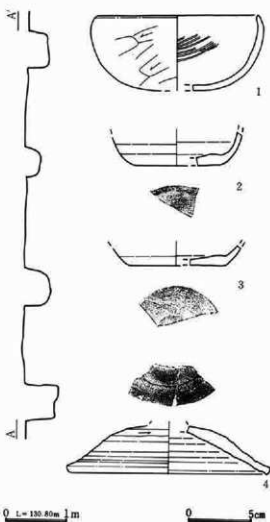
第685図1～4は、今回報告したJ区住居跡の中でレイアウトに漏れた土師器甕であり、共通して胴部下半を欠いた状態で検出されている。1は第1号住居跡のカマド内から、2は第9号住居跡の床直で、3は第33号住居跡カマド右袖の構築材として使用されていたもの、4は第38号住居跡のカマド内からそれぞれ出土したものである。1の土師器甕は胴部に横位、下半縦位篋削りを特徴とするもので、2～4の全面縦位篋削りを施すものとは異質である。

## 掘立柱建物跡

J区第1号掘立柱建物跡



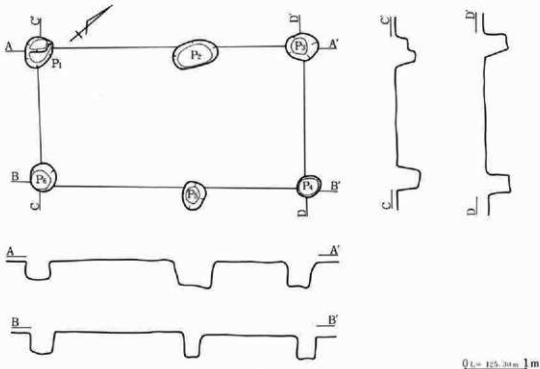
第686図 J区第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



J区第1号掘立柱建物跡 (第686図)

12~15-J-82~86グリッド内に位置し、主軸を長辺方向でとると東-32°-北である。確認はVI層土で行ったが、各柱穴掘り込みの残存は不良であり掘り込みの曖昧な部分もみられた。規模は各柱穴を通る長方形を想定して計測すると、北西辺約5.6m、北東辺約3.8mである。柱穴は基本的に円形プランで、規模は径約46~58cm、深度約10~53cmで、径がほぼ揃っているのに対して深度の幅が大きい。柱穴間距離は北西辺で約1.9m、北東辺で約1.8mである。したがって2間×3間の総柱の建物跡か、P<sub>6</sub>~P<sub>9</sub>の柱穴深度に比較してP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の柱穴深度が極端に浅いことから、南東に1面南を

J区第2号掘立柱建物跡



第687図 J区第2号掘立柱建物跡実測図

有する1間×3間の建物跡が想定される。当調査区では後述する河川敷で検出した第2号掘立柱建物跡以外に例がないが、当調査区の南のI区には30棟を越える掘立柱建物跡群が展開している。これらの掘立柱建物跡も単一時期のものとは考えられないが、当掘立柱建物跡はこの内の主体的建物跡と軸方向に近い関係にある。しかし、I区掘立柱建物跡群が比較的密集するのに対して、当掘立柱建物跡との間には30m程度の掘立柱建物跡の全く検出されていない空間があり、直接に関係する建物であるかどうかは不明である。

当掘立柱建物跡の時期は、上記I区掘立柱建物跡群との関係も考慮しなければならないが、堅穴住居跡との重複もみられないため直接に当掘立柱建物跡の時期を示すものはない。しかしP<sub>11</sub>の充填土から出土した土器の内第686図-1を除いた他の資料は8世紀の前半代と考えられるものであり、当掘立柱建物跡の時期に近い可能性が高い。

J区第2号掘立柱建物跡 (第687図)

当掘立柱建物跡は、牛池川河川敷に張り出した低台地上に検出したもので、遺構確認は張り出し部表土下の灰色砂質土層上面であり、柱穴の充填土は粘質土ブロックをわずかに含む砂質土主体である。検出位置は36-39-J-65-67グリッド内である。柱穴は6本検出されており、1間×2間の建物であったものと考えられる。規模は長辺約4.2m、短辺約2.0~2.2m、柱穴径約32~42cm、深度約31~41cmである。長辺を主軸として計画すると、北-40°-東であり、遺構の主体的に立地する台地上には当掘立柱建物跡と同様な主軸方位を有するものはみられない。当遺構の時期については、重複する遺構が無く、また、柱穴内からの遺物出土もみられないため不明であるが、当遺構の立地する低台地上には、他に堅穴住居跡が2軒検出されていることから、どちらかの住居跡と有機的関係を有するものと思われる。

## 土 坑

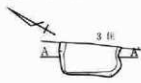
J区第2号土坑



平面形態 円形  
位置 19・20-J-78  
規模 0.95×0.97m

L=130.50m

J区第4号土坑



平面形態 長方形  
位置 18・19-J-82  
規模 0.96×(0.49)m  
主軸方位 北-27°-西

L=130.70m

J区第5号土坑



平面形態 楕円形  
位置 26・27-J-79・80  
規模 1.95×1.75m  
主軸方位 東-27°-西

L=130.50m

1 暗褐色土 VI層土粒をわずかに含み  
粘性が強くしまりがある。  
2 黒褐色土 VI層土粒を均一に含み  
しまりはあまりない。  
3 暗褐色土 VII層土ブロックを多量に  
含み、しまりはない。  
4 暗褐色土 3層に近似するが、やや  
黒味が強い。

J区第8・9号土坑



J区第8号土坑

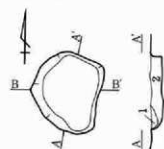
平面形態 楕円形？  
位置 19-J-67・68  
規模 1.10×(0.90)m  
主軸方位 北-0°-東

J区第9号土坑

平面形態 楕円形  
位置 18・19-J-67  
規模 1.35×(1.03)m  
主軸方位 北-3°-東

L=130.20m

J区第10号土坑



平面形態 楕円形  
位置 17-J-63・64  
規模 1.38×1.12m  
主軸方位 北-0°-東

- 1 黒褐色土 VI層土ブロックを少量含み、  
微粒で粘性としまりがある。
- 2 暗褐色土 VI層土ブロックを多量に含み  
粘性はあるが、しまりはない。

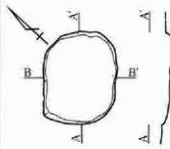


L=130.10m



0 5cm

J区第11号土坑



平面形態 隅丸長方形  
位置 14・15-J-65  
規模 1.50×1.20m  
主軸方位 東-38°-北

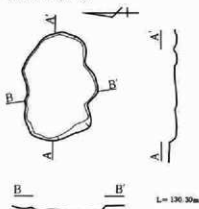
L=130.30m

0 1m

第688図 J区土坑・出土遺物実測図(1)

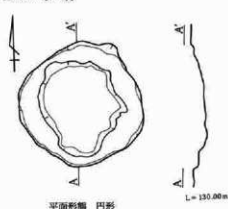
第4章 検出された遺構・遺物

J区第12号土坑



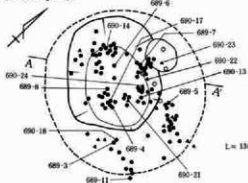
平面形態 横円形  
位置 14-J-65・66  
規模 1.75×1.13m  
主軸方位 東-0°-北

J区第13号土坑



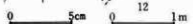
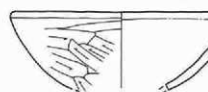
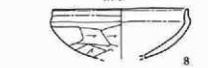
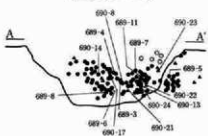
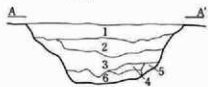
平面形態 円形  
位置 10・11-J-60・61  
規模 1.95×1.95m

J区第14号土坑



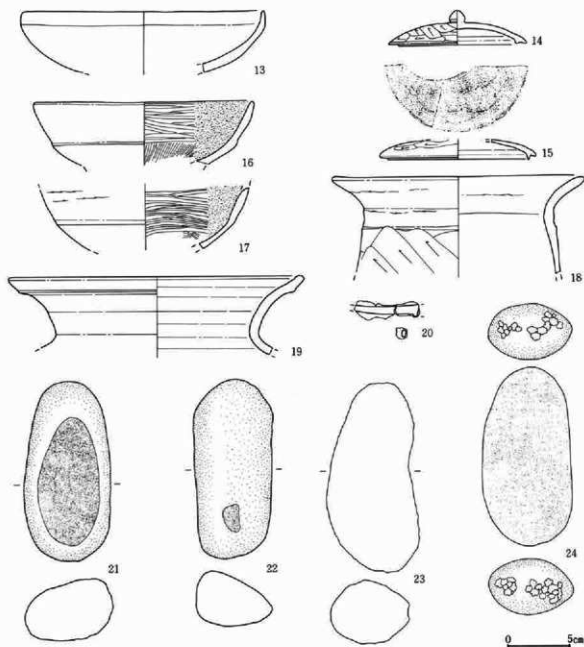
平面形態 横円形  
位置 17~19-J-78・79  
規模 1.82×1.55m  
主軸方位 西-25°-北

- 1 暗褐色土 微量の焼土粒と炭化物を含み、しまりが無い。
- 2 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、炭化物が多くやや粘性がありしまっている。
- 3 暗褐色土 2層に比して炭化物が多い。
- 4 暗褐色土 炭化物をやや多く含み、粘性はあるが柔らかい。
- 5 暗褐色土 浅層Bを均一に含み、しまりが無い。
- 6 暗褐色土 焼土粒を少量、VI層土ブロックを含みしまりが有る。



第689図 J区土坑・出土遺物実測図(2)





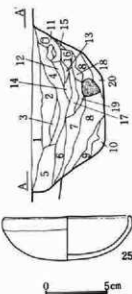
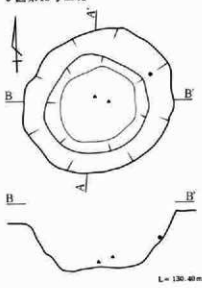
第690図 J区第14号土坑出土遺物実測図

## J区第14号土坑 (第689図)

当土坑は17・18-J-78・79グリッド内に位置している。遺構確認段階ではプランは検出されず、第5号住居跡の調査段階で、遺物の出土状態及び住居跡セクションから土坑の存在に気付いた。したがって第5号住居跡のセクションから大まかな平面形と規模を推定すると、第5号住居跡の床面下まで達した部分では、約1.7×1.5m、残存深度約45cmの楕円形であるが、本来は径約2.5m、残存深度は約92cmの円形を呈するものと考えられる。第5号住居跡との新旧関係は、検出状態等から5号住居→当土坑であるのは明らかである。遺物出土は馬骨を含み、下層に集中する傾向があり、第5号住居跡の遺物出土状態に近似している。また、出土遺物も第5号住居跡のもの共通する内容であることから、直接の接合関係はなかったものの本来第5号住居跡に属するものと考えられ、掘り出した土を短時間のうちに埋め戻した可能性が高い。

第4章 検出された遺構・遺物

J区第15号土坑



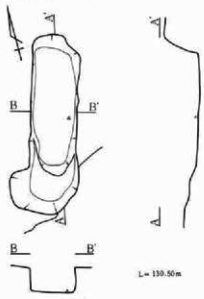
平面形態 円形

位置 27・28-J-77・78

規模 2.38×2.25m

- |         |                                      |         |                                 |
|---------|--------------------------------------|---------|---------------------------------|
| 1 暗褐色土  | VI層土粗粒・VII層土粗粒を含み、しまりはあるが粘性はほとんどない。  | 17 黒褐色土 | VII層土粒・ブロックは16層に比して少なく、粘性がない。   |
| 2 暗褐色土  | 1層に比してVI・VII層土粒の含有量が少なく、炭化物を少量含む。    | 18 暗褐色土 | VII層土粗粒及びVI層土粗粒を多量に含み、粘性がない。    |
| 3 暗褐色土  | 1層に比してVI層土粗粒を多く含む。                   | 19 暗褐色土 | 17層に比してVII層土粒・ブロックの量が少なく、粘性がある。 |
| 4 暗褐色土  | 2層に比してVI層土粗粒は少なく、VI層土粗粒を多く含む。        | 20 暗褐色土 | 8層に比してVI層土粒を多く含み、粘性は中や弱い。       |
| 5 暗褐色土  | VII層土粒は少量でVI層土粗粒を含み、4層に比して柔らかい。      |         |                                 |
| 6 暗褐色土  | VI・VII層土粗粒を多く含むが、2層に比して粗粒は少ない。       |         |                                 |
| 7 暗褐色土  | VI層土粗粒及び赤色粗粒を少量含み、粘性が比較的強い。          |         |                                 |
| 8 暗褐色土  | 7層に比してVI層土粒子が多く、粘性もやや強い。             |         |                                 |
| 9 暗褐色土  | VI層土粗粒を多く含む。                         |         |                                 |
| 10 暗褐色土 | VI層土粒は7層より少なく、粘性は強い。                 |         |                                 |
| 11 暗褐色土 | VII層土ブロックを微量とVI層土粗粒を含み、しまりはあるが粘性はない。 |         |                                 |
| 12 暗褐色土 | 11層に比してVI層土粒が多く、ブロックも含む。             |         |                                 |
| 13 黒褐色土 | VII層土粒を均一に含み、VI層土粒は含まない。             |         |                                 |
| 14 暗褐色土 | VII層土ブロック及び粒子を多量に含む。                 |         |                                 |
| 15 黒褐色土 | VI層土粒を微量、VII層土粒を含み粘性はない。             |         |                                 |
| 16 暗褐色土 | VII層土粗粒及びブロックを多量に含み、しまりはあるが粘性はない。    |         |                                 |

J区第16号土坑



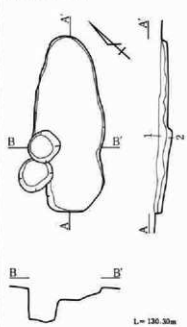
平面形態 長方形

位置 28・29-J-78・79

規模 2.85×0.73m

主軸方位 北-21°-東

J区第18号土坑



平面形態 楕円形

位置 15・16-J-65-67

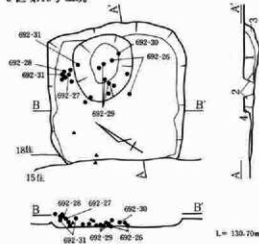
規模 2.82×1.13m

主軸方位 東-40°-北

- |        |                  |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | C Pを少量含む。        |
| 2 暗褐色土 | C PとVI層土ブロックを含む。 |

第691図 J区土坑・出土遺物実測図(3)

J区第19号土坑



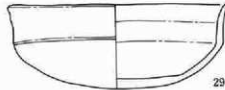
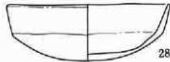
平面形態 隅丸方形

位置 16・17-J-83~85

規模 (2.16)×2.16m

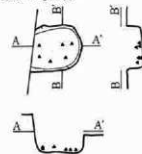
主軸方位 東-36°-北

- 1 暗褐色土 焼土粒を少量含む、粘性しまり共になし。
- 2 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、1層に比してややしまりが強い。
- 3 暗褐色土 焼土粒をほとんど含まず、しまりが弱い。
- 4 暗褐色土 焼土を含まない。



0 5cm

J区第20号土坑



平面形態 隅丸方形?

位置 0-J-59

規模 (0.77)×0.72m

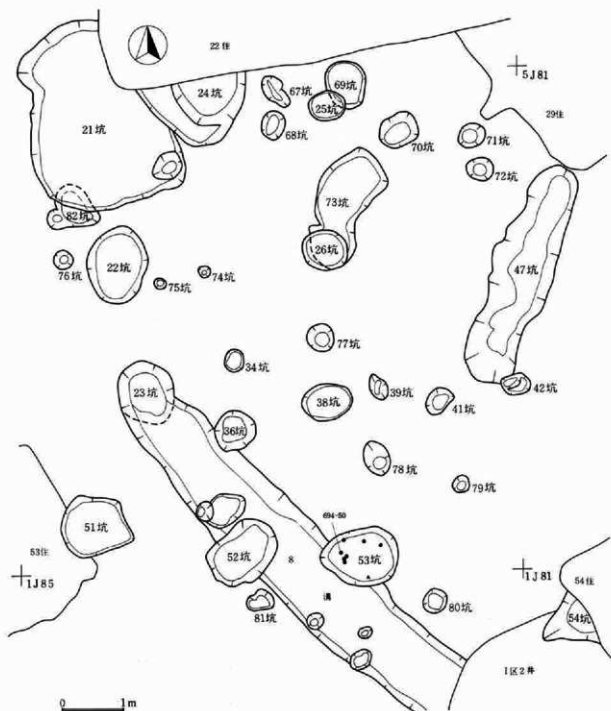
主軸方位 東-12°-北

0 122.80m 1m

第692図 J区土坑・出土遺物実測図(4)

土坑番号	位置	平面形態	主軸方位	長軸×短軸×深度(m)	備考
J区第21号土坑	3~5-J-83・84	隅丸長方形	北-14°-西	3.00×2.25×0.17	22号坑、24・82号土坑と重複。
J区第22号土坑	3-J-83・84	楕円形	北-4°-東	1.23×0.95×0.11	
J区第23号土坑	2-J-83・84	楕円形	北-4°-西	1.16×0.89×0.29	8号溝と重複。
J区第24号土坑	4-J-83	楕円形?	東-10°-西	(1.15)×(1.17)×0.45	22号坑、21号土坑と重複。
J区第25号土坑	4-J-82	楕円形	東-0°-北	0.55×0.45×0.10	69号土坑と重複。
J区第26号土坑	3-J-82	楕円形	東-30°-南	0.75×0.65×0.15	73号土坑と重複。
J区第34号土坑	2-J-83	楕円形	北-0°-東	0.35×0.30×0.23	
J区第36号土坑	1・2-J-83	円形	-	(0.82)×0.60×0.33	8号溝と重複。
J区第38号土坑	2-J-82	楕円形	東-8°-北	0.80×0.60×0.20	
J区第39号土坑	2-J-82	楕円形	北-30°-東	0.44×0.25×0.10	
J区第41号土坑	2-J-81	楕円形	北-45°-東	0.45×0.33×0.16	
J区第42号土坑	2-J-80・81	楕円形	西-11°-北	0.46×0.34×0.18	47号土坑と重複。
J区第47号土坑	2~4-J-80・81	隅丸長方形	北-22°-東	3.63×1.02×0.35	覆土はVI層土主体。
J区第51号土坑	1-J-84	不整形	東-7°-北	1.05×0.95×0.05	53号坑と重複。
J区第52号土坑	0・1-J-82・83	隅丸長方形	東-38°-北	1.68×0.85×0.42	8号溝と重複。

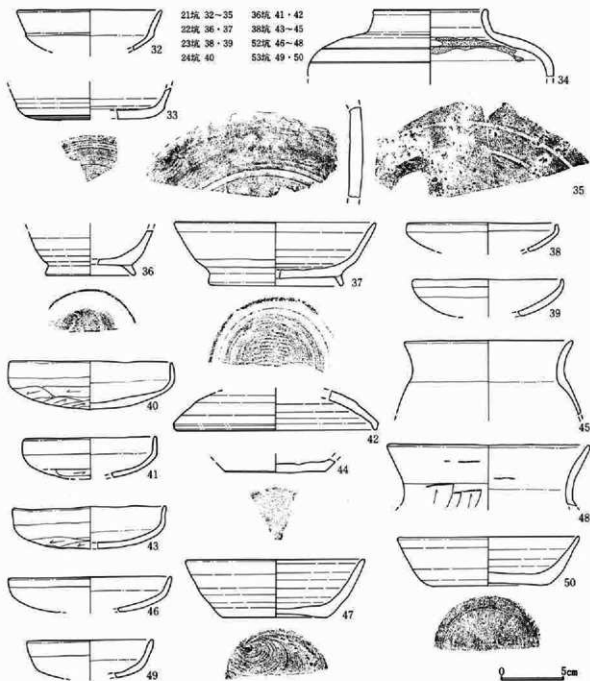
第4章 検出された遺構・遺物



第693図 J区土坑群実測図

土坑番号	位 置	平面形態	主軸方位	長軸×短軸×深度(m)	備 考
J区第53号土坑	0・1-J-81・82	楕円形	東-5°-北	1.25×0.94×0.16	8号溝と重複。
J区第54号土坑	0-J-80	不整形	西-32°-南	0.94×0.82×0.18	
J区第67号土坑	4-J-82・83	楕円形	北-36°-西	0.57×0.33×0.12	
J区第68号土坑	4-J-82・83	楕円形	北-25°-東	0.43×0.35×0.17	
J区第69号土坑	4-J-82	楕円形	北-5°-西	0.75×0.62×0.10	
J区第70号土坑	4-J-81・82	楕円形	東-34°-北	0.65×0.50×0.40	
J区第71号土坑	4-J-81	円形	-	0.40×0.40×0.05	
J区第72号土坑	4-J-81	楕円形	東-12°-南	0.42×0.36×0.12	
J区第73号土坑	3・4-J-82	不整形	北-35°-東	(1.32)×0.68×0.16	26号土坑と重複。

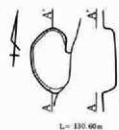
土坑番号	位置	平面形態	主軸方位	長軸×短軸×深度(m)	備考
J区第74号土坑	3-J-83	円形	—	0.20×0.19×0.07	
J区第75号土坑	3-J-83	円形	—	0.19×0.17×0.05	
J区第76号土坑	3-J-84	円形	—	0.30×0.30×0.17	
J区第77号土坑	2-J-82	円形	—	0.43×0.42×0.18	
J区第78号土坑	1・2-J-82	楕円形	北-0°-西	0.57×0.40×0.20	
J区第79号土坑	1・2-J-82	円形	—	0.27×(0.20)×0.10	
J区第80号土坑	0-J-81	円形	—	0.40×0.36×0.07	
J区第81号土坑	0-J-82・83	不整形	東-18°-北	0.43×0.30×0.14	
J区第82号土坑	3・4-J-84	不整形	北-40°-西	0.76×0.50×0.12	21号土坑と重複。



第694図 J区土坑群出土遺物実測図

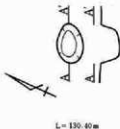
第4章 検出された遺構・遺物

J区第30号土坑



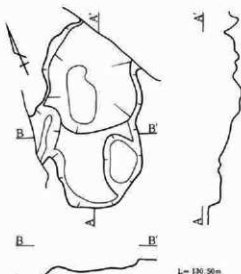
平面形態 楕円形  
位置 3・4-J-77  
規模 1.00×(0.55) m  
主軸方位 北-7°-西

J区第50号土坑



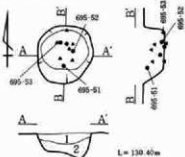
平面形態 楕円形  
位置 4-J-79  
規模 0.61×0.43m  
主軸方位 東-23°-北

J区第45号土坑



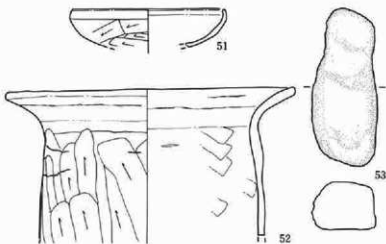
平面形態 不整形  
位置 5・6-J-75・76  
規模 (2.93)×1.06m  
主軸方位 北-20°-東

J区第61号土坑

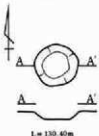


平面形態 円形  
位置 1-J-69・70  
規模 0.90×0.88m

- 1 暗褐色土 C Pを含む。
- 2 暗褐色土 C Pを少量とVI層土粒を含む。

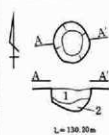


J区第62号土坑



平面形態 円形  
位置 0-J-68・69  
規模 0.70×0.66m

J区第63号土坑

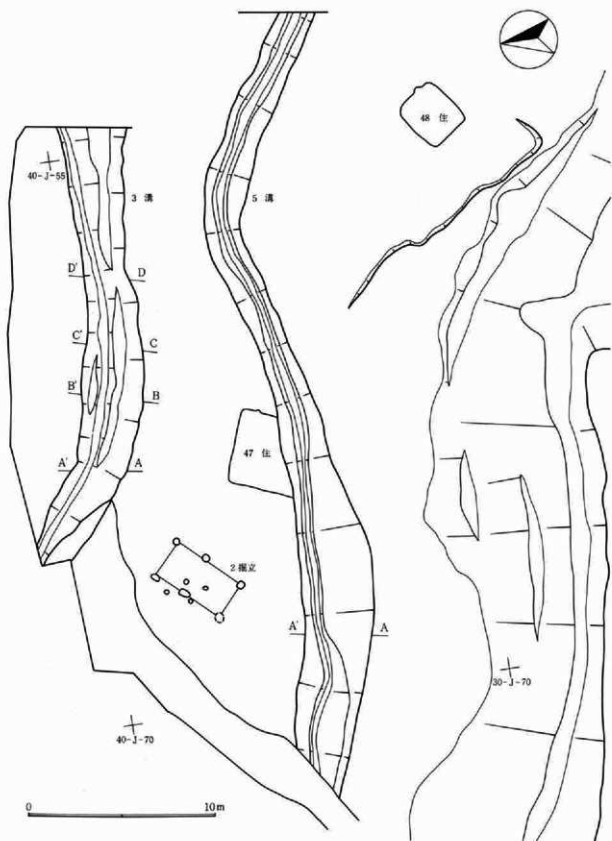


平面形態 楕円形  
位置 0・1-J-65  
規模 0.65×0.57m  
主軸方位 北-10°-西

- 1 暗褐色土 C P細粒を含む。
- 2 暗褐色土 VI層土粒を含む。

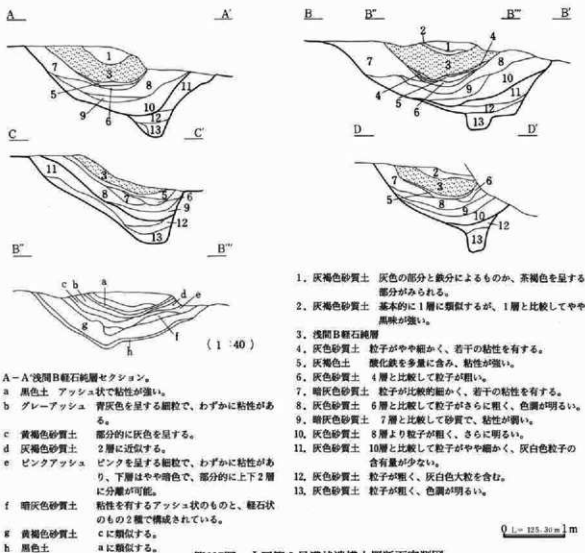
0 1m

第695図 J区土坑・出土遺物実測図(5)



第696図 J区第3・5号溝状遺構実測図

第4章 検出された遺構・遺物



A-A' 浅間B軽石純層セクション。

- a 黒色土 アッシュ状で粘性が高い。  
 b グレーアッシュ 青灰色を呈する細粒で、わずかに粘性がある。  
 c 黄褐色砂質土 部分的に灰色を呈する。  
 d 灰褐色砂質土 2層に近似する。  
 e ピンクアッシュ ピンクを呈する細粒で、わずかに粘性があり、下層はやや暗色で、部分的に上下2層に分層が可能。  
 f 暗灰色砂質土 粘性を有するアッシュ状のもの、軽石状のもの2種で構成されている。  
 g 黄褐色砂質土 cに類似する。  
 h 黒色土 aに類似する。

1. 灰褐色砂質土 灰色の部分と鉄分によるものか、茶褐色を呈する部分がみられる。
2. 灰褐色砂質土 基本的に1層に類似するが、1層と比較してやや高粘性が強い。
3. 浅間B軽石純層
4. 灰色砂質土 粒子がやや細かく、若干の粘性を有する。
5. 灰褐色土 酸化鉄を多量に含み、粘性が強い。
6. 灰色砂質土 4層と比較して粒子が粗い。
7. 暗灰色砂質土 粒子が比較的細かく、若干の粘性を有する。
8. 灰色砂質土 6層と比較して粒子がさらに粗く、色調が明るい。
9. 暗灰色砂質土 7層と比較して砂質で、粘性が弱い。
10. 灰色砂質土 8層より粒子が粗く、さらに明るい。
11. 灰色砂質土 10層と比較して粒子がやや細かく、灰白色粒子の含有量が少ない。
12. 灰色砂質土 粒子が粗く、灰白色大粒を含む。
13. 灰色砂質土 粒子が粗く、色調が明るい。

第697図 J区第3号溝状遺構土層断面実測図

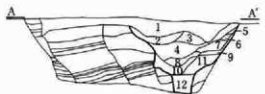
J区第3号溝状遺構 (第696図、付図5)

当溝状遺構は、37~42-J-53~65グリッド内に位置し、牛池川河川敷に舌状に張り出した低台地縁辺に検出された。検出調査した長さは約24mで、最大幅約3.7m、残存深度は約1.4mであり、底面はわずかに東に向かって傾斜している。掘り込みの現状は、上半が両側に緩傾斜を有して開き、下半は中央に上幅約40cm、下幅約30cm、深度約23cmの断面逆台形状にさらに掘り込まれたような状態を示している。当溝状遺構の上層には浅間B軽石の純堆積層が最大約40cmの厚さで検出されている。この浅間B軽石層の堆積状態は、溝状遺構の凹に沿ったものであるが、層厚が両端と中央でほぼ一定しており周囲から流れ込んだものとは考えられず、降下堆積したものとみられる。土層断面の観察によれば、この浅間B軽石純堆積層を含む堆積と前述の逆台形状の掘り方を含む土層堆積間には不整合が認められ、当溝状遺構が単一時期の所産ではなく2時期以上の重複状態を示している可能性が強いことがわかる。つまり当初の段階では断面葉積状の溝状遺構が掘られ、この溝状遺構が砂質土によって大半埋没した段階で、上の緩やかに開いた「U」字状の断面を有する溝状遺構が構築されたことになる。この後者の溝状遺構は前述のように埋没の最終段階で浅間B軽石が降下堆積しており、この降下時期まで凹として残存していたこと、及び降下時期にはすでに大半が埋没し、放棄された状態であったことがわかる。この2時期と考えられる溝状遺構の基本的充填土は、FA?に伴う泥流堆



積物と考えられる灰色砂質土であり、当溝状遺構の掘り込まれた低台地を形成しているものである。このことから所属時期を推定すると、灰色砂質土がFAまたはFPF-1に伴うものと考えられていることから、構築はこの泥流堆積後の古墳時代後期以降であり、終末は最上層に検出した浅間B軽石（1108年）の年代観から平安時代末と考えられる。しかし遺構構築には、FAまたはFPF-1洪水層堆積後牛池川の開析によって地形形成がなされる時間経過が必要であり、また、台地上の他の遺構と無関係とも考えられないことから、台地上に堅穴住居跡等の構築された奈良時代頃に最初の掘削があったものと推定される。

この他、低台地に沿っては充填土や出土遺物から鎌倉時代以降のものと考えられている第4号溝状遺構（上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)で詳細は報告済み）がある。当溝状遺構はこの第4号溝状遺構と一部重複しているが、第4号溝状遺構が全体に台地に沿っているのに対して、当遺構は一部台地を切り込でおり、しかも調査区中央部で向きを北に変え、第4号溝状遺構と交差している。このようにこの低台地に沿ってはほぼ3時期の溝状遺構が構築されていることになる。時期が異なり方向に若干の違いが認められるが、ほぼ同じような位置に構築されていることは、遺構の性格が共通することによるものと思われる。つまり、河川敷の低地部の土地利用と密接に関連したものと考えられる。



1. 暗褐色土 灰白色土粒を少量含み、部分的に黄白色土ブロックを含む砂質。
2. 暗褐色土 ピンク気味の灰色粘質土粒と小ブロックを含む。
3. 暗褐色土 2層に近似するが、粘質土ブロックが大きく、量も多い。
4. 暗褐色土 1層に比較して黒味が強く、粘質土ブロック含有量が少ない。
5. 暗褐色土 粘質土ブロックは小さく、量も少ない。
6. 暗褐色土 粘質土ブロック含有量が多い。
10. 暗褐色土 9層と比較してさらに砂質。
11. 灰褐色土 粘質土大ブロックと砂質土で構成されている。
12. 灰色砂質土 粘質土主体で砂質。

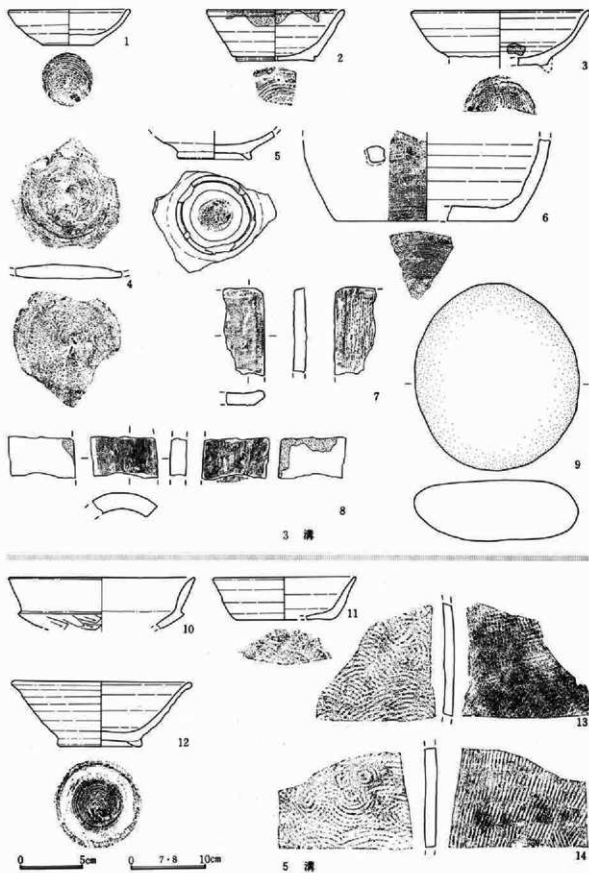
7. 暗褐色土 3層に近似するが、粘質土ブロックがさらに大粒である。
8. 灰褐色土 暗褐色土と、灰色砂質土の混じった土層。
9. 暗褐色土 全体に砂質で、粘質土ブロックは小さく、含有量も少ない。

第698図 J区第5号溝状遺構土層断面実測図

#### J区第5号溝状遺構（第696図、付図5）

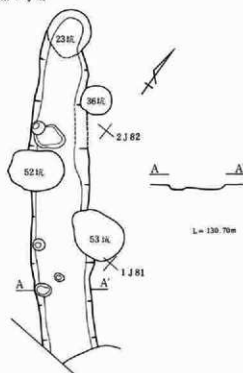
当溝状遺構は、32～36-J-51～71グリッド内に位置し、牛池川に張り出した低台地中央部を東西に横断するように掘削されており、遺構主体の立地する台地縁辺に沿うように2ヵ所で屈曲している。当溝状遺構は低台地中央部で第47号住居跡と重複している。遺構の検出及び残存状態から47号住居→当遺構と考えられる。また、低台地の切れる位置で第4号溝状遺構と交差し、これより西側についてはトレンチ調査によっても検出することはできなかった。当遺構の断面形状は上半が「V」字状に開き、確認面から約85cm程度のところからさらに逆台形状に掘り込まれた、いわゆる「葉研」状を呈している。当溝状遺構充填土は、最上層の1層を除いてほとんどがこの台地を形成している砂質土であり、壁面が砂質で脆いにもかかわらず比較的良好に残存していることから、周囲の壁等の崩落とは考えられない。また、土層断面観察から堆積状態に不自然な部分が認められることと考え合わせると、埋め戻された可能性が強い。時期については、奈良時代と考えられる第47号住居跡の一部壊して掘削されていることから、これ以降であることは確かであり、これは充填土中から出土した遺物の上からも捉えることができる。また、断面形状等第3号溝状遺構の最初の段階と共通する要素が多く、ごく近い時期に掘削されたものと考えられるが、第3号溝状遺構のように埋没後の再掘削はされなかった。その他土層断面図で提示した場所では南側に地滑り状の断層がみられた。

第4章 検出された遺構・遺物

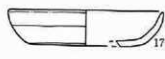
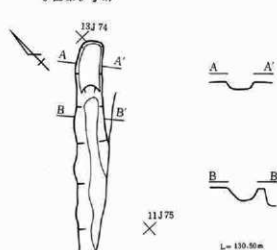


第699図 J区第3・5号溝状遺構出土遺物実測図

J区第8号溝



J区第9号溝



8 溝

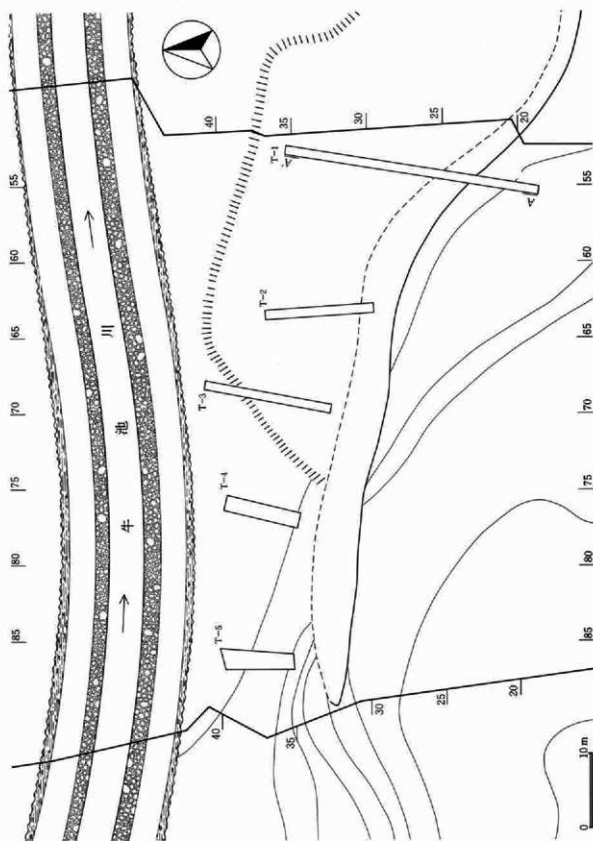
第700図 J区第8・9号溝状遺構・出土遺物実測図

## J区第8号溝状遺構 (第700図)

当溝状遺構は当調査区南西隅に検出したもので、0-2-J-81-84グリッド内に位置している。検出した長さは約7.44m、上幅約1.22m、下幅約0.98m、残存深度約12cmであり、長軸の方位は北-45°-西である。南側はI区第2号井戸との重複で失っているが、I区の調査でこの井戸以南に溝状の遺構は検出されていないことから、井戸との重複部分までと考えられる。北西端で円形の土坑(第23号土坑)と重複する他、3基の土坑(第36・52・53号土坑)と重複している。底面はほぼ平坦に構築されており、4本の円形小ピットがみられる。遺物は充填土中の出土であり、8世紀代のものが主体と考えられる。

## J区第9号溝状遺構

当溝状遺構は第33号住居跡の北側に検出したもので、11・12-J-74・75グリッド内に位置している。検出した長さは約5.0m、上幅約0.66m、下幅約0.2~0.4m、残存深度は約15~24cm、長軸の方位は北-43°-東である。時期については、出土遺物が皆無であり特定することができないが、遺構の検出状態から第33号住居跡に先行することは確実であり、方位から当溝状遺構の北西側に接するように検出した方形周溝墓に関連するものである可能性もある。



第701図 J区トレンチ配置図

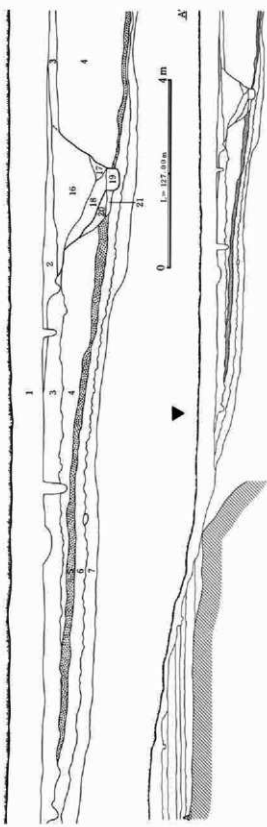
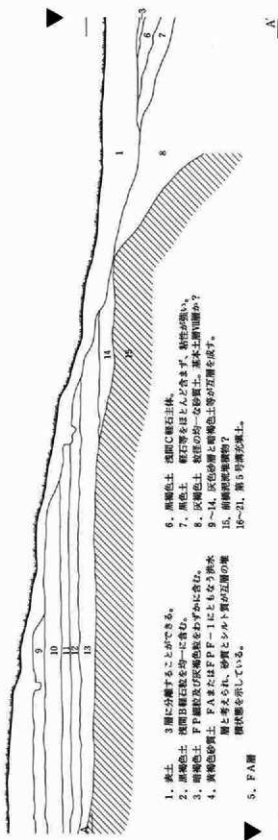
## J区河川敷トレンチ調査

河川敷の現状は、低台地部が用地買収以前の時点まで畝地であったのを除いて荒地の状態であった。現牛池川は河川改修工事によって両側に堤防が築かれ、低台地部北端の一部は削り取られている。この低台地部は東側に主体があり、地形図の上からも明確に範囲を捉えることができた。河川敷低台地部と低台地部との比高差は最大で約1.7m、低台地部と上部台地との比高差は約4.9mである。

トレンチ調査は、遺構の有無を確認すること、及び遺構主体の立地する台地と低台地との関係等を捉えることを目的として行った。トレンチ本数は7本であるが、壁断面を実測したのはT-1～5の5本であり、この5本について地形図中にトレンチ位置を示した。トレンチ規模は幅が約1.5mである他、長さはランダムであり、トレンチの設定もグリッド線等を無視したものである。このトレンチ調査の結果、T-1～3において第5号溝状遺構が、T-2において第47号住居跡が、T-3において第4号溝状遺構が断面観察されている。

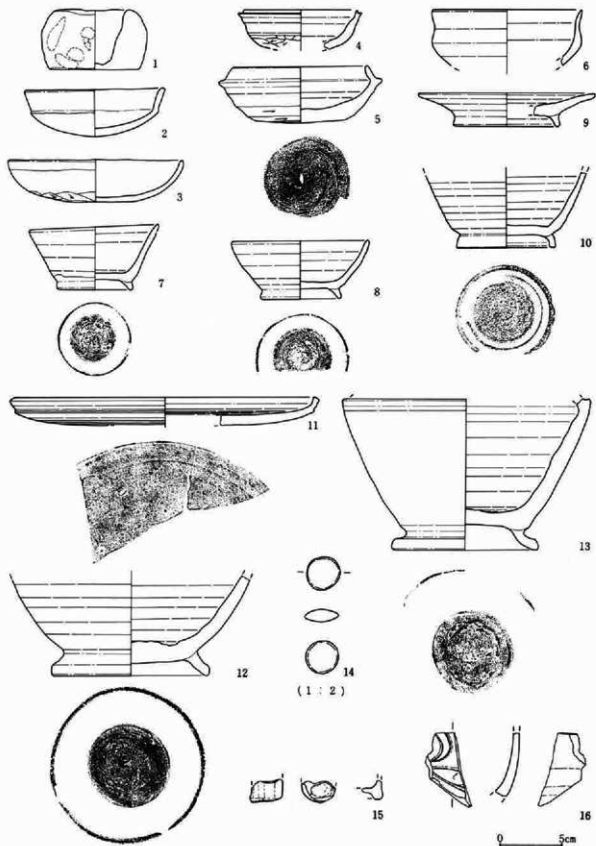
第702図に示したのは台地から河川敷まで通して設定することができたT-1の土層断面である。台地側は15層の硬質に締まったシルト層をベースとして10～14層の灰色のシルト及び粘性の比較的強い褐色土を互層に乗せている。これらはいずれも水平堆積であり、前橋台地を形成している前橋泥流堆積物と考えられるものである。このベースとなっている15層は、台地末端で河川敷に向かって約40°の傾斜で削られたような状態を示しており、前橋台地形成後に牛池川によって開析されたものと考えられる。9層は水性堆積または二次堆積した上部ロームと思われ、基本土層のVI・VII層に当たる。この層の上部には平坦面であればII～V層の堆積がみられるはずであるが、傾斜面であるため直接に表土層に乗せている。河川敷のベースとなっている8層は、台地上部からの崩落及び牛池川に開析された前橋泥流堆積物の二次堆積によって形成されたものと考えられるが、最下層がどの程度まで下がっているのかは、湧水のため確認できていない。この8層は、8～10°程度の緩傾斜を有しており、上部の漆黒色粘質土の7層もこの傾斜に沿った堆積をしている。7層はこの直上にみられる浅間C軽石主体の層とは不整合の状態を示しており、層中からは縄文時代晚期及び弥生時代の遺物が出土している。6層は前述のように粒径約5mmの浅間C軽石主体の層であるが、粒間は下層の漆黒色粘質土が埋めており、浅間C軽石の純堆積層とは考えられず、7層と前後して二次堆積したものと思われる。5層はFAと考えられるものであり、6層との間に間層はみられず、6・7層同様8層の傾斜に沿った堆積をしている。4層は第5号溝状遺構で提示した土層断面で顕著なように、やや粗い砂層と細粒のシルト質の層が互層となっており、水性二次堆積物である可能性が高い。このため5～7層に認められた8層の傾斜に沿った堆積を示さず水平堆積をしており、そのため南側では薄く北側では厚い堆積状態を示している。この層はFAまたはFPF-1に伴う洪水層と考えられ、堆積時期もFA降下に比較的近い時期が想定され、このためFAの降下堆積との間に間層を挟んでいない。FPを含む暗褐色土の3層は4層の水平堆積面をベースに堆積している。前述の第5号溝状遺構はこの3層面より上から掘り込まれたものと思われる。2層は第5号溝状遺構の凹に浅間B軽石を含む土層が入り込んだものである。この上層はいわゆる表土であり、すべてに浅間B軽石が含まれているが、色調等で3層に分離が可能である。以上のように河川敷の低台地形成には4層土としたFAまたはFPF-1に伴う洪水層が主体的役割を果たしている。つまりFA降下堆積後FAまたはFPF-1に伴う洪水堆積層が牛池川を一定レベルに埋め、この面をベースに牛池川の開析を開始され、その結果、台地面の凹部分に低台地が形成されたものと考えられる。

この他、低台地に検出した第3号溝状遺構上層及び崖直下の一部に浅間B軽石の降下堆積が確認されている。



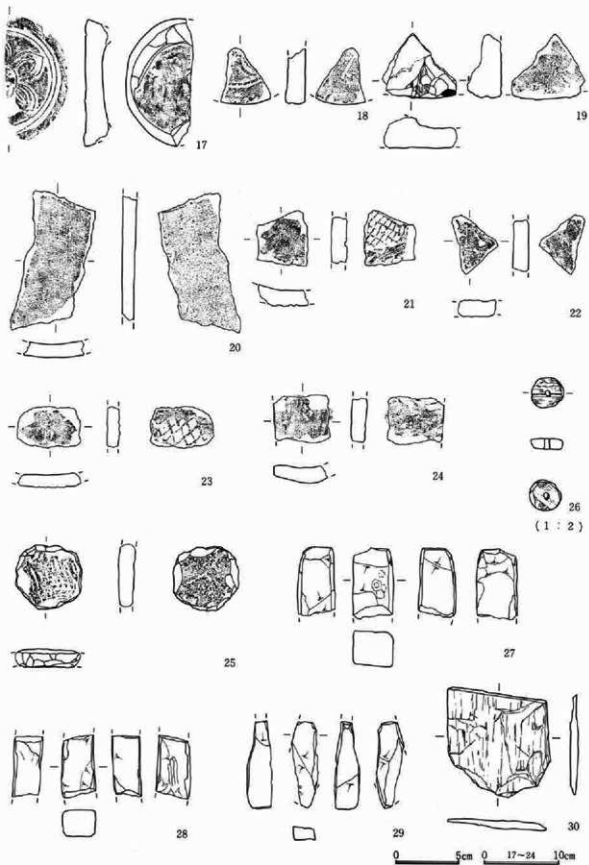
第702図 J区丁-1土層断面実測図

J遺構外出土遺物



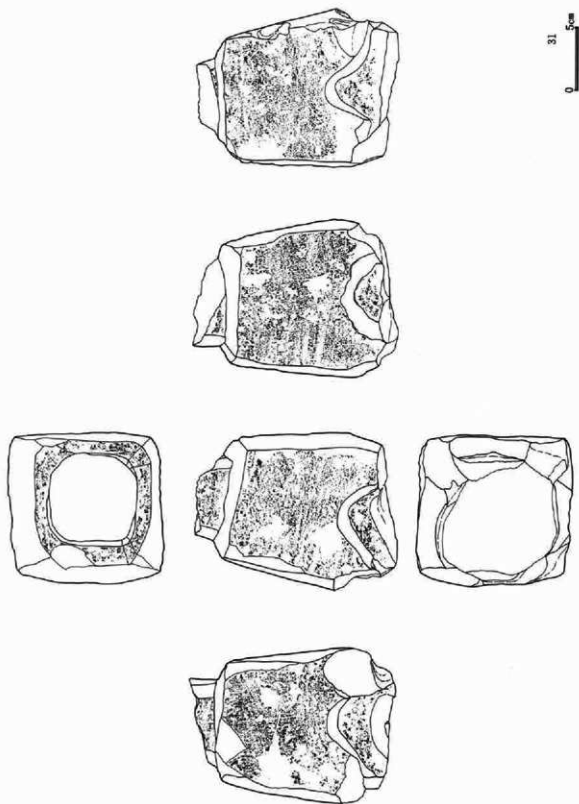
第703図 J区遺構外出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第704図 J区遺構外出土遺物実測図(2)





第705図 J区遺構外出土遺物実測図(3)

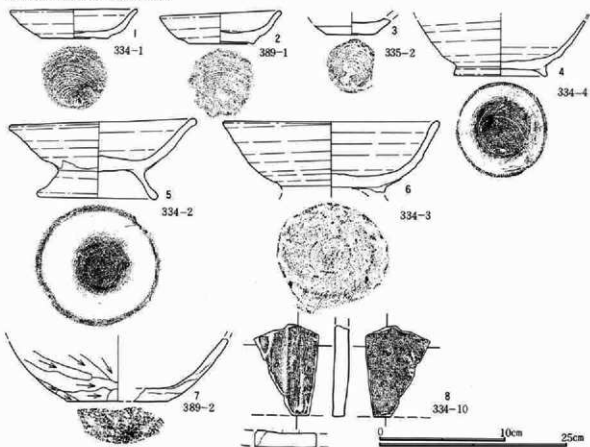
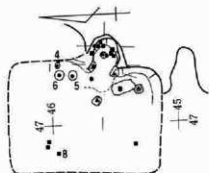
### 第3節 追 補

#### 第1項 南側調査区

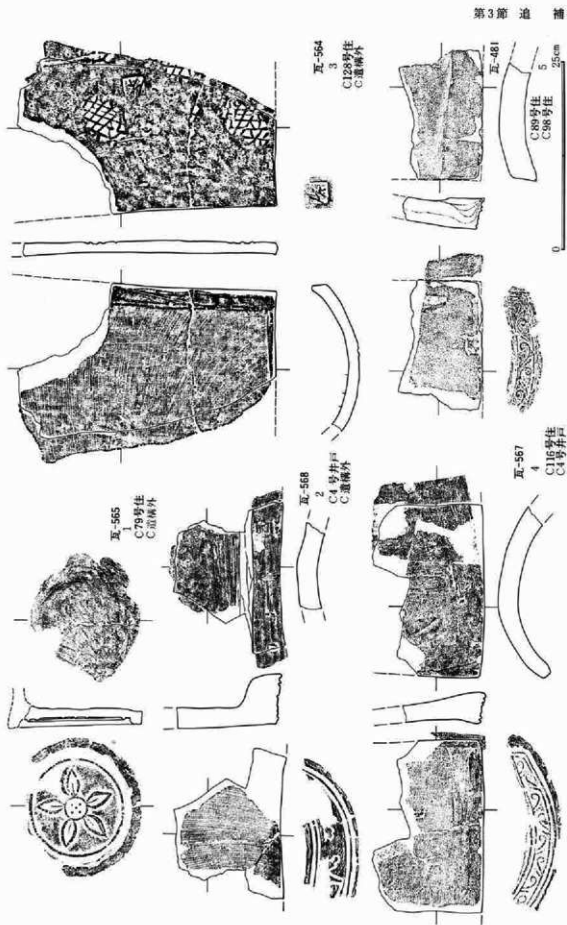
本項では、既刊及び本章第1節中の不手際により生じた漏等を追補するものである。該当する遺構各称は各図中に併記した。これらの追補の中で特徴的な遺物に就いて若干の記述を行なっておく。

D区1号井戸跡出土で未掲載であった。鬼瓦・石製蔵骨器は第713・711図に掲載した。鬼瓦は、全体の約 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 残存している。復原図は、国分尼寺での同規模と判断出来る類例を用いて行なった。復原図上では、幅43cm・高さ55cmを計測する。この鬼瓦は、既存の県内例では最大級に属する。国分二寺の堂宇の中では、中心的な建物の大棟に葺かれた可能性が非常に濃厚である。又、国分尼寺での既出例に勘案すれば、国分尼寺の金堂大棟に葺かれたことが想起される。

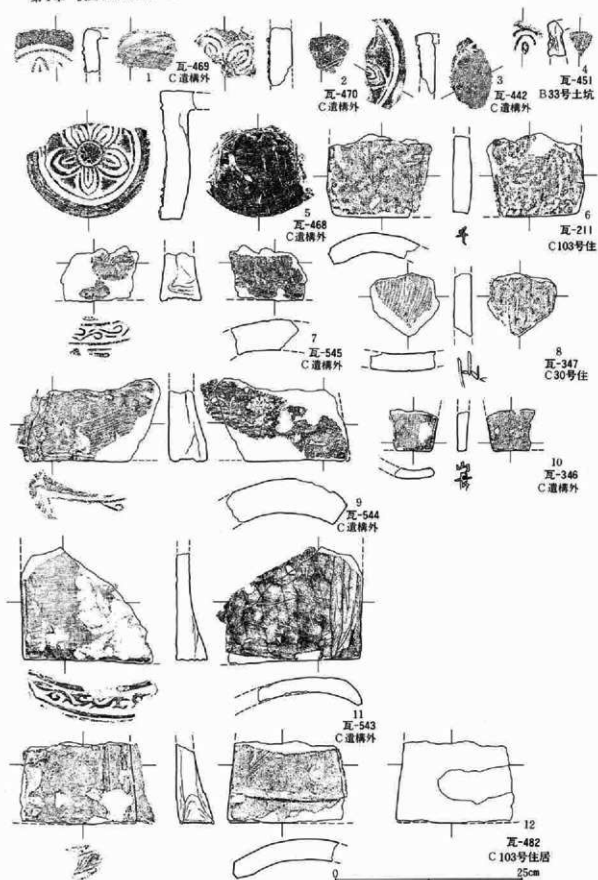
石製蔵骨器は、角閃石安山岩製で $\frac{1}{2}$ 程が残存する。同質の石材は、国分僧寺塔跡で、基壇化粧の羽目石・東石に用いられ、放光寺跡（山王廟寺）の鰭尾とも同質材である。この石製蔵骨器は、ほぼ石材の中央に方形の削り込を施している。この削り込は遺存が不良であり大きさは不明である。本例は、上野国の中核部では初出の類例と考えられる。



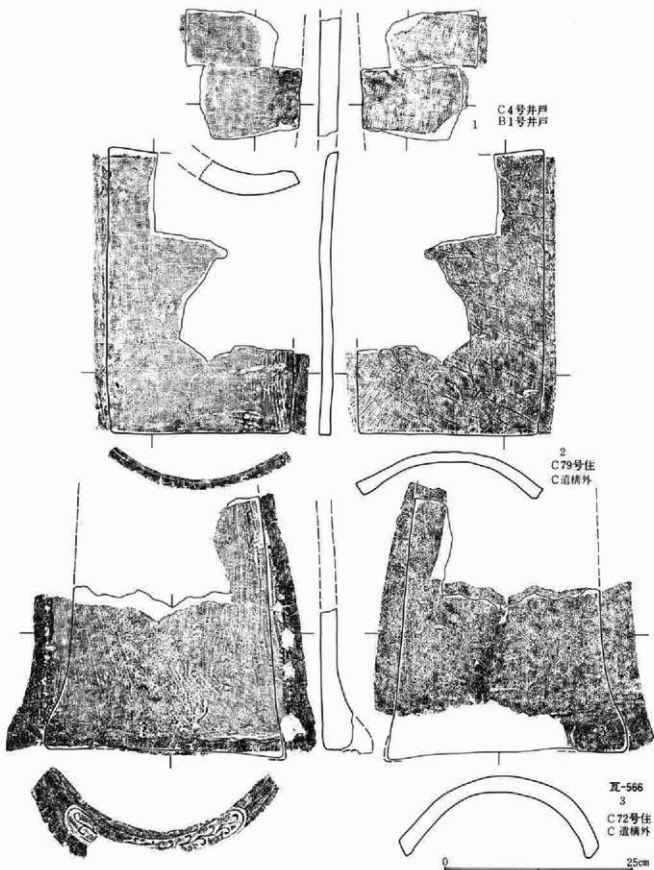
第706図 追補(1)B区第27号住居跡



第4章 検出された遺構・遺物

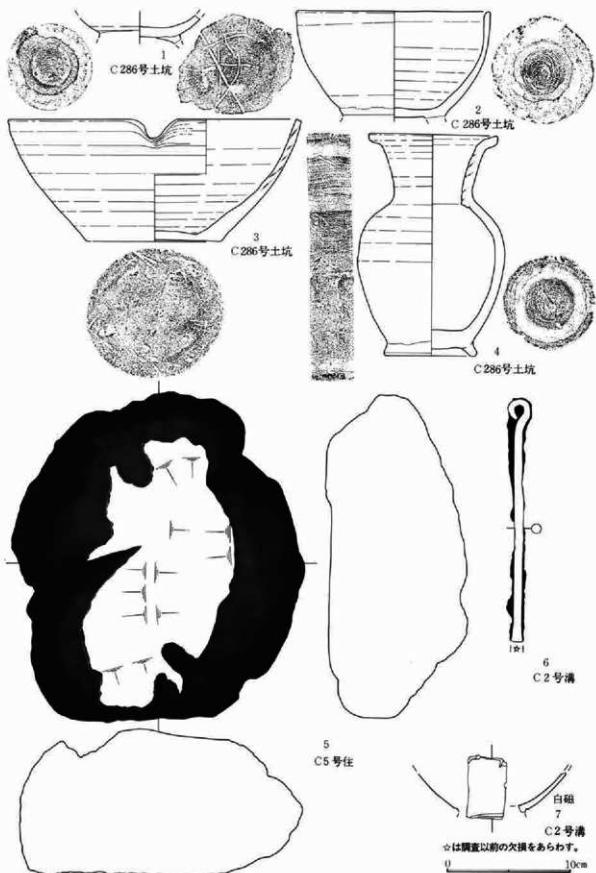


第708図 追補(3)

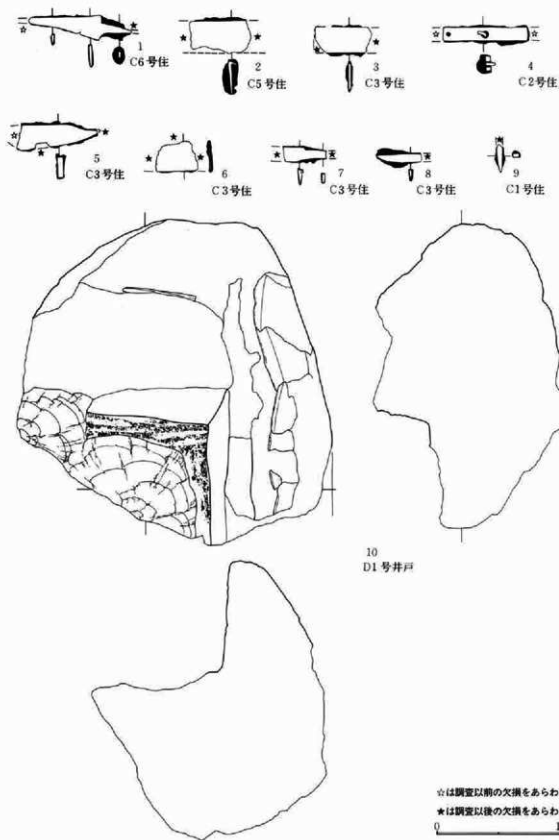


第709図 追補(4)

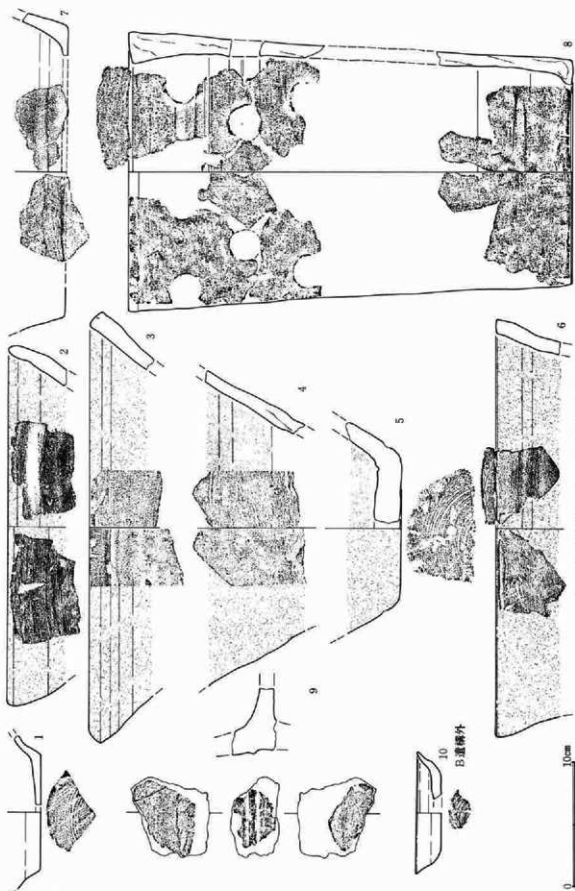
第4章 検出された遺構・遺物



第710図 遺構(5)

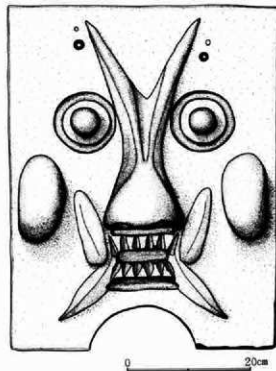
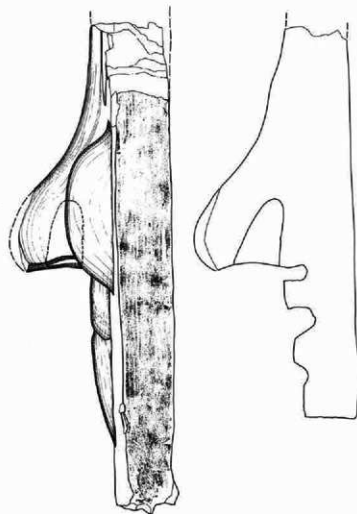
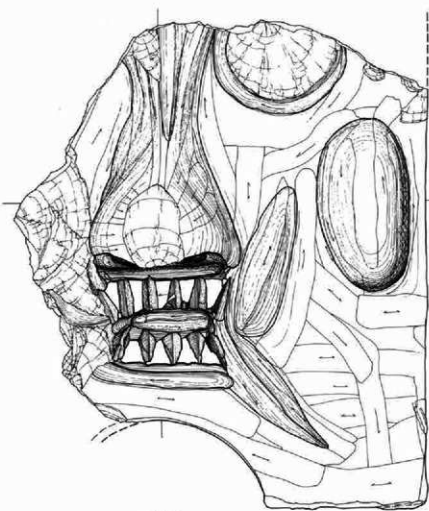


第711図 追補(6)



第712図 遺構(B区第1号溝状遺構出土遺物・遺構外)

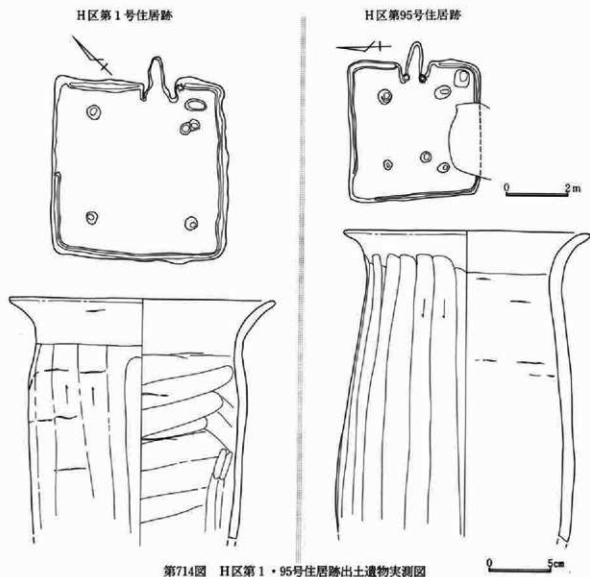




第713图 追棚(8)D区第1号井尸跡出土鬼瓦



## 第2項 北側調査区



第714図 H区第1・95号住居跡出土遺物実測図

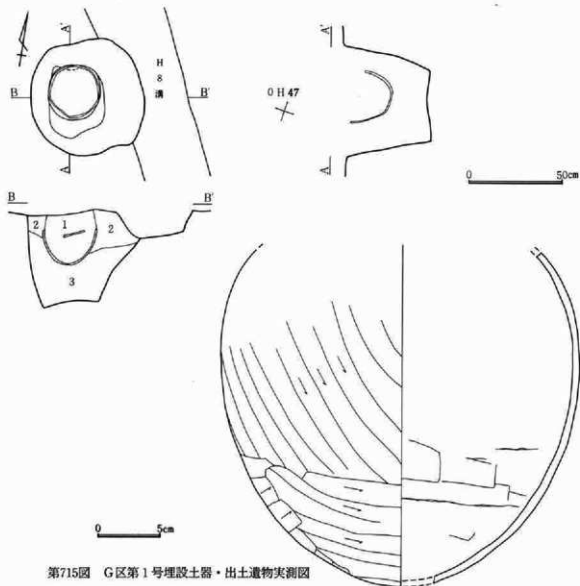
H区第1号住居跡は、「上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)」、同区第95号住居跡は、「上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)」でそれぞれ報告したものであるが、両住居跡共に土師器の壺が未報告であったため、ここで追補として再報告する。

H区第1号住居跡は、32～35-H-53～57グリッド内に検出し、5.85×5.65mの隅丸方形プランを呈するものであり、カマドは北東壁で、主軸方位は東-37°北である。遺物出土はごくわずかで、いわゆる「模倣坏」が主体である。第☆図の土師器壺は、カマド右袖部壁際の床面付近から出土したものであり、胴部上半だけ検出した。

H区第95号住居跡は、12～15-H-49～51グリッド内に検出し、4.35×4.15mの隅丸方形プランを呈するものであり、カマドは北東壁中央で、主軸方位は東-27度-北である。遺物は両袖部に使用されていた土師器壺とカマド前面から出土した土師器坏と壺であり、第☆図の土師器壺は右袖部の補強材として使用されていたものである。

第4章 検出された遺構・遺物

G区第1号埋設土器



第715図 G区第1号埋設土器・出土遺物実測図

G区第1号埋設土器

当埋設土器は、「上野国分僧寺・尼寺中間地域②」報告段階では遺物の所在が不明で、実測図を掲載することができなかったものであるが、今回遺物の所在が判明したため再度報告をする。

遺構の検出位置は、49-G-47グリッド内で、VI層上面で確認検出した。東側の一部は第8号溝状遺構との重複によって失っている。掘り方は円形プランで、径約60cm、残存深度約45cmである。掘り方内充填土は上下2層に大別できたが、明確な違いとして認識されたものではなく、一連の埋没によって充填されたものと判断される。しかし、土器内部に充填していた土は砂質で、掘り方内充填土とは異質である。

埋設されていた土器は、胴部上半を欠いているため口縁部形状等は不明であるが、球形に近い胴部を有し、底部が丸底気味の土師器器甕で、底部に小さな穿孔がなされている。胴部最大径は上半で約28cm、残存器高約26.3cmである。胴部外面整形は中位が斜位、下半が横位の瓦削りで、内面下位に明瞭な接合痕が認められるのが特徴である。土器埋設状態は、掘り方中位に正位埋設されていたもので、重複した同時期の住居等は皆無で単独の土器埋設遺構である。

## 第5章 ま と め

### 第1節 南側調査区

#### 第1項 B・C区検出の住居跡とその出土遺物

##### はじめに

今次の報告で掲載したB・C区の住居跡は172軒である。これらの内27軒を除いた145軒は、個別の住居跡の遺存状態は別にしても、住居の形状が把握出来るものである。これらの住居跡は、概ね7世紀前半から11世紀中頃の約450年間に亘り構築されたものである。

ここでは、検出された住居跡を比較形式学的観点から種別・分類を行い、さらにそれらを序列し、相対年代を付加することにより編年することを目的の一部とする。この作業は、検出された住居跡群をどのように理解するか、出土遺物のみを年代観だけでは、各住居跡の存続期間の推定・新旧住居間の係わりが不明であることから、このことを解決する一方法として用い、上述の2点を可能な限り分明にしたいと考えるが、後年の多くの調査区の整理業務が継続するため結論的な事は後年に期すると考えている。

検出された住居跡の形状は四角形を基調とする様々な形状とも言い得るものであるが、各住居跡の細部を対比検討することにより種類の種分け・分類が出来た。以下B・C区で検出された住居跡について遺物を含めまとめてみたい。

住居跡は、四角形基調の正方形・長方形と両者の中間様の矩形と長方形での二者（主軸と長辺との関係）を含めた四者、則ち、4分類が基本形態を形成する。しかし、細部では上述四者の分類に於いて分類出来るものではない。このことより細部での状況を加味せねばならない。この細部の状況がカマド・傍電坑である。このカマドは、その形状・構築位置であり、傍電坑はその有無により加味されるものである。

第3分冊では、検出された住居跡を形状等の特徴によりI～V段階に分類序列し、更に、この各段階に該当する住居跡の出土遺物の中で、“一括性”の認められる遺物を抽出し、住居跡の各段階及び、それに伴う遺物組成を考述し、更に、各段階の遺物の中で、須恵器・土師質土器の坏断抽出しそれを型式学的に分数・序列・段階を設定しそれに相対年代を与え、各住居跡の年代観をもとめ、住居の構築から廃棄までの時間帯を“存続期間のみなし”とした。そして、本書の各住居跡の各説では、前刊第3分冊で記述した各住居跡階に對比されるものと対比し得ない二者があった。この内前者は、D区の分類に対し住居形状・カマド形状・出土遺物の様相の三者乃至二者の該当し概ね妥当性があり判断されたものである。後者は、住居跡の遺存が不良で、住居形状等が対比し得ない状態のものと、D区の第I段階より古期に位置付けられるであろう一群遺物様相だけがD区の分類に該当するものの、住居形状が全く似合わないもの三者である。

後者の住居自体が遺存不良である場合（その最大の要因に住居相互間の切り合いによる破壊である。）の時期決定は、住居間の新旧関係によりある程度は判断され、少量の遺物でもその特徴的なものからの類推は可能であった。一方、D区の第I段階より古期に位置付けられる一群は、住居形状・カマド形状・遺物様相から判断された。

以下、B・C区の住居跡とその出土遺物に就いて記述するが、根幹を成す方法論は第3分冊で実施したD区の住居跡とその出土遺物を扱う時と同じである。

### 1 D区の第I段階より古期に想定される住居

前刊第3分冊では、9世紀後半を上限にD区の第I段階を設定したが、当該のB・C区では、7世紀中頃が上限と考えられ、この両者間には約230年以上の時間差がある。この約230年は、D区で得られた各階層時間幅(36年～40年程)では6段階に亘る階層が想定される。然し、B・C区で検出された住居跡には、8世紀中頃～9世紀初頭迄の約80年間程の住居は皆無で、9世紀前半代の住居跡も非常に少なかった。この約80年間の無住居期間は住居形状段階では2段階程が欠如することが想定され、新たに設定し得る段階は都合、4段階が想定されるが、住居跡には、7世紀前半以前の何らかの規制をうけているものがあり、この前段階を考慮すれば5段階の設定ができる。

上述の新たに想定出来る各住居段階は、\*D区の第I段階。の如く各住居段階にはその調査区名を冠したので、当該報告区の場合は、C区が主体を占める為「C区」の冠し各住居段階を表記したい。そして、以下各段階毎に該当する住居と、その特徴を記述し、各住居の形状段階と出土遺物の様相から鑑み、第744・745図に各住居の存続期間をみなしとして表した。

#### C区の第I段階(以下 C区を省略する) B区5・15・24号住

住居の主軸方位が後出する第II段階の住居とは異なり、北側にやや強く偏在する住居で、7世紀前以前の住居の主軸方位を継承していると考えられる一群である。然し、これらの、3軒の出土遺物を見る範に於いては、第II第とほぼ同様な様相と認められる。この要因とすれば、第II段階の住居の構築と間近な時期か、廃棄時迄の住居の使用期間が比較的長期間であったことが想起される。

平面形状は、正方形基調のB5住・横長方形のB14・24住があるが、構造は、B5住の様に4本の主柱を具備するものと、B14・15住の如く、無柱穴の二者がある。この柱穴の有無は、古代の住居型態上最も顕著なる差異で、7世紀後半以降急増する無柱穴住居としての新たな様相と考えられ、第I段階は、その画期頃に相当する段階である。そして、この第I段階は、7世紀前半代以前にその盛期が想定される。

#### 第II段階 C区37・48・66・143・144住

住居の主軸方位が第I段階と後出の第III段階の中間様な東から北へ20度前後の指向方向がある。平面形状は縦長方形・矩形が認められ、主柱穴はC144住で検出されているが、他例の住居に比較し大型であることに起因するか前代からの構築技法が継承されたものと考えられる。他の住居跡では検出されていない。カマドは、確実な形で検出されたのはC66住のみであるが、幅の広いや長い袖を具備している。その他の詳細な状況は後年発刊する段階で記述したい。

#### 第III段階 B19住・C8・9・10・109住

前出の住居跡の主軸方位が東から北側に向かったのに対して、本段階よりほぼ東側を指すこの主軸の方向の特徴は11世紀代まで踏襲される。平面形状は確実に判断されるのはC8住の1軒のみであって、他は未調査部分があり不明な点があるが、C8住が横長方形形状を呈している。主柱穴は鉄製の住居跡も検出されていない。カマドは、C9住が良好な状態で検出されたのみである。このC9住のカマドは、第27図に掲載したが、その主要特徴を記せば、比較的広い燃焼空間を有し、煙道は燃焼部奥壁底面から俯角25度程で立ち上がる。袖部は堅固な感を受け、両袖端側に、地山凝灰岩質の切り出し角柱状材を用い、更に焚口部分では同様に用いている。

## 第IV段階 C51・80・88・140・154号住

この段階の住居は、後代の住居の攪乱により破壊され失なわれている部分が多いため、この詳細な状況は看取し得なかつたが、設定の根拠としては、後述する第V段階の住居に切られているという点であり、2軒の住居の切り合いは最低でも、3棟世代以上の棟世代が必要である点による。

## 段階V段階 (B区4・18・22・32・33・?号住、C区25・55・74・76・80・85・72・106・108・(118)・(119)号住)

本段階の住居も後代の住居構築に伴ない破壊されているものが多く、完全露呈し得た住居は4軒のみであり、本段階の約3割弱である。

住居形状の特徴は、カマドを東壁中央部に具備し、南東隅部に傍電坑を備えるものと備えないものがある。この傍電坑は、D区の段階設定時には、第I～第II段の住居分類を行なう際、カマドの付設位置と共に重要な要素であった。本段階では、傍電坑を備えるものと備えない二者の存在がある。この傍電自体C区の第III段階迄は認められていないことから、第III段階以降に何らかの状況下で住居内に備わる様になったと考えられる。即、傍電坑は、本段階から出現した可能性が想定されるが、直前段階の第IV段階の住居跡が不分明な当該区の場合言及しかねる反面があり、続刊の第5分冊で再検討してみたい。

当該段階の住居の反面形状は、縦長方形・横長方形・正方形基調・矩形の四者の存在がある。又、これらの中には大・並・小の関係も存在している。そして、本段階より住居の構築増加現象が認められる。

## 第VI段階 B1 (改築後) 8・11・16・20・22・28・31・35・45・(9)号住。C区17・24・28・44・46・53・54・58・70・77・78・79・115・116・(120)・121・(128)・(129)・142・(118)・(119)・135・145・146

本段階はD区の第I段階に対比される。即、諸特徴も同様である。最大の特徴としては、横長方形・正方形基調・矩形の場合大半の住居が傍電坑を備え、カマドは、東壁中央より南東隅部に偏在した位置に具備し、燃焼空間は広い。

## 第VII段階 B2・3・7・13・30・40・44号住。C区12・21・48・49・42・63・69・84・103・110・113・114・126・133・(103+111)

本段階はD区の第II段階に対比される。即、諸特徴も同様である。最大の特徴は第VI段階同様傍電坑の存在であるが、第VI段階の傍電坑に比べ規模の縮小化・不整形化が上げられる。カマドは、第VI段階の位置がやや南東隅部に寄った部分に具備している。又、カマド自体は、燃焼部の幅が第VI段階のカマドより狭くなっている。

## 第VIII段階 B区10・27・38・(40)号住。C区11・14・16・19・20・23・26・27・(34)・(39)・42・50・68・78・81・82・86・96・104・105・127・149・152号住

本段階はD区の第III段階に対比される。即、諸特徴も同様である。最大の特徴は傍電坑の消滅であり、カマドは、南東隅部に最も寄った位置に具備している。

## 第IX段階 B17号住。C区15・18・22・65・67・(73)・29・(97)・124号住

## 第5章 まとめ

本段階もD区の第IV段階に対比される。即、諸特徴も同様である。本段階の最大特徴は、カマドの付設位置が南東隅であることと、住居形状が正方形基調のものが多出する。

第X段階 B区39号住。C区50・97・73・(41)号住

本段階は、D区の第V段階に対比され、本段階以降竪穴式住居跡の検出が為されない最も新しい段階に当る。本段階の特徴は、第IX段階の要素も認めらるが、実態数が少量である為不分明な点が残るもの、共通要素として、住居規模が第IX段階より大きい点と、カマドの付設位置が、第VIII段階的になる点があり、更に南西隅部に貯蔵穴(?)が付設される点であるが、この貯蔵穴(?)も認められないものが含まれている。

上述した様に、C区住居形状は第I段階～第X段階があり、第VI～第X段階はD区の第I～第V段階に夫々が対比され、第I～第V段階がD区と異なる一群であり新たに設定される<sup>注1</sup>住居形状段階である。

然し、冒頭で述べた中で、D区の段階に遺物様相のみが対比可能であるもの、住居形状がD区の住居形状と異なる一群の住居跡がある。この一群は、遺物様相がD区の第IV乃至V段階、即、C区の住居分類第IX乃至X段階に対比されるものである。この出土遺物様相を認める住居跡は、C区56・62号住である。この両者の内C56住は、第IX段階に対比されるC65住を重複関係にあり、調査時の所見ではC65住がC56住を切る状態で確認されている。この2軒の住居形状は、C56住が正方形指向で、C62住が横長方形である。両者の共通する点は、カマドを西壁中央部に具備し、傍電坑を備えずカマドの反対側の西壁直下周辺に貯蔵穴状の施設を備える点が指摘出来る。そして、この2軒の出土遺物様相は、D区の第IV段階に対比されることより、C区の第IX段階に対比されると判断される。この2軒の住居形状はカマドを南東隅部に備えず、且、住居形状の変遷上逆行する状態は第V段階の要素を住居内空間に求めたことに要因が想定されるが、住居形状がやや南北が長い横長方形を呈することから、何らかの特殊な状況がC62住の構成員に有ったことも考慮される。

### 2 住居の平面形状と面積

住居の各段階には縦長方形・横長方形・矩形・正方形の四者を基本とする住居形状があり、各段階には、これら四者が併存している。然し、これら四者の形状は、自ずと上層構造・屋内生活空間の利用が異なると考えられる。

上述四者の平面形状は漠然としているが、又、具体的に各形状の境自体分明に定義付け出来るものではない。これは、多分に筆者の主観により分類したことに起因すると考えられる。ここで、この主観としての平面形状を、客観的な数値として置き替えたのが第716図であり、検出された住居の中で、主軸長と同直交軸長が計画可能な住居から得たもので、その数はD区を含め全体数218軒のうちの163軒でのものである。この図は、住居の主軸長とその直交軸長の二者の関係を各々分母・分子に置き替え、その指数を示したものである。

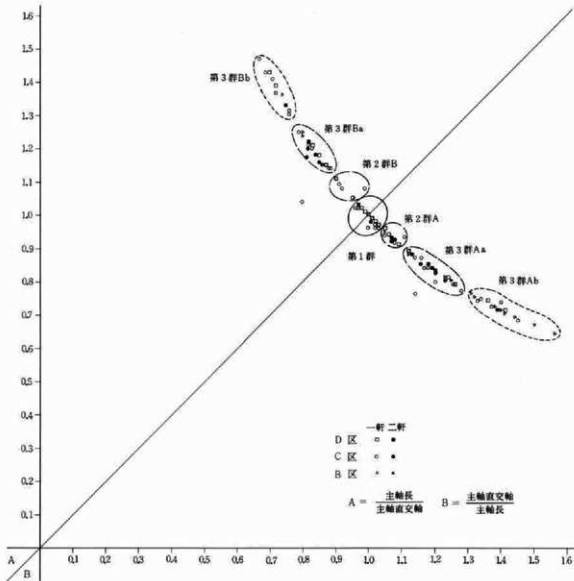
この図では、1:1の線上に乗るのが数学上の正方形であり、厳密に正方形と言えるのは1軒のみでC<sup>注1</sup>住のみである。報文中で正方形乃至正方形基調としているのは、中央部の第1群であり、矩形(数学的には直角四角形全体を示すが、ここでは、類正方形的な一群を矩形として扱っている。)は、第2A・2B群であり、Aは横長・Bは縦長側に付した便宜上の略号である。横長方形は、第3A群であるが、長軸側の長さにより更にa・bを付してある。縦長方形は、第3B群であり、横長方形同様にa・bを付してある。この中で、第1群・第2群・第3Aa・第3Baは、群在傾向が認められるものの、第2B群・第3Ab・3Bb群には拡散傾向が認められる。特に第3Ab・3Bb群はその傾向が顕著であると考えられ、この両者の末端



側は、住居の構造上、平面形状の縦：横比が限界としての意味が含まれており、横長方形ではB24住、縦長方形ではC26号住がその形状である。

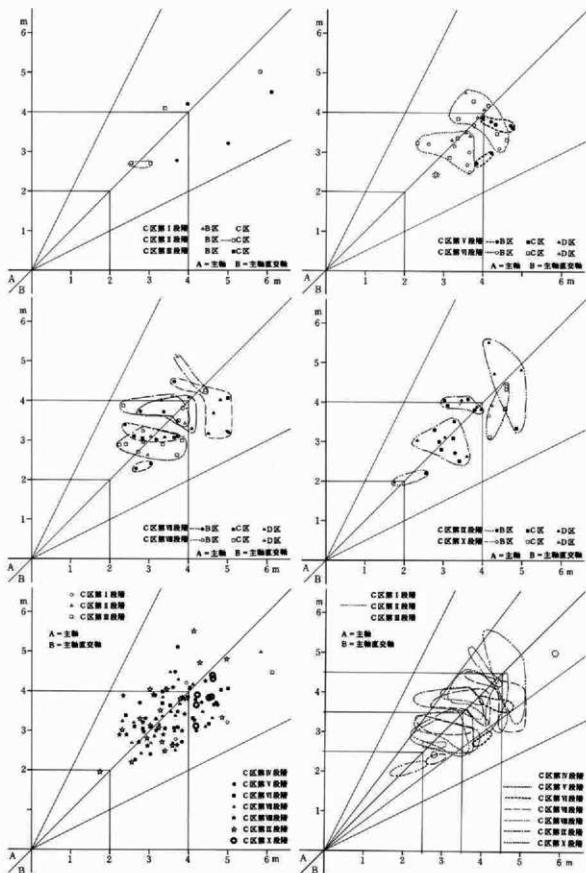
一方、C103・147住は、調査段階で2軒扱いとしたが、同様に極度の横長状を呈すると想起される住居に、C85住・C88住+108住がある。この三者は、上述の85住の如く、住居としての生活空間であることが前提ではなく、住居以外の構造物であったことが考えられる。これは、第725図の分布域から特異にはずれることであろうと考えられ、この点からも住居としての概然性は崩れる。即、この二者は、住居以外の特殊な住居様のもと考えられる。具体的には、鳥羽遺跡で検出され特殊な工房と考えられる。然ながら、この三者は、完全に露呈出来たものではなく、残片的に検出されている為詳細なる分析は不能であり、統計書中で類似例が認められた段階で、この特殊な工房様態を再述したいと考える。

上述した様に、住居としての構造上の限界が看取され、この限界値を大きく越えるものは住居と考えるのではなく特殊な工房として指摘出来たが、この住居としての縦横比の限界値は、B・C・D区の住居跡の様



第716図 住居跡の縦横比の図

第5章 まとめ



第717図 住居跡の見なし面積図

相上<sup>\*</sup>住居構築の限界値。として把握出来るものである。

上述した住居の縦横比の指数は、面積を考慮したものではない。ここで、B・C・D区の住居で、面積算出可能な住居（主軸長とその直交軸長が計測出来た住居で、実質的には<sup>\*</sup>見なし面積。）94軒の住居を対象として、その面積からの所見を若干記述してみたい。

第726図は、住居の各段階（D区の住居段階Ⅰ～Ⅴは、C区の住居段階に置き替えてある）毎に住居規模をグラフ化したものである。

この図から、各住居形状段階毎には、平面形状もさることながら、規模が大・小、大・並・小、特大・大・並・小、の三様の在り方が認められる。これは、各住居段階毎に住居規模が異なっていたことを示唆している。以下各段階毎に大小の観念を列記する。

- C区第Ⅰ段階 3軒が対象となったが、明かな状況は把握出来なかった。
- C区第Ⅱ段階 4軒が対象となったが、明かなのは、小形の二軒だけ、9㎡程の第1群である。
- C区第Ⅲ段階 1軒しか対象とならなかった為不明。
- C区第Ⅳ段階 対象住居無し。
- C区第Ⅴ段階 対象住居9軒、小は11㎡～12㎡程で4軒、大は、16㎡～22㎡程で5軒。
- C区第Ⅵ段階 対象住居9軒、小は7㎡未満で1軒、並は、7.5㎡～12㎡で9軒、大は13㎡～18㎡程で10軒。
- C区第Ⅶ段階 対象住居20軒、小は8.7㎡未満で2軒、並は、9㎡～11㎡程で6軒、大は13㎡程で5軒、特大は14㎡程以上で7軒。
- C区第Ⅷ段階 対象住居19軒、小は7㎡～9㎡程で12軒、並は12㎡～14㎡程で5軒、大は18㎡～20㎡程で2軒。
- C区第Ⅸ段階 対象住居23軒、小は6.8㎡未満、中は8㎡～10㎡程で10軒、大は11㎡～16㎡程で8軒、特大は17㎡～24㎡程で4軒である。
- C区第Ⅹ段階 対象住居6軒、小は13㎡程で1軒、並は15㎡～17㎡程で3軒、大は25㎡程で2軒であるが全体の数が少なく、小～大の格差も少ない。この点では、全体が1の大きさの中でとらえられる可能性も考えられる。

以上の様に、各段階での大小関係は様々である。そして、この住居形状Ⅰ～Ⅹ段階の中で、住居形状Ⅶ・Ⅸ段階に4分類、住居形状Ⅵ～Ⅷ段階が2分類で他が2乃至1分類である。特に、住居形状Ⅸ段階では、小とするものと大とするものとは、その間の格差最も著しく、同様に4分類される住居形状Ⅶ段階では、格差はⅨ段階程では無い一方、他の段階でも、全体の中の小と大との格差の広がり全体に少なく、Ⅸ段階が異常な状態が感ぜられる。

上述した如く、住居形状Ⅸ段階の住居規模は、特異性が認められる。この点を住居規模＝住居の構成人員でとらえるならば、住居規模の小・並・大・特大の在り方は、1住居での構成員数がある程度限定されていたのかもしれない。又、住居規模の4分類は、各層による身分化により現れた可能性も考慮されるが、現状は、何如とも結論をつけ難い。この2点から、他区での様相の比較も必須となるが、この点に就いては後年再考したい。

### 3 住居の指向方向。

住居の各説では「主軸方位」を「北-X度-南」で示した。この主軸方位は、従前に於いてカマドを具備する壁とその対壁の中間点を直線で結び、この直線が示す方向をもって<sup>\*</sup>住居の主軸方位。とするものが大

半である。筆者は、この方法で主軸方位を求めることは、大きな矛盾を感じていた為、住居を構築する過程を想定し主軸方位を求める方法を考案した。これが、第3分冊で記述した「構築基準辺」である。

ここで、筆者が用いている「主軸方位」の求め方に就いて概述しておく。(詳細は第3分冊「構築基準辺に就いて」を参照していただきたい)。

住居を構築する際、先ず第1に占地がある。占地は当時の何らかの規制等による制約が想起されるが、占地後、旧地表面に大雑把な割り付(住居をどの位の大きさにするか)を行なったか、任意的に掘削しながら規模・形状等を整えたかである。特に平安時代の住居は、古墳時代の住居の如く「方」に対する確実な意識が認め難く、整った長方形・正方形を呈する平面形状は殆ど希な存在である。このことは、構築段階で厳密なる規格の設定が無かったことを意味している(この状態で住居二辺の中間を軸としてその方位を求める点が矛盾である)。然し、住居のカマドは、東側を認識しての構築があり、住居自体も東西・南北に対する意識の働きは是認されるところである。そして、住居一辺の壁には走行が比較的直線走行する壁と殆ど直線の走行する壁とがあり、これが住居構築に大きく関わったと考えられるのである。

多くの住居の場合、住居の構築過程の中で生じたと考えられる「掘り方」がある。この掘り方を見る限りに於いては、各時代毎に特色が看取される(第3分冊に概略を記述してある)。上述の壁一辺が直線的に走行する場合に、比較的多く認められるのが、その壁下に掘り方が顕著か、或は、壁溝状のものが認められる場合がある。又、同様に、他の構築物の一辺には、構築する際に片面側を基準として構築したと考えられる場合が多く、特に横穴式石室の場合に顕著で、腰石内面側の走行と、上位の積石で文明である。この如く、物を構築する場合に、都城・寺院の如くに中心軸と、その直行軸を設定してするのは異なり、相対する一辺を以って構築の基準とする場合に、この構築の基準となつた一辺を「構築基準辺」とした。

住居の主軸は、この「構築基準辺」を見出し、この辺(壁)の北南に対す測角を行なった。唯し、住居には少なくとも四壁があり、特に、この「構築基準辺」が東壁と西壁にもとめられた場合に、その壁の走行方向は南北である。然し、住居は確実に東に対する意識が認められることと、原則的に、主軸はカマド具備する壁に交わる方向であることから、東壁・西壁に構築基準辺が求められた場合には90度を加え、東に対する指向性を表した。これを筆者は「住居主軸方位」とした。

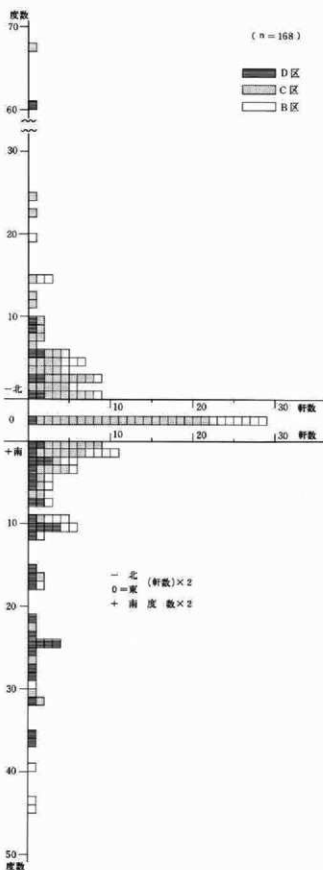
上述して来た住居跡の主軸方位測角法により、検出したB・C・D区住居に可能な限りこの主軸方位を記入した。そして、住居の主軸方位を東を0度とし、北側に-・南側に+としてグラフ化したものが第718図である。(譬、北-79度-南は-11度・北-93度-南は+3度とした)。高方位は、国家座標大IX系から算出している。

第727図のグラフから、住居の主軸方位が真東を指す住居が29軒と最も多く、北・南に振るにつれてその数量は減少し、北側で-15度・南側で+12度程で激減して以下は単数での分布が主体を成している。全体的には-6度・+4度程の±10度位に主体分布があり、東への指向が多点が確認出来る。

一方、国分僧寺の発掘調査により、塔・金塔・講堂・南大門・築地の指向方位が分明にされている。これらの主軸方位を見ると、塔・講堂・南大門が真北を指し、金堂が北-2度30分西を指し、築地は、南辺の南大門以西は南大門と同位であるが、他の部分では、金堂の方位とほぼ一致している。

この2点から、住居の主軸が真東を指す住居が最も多い点は、多少の偶然性も考慮せねばならないが(真東に対し±2度を考慮すれば64軒あり、全体の40%を占めている)。

住居の構築にあたっては、東を相当意識したことが考えられる。又、国分僧寺の東辺築地が走行方位が北-2度30分-西に偏在していたことが考えられており、この数値該当するものは-2~4度の間の住居が相当



第718図 東に対する住居主軸の偏差角度図

させられる。この-2度~4度の住居数は20軒であり、真東指向の住居数より少ない。

一方、溝状遺跡は、住居の構築を規制しており、この溝の走行方位は重要な意義が内在している。溝状遺構の走行方位では、C10号溝がN-87度-南で-3度・C12溝が測角部によるがほぼ南北-90度・C8溝が北-91度~92度-南で+1~2度である。この中で、C12溝は、調査区内の住居を東西に分す如く住居の構築を大きく規制している重要な存在の溝状遺構であり、溝の廃棄後この覆土上面は、道路として破完に機械している。そして、この溝(道)は、住居の主軸と無関係とは考えられず、恐らく、住居の主軸は、この溝と何らかの関係が想起されるものの、何如にして測角を行なったか、又、そこまでして住居を構築せねばならなかったのか、未だ、明定し得る証左は検証出来ていない。

唯、住居の主軸が、このC12溝と大きく係ったことが重要であり、このC12溝は長期に亘ってその存続させるだけの重要な存在意義があったものと考えられる。今後他区での比較検討も重要であることから、結論は後日に期したい。

### 3 C区の各住居段階に伴う遺物

前段では、C区の各住居段階を設定した。ここで、前刊書で行なった様に各住居段階に該当する住居跡の出土遺物で「一括性」の高い遺物を抽出し、各住居段階毎の遺物様相を具体化させたい。これは、図化掲載したB・C区の出土遺物には、想定される住居の時期より古いと考えられる遺物でも、当該区では希少的な存在・8世代に想定される遺物も、国分寺建立との係わりや、8世紀中頃~後半に想定される住居が見出せなかった為に可能な限り図化掲載を行ない、

## 第5章 まとめ

単に住居の時期を求める為だけのものではなく、調査区内=遺跡の実態像を復原する為に必要と見なした遺物も図化掲載したことによる。以下、各段階毎に抽出したものを段階毎に概述したい。

### 第I段階（第719図）

第I段階は、該当する住居自体が少ない為抽出されたものも自ずと少ない。特徴としては、土師器環が主体を成し、甕類は極めて少ない。須恵器も環（身・蓋）は小形のもので、蓋の天井部は手持ち寛削りにより整形され宝珠も初期の形状を留めている。環以外では、短頸壺が1点で他に一括性の観点では異なるが、壺類乃至壺類の胴部片が多い。この須恵器を給供地（窯跡群）から見ると、乗附窯跡群からの給供である。土師器環類も同様に給供地で見ると、全てのものが藤岡窯跡群の胎土特徴が認められる。又、作製上の技法面から見ると口縁直下から寛削りを実施すること、口縁直下と底部の間の体部上半の外器面に“型甘帯”（甘い型帯を帯状に残す軽い皿で状）を残す二者の存在があり、後者は第II段階以降での盛行がある。この点では、当該段階を表徴する土師器環類では前者のものと考えられる。時間的には7世紀前代の盛行が想定される住居群である。

### 第II段階（第720図）

本段階は、第I段階で認められた様相が重複する。

土師器は、環・甕があり、環では丸底の形と楔状環の二者がある。丸底の形能には、体部が張り、丸味が強く寛削りの単位が細く、型作り時の器厚が厚いもの。口縁部が直立気味で丸味が浅く寛削りの一単位が担う大小関係がある。口縁部が直立気味で、体部の丸味が弱くやや直線的で、寛削りの一単位がやや粗いもの。器高がやや低く、丸味が多く、寛削りの一単位がやや粗いもの。大外で、器高が低く、口縁部が強く外反し外縁を有し、寛削りの一単位がやや粗いもの等がある。

甕は口縁部は強く外反し、口縁部に最大径を有する。表胴がほぼ全てを占める。その中で、肩が認められず円筒状のもの、胴部上半が緩やかに張る二者があり、後者には、強い寛削跡を残し、口縁部が器高が厚いものと、器高が比較的薄く均一な二者がある。

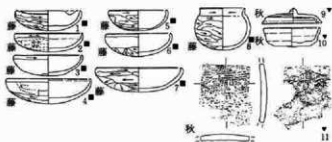
この三者の内前二者が古井・藤岡産と考えられ、後者が藤岡産と考えられる。

須恵器は環・高環・壺類がある。環は、身・蓋が逆転する以前のものと以後との二者があり、逆転以前のもは蓋の54のみで、55～57は逆転以後で身と蓋である。58は、大きな蓋と考えられるが、甕の可能性もある。59は、高環乃至脚付甕の可能性もある。壺類は、口縁部・肩部・胴部があり、口縁直下に凸帯を廻らせている。胴・肩部片は胴高が非常に薄い作りのものが目立っている。産地は、67・68が乗附窯跡群で他の全て秋間窯跡群の製品である。

### 第III段階（第721図）

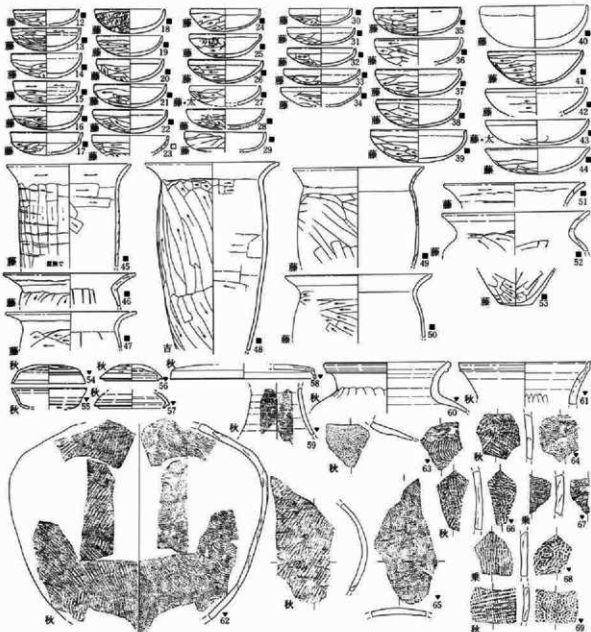
本段階の様相は全体的に前段階の様相が色濃く認められる。この中で、88の須恵器環は、底部が回転寛削りのもので本群中最も新しい様相である。生産地別では、土師器環が藤岡窯跡群で、同壺83～85が古井・藤岡窯跡群で、86・87が藤岡窯跡群である。須恵器では、98・100・102が乗附窯跡群で他は全て秋間窯跡群である。

第1節 南側調査区



- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 1 B15住 (359-1) | 2 B15住 (359-2)   |
| 3 B15住 (359-3) | 4 B5住 (332-2)    |
| 5 B5住 (332-1)  | 6 24・25住 (387-1) |
| 7 B15住 (359-4) | 8 B5住 (332-3)    |
| 9 B5住 (333-1)  | 10 B5住 (333-2)   |
| 11 B5住 (333-3) |                  |

第719図 C区第I段階住居跡出土土器類

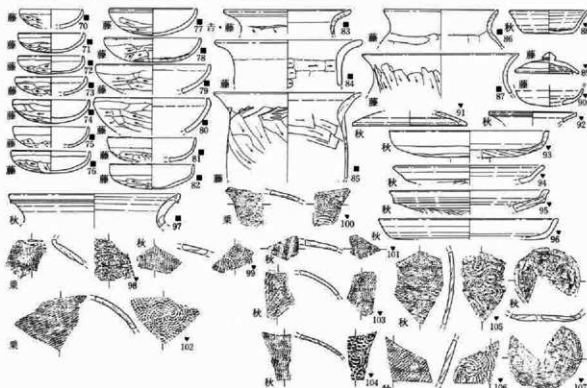


- |                 |                  |                  |                 |                  |
|-----------------|------------------|------------------|-----------------|------------------|
| 12 C48住 (112-2) | 13 C66住 (154-2)  | 14 C48住 (112-6)  | 15 C66住 (154-1) | 16 C37住 (94-8)   |
| 17 C37住 (94-1)  | 18 C37住 (94-5)   | 19 C48住 (112-3)  | 20 C37住 (94-2)  | 21 C37住 (94-7)   |
| 22 C37住 (95-1)  | 23 C144住 (292-1) | 24 C37住 (94-4)   | 25 C37住 (94-6)  | 26 C37住 (95-3)   |
| 27 C48住 (112-5) | 28 C144住 (292-3) | 29 C144住 (292-2) | 30 C48住 (112-1) | 31 C48住 (112-4)  |
| 32 C37住 (94-3)  | 33 C48住 (112-7)  | 34 C48住 (112-8)  | 35 C66住 (154-3) | 36 C144住 (292-4) |

第720図 C区第II段階住居跡出土土器類

第5章 まとめ

- |                   |                  |                  |                  |                  |
|-------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| 37 C37住 (95-4)    | 38 C37住 (95-5)   | 39 C37住 (95-6)   | 40 C37住 (96-1)   | 41 C37住 (95-7)   |
| 42 C48住 (112-10)  | 43 C48住 (112-9)  | 44 C144住 (292-5) | 45 C66住 (154-4)  | 46 C48住 (112-11) |
| 47 C144住 (292-7)  | 48 C48住 (112-12) | 49 C144住 (292-8) | 50 C144住 (292-9) | 51 C66住 (154-5)  |
| 52 C144住 (292-10) | 53 C66住 (154-6)  | 54 C37住 (95-2)   | 55 C48住 (112-15) | 56 C48住 (112-13) |
| 57 C48住 (112-14)  | 58 C48住 (113-1)  | 59 C37住 (96-2)   | 60 C143住 (290-3) | 61 C143住 (290-2) |
| 62 C48住 (113-8)   | 63 C37住 (96-3)   | 64 C48住 (113-4)  | 65 C48住 (113-7)  | 66 C48住 (113-2)  |
| 67 C48住 (113-3)   | 68 C48住 (113-5)  | 69 C48住 (113-6)  |                  |                  |



- |                 |                  |                  |                  |                 |                 |
|-----------------|------------------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|
| 70 C9住 (25-1)   | 71 C9住 (25-3)    | 72 C9住 (25-2)    | 73 C9住 (25-4)    | 74 C10住 (30-1)  | 75 B19住 (375-1) |
| 76 C9住 (25-5)   | 77 C8住 (24-1)    | 78 C109住 (255-1) | 79 C9住 (25-6)    | 80 C10住 (30-2)  | 81 B19住 (375-3) |
| 82 B19住 (375-2) | 83 C109住 (255-2) | 84 C10住 (30-3)   | 85 C9住 (28-2)    | 86 C9住 (25-12)  | 87 C9住 (28-1)   |
| 88 B19住 (375-4) | 89 C9住 (25-8)    | 90 C9住 (25-11)   | 91 C109住 (255-3) | 92 C9住 (28-8)   | 93 C9住 (28-5)   |
| 94 C9住 (28-3)   | 95 C9住 (28-4)    | 96 C9住 (28-6)    | 97 B19住 (375-6)  | 98 C9住 (28-9)   | 99 C9住 (28-10)  |
| 100 C9住 (28-12) | 101 C9住 (28-11)  | 102 C9住 (28-15)  | 103 C9住 (28-13)  | 104 C9住 (28-14) | 105 C9住 (29-1)  |
| 106 C9住 (29-2)  | 107 C9住 (29-3)   |                  |                  |                 |                 |

第721図 C区第Ⅲ段階住居跡出土土器類



- 108 C51住 (120-2) 109 C88住 (214-1)  
110 C51住 (120-1)

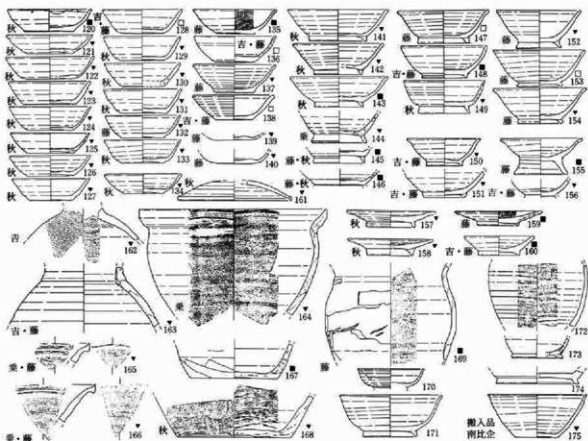
第722図 C区第Ⅳ段階住居跡出土土器類



- 111 C76住 (178-1) 112 C76住 (178-2)  
113 C106住 (246-1) 114 C76住 (178-3)  
115 C76住 (178-4) 116 B22住 (382-6)  
117 C74住 (174-4) 118 B22住 (382-7)  
119 B22住 (382-8)

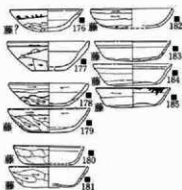
第723図 C区第Ⅴ段階住居跡出土土器類 (1)





- |                   |                   |                   |                  |                   |                   |
|-------------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------------|-------------------|
| 120 C74住 (173-3)  | 121 C72住 (165-2)  | 122 C55住 (130-9)  | 123 C55住 (130-7) | 124 C55住 (130-8)  | 125 C74住 (173-1)  |
| 126 C72住 (165-1)  | 127 C56住 (130-6)  | 128 C76住 (178-7)  | 129 C55住 (130-3) | 130 C56住 (130-2)  | 131 C56住 (130-4)  |
| 132 C55住 (130-1)  | 133 C76住 (178-6)  | 134 C55住 (130-5)  | 135 B22住 (381-1) | 136 C76住 (178-8)  | 137 C72住 (165-3)  |
| 138 C168住 (218-1) | 139 C56住 (130-14) | 140 C55住 (130-13) | 141 B4住 (330-5)  | 142 B22住 (381-5)  | 143 B22住 (382-2)  |
| 144 C55住 (130-16) | 145 C74住 (174-2)  | 146 C74住 (174-1)  | 147 B22住 (381-4) | 148 B22住 (381-3)  | 149 C76住 (178-9)  |
| 150 C89住 (200-1)  | 151 C55住 (130-17) | 152 C85住 (206-1)  | 153 B22住 (382-1) | 154 C13住 (39-1)   | 155 C80住 (201-1)  |
| 156 C85住 (206-2)  | 157 B22住 (382-5)  | 158 B22住 (382-4)  | 159 C74住 (173-2) | 160 B22住 (382-3)  | 161 C55住 (131-3)  |
| 162 C55住 (131-5)  | 163 C85住 (206-3)  | 164 C55住 (131-9)  | 165 C55住 (131-6) | 166 C55住 (131-7)  | 167 C85住 (207-3)  |
| 168 C55住 (131-8)  | 169 C85住 (207-2)  | 170 C89住 (200-3)  | 171 C89住 (200-2) | 172 B22住 (382-14) | 173 C55住 (131-12) |
| 174 B22住 (382-15) | 175 B22住 (381-2)  |                   |                  |                   |                   |

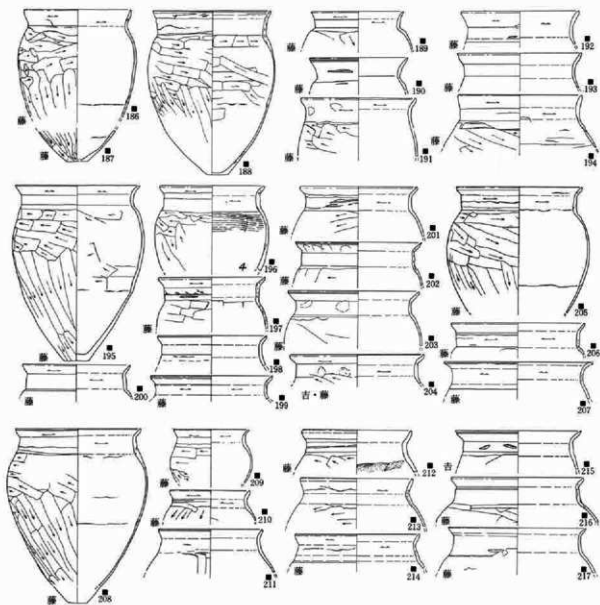
第724図 C第V段階住居跡出土土器類 (2)



- |                   |                   |                   |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| 176 C139住 (382-1) | 177 B1住 (306-3)   | 178 B1住 (306-2)   |
| 179 B16住 (361-1)  | 180 C24住 (73-1)   | 181 C115住 (269-1) |
| 182 B11住 (343-1)  | 183 C146住 (294-2) | 184 C146住 (294-1) |
| 185 B1住 (306-1)   | 186 B20住 (377-6)  | 187 B16住 (364-2)  |
| 188 C54住 (125-1)  | 189 C46住 (108-2)  | 190 B8住 (337-4)   |
| 191 B16住 (363-14) | 192 B11住 (345-1)  | 193 C142住 (287-2) |
| 194 B20住 (377-7)  | 195 C135住 (282-7) | 196 B2住 (323-4)   |
| 197 C115住 (269-6) | 198 C54住 (124-6)  | 199 B1住 (310-3)   |
| 200 C115住 (269-5) | 201 B16住 (363-15) | 202 C146住 (294-4) |
| 203 C128住 (252-1) | 204 B16住 (363-16) | 205 C17住 (50-1)   |
| 206 C46住 (108-3)  | 207 B11住 (345-3)  | 208 C115住 (269-7) |
| 209 B1住 (310-1)   | 210 C46住 (108-1)  | 211 C54住 (124-5)  |
| 212 B28住 (382-1)  | 213 B1住 (310-2)   | 214 B11住 (345-2)  |
| 215 B8住 (337-5)   | 216 C142住 (287-3) | 217 C128住 (252-2) |

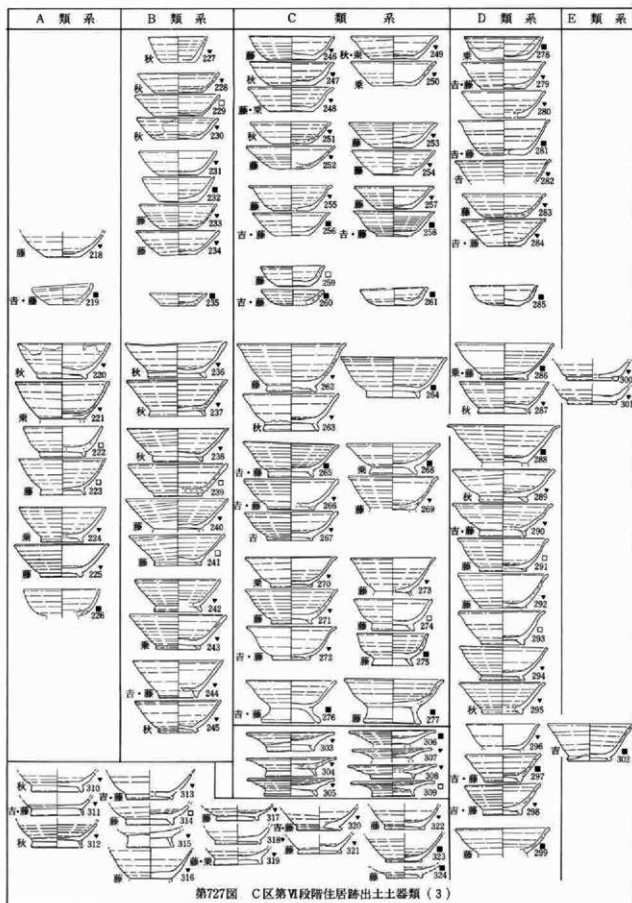
第725図 C区第VI段階住居跡出土土器類 (1)

第5章 まとめ

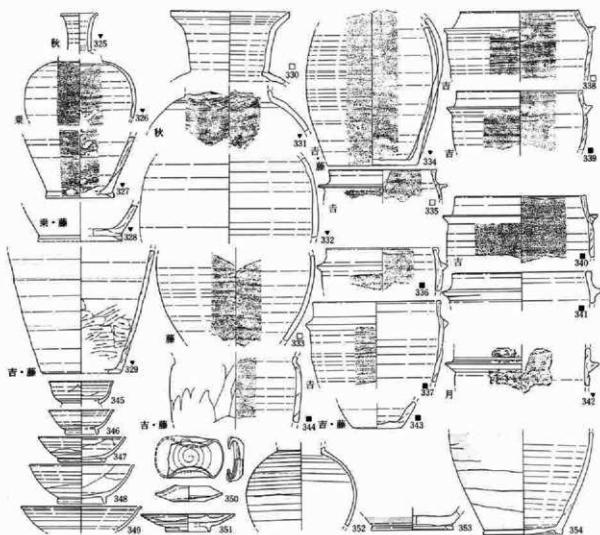


- |                     |                     |                     |                     |                     |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 218 B 1 住 (309-14)  | 219 C 119 住 (275-1) | 220 B 1 住 (309-12)  | 221 B 45 住 (419-1)  | 222 C 77 住 (182-5)  |
| 223 B 1 住 (309-8)   | 224 B 1 住 (309-6)   | 225 B 8 住 (337-2)   | 226 C 121 住 (251-2) | 227 C 115 住 (268-2) |
| 228 C 119 住 (275-2) | 229 C 24 住 (73-2)   | 230 B 1 住 (309-1)   | 231 C 28 住 (85-1)   | 232 C 77 住 (182-1)  |
| 233 C 115 住 (268-4) | 234 B 1 住 (309-2)   | 235 C 121 住 (251-1) | 236 C 46 住 (107-3)  | 237 C 54 住 (124-3)  |
| 238 B 16 住 (361-6)  | 239 C 58 住 (142-7)  | 240 B 16 住 (363-4)  | 241 B 16 住 (363-1)  | 242 C 24 住 (73-3)   |
| 243 C 58 住 (142-6)  | 244 B 1 住 (309-10)  | 245 B 1 住 (309-7)   | 246 B 1 住 (309-4)   | 247 B 11 住 (343-2)  |
| 248 C 58 住 (142-2)  | 249 B 16 住 (361-3)  | 250 C 115 住 (269-1) | 251 C 115 住 (268-5) | 252 C 77 住 (182-4)  |
| 253 B 20 住 (377-1)  | 254 B 1 住 (309-3)   | 255 B 1 住 (309-5)   | 256 C 116 住 (271-2) | 257 B 28 住 (391-1)  |
| 258 C 116 住 (271-3) | 259 C 79 住 (192-3)  | 260 C 79 住 (192-1)  | 261 C 79 住 (192-5)  | 262 C 58 住 (142-9)  |
| 263 C 46 住 (107-2)  | 264 C 24 住 (73-4)   | 265 B 20 住 (377-3)  | 266 B 11 住 (344-2)  | 267 B 11 住 (344-1)  |
| 268 C 119 住 (275-3) | 269 C 58 住 (142-3)  | 270 B 16 住 (361-5)  | 271 C 38 住 (142-5)  | 272 B 1 住 (309-9)   |
| 273 C 17 住 (49-2)   | 274 C 72 住 (182-2)  | 275 C 79 住 (192-6)  | 276 C 79 住 (194-2)  | 277 C 142 住 (286-3) |
| 278 C 142 住 (286-1) | 279 C 17 住 (49-1)   | 280 C 28 住 (85-2)   | 281 B 8 住 (337-1)   | 282 C 54 住 (124-2)  |
| 283 C 58 住 (142-1)  | 284 B 16 住 (361-2)  | 285 C 79 住 (192-4)  | 286 C 116 住 (271-4) | 287 B 1 住 (309-11)  |
| 288 C 28 住 (85-6)   | 289 B 16 住 (363-3)  | 290 B 16 住 (363-2)  | 291 C 58 住 (142-4)  | 292 C 146 住 (294-3) |
| 293 C 28 住 (85-5)   | 294 C 115 住 (269-2) | 295 C 28 住 (85-4)   | 296 C 28 住 (85-3)   | 297 C 78 住 (190-2)  |
| 298 C 78 住 (190-1)  | 299 C 142 住 (286-2) | 300 C 17 住 (49-3)   | 301 C 17 住 (49-4)   | 302 C 54 住 (124-1)  |
| 303 B 16 住 (363-11) | 304 C 77 住 (182-6)  | 305 C 46 住 (108-4)  | 306 C 17 住 (49-5)   | 307 B 16 住 (363-10) |
| 308 B 16 住 (363-12) | 309 C 79 住 (194-3)  | 310 B 20 住 (377-4)  | 311 B 2 住 (323-3)   | 312 B 11 住 (344-12) |

第726図 C区第VI段階住居跡出土土器類 (2)

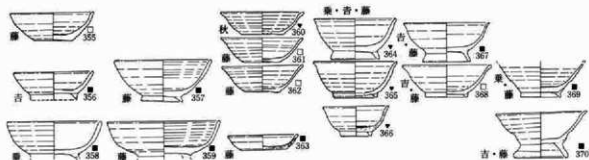


第277图 C区第VI段附住居跡出土土器類(3)



- |                   |                   |                   |                   |                   |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 313 B28住 (391-2)  | 314 B16住 (363-9)  | 315 C24住 (73-5)   | 316 C46住 (107-1)  | 317 B11住 (344-11) |
| 318 B20住 (377-5)  | 319 C24住 (73-6)   | 320 B11住 (344-9)  | 321 B16住 (363-8)  | 322 C58住 (142-10) |
| 323 C28住 (85-7)   | 324 B16住 (363-6)  |                   |                   |                   |
| 325 B11住 (345-5)  | 326 C115住 (270-2) | 327 C78住 (190-4)  | 328 B28住 (392-2)  | 329 B16住 (364-1)  |
| 330 C77住 (182-9)  | 331 C54住 (125-2)  | 332 B11住 (345-8)  | 333 C79住 (194-8)  | 334 C79住 (194-6)  |
| 335 C79住 (194-10) | 336 B2住 (323-6)   | 337 B11住 (345-4)  | 338 C79住 (195-1)  | 339 C79住 (194-9)  |
| 340 C78住 (190-5)  | 341 C58住 (142-13) | 342 B16住 (363-17) | 343 C79住 (194-4)  | 344 C79住 (194-5)  |
| 345 C135住 (282-5) | 346 B1住 (310-7)   | 347 C24住 (73-7)   | 348 C116住 (272-7) | 349 C17住 (51-1)   |
| 350 C58住 (143-1)  | 351 B16住 (364-3)  | 352 B16住 (364-4)  | 353 B11住 (346-1)  | 354 C145住 (293-4) |

第728図 C区第VI段階住居跡出土土器類(4)



第729図 C区第VI段階住居跡出土土器類(1)

## 第IV段階（第722図）

第IV段階は、前段階から時間差が長くあり、様相も少ないながら非常に異なっている。土師器は注出出来なかった。須恵器は3点有り、坏1点・2点がある。

108は器高が低く底径が広い。轆轤水挽気が早く秋間窯跡群の特徴としてとらえられる。

109は体部が直線的で器厚が厚い。110は底径がやや広く、体部大半が張り、前刊第3分冊で分類したD類の特徴を偏在しており、類系のである。

秋間窯跡群で、109が不詳であるが乗附窯跡群である可能性が高い。110は藤岡窯跡群である。

## 第V段階（第723・724図）

本段階では、土師器坏が平底のものしか認められない。孰れも型作りである。壺は、「コ」の字状口縁のものが認められる。須恵器では、坏が多い。121～127は底径が広く器高もやや低い。120～127は、秋間窯跡群の製品である。128～134は、同様に底径が低い。この中で129～131・133・134が秋間窯跡群の製品で128、132が藤岡窯跡群の製品である。これらの中には、前刊第3分冊で坏・類を分類したB・D類系等が混在するかの如くであるが、全体的にB乃至D類的要素が強い。135～146は藤岡乃至吉井・藤岡窯跡群の製品である。この中で、137・138は、前段階の110の如く、轆轤目が非常に細かい。この一群から、前刊書中の分類が該当し、C・D類系に該当する。141～146・149は、A・B類系のもので、1421点がB類系である。生産地は、全て秋間窯跡群での生産と考えられるが、145・146は藤岡乃至乗附窯跡群の可能性も考慮される。147・148・150～156は、D類系のもので、孰れも吉井乃至藤岡窯跡群の製品である。

皿形が初出している。157・156は底径が広く秋間窯跡群の製品である。159は、内黒の皿で147・158よりD類がやや小さいが、底径が目立って小さい。160は159と底径はほぼ同じであるが口径が小さい為、体部・口縁部が鋭く立ち上がる。この2点は、藤岡及び吉井・藤岡窯跡群の製品である。その他の須恵器は、甌・鉢が認められる。生産地は、167が不詳で、168が秋間窯跡群で他は吉井及び藤岡及び吉井・藤岡窯跡群の製品である。

## 第VI段階（第725～728図）

土師器坏は底部で二分され、底径が非常に小さいものと大きいものがある。178～181藤岡窯跡群の製品で同系列のものと考えられ、180・181と182～185も同系列と考えられる。

壺類は4分類で認められ、186は「コ」字状D類の出現以前の器形出であるが、口縁部が受け口状になっている1点が注意される。188～194は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外傾する一群。195～207は、口縁部が外反する一群。208～217は、内傾する頸部が外反して立ち上がる一群で、全て藤岡窯跡群の製品である。東毛系の「コ」字状口縁の壺は認められない。

須恵器・土師器土器では、前刊第3分冊で分類したA～Eの器形が揃う、然し、全てが、各分類の器形が完成されていない。特に、C・D分類系では、A分類系に該当するものも含まれておこの逆も是認されることである。A分類系では、秋間・乗附・藤岡・吉井藤岡窯跡群生産品が混在し、B分類系もA分類系同様である。C分類系では藤岡が主体を占め、吉井及び吉井・藤岡が次いであり秋間が数例認められる。D分類系では、C分類系同様である。E分類系では、吉井窯跡群が1点記載されただけである。又、全体の中では、藤岡窯跡群生産品のもは、前段階で指摘が出来た様に、轆轤目が細かい点为本段階でも指摘できる。

皿形では、秋間窯跡群のものと、藤岡窯跡群の製品に二分分別出来る。秋間窯跡群の製品は、前段階の皿

## 第5章 まとめ

と所見が近似している。

他の器種では、瓶種が多く認められ、332～334の如く、羽釜に類似する整形痕が認められるものもある。生産地は、秋間・乗附・吉井・藤岡・吉井・藤岡窯跡群がある。特に羽釜に類するものは吉井・藤岡が占めている。羽釜は本段階より出現する。吉井型甲種（後述）が占め、月夜野型羽釜1点が出土している。

灰軸は、皿・瓶が認められ、全て浸し掛けである。

### 第VII段階（第729・730図）

須恵器・土師器土器では、土師質土器が主体を占めている。A分類系では355～359があり、B・E分類系は認められない。C分類系は360～366があり、D分類系では367～370がある。

その他の須恵器では、瓶が認められる。375は鉢であるが、技法は羽釜と同じであり、羽釜の制作者が作った可能性は大であり、前段で認められるように、羽釜と瓶に系譜的に繋がる可能性がある。

羽釜は、吉井型甲壹種類・種乙が認められる。

本段階では新たに土釜が出現している。390・391は、孰れも、吉井窯跡群での生産であり、須恵器窯跡の吉井窯跡群で焼造された点では、工人の系譜が須恵器工人の系譜となる。

### 第VIII段階（第731・732図）

土師器土器が、全である。本段階より小型化の傾向が顕著で、皿も見られる。A～E分類では、A分類系396～400があり、B分類系で401～409、C分類系で410～427、D分類系で428～441、E分類系は該当なしである。産地が判断出来たものは少数であった。

土釜は、孰れも吉井産のものである。

羽釜は、吉井型甲壹種442～450・乙種456～460・吉井型乙壹種462～471の吉井型羽釜が認められる。又、月夜野型羽釜が3点認められ、産地不詳の羽釜が475が1点有る。

その他では土師器壺が認められ、須恵器（土師器）瓶もやや多い。485は内黒の浅鉢である。灰軸は、皿・瓶が認められる。

### 第IX段階（第733図）

第VIII段階同様の器種組成である。土師器土器は、坏・皿が第VIII段階より更に小型化し器高が低下する。は、足高台のものが主体である。分類系列では、A分類系が492、B分類系が493～499、C分類系が500～515である。

羽釜は吉井型乙壹種516・517がある。土釜は、519～521で全て吉井窯跡群産である。

その他では、518の瓶があり、技術的には羽釜の甲貳種に対比される。灰軸は、皿が2点認められる。

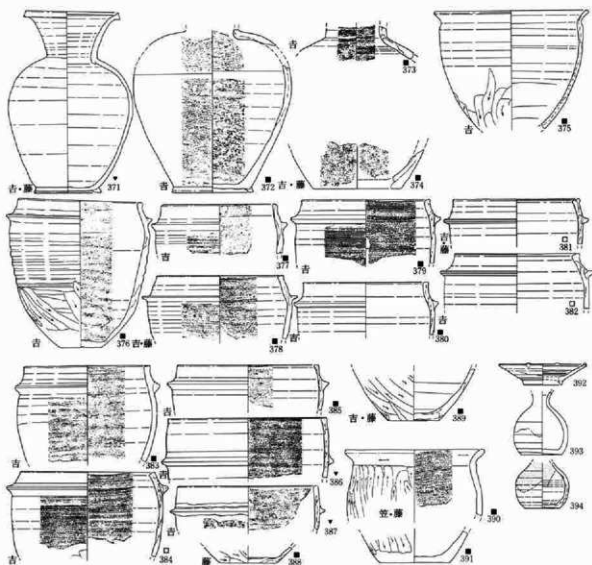
### 第X段階（第734図）

遺物は非常に少ない。これは当該の住居自体が少ない点も原因である。

土師器土器皿は、525 1点、527、528は土釜で吉井窯跡群産であり、529は吉井型羽釜乙貳種である。灰軸は皿が1点認められる。

各住居段階の遺物は第719図～第734図に図示した、そして、様相は前述したとおりである。このC区で検

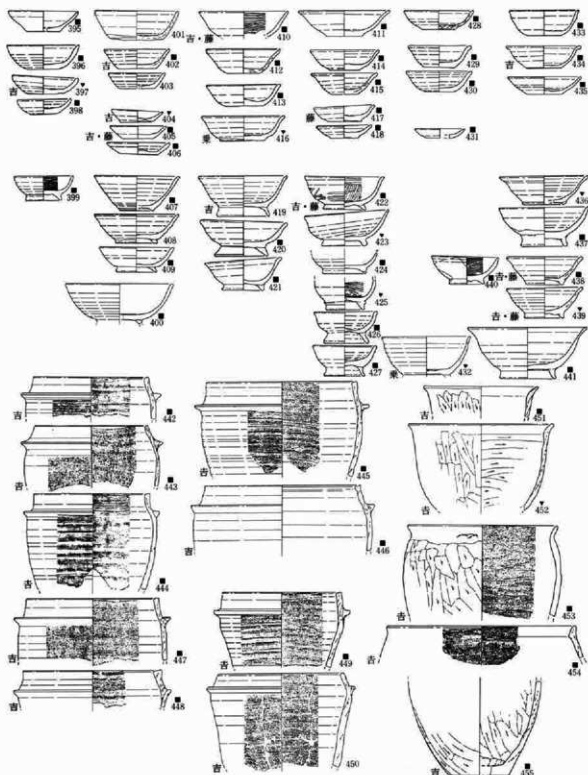
第1節 南側調査区



- |                    |                      |                     |                     |                     |
|--------------------|----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 355 B 2 住 (322-1)  | 356 C 49 住 (114-1)   | 357 B 2 住 (323-1)   | 358 C 114 住 (266-4) | 359 B 2 住 (323-2)   |
| 360 C 12 住 (36-1)  | 361 B 13 住 (349-1)   | 362 B 13 住 (349-2)  | 363 C 69 住 (160-1)  | 364 C 103 住 (257-2) |
| 365 B 2 住 (322-2)  | 366 C 103 住 (257-1)  | 367 C 114 住 (266-1) | 368 C 103 住 (257-3) | 369 B 44 住 (417-4)  |
| 370 C 114 (266-2)  |                      |                     |                     |                     |
| 371 C 21 住 (64-5)  | 372 C 114 住 (266-10) | C 49 住 (114-3)      | 374 B 2 住 (324-4)   |                     |
| 375 C 63 住 (151-1) | 376 B 2 住 (323-8)    | 377 B 2 住 (323-7)   | 378 B 2 住 (323-10)  | 379 C 49 住 (115-4)  |
| 380 C 63 住 (151-2) | 381 B 30 住 (396-1)   | 382 B 20 住 (396-2)  | 383 B 2 住 (323-9)   | 384 C 49 住 (115-5)  |
| 385 B 3 住 (328-6)  | 386 C 49 住 (115-6)   | 387 C 68 住 (157-2)  | 388 B 2 住 (324-2)   | 389 B 2 住 (324-1)   |
| 390 B 2 住 (323-5)  | 391 B 2 住 (324-3)    | 392 C 114 住 (266-8) | 393 C 114 住 (266-9) | 394 C 63 住 (151-3)  |
| 395 C 11 住 (33-11) | 396 C 11 住 (33-10)   | 397 B 10 住 (340-2)  | 398 C 29 住 (89-2)   | 399 C 96 住 (228-4)  |
| 400 C 19 住 (57-1)  | 401 C 152 住 (302-1)  | 402 C 82 住 (203-2)  | 403 C 29 住 (89-3)   | 404 C 23 住 (70-3)   |
| 405 C 23 住 (70-2)  | 406 C 29 住 (89-4)    | 407 C 20 住 (59-2)   | 408 C 19 住 (56-3)   | 409 C 26 住 (81-4)   |
| 410 C 71 住 (161-2) | 411 C 96 住 (228-3)   | 412 C 104 住 (239-1) | 413 C 11 住 (33-9)   | 414 C 26 住 (80-2)   |
| 415 C 26 住 (80-1)  | 416 C 39・41 (98-1)   | 417 B 27 住 (389-1)  | 418 C 16 住 (40-1)   | 419 C 42 住 (100-3)  |
| 420 C 11 住 (33-13) | 421 C 11 住 (33-2)    | 422 C 19 住 (56-2)   | 423 C 23 住 (70-4)   | 424 C 19 住 (56-1)   |
| 425 B 38 住 (401-1) | 426 C 11 住 (33-11)   | 427 C 11 住 (33-12)  | 428 C 82 住 (203-1)  | 429 C 20 住 (59-1)   |

第730図 C区第VI段階住居跡出土土器類(3)

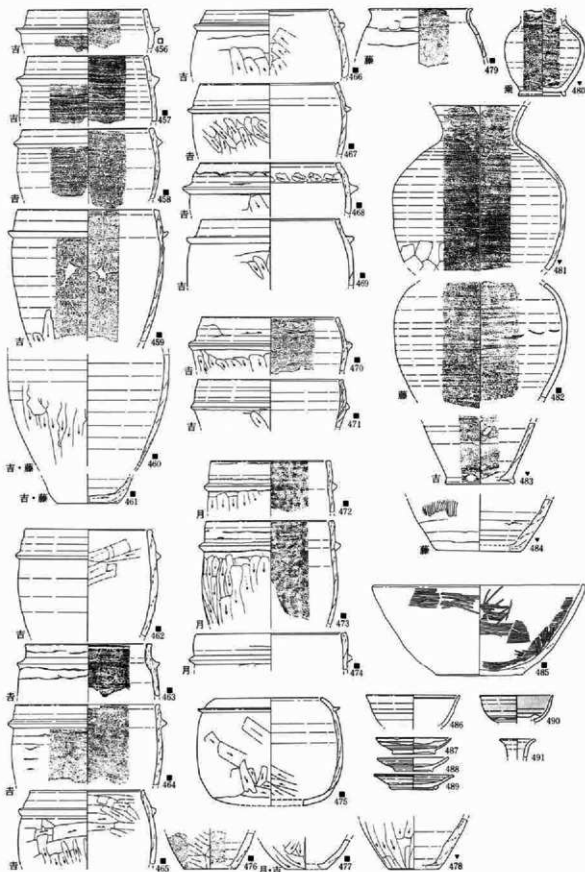
第5章 まとめ



- |                  |                  |                   |                  |                  |
|------------------|------------------|-------------------|------------------|------------------|
| 430 C27住 (88-1)  | 431 C23住 (70-1)  | 432 C152住 (302-2) | 433 C26住 (80-3)  | 434 C42住 (100-2) |
| 435 C96住 (228-2) | 436 C26住 (59-3)  | 437 C11住 (33-3)   | 438 C78住 (190-2) | 439 C78住 (190-1) |
| 440 C96住 (228-5) | 441 C11住 (33-4)  | 442 C42住 (101-2)  | 443 C76住 (162-2) | 444 C42住 (101-1) |
| 445 C26住 (82-3)  | 446 C96住 (229-1) | 447 C78住 (190-5)  | 448 C19住 (57-5)  | 449 C82住 (203-4) |
| 450 C26住 (82-1)  | 451 B38住 (401-4) | 452 C19住 (57-3)   | 453 C23住 (70-5)  | 454 C14住 (41-1)  |
| 455 C20住 (61-6)  | 456 C19住 (57-4)  | 457 C16住 (47-3)   | 458 C26住 (82-2)  | 459 B38住 (402-2) |

第731图 C区第Ⅷ段階住居跡出土土器類(1)

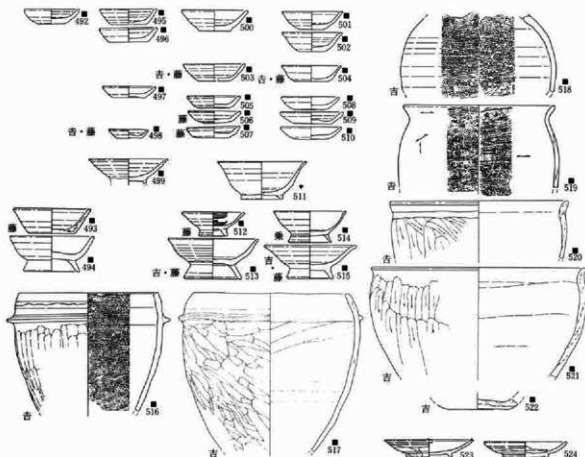




第732图 C区第Ⅶ段階住居跡出土土器類(2)

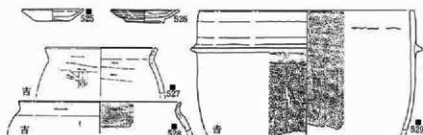
第5章 まとめ

460 C96住 (229-2)	461 C71住 (162-1)	462 C26住 (81-9)	463 C11住 (33-8)	464 C86住 (210-3)
465 C20住 (61-4)	466 C20住 (61-5)	467 C96住 (228-7)	468 C96住 (228-8)	469 C96住 (228-10)
470 C96住 (228-6)	471 C96住 (228-9)	472 C42住 (101-3)	473 C42住 (101-4)	474 C34住 (93-1)
475 C14住 (41-3)	476 C96住 (229-4)	477 C96住 (229-3)	478 C20住 (61-7)	479 C82住 (203-3)
480 C42住 (100-5)	481 C19住 (57-2)	482 C42住 (100-6)	483 C78住 (190-4)	484 C78住 (190-6)
485 B38住 (341-1・402-1)	486 C19住 (57-6)	487 C11住 (33-6)	488 C34住 (93-2)	
489 C16住 (46-4)	490 C16住 (46-3)	491 C82住 (203-5)		



492 C27・29住 (89-2)493	C56住 (135-2)	494 C18住 (53-7)	495 C27・29住 (89-3)496	C62住 (148-3)
497 C62住 (148-2)	498 C62住 (155-2)	499 C18住 (53-6)	500 C18住 (53-3)	501 C18住 (53-1)
502 C18住 (53-2)	503 B17住 (370-2)	504 B17住 (370-2)	505 C62住 (148-1)	506 C67住 (155-1)
507 C56住 (135-1)	508 C65住 (153-2)	509 C27・29住 (89-4)510	C65住 (153-1)	511 C18住 (53-8)
512 C67住 (155-3)	513 C67住 (155-6)	514 C67住 (155-4)	515 C67住 (155-5)	516 C18住 (54-1)
517 C18住 (54-2)	518 C18住 (53-9)	519 C51住 (43-2)	520 C56住 (136-1)	521 C56住 (136-2)
522 C66住 (153-3)	523 C56住 (135-3)	524 C22住 (67-5)		

第733図 C区Ⅶ段階住居跡出土土器類 (2)



525 C50住 (118-1)
526 B29住 (408-10)
527 C50住 (118-7)
528 C97住 (233-2)
529 C39・41 (98-11)

第734図 C区Ⅷ段階住居跡出土土器類



## 第5章 まとめ

ワ																								0	
ヲ																									1
ル																									9
ヌ																									8
リ																									8
チ																									6
住	103	104	105	106	107	108	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	123	124	127	128	129	小計	
A	VI	VII	VII	VIII	~IV	IV	V	VI	?	V	VII	VI	VIII	V	VI	?	?	?	IX	VIII	VII	VI	V	VI	36

ワ																									0			
ヲ																									1			
ル																									6			
ヌ																									4			
リ																									4			
チ																									7			
住	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	小計				
A	?	?	?	?	VII	IV	V	?	VIII	VII	IV	V	?	IV	V	VI	IV	V	VII	VIII	~IV	VI	VI	VII	VIII	IV	V	28

ワ																									0					
ヲ																									2					
ル																									3					
ヌ																									0					
リ																									7					
チ																									11					
住	B 1	B 2	B 3	B 4	B 6	B 7	B 8	B 9	B 10	B 11	B 12	B 13	B 14	B 16	B 17	B 18	B 20	B 21	B 22	B 23	B 25	B 27	B 28	小計						
A	IV	V	VI	VI	IV	VI	VI	V	IV	V	IX	IV	V	?	VI	IV	V	V	VIII	IX	IV	V	?	IV	V	VIII	IX	V	VI	34

ワ																									0				
ヲ																									1				
ル																									6				
ヌ																									25				
リ																									3				
チ																									45				
住	B 29	B 30	B 31	B 32	B 33	B 34	B 35	B 38	B 39	B 40	B 41	B 42	B 44	B 45	小計	小計													
A	?	V	VI	V	?	IV	?	V	VIII	VII	IX	VIII	~IV	?	VI	V	13	198											

- I — 7世紀中葉  
 II — 7世紀後半  
 III — 8世紀前半  
 8世紀中葉  
 8世紀後半  
 9世紀前半  
 IV — 9世紀中葉  
 V — 9世紀後半  
 VI — 10世紀前半  
 VII — 10世紀中葉  
 VIII — 10世紀後半  
 IX — 11世紀前半  
 X — 11世紀中葉

第736図 住居存続の見なし一覧表(2)

出された住居の各住居段階の遺物様相は、D区の各住居段階の様相と若干異なる部分がある。特にC区の第VI段階とD区の第I段階では、C区第VI段階では羽釜が出現しているものの、D区第I段階では認められず、第II段階での顕著な様相である。だが、D区に於ける第I段階（C区の第VI段階）の住居は、量的に少ないという反面がある。然し、筆者が行っているこの方法からすれば、C区の第VI段階の住居は、存続期間が長かったのか第VI段階の後半に住居構築が集中し、そのまま第VII段階の時期まで存続したことを想定した方が妥当性がある。この点からすれば、第VII段階住居が、第VI段階の住居数に比較し少ないという現象がなければならず、この視点で、第VI・第VII段階の住居を比較すれば、前者が34軒・後者が19軒あり、机上での推定では、第VI段階の住居が、第VII段階の住居が存続する間での廃棄が多かったことを推定しておきたい。

#### 4 まとめにかえて

C区の住居形状第I段階～第X段階のうち、第VI段階の住居形状は、前刊第3分冊で記述したD区の第I段階～第V段階に対比され、D区での所見は、C区でも合致することが確認出来た。

そして、B・C区で検出された住居跡の存続機関を住居形状・遺物様相から検出した結果が第・表である。この中で、判然としない住居は、切り合い関係が多く、形状・遺物での検証が不充分であったものである。

前刊第1分冊のまとめの中で、「内在する2点の問題」を抽出した。この2点の問題点のうち後者は、「中間地域での世代継続が本当にあったのか」という点を上げた。そして、これは、検出された住居が非常に夥しい中でこれが「集落論」として展開出来るのかという基本問題でもあった。そして、中間地域はその立地からも非常に特殊性を帯びている為、住居跡の密集＝集落として認識が出来るのかということである。この点は、中間地域で検出された住居跡が一体何であったのかということでもある。

今回及・前回の住居形状の分析を通じ、一つ感じているのは、「世代継続は有る」という点である。ただし、これが、C区第I～X段階ということではなく、少なくとも2～3段階では容認出来るであろうと考えている。その根拠としては、住居形状の推移と遺物（土師類）の在り方から、遺物が、長期に亘り住居と共に時間軸上継続が認められる点にほかならないのであるが、当中間地域での遺物（土師器）は、全てが搬入品であり、人と共に搬入と定着があった可能性も内在しており、確実視できるものではない。この点を検証するには、周辺遺跡との検討が、当遺跡でのこれらの作業より重要である。即、通有に云々される集落を確実に露呈させることである。しかし、この問題に対し、各調査報告書は何ら記述もないしそれに取り込む姿勢すら感じられず遺物だけの編年に終始している。唯単に「一般集落である」との記述が認められても、その根拠は一行の文としても検証がないのである。少なくとも、当時は律令社会であり、律令の社会での一般集落の概念の確定されていない状況下では「一般集落」と記述しても遺跡の性格の解明が及ぼされていないのであれば端なる絵空餅である。

今後、上述の問題点を解明せねば、中間地域の奈良・平安時代は一体何であったのか、単に住居跡が多く検出された遺跡で終わってしまう。筆者の置かれる現状では報告書を作成するのが精一杯であり、今後尚多くの時間を費すと思うが、前刊書で上げた、問題解明に微力を尽くしたい。

## 第2項 金属器類と砥石類について

### はじめに

前刊第3分冊と今次の第4分冊中で図化掲載した鉄器は非常に夥しい量がある。この掲載量は総数点であり、遺跡内出土のものは全てを図化掲載した。又、遺跡外のものであっても当該期に確實伴うと考えられる鉄器も図化掲載した。そして、当遺跡（B・C・D区）での出土量は通有の当該期で住居跡を主体とする遺跡に対比させた場合10倍近い量である。又、当該報告区内では、2軒の小鍛冶施設を伴う住居の検出があった。そして、この二軒の住居跡の存在に原因するのか、B・C区内での、鉄滓、羽口の出土量も多かった。本項は、後年鉄器をまとめるつもりであるが、中間的に特に多いB・C区の鉄器の在り方を記述したい。又、詳細な分析は後年実施するつもりである。

### 1 出土種

出土した鉄器品の種類は、利器・工具・農具・武具・その他がある。以下の種類毎の製品・数量がある。

- ・利器—刀子49本。
- ・工具—鑿1点・紡錘車6点。
- ・農具—鋤先1点・鎌2本。
- ・武具—小刀1振・鏃<sup>註2</sup>8本・鏃矛1本。
- ・調度—匙1点・座金物1点。
- ・その他—釘140本・鉄2点・火打鎌<sup>2</sup>2点。

この中で、その他としたものは、通有知見での器種の類別判断が出来なかったものが多く、且、通有の遺跡での出土が無いことから、当遺跡での特徴であることが指摘出来る。以下類別毎に若干記述する。

#### 利器

##### 刀子

刀子は49本の出土がある。この中で、廃棄時に完存品乃至完存に近い形状で廃棄されたものは6点ある。百分率では12.2%を占め、約1割強の数値である。残りの43本は欠損品で、特に個々の欠損と考えられるものに、C34・74・77・96住で4点あり、全体での百分率では0.8%。欠損品の中では、9.3%で両者共に1割を切っている。又、欠損品での出土部位では、茎8点・茎及び関周辺14点・刀身19点・鎌欠損2点があり、欠損品の中での百分率は、順に工具18.6%・32.6%・44.1%・4.6%であり、茎及び関周辺と刀身だけの出土が非常に多点が指摘出来る。

刀子の完存品は6点であるが、この6点には、形状と使用後形状（研ぎ方）で四者の分類が可能であり列記すれば以下のとおりである。

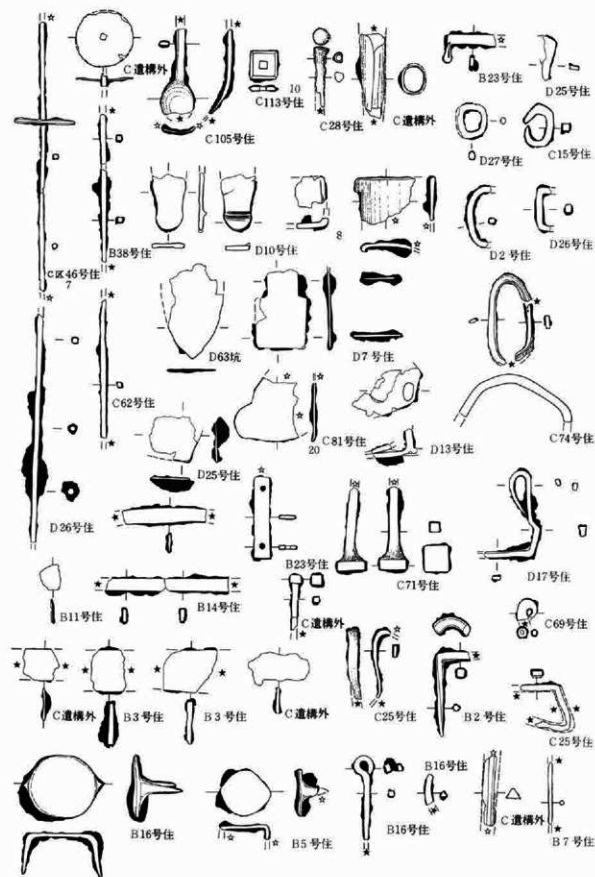
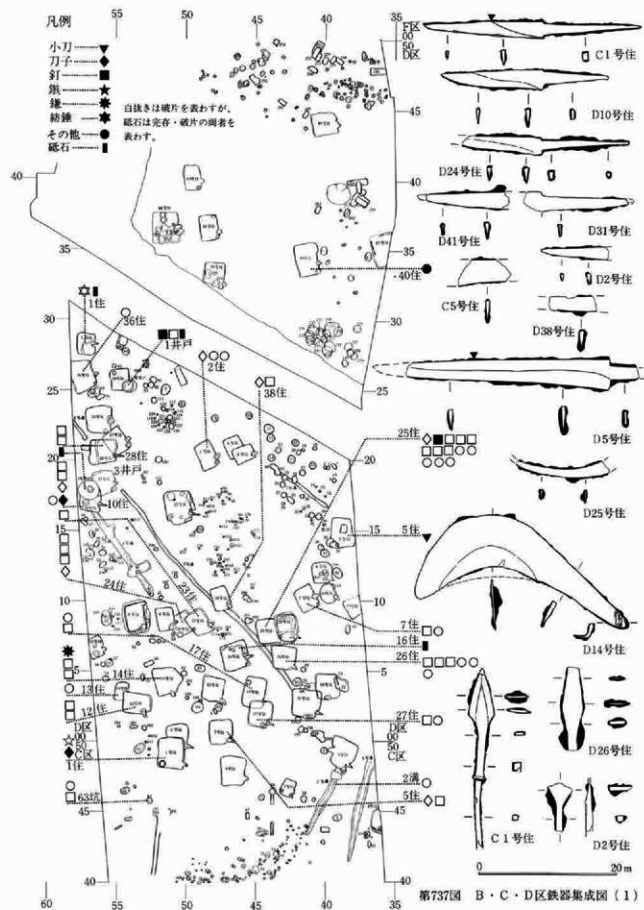
- ①身幅が広く、棟関が大きいもの。
- ②身幅は狭いが、研ぎ減りが刃関に向かい弧を呈する状態のもの。
- ③身幅が狭く直線的に刃部が研ぎ減るもの。
- ④研ぎ減りが顕著で、刀身が鈍く尖るもの。

この内、③は、他の研ぎ減りが直線的であり、他のものと異なっている。恐らく、削られる主体物に依り異なるものと考えられる。

#### 工具

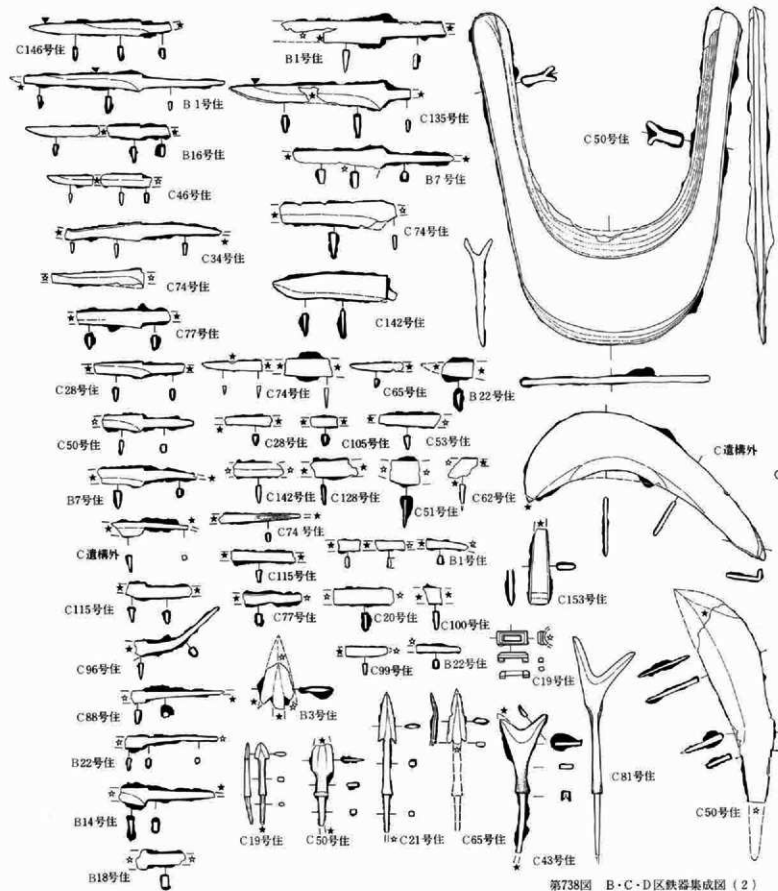
##### 鑿

鑿は1点のみ出土で、茎を欠損している。身幅は2. cmで重は5 mm程やや薄手である。刃部は片刀で、研ぎ減りより生じた、稜が看取される。現状では対比物がない。

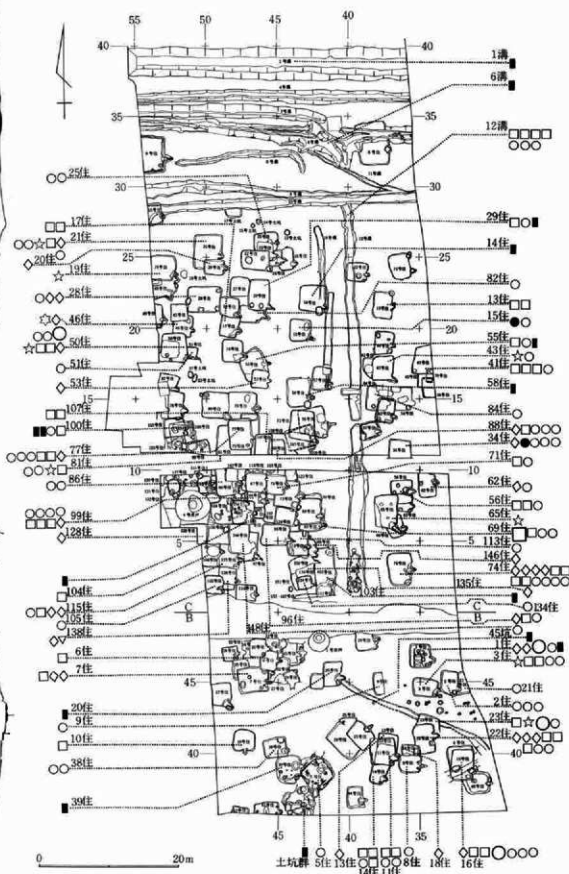








第738图 B·C·D区铁器集成图(2)





## 紡錘車

紡錘車は6点出土して、この内紡輪部を伴うもの2点、軸のみ3点が出土している。(D区1号住居跡からは、ほぼ完存に近い状態のものが1点出土しているが、今後の報告段階まで所在不明で図化掲載出来なかった。)

## 農具

## 鋤先

鋤先は1のみの出土である。刃部は、「U」字を呈し、左側に使用に伴ない若干の磨減が認められる。

## 鎌

鎌は2本出土している。1点はD14住から出土しているが、C区出土のものは、遺構外出土で、住居跡検出時に文化層中より出土したが、周辺には遺構の存在はなかった。両者共に、半月形を呈し、同一形態である。刃部中央は、使用に伴う研ぎ減りが顕著であるが、使用不能な状態には至っていない。

## 武器

## 小刀

小刀は一振出土している。全体的に錆化が非常に顕著で瘤状の錆が大きい。この錆の在り方は、鍛造品としても劣品の部類に入る。刃部は全体的に研ぎ減るが(刀子の形状の②に同じ)使用不能な状態ではない。

## 鋸

鋸は8本3型態が出土している。

①有茎寛被平根三角型袂刺式を基本とし、根の鋒が広いものと通常の三角形状の二者がある。5本出土。

②雁又式1本出土。

③有茎尖根型式と考えられるもの1点出土。

これらの中で、廃棄時にはほぼ完存と考えられるものが5点多い。

## 鎌鉾

本品は1点のみの出土である。然し、鎌鉾としての機能が本品にあったかは判定し難く、形状が冠落し状であることから、鎌にするには不都合な面があった為に、鎌鉾とした。類例としては希少例である。近年法隆寺塔の相輪部に本品と同様な鎌鉾状のものが4本認められる。詳細に就いては未確認である。今後検討を必要とする。

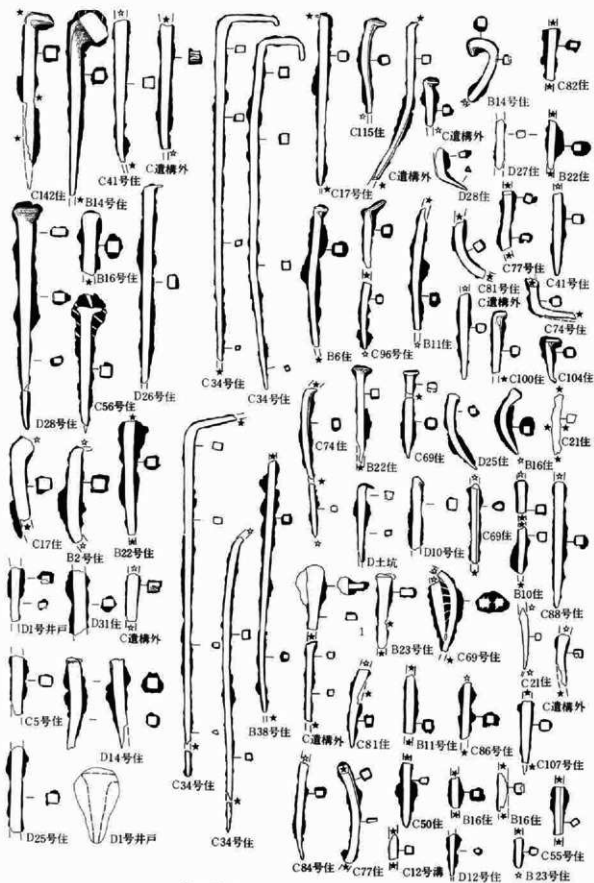
## 調度・その他

本種に該当するものは、元來その他に含まれるものとする。然し、当遺跡の立地条件から、国分二寺に係わることが多く、恐らく、本種を含め、その他の鉄製品には国分二寺に係わる仏壇・仏具・堂宇等に伴うものが大半と考えられる。

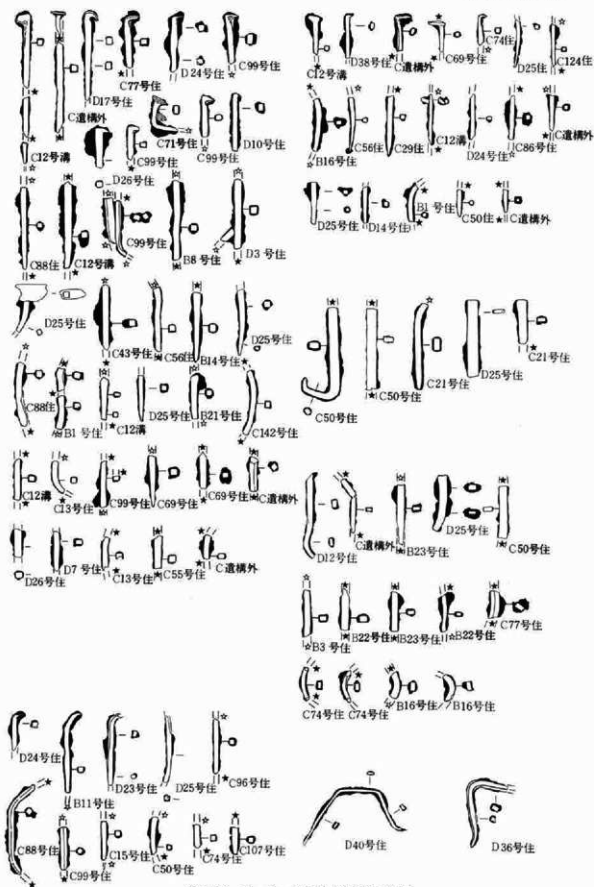
この中で、釘の数量の140点は、建築物を想起させるに至るものがあり、やはり、立地に起因し、国分二寺に係わると考えられる。この140点を大きさにより分類を試み、第748・749図に示したが、釘は先細り状になるものが主体である為に、断片では何れに該当するか甚だ疑問が残る。又、釘には直すぐなものと、屈曲した二者が有る。この内後者は、板材等に打たれたものを無理矢理に抜こうとしたことが判断される。

## 2 磁石

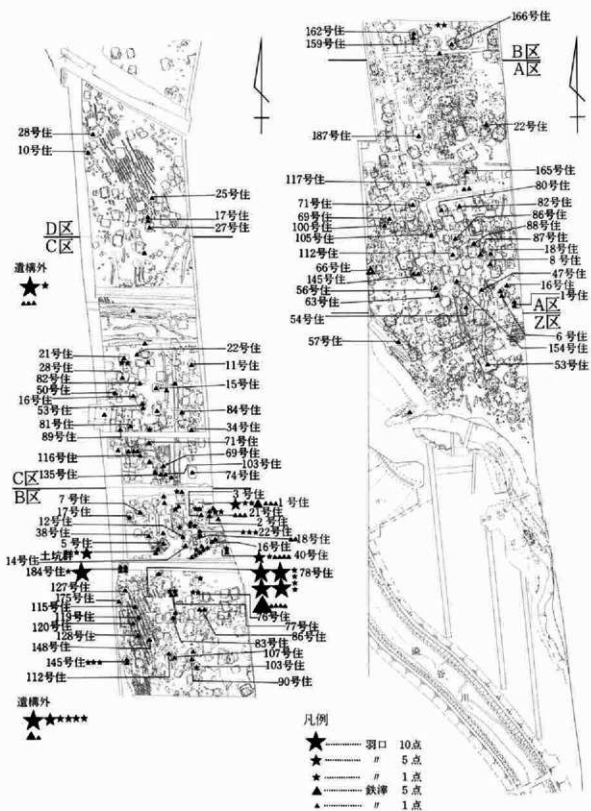
磁石の出土量は総量18点でその全てを図化掲載した。この数値は、鉄器総量216点に対し百分率で8.3%であり、通常の遺跡の在り方から非常に少ない数値である。又、利器等の磁石を常用する種別の数量63点に対しては28.6%であり、通常の遺跡の在り方に近いと考えられる。この点は、上述した様に、国分二寺との



第739図 B・C・D区出土釘類集成図(1)



第740図 B・C・D区出土釘類集成図(2)



第741图 南侧調査区出土鉄滓・羽口分布图

係わりにより、元来、生活域で使用されるものでない物が搬入されたことが最大の要因に考えられる。

砥石には、持砥・置砥の二者が在り、前者が点、後者が点ある。この内置砥1点は、小鍛冶施設を伴うB1住からの出土である。又、下げ砥は未出であった。

### 3 羽口・鉄滓（第741図）

今次の報告区では、小鍛冶施設を伴うB1住から羽口7点・鉄滓8点の一括出土が最も多い。又、羽口の分布傾向は、B区側に多く、B1・40住を中心にするかの観がある。

一方、第5分冊（次刊）に該当するB区では、78住・184住での出土が多く、78住では羽口44点・鉄滓14点を突出している。

第741図には、Y区～D区の鉄滓の分布と、B区～D区の羽口の分布を示した。この中で、B区での羽口・鉄滓の出土が非常に多く、この点から、B区を中心に小鍛冶工房の專業地域であったことが示唆される。このことは、二寺に極近接した場合、火を常用することにより火災の危惧感が働き、両者の中間に作作的に設置した可能性が考えられる。又、古代寺院・官舎に於ける厨屋は、建物からやや離れた場所に設置するのを常とする点に共有する。これは、火災による類焼を防ぐ為の対策であって、各期間の風向も考慮した位置に火所を置くことを原則とした点に共通している。

上述の概要の如く、B・C・D区の鉄器だけでも多くのことが想起される。そして、これらの鉄器は詳細に分析することにより、多くの成果と同時に多くの疑問が生じてくると考えられる。今後、続刊される報告区の動向をみて第8分冊で総括したい。

## 第3項 瓦類について

### はじめに

前刊第3分冊・当第4分冊でD・C・B区出土の多くの瓦を掲載した。この中で、文字瓦・瓦当瓦類の両者に就いては、前段で1:5の縮尺で掲載したが、判読・同梱関係等の確認等に於いてやや問題が残る為、後段で1:2・1:4で再掲載した。本項では、この両者以外の瓦類（男瓦・女瓦を中心）に就いて記述したい。

### 瓦の観察とその目的

瓦の研究は、近年迄瓦当意匠を主に行なわれていたが、この背景には、他の男瓦・女瓦が余りにも様相が複雑であった点がその主たる原因の一つと考えられる。これは、古代寺院の中でも、国分寺創建以降に於ける生産側の増大と寺院・瓦葺き官衙の増大に要因が有り、更に、瓦の年代観が漠然としていることも要因の一つに上げられている。

県下には、12カ所の古窯跡群の存在が知られている。この中で、太田・笠懸・月夜野・中之条・秋間・乗附・吉井・藤岡窯跡群で瓦の生産が行なわれているが、国分寺建立以降の主なる生産は、笠懸・秋間・乗附・吉井・藤岡窯跡群で行なわれ、特に、吉井・藤岡窯跡群での生産の増大は顕著である。この主要なる生産地は、国分寺建立以降各瓦葺き建物を具備する寺院・官衙等に夾雑する形で供給を行なっているが、出土する瓦の生産地の判別が出来ないと、供給地の特定が出来得ない。又、堂宇等に葺かれた瓦は、焼造から廃棄されるまでの年月が様々であったと考えられ、出土状態も寺院跡の場合、共存する土器等がはっきりしていないことその廃棄された年代も判然としにくい。

一方、技術面では成形・整形・焼成のうち、整形の多様性があり、明快・明確なる分類が成し難い点がある。これは、扱う瓦の多くが破片であり完存個体は少数しか無いということが要因の一つに上げられ、実態

## 第5章 まとめ

も約200年間に上述の窯跡群で作瓦されたものを一括して扱わざるを得ないというこの二者が最大の要因と考えられる。

上述した如く、瓦類は生産地・技法・年代という三本立てによる分析が必要であり（土器類も同じ）、完存品が少ない中では、出土した全ての破片を資料化しなければその確たる様相は明らかに出来得ない。

中間地域出土の瓦類の扱いに就いて

出土した瓦類の扱いは、上述の点を念頭に置いている。上述の点を各調査報告書の中で実践されている大江正行氏は、現状での瓦類研究の方法論として賞賛されるものであり、筆者も、上述した問題点を開解するには、氏の方法論を拠り所としている。

本書中のB・C区の瓦の実測に当っては、上述の問題の一つ、<sup>9</sup>年代観を明らかにし得る住居出土のものを優先させ、特に9世紀代の住居出土のものは細片であっても、技法等が判別される資料として図化掲載し、逆に11世紀代の住居の様に時期的に下った住居資料の場合には特徴的か大形破片を優先させた。又、文字瓦・瓦当瓦はその全てを図化掲載した。

一方、当該期の遺構外出土資料は、Y・Z・A・B・C・D区で約18,340点ある。この資料の扱いは、上述した点に鑑みて、側・端部の遺存する資料に於いて資料化する。その数は4,364点であり、方法は上述の大江氏の方法に準拠する。この資料に就いては第8分冊に掲載する。そして、Y～D区内の遺構出土のものも併せて掲載する予定である。尚、本書と併せて作成された国分境遺跡調査報告書にその一部を概説したので参照して戴きたい。

### 第4項 特殊遺物について

#### はじめに

本項で扱う特殊遺物とは、通常の集落遺跡で扱われる特殊遺跡と様相を異にする。これは、当中間地域の立地からの特性があり、これにより自と大きな相違が有る。則ち、国分二寺・国府・放光寺跡（山王廃寺）が隣接することにより生ずる様相である。以下、その以下遺物種毎に記述する。又、瓦類に就いては第8分冊中で詳述する為割愛してある。

#### 1 金銅製飾具（第169図-3）

金銅飾具は1点C区第140号住居跡覆土下層内から出土している。当該住居の占拠する周辺部は、多数の住居跡が検出されており、特性住居跡は、C区第124・99・72・149号住居に切られており、住居の大半は失われている。

出土状況は、上述の本跡を切る住居跡の調査後、断片的に残された本跡の中央部（72住と124住の境）床面より5cm程遊離して単独で出土し、周辺からの他の出土遺物は皆無であった。そして、住居跡の切り合い関係・出土遺物から、本品は9世紀前半には廃品となったものと判断され、所産年代は、この9世紀前半以前での使用時間を考慮すれば国分二寺の孰れかの創建物に用いられていた可能性が想起される。



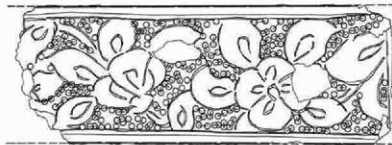
本品は、図上左端側を欠損するが他の部分の遺存は良好であった。残存長5.4cm・幅1.35cm・厚0.1cmを測り、横長の長方形形状を呈する。側部縁辺は面取りを施し強い稜を有する。端部は下方に折り曲げている。上面には宝相華文を4ヶ所に毛彫りし、間隙は魚子を不規則に充填する。器面には、渡金以前と考えられる図上横方向に平行する多の擦痕が認められ、更に、宝相華文には鑿枕が認められないことから、渡金以前に、器面を砥石で平滑にしたと考えられる。又、割れ・傷み等による渡金の修復の痕跡が認められないことから、製作時の状態を留めていると判断され、渡金が非常に薄いことから、渡金は水銀アマルガムによるものと考えられる。

宝相華文の毛彫りは、小単位の曲線により表出され、多面的になっている。残存部内では、左端側の宝相華文が不完全な状態であるが、右端側は、外側2弁のみが表出され不完全である。

宝相華文は、4ヶ所に毛彫りにより表出され、宝相華文の1単位は(右端から二つ目)、中心に中房を置き、内側に4単位・外側に5単位の華弁を施している。この内側の4単位の華弁は、通有の華弁数に等しいが、外側の5単位は、圓分寺式鏡瓦の意匠の華弁数と同じで、且、単弁を想起させる意匠を表出している。唯し、右端側から三つ目の如く、形状が甚だ乱れており、全体に細かな割り付けを行なったとは考え難い。この点から、右端から二つ目のものも、当初より計画的に外側の弁数を決めていなかった可能性も考慮される。だが、外側の弁は、内側の弁を意識的に外す形で表出されていることから、5弁が当初からの作意によるものと考えられる。又、右端側は外側2弁のみが表出されており充填文の意味合いが感ぜられるが、同種の金具を連続的に配置することにより一連の文様構成があったものとも考えられる。

この宝相華文には鑿枕が認められないことから魚子は、各宝相華文の間隙を充填する形で不規則に施されているが、1回の基本工程は2回で連打して施し、更に、この工程と宝相華文との間に生じた間隙を1乃至2回の魚子を施こしている。第742図はこの工程を図化したものである。

本品と同様な魚子の施文方法を用いるものに鳥羽遺跡出土の金銅製経軸々端金具<sup>註3</sup>がある。この経軸々端金具も数単位を基本として不規則的に連打しているが、全体の魚子量が少ない為、詳細な点までは言及出来ない



第742図 C区第140号住居跡出土金銅製飾具実測図

点から、魚子施文製品とすれば、優品とは言い難い。

中野政樹氏の論説では、この魚子の施文を規則性なものと不規則にするものに分類され、後者を国内産であろうとする。本品も、唐国のものとは思われ難い。い。又、比較的精緻な例として熊野堂遺跡例<sup>註4</sup>がある。この熊野堂例は4点が知られており、孰れも宝相華文と魚子を施こしている。そして、この中で魚子が比較的精緻な例は2点有る。この2点は規則的に連打しているが、打ち方には文様に添って連打する部分を、唐代の製品のように横位に連打する二様が認められている。然し、後者は、唐代製品の如く非常に密で精緻に連打するものとは異なり、魚子の横列との間には間隙が生じている。又、宝相華文は非常に丁寧に施文されており、特に、曲線部分は鑿を極小単位で彫っている。この熊野堂例は、当遺跡のものと比較すると<sup>註5</sup>優。

左図の魚子は、宝相華文の華弁毛彫り部分から外側に向け2回1単位を基本とし施こし始め、間隙の大きい部分は、各々の間隙の状態によりその方法も異なっている。

この魚子の施文は、正倉院の金銀山水八掛背八角鏡の如くに施文するものとは異なっている。この

と「劣」との差違が認められる。この差違は、当遺跡のものは鳥羽遺跡出土の経軸々端品が鳥羽遺跡の鍛冶工房で製作されたと考える所謂在地生産品と技法が類似することから、国分寺創建に伴う各機構整備の中で設置された金工集団乃至その後代に作られた作と思われるのに対し、熊野堂例はこれとは異なり工人の技術・意匠がしっかりしていることから、恐らく畿内（中央）で作られた製品と考えられる。

## 2 印章型

印章型は、B区第1号住居跡から4点出土している。この内、図化可能なものは3点有り、この3点を第310図中に図示した。この3点の内訳は印面型・鈕部型であり、印面型には、ほぼ全面が遺存するものと周縁の一部分の周縁の破片型であり、鈕型は、印面型側との合せの部分の細片である。

印面の規模は、周縁外側で一辺3.6cmを計測し、内区側は3.3cmである。印面の文字は判読不能である。これは鑄出し後型から製品を取りはずす時に表面が剝脱した為に文字部の細部は欠失した為である。然しながら、部分的に文字の痕跡は認められ、単体の文字と思われる画数の一部が認められ、「三・王・玉」等に類する比較的画数の少ない文字と考えられる。

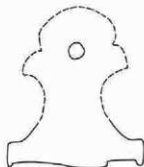
又、1辺3.6cmは、唐尺換算でほぼ1寸2分になる。然し、諸印を規定した大宝令制定時点では、田横法（一段を250歩とする）が代制であり、使用尺は、大尺としての高麗尺を用い、常用尺に小尺としての唐尺を用いている。この大尺と小尺の用途は、大尺が測地用であり、小尺は常用す尺度である。この両者を現メートル法に換算すれば、凡そ高麗尺が35.6cm程で唐尺が29.4cm程（唐尺は現存するもので大半のものが29cm～30cm間に確実に対応している）として、田横法が平城遷都以後改変され、代制が、1段を360歩と、使用尺に唐尺を大尺として用いている。即、大尺（測地用）が高麗尺から唐尺へと替えられている。これは、 $35.6 : 29.4 = 12 : 10$ に近い数値であり、高麗尺が大尺となった場合、小尺としての常用尺は、約24cm程になる。これは、大尺を1尺とする場合の、小尺を大尺の8寸で1尺にする唐制を模すことになる。このことは、常用尺の1寸単位が2.4cm程になるのであり、大宝令制定時の諸印の規制段階の1寸と、和銅6年以降の1寸には0.6cmの差が生じることになる。然ながら、諸規定の示す尺度が大尺を示すのか、小尺を示すのか明らかでない。本印型の1辺3.6cmは、小尺で1寸5分になり、県内では、高崎市天中村遺跡出土の「物部私印」<sup>註6</sup>が本品と同寸である。この1寸5分は、貞観10年（868）6月28日、大政官符「元令封家用印事」に記載のある「（前略）令諸封家皆用印。但一寸五分以為其限（後略）」に符号する。

上述した如く、印面の規模を尺度に換算する場合、唐大尺を用いるのか、又、小尺を用いるのかにより異なってくる。だが、2寸をもって公印とした大宝令（養老令）の数値になる為、本品は少なくとも私印であったことが判断される。

第752図は、出土した鑄型から印面の周縁・鈕の部分等を図上復原したものである。

## 3 輸入磁器

今次報告区内から4点出土している。この4点は、孰れも白磁片であり、C区第48号住居跡（未掲載）・C区第58号住居跡（C区第142図一4）・C区第79号住居跡（第195-8）である。この3点は、孰れも北方諸窯系の製品と考えられるが、第2分冊中でも記述した如く、未報告区の出土例もある為詳細に就いては第8分冊中で一括して総括したい。以下にこの4点の観察表を示しておく。



第743図 印章断面復元想像図

1	C48住	白磁・埴 体部	体部下平に露胎部がある。体部下平は丸味を帯びると考えられ、胴上半から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。露胎部の色調は灰色味を若干帯びる。	胎土は密で焼き締まっている。内面側に白土の化粧が認められる。胎調は乳白色を呈し気泡は細かく透明感が非常に強い。	F区第33号住居出土のものと同様とする。詳細な出土位置は不分明。
2	C58住	白磁・埴 口縁部片	口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は平相で、外面側が尖っており、短かく外反する。色調は乳白色を若干帯びる。	胎土は密で焼き締まっている。胎調は胎青に片寄りやや粗い貫入が入っている。胎の気泡は細かい。	住居内での詳細な出土位置は不分明
3	C79住	白磁・埴 体部片	底部周辺は丸味を帯びるが体部はやや直線的に立ち上がる。色調は乳白色を呈する。	胎土は密で焼き締まりやや硬質である。胎調は胎青に片寄り。胎の気泡は細かい。	〃
4	C150住	白磁・埴 口縁部片	口唇部は折り返しにより玉縁を呈する。	玉縁下の輪麗まりをみせ、胎調は胎青に片寄りしている。	〃

## 第5項 土師器杯の成形技法について

### はじめに

本項では、前刊第3分冊・本刊第4分冊中の土師器杯の観察表で用いた\*型作り、\*型腐、の用語説明に主眼を置き、この用語説明とその根幹に係わる部分（型作り成形）に於いて記述するものである。

### 土器類等の基本成形

古代所産の出土遺物の中で、粘土を使用し、これを成・整形した後、乾燥を経て焼成された製品、所謂、土器類・埴輪類・瓦類・羽口等その種類は多岐に亘る。これらの製品を成形技法により大別分類すれば、紐作り・轆轤作り（水挽き）・型作り・手捏・覆上げ・その他になる。これらの成形技法の中で主体を占めるのが紐作り・轆轤作り・型作りの三者であり、この三者の成形技法が通有種及び当該報告書掲載遺物であり、\*土器類、\*陶器類、\*瓦類、である。

	土器類・陶器類	瓦類
紐作り	大形器種で壺・壺（瓶）等	男瓦・女瓦
轆轤作り	小形器種で杯・等	
形作り	土師器杯及小形品 # 壺（「コ」字状口縁等）も紐作りと型作りを併用する可能性がある。	器種全て特に瓦当類、一枚作・桶巻造は基本的に型作り。

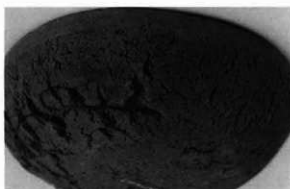
土器類には、土師器・須恵器・土師質土器等があり、更に、これらは器形により杯類・壺類・壺（瓶）類・その他に分類されるが、小形品・大形品にも大別される。陶器類も土器類同様に器形と大・小による分類が可能である。瓦類は、鍍瓦・字瓦・男瓦・女瓦・道具瓦・鬼瓦等がある。これらの遺物は各々ある程度定型化した成形技法が在り、これらを上述した主要成形技法を三者毎に遺物種を表したのが第1表である。

又、この第1表中には本項の主題たる土師器杯を「型作り」に含めてある。

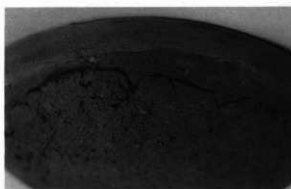
### 1 紐作り

紐作りは、土器製作上最も普遍的な技法であり、輪積み・巻き上げを別にすれば、縄文時代から現代に至る長きに亘り用いられている技法である。

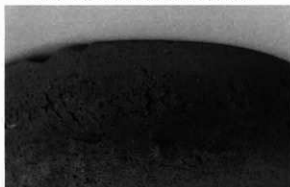
土師器・須恵器類では、大型器形のもがこの紐作り成形によりなり、整形段階で、回転台・轆轤・叩締等により撫で整形・削り整形・叩締止め・叩締後撫で（回転台・轆轤・手・指）再整形による技法で仕上げられている。当報告書のB・C区区出土遺物では、この紐作り成形による紐の接合痕・粘土の動き方向を图中に示した。これらの紐作り成形を判断させる状態として、この紐作り成形時の紐の単位・粘土の動きであり、これを最大の根拠としている。



1 第94図-5 亀裂状の型膚。断面全体に及ぶ亀裂。底部は粘土塊を延ばしている。整理時、亀裂の処理を諦める。



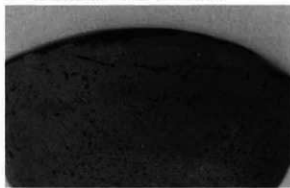
2 第96図-1 ヒビ型の型膚。「帯甘帯」。口縁部の横撫で直下と、底部・体部の擦削りの間に残る型膚。



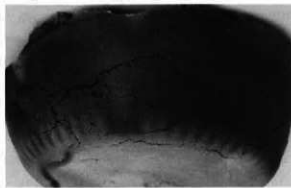
3 第294図-1 2に同じで、口縁部周辺に粘土の不足部分が生じ、粘土を補ぎ足した痕跡。平底の坏の場合。



4 第282図-1 粘土紐を型内に巻き上げた時の型膚。体部下半部は指撫でにより型膚を削で消している。型は須恵器坏か。



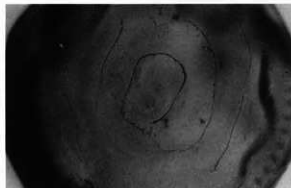
5 実験例-1 底部側は粘土塊を引き伸ばし、口縁側は粘土を補ぎ足した。1・3の実験例。



6 実験例-2 第754図の実験例で2の実験例出もある。



7 実験例-3 体部下半部は紐の巻き上げ。口縁部の粘土の不足部分に粘土を補ぎ足した状態の型膚。



8 実験例-3 底部から粘土紐を巻き上げた状態の型膚。未整形の状態。型は8世紀代の秋間窯跡群焼造の須恵器坏を使用。

第744図 実験例との型膚比較

瓦類では、瓦の最も基本種となる男瓦・女瓦で認められる。唯、瓦類の当該技法には大きく二者がある。この二者とは、円筒筒輪状に芯材を用いず輪積・巻き上げるものと、芯材を用いるものであるが、芯材を用いる場合、基本的に、タタラを用いたか否かに起因する。則ち、桶巻造りの場合桶型に対して粘土板を用い巻き付けたか、紐状の粘土を巻き付けたかによる。又、この両者には、凸・凹面側に布圧痕が伴うか否かによる。然し、本書中では、芯材を用いた紐作りも広義の「紐作り」として扱っている。

## 2 輪積作り

輪積作りは、5世紀以降に日本に須恵器が焼造されてから専ら須恵器に用いられている。この輪積に似た回転台は紐作りに伴い縄文時代には用いられているが、回転積力を用い成形時に粘土塊を巻き上げるものは基本的に異なる。この輪積成形の基本としては「挽き上げ」が可能なのであり、古代在地の技術では小形品に限定され、その冴えたる器形は環・等に認められるのみである。そして、上述した須恵器大形品は、「挽き上げ」が不可能な紐作りより粗形されたものを輪積整形している。この回転積力を利用する遺物に瓦類の桶巻き技法も含まれるが、「挽き上げ」が認められず、タタラを用い整形時に利用する点からは、成形に伴うものではない。

上述した如く、基本成形に輪積を用いる場合は、「挽き上げ」を前提としそれが可能な小形品に限定され量産を前提としている。

## 3 型作り（瓦類）

瓦類の主体的成形技法はこの型作りで、桶巻造り・一枚作り・半載作り・瓦当文様は、各々の「桶型」・「台型」・「芯型」・「塼型」の如く、量産を前提として最も効率よく作瓦出来る技法を用いている。そして、一枚作りは、桶巻造りの如くの長大な「タタラ」成形を行わずとも、ある程度の台形に合う「タタラ」を用意すれば、桶巻造りの労力を簡略化したものとも言い得る。

瓦類の型作りには、量産の効率化だけが主要因では無く、粘土との関係も考慮せねばならない。瓦類の製作＝造瓦は、夥たしい量の素地土を用いる。当時でも現代でも、この素地土の確保は非常に重要なことであり、古代、上野国内に散在する12の窯跡群は粘土生地採集を前提に展開しており、他地域から粘土生地土を搬入しての開窯＝操業が無いことから明らかである。素地土は、生地土にある程度の「シャモット」を混入させ増量させるが、この「シャモット」量も焼造する製品にも異なり、瓦類の場合この「シャモット」量は、瓦の胎土と須恵器の胎土を比較しても多いと判断され、生地土を如何に効率よく使うかも当時の造瓦技術の中に内在している筈である。

この「シャモット」量を増やすことにより、粘土生地の粘性減り可塑性も少なくなり、耐火温度も上がる。このシャモットに多用するのが、粘土層より上位のものが多く、シルト等をシャモットとし用いたと考えられ、粘土の質が不良でシルトに近い場合はそのまま用いたと考えられる。このシャモットを生地に混入させたものを素地土として胎土になる。そして、シャモット量を多くした場合や、粘土の質が悪い場合、可塑性が少ない素地土の場合等に、「型」を用いることにより成・整形を容易にさせる役割も具備している。これらのことは、「型作り」には、大ききの規制を受けずに規格をほぼ統一出来、成形が容易で、量産効率が高く、不良は粘土でも紐作り・輪積作りより、より早く製品が作れるという利点が多くある。

## 4 土師器環の成形技法

土師器環は、5世紀代に平底から丸底へと変化し、5世紀末頃には丸底の數種類の定型化した器種となり、器形の変遷を経て8世紀初頭頃平底になり、ほぼ10世紀代にはその姿を消す。この丸底という底部形状は、土器製作の技術的な面で、紐作り・輪積作りでは成形しづらい形状である。この技術的に作りづらい形状の

器形を如何にして成形したかが本項の主題である。

前段では土器等基本の成形技法三者を記述した。そして、紐作り・轆轤作りの二者より、型作り成形が利点が多いことを指摘した。又、冒頭でも述べたが、筆者は観察表中に土師器環の成形技法を「型作り」と記述した。この点からも筆者は全ての、土師器環の成形は型作りであつたと考えているのであるが、この土師器環の成形が「型作り」と考えた根拠を以下に記述する。

8世紀以降の土師器環（丸底・平底を問わず）の底部・体部・口縁部直下の外器面には「小ヒビ」「シワ」等の文章表現が難解な器面が多く認められる。然し、器内面・口縁部は丁寧な撫で整形が施されており、器内面と器外面では相反する仕上げ状態である（第753図参照）。この器外面に認められる「小ヒビ」「シワ」の状態は、内面側から急激に押されることにより生ずると考えられるものの、唯単に押しではヒビ割れしてしまう。このヒビ割れを起こさずにする為には、ゆっくり内面側から力を加えるか、外側に何らかの宛行物をするかであるが、問題は、土器を作るという行為の中で解釈とせねばならない。そして、この土が量産するという点からは、規格を前提にその所作があり、この所作を解釈すれば後者の宛行物が全ての条件を満足させるに足りるものがある。

譬、この外面側の「ヒビ割れ」をヒトの体でみるならば、四肢部で関節に近い部分の皮膚で認められる。ヒトの青年期で、筋肉が活発に成長を成すと、外皮はこの内側での発達に同調せずに「ヒビ割れ」状態を生ずるのである。

土器の外面の「シワ・ヒビ」は特にこのヒトの外皮同様な状態で生ずると考えられるが、上述の土器製作の観点からは「型」の存在はほぼ断定出来ると考える。

瓦の「型作」でも述べたが、「型作り」の利点に粘土でも可塑性の少ない素地土を用いる場合その効果を発揮する。これは、「型」からの剝脱が容易であり、乾燥自体も早い。土師器環を量産物としての成形するには、この素地土＝胎土との係わりも重要である。

## 5 土師器環の胎土

県内の5世紀後半から9世紀後半～10世紀初頭の土師器環の胎土は多岐に及ぶと思われるが、大前提として、洪積台地下の二者と沖積地下の二者が基本的な粘土と考えられる。洪積台地下の粘土は、単純な酸化焙焼成を行なった場合、赤褐色を呈する鉄分の含有が特に多いと考えられるものと、褐色を呈する鉄分の多いものの二者で、前者は赤城山・榛名山等の山地で中部ローム層中で採取されたと考えられる粘土で、胎土中にはパミスの細粒の含有が顕著である。後者は県下12古窯跡群を支える背影たる凝灰岩の風化粘土である。沖積地下の粘土は、火山シルトや上述二者の風化したものが水性堆積したと考えられる粘土である。便宜上これらを順に甲・乙・丙種としておく。これらの粘土の使用を以下に概括して略記しておく。

甲種の粘土では、県西部の5世紀後半から6世紀初頭頃の土師器・埴輪での使用が顕著である。乙種では、県東部の5世紀後半～6世紀代の土師器・埴輪で顕著な使用があり、7世紀代での使用も有るが、前代とは量的に少ない。県西部では6世紀前半以降の埴輪で使用が多い。この両者では、6世紀後半に開窯される太田。吉井・乗附古窯跡群（6世紀前半開窯）での須恵器生産に伴ない使用されているが、県東部では土師器・埴輪と須恵器では生地土の採集地が異なっていた可能性が高い。丙種では、県西部で6世紀前半頃から使用が開始され、以後9世紀後半～10世紀初頭まで使用され、6世紀後半から7世紀代での使用が最も顕著である。そして、この7世紀以降の土師器は、県下平野部に広域に互に供給されている。

この中で、県西部で6世紀初頭に生地土が甲種から乙・丙種への変化は非常にただならぬ背影の存在が感ぜられる。そして、乙・丙種の粘土を約300年使い続ける意義も大と考えざるを得ない。ここでは、これらの

生地に就いての詳述をせねばならないが、紙数・時間の都合上無理がある為後日にしますが、一応、本項と大きく係わる県西部の丙種に就いて若干記述しておく。

丙種の粘土（生地土）の最も広域な推定分布域は、藤岡市から吉井町地域の広域に亘り、山間部で採集される乙種粘土の流出・火山灰シルト等が水性堆積したものと考えられる。特に、藤岡市では、江戸時代から開始される椋瓦の生産に表徴される如く、沖積地での粘土採集は非常に多く、発掘調査でもその折の粘土採取坑が検出されている。この丙種の粘土としての特徴は、大半のものが比較的可塑性が少なく、総じて前述した型作り用乃至型作りを助長させる如くの特徴がある。この丙種の中で質の悪いものでも水敵による精製を行えば使用は可能と思われる。

本報告中華者の担当したC・B区で出土し図化掲載した土師器の生産地推定の多くを“藤岡系”とした。この藤岡系としたものは、この丙種の粘土が使用されていると判断したものであり丙種の粘土が型作りに適したものである点から土師器に専用されると考えられる。詳細は後日に期したい。

## 6 まとめ

土師器環の成形技法は、“量産”という前提で「型作り」があり、更に、胎土を仕込む為の“生地土”の採取が「型作り」を促すとも考えられる。又、文章表現で難しい口縁部直下・底部周辺に認められる粘土の接合痕状の「小ヒビ」・「シワ」は、外面に宛物状「型」の存在により生ずるものであり、この宛物たる「型」は、「外型」＝「女型」であったと判断される。

この「女型」は、古くは弥生時代の青銅器や、古墳時代の倣製鏡の如く、国内では既に存在している。量産・効率等、これらの鋳造物でも同様な観点の存在による所産と思われる。この鋳造物の如く、「女型」による製品成形は伝統的な技法の一つであったことから、土師器を量産する場合に用いられたと考えられる。

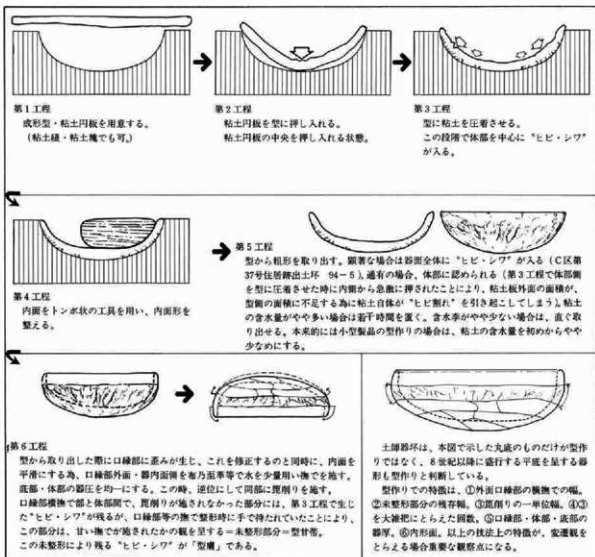
一方、須恵器は轆轤を用いるが、成形のみでの使用は7世紀末頃より盛行し、坏等の小型品にのみ専用される。整形段階での轆轤使用は本邦での須恵器生産開始段階から用いられるが、丸底を呈する初期須恵器等は、底部成形に紐作り等が認められているが、これらの成形にも「女型」の使用は想起される。

土師器環は、5世紀後半以降9世紀代まではその存在は確実に認められる。この9世紀に至る迄の間には、丸底から平底への変化を遂げる。そして、その間丸底・平底の両者は、各々数段階の形状変遷を遂げている。だが、この形状変遷の中で、特に丸底の一群は、型作りならではの“クセ”がある。この“クセ”とは、第746図示した寛削りの段階で行なわれる“口縁部の横撫”である。

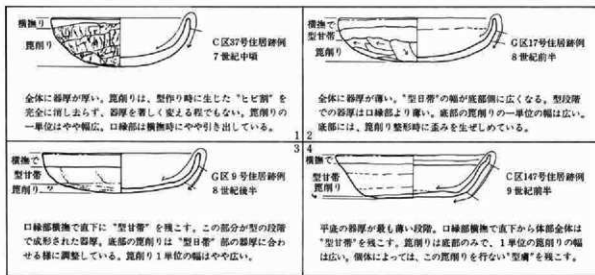
寛削りは、型で作ったが為に、底部・体部の器厚を整える為に行なっている。この寛削りの技法上の在り方は、次ぎの段階変遷がある。

- ① 撫でに近い状態で“型膚”を消す程度のもので、特徴的なことは、器厚が厚いこと、寛の1単位幅が細かく丁寧である。（器厚を極力薄くしようとは考えていない段階）
- ② 体部より上位は顕著ではないが、底部を顕著に寛削りを行なうもの（口縁部・体部は器厚が厚い）・（型の段階では器厚を厚く作っている）。
- ③ 型段階で器厚を厚く作る意識の働きがあり、（薄く作ることは、粘度の節約と焼成の効率を上げることでもある）。
- ④ 全体的に寛削り自体を少なく作ろうという意識があり、型の段階から器厚全体を仕上がり形状をかなり意識している段階。この為、口縁直下から体部にかけて「型膚」を多く残している。

以上4段階がある。そして、②・③では、型からはずして口縁部の横撫を施こした段階で、この撫でを施こしたことにより（撫では、手持ちで、一機に一周以上回し行なう。これは、口縁部の横撫でが数段階に



第745図 土師器坏型作り製作工程模式図



第746図 土師器坏の横撫で・型膚・器厚の相関図



分けて行なった痕跡がきめられないことから明らかである。)、口縁部形状が内湾気味がやや直立気味になってしまうのである。この点では、口縁部(特に横撫でを施す部分)の形状は、意識的な作為性によるものでないと考えられるのであり、これが「クセ」である。

上述の技法上の4段階が土師器を編年する時の重要な視点とも考えている。(第746図を参照して戴きたい)

県内に於ける土師器の生産は、土器胎土・器形(成・整形の特徴)等から、6世紀代には大きく県東部・県西部・県北部の3地域の生産が見込まれるが、7世紀後半以降になると県東部・北部での生産量が縮小し、逆に県西部での生産が増大の途を辿る(須恵器生産も5世紀代に単独的に操業があり、6世紀以降、西部の須恵器生産は東部より先きんじ増大する)。この背景には、文献資料の如くの限定された資料では解明出来得ないと考えている。今後、この背景に就いても今後記述したいと考える。

本項での「型作り」に就いては、筆者が昔日長きに亘り御指導を賜った増田修・高橋哲両氏に、故新井司郎氏が実践された「土器作り」の技術を伝習させて戴いたことに依る賜である。

## 第6項 吉井型羽釜について

### はじめに

中間地域出土の羽釜は、調査・整理に携わる中で数多くのもの実見してきた。そして、これらの羽釜には器形・成形・整形・胎土が一致するものが多く、焼成による色調変化・差違はあるものの、型式学的に数種の型式の想定が出来た。又、胎土の一致点では、焼造地がある程度限定出来ると考えられる。そして、今次のB・C区の遺物観察表中に特定型式の名称を与えた。これが「吉井型羽釜」である。この名称の設定は、菅、中沢悟氏が設定した所謂「月夜野型羽釜」<sup>註7</sup>のみが固有名詞化しており、この折の矛盾(羽釜全体の中で鑑見たものでなく、月夜野地域のみで称号させる点で、他との係わりが問題で、月夜野型に対する他の型式名があつて初めてその特定型式名が生きてくる。)に鑑み、「吉井型羽釜」「乗附型羽釜」の型式名設定を行なうものである。

### 1 二種の羽釜

中間地域B・C・D区出土の羽釜には、所謂「月夜野型羽釜」と吉井・藤岡窯跡群焼造の胎土の特徴を具備する羽釜とその他の胎土の羽釜があり、特に、吉井・藤岡窯跡群の胎土特徴が認められるものが大半を占めている。この吉井・藤岡窯跡群の胎土の羽釜には、前刊第3分冊でD区の住居段階の一括性が認識される第II・III段階及びC区の住居形状第VI・VII・VIII段階に伴う一連の羽釜がある。これらの羽釜には、各段階に伴う様に、時間軸に形状・技法の変遷が辿れる。然し、これら羽釜の中で、C区住居形状第VIII段階のものは、形状が統一的な定形化が認められない。

羽釜の成・整形技法には二者があり、この技法差により各段階での羽釜がある。この二者の技法は次のとおりである。

甲、紐作り成形後横撫整形し、更に、胴部下半から底部にかけて篋削りを行なうもので、胴部上半・口縁部及び内面に小単位に顕著な横撫痕を残すものが基本で、個体によっては胴部直下迄横撫でを施すものがある。罎は横撫目に従い粘土紐を貼り付け横撫整形している。

乙、紐作り成形で横撫を用いず整形を行なう。篋等の工具で横撫で整形か縦位の篋撫で整形を行ない、紐作りの痕跡を消す。罎は粘土紐を貼付け整形(横撫ではない回転台の使用も考慮される)している。器内面は横撫で(手)の痕跡を留めている。

この上述二者の基本的相違点は、**轆轤整形**の可否にある。この**轆轤使用**、自体、第1項で記述した様に、本来的に須恵器の技法である。この甲技法により作られた羽釜には、焼成差による発色の違いがあり、発色には灰色・灰黄色・黄褐色・黄橙色・鈍褐色・鈍黄褐色といった還元焰から酸化焰による焼成であったことが裏付けられる。この焼成は、中性焰が主体を成すことによる差違であり、所謂「土師質土器」の焼成技法に相通じており、乙技法に至っては、発色が褐色系乃至橙褐色系であることから酸化焰焼成を裏付けている。この甲・乙種の発色差は、所謂「土師質土器」と同様であって、想定される9世紀末～10世紀末迄の間通用知見に合致している。唯、羽釜には、焼締めを作為的に行なった痕跡が認められず、轆轤使用としても、通有の須恵器の概念とは異っている。

この甲技法により作られた羽釜（以下羽釜甲種とする）と乙技法により作られた羽釜（以下羽釜乙種とする）は、胎土の類似により生産地域が限定されるが、直接的に系譜が連続するかは未だ分明ではない。しかし状況的には、系譜上の繋がりは認められると考える。

## 2 羽釜甲の二者

羽釜甲種は、上述した如く轆轤使用が認められる。この技法上の特徴の外に形状上の特徴がある。羽釜甲種は、第748図に示した様に口唇部・鈎・轆轤整形の状態により二者に分類される。これを各々に壹・貳を付し甲壹種・甲貳種とする。この二種は層意的には、D区の住居分類の第II・第III段階、C区住居形状第VII・VIII段階の各段階に伴う遺物様相でも明らかな如く甲壹種から甲貳種へと変遷がたどれる。然し、羽釜自体の完形遺存自体類希なる存在であり、10世紀代の住居跡から破片化したものが出土している。単に数量が少ないという点での類希な存在とは思われない。この点で、羽釜の年代観（既存の編年作業）には各人により様々で同一形状（羽釜甲壹種）のものが100年間で年代幅で編年されており、大きな矛盾が認められる要因でもある。此の如く状況で図上での復原がほぼ大半を占めている点からも層位的に検証するには、ややもすれば困難な作業であり、一遺跡の中では、多分に比較型式学的方法に拠り所をおかねばならないのが実態でもある。

この羽釜甲壹種と羽釜甲貳種には、口唇部・鈎部の形状が異なる点と、羽釜甲貳種胴部全体の整形がやや粗雑になっている。然し、通有の図上では両者共に轆轤整形痕が直線・破線により図化され、その質感は図からは認められないのが作図上の最大欠点でもある。この形状差からは、羽釜甲種が大きく二種の生産体制が併存するのか、時間軸上の変遷経過かの要因が想起され、甲壹種から甲貳種への変遷が考えられる。しかし、完形個体の出土は類希なる存在である。

## 3 羽釜乙種の二者

紐作り成形後轆轤整形行なわず、撫で整形を施す羽釜乙種も、羽釜甲種同様に二種存在が認められる。第756図に図示した、羽釜甲種に器形が類似し轆轤整形が行なわれず手・篋撫で整形しか行なわれなかった。乙種の特徴を備える一群で、C区住居跡形状の第X段階・D区住居形状第IV・V段階に伴うものであり比較的大形で器厚がやや薄い一群である。この後者は、羽釜の胴部上半の形状を用いた甕に能くみられる形状でもある。

この二者を甲種同様に羽釜乙壹種・後者を羽釜乙貳種としたい。

## 4 器形

器形では三者の形状が認められる。この三者の形状は、後述する。祖形の影響により生じたと考えられるものであり、祖形とは、吉井、吉井・藤岡窯跡群で焼造された須恵器瓶類である。尚、便宜上、器形の三者の分類に伊・呂・波を冠し、**類**。としてとらえたい。

伊類、器形全体の丸味が非常に強く口縁部は内湾し、最大径は胴部を基本とする。

呂類、器形は、全体的に内湾気味であるが、口縁部は内傾乃至直立する。胴部は伊類より直線的であり、最大径は胴部にある。

波類、胴部は直線的で銜部に屈曲する。口縁部は内傾乃至直立気味である。最大径は呂類同様に銜部にある。伊類と呂類の中間的形状とも思われる。

この伊・呂・波類毎に甲壹種・甲貳種・乙壹種・乙貳種の種がある。(第748図参照)

## 5 胎土

吉井窯跡群で生産された瓦の胎土には大きく四種がある。瓦は須恵器・土師器の如く、形状によりその焼成された窯跡群の特定には困難なものが無い。それは、鍔・宇瓦や特定される格子系叩き・文字瓦等により既存の窯跡出土のそれと対比すれば、産地別分別が可能である。筆者の得ている胎土の産地別分別の拠り所はこの瓦の胎土と各窯跡群で採集した須恵器等の胎土からである。吉井窯跡群の胎土の特徴を以下に略記しておくが、吉井とするのは、現吉井町を中心に、東接する藤岡市の一部及び西接する富岡市の一部を含んでいる。この4種類の胎土に各々数字を冠しておく。

- 1類 瓦・土器の割れ口断面では、全体に薄い層状を呈しており、顕著な状態では剝落するかの如くで、この中に含まれる夾雑物には、角礫状の白色鉱物粒子・デイサイト質凝灰岩・透明鉱物粒子・黒色鉱物粒子(角閃石・輝石)・雲母等を含む。
- 2類 全体に可塑性が少なく(粘性が強い)、シャモットの混入が認め難いが層状の粘土の動きが有取される。焼締めが出来る良質な生地土の使用が考えられる。夾雑物には角礫状の白色鉱物粒子が主体である。この生地土は1類と同様と考えられ、採集場所は山間部の一次堆積粘土と考えられる。
- 3類 土師器環の胎土で述べた丙類の生地土に類似するが土師器程細かな土ではない。全体に層状の状態が認められるが、1類とは生地土の採取場所が異なると考えられ、1・2類の生地土等の流出による二次堆積粘土と考えられる。夾雑物には、亜角礫状の小粒の白色鉱物粒子・デイサイト質凝灰岩、透明鉱物粒子・黒色鉱物粒子(角閃石)・黒色粒子・(軟質)・白色粒子が含まれるが黒色鉱物粒子以外の粒度は細かい。
- 4類 3類に近いが、藤岡窯跡群の胎土特徴にも類似し、吉井・藤岡系。と観察表中に記述したもので、吉井窯跡群の胎土の中では其の他として分類される。

中間地域出土の羽釜甲類の胎土は、この4者の内の孰れが該当する。そして、この中で最も多いのが3類であり、他は4類が占めている。

羽釜乙種では、羽釜甲種と同様な胎土を用いるものがあるが、吉井窯跡群焼造製品の胎土特徴が異なる胎土のものも多くある。羽釜乙種に就いては、吉井窯跡群産と判断出来得るものは数は多いものの、問題が残る。一方、羽釜乙種と共存関係の推定される土釜には、この羽釜乙種と同様な胎土のものも多く、この中にも吉井窯跡群産と判断されるものも多い。又、羽釜乙種・土釜には藤岡窯跡群(4類の胎土とはやや異なる)の胎土とも思われるものや、県東部の笠懸・太田窯跡群とも考えられるものが若干混在している。

則ち、中間地域出土の羽釜甲種は吉井窯跡群で焼造されていることが推定される。然し、吉井窯跡群での羽釜を焼造した窯跡が未確認であるが、県下全体で窯跡の調査が非常に少ない現在、逆説的に生産地の推定を行なわないう限り、各窯跡群毎の技法・形状等の様々な特徴の一端をも把握出来ない。そして、県外の多くの地域では、窯跡出土資料をもって土器類の属年作業が進められており、各窯跡群単位の特徴も明らかにされつつある現在、群馬県では土器の胎土を肉眼・科学を用い産地の比定を行なわなければ、その本質が見失

なわれる可能性があり、土器・瓦の研究は現在型式論を盾に、住居内で共伴したという矛を振り回すに過ぎず、各窯跡群が保持する技法・形状等様々な問題を看過し、土器編年という城に立籠るだけに陥ってしまうと考えられる。

これらの点から羽釜乙種は今後の検討余地が多い。

#### 6 羽釜甲種の分布（供給域）と「吉井型羽釜」の定義

羽釜甲種の分布はほぼ全県下に及ぶものの、東東部での取っ出率は非常に少ない。これに対し、県西部側で出土が目立っており、東北部でも微量の出土が確認出来る（県下で発刊されている調査報告書を見ただけであるが、各遺跡での出土量の実態は未確認である）。この様に、県内での羽釜甲種の分布状況には、県西部での出土例が多い。このことは、供給地が県西部側にあるのか、国府の存在が県西部側に在る如く、供給先の特長状況に起因すると考えられるが、寧ろ、羽釜甲種は、胎土が吉井窯跡群の特徴を示していることから、この両者の要因に起因し西側での分布が多いと考えられる。

筆者が実見している羽釜で羽釜甲種・貳種・乙種種の大半はその胎土が吉井窯跡群の特徴が看取され、羽釜甲種はその大半が吉井窯跡群産であることが推定出来る。そして、この羽釜甲種・貳種・乙種種で吉井窯跡群で生産されたと推定し得るものを「吉井型羽釜」と定義付け細分された羽釜は、吉井型羽釜甲種・吉井型羽釜甲種・吉井型羽釜乙種種としたい。

#### 7 「吉井型羽釜」の変化の各様

この「吉井型羽釜」には、甲種種・甲種種とした如く器形・整形の差が認められるが、両者には器形で更に分類された（第756図）。この細分は、口縁部が内湾形態と内傾乃至直立形態があり、最大径が胴部にあるものと胴部にあるものの3種の細分が可能であった。又、羽釜甲種の中で胴部輪軸痕が横線状になっているものもあり、特徴的な一群である。

これらの細分可能な状態は、時間軸上での変遷か、吉井窯跡群内での生産者＝工人の差により生じているのか、元来より内湾・内傾・直立の作り分けがあるか等要因は幾つか想起される。然し、上述点を明らかにし得る出土例や、羽釜自体の遺存不良な為上述の点を分明にし難いが、これらの諸々の状況が交雑する中でこのこととも思われる。

一方、羽釜が出現する前後に吉井・藤岡窯跡群が焼造され須恵器の器種に瓶がある。この瓶は、紐作り後輪軸整形により作られている。この一群は、前述した第 項中でも記述したが、C区の住居形態の第V～VII段階で認められた須恵器瓶類である。

この瓶類を見る限りに於いては、輪軸整形が丁寧で、羽釜に認められる篋乃至コナにより輪軸の回転を用いて施したと考えられる沈線状の横線が胴部に認められるものと、輪軸整形が丁寧で外形状は、羽釜の形状に類似するものがある（第748図参照）。これらの瓶は、羽釜と生産地が同一であること、形状の特徴が類似する点が共通する点である。又、この瓶は、技法上等で分類した羽釜の甲種種とほぼ同様な技法が用いられ、出土時期も近似することから、少なくとも、吉井型甲種種と同時に前出していることが示唆される。このことは、羽釜が唐突に製作が開始されたこと自体、生産側での、その形状を作り上げるだけの下地がなければならず、この羽釜を作り出す工人の下地は、上述の点から、瓶を作った工人が直接携わった可能性が強く考えられる。又、第756図中で示した羽釜の各様は、瓶の形状特性をそのままに製作されたものと考えられ、羽釜の各様は、即、瓶の各部でもであると想定されるのである。

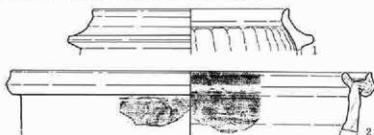
この羽釜とは器種が異なるが、羽釜甲種に類する吉井窯跡群での生産が推定される器種がある。これが第748図のその他一群で、B・C・D区では 例が認められ、県下でも類似は認められる。この器種は「壺乃

至鉢。になるが、成・整形の技法・焼成は甲種と同様である。又、上述の細分される中での横線状の轆轤痕を有するものも含まれており、上述した瓶と羽釜と共に工人（集団）が同一であったと判断されるものがある。これらのものは、口縁部が羽釜の胴程に短く、口縁より上位に羽釜の口縁部を継ぎ足せば、図上では羽釜となるものである。そして、これと同様な成形による羽釜甲壹種がC区第19号住居跡で出土している（第57図-5）。この変形が示す如く、吉井窯跡群では、羽釜以外の坏・類・瓦等を焼造しており、上述の通り複雑な状況が考えられる。

### 8 「乗附型羽釜」の予算

上述してきた「吉井型羽釜」の外に、乗附窯跡群で焼造された羽釜が在る。この資料（第747図-1）は、小塚支群（高崎市寺尾町小塚）の破壊された窯体周辺で川原喜久治氏が採集したものであり、文献2で紹介されている。この羽釜は、紐作り成形後轆轤整形されており、甲種に該当するものであるが、「吉井型羽釜」と対比させると、口縁部は短く口唇部の内面側が丸味が強い。外面側は吉井型同様に角を有しており、胴部は、吉井型の中で同様な作りものと認められる。この口縁部・口唇部だけが違いとして認められるが、現状で吉井型が主体を成す中で筆者は乗附窯跡群の胎土特徴を有するものは本例以外未見である。この様に乗附窯跡群で生産した羽釜は、吉井型羽釜に対し非常に少量の生産であったことが類推され、生産された羽釜は乗附周辺（片岡群内及び周辺地域）に限られた地区供給であったと思われる。今後、資料が増せば「吉井型羽釜」・「月夜野型羽釜」に対し「乗附型羽釜」と称号されると考える。

上述した如く、「乗附型羽釜」は現状では予察の意味合いが強いが、小塚窯跡での既出例がある点では、「吉井型羽釜」・「月夜野型羽釜」と分別して考えねばならないと思う。



第747図 乗附窯跡群小塚支群採集「乗附型羽釜」及び参考資料（1：3）

### 9 まとめ

「吉井型羽釜」は、9世紀末頃から唐突的に出現する。この出現は、従来の土器類にはない器種として焼造される。そして、この写しと考えられるものが月夜野窯跡群でも焼造が開始され、「月夜野型羽釜」として確立される。そして、「吉井型羽釜」の出現する頃には、土器器種の生産も極度に縮小され、この土器器種に替わるかの如く状況が認められ、従来よりこの羽釜を煮炊具の中で位置付けられており、村主遺跡・号住居跡での出土状況の如く、カマドに懸けられたままでの状況も有る。

この出現の状況は、内的要因に土器器種の消滅が想起されるが分明では無い。又、外的要因としては具体的に考えの及ばないが、従前より、金属製品に替わる器種ではないかとも考えられているものの、その金属製品自体も実態が不明である。

「吉井型羽釜」は、出現には単数種乃至数種のほぼ定形化した状態で焼造が開始される。そして、成形技法を見る限りに於いては、須恵器工人が関わっての所産と考えられ、須恵器の一器種として把握される。然し、前代の如くの灰色に焼締められたものではなく、中性焰～酸化焰焼成の軟質気味の焼き上がりで製品とされた。この焼締めでない利点とすれば火中での耐火が有る。然し、この頃には、所謂「土器土器」が出

現し、以後、従来の焼締による須恵器が消滅するかの如くの状態にこの“土師質土器”が盛行し、後代の“カワラケ”へとその変貌を遂げるのであるが、9世紀後半～11世紀中頃の土師質土器は、確實に前代の窯跡群中で生産され、成・整形技法も前代の系譜を継承している。異なる最大の点は、焼成する器種が・環・皿にほぼ限定され、吉井窯跡群でも技法的に土師器の技法により“土釜”の生産が始まる点である。

この様に羽釜の出現頃から須恵工人組織に変革が認められるが、それは、羽釜の出現自体が直接的な要因とは考え難い。この頃、秋間窯跡群は閉窯期に至り、藤岡窯跡群でも土師器の生産が激減し、代わって、内黒土器等須恵器の技法がもたらされている。更に、この藤岡窯跡群での須恵器の増産があり、この中の環・類には、秋間窯跡群の環・類に認められる技法の特徴が顕著に認められる。上野国に於ける“土師質土器”の盛行の内的背景には、この藤岡窯跡群に何らかの要因があると考えられる。則ち、須恵工人の変革は、律令社会の内部での意図的で混沌とした状況が想起される。

羽釜の出現＝吉井型羽釜は、この変革期に出現し、窯業生産体制の変貌と軌を同じくして甲種から乙種へと変遷したと考えられる。

## 参考文献及び註

1. 後藤守一「原始時代の武器と武装」雄山閣出版 昭和11年(1936)
2. 群馬歴史考古同人会「土師部会研究資料」№1 1982  
立正大学考古学研究室・東京考古談話会  
『シンポジウム関東地方における9世紀代の須恵器と瓦。  
——埼玉県入間市八坂前窯跡・阿久野久窯跡を中心として——』1982

註1 矩形の概念に就いて、和算研究家の小林龍彦氏(現・親生市樹徳高校教諭)に照会した。照会内容は、「矩形」の概念が、和算と数学ではどの様に定義付けられているかという点である。結果、先ず和算学では、「矩形」自体が名称とならないことであったが、江戸時代初期には「方」・「長方形」＝「長方形」の概念が確立していることであり、「方」は正方形、「長方形」は長方形であるとのことである。又、数学では、氏の友人・知人に御覧合載したのであるが、各人が各様の認識であったとのことである。

一方、中国前漢時代にとまめられたとする「九章算術」では、所謂ピタゴラスの定理と同じ内容を説明する部分に、「矩形」の語が認められるとのことである。これは、直角の三角形を「句(つる)」高さ「股(たもと)」とし、斜辺を「弦(げん)」と記述し、この中で、「句」を2乗したものを「形形の角(べき)」と表わしているのが、「九章算術」に認められる唯一の「矩形」という語であることなど、「矩形」に係わる色々なことを御紹介していた。

「矩形」を広辞苑は、「長方形・さしがた」としている(第三版)。大漢和辞典では、「①ですがた。②幾何学で各々の角が直角を爲す四辺形」としている。

結論的には、明確なる規定はなく、大漢和辞典の②説明どおり大略的にとらえる名称と思われる。

考古学では、方形周溝墓等で用いる「矩形」や古墳で用いる「矩形」の如く、「方」という正方形の概念を正確に用いることにより、長方形に該当する形状を「矩形」と表現し、長方形の通用認識である「長方形」を避ける為に、「平行する二辺がやや長い正方形基礎の形状」を表現するに用いたことにより、曖昧な表現として實用化している。反面、曖昧な方形でもある。筆者も上記の点で「矩形」を常用している。

## 第2項 金属器類と鉄器に就いて

註2 鋳物の名称は、文献1によれば、「鑪鑪の前身、即ち鑪鑪といふべきか、椀鑪といふべき、之の定形様式のもの(後略)」(P93～94)とあり、同部の形状には、鑪に之の形を一部を付加させた如く形状を指示している。然し、当中間地域の製品は、鑪の形と異なり、鑪と鑪を境別させる、袋鑪と鑪の差も至って認められる。この双方の相異点からすれば、「鑪」として容認されるものではない。だが、鑪には冠高し状の研ぎ減りが認められる。この冠高し形状自体、刃の鑪に見られる形状様式でもあり、「鑪」としても認められない。この点では非常に特殊な形状を呈するが、冠高しが認められることから工具・器具と見より、武器としての認識に妥当性が見出せる。そして、この製品に柄を装着させれば、その形状は「鑪」になる。然し、鑪の機能は、突き刺す点にあるが本品からはこの突き刺す武器としての機能は無理であると考えた。とは言っても、文献の記述のある鑪鑪とも本来的に異なり、矛、戟としての機能が見出せる。

上述のとおり、形状・機能の二側面からも不可解な点が多い。本稿では、明確なる根拠はないが、鑪鑪としたが、時代的に、鑪の出現には似ながらも考えられた為、「鑪鑪」の名称とも用いなかっ。

## 第4項 特殊遺物に就いて

註3 鳥羽遺跡出土の経絡に鍍金具は、整理担当の緒賀邦男氏より詳細なる御説明賜った。

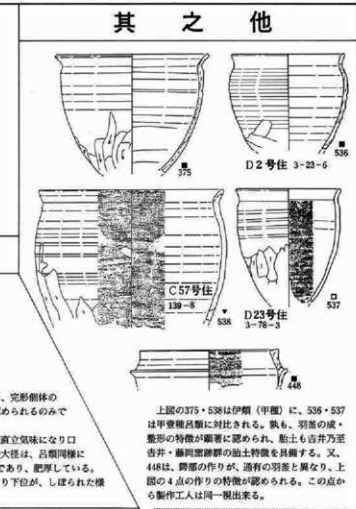
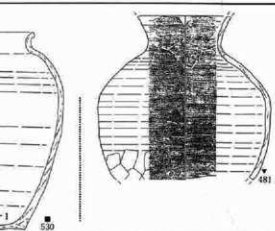
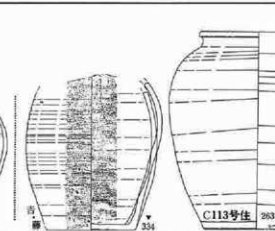
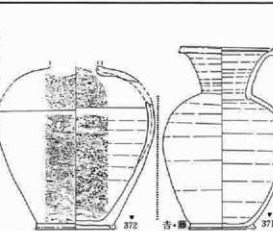
註4 藤岡窯跡出土の金銅製品は、現在保存地蔵が壊れたため数種であったため数種担当の女屋和志雄・関根慎二両氏の御配慮で写真を見させていただいた。49号住居跡から出土している。住居跡は11世紀前半に比定されている。

註5 度量衡に関する詔令式を見ても、「尺」が大尺なのか小尺なのか明らかでない。常用尺を小尺とする規定は、美濃権令に「凡度 十分為寸 十寸為尺 一尺二寸為大尺一尺(後略)」があり、又、「凡度地 量制銅鉄者 皆用大 此外 官私悉用小者」が知られている。この前者は、大・小尺を単位規定したものであるが、後者は、測地尺に大尺を他は小尺を用いることを規定している。これは、唐制の完全なる模倣である。

一方、経書類には「凡度量衡者 官私悉用大 但銅鉄量秤器用小者 其度以六尺為寸以外如令」の記述が認められる。これは、小尺の使用をほぼ限定しており、小尺を廃止したと解する場合がある(小泉康徳「もろさし」1977)

この二者の史料からは、大・小尺が確實に存在したことを示している。又、この記述も唐制の模倣である。

須惠器瓶



其 之 他

9C末

甲壹種

**須 要**

甲1種は、文中中で記述したとおり、成形が紐作後縦線を施す一歩で、特に縦目線を残すに残す個体を指す。又、口縁部の内面側が肥厚し、肩は、粘土紐粘付後、強く引き出されている。この為、肩は硬い感じを受ける。口縁部は乙2種に至るまで平直である。特に本種では、平線の唇部側が尖った特殊な状態であり、甲2種に連続される。

**伊 類**

伊類は、器形全体が丸味を強く帯び、口縁部はや平直に内湾する。口縁部は、器形の大ささで比較して細い。器形の最大径は、胴部にあるものが大半である。

甲壹種伊類、甲壹種伊類は、器形が少なくない。特徴は、甲壹種の特徴は無論のことである。器形の胴部の丸味は強く、口縁部内面に肥厚が顕著に認められる。口縁部の厚は、口縁部自体が内湾が強い為、肩の粘付位置がこの内湾部になり、これにより、必然的に最大径の胴部になり、これが器形の最大径である。

531は、体部下半部丸味が強い。他遺跡例では、肩下半部がやや直線的になるものがやや多い。

甲壹種伊類の出現は本文中でも若干記したが、須恵遺跡の器形に對比すると共通する点が多い。428・333・372の如くであり、工人上の系譜は同系譜と考えられる。

**呂 類**

甲壹種呂類 内湾気味の口縁が直線的に内湾乃至直立する。胴部は伊類よりやや直線的に立ち上がる。最大径は胴部。胴上半部の横線状の整形痕を残すものが多い。

**波 類**

甲壹種波類 波類は、割合が少ない。他遺跡に於いても同様であり、完形個体の遺跡少ない中では唯一例（日高遺跡 号土灰）が認められるのみである（器形の丸が不明である）。

器形の特徴は、直線的に仕上げた胴部が内湾乃至直気味になり口縁部と肩は、この状態から粘付される。器形の最大径は、呂類同様に胴部にある。口縁部内面は、伊・呂類の同程度の肥厚であり、肥厚している。全体的には、伊・呂類の中間的様相とも言えるが、肩より下位が、しぼられた様な形状をしている点が最大の特徴とも言い得る。

10C前半

甲貳種

甲2種は、甲1種の特徴と基本的に同様であるが、整形時の縦目線が顕著ではなく、肩周圧による通有例とは異なり、肩・コナ等に上行された筋の痕跡の状態を、縦線の筋に準じていた多量の糸痕が顕著に認められる。又、口縁部の肥厚は少なく、肩の均一化傾向に肩の肥厚が減少する点がある。

甲貳種伊類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。

甲貳種呂類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。

甲貳種波類 全体の作りは、甲壹種伊・呂類同様に器形の粗製化されたものである。器形は、波類として上述した点に基本的に同じである。肩は、全体に細い縦線筋を留めてあり、甲壹種の特徴を留めているが、全体の器形が丸く、口縁部の肥厚が認められない点、肩に肥厚が肩から甲壹種に含めた。甲壹種、甲壹種の中の中間的様相とも言えるが、中間的の様相は、本類に限ったのではなく、須恵全体の中にも散見する。

10C中盤

乙壹種

乙1種は、成形が紐作り後直に成形であるが、縦線の使用は認められない。この為、器面には、横方向・斜位方向の筋が交互による無地の糸痕が顕著に認められる。だが、口縁部の粗製痕は、整っており、軽易な回転台乃至回転台状の使用は考えられる。肩は乙2種より更に粗製化を受けている。

乙壹種伊類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。

乙壹種呂類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。

乙壹種波類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。

11C初期

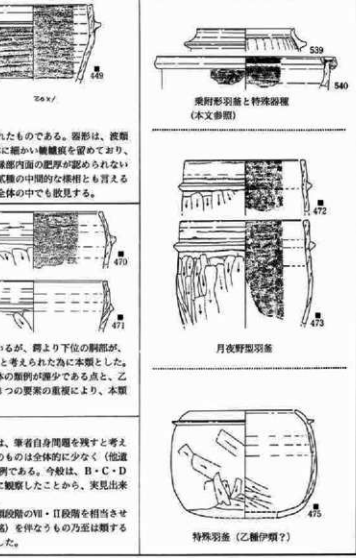
乙貳種

乙2種は、甲2種の特徴と基本的に同様であるが、器形が少なくない。器形の特徴は、器形の薄化と器形の大形化が顕著である。肩は、甲1種の肩に比較すると、相当平坦化した状態で、小さく短かくなっている。

乙貳種伊類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。

乙貳種呂類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。

乙貳種波類 器形は、胴部上半が直線的に内湾する。外部の整形痕は、甲壹種伊類と同様で、肩下半部の工程を用い、縦線筋により整形が行なわれる。この為、細い糸痕が認められ、肩周圧に特有の縦線痕は異なる。肩と胴に接しない。基本的な器形は、甲壹種として、伊・呂・波類共に変わらない。器形は上述の特徴どおり、伊類の顕著な内湾は認められない。粗製化の傾向が認められる。



11C前半





現在伝世する正倉院の躰尺は、概30cm程の10寸1尺で、同様に法隆寺伝世尺も同様である。又、出土尺では、大宰府出土尺が1寸3cm程で4寸余残存している。

上述の点は筆者の浅学による誤解もあるかも知れないが、印章の寸法を細則で定めてはいるものの、その使用尺が何であったのかは現状では認め得ないのである。

群馬県で出土例の印章を3.0cm×2.4cmで各々素すると必ず一方の1.5倍・1.2倍等の数値が得られ、特に日高遺跡出土の烙印が認められる器物底版には、1辺2.8cm×5cm程、素下では最大の部に属している。この数値を3.0cm×2.4cmで素すれば、後者が2寸の尺尺が得られる。この様に、寸法を単に3.0cmで素じていいのであろうか。

## 註6 「矢中遺跡 (VII) 矢中村東遺跡」 高崎市教育委員会 昭和59年 (1984)

### 第5項 土師器坯の成形法に就いて

註7 県内の古墳時代以降の土師器生産は、現在でもその実態は殆ど不明な状態である。これは、文献資料では具体的資料が残っていない点が大きいが、現状の土師器研究が偏年至上主義的な傾向により最大の問題点を看過している実態にもはかならない。

出土する土師器は、形状・技法により分類がなされるが、胎土での分類は、極限られた者達による試みとしての状態ではない。胎土は、生産地を技法・形状等より、より端的に、尚且、より履弁に一つの大きな生産単位集団を語るものではない。

古墳時代後期 (6世紀以降) 以降の土師器と以前では、本文中でも記述したが、県内では、確実に各地域様相が認められるところである。6世紀以前では、県西部側で顕著な状況を取られるが、県下全体でも県西部・東部・北部の僅いながらも感じ得る胎土等の違いが認められる。6世紀以降は、技法・胎土で、県西部・東部・北部での違いは明瞭な差をもって認められる様になる。そして、7世紀以降は、齊一化的状況が認められる様になり、特に、7世紀後半以降8世紀代は、齊一化がはかられた段階で9世紀へと継続される。この状況の背景の一点に、胎土を原料たる胎土の供給が安定している一面があり、供給側の体制も確立された状況があつての必然としてとらえる事が出来る。

特に県西部では、6世紀から9世紀代まで土師器の胎土は、乙種から丙種乃至乙種・丙種の併用が認められるものの、基本的にはある一地域への系譜の通及が可能である。特に8世紀以降の状況は、県下全体に乃ち様な供給体制が認められるので、社会・政治的な背景無くして所産とは考え難い状況である。

この県西部での土師器の生産は、胎土から藤岡窯群での生産が指摘出来る。この藤岡窯群は、吉井窯群と連続し (現状の認識では重複する部分もある)、「吉井・藤岡」と観察表中で示した如く、胎で削り割れる状態ではない。藤岡窯群は、基本的に生地土は丙種が主体であるが、器形と胎土を合せて分類した場合、恐らく、水滸製型の一群がある。

この藤岡窯群と吉井窯群は、古代の緑野郡 (緑野毛倉)・多胡郡 (甘栗郡) である。緑野郡は11郡の郷名が知られている。この中で、土師器は、県下で唯一の「土師器の土師を冠する郷名」である。一方、下野郡でも同様で、足利郡土師郷が認められ、現在の足利市の北東部に「ハジカ沢」の地名にその名を残す地域が下野国土師郷の位置と考えられる。

緑野郡は現在藤岡市が中心地域と考えられるが、この藤岡市 (旧奥里村) には現在も「上野神名帳」に記載が認められる「土師神社」が鎮座している。この土師神社の祭神は「野見宿子」であり、記で著名な徳仁天皇系の埴輪創生の実業者でもある。この土師神社周辺の本郷地区には埴輪窯の痕跡例、本郷埴輪窯跡の存在が知られ、既、齊藤兵五郎氏の指摘するところでもある。この土師神社の鎮座する位置が、古代の「土師郷」に比定されると考えられる。

この緑野郡と足利郡土師郷との共通点は、双方共に、古代須惠郡窯の中心地域である点にある。これは、土師器を供給出来る体制は、原料の胎土の安定供給がはからなければならない。この点が最大点でもある点と、郡郷単位が同じ段階で、土師器の名称を与えられるだけの要因も内在していたことにほかならない。例え、評定割の段階としても、意味は同じである。そして、7世紀後半の土師器坯は (県西で出土する環頸に限れば)、6世紀代からの系譜が認められることから (この点に就いては後年何らかの形で発表する予定がある) すれば、土師郷の成立要因は、古墳時代からの下地があり、その下地が成立させるに足るだけの要因が内在したことにはほかならないと考える。

又、緑野毛倉は、日本書紀安閑天皇条の記述から6世紀前半の成立と考えられている。この緑野毛倉想定域には、白石古墳群の存在がある。特に6世紀以降7世紀代迄は七瀬山古墳を頂点とする一地域首長に足る造墓活動が認められ、緑野毛倉の胎土者に属されている。この緑野毛倉の領域に、律令期の土師郷が含まれていれば、6世紀代の藤岡窯群の土師器の生産は、この緑野毛倉の性格を示唆することが考えられる。

更に、多胡郡建部郡の折、緑野郡から武蔵郡が割譲されている。この8世紀代では、武蔵郡周辺を境として須惠郡・瓦の生産が増大する。このことは、旧緑野郡と旧甘栗郡は、窯業生産に係る何らかの大きな背景の存在が感ぜられ、これが、多胡郡建部にも保わられる一つの要因とも考えられる。又、多胡郡をはじめ甘栗・糠水・片岡・群島等は、物部氏系の氏族が支配している。

土師器生産で6世紀以降 (生地土の産化=甲からの改変) は、その背景として継承には、須賀有力首長層を介在して生産の契機が想定され、律令の施業により後世の「産」的な様相の如く独自の供給が行なわれる。これにより、県東部・北部の土師器生産は縮小し、消滅するかの如くであるが、県東部側では、下野国からの供給が見られることから (仮称「足利型土師器」=「コ」字口紋を呈し、胴・腹部がつまった器形一肩が張る器形。これに対し肩がやや長目の器形=仮称「藤岡型土師器」)、土師器の供給と需要は、恐らく6世紀末頃から7世紀前半頃に収斂が見込まれる。

### 註8 項 吉井形別案に就いて

註9 中沢信、「月夜野羽塚について」『埼玉月報』No.40 群馬県埋蔵文化財調査事業団

中沢信、「月夜野羽塚の標形と月夜野古窯群」『大塚日遺跡・村主遺跡』一般国道17号線 (月夜野バypass) 改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III 群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和61年 (1986)

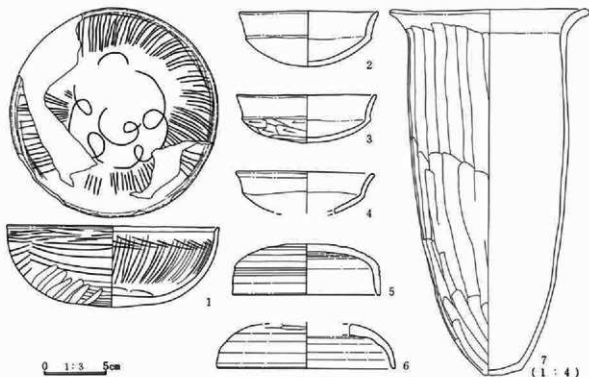
註9 東北地区での出土羽塚は、吉井乃至吉井・藤岡窯群の製産品と異なる胎土の羽塚が認められる。これらの中には、東上野で焼造されたと考えられるものも含まれており、今後、検討を必要とする。

## 第2節 北側調査区

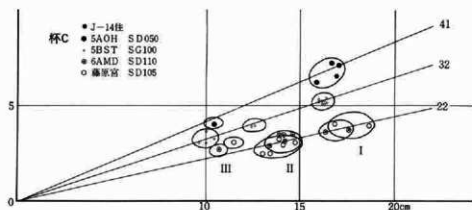
## 第1項 J区第14号住居跡出土畿内産土師器について

第☆図に提示したものはJ区第14号住居跡から出土した遺物の内、出土位置及び床面との関係が捉えられているものである。3の土師器壺1点が南コーナー部から出土し、7の土師器甕がカマドの左袖を挟むように二分して出土した他、住居跡中央部床面から出土したものである。1の暗文土師器杯は、P<sub>2</sub>及びP<sub>4</sub>付近の床面と間層を挟まずに、それぞれ二つに割れた状態で出土しており、置かれたという状態ではなく投棄された感がある。したがって暗文土師器杯とその他の遺物には、出土位置や床面との関係等に違いは認められない。また、第14号住居跡は弥生時代の竪穴住居跡（J区第18号住居跡）と重複する以外、近接する時期の遺構との重複はみられず、まして暗文土師器杯の出土状態は、土坑等の小規模な遺構との重複によってもたらされたものでないことは明らかである。さらに、住居跡の覆土下層にはやや不自然な堆積状態が認められ、埋め戻された可能性が示唆される。これらのことから図示した遺物は、第14号住居跡廃棄段階における一括遺物であり、共伴として捉えることができるものである。

遺物の残存状態は、1の暗文土師器杯と7の土師器甕の2点が完形に近い状態で接合ができたのを除いて、その他は片～別の破片であり、その出土状態及び残存状態からすべて廃棄（投棄）されたものと考えられる。3点（2～3）出土した土師器杯はいわゆる「模倣杯」と呼称されているもので、3点共ほぼ同形で明瞭な外縁を有し、扁平な丸底と外反する口縁部を特徴とするものであり、口径約11cm、器高約3.7～4.3cmである。また、胎土は「水晒」したような微粒で粉っぽく、夾雑物を含まない特徴的なものである。この形態及び胎土は6世紀代に顕著にみられるものである。カマド部から出土した土師器甕(7)は、第14号住居跡と



第749図 J区第14号住居跡出土遺物



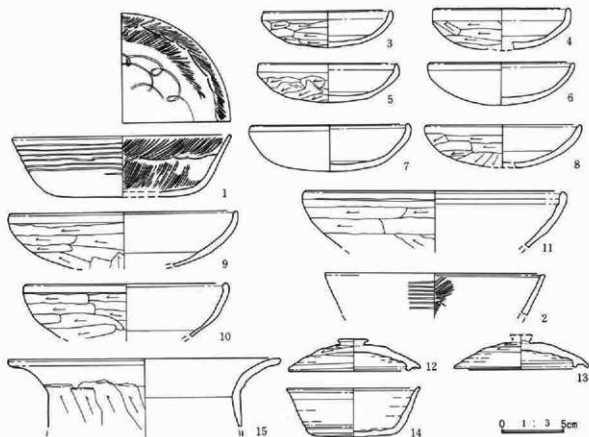
第750図 径口指数グラフ

最も関係の深い遺物であるが、長胴で胴部中位にわずかに張り有し、口縁部が「く」字状に強く外反している。胴部調整は、口縁部横撫で後の縦位削りであり、8世紀代以降顕著にみられる肩部に横位削りを有する一群とは別系譜のものである。2点(5・6)出土した須恵器蓋は在地産と考えられるものであり、口径が約12~14cmで、5の天井部外面調整が回転削り、6が手持ち削りである。小型化の傾向はあまり顕著ではないが、TK209~TK217型式に平行すると考えられる。

1の暗文土師器杯は、口径約16.9cm、器高約6.5cmで、口縁部は「く」字状にわずかに屈曲し、内面がわずかに肥厚し弱い稜が認められ、体部には丸味があり底部は丸底気味である。この底部は、提示した実測図では計測部分の関係から十分に表現されていないが、中央部がわずかに突出し、周囲が窪み特徴的なものである。器面調整は、全面に丁寧な撫でが施され、外面口縁部付近は横位、体部は弧状の粗い磨きがされている。底部は一定方向の撫で状の削りを施し、さらに削りの両端部に直行するような磨きをしていいる。内面は器面の摩擦が激しく判然としませんが、見込み部の一部から口縁部にかけてシャープな放射状暗文が比較的密に、見込み部には粗い螺旋暗文が施されている。また、口縁部内面には放射状暗文と直行するように、斜位の粗い磨きがされているが、これは施文方向からみて口縁部外面の磨きに対応する磨きであり、2段の放射状暗文とは考えられない。胎土は緻密で、白色細粒を均一に含む他夾雑物はみられず、白色に発色した粘土が、器形に沿うように縞状にみられることが特徴である。また、器面が薄い膜状に剝離する特徴がみられ、前述の縞状にみられた粘土の状態と合わせて、相当に粘性の高い粘土を用いて製作されたことがわかる。色調は、置かれた環境の違いによるものか、接合部を境に鈍い橙色と褐色を呈しているが、本来は鈍い橙色を呈していたものと考えられ、全体に硬質に焼成されている。

以上のようにこの暗文土師器杯は、器形・調整技法・胎土・焼成すべての点において、共存する土師器杯とは相違している。前述の特徴に合致するものは、飛鳥・藤原宮発掘調査報告IIで分類されている杯C I<sup>(1)</sup>であり、当資料は在地で模倣されたものではなく、畿内で生産されたものが搬入されたものと考えられる。この点については、奈良県教育委員会事務局文化財保存課の林部均氏に実現していただき確認を得た。

当資料の所属時期については、第☆図の径口指数グラフに示したとおり、飛鳥I期の指標とされている小墾田宮推定地の溝S D050の土器群の範囲にあり、飛鳥I期のものと考えていたが、林部氏の御教示によれば、底部の削りや外面の磨きや口縁部内面の斜位の磨き等のI期の要素と、見込み部の螺旋暗文に代表されるII期の要素を合わせ持っており、飛鳥I期からII期へ変化していく中間的な位置付けができるのではないかとのことであった。これは小山雅人氏の「飛鳥・白鳳時代の土器編年」における飛鳥I c期に当たるものと考えられる。



第751図 荒砥天之宮遺跡 B区6号住居跡出土遺物

畿内産土器とその他の遺物の共伴関係とその時期についてみるために、平城1期の杯A1の出土した荒砥天之宮遺跡<sup>(3)</sup>B区6号住居について検討してみたい。第☆図に示した遺物の内3・12・14は床直、6はカマド燃焼部、7・13は床面から3～4cmのレベルから出土した。その他は1・2を含めて埋土中から出土したものである。B区6号住居は他の遺構との重複が認められないことから、他の遺構の遺物が混入する可能性は少ない。したがって出土状態から当住居にほぼ確実に伴うと考えられるものは、3・6の土器器坏と12の須恵器蓋、13の須恵器坏の4点と考えられる。しかし埋土から出土した5・8・13と、住居に伴うと考えた3・6・12の間にはそれぞれ型式差は認められない。したがって埋土中の遺物と床面出土の遺物は、ほとんど時間差なく6号住居にもたらされたものとして捉えることができる。このことから1の畿内産暗文土器器坏と、それ以外の遺物との間に大きな時間差を考慮する必要はない。そこで1・2以外の土器群の年代観と、1の年代観を比較してみると、3～15の土器群は、群馬県では趨勢として7世紀第4四半期頃に位置付けられており、1を飛鳥V期を含む平城1期(7世紀末を含む8世紀第1四半期)とすると、時期的にオーバーラップしており、1の畿内産暗文土器器坏が短時間のうちにこの遺跡にもたらされている可能性が強いことがわかる。このように畿内産土器は、出土状態の良好な例でみればかぎり世代を越えた伝世を考慮しなければならないような出土は認められない。

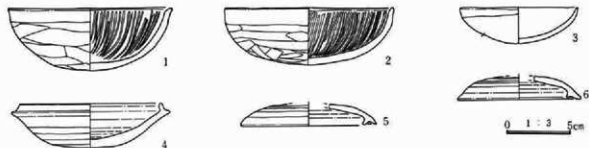
次に上記前提の上でJ区第14号住居跡の土器群の年代観についてみると、第☆図2～7の土器群の存続年代と、1の畿内産暗文土器器坏の搬入された年代とはオーバーラップしている可能性が強いことになる。このことから1の畿内における年代観を検討することによって、2～7の土器群へ年代的な一定点を与えることが可能である。

1の畿内産暗文土師器杯は、器形・量目から飛鳥・藤原官発掘調査報告Ⅱ分類における杯CⅠであり、技法・径口指数から飛鳥Ⅰ～Ⅱ期の中間的位置付けができることは前述のとおりである。従来からの年代観にあてはめてみると、飛鳥Ⅰ期はほぼ7世紀第1四半期、Ⅱ期は第2四半期に当てられており、このことから1の年代観はその中間的な位置付けということになる。しかしこの年代観については白石太一郎氏により飛鳥Ⅱ期の存続年代を640～670年頃まで下げる見解が示されている。また、白石氏同様飛鳥Ⅱ期の開始を640年頃とする小山雅人氏の編年に従えば、1は飛鳥ⅠC期に当たることになり、上記3者のいずれに従ったとしてもほぼ7世紀第2四半期頃の年代観が得られる。これは共存する須恵器の年代観とも齟齬は認められない。したがって1の搬入された時期はほぼ7世紀第2四半期頃とみることができ、2～7の土器群にもこの年代観を与えることができる。

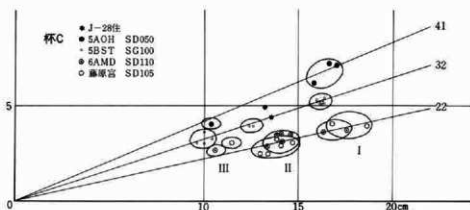
以上のようにここで検討した畿内産暗文土師器杯は、7世紀第2四半期頃に位置付けられるものであり、時間差なく当遺跡に搬入された可能性が高い。この時期は、共存する土器群からもわかるように、古墳時代の範疇で捉えられるものである。林部氏の検討によれば、東国への畿内産土師器の搬入は飛鳥Ⅲ期、平城Ⅰ期、平城Ⅲ期の3時期にピークがあり、その搬入の背景には古代律令国家の地域支配が強いかかわっていることが指摘されている。<sup>(6)</sup>当遺跡の例は律令制が地方導入されたとされる時期に明らかに先行するものであり、当地域が中央と密接に結び付いた地域であったことを改めて知ることができる。また、この段階で新様式の土器を受容していることは、この直後に出現すると考えられる前段階に系譜を持たない律令時代を代表する土器生成に深くかかわった可能性が指摘できる。

## 第2項 J区第28号住居跡出土物について

J区第28号住居跡は調査区南東部に位置し、東壁の一部が調査区外にかかっているが、検出部において他の遺構との重複は認められない。提示した遺物の内、第☆図1は貯蔵穴東側床直、2は北西コーナー部近くの床面からわずかに浮いた状態で、4はカマド左袖に接して、3同様床面からわずかに浮いた状態でそれぞれ出土した他は、覆土中から出土したものである。また、ここには図示しなかったがカマド付近から勾玉の石製模造品と白玉が出土しており、4の須恵器杯身と合わせて古墳時代的な様相も認められる。遺物の残存状態は1・2がほぼ完形、4が完形であり、その他は $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。前項で述べた前提から、1・2・4と3・5・6は時間差なく当遺構内にもたらされたものと考えられる。そこで個々の遺物について検討すると、4の須恵器杯身は口径約11.3cm、器高約3.5cmで、底部は回転莖削りであり、坂口氏よりTK217型式に平行する可能性が高いとの御教示を得た。5・6の須恵器蓋は口径10～11cmで、ほぼ最小の段階であろう。3の土師器杯は口径約9.5cm、器高約3.0cmで、口縁部の内湾は弱く、いわゆる「模倣杯」からは系譜のたどれないものである。次に1・2の暗文土師器杯は、深い丸底で口縁部がわずかに外反し、内面に弱い稜を有



第752図 J区第28号住居跡出土遺物



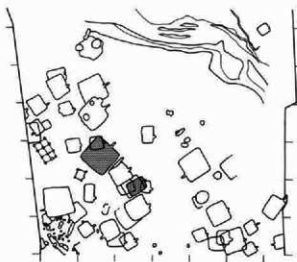
第753図 径口指数グラフ

するものである。外面は底部が比較的細かな篋削り後口縁部横撫で、内面は丁寧な撫で後、見込み部から口縁部まで放射状暗文を施している。量目は1が口径約13.4cm、器高約4.9cm、2が口径約13.6cm、器高約4.4cmである。また、焼成は硬質で、色調は本来鈍い橙色であった可能性が高い。以上の形態的特徴は、飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ分類の杯Cに酷似するものであり、第5図の径口指数グラフから、飛鳥Ⅱ期段階の杯CⅡの色調も含めてかなり忠実に模倣していることがわかる。モデルとなった飛鳥Ⅱ期の畿内産暗文土師器が搬入された時期と、これを模倣した時期には時間差はないと考えられ、技術を習得した人の動きであるとすれば、この時間はさらに短いものと思われる。したがって1・2の2点は飛鳥Ⅱ期に平行することになる。このことは共伴遺物の特徴が、飛鳥Ⅱ期にはTK217型式段階の須恵器が共伴すること、及び飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱにおける分類の須恵器杯Gが最小となるという2点においても良く符合することからも裏付けられる。年代観については前項でも示したとおり、飛鳥Ⅱ期の上限年代については、前期難波宮下層SK10043の資料の検討から640年頃とする説<sup>(7)</sup>が出されており、この説に従えば7世紀第3四半期頃の年代観が得られる。在地産の暗文土師器としては最も古い段階に位置付けられるものである。また、J区第28号住居跡出土遺物は、7世紀第2四半期に位置付けたJ区第14号住居跡出土遺物の次段階に当たるわけであるが、両者を比較すると須恵器蓋環・白玉等古墳時代的要素で共通する反面、土師器環と須恵器蓋に大きな違いがみられる。つまり古墳時代的要素の中に律令の時代的要素の強い「北武蔵型」と通称されている土師器環とかえりと宝珠摘を有する蓋が、セットされているということであり、時代の変換の時期として位置付けることができる。

## 註

- (1) 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1977
- (2) 小山重人 『飛鳥・白鳳時代の土器編年』『京都市埋蔵文化財情報』
- (3) 『瓦葺天ノ宮遺跡』朝鮮鳥居埋蔵文化財調査事業団 1987
- (4) 白石太郎 『年代決定論(二)』『岩波講座日本考古学』1985
- (5) 註(2)
- (6) 林彰均 『東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器』『考古学雑誌』第72巻第1号 1965
- (7) 註(2)(4)

## 第3項 J区住居跡出土の特異な須恵器について



第754図 遺構位置図

J区第10・34号住居跡から1個体づつ出土した須恵器は、他に類例を見ない特異な形をしており、器種・生産地等不明な点が多いため、類例を求める意味で詳述したい。

第34号住居跡出土のものは、出土位置は不明である。また、34住は25・32・34・56住と重複が激しく残存状態も不良であるため、残存状態の比較的良好な10住を中心に考えて見た。

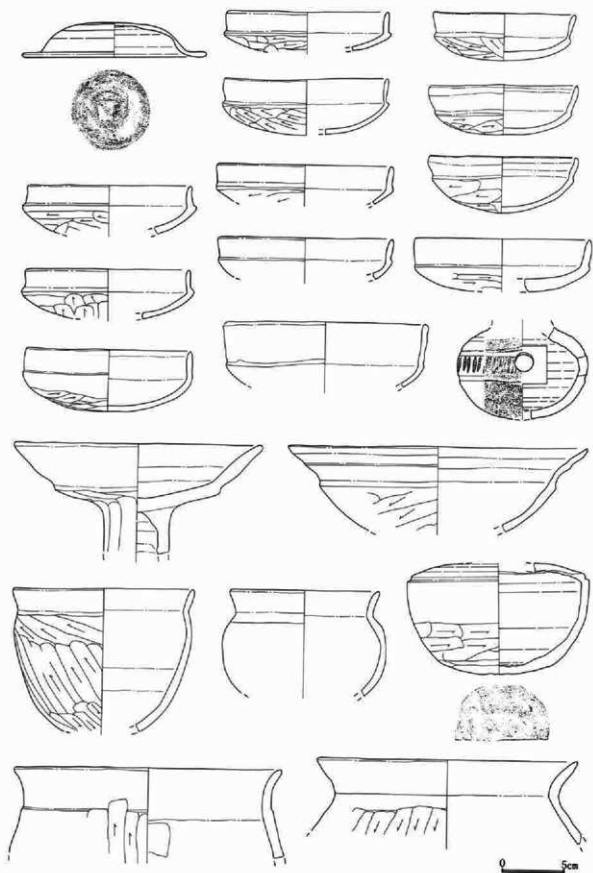
第10号住居跡は北コーナー部で第7号住居跡と重複するが、床面差が約20cmほどある。また7住の出土遺物を見ると10住とは年代差が大きく開くため、10住の遺物との分離は可能であり、また出土位置から問題の須恵器が7住に伴うものである

ことはない。10住の遺物は住居中央部に床上5～15cmの浮いた状態でやや散漫に出土しているものが多く、直接住居に伴う遺物はカマドの構築材等の他はあまり見られない。この須恵器も住居中央部やや北西寄りの床上約14cmの浮いた状態で一括して出土した。他の出土遺物は、土師器の環が最も多く、土師器は他に高坏・鉢・小形甕・甕が出土している。須恵器はこの須恵器の他は塊・瓶が出土するのみで坏等は含まれない。10住出土の土師器の環はいわゆる模倣坏で、口縁部の直立するものが多く、強く外反するものは見られず、口径も13cmほどのやや大形のものが多く、34住出土の土師器の坏も似た様相を示し、同時性が感じられる。

第10・34号住居跡の2個体を詳しく見ると、両個体共に天井部は扁平な丸底状を呈し、口縁部は肥厚し水平に開く器形に特徴がある。また、器厚は非常に薄く、作りは非常にシャープである。整形技法も轆轤整形（右回転）で、天井部外面は回転削り、内面に指によるひと撫でを施しており、大きさもほとんど同一である。胎土は白色細粒を均一に含み、焼成は良好で、硬質に焼き締めされていることも同様である。焼成に伴って付着した自然釉は34住出土のものは発色が良好で暗オリーブ色を呈すが、10住出土のものはやや発色が悪い。両者とも内面に僅かに釉が及び、何らかの器種に天井部(?)を上に向けた状態で重ね焼きされたことは確実である。このことから、組み合わせられる器種の口径は14.5cm前後と推定される。以上のように、この2個体は器形・整形・胎土・焼成等同一のものであり、同じ作り手によるものである可能性が指摘できる。

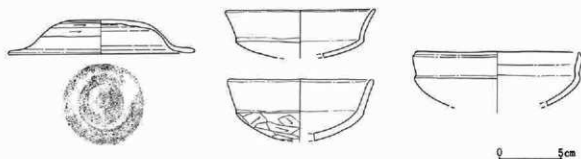
この須恵器の所属時期については、独自の年代観を持ち合わせていないため、三ツ寺Ⅲ・保渡田遺跡の井川達雄氏による古墳時代の土器分類と比較してみると、土師器の環は口径が約13cmと全体にやや大形のものが多く、模倣坏の崩れは全く認められず、また内斜口縁の坏を含まない点等が第4分類期に共通する。高坏・塊に古い要素が窺えるものの、ほぼ第4分類期に併行すると考えて良いと思われる。井川氏は三ツ寺Ⅲ・保渡田遺跡の報告書の中では各分類期の暦年代については触れていないが、舟橋遺跡の報告書では三ツ寺Ⅲ・保渡田遺跡の第4期に相当する時期を6世紀第3四半期に比定している。従って、この須恵器を含めて第10号住居跡出土遺物もほぼ同時期と見ることが出来るのではないだろうか。

ここでは一応蓋として取り扱ったが、共存遺物の中には組み合わせる器種がなく器種は不明と言える。ま



第755図 J区第10号住居跡出土遺物





第756図 J区第34号住居跡出土遺物

た、器形の整っていることや、器内の薄さ・胎土・焼成・釉の発色等を考え合わせると、在地産の可能性はきわめて薄く、県内でも他に出土例は見られない。そして、10・34住と言う近接した住居から出土しているところから、6世紀後半の段階で単発的にどこから搬入されたものと思われる。田辺先生が来県のおり実見されたが、陶器の製品の中には見当たらないとの御教示を得た。また、各地の方々にお聞きしたが、未だに類例は見られず、お気付きの方がおられれば御教示願いたいと考えている。

## 注

- (1) 川井達雄「古墳時代・奈良時代の土器について」『三ツ寺田・保原田遺跡・中里天神塚古墳』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団 1985
- (2) 井川達雄「舟橋遺跡の古墳時代土器と黒漆について」『舟橋遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第12集 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社 1989

## 参考文献

- 田辺昭三『須志器大成』角川書店 1981  
大阪府教育委員会『陶器Ⅰ～Ⅴ』1976～1980



## 付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

前@群馬県家畜登録協会常任理事 大江正直

群馬県県民文化財調査事業団 木津博明

桜岡正信・友廣哲也

はじめに、

上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体は総数1,059点以上ある。この1,059点は、古代から近世に至る一遺跡としてほぼ全時期をととしての貴重な資料である。

この1,059点に内在する意義は、特に、考古学・動物学をはじめ諸分野に供するものと考えられる。そのため、この貴重な資料の意義に鑑みて本章を設けた。

本章の主体部分は、動物遺存体の資料観察及び出土傾向そして考察にある。

尚、本章の構成は次のとおりである。

第1節 鑑定に至る経緯	(2)	7、出土牛歯の歯冠巾、巾率について	
第2節 出土状況の概要	(3)	第4項 県下5遺跡における調査結果のまとめ	(183)
第3節 観察について	(5)	1、県下5遺跡における時代別出土個体数及び出土点数	
第1項 はじめに	(5)	2、県下5遺跡における出土馬歯の大きさ	
第2項 調査方法に関する主な例言	(5)	3、県下5遺跡における出土馬歯・馬骨を有する馬の時代別、年令別、年令及び大きさ	
第3項 観察表について	(9)	4、県下5遺跡の出土馬歯における奇形発生状況	
第4項 遺存体の部位と模式表現について	(12)	5、県下5遺跡における牛の時代別出土個体数	
第5項 実測図について	(19)	第5節 考察	(192)
第4節 観察結果	(158)	第1項 時代別上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達	(192)
第1項 遺存体の出土状況	(158)	1、古墳時代	
1、地区別遺存体の出土点数		2、奈良時代	
2、時代別遺存体の出土点数		3、平安時代	
3、出土場所別遺存体の出土状況		4、中世	
4、種類別、部位別遺存体出土点数		5、近世	
5、種類別、時代別、部位別遺存体の出土状況		第2項 中間地域における出土馬歯の歯冠巾、巾率から見た上野国の馬の体格	(226)
6、地区別出土個体数		第3項 中間地域における近世以降の牛の飼養状況	(226)
7、時代別出土個体数		第4項 国分寺中間馬C中世について	(229)
8、馬・牛の出土個体について個有名称の設定について			
第2項 遺存体の形態	(176)		
第3項 遺存体を有する動物の性・年令・大きさ	(176)		
1、遺存体を有する動物の性			
2、遺存体を有する動物の年令			
3、遺存体を有する動物の大きさ			
4、出土馬歯の歯冠巾・巾率について			
5、出土した上腕骨の骨体部最少巾/骨体部最少径について			
6、出土牛歯の大きさ			

## 第1節 鑑定に至る経緯

近年の埋蔵文化財の発掘調査は、年々調査件数と共に対象面積が増大している。この反面、発掘調査の成果は、調査体制の充実もあり、次々と発刊される発掘調査報告書の内容が充足され、色々なことが明らかになってきた。これは、遺跡を考古学という単一の視点で分析するのではなく、関連する諸科・化学の分野からの分析もなされてきている点も看過出来ない重要なことである。

当中間地域からは、発掘調査に伴ない考古学が通有に扱う遺構・遺物と共に、自然科学の諸分野が扱う遺物種の出土も多く、既、第1分冊では、聖マリアンナ医科大学教授森本岩太郎先生に依る人骨所見を掲載した。そして、本第4分冊では、「動物遺存体」を掲載するが、この双方以外の植物や金属等の科・化学の諸分野での分析・考求は第8分冊中でまとめて掲載する予定である。

本第4分冊で掲載する「動物遺存体」の所収の経緯に、発掘調査実施段階と、整理事業実施段階での経緯がある。発掘調査段階では、昭和55年5月28日に、古獣骨・獣歯類等を鑑定並びに化石馬の研究をされておられる宮崎重雄先生を発掘調査現場に招き御指導を戴き、その折出土していたD区・I区の動物遺存体に就いての所見と、同収納方法等に就いて懇切丁寧なる御指導を賜った。この折の御指導を生かし、発掘調査では、延1,059点以上の動物遺存体を収納した。そして、整理事業実施段階では、発掘調査実施段階の経緯を踏まえ、宮崎重雄先生に御依頼申し上げる考案であったが、先生には、他遺跡の観察等で御多忙の事と拝察したので謙微の事情を考慮し牛・馬の改良の研究をされておられた、前脚群馬東家畜登録協会常任理事 大江正直先生の御手を煩す運びとなった。

大江正直先生は、学生時代より今日に至るまでに、従軍時代は馬医として、戦後は、群馬県下の牛・馬の改良に携わり、御退官迄に数多くの家畜動物と接した日々を送られてきている。そして、日高遺跡・三ツ寺III遺跡・下東西遺跡・田端遺跡出土の動物遺存体の観察とおしての考察には、古代史の一面に光明をあてられた。そして、調査・整理担当者として、依頼に当り御願ひした点は次のとおりである。

①出土数1,059点の動物種の同定。②同性別。③同年令。④同大きさ。⑤同出土傾向。

上記5点を可能な限り観察し明らかにして戴くことであった。そして、上記5点の観察結果に基づき、当中間地域の性格付・古代～中世の動物研究に係わる重要所見等に就いて、更に、考察を加えて戴くことを御依頼する内容とした。

斯而、昭和60年度より4年間に亘り、観察・実測・墨入・計測・写真等先生御自信の御手により可能な限り御尽力を賜った。

一方、調査・整理担当側としては、発掘調査段階で動物遺存体の出土した場合、可能な限りに於いてその出土状態の検証を実施し、住居跡出土の動物遺存体が新しい段階（土坑等との新旧関係等）の遺構との切り合いによる混入物か否かを反復確認・検証している。又、調査段階では、大半の個体が馬という認識であったが、牛の占有率が高い点や園分二寺に伴う諸官舎の専有馬や老令馬ではないという考案があったが、平安時代に若年死が多い点や、通有知見たる「古代は小形馬が主体」という先入観に反し、大形馬が多く含まれる点等、御依頼する以前の認識の多くが瓦解した。然し、出土傾向は、発掘調査を通じて見直したので、唯一、先生の指摘内容と一致し、特に井戸・溝状遺構出土の場合は、祭祀行為乃至祭祀的行為に伴う所産と推察されていた点である。

斯如、今次の「動物遺存体」の観察結果は、通有概念を一変させる内容が有り、本邦に於ける古代家畜を知る上では、標識的重要遺跡に匹敵し、又、古代に於ける馬産国上野国としての実態がようやく知れるに至っ

た。考察に当っては、先生御自身が半生を通じ家畜と直接接し、品種改良をも行って来られた御実績に負う所が多であり、「動物遺存体」を総合的視点に立脚したその方法・向学姿勢には、正に我々考古学を就学する者にとっての基範となるものである。又、整理担当する遺跡出土の「動物遺存体」が、これ程迄に重要な意義が検証されたことは、整理担当する者にとっても大変なる喜びとしなければならない。

以下、中間地域出土の「動物遺存体」の詳細なる観察及び所見、そして、考察に及ぶ膨大に賜わった玉稿を以下に編集した。尚、編集等に不備が生じている場合は、全ての責任は整理担当者にあることを明記しておきたい。

又、御依頼した動物遺存体は、御丁重にも1点づつ先生御自身により補修され、御手製の小箱に収納され返却戴いた事を附記しておきたい。

## 第2節 出土状況の概要

中間地域出土の動物遺存体は1,059点以上ある。これらの遺存体は大きく以下の二者の出土状況がある。

- 1、遺構に伴う遺存体。
  - 2、文化層から出土した遺存体。
- 更に前者は、以下の三者の状況が認められる。
- 3、遺構の覆土内から単体で出土する遺存体。
  - 4、遺構の廃棄時に遺存体を意識的に供献したと考えられる状況。
  - 5、遺存体廃棄（供献）の後に構築された遺構（土坑等）内からの出土。

以上、基本的には上述の状況が発掘調査をとおして看取された、「動物遺存体の出土状況」である。又、表土層や、調査の不手際により生じた出土地不明の遺存体を概括したものをその他に分類すれば、都合6つの分類がなされる。

上述した6分類の中で、特に注目されるのは、4・5は、遺存体に対し特殊状況が付加されており、通常の場合、「祭祀行為」と理解されている。そして、特にこの状況が看取された遺構には、井戸跡・溝状遺構・土坑・住居跡が上げられる。これらの遺構種でその状況が顕著であった遺構と出土状況は以下のとおりである。

- 井戸跡 A区第1号井戸跡—遺構確認面下3.5m程の人為層中から幼馬下顎骨が出土。14～15世紀  
 Y区1号祭祀跡 —遺構確認面で、頭骨上顎部が鋭利な刃物で切られ、埋納された状態。6世紀  
 I区4号井戸跡 —埋土最下層から43点の遺存体が出土している。  
 J区9号井戸跡 —埋土最下層から多量の遺存体が出土している。
- 溝状遺構 B区1号溝状遺構—南側壁面上位から、足を切られた状態の遺存体が出土。
- 土坑 F-26 馬、頭部（下顎）の埋納土坑  
 I-14 馬、頭部（上、下顎）の埋納土坑
- 住居跡 A区137号住居跡 —住居覆土中層中から頭骨が出土。

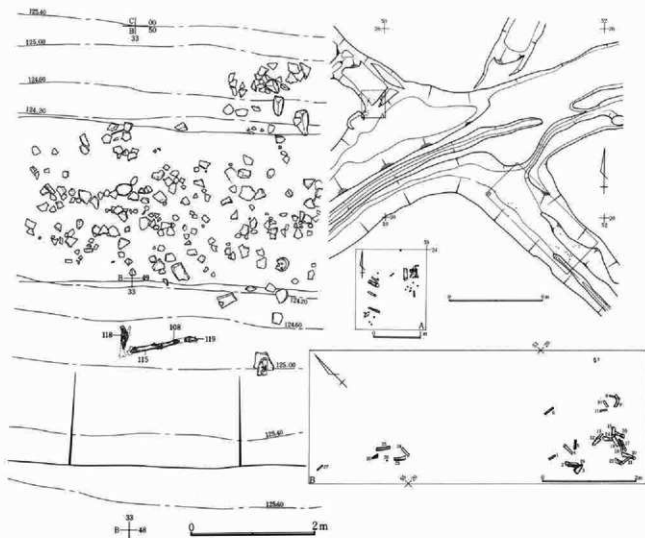
この8例は、上述の“祭祀行為”を想起させるものと、単に“墓”としての可能性が考えられる両者の在り方である。

この外では、多くの場合の出土状況は、上述した1～3・6に該等する。唯し、調査時点に於いて、調査上の不手際から詳細な出土位置が記録出来なかった場合が多く、特に住居跡の多くがこれに該等する。だが

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

この様な場合、調査段階に於いて出土したとする位置周辺を精査し、他の遺構との切り合い関係(特に土坑)の有無は可能な限り確認し、実際に、出土住居に伴う遺存体であるか否かを検証した。

そして、附表1中の「出土状態」の項目には、各遺存体の出土状態を略記した。



第757図 B区第1号溝状遺構獣骨出土状況

第758図 F区第2号溝状遺構獣骨出土状況

## 第3節 観察について

### 第1項 はじめに

上野国は8世紀から9世紀にかけて大和政権の蝦夷経営に伴う兵馬の供給基地(注1)として馬の繁殖及び育成が行われていたものと考えられる。兵馬の供給基地としての役割を果たすために上野国としては一体どのような形で飼育法をとり、またどのような形で馬の供給方法をとって対応していたのであろうか。さらに遠く蝦夷地に出動して行った馬達はどのような馬の姿をしていたのであろうか。これらの基本的な問題を明らかにするためにはまず当時の馬の実態を知る必要がある。

また中世の東国の馬については新田義貞の鎌倉攻めに参加した馬について林田重幸(注2)が推定平均体高129.48±1.03cmであったことを述べているが、これらの馬は合戦用に選ばれた馬であったと推定されるので中世の一般馬の例とはし難い。そのため上野国で一般に飼育されていた馬の実態を知る必要がある。幸い今回上野国分寺・尼寺中間地域(以下中間地域と称す)より1,059点に及ぶ動物の歯・骨が出土し実態を知るための好機に恵まれた。検体例として、これ程多くの古代家畜の出土例は少ないと思われるので、古代家畜を知るうえで当遺跡は鎌倉材木座遺跡のように標式的重要遺跡に匹敵する。

そのような意味で整理担当者から動物の種類、性、年令、大きさを明らかにし、動物の歯・骨を通じて本遺跡の性格づけに寄与するよう申し入れがあったので、これらの動物の歯・骨を検討することにより中間地域並びに上野国における古代から近世に至る間の主として馬の実態を明らかにしたい。また牛は長歯と短歯があつて個体差の大きいこと、雄・雌の性差が大きく、性不明のままでは大きさを把握しにくいこと等、形質上難点が多く、実態の適確な判断はし難いが、牛についても出来る限り実態の一部を明らかにしたい。

### 第2項 調査方法に関する主な例言

1 調査方法は次のとおりである。

- (1) 出土遺存体について種類の検討を行う。
- (2) 出土遺存体について性の検討を行う。馬、猪については大歯の有無と寛骨について、他の動物については寛骨について性的特徴を調べて性の検討を行う。
- (3) 出土遺存体について歯・骨の年令的特徴を調べて年令の検討を行う。
- (4) 出土遺存体について大きさの検討を行う。
  - ① 出土馬歯・牛歯については既往の古代及び中世以降の出土馬歯・牛歯の計測値(注3、注4)を集計整理し、出土馬歯・牛歯の計測値と対比して大きさの検討を行う。また出土馬歯・牛歯の計測値を現代小格馬(注3)及び現代黒毛和種の歯の計測値とも対比して大きさの検討を行う。
  - ② 出土馬骨・牛骨については、
    - ㉠ 出来る限り既往の古代及び中世以降の出土馬骨・牛骨の計測値と比較して大きさの検討を行う。また出土馬骨については林田重幸(注2)の現代在来馬の計測値と対比して検討し、出土牛骨については現代黒毛和種の計測値と対比して大きさについて検討を行う。
    - ㉡ 出土馬骨を現代の馬骨と対比して筋、腱、骨の発達度合いを検討する。
- (5) 馬、牛以外の人、猪、鹿、兎の性、年令、大きさについては判断出来る範囲内での記録にとどめた。

## 2 使用した基準

### (1) 歯・骨の部位、記号、各部の名称及び測定方法

#### ① 歯の部位、記号、各部の名称

〔馬歯・牛歯〕

G. G. SIMPSON [HORSES] OXFORD UNIVERSITY 1951、直良信夫 『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』（日本中央競馬会）1970、直良信夫 『古代遺跡発掘の家畜遺体』（日本中央競馬会弘済会）1973、加藤嘉太郎 『家畜の解剖と生理』1979により、和名については原田俊治訳 『馬と進歩』1979による。

〔人歯〕

藤田恒太郎著、桐野忠大改訂 『歯の解剖学』1949による。

〔猪歯〕

加藤嘉太郎 『家畜の解剖と生理』1979による。

〔鹿歯〕

大塚司紀之 『遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別、年齢、死亡季節査定法』 『考古学と自然科学』第13号 51-74 1980による。

#### ② 歯の測定部位

〔馬歯・牛歯・猪歯〕

[A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES] HARVARD UNIVERSITY] 1976による。

〔鹿歯〕

前述の①鹿歯の項と同じ

〔人歯〕

前述の①人歯の項と同じ

### (2) 骨の部位、各部の名称及び測定部位

#### ① 骨の部位、各部の名称

〔馬骨・牛骨・猪骨・鹿骨・兎骨〕

加藤嘉太郎 『家畜比較解剖図説（上巻）改訂増訂』1981、川田信平、饗庭正之 『図説家畜解剖学（上巻）新改訂』1974による。

〔人骨〕

石川春律・廣沢一成訳 『図解 解剖学事典 第2版』1983による。

#### ② 骨の測定部位及び測定方法

〔馬骨・牛骨・猪骨・鹿骨〕

J. U. DUERST BERN [METHODEN DEN VERGLEICHENDEN MORPHOLOGISCHEN FORSCHUNG] 1926により、馬骨については林田重幸 『日本在来馬の系統に関する研究』日本中央競馬会 1978、直良信夫 『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』日本中央競馬会 1970、を参考とし、牛骨については直良信夫 『古



代遺跡発掘の家畜遺体] 1973を参考とした。

〔人骨〕

今村 豊 「骨学」 【人類学・先史学講座 第四巻】 1938、鈴木 尚 【人体計測—マーチンによる計測法】 1973による。

(3) 欠損状態にある馬歯・馬骨による馬の大きさの判定について

出土馬歯・馬骨は大部分欠損状態にあり、欠損している馬歯・馬骨について測定可能な部位における一部の測定値のみによって馬の大きさを判定することは筆者も決して最良の方法と思っていないが、大きさを判定しないことよりは余程 better なことと考えて次のように判定を行った。

① 馬骨について

⑦ 上腕骨、橈骨、中手足、中足骨、脛骨及び大腿骨について

上腕骨について骨体最少幅及び最少径を、橈骨、中手足骨、中足骨、脛骨及び大腿骨については骨体中央部幅及び中央部径を測定し、その値を林田重幸(注2)が調査した現代在来馬の骨の計測値と対比して体高を算出した。

⑧ 大腿骨の顆上窩附近及び上腕骨の栄養孔附近

大腿骨の顆上窩附近及び上腕骨の栄養孔附近は窩及び孔の存在により骨が脆弱となることを防ぐため緻密骨の組織が厚くなっている。そのため遺残率も高く、出土する機会が多い。そのような残存状況から顆上窩及び栄養孔の上下径を授え馬の大きさ(中・小形馬の体高区分)を判定する一助とした。但しこの場合は原則的には中形馬・小形馬等の体高区分の判定にのみとどめ、判定誤差の生ずることを防ぐため体高を判定することを避けた。また中には個体差が大きく、骨の太さを示す骨の湾曲度と径の値とが異なると考えられるものは肉眼判定によって修正した。体高区分の判定に用いた計測値は、上腕骨の栄養孔上下径=中形馬2.5~3.9、小形馬2.5以下、大腿骨の顆上窩については中形馬は上下径50.0以上、小形馬48.0以下とした。

② 馬歯について

⑦ 齒冠長の測定し得る馬歯

出土馬歯の測定値を現代馬の馬歯の測定値(注3)と対比して大きさを判定した。但しこの場合現代馬の馬歯については体高140cmを超えてくると馬歯の大きさは個体差による影響が強くなっていくように感じているので体高140cm以上の馬の体高の判定は特に慎重に行った。

⑧ 齒冠長の測定出来ない欠損馬歯

馬歯は風化により短冊状に割れている場合が多いので、馬歯の部位を判定後その馬歯の咬合面における一部の歯の測定値と現代馬の馬歯における同部位の測定値と対比して馬の大きさ(体高または体高区分)を判定する一助とした。この場合現代馬の馬歯における各歯の測定値の中で馬の大きさと合致しない部位は避けた。また最終の判定は肉眼判定によった。

判定に用いた部位は、上顎歯については中附歯の前後径と左右径、前歯の前後径、後歯の前後径、前附歯+前歯の前後径、中附歯+後歯の前後径、小窩の前後径及び左右径、原歯後谷の先端の幅、等を用い、下顎歯については下次歯及び下原歯の前後径、下内歯及び下後附歯並びに下後歯の長径、等を用いた。2~3例を示すと、中附歯=大形馬 $P^3 \sim M^2$ の中で最大値5.5最少値4.8、中形馬 $P^3 \sim M^2$ の中で最大値5.0、最少値3.3、小

形馬 $P^3 \sim M^2$ の中で最大値4.6最少値3.2、前踵＝大形馬 $P^3 \sim M^2$ の中で最大値7.8最少値6.1、中形馬 $P_3 \sim M_2$ の中で最大値7.5最少値7.0、小形馬 $P^3 \sim M^2$ の中で最大値6.1最少値5.4、下次踵＝中形馬 $P_3 \sim M_2$ の中で最大値12.2最少値11.0、小形馬 $P^3 \sim M^2$ の中で最大値9.9最少値8.1、下原踵＝中形馬 $P_3 \sim M_2$ の中で最大値10.8最少値9.6、小形馬 $P_3 \sim M_2$ の中で最大値9.8最少値7.8等である。(P<sup>3</sup>、M<sup>2</sup>、P<sub>3</sub>、M<sub>2</sub>は個体差が大きいのので避けた。「P<sup>3</sup>～M<sup>2</sup>の中で」とは、P<sup>3</sup>からM<sup>2</sup>に行くに従って通常測定値が小さくなるのが普通であるが、個体によってP<sup>3</sup>とP<sup>4</sup>の測定値の大きさとが、またM<sup>1</sup>とM<sup>2</sup>の測定値の大きさとが入れかわっているものがあるので、「P<sup>3</sup>からM<sup>2</sup>までのその部位の大きさはP<sup>3</sup>では5.5、M<sup>2</sup>では4.8であるが、大ききの入れかわっているものもあるので概ねその程度の大きさである」、という意味である)

### 3 動物の種類表現方法

繁雑を避けるため出土遺存体の名稱中「ウマ」については特に「ウマ」とは記載しなかった。在来和牛は牛、「ニホンイノシシ」は猪、「ニホンジカ」は鹿、「ノウサギ」は兎と記載した。

### 4 動物の大きさの表現方法

(1) 馬の大きさは林田重幸(注2)の体高区分による中形馬、小形馬の表現を用い、中形馬以上のものを大形馬とした。

(2) 牛の大きさは既往の出土した在来の和牛種及び現代黒毛和種の大きさと比較し、「在来の和牛種より大きい」、「黒毛和種よりやや小さい」と言った表現方法を用い、具体的な推定体高は計測値の集積がなく不明のため記載しなかった。

### 5 獣の年令の表現方法

(1) 馬の年令については市井正次(注5)の幼令馬、壮令馬、老令馬の区分を用いた。

(2) 牛の年令。豊田 裕(注6)は主要家畜の性成熟と繁殖供用期間について、牛の繁殖供用開始は14～18ヶ月、繁殖供用限界は14～15年であり、馬の供用開始は34～36ヶ月、繁殖供用限界は15～20年としている。直良信夫は「古代遺跡発掘の家畜遺体」(注7)の中で、「生後おそらくは10年を経過していた老牛と思われる」と言う表現を用いている。市井正次は永久歯萌出完了時5才をもって馬の幼令と壮令の区分としている。従ってここでは牛の永久歯萌出完了時4才を基準とし、4才以下を幼令とし豊田 裕の繁殖供用限界を用い14～15才以上を老令とした。また牛は切歯による Baronの年令鑑定法(注8)が用いられる。ただ牛の切歯の出土例は少なく、類歯については長歯タイプと短歯タイプがあり個体によって異なり、磨耗度による具体的な年令判定が出来ないので年令区分のみを記載した。

(3) 猪、鹿については林 良博の「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」(注9)、大妻司紀之の「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年令・死亡季節査定法」(注10)を参考とした。

### 6 単位

歯・骨の計測値は特別の記載のない限りmmを現わし、比率は%を現わす。

## 7 番号

図中の通番は本文、写真及び附表中の通番に一致する。

## 第3項 観察表について

本来ならば本文中に成績表を挿入して説明を加えるのが普通であるが、出土点数1,059点に及ぶ動物の歯・骨を調査した成績であるので量的にも多く、本文中に挿入することが出来ないで、基本的な出土状態、出土歯・骨の形態、出土歯・骨の計測値のような成績表を一括して第3項 観察表として纏め読者の混乱を避けた。以下本項中に纏めた成績表について述べる。

## 1 遺存体出土状況 附表1

例言で述べているように古代から近世に至る迄の動物の姿を再現するため同一個体に属すると考えられる歯・骨を優先して取扱っているので出土場所、時代、出土状態を把握しておくことが必要であったためこの表を作成した。そのため同一個体に属する歯・骨が一目でわかるように記載した。また出土遺存体名は名称を見ただけで末端部分までわかるように記載した。

## 2 種類別、顎骨別遺存体出土数(歯) 附表2

筆者自身出土遺存体、特に出土馬歯・牛歯を取扱っている時に下顎骨の方が多く出土しているような錯覚を持っていたし、また現代馬、現代牛の歯の標本を採取するとき顎骨の硬さが身に染みており、馬では片側の上顎歯を採取する時に金鋸(かなのこ)の替刃が1本、下顎歯の採取で2本磨耗するが、それに対して牛では片側の上顎歯を採取するのに金鋸の替刃が0.5本、下顎歯を採取するのに2.5本磨耗する。馬の上顎歯を採取する時より牛の上顎歯を採取する時の方が替刃の磨耗が軽いのは、1つには牛の上顎骨の方が馬の上顎骨より骨の組織が粗い感じであることと(牛の骨は緻密骨は硬くしっかりしているのに海綿骨が弱く、出土する牛の管状骨は風化のため海綿骨が殆ど無くなっていることが多い)、馬は前臼歯・後臼歯とも通常の場合長歯であるのに牛の場合は後臼歯のみが長歯である、と言う2つの理由から上顎骨においては牛の方が馬より歯の採取は多労でない。それに反して牛の下顎骨は馬の下顎骨より緻密で硬く、下顎骨の採取は馬より労力を要する。そのような訳で馬、牛ともに下顎骨の方が出土数が多いような錯覚を持っていた。そのことを確かめる必要性を感じていたので顎骨別の歯の出土数を調べて見た。後述するように馬・牛の下顎骨の出土数の方が多いと思っていたことは誤りであったことがわかった。ただ下顎骨の方が丈夫な下顎骨に守られているので部位の判別出来る歯が上顎骨より多く出土しており、馬、牛ともに上顎骨より遺存状態の良いことがわかった。

## 3 種類別、地区別、部位別遺存体出土数(歯) 附表3、種類別、地区別、部位別遺存体出土数(骨) 附表4

歯・骨の部位によって出土しにくい部位があるため種類別に出土部位を把握することが必要であると考えたので部位別の出土数の集計を行った。

歯の部位の名称の中に、切歯、頬歯、小歯片、とあるのは例えば右上の欄で切歯と書いてあるのは右上の切歯であるが部位のわからないものを示し、上下左右のわからない切歯は一番右側の切歯の欄に入れると言

うことを表している。

歯においては切歯は小さく風化を受けやすく出土数は少なかった。骨については、人は頭蓋の出土数が多かったが、馬・牛については頭蓋より下顎骨の方が遙かに出土数が多かった。驛軒の骨としては椎骨および肋骨のような他の骨より体積が小さく、孔や突起があったり、薄かったりするような骨の出土数は少なかった。

#### 4 遺存体の形態的特徴（歯）附表5、遺存体の形態的特徴（骨）附表6

この附表は同一個体であることを示す共通の形態的特徴を把握し、また個々の歯・骨の形態的特徴や欠損状態を知るために記録した。

「咬合状態」は咬合不整と年齢判定のための咬耗の進行状態を記し、「エナメル襞の特徴」は主として咬合面におけるエナメル襞の特徴を記した。

#### 5 地区別、時代別、性、年齢、大きさ一覧表 附表7

個体の性、年齢、大きさを把握するために集計したものである。年齢区分及び体高区分は例言2の「使用した基準」によるものである。また摘要中骨体最少幅、中央幅、榮養孔径等が記載されているのは推定体高及び体高区分を算出した根拠を記したものである。歯冠長、頬側歯冠高を推定し得るものは推定歯冠長、推定頬側歯冠高として記載し、年齢及び体高算出の基礎とした。

#### 6 出土遺存体（歯）計測値 附表8、出土遺存体（骨）計測値 附表9

この附表は個体の年齢、体高、改良度、重量による風化度、等を知るために計測値を記録したものである。附表8の中で幅率は歯冠幅/歯冠長を示すものである。歯冠高中但し書きのないものは頬側歯冠高を示す。「歯槽中に植立」は上・下顎骨に生えている歯であり、未明出歯は顎骨中にあり、未だ歯ぐきの上に出ていない歯を示す。歯冠長、歯冠幅、歯冠高中に長、幅、厚、とあるものは破損していて所定の部位の計測が出来ないので、前後径、左右径、厚みを記録したものである。附表9の中で長径、短径、高さ又は厚みは欠損甚だしく所定の部位での計測が出来ないので長径、短径、高さ又は厚みを記録したものである。重量の中で「土壌を含む」とあるのは、土壌と共に保存処理がしてあるもの、或は整理袋中に土壌に混合している細菌・骨片・骨粉を含むもの、の両者があり土壌とともに骨粉重量を計測しなければならなかったものであることを示している。また「歯列長は歯槽」とあるのは、馬歯が脱落しているので止むなく歯の植立していた孔列を歯列と見なして歯列長を計測したものである。

#### 7 馬の下顎骨計測値 附表10

下顎骨は出土する機会が多いので、既往の出土下顎骨または現代小格馬の下顎骨と比較することによって中間地域の馬の実態にふれることが出来るようにするためにこの附表を作成した。

№230は中世～近世に属し、現代小格馬の下顎骨全長と比較すると体高130cmのものより大きく、体高135cmのものより小さい。この下顎骨は細くて長く、また薄い。特に下顎角の弧の張り出しは少なく全体を細く見せている。下顎角は薄く腹縁の幅は10.1で現代小格馬の同部位の19.7の約半分の厚みであり、下顎角腹縁は平らで現代小格馬のように外方に張り出すようなことはなく、現代馬のように大きな筋肉を附着させる余地はなかったと考えられるが、翼突筋窩（深12.9）が同大の現代馬の同部位（深5.2）より深く、また翼突筋窩

内面は粗面状を呈する等、咀嚼やくについて現代馬よりも下顎の筋肉を用いたものと考えられる。

No610とNo617は同一個体に属し、近世のものである。現代小格馬の体高130cmのものと同じ程度のものである。この下顎骨は凸凹に富み、輪郭極めて鮮明で、下顎角腹縁は外方に軽く張り出し、下顎角の頬面における筋線は極めて明瞭で力強く、舌面には粗面状の軽い凸面が認められ翼突筋窩の中心への傾斜は強い。この馬の右下顎角腹縁の幅は19.4である (No230の右下顎角腹縁の幅が10.1であり、No610の右下顎角腹縁の幅が19.4であったと言うことは、単にNo230が中世～近世に属し、No610が近世に属すると言う時代的な問題ばかりでなく、後述の第5節考察の中世の項において述べているように、「日本の馬の改良はいつの時代においても、その時代の馬全体が融合して段々大きくなると言うのではなく、大形馬、中形馬、小形馬が常に混在すると言う形で改良が進められているのが特徴である」と言う改良上の問題もあるのではないかと考えられる。上述のようにいつの時代にも大・小混在すると言った形で改良が進められてきたと言うことは、単に馬の大きさばかりの問題ではなく、骨格上の問題も常に良否混在の形で改良が進められてきたのではあるまいかと推測している。時代的に言えば下顎骨々体厚等は時代とともに段々厚くなって行くのが通常である)。

#### 8 牛の上・下顎骨計測値 附表11

下顎骨は比較的出土する機会が多いので既往の出土下顎骨及び現代黒毛和種の下顎骨と比較することによって中間地域の子牛の実態にふれることが出来るためこの表を作成した。

No6及びNo12は同一個体で、古墳時代に属する牛の下顎骨である。直良信夫の埼玉県秩父市皆野 三沢平草出土の古墳時代～平安時代の下顎骨(注7)と比較すると、下顎骨々体厚は殆ど同じであるが現代黒毛和種の下顎骨と比較すると下顎骨々体厚は27.6%も薄い。また現代黒毛和種の下顎骨の方が遙かに大きくて太い。

No25は古墳時代に属する牛の頭蓋骨であるが、これを宮崎重雄の奈良時代～平安時代に属する長野県佐久市安原池畑遺跡出土の池畑牛(注11)と比較すると池畑牛の歯列長とほぼ同じである。また現代黒毛和種の歯列弓の幅より1cm小さい。

#### 9 出土牛歯の大きさ(古墳時代～平安時代まで)、出土牛歯の大きさ(中世以降) 附表14

牛の体の大きさ別の出土牛歯の大きさを知ることは大変大切であり、将来は出土牛歯の大きさでその出土牛歯を有する牛の大きさを知ることが出来るようにと願っている。そのため牛の大きさ別の出土牛歯の大きさの集計を行った。判定のよりどころとして現代黒毛和種(3～4才雌及び去勢)と比較して大きい。同じ大きさの牛、小さい牛、の三段階に分けて集計した。牛歯の出土数は馬歯の約3分の1であるので3段階に分けると極端に例数が少なくなること、個体差によって逆転が起こりやすい例数の不足を痛感している。なお時代区分は馬では「古墳時代から平安時代まで」と「中世以降」の2時代に分けているので馬と同じ区分を用いた。また牛歯の中世における出土点数は8点で大きさ別に分けるには少なすぎるので集計からはずした。

#### 10 集計に用いた遺跡別馬歯出土点数 附表12

馬の体高区分別の出土馬歯の大きさを把握するため県下5遺跡(中間地域、日高遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、三ツ寺III遺跡)の出土馬歯を使用した。その集計に用いた各遺跡における時代別、体高区分別の出土馬歯の点数を纏めたものである。なお時代区分には「古墳時代から平安時代まで」と「中世以降」との2

つの区分を用いているが、これは既往の出土馬歯の計測値には大部分直良信夫の計測値を使用しており、直良の時代区分には「土師時代」言う区分を用いているのでこれと対比するためには「古墳時代から平安時代まで」と言う時代区分を使用せざるを得なかった。また「古墳時代から平安時代まで」と「中世以降」の2つの区分を用いて見て、筆者自身馬の同一品種内での骨格上の変化（家畜化）は異品種（例えば外国種）による交配を行わない限り500年～1,000年単位と言うような長い期間を要すると考えているのでこの区分を用いることに不都合は感じていない。

#### 11 県下5遺跡における時代別の出土馬歯の平均値 附表13

馬の体高区分別の出土馬歯の大きさを知ることには上野国における古代～近世の馬の実態を知る上に大変大切なことである。将来は牛同様馬においても馬歯による体高区分を適確に知ることが出来るように願っている。そのため県下5遺跡出土の253点の出土馬歯の計測値を用いて時代区分別、体高区分別の出土馬歯の大きさを集計した。ただ時代別、体高区分別に分けて見るとやはり例数の不足を痛感せざるを得ない。更にまた例数の集積に努めたいと考えている。

#### 第4項 遺存体の部位の模式表現について

遺存体の部位は数が多いため附表を見ただけではその輪郭を把握することが仲々難しいので、各動物種別に模式図を作り、その模式図に標品番号を記入して読者が一目でわかるようにした。

##### 1 模式図に用いている動物の骨格について

- 馬の頭蓋は歯の標準算定に用いている現代小格馬の頭蓋を用いた。  
馬の前・後肢骨の図は1921、W. ELLENBERGER の図を用いた。
- 牛の頭蓋及び前・後肢骨の図は1921、W. ELLENBERGER の図を用いた。  
牛の下顎歯は歯の標準算定に用いている現代黒毛和種のものを用いた。
- 猪の頭蓋は東京大学家畜解剖学教室所蔵の頭蓋の標本を用いた。  
猪の左前肢骨は東京大学家畜解剖学教室所蔵の豚の骨格標本を用いた。（豚の前肢骨の方が猪の前肢骨よりやや太目であるが、構造的には全く同じである）。
- 鹿の骨格は国立科学博物館所蔵の骨格標本を用いた。ただ組立ててある骨格標本で開口することが出来ないで口蓋臼歯部及び下顎体臼歯部の図は模式図である。
- 人の頭蓋及び脳幹骨の図は1921、W. ELLENBERGER の図を用いた。
- 兎の頭蓋及び左前肢骨の図は1981、加藤嘉太郎の図を用いた。

##### 2 遺残部位の表示

出土獣歯・獣骨の部位は骨格の図にトーンを貼付し、標品番号を記入した。

例えば、附図1の左上、馬口蓋部の下側を見るとR1<sup>3</sup>にトーンがあり、277、857の2点の馬歯が出土している。またR2<sup>3</sup>には7点、R3<sup>3</sup>には10点の馬歯が出土していることを示している。

さらに同定し得ないが、左右上顎歯（前臼歯+後臼歯を表す）であると判断される歯の番号を左上に「左右上顎歯」として記載した。また小歯片で全く部位を同定出来ないものを右下に「小歯片」として番号を記載した。

第3節 観察について

690	896	320
890	698	319
898	1,041	318
990	1,045	317
994	1,045	316
992	1,041	315
990	1,041	314
990	1,041	310
990	1,041	308
990	1,041	307
990	1,041	305
990	1,041	302
990	1,041	301
990	1,041	297
990	1,041	296
990	1,041	282
990	1,041	281

のりの上と可視のりや字の脚部と字

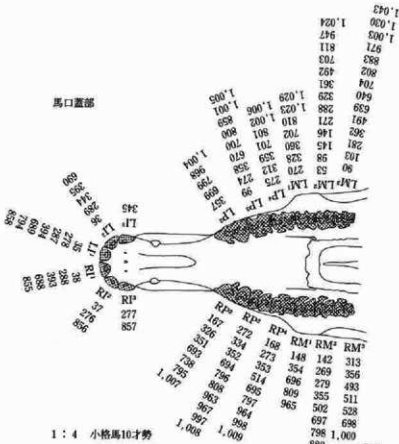
右上頰骨であるが部位不明のもの

282	741	1,036
294	853	1,037
296	945	
298	946	
299	1,022	
300	1,027	
306	1,028	
311	1,031	
327	1,032	
464	1,033	
643	1,034	
644	1,035	
649		

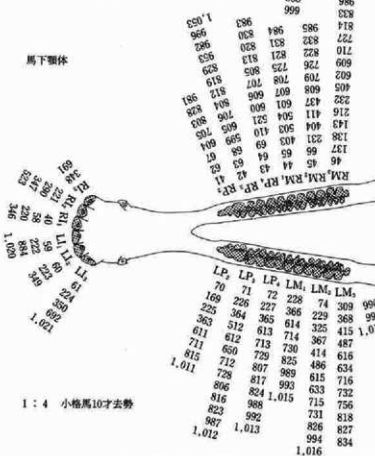
のりの上と可視のりや字の脚部と字

左下頰骨であるが部位不明のもの

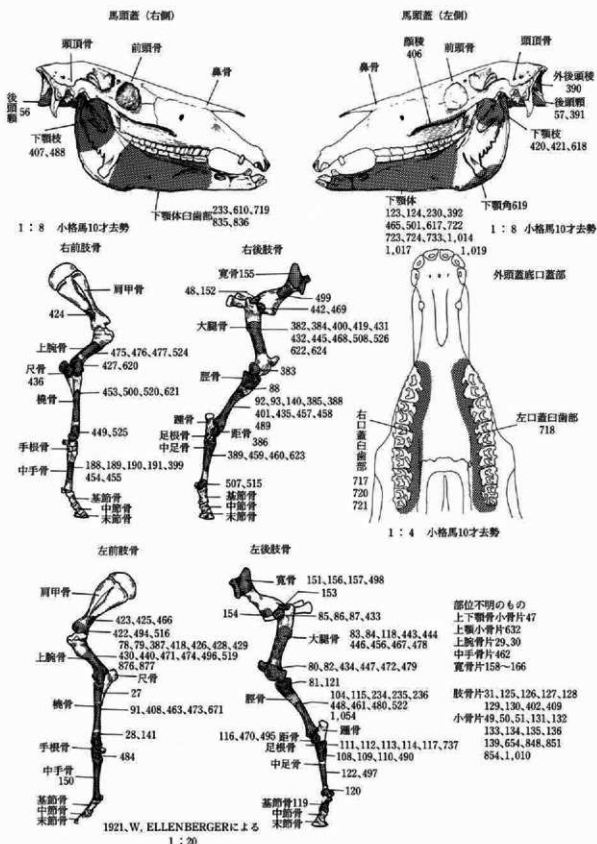
左下切歯	852
左下頰骨	648
	850
	745
	874
	746
	875
	748
	969
	755
小歯片	105
	336
	529
	652
	731
	818
	827
	994
	834



馬下顎体



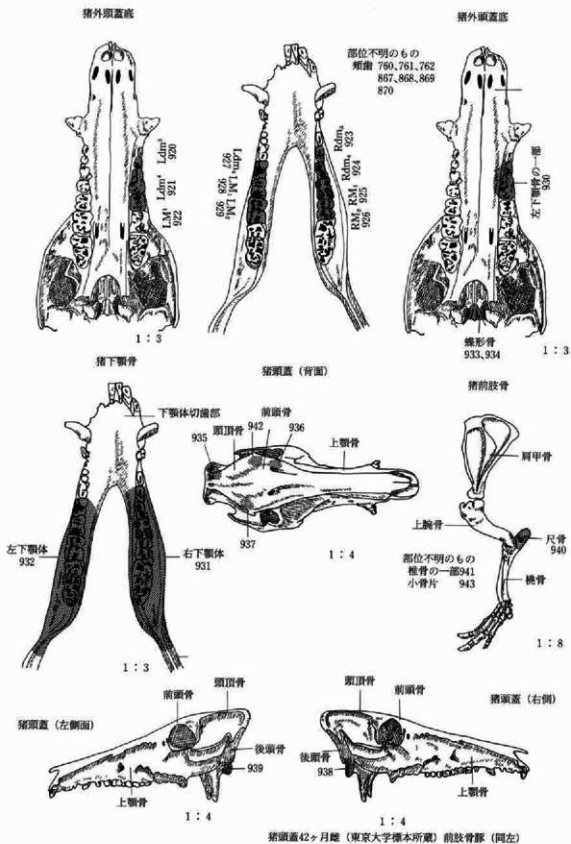
第759図 馬上下顎骨における出土馬歯の部位模式図



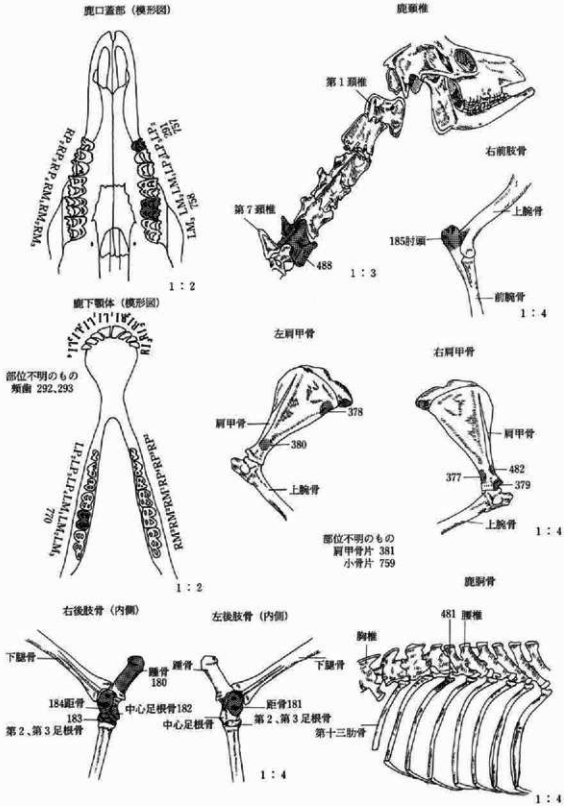
第760圖 馬の骨格における出土馬骨の部位模式図



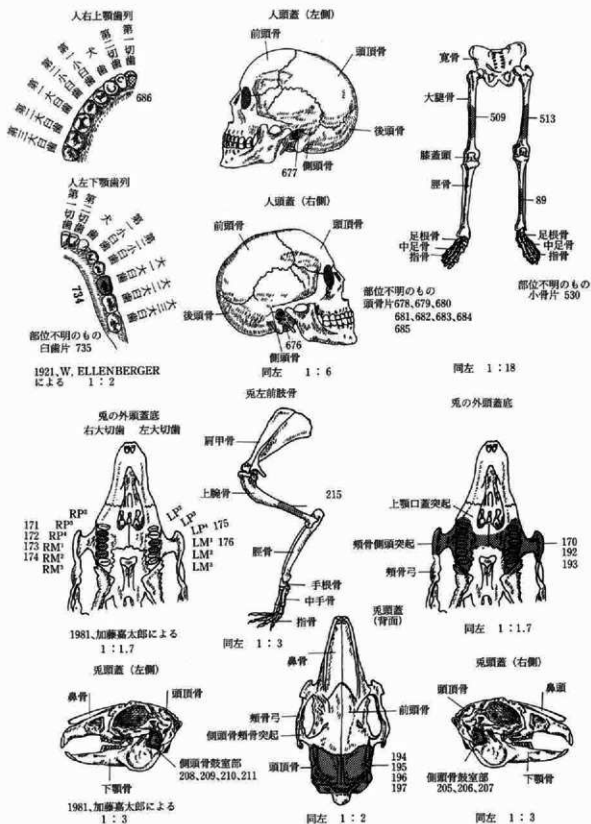




第762図 猪の骨格における出土猪歯骨の模式図



第763図 鹿の骨格における出土鹿歯・骨の部位模式図 (鹿の骨格標本は国立科学博物館所蔵)



第764図 人及び兎の骨格における出土歯・骨の部位模式図

## 第5項 実測図について

例言で述べているように古代から近世に至る迄の動物の姿を再現するため同一個体に属すると考えられる動物の歯・骨を優先して取扱っており、そのため遺存体の部位、大きさ、形態的特徴、風化度（ここでは欠損状態）等を知ることが大切であるので附図7～42に遺存体の実測図を示した。また小歯片・小骨片は記載しても動物の姿の再現に役立たないので実測図から除外した。

## 1 表現方法

## (1) 点描と線描

線描は実体を示し点描は欠損面を表す。点描のうち細かい点描は海綿骨を示し、大きい点描は海綿骨の髄小室（骨質が薄板状に組み合わさり、無数の小孔を作るもので、これは主として骨端近くにある）を示している。

## (2) 破線

破線部分は復元部分であり、その破線は推定線である。

## (3) その他の表現方法

## ① 骨について

(a) 骨の表面の円を囲むような「ケバダチ」は粗面を表す。

例 150の上端の「ケバダチ」は大手中骨粗面である。

(b) 骨の表面の線状に並んだ「ケバダチ」は筋腱の附着部位の線を示す。

例 152の中央部の上、「2列に並んだケバダチ」は坐骨棘である。

(c) 骨の表面の線で囲まれた部分を斜線で埋めた所は窩のように急に凹んでいるものか、緻密骨だけあって海綿骨がなく、暗く見える部分を示す。

例 383の斜線の部分は大腿骨間窩を示す。

例 517の斜線の部分は牛の左中足骨の海綿骨が風化のため無くなっており、暗く見える所を示す。

(d) 骨の表面の類同心円状の部分は比較的傾斜の緩やかな凹みを示す。

例 446の類同心円状の部分は左大腿骨顆上窩を示す。

## 2 歯について

(a) 歯は努めて頰面を画くのを原則としているが、欠損状態により頰面以外の面を画かなければならない場合がある。その場合咬合面の下側の線が歯のいずれの面を画いているか、を示している。

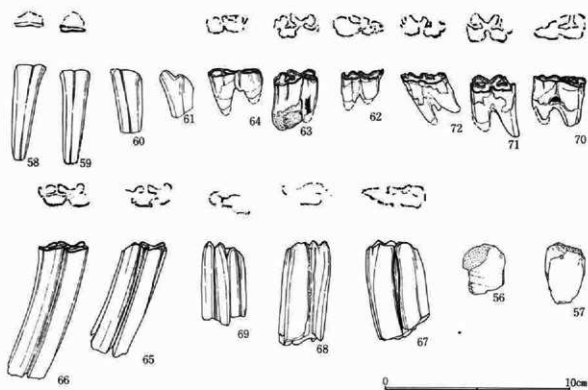
例 64 咬合面の下側の線が頰面であるので、実測図は頰面を示す。

例 797 咬合面の下側の線が舌面であるので、実測図は舌面を示す。

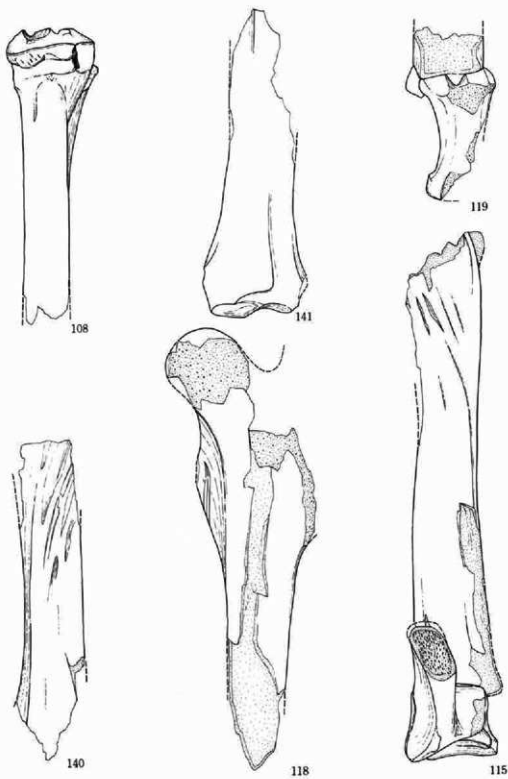
例 846 咬合面の下側の線が後側面であるので、実測図は後側面を示す。

(b) 咬合面の中の白色の部分は欠損により歯の組織が全く無い部分を示す。

(c) 咬合面の斜線の部分は咬合面附近の象牙質を失い、エナメル質が突出していることを示している。

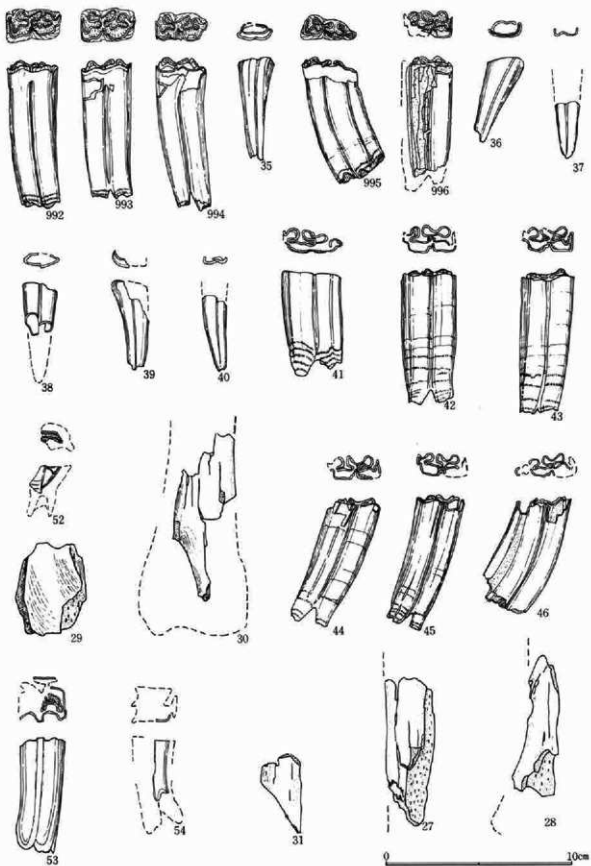


第765図 動物遺存体実測図(1)



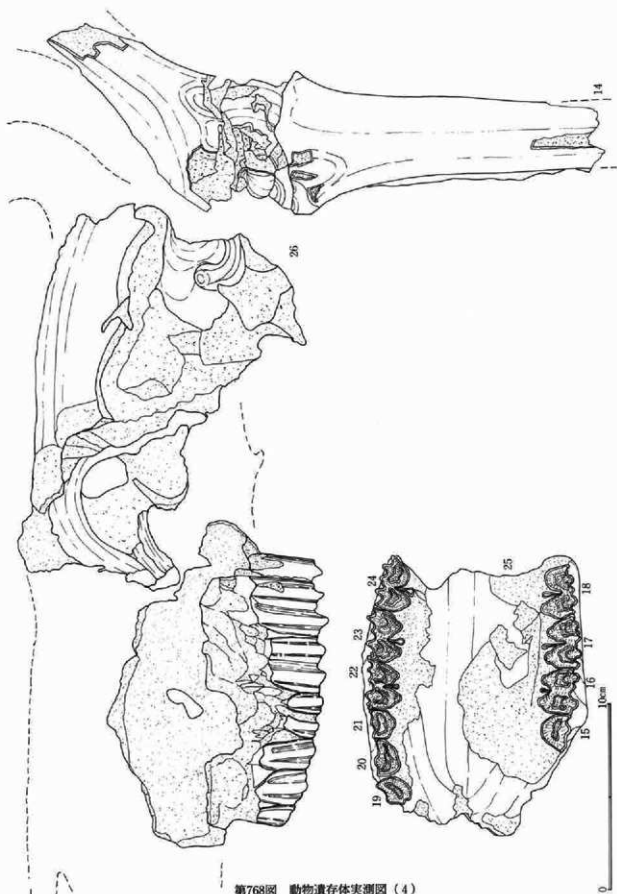
0 10cm

第766図 動物遺存体実測図(2)

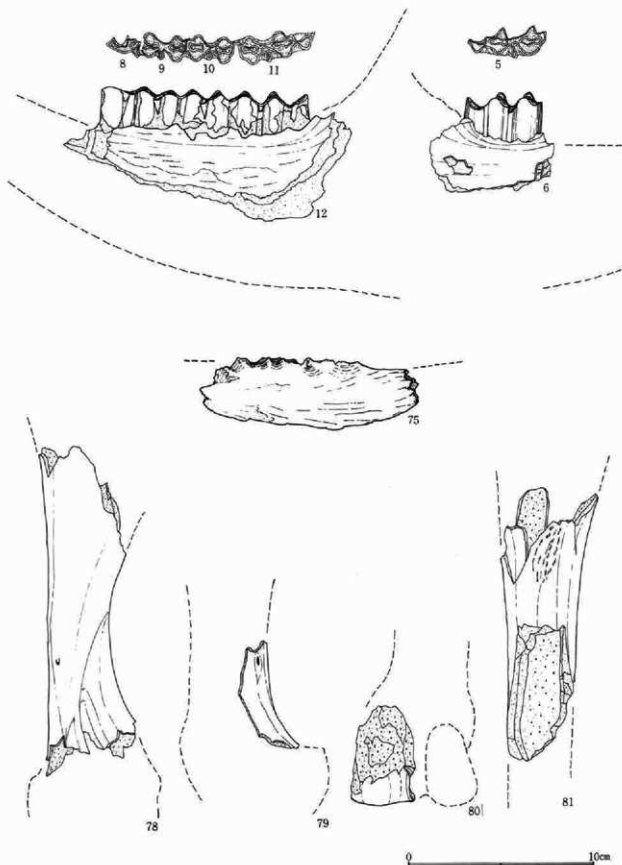


第767図 動物遺存体実測図(3)

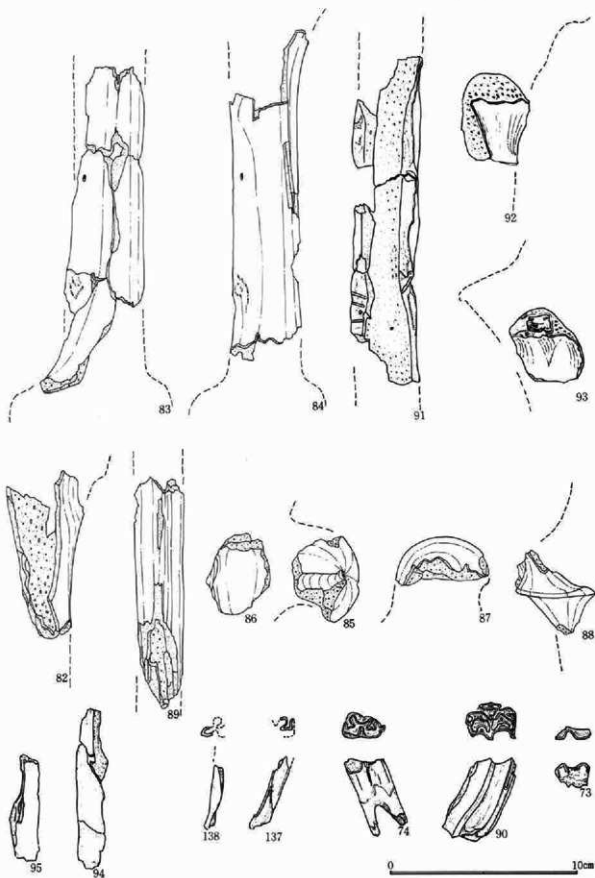




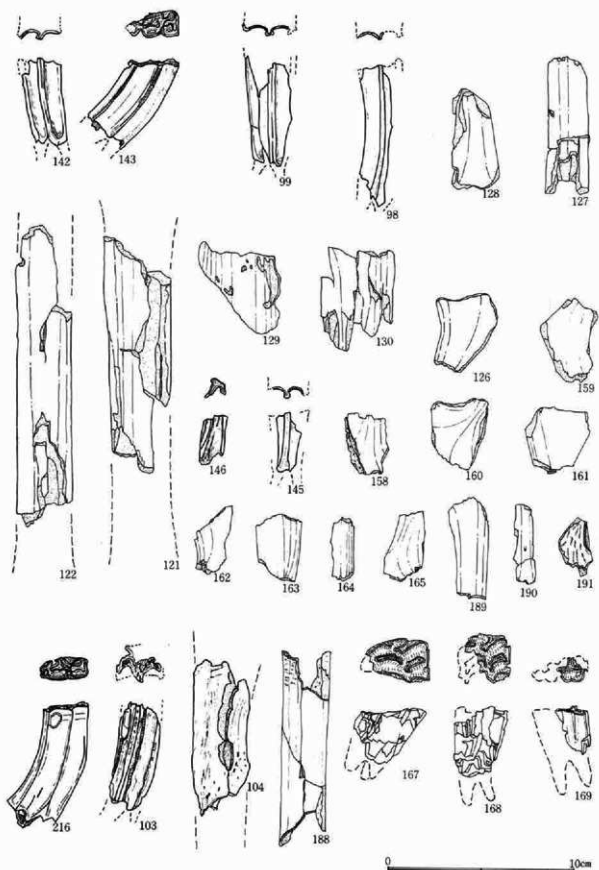
第768図 動物遺存体実測図(4)



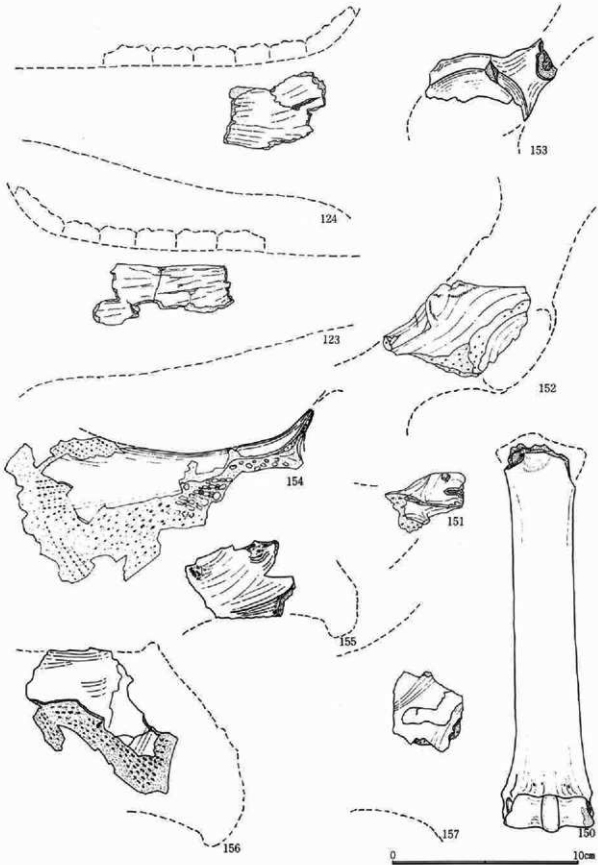
第769図 動物遺存体実測図(5)



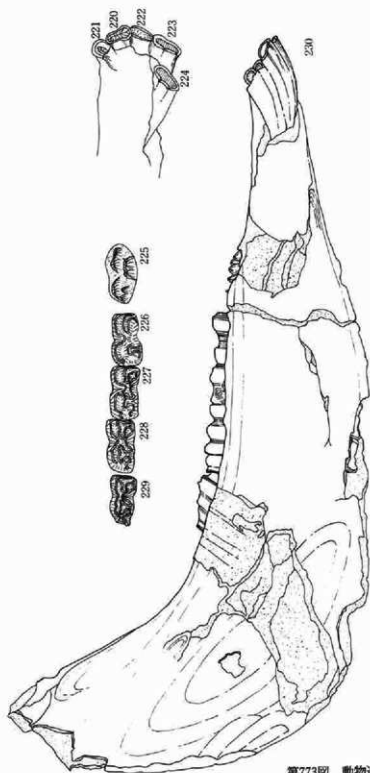
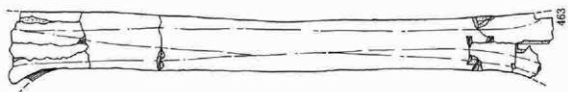
第770図 動物遺存体実測図(6)



第771図 動物遺存体実測図 (7)

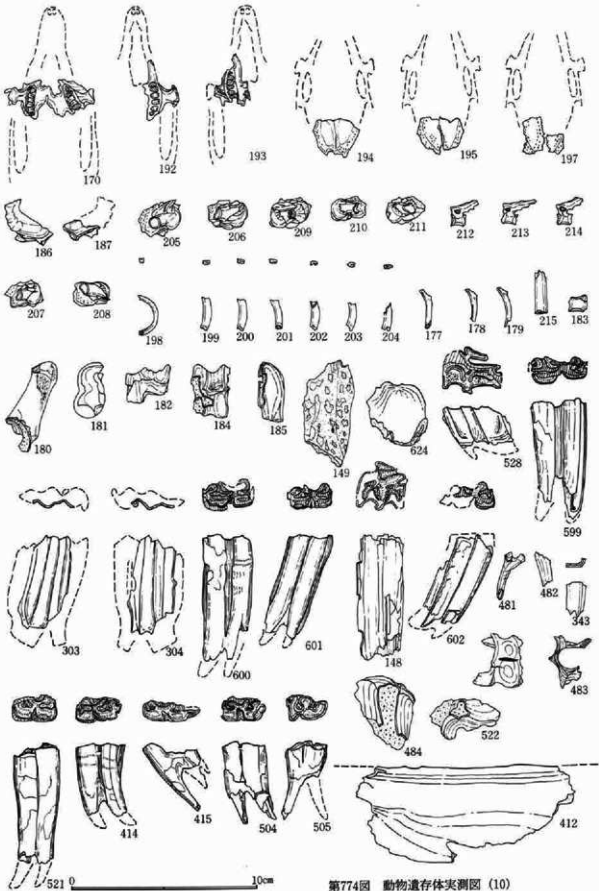


第772図 動物遺存体実測図(8)

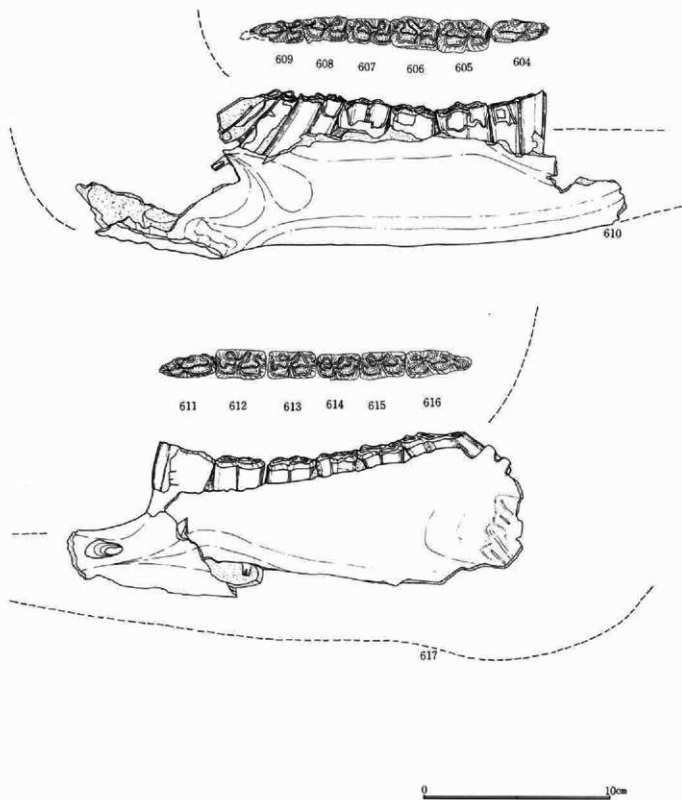


第773図 動物遺存体実測図(9)



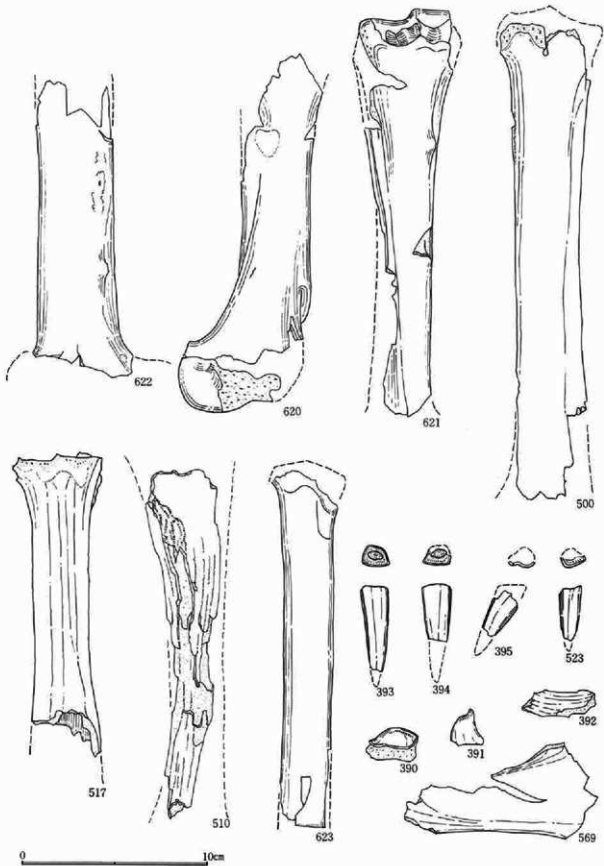


第774図 動物遺存体実測図 (10)

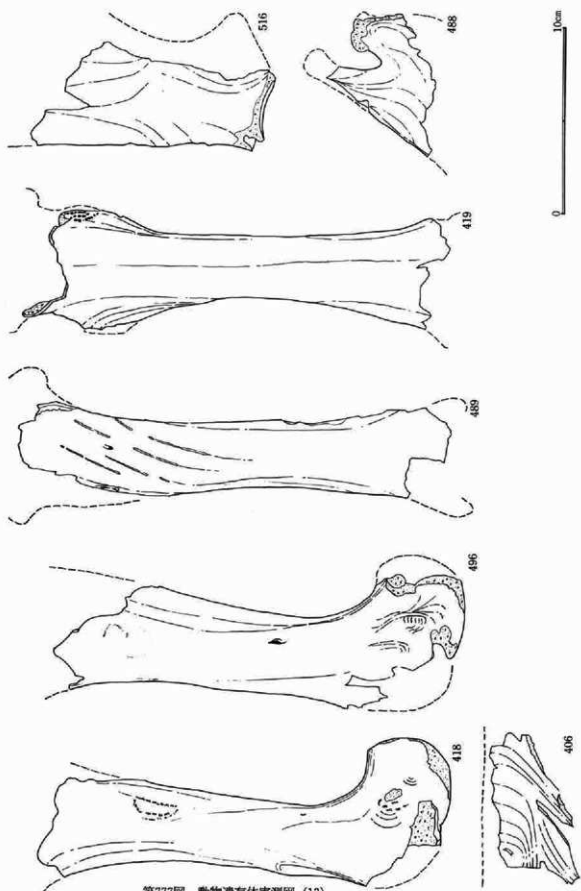


第775図 動物遺存体実測図 (11)

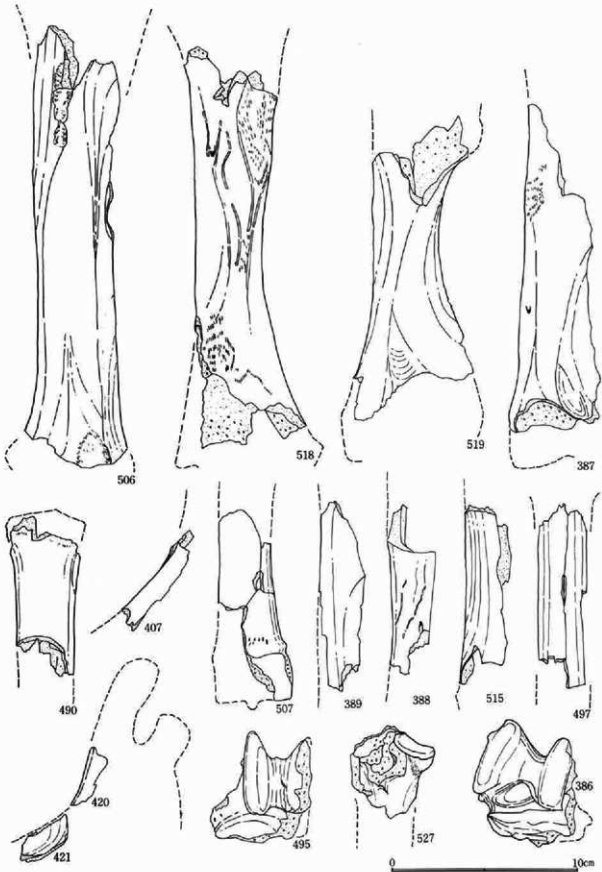




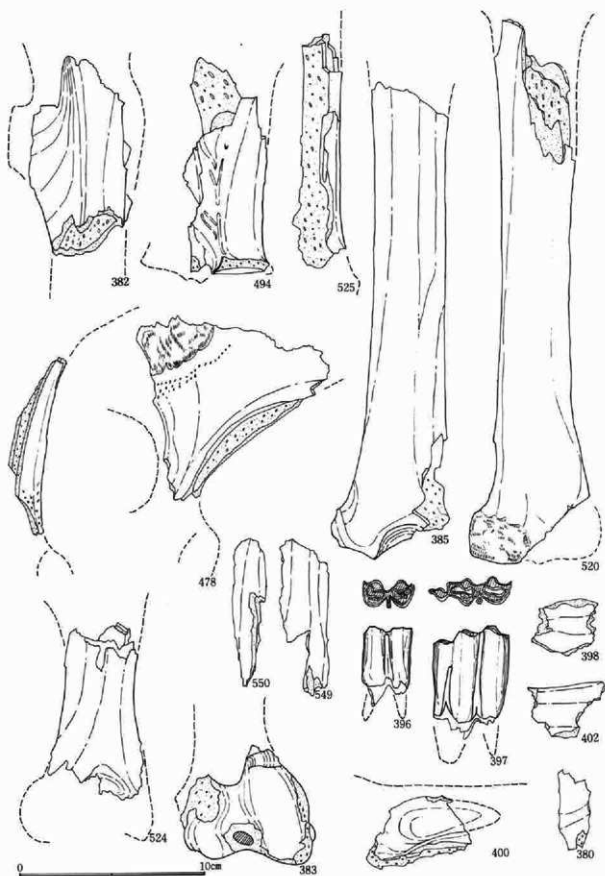
第776図 動物遺存体実測図 (12)



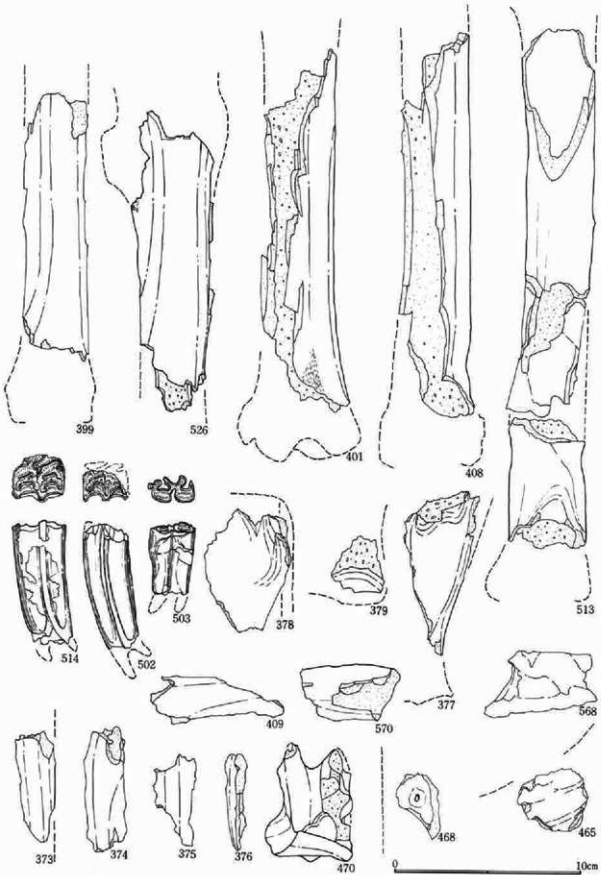
第777図 動物遺存体実測図 (13)



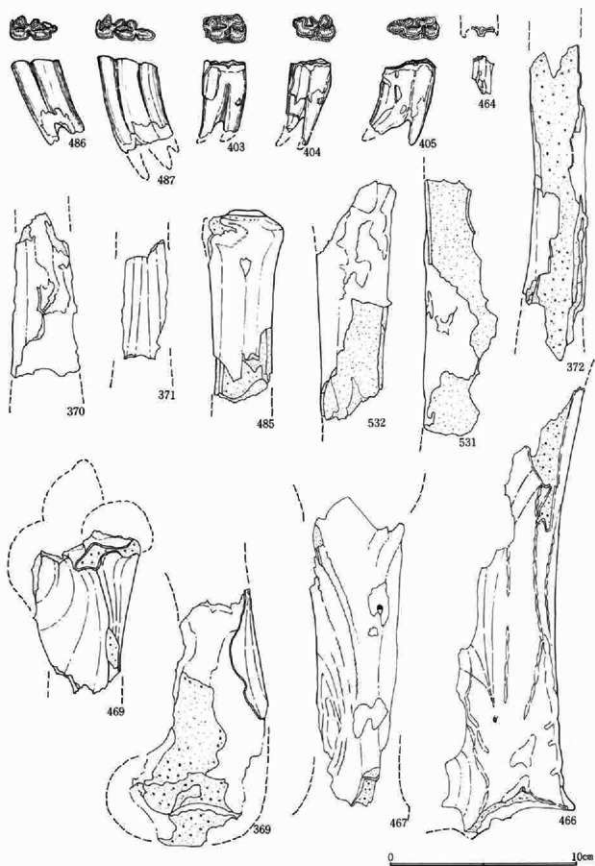
第778図 動物遺存体実測図 (14)



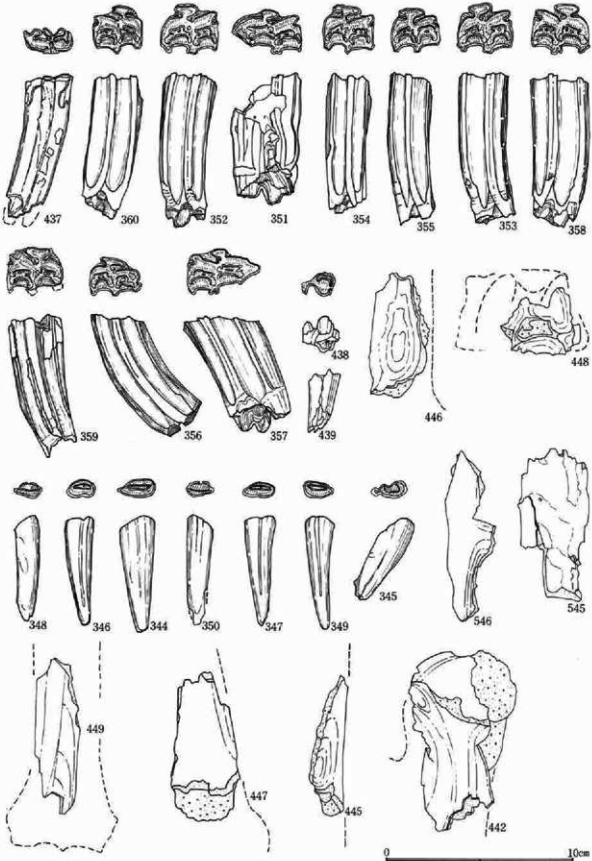
第779図 動物遺存体実測図 (15)



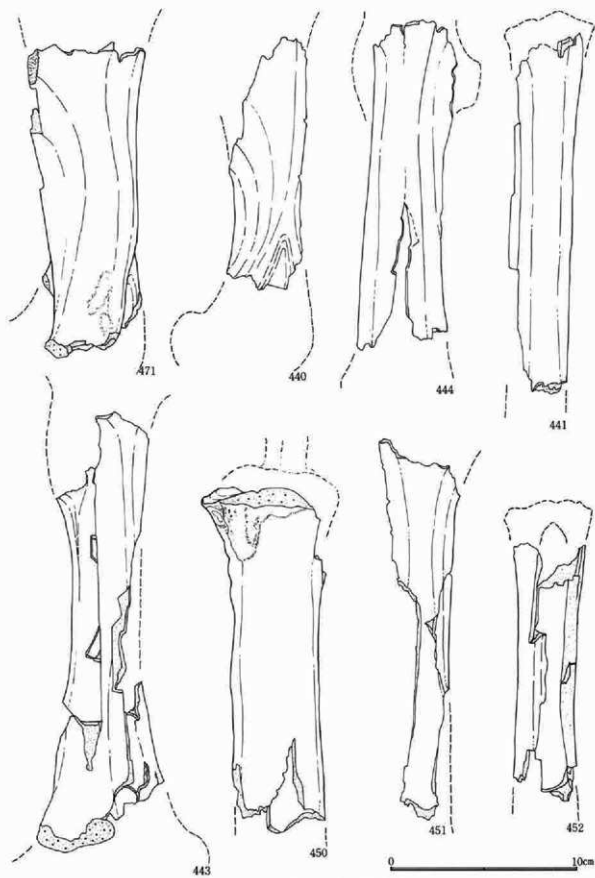
第780図 動物遺存体実測図 (16)



第781図 動物遺存体実測図 (17)

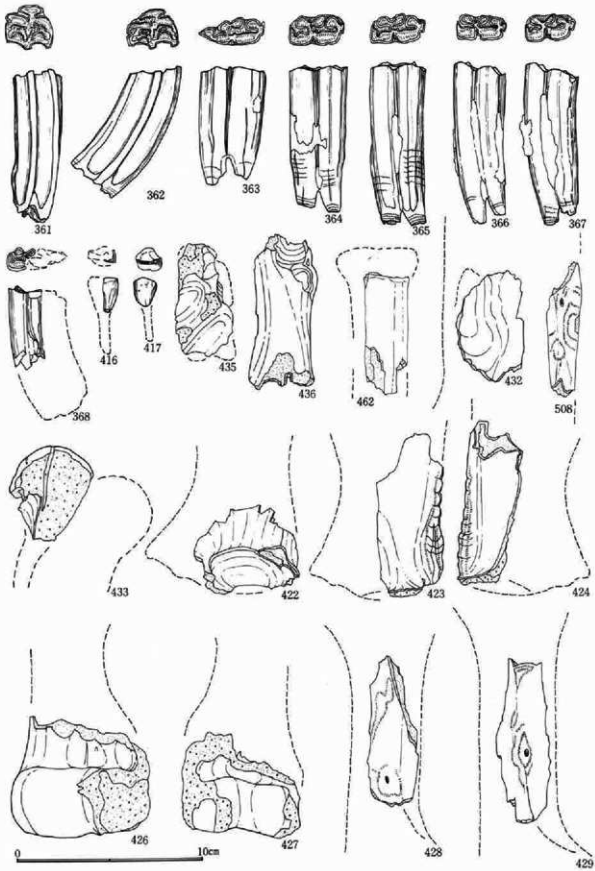


第782図 動物遺存体系剥面 (18)

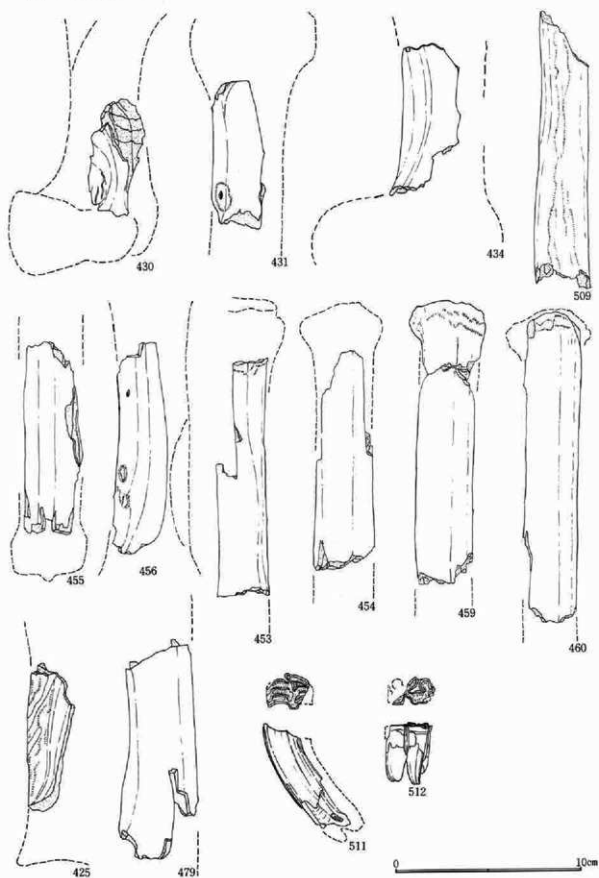


第783図 動物遺存体実測図 (19)

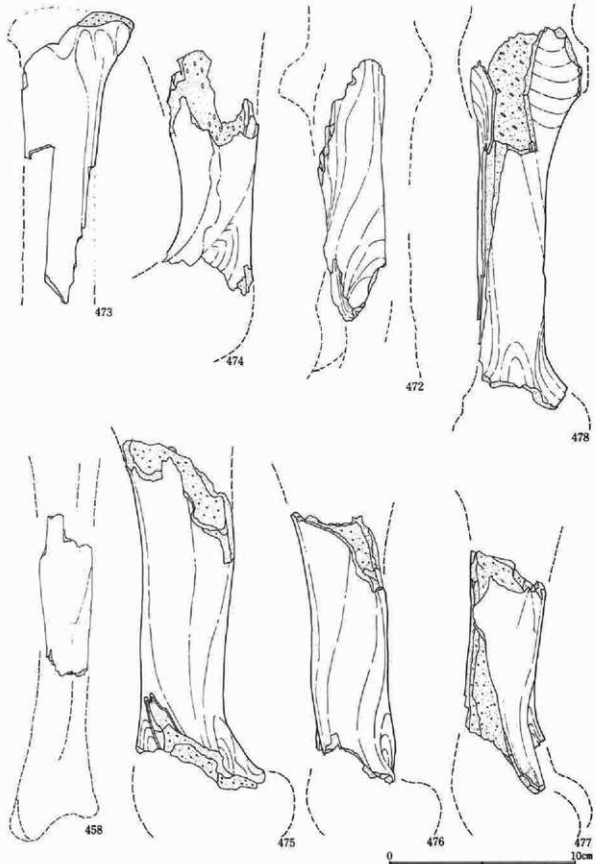




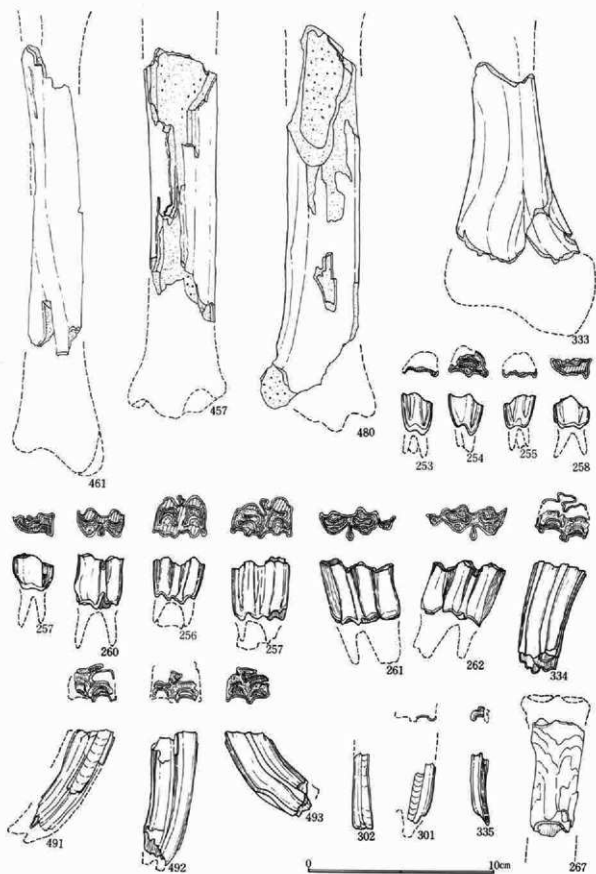
第784図 動物遺存体実測図 (20)



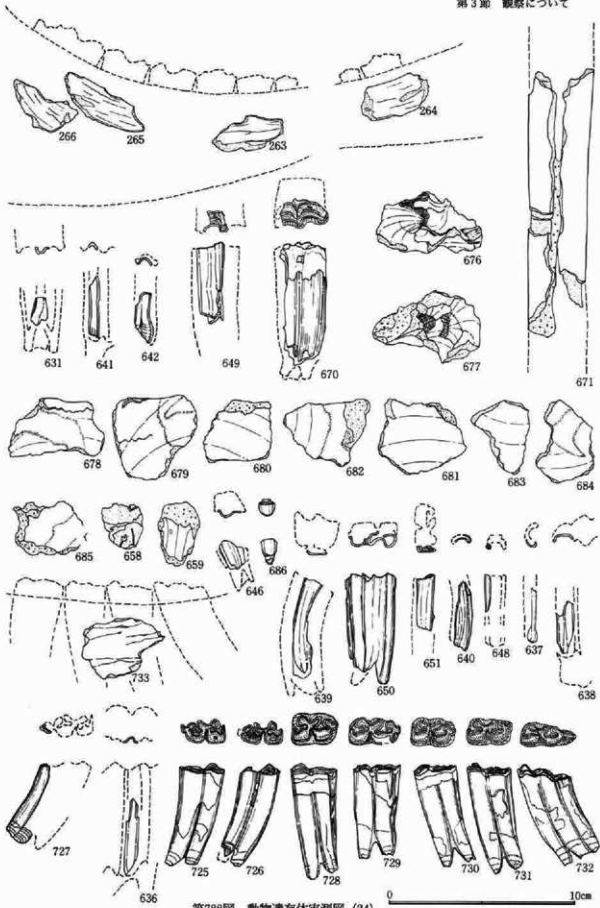
第785図 動物遺存体実測図 (21)



第786図 動物遺存体実測図 (22)

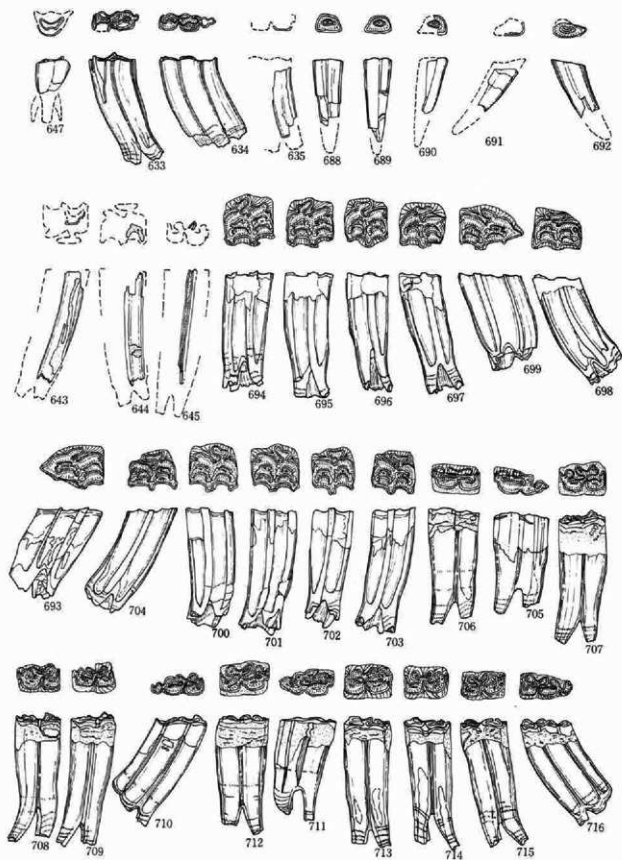


第787図 動物遺存体実測図 (23)



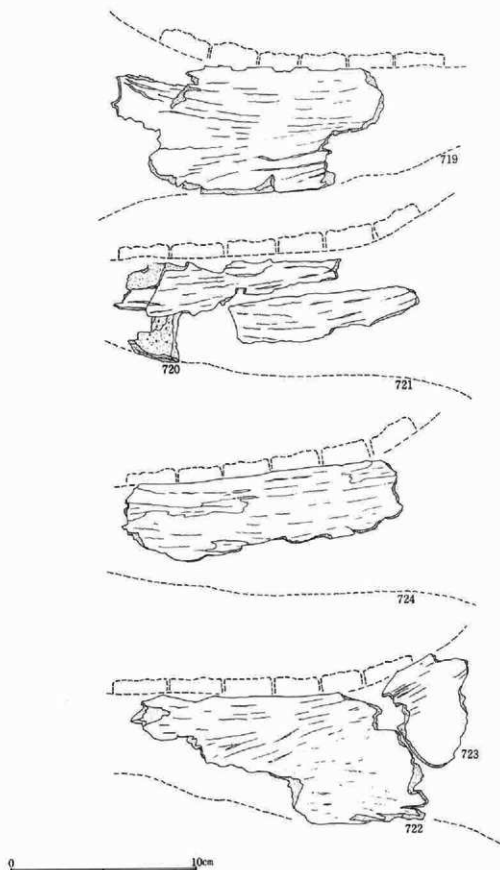
第788図 動物遺存体実測図 (24)

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

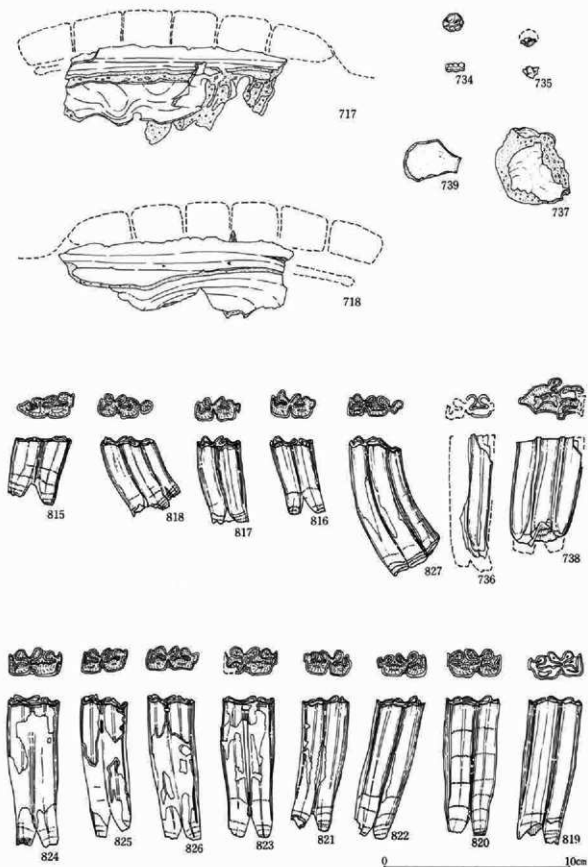


第789図 動物遺存体実測図 (25)

0 10cm

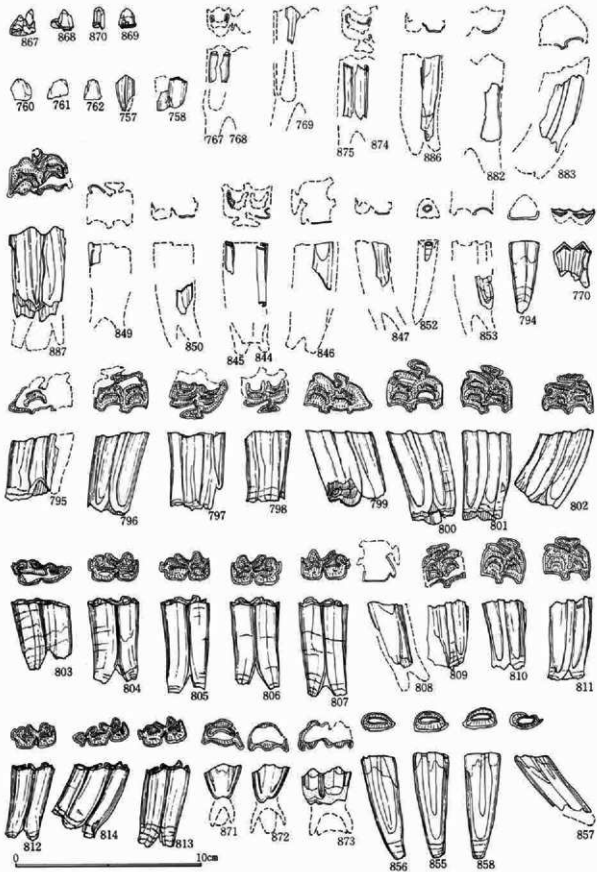


第790図 動物遺存体実測図 (26)

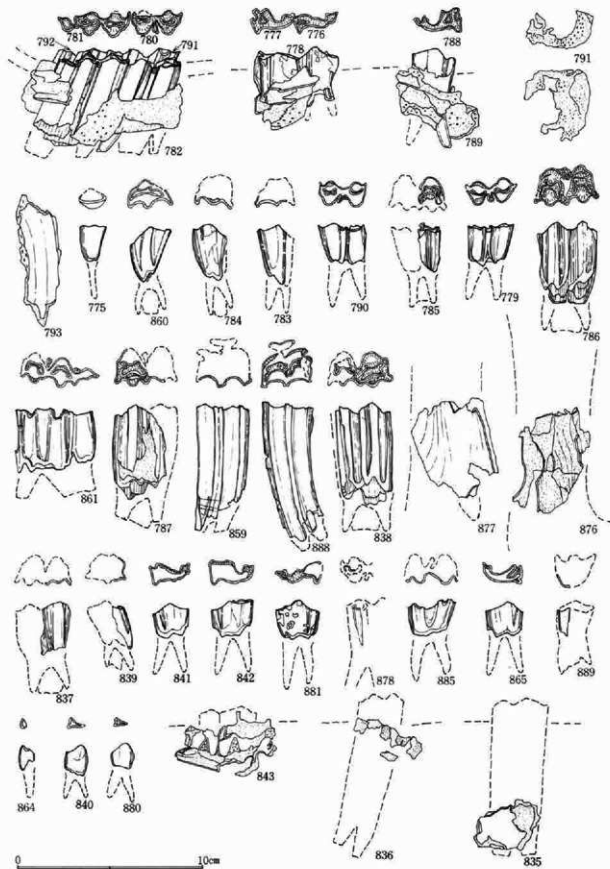


第791図 動物遺存体実測図 (27)

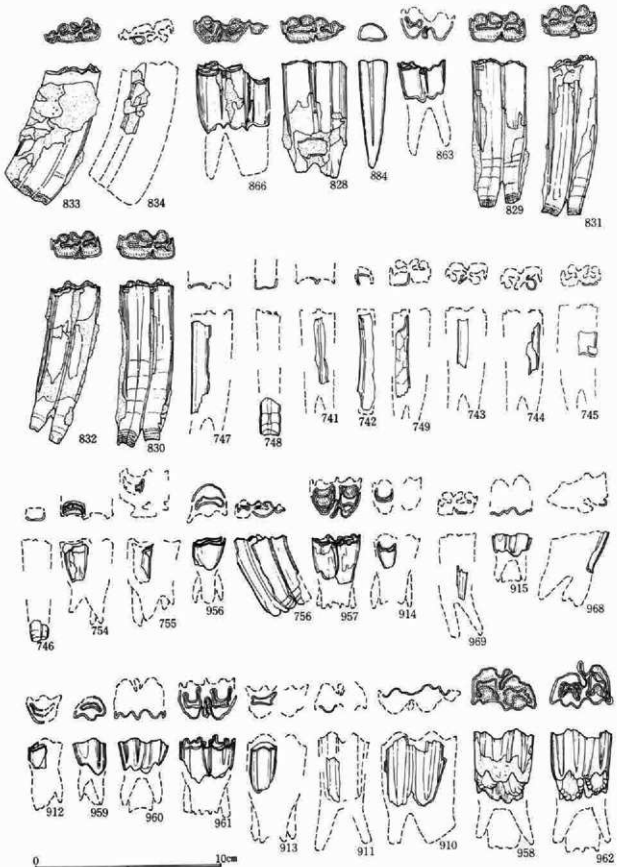




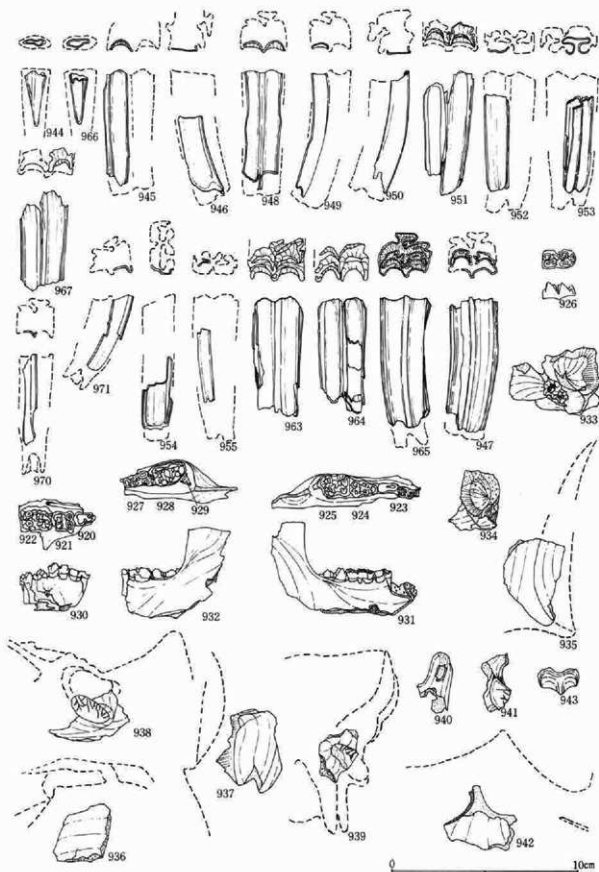
第792図 動物遺存体実測図 (28)



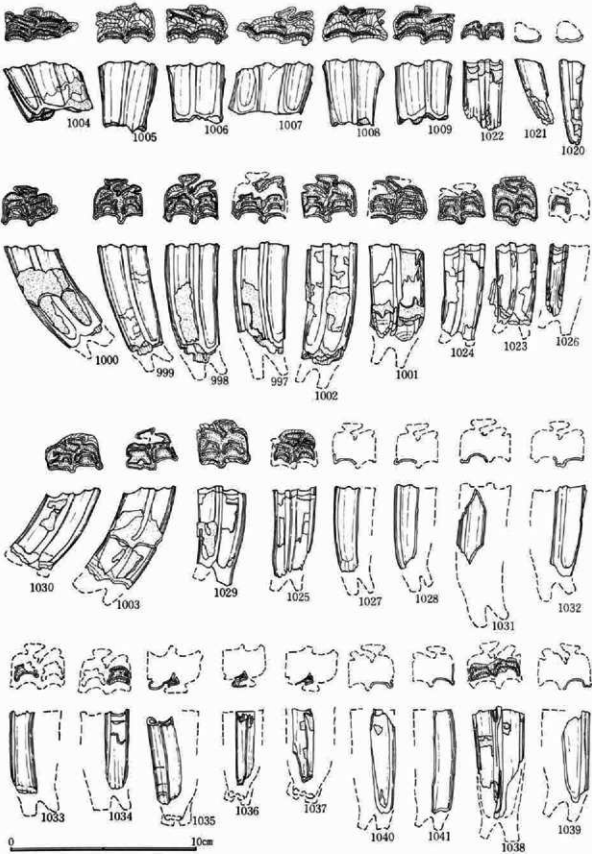
第793図 動物遺存体実測図 (29)



第794図 動物遺存実測図 (30)

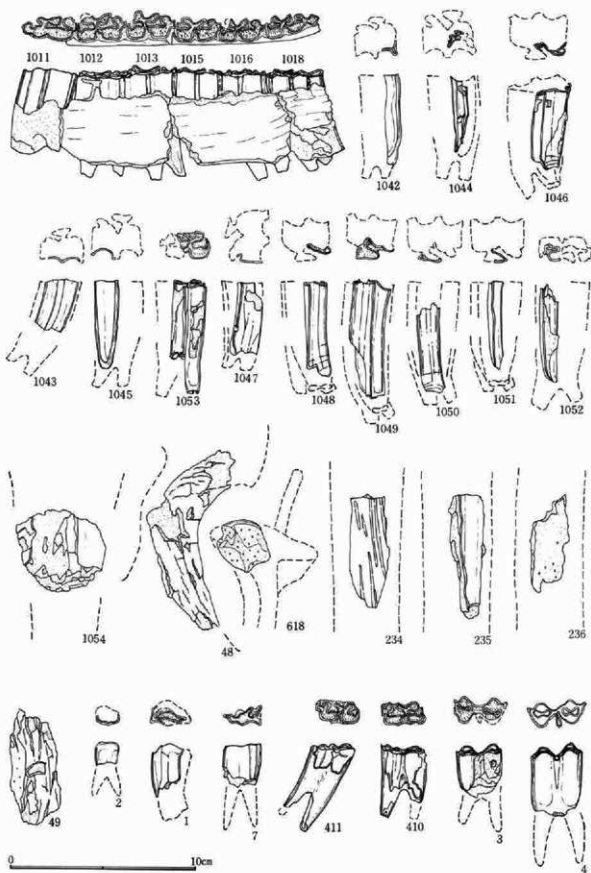


第795図 動物遺存体実測図 (31)

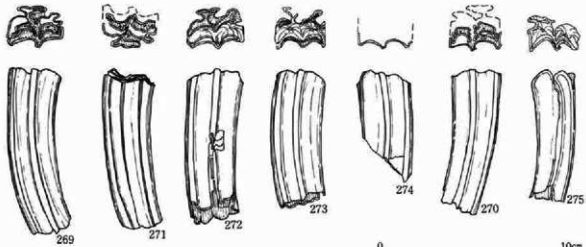
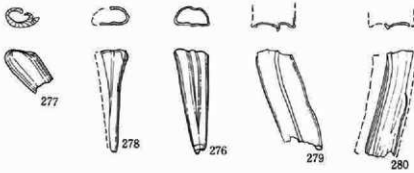
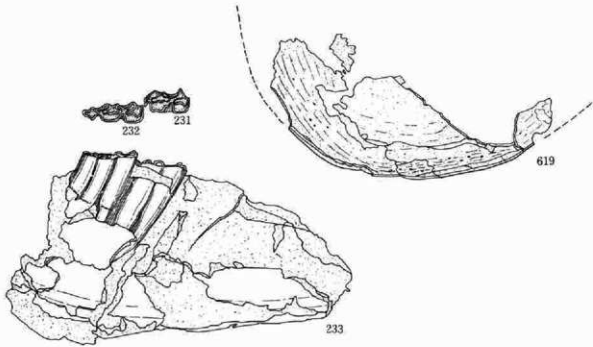


第796図 動物遺存体実測図 (32)

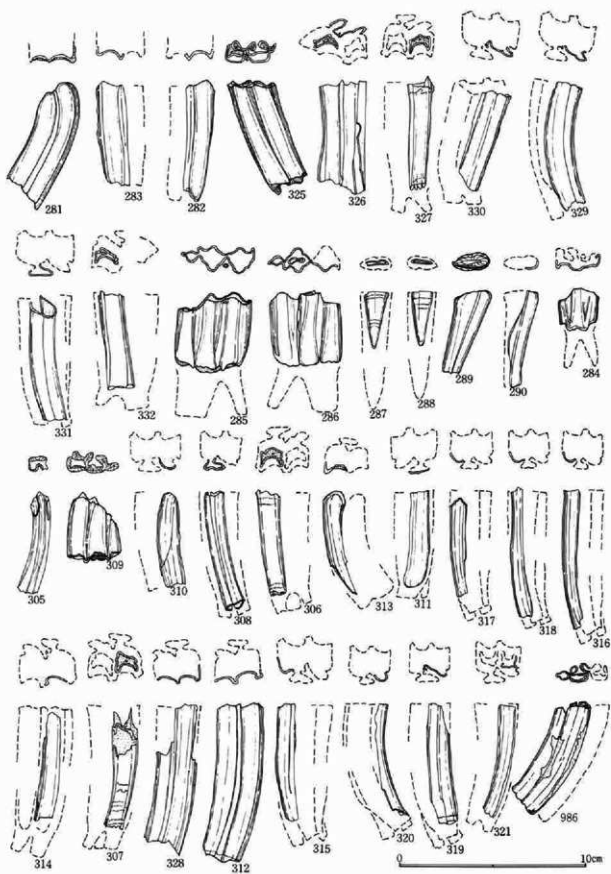
付章 上野園分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体



第797図 動物遺存体実測図 (33)

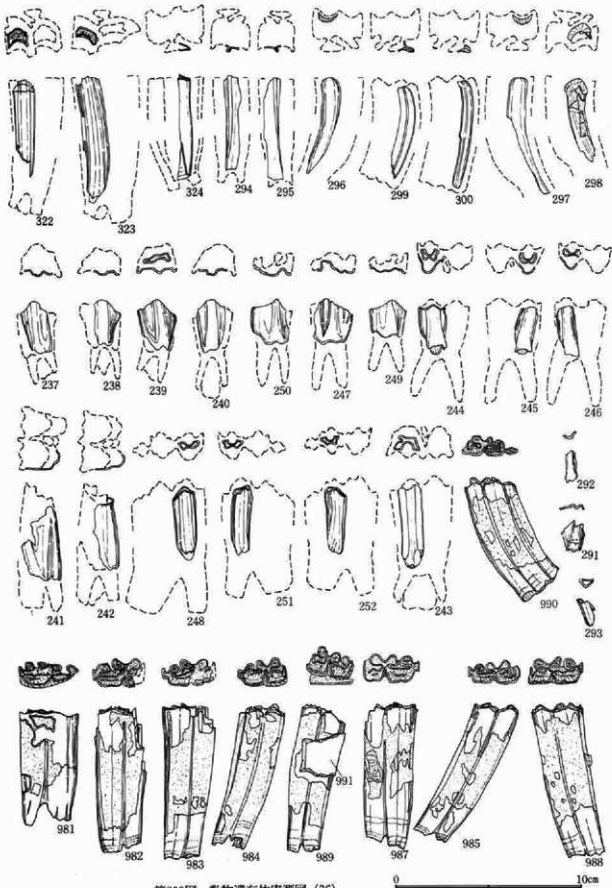


第798図 動物遺存体実測図 (34)



第799図 動物遺存体実測図 (35)





第800圖 動物遺存体実測図 (36)

附表1 遺存体の出土状態

注1 種類名のないものは馬を表わし、丸はノツサギを表わす。

2 同一個体とは出土状態、風化の度合、大きさ、形状、硬さ、色沢、歯相、骨相、から見て同一個体の確立の極めて高いもの。

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
A区137号住居	古墳時代 7C後半	A区中央部東側の住居跡、覆土内、高野より+10~20cmから出土	同一個体	牛RP <sup>1</sup> の一部 牛RP <sub>2</sub> 舌面 牛RM <sub>1</sub> 牛RM <sub>2</sub> 牛RM <sub>3</sub>
				1 2 3 4 5
				牛右下顎体臼歯部 牛LP <sub>2</sub> 牛LP <sub>3</sub> 牛LM <sub>1</sub> 牛LM <sub>2</sub> 牛LM <sub>3</sub>
				6 7 8 9 10 11
				牛左下顎体臼歯部 牛右上顎骨々体部 牛右前脛骨
				12 13 14
A区137号住居	古墳時代 7C後半	A区中央部東側の住居跡、覆土内より出土	同一個体	牛RP <sup>4</sup> 牛RM <sup>1</sup> 牛RM <sup>2</sup> 牛RM <sup>3</sup> 牛LP <sup>2</sup> 牛LP <sup>3</sup> 牛LP <sup>4</sup>
				15 16 17 18 19 20 21
				牛LM <sup>1</sup> 牛LM <sup>2</sup> 牛LM <sup>3</sup> 牛上顎骨 牛歯蓋骨
				22 23 24 25 26
A区59号住居	古墳時代 6C後半 ~7C前半	A区南端59号住居跡、覆土内より出土	同一個体	左腕骨近位部 左橈骨遠位部 上腕骨近位部 上腕骨遠位部 肢骨片
				27 28 29 30 31
A区71号住居No82	奈良時代 8C	A区中央部1号溝に接した71号住居跡、覆土内より出土	同一個体	不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片
				32 33 34
A区29号住居	平安時代 10C前半	A区の東部1号溝に接する29号住居跡、覆土内より出土	同一個体	LI <sup>1</sup> LI <sup>2</sup> 右上切歯根 RI <sup>1</sup> RI <sup>2</sup> RI <sup>1</sup> RP <sub>2</sub> RP <sub>3</sub> RP <sub>4</sub>
				35 36 37 38 39 40 41 42 43
				RM <sub>1</sub> RM <sub>2</sub> RM <sub>3</sub> 上下顎骨小骨片
				44 45 46 47
A区104号住居	平安時代 9~10C	A区中央部西寄りの住居跡より出土	同一個体	右腕骨体 小骨片 小骨片 小骨片
				48 49 50 51
A区131号住居	平安時代 覆土	A区南西部131号住居跡、覆土内より出土	同一個体	牛右上前臼歯内部エナメル膜
				52
A区85号住居	平安時代 10C	A区南端85号住居跡、覆土内より出土	同一個体	LM <sup>4</sup>
				53
A区132号住居	平安時代 カマド内	A区南端132号住居跡カマド、覆土内より出土	同一個体	左上顎歯原小歯 不明小骨片
				54 55
A区1号井戸	中世 14C後半	A区北端東端にある1号井戸跡、確認図F3.5mのところから出土	同一個体	右後頭骨 左後頭骨 RI <sub>1</sub> LI <sub>1</sub> LI <sub>2</sub> LI <sub>3</sub> RP <sub>2</sub> RP <sub>3</sub> RP <sub>4</sub>
				56 57 58 59 60 61 62 63 64
			同一個体	RM <sub>1</sub> RM <sub>2</sub>
				65 66
				RF <sub>1</sub> RP <sub>1</sub> RP <sub>2</sub> LP <sub>1</sub> LP <sub>2</sub> LP <sub>3</sub>
				67 68 69 70 71 72
A区1号井戸	中世 14C後半	#	同一個体	牛右上乳臼歯舌面 LM <sup>1</sup> 牛右下顎体臼歯部内側
				73 74 75
A区1号井戸	中世 14C後半	#	同一個体	不明小骨片 不明小骨片
				76 77
A区1号溝	中世~近代 15C~19C	A区を南北に延びる1号溝、覆土内より出土	同一個体	左上顎骨々体部 左上顎骨遠位部内側前縁 左大腿骨外側面
				78 79 80
				左脛骨々体近位部 左大腿骨遠位部後面内側 左大腿骨々体部内側
				81 82 83
				左大腿骨々体部 左大腿骨頭 左大腿骨面 左大腿骨縁
				84 85 86 87
				右脛骨外側面 右脛骨々体部
				88 89
A区1号溝	中世~近代 15C~19C	#	同一個体	LM <sup>4</sup> 左腕骨々体部 右脛骨々体部後面 右脛骨近位端後面
				90 91 92 93
A区1号溝	中世~近代 15C~19C	A区を南北に延びる1号溝より出土	同一個体	不明肢骨片 不明肢骨片
				94 95
A区1号溝	中世~近代 15C~19C	A区を南北に延びる1号溝、覆土内より出土	同一個体	不明肢骨片
				96
A区1号溝	中世~近代 15C~19C	A区を南北に延びる1号溝より出土	同一個体	不明小骨片
				97
B区4号溝	古墳時代 7C	B区北部を北西から南東にかけて走る小さな4号溝、底面に近いところから出土	同一個体	LM <sup>2</sup> の一部 LP <sup>3</sup> の一部
				98 99
B区4号溝	古墳時代 7C	#	同一個体	不明小骨片
				100

## 第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
B区4号溝	古墳時代 7C	#		不明小骨片 不明小骨片 101 102
B区4層	古墳時代 ～平安時代 6C～12C	B区田圃の調査と考え られる		LM <sup>a</sup> 103
B区その他	古墳時代 ～平安時代 6C～12C	詳細不明		左脛骨々体内側 104
B区4層	古墳時代 ～平安時代 6C～12C	B区田圃の調査と考え られる		小骨片 105
B区30号住居	平安時代	B区北東部にある30号 住居、カマド内より出 土		不明小骨片 106
B区122号住居	平安時代	B区南部122号住居跡 覆土中より出土		不明小骨片 107
B区1号溝 -1	中世 14C後半 ～16C前半	B区北端を東西に走る 1号溝の南側斜面に馬 左後肢骨がカギのてに なっはりつくように 配列して出土している (国分寺中間馬C中 肢)	同一個 体	左中足骨の一部 左第2中足骨 左第4中足骨 左第1、第2足根骨 108 109 110 111 左第3足根骨 左第4足根骨 左中心足根骨 左脛骨の一部 左脛骨 112 113 114 115 116 左足根骨 左大趾骨の一部 左後基趾骨の一部 左中足骨遠位部 117 118 119 120
B区5号井戸	中世 14C後半 ～16C前半	B区中央西側にある5 号井戸跡より出土	同一個 体	左脛骨々体近位部 左中足骨々体部 下顎体外側 下顎体内側 腓骨片 121 122 123 124 125 腓骨片 腓骨片 腓骨片 腓骨輪郭 腓骨片 小骨片 小骨片 小骨片 126 127 128 129 130 131 132 133 小骨片 小骨片 小骨片 134 135 136
B区1号溝	中世 14C後半 ～16C前半	B区北端を東西に走る 1号溝より出土	同一個 体	RM <sub>1</sub> の一部 RM <sub>2</sub> の一部 小骨片 137 138 139
B区1号溝 -2	中世 14C後半 ～16C前半	#	同一個 体	右脛骨々体部の一部 左脛骨の一部 140 141
B区1号溝	中世 14C後半 ～16C前半	#		RM <sub>1</sub> の一部 RM <sub>2</sub> 142 143
B区1号溝	中世 14C後半 ～16C前半	#		不明小骨片 144
B区表土	不明	詳細不明		LM <sup>a</sup> の頬面エナメル質の一部 LM <sup>a</sup> の前窩 145 146
B区その他	不明	詳細不明		不明小骨片 147
C区43C01	平安時代	C区田圃土中より出土		RM <sub>1</sub> 148
C区№844	平安時代	C区田圃土中より出土		不明腓骨片 149
C区1号溝	中世 14C後半 ～15C後半	C区北端を東西に走る 1号溝、覆土内中層中 より出土	同一個 体	左中手骨 左寛楯骨 右坐骨体 左坐骨体背面 左寛骨臼及び脛骨体の一部 150 151 152 153 154 右脛骨背面前縁 左脛骨腹面前縁 左脛骨腹面 寛骨々片 寛骨々片 155 156 157 158 159 寛骨々片 寛骨々片 寛骨々片 寛骨々片 寛骨々片 寛骨々片 寛骨小骨片 160 161 162 163 164 165 166
C区集石土坑	中世 15C後半 ～16C前半	C区南部にある集石土 坑、雑群とともに検出	同一個 体	R P <sup>a</sup> R P <sup>a</sup> L P <sub>1</sub> 167 168 169
			同一個 体	兎頭蓋の一部 兎R P <sup>a</sup> 兎R P <sup>a</sup> 兎R M <sup>a</sup> 兎R M <sup>a</sup> 兎L P <sup>a</sup> 兎L M <sup>a</sup> 170 171 172 173 174 175 176
			同一個 体	兎右肋骨片 兎右肋骨片 兎右肋骨片 177 178 179

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
			同一個体	鹿右距骨 鹿左距骨 鹿右中心足根骨 鹿右第2+3足根骨 鹿右距骨 180 181 182 183 184 鹿右肘頭 185
			同一個体	小腕虫頭左肩甲骨 小腕虫頭右肩甲骨 186 187
C区4号溝IV区	中世15C前半	C区北部の1号溝と平行して東西に走る4号溝IV区、覆土内より出土	同一個体	右中手骨々々体部 右中手骨の一部 右中手骨の一部 右中手骨の一部 188 189 190 191
C区集石土坑	中世15C後半～16C前半	C区南部集石土坑、雜跡とともに検出		乳左側頭蓋の一部 乳右側頭蓋の一部 乳頭頂骨 乳頭頂骨 乳左頭頂骨 192 193 194 195 196 乳右頭頂骨 乳左上顎切歯 乳頬歯 乳頬歯 乳頬歯 乳頬歯 乳頬歯 197 198 199 200 201 202 203 乳頬歯 乳右側頭骨鼓室部 乳右側頭骨鼓室部 乳右側頭骨鼓室部 204 205 206 207 乳左側頭骨鼓室部 乳左側頭骨鼓室部 乳左側頭骨鼓室部 208 209 210 乳左側頭骨鼓室部 乳胸椎 乳胸椎 乳胸椎 乳左上腕骨々々体部 211 212 213 214 215
C区1号溝	中世14C後半～15C後半	C区北端を東西に走る1号溝、覆土内中層中より出土		RM <sub>1</sub> 216
C区4号溝IV区	中世15C前半	C区北部の1号溝と平行して東西に走る4号溝IV区、覆土内より出土		不明小骨片 不明小骨片 217 218
C区1号溝	中世14C後半～15C後半	C区北端を東西に走る1号溝、覆土内中層中より出土		不明小骨片 219
D区2層	中世～近代	D区2層、遺跡確認面より出土	同一個体	RI <sub>1</sub> , RI <sub>1</sub> 萌出中 LI <sub>1</sub> , Ldi <sub>1</sub> , Ldi <sub>1</sub> , LP <sub>1</sub> , Ldm <sub>1</sub> , Ldm <sub>1</sub> , LM <sub>1</sub> 220 221 222 223 224 225 226 227 228 LM <sub>1</sub> 左下顎骨の一部 229 230
			同一個体	RM <sub>1</sub> , RM <sub>1</sub> 右下顎体臼歯部 231 232 233
			同一個体	左髌骨々々体部後面 左髌骨々々体部前面 左髌骨々々体部後面 234 235 236
F区1号井戸	平安時代10C	F区北部東側の井戸下層充墳土中より出土	同一個体	牛RP <sup>+</sup> 頰面 牛LP <sup>+</sup> 頰面 牛LP <sup>+</sup> の一部 牛LP <sup>+</sup> 頰面 237 238 239 240 牛右上後臼歯後葉 牛左上後臼歯前葉 牛左上後臼歯後葉内部エナメル質 241 242 243 牛右下顎後臼歯前葉の一部 牛左下顎後臼歯後葉の一部 244 245 牛左下顎後臼歯前葉の一部 牛RP <sup>+</sup> 舌面 牛RM <sub>1</sub> 前葉内部エナメル質 246 247 248 牛LP <sup>+</sup> 頰面 牛LP <sup>+</sup> 頰面 牛LM <sub>1</sub> 前葉内部エナメル質 249 250 251 牛RM <sub>1</sub> 中葉内部エナメル質 252
F区1号井戸	平安時代10C	#	同一個体	牛LP <sup>+</sup> 頰面 牛LP <sup>+</sup> 牛RP <sup>+</sup> 頰面 牛RM <sup>+</sup> 牛RM <sup>+</sup> 牛LP <sub>1</sub> 253 254 255 256 257 258 牛LP <sub>1</sub> , 牛LM <sub>1</sub> , 牛LM <sub>1</sub> , 牛RM <sup>+</sup> 牛右下顎体臼歯部外側面の一部 259 260 261 262 263 牛右下顎体臼歯部内側面の一部 牛右下顎体臼歯部外側面の一部 264 265 牛右下顎体臼歯部外側面の一部 牛左中手骨々々体近位部 牛小骨片 266 267 268
F区1号井戸	平安時代10C	#	同一個体	RM <sup>+</sup> LM <sup>+</sup> LM <sup>+</sup> 269 270 271
			同一個体	RP <sup>+</sup> RP <sup>+</sup> LP <sup>+</sup> 頰面 LP <sup>+</sup> 272 273 274 275
			同一個体	RI <sup>+</sup> RI <sup>+</sup> LI <sup>+</sup> 276 277 278

## 第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
			同一個体	RM <sup>+</sup> 類面 LM <sup>+</sup> 後歯 LM <sup>+</sup> 類面 279 280 281
			同一個体	右上前臼歯後歯 左上前臼歯後歯 282 283
F区1号井戸	平安時代 10C	#	同一個体	牛RP <sup>+</sup> 牛RM <sub>2</sub> 牛LM <sub>2</sub> 284 285 286
			同一個体	L I <sup>+</sup> 内部エナメル輪 R I <sup>+</sup> 内部エナメル輪 L I <sup>+</sup> R I <sup>+</sup> 287 288 289 290
F区1号井戸	平安時代 10C	#	同一個体	鹿L P <sup>+</sup> 類面 鹿類面エナメル質の一部 鹿類歯内部エナメル質 291 292 293
F区1号井戸	平安時代 10C	#	同一個体	右上類歯中附歯 左上類歯後歯 294 295
			同一個体	右上類歯前小窩類面(萌出直後) 左上類歯前小窩類面(萌出直後) 296 297
			同一個体	右上類歯後小窩舌面(萌出直後) 298
			同一個体	右上類歯次歯(萌出直後) 右上類歯次歯(萌出直後) 299 300
F区16号溝	平安時代	F区北部を南北に走る短い溝跡より出土	同一個体	左上前臼歯前附歯 左上前臼歯小窩類面 301 302
F区59号住居 9C末 ~10C	平安時代	F区北部にある59号住居跡、住居南西コーナーに見られる楕円形土坑(P)、中央底面より出土	同一個体	牛LM <sub>2</sub> 舌面エナメル質 牛LM <sub>2</sub> 類面エナメル質 303 304
F区1号井戸	平安時代 10C	F区北部東側の井戸跡、下層充填土中より出土	同一個体	左上類歯小窩 右上前臼歯後小窩 左上前臼歯前小窩 左上類歯原歯 305 306 307 308
			同一個体	LM <sub>2</sub> (未萌出歯) 左上類歯次歯(萌出直後歯) 右上類歯原歯舌面 309 310 311
			同一個体	L P <sup>+</sup> 類面 RM <sup>+</sup> 前附歯 左上類歯前歯 左上類歯原小窩 左上類歯原小窩 312 313 314 315 316
			同一個体	左上類歯原小窩 左上類歯原小窩 左上類歯原歯後谷 左上類歯次歯 317 318 319 320
			同一個体	左上類歯後小窩 左上類歯後小窩(萌出直後) 左上類歯後小窩 321 322 323
			同一個体	左上類歯原歯 324
F区1号井戸	平安時代 10C	#	同一個体	LM <sub>2</sub> R P <sup>+</sup> の一部 右上類歯後小窩 LM <sup>+</sup> 類面 LM <sup>+</sup> 舌面 325 326 327 328 329
			同一個体	左上類歯次歯 左上類歯原歯 左上類歯後小窩 330 331 332
F区10号溝	平安時代 後半	F区北部において3号溝に対して直角に南北に走る10号溝より出土	同一個体	牛右上脛骨々体部 R P <sup>+</sup> 333 334
F区16号溝	平安時代	F区北部を南北に走る極めて短い16号溝より出土	同一個体	左上類歯前小窩 335
F区1号井戸	平安時代 10C	F区北部東側の井戸、下層充填土中より出土	同一個体	小歯片 336
F区1号井戸	平安時代 10C	#	同一個体	不明小歯片 不明小歯片 不明小骨片 337 338 339
F区59号住居 9C末~ 10C	平安時代	F区北部中央にある59号住居跡より出土	同一個体	不明小骨片 340
F区59号住居 No.9 9C末~ 10C	平安時代	F区北部中央にある59号住居跡底面より出土	同一個体	不明小歯片 341
F区16号溝 No.1	平安時代	F区北部にある短く小さな16号溝、西側近く底面より10cm程度いた位置から出土	同一個体	不明小歯片 342
F区22号土坑 ~中世	平安時代	F区北部にある小さな22号土坑、平安分の出土がないので中世の可能性大	同一個体	不明小肢骨片 343

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
F区2号溝	中世 14C後半	F区を北西より南東に走る2号溝、底面より20~30cm上部より出土	同一個体	L1 <sup>2</sup> L1 <sup>1</sup> R1 <sub>1</sub> R1 <sub>2</sub> R1 <sub>3</sub> L1 <sub>1</sub> L1 <sub>2</sub> R P <sup>2</sup> R P <sup>3</sup> R P <sup>4</sup> 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 R M <sup>1</sup> R M <sup>2</sup> R M <sup>3</sup> L P <sup>2</sup> L P <sup>3</sup> L P <sup>4</sup> L M <sup>1</sup> L M <sup>2</sup> L M <sup>3</sup> L P <sup>5</sup> 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 L P <sub>1</sub> L P <sub>2</sub> L M <sub>1</sub> L M <sub>2</sub> L M <sub>3</sub> L M <sub>4</sub> の一部 364 365 366 367 368
F区2号溝 東側	中世 14C後半	〃	同一個体	牛左上腕骨 牛腕骨々々体部 牛中手骨々々体部背面 牛中足骨々々体部 369 370 371 372 牛肢骨片 牛肢骨片 牛肢骨片 牛肢骨片 373 374 375 376
F区2号溝 No.47	中世 14C後半	〃	同一個体	鹿右肩甲骨頸部後角 鹿左肩甲骨背面 鹿右肩甲骨関節窩 鹿左肩甲骨内側 377 378 379 380 鹿肩甲骨々片 381
F区2号溝 No.21,22	中世 14C後半	〃	同一個体	右大腿骨々々体部 右大腿骨遠位端後面 右大腿骨小骨片 右脛骨の一部 382 383 384 385 右距骨 386
F区2号溝 No.19	中世 14C後半	〃	同一個体	左上腕骨々々体部前面 右脛骨々々体部後面 右中足骨 387 388 389
F区2号溝 No.7	中世 14C後半	〃	同一個体	左後頭骨々々様 左後頭額外縁 左下顎体内側の一部 390 391 392
F区2号溝 No.36	中世 14C後半	〃	同一個体	R1 <sup>1</sup> L1 <sup>1</sup> L1 <sup>2</sup> 393 394 395
F区2号溝 No.42	中世 14C後半	〃	同一個体	牛R M <sub>1</sub> 牛R M <sub>2</sub> 牛右下顎臼歯部内側 396 397 398
F区2号溝 一括	中世 14C後半	〃	同一個体	右中手骨々々体部背面 右大腿骨顆上窩 右脛骨々々体部 趾骨片 399 400 401 402
F区2号溝 No.16	中世 14C後半	〃	同一個体	R M <sub>1</sub> R M <sub>2</sub> R M <sub>3</sub> 403 404 405
F区2号溝 No.16	中世 14C後半	〃	同一個体	左顎骨顆後の一部 右下顎枝上縁内側 406 407
F区2号溝 No.5	中世 14C後半	F区北部東側にある小さな土坑、底面より20~30cm上部より出土	同一個体	左腕骨々々体部後面 趾骨片 408 409 R P <sub>1</sub> R M <sub>1</sub> 410 411
F区2号溝 No.3	中世 14C後半	F区を北西より南東に走る2号溝、底面より20~30cm上部より出土	同一個体	牛右下顎臼歯部内側面 牛下顎体小骨片 412 413
F区2号溝 No.2	中世 14C後半	〃	同一個体	L M <sub>1</sub> L M <sub>2</sub> 414 415
F区2号溝	中世 14C後半	〃	同一個体	牛L1 <sub>1</sub> 牛L1 <sub>2</sub> 416 417
F区2号溝 No.8	中世 14C後半	〃	同一個体	左上腕骨 右大腿骨 418 419
F区2号溝 No.15	中世 14C後半	〃	同一個体	左下顎枝上縁、左下顎枝上縁 420 421
F区2号溝 No.1, 2	中世 14C後半	〃	同一個体	左肩甲骨関節窩 左肩甲骨外側後縁 右肩甲骨外側後縁 左肩甲骨後縁 422 423 424 425 左上腕骨顆 右上腕骨顆 左上腕骨々々体部内側前縁 426 427 428 左上腕骨々々体部内側前縁 左上腕骨外側前縁 右大腿骨小転子下部 429 430 431 右大腿骨顆上窩 左大腿骨内側 左大腿骨内側常車移行部 右脛骨遠位端 432 433 434 435 右尺骨頭 436
F区2号溝	中世 14C後半	〃	同一個体	R M <sub>1</sub> 牛右下顎臼歯の一部 牛右下顎後臼歯後側歯根 437 438 439 左上腕骨々々体部外側後縁 左中手骨背面 左大腿骨顆 440 441 442 左大腿骨々々体部内側 左大腿骨々々体部前面 右大腿骨々々体部外側 443 444 445

## 第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	骨体の同一性	出土遺存体		
				左大腿骨頸上端、左大腿骨遠位部内側後縁、左距骨ラセン 446 447 448		
				右腕骨遠位部後面内側、牛左腕骨々々遠位部、牛左腕骨々々体部後面外縁 449 450 451		
				牛左中足骨々々体部 452		
F区2号溝 No 1, 2	中世 14C後半	#		右腕骨々々体近位部内側、右中手骨々々体部背面、右中手骨々々体遠位部 453 454 455		
				左大腿骨内側後縁、右距骨々々体部、右距骨々々体部内側、右中足骨 456 457 458 459		
				右中足骨前面、左距骨々々体部内側、中手骨々々体部背面 460 461 462		
F区2号溝 一部	中世 14C後半	#		左腕骨々々体部、右上前臼歯中形歯、左下顎体臼歯部内側、左肩甲骨後縁 463 464 465 466		
				左大腿骨々々体部後面、右大腿骨々々体部後面内側、右大腿骨頭前面、左距骨 467 468 469 470		
				左上腕骨々々体部 471		
F区2号溝	中世 14C後半	#		左大腿骨後面外側、左腕骨前面内側、左上腕骨々々体部、右上腕骨々々体部 472 473 474 475		
				右上腕骨々々体部、右上腕骨々々体部、左大腿骨々々体部 476 477 478		
				左大腿骨遠位部内側前縁、左距骨々々体部 479 480		
F区2号溝 No 5	中世 14C後半	#		鹿右第11肋骨、鹿右肩甲骨前縁、鹿頭骨又は第7頸椎の一部 481 482 483		
				左尺桡手根骨 484		
F区2号溝 埋没中部	中世 14C後半	#		左中手骨近位部、LM <sub>1</sub> 、LM <sub>2</sub> 485 486 487		
F区2号溝 No 12	中世 14C後半	#		右下顎枝、右距骨後面、左中足骨近位部 488 489 490		
F区35号溝	中世 14C後半	F区35号溝、底面より 20~20cm上部より出土		LM <sup>1</sup> 、LM <sup>2</sup> の一部、RM <sup>1</sup> 491 492 493		
F区2号溝 No 20	中世 14C後半	#	F区を北西より南東に かけて走る2号溝、底 面より20~30cm上部よ り出土	左肩甲骨の一部、左距骨 494 495		
F区2号溝 No 13	中世 14C後半	#		左上腕骨、左中足骨 496 497		
F区2号溝 No 29	中世 14C後半	#		左腸骨翼、左腸骨体外縁 498 499		
F区2号溝 No 2	中世 14C後半	#		右腕骨々々体部、下顎骨小骨片 500 501		
F区2号溝 No 46	中世 14C後半	#		RM <sup>1</sup> 、RM <sub>1</sub> 502 503		
F区2号溝 No 3	中世 14C後半	#		RM <sub>1</sub> 、牛R P <sub>1</sub> 504 505		
F区2号溝 No 14	中世 14C後半	#		牛右距骨々々体部、右中足骨 506 507		
F区2号溝 No 1, 2	中世 14C後半	#		右大腿骨内側後面、人右大腿骨近位部 508 509		
F区2号溝 No 1	中世 14C後半	#		牛左距骨々々体部内側 510		
F区8号溝	中世 14C後半	F区北部に位し、3号 溝と2号溝とを南北に 結ぶ8号溝、覆土内よ り出土		RM <sup>1</sup> 511		
F区3号溝	中世 14C後半	F区北部を東西に走る 3号溝、覆土内より出 土		LP <sub>1</sub> 512		
F区2号溝 西側	中世 14C後半	F区を北西より南東に かけて走る2号溝、底 面より20~30cm上部よ り出土		人左大腿骨遠位部 513		

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
F区2号溝 No42	中世 14C後半	#		R P <sup>+</sup> 514
F区2号溝 No 6	中世 14C後半	#		右中足骨々々体遠位部の一部 515
F区2号溝 No 9	中世 14C後半	#		左肩甲骨内面 516
F区2号溝 No10	中世 14C後半	#		牛左中足骨 517
F区2号溝 No19	中世 14C後半	#		牛左脛骨々々体部 518
F区2号溝 No18	中世 14C後半	#		左上胸骨々々体部 519
F区2号溝 No23	中世 14C後半	#		右腕骨々々体部 520
F区2号溝 No 2	中世 14C後半	#		R P <sub>+</sub> 521
F区2号溝 No 4	中世 14C後半	#		左脛骨ラセン 522
F区2号溝 No 7	中世 14C後半	#		R I <sub>+</sub> 523
F区2号溝 No24	中世 14C後半	#		右上胸骨々々体部 524
F区2号溝 No27	中世 14C後半	#		右腕骨遠位部内側 525
F区2号溝 No40	中世 14C後半	#		右大腿骨々々体部 526
F区2号溝	中世 14C後半	#		牛左中手骨腕部関節 527
F区54号址	中世 15C	F区中央部西側寄り に位し、2号溝に迫った 54号址、覆土内より出 土		R M <sup>+</sup> 528
F区3号溝	中世 15C	F区の北部を東西に走 る3号溝より出土		小骨片 529
F区10号土坑 墓	中世 15~16C	F区北部にある10号土 坑墓より出土。鹿骨片 である。調査者の所見 によれば出土状況より 人骨であると言う意見 であるが正しい判断と 考える。		人小骨片 530
F区2号溝 南東側	中世 14C後半	F区を北西より南東に かけて走る2号溝、底 面より20~30cm上部よ り出土		不明肢骨片 531
F区2号溝 南側	中世 14C後半	#		不明肢骨片 532
F区2号溝 No19	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 533 534 535 536
F区2号溝 No 9	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 537 538 539
F区2号溝 一括	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 540 541 542
F区8号溝	中世 14C後半	F区中央部よりやや北 に位し、3号溝と直角 に交わる8号溝、覆土 内より出土		不明小骨片 不明小骨片 543 544
F区2号溝	中世 14C後半	F区を北西より南東に かけて走る2号溝、底 面より20~30cm上部よ り出土		不明肢骨片 不明肢骨片 545 546
F区2号溝	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 547 548
F区2号溝 No25	中世 14C後半	#		不明肢骨片 不明肢骨片 549 550



## 第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
F区2号溝 No.3	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 551 552
F区2号溝 No.8	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 553 554
F区2号溝 No.11	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 555 556
F区2号溝 No.13	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 557 558
F区2号溝 No.17	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 559 560
F区2号溝 No.18	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 561 562
F区2号溝 No.21	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 563 564
F区2号溝 西側	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 565 566
F区2号溝 No.1	中世 14C後半	#		不明小骨片 567
F区2号溝 西側	中世 14C後半	#		不明腓骨片 568
F区2号溝 No.10	中世 14C後半	#		不明骨片 569
F区2号溝 南東側	中世 14C後半	#		不明骨片 570
F区2号溝 西側	中世 14C後半	#		不明小肢骨片 571
F区2号溝 No.6	中世 14C後半	#		不明小骨片 572
F区2号溝 No.7	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 573 574
F区2号溝 No.10	中世 14C後半	#		不明小骨片 575
F区2号溝 No.12	中世 14C後半	#		不明小骨片 576
F区2号溝 No.14	中世 14C後半	#		不明小骨片 577
F区2号溝 No.16	中世 14C後半	#		不明小骨片 578
F区2号溝 No.20	中世 14C後半	#		不明小骨片 579
F区2号溝 No.22	中世 14C後半	#		不明小骨片 580
F区2号溝 No.26	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 581 582 583
F区2号溝 No.36	中世 14C後半	#		不明小骨片 584
F区2号溝 No.40	中世 14C後半	#		不明小骨片 不明小骨片 585 586
F区2号溝 No.43	中世 14C後半	#		不明小骨片 587
F区2号溝 No.45	中世 14C後半	#		不明小骨片 588
F区2号溝 No.46	中世 14C後半	#		不明小骨片 589
F区2号溝 No.47	中世 14C後半	#		不明小骨片 590
F区2号溝 南側	中世 14C後半	#		不明小骨片 591
F区2号溝 南東側	中世 14C後半	#		不明小骨片 592
F区2号溝 南東側	中世 14C後半	#		不明小骨片 593
F区2号溝 南東側	中世 14C後半	#		不明小骨片 594

付章 上野園分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
F区2号溝 東側	中世 14C後半	#		不明小骨片 595
F区2号溝 覆土	中世 14C後半	#		不明小骨片 596
F区2号溝	中世 14C後半	#		不明小骨片 597
F区2号溝	中世 14C後半	#		不明小骨片 598
F区97号住居	中世～近世 16C以降	F区中央部西側の小さな97号住居跡より出土	同一個体	R P <sub>2</sub> , R P <sub>3</sub> , R M <sub>1</sub> , R M <sub>2</sub> 599 600 601 602
F区97号住居	中世～近世 16C以降	#		不明小骨片 603
F区26号土坑 №5	近世	F区北東部の小さな26号土坑、覆土中より出土	同一個体	R P <sub>1</sub> , R P <sub>2</sub> , R P <sub>3</sub> , R P <sub>4</sub> , R M <sub>1</sub> , R M <sub>2</sub> , R M <sub>3</sub> , R M <sub>4</sub> , 右下顎骨 L P <sub>1</sub> , L P <sub>2</sub> 604 605 606 607 608 609 610 611 612 L P <sub>1</sub> , L M <sub>1</sub> , L M <sub>2</sub> , L M <sub>3</sub> , 左下顎体臼歯部 左下顎枝関節突起 613 614 615 616 617 618 左下顎角舌面陰影 619 右上腕骨遠位部 右橈骨掌面 右大腸骨内面 右中足骨々々体部 620 621 622 623 右大腸骨大転子後部 624
F区26号土坑	近世	F区北東部にある小さな26号土坑より出土	同一個体	不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 625 626 627 628 629 不明小骨片 630
G区14号住居 覆土	古墳時代 7C後半	G区北東部に位置する14号住居跡、覆土中より出土	同一個体	左上顎頬齒中前齒齒根部附近 上顎小骨片 631 632
G区6号井戸 10C	平安時代 10C	G区南東部に位置する6号井戸跡、下層光面土中より出土	同一個体	L M <sub>2</sub> , L M <sub>3</sub> , 左下顎頬齒頰齒エナメル質 633 634 635
G区38号溝	平安時代	G区南部中央を南北に走る堀い溝より出土	同一個体	牛頬齒主柱側柱間エナメル質の一部 牛頬齒内部エナメル質の一部 636 637 牛頬齒外部エナメル質の一部 638
G区26号溝	平安時代 9C代	G区中央部東側を東西に走る26号溝、南側壁際の中段底面直上より出土	同一個体	L M <sup>1</sup> 原歯の一部 L M <sup>2</sup> 小窩 639 640
G区156号土坑	平安時代	G区北部中央に位置する小さな156号土坑、覆土中より出土	同一個体	牛頬齒主柱側柱間小歯片 牛頬齒内部エナメル質歯頸部 641 642
G区6号井戸 10C	平安時代 ～11C代	G区南東部に位置する6号井戸、下層光面土中より出土		右上顎頬齒小窩 右上顎頬齒小窩 右下顎頬齒下後歯齶 643 644 645
G区4号井戸 №22	平安時代 10C代	G区北東部に位置する4号井戸、中層～下層遺物を多く含む層中より出土		牛 R P <sup>1</sup> 離面 牛 L P <sup>2</sup> の一部 646 647
G区41号溝 覆土	平安時代	G区中央部東側を26号溝に平行に走る細い41号溝、覆土中より出土		上顎頬齒小窩の一部 648
G区56号住居 №16	平安時代 9C代	G区北東部に位置する56号住居跡、床面直上より出土		右上前臼歯の一部 649
G区26号溝 №105	平安時代 9C代	G区中央部東側を東西に走る26号溝、南側壁際の中段底面直上より出土		L P <sub>1</sub> 650
G区26号溝	平安時代 9C代	#		右下顎頬齒下前縁起 651
G区50号住居 覆土	平安時代後期	G区50号住居跡、覆土中より出土		小歯片 652

## 第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
G区56号住居 No17	平安時代 9C代	G区北東部に位する56号住居跡、床面直上より出土		小骨片 653
G区26号溝	平安時代 9C代	G区中央部東側を東西に走る26号溝、南側壁際の中段底面直上より出土		小骨片 654
G区4号井戸 No22	平安時代 10C代	G区北東部に位する4号井戸、中層～下層遺物を多く含む層中より出土		牛小骨片 655
G区50号住居 貯蔵穴 No25	平安時代 9C代	G区東部中央に位する50号住居貯蔵穴、底面から10cm程厚いた位置から出土		不明小骨片 不明小骨片 656 657
G区4号井戸	平安時代 10C代	G区北東部に位する4号井戸、中層～下層にかけての遺物を多く含む層中より出土		不明肋骨片 不明肋骨片 658 659
G区21号住居 カマド廻り方	平安時代 9C代	G区南部中央に位する21号住居跡、カマド内より出土		不明小骨片 660
G区56号住居 カマド内	平安時代 9C代	G区北東部に位する56号住居、床面直上より出土		不明歯根片 不明小骨片 661 662
G区98号住居 カマド	平安時代 10C代	G区北西部に位する98号住居跡、カマド内より出土		不明小骨片 663
G区26号溝 No105	平安時代 9C代	G区中央部東側を東西に走る26号溝、南側壁際の中段底面直上より出土		不明小骨片 664
G区26号溝 No56	平安時代 9C代	#		不明小骨片 665
G区26号溝 No57	平安時代 9C代	#		不明小骨片 666
G区6号井戸	平安時代 10C ～11C代	G区南部東側に位する6号井戸、下層充填土中より出土		不明小骨片 667
G区4号井戸	平安時代 10C代	G区北東部に位する4号井戸、中層～下層の遺物を多く含む層中より出土		不明小骨片 不明小骨片 668 669
G区63号址 No18	中世 15C	G区北部中央に位する63号址、底面より10cm上層より出土		L.P <sup>1</sup> の一部 670
G区1号地下 式土坑	中世 14C後半	G区北部中央に位する1号地下式土坑、覆土中より出土		左腕骨々体部 671
G区84号址37	中世 15～16C	G区北部中央に位するやや大きな84号址、覆土内より出土		不明肋骨片 672
G区84号址37	中世 15～16C	#		不明小骨片 673
G区63号址 No18	中世 15C	G区北部中央に位する63号址、底面より10cm上層より出土		不明小骨片 674
G区1号地下 式土坑	中世 14C後半	G区北部中央に位する1号地下式土坑、覆土内より出土		不明小骨片 675
G区15号溝	近世～近代	G区中央部東端を南北に走る細い15号溝（耕作に伴うかま廻り）より出土	同一個 体	人右側頭骨 人左側頭骨 人頭骨片 人頭骨片 人頭骨片 676 677 678 679 680 人頭骨片 人頭骨片 人頭骨片 人頭骨片 人頭骨片 681 682 683 684 685

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
G区15号溝	近世～近代	※		人R I <sup>1</sup> 686
G区15号溝	近世～近代	※		不明小骨片 687
G区6号井戸	不明 調査者の所見によれば平安時代となっているが、外部セメント質及び歯根先端縮毛痕形迹完全に遺残し、内外エナメル質が同じような厚味を持っていること、歯の重量が40gを超えていること等により平安時代より新しいものと考えられる。	G区南部東側に位置する6号井戸、下層充填土中より出土	同一個体	R I <sup>1</sup> L I <sup>1</sup> L I <sup>1</sup> 内側面 R I <sup>1</sup> 唇面歯根附近 L I <sub>2</sub> R P <sup>2</sup> R P <sup>3</sup> 688 689 690 691 692 693 694 R P <sup>4</sup> R M <sup>1</sup> R M <sup>2</sup> R M <sup>3</sup> L P <sup>1</sup> L P <sup>2</sup> L P <sup>3</sup> L M <sup>1</sup> L M <sup>2</sup> L M <sup>3</sup> 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 R P <sub>2</sub> R P <sub>3</sub> R P <sub>4</sub> R M <sub>1</sub> R M <sub>2</sub> R M <sub>3</sub> L P <sub>2</sub> L P <sub>3</sub> L P <sub>4</sub> L M <sub>1</sub> 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 L M <sub>2</sub> L M <sub>3</sub> 右口蓋臼歯部 左口蓋臼歯部 右下顎体臼歯部外側面 715 716 717 718 719 右下顎体臼歯部内側面 右下顎体臼歯部内側面 左下顎体臼歯部外側面 720 721 722 左下顎体臼歯部外側面 左下顎体臼歯部内側面 723 724
G区41号溝 覆土	不明 調査者の所見によると平安時代となっているが、外部セメント質の遺残良好で、特に歯冠上部の外部セメント質は厚く、全体から見て平安時代より新しい感じである。	G区中央部東側に26号溝と平行して走る細い41号溝、覆土内より出土	同一個体	R M <sub>1</sub> R M <sub>2</sub> R M <sub>3</sub> entostylid L P <sub>2</sub> L P <sub>3</sub> L M <sub>1</sub> L M <sub>2</sub> L M <sub>3</sub> 725 726 727 728 729 730 731 732 左下顎体臼歯部外側面 733
G区2号土塚 底部	不明	G区北西部に位置する2号土塚より出土		人R M <sub>1</sub> 人臼歯片 734 735
G区表土	不明	G区表土より出土		左下顎前臼歯後葉の一部 左中心足根骨 736 737
G区トレンチ	不明	昭和54年次の試験時のトレンチ埋土より出土		R P <sup>2</sup> 738
G区表土	不明	G区表土より出土		不明骨片 739
G区その他	不明	G区より出土		不明小骨片 740
H区33号址 No.179	奈良時代 8 C	H区中央部やや南側に位置する33号址、土坑中(P <sub>10</sub> )中段底面より出土	同一個体	右上顎後臼歯中附離 左上顎側歯小窩 左下顎側歯下後附離 741 742 743 左下顎側歯下後離 下顎側歯下次離 下顎側歯後葉歯根側面 744 745 746
H区33号址 5区上層覆土	奈良時代 8 C	H区中央部やや南側に位置する33号址、覆土中より出土		左上顎側歯後離 下顎前臼歯後葉歯根側面 左下顎側歯下後離 747 748 749
H区33号址 5区上層覆土	奈良時代 ～平安時代 8 C後半 ～9 C後半	※		不明小骨片 750

## 第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
H区33号址 №179	奈良時代 ～平安時代 8C ～9C代	H区中央部や南側に 位置する33号址、土坑中 (P <sub>33</sub> ) 中段底面より 出土		不明小骨片 751
H区2号井戸	中世 15C	H区中央部西側に位 する小さな2号井戸、覆 土内より出土		不明小骨片 752
H区2号井戸	中世 15C	#		不明小骨片 753
H区11号溝 Ⅲ区中層部	中世～近代 15・16C ～近代	H区中央部を東西に走 る大きな11号溝、覆土 内より出土	同一個 体	左上顎椎曲小窩 上顎椎曲小窩後部 754 755
H区11号溝 Ⅲ区 №16	中世～近代 15・16C ～近代	#		LM <sub>1</sub> 756
I区90号住居 覆土	古墳時代 7C代	I区北部西側に位する 90号住居、覆土中より 出土	同一個 体	鹿LP <sup>2</sup> 鹿LM <sup>1</sup> 頰面エナメル質 鹿小骨片 757 758 759
I区90号住居 カマド内	古墳時代 7C代	#	同一個 体	猪椎曲片 猪椎曲片 猪椎曲片 猪小骨片 760 761 762 763
I区193号住 居 カマド内	古墳時代 7C代	I区中央部東端に位 する193号住居、覆土中 より出土		不明小骨片 764
I区211号住 居	古墳時代 ～奈良時代 7C末 ～8C初葉	I区南部東端に位する 211号住居、覆土中より 出土		不明小骨片 765
I区82号住居	8C代	I区南部中央に位する 82号住居、覆土中より 出土	同一個 体	牛椎曲内部エナメル質の一部 牛椎曲内部エナメル質の一部 767 768
I区82号住居	奈良時代 8C代	#		牛椎曲支柱の一部 769
I区20号住居	奈良時代 8C代	I区中央部東側に位 する20号住居跡、覆土中 より出土		鹿LM <sub>1</sub> 770
I区73号住居	奈良時代 8C代	I区南部西側に位する 73号住居跡、覆土中よ り出土		不明小骨片 771
I区82号住居 カマド掘り方	奈良時代 8C代	I区南部中央に位する 82号住居跡、覆土中よ り出土		不明小骨片 772
I区104号住 居 覆土	奈良時代 8C代	I区南部西側に位する 104号住居跡、覆土中よ り出土		不明小骨片 773
I区165号住 居 覆土	奈良時代 8C代	I区中央部東側に位 する165号住居跡、覆土中 より出土		不明小骨片 774
I区9号井戸	平安時代 9C代	I区中央部南側に位 する9号井戸、充填土中 層遺物集中層部より出 土	同一個 体	牛L <sub>1</sub> , 牛R <sub>1</sub> P <sub>1</sub> , 牛R <sub>1</sub> P <sub>2</sub> , 牛右下顎体白歯部 牛RM <sub>1</sub> , 牛RM <sub>2</sub> 775 776 777 778 779 780 牛RM <sub>1</sub> , 牛右下顎体白歯部 牛LP <sup>2</sup> 後顎舌面エナメル質 781 782 783 牛LP <sup>2</sup> 舌面エナメル質 牛LM <sup>1</sup> 後葉 牛LM <sup>1</sup> 牛LM <sup>2</sup> 後葉 牛LP <sub>1</sub> 784 785 786 787 788 牛左下顎体白歯部 牛LM <sub>1</sub> , 牛LM <sub>2</sub> , 牛LM <sub>3</sub> , 牛下顎体白歯部 789 790 791 792 793
I区4号井戸	平安時代	I区中央部東端に位 する半月形をした4号井 戸、充填土下層より出 土	同一個 体	L <sub>1</sub> <sup>1</sup> R <sub>1</sub> P <sub>1</sub> <sup>2</sup> R <sub>1</sub> P <sub>2</sub> <sup>2</sup> R <sub>1</sub> P <sub>3</sub> <sup>2</sup> R <sub>1</sub> P <sub>4</sub> <sup>2</sup> L <sub>1</sub> P <sub>1</sub> <sup>3</sup> L <sub>1</sub> P <sub>2</sub> <sup>3</sup> L <sub>1</sub> P <sub>3</sub> <sup>3</sup> L <sub>1</sub> M <sub>1</sub> <sup>3</sup> R <sub>1</sub> P <sub>1</sub> <sup>4</sup> 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 R <sub>1</sub> P <sub>1</sub> <sup>4</sup> R <sub>1</sub> P <sub>2</sub> <sup>4</sup> L <sub>1</sub> P <sub>1</sub> <sup>4</sup> L <sub>1</sub> P <sub>2</sub> <sup>4</sup> 804 805 806 807
I区4号井戸	平安時代	#	同一個 体	R <sub>1</sub> P <sub>3</sub> <sup>4</sup> R <sub>1</sub> M <sub>1</sub> <sup>4</sup> L <sub>1</sub> M <sub>1</sub> <sup>4</sup> R <sub>1</sub> P <sub>1</sub> <sup>5</sup> , R <sub>1</sub> P <sub>2</sub> <sup>5</sup> , R <sub>1</sub> M <sub>2</sub> <sup>5</sup> , L <sub>1</sub> P <sub>1</sub> <sup>5</sup> , L <sub>1</sub> P <sub>2</sub> <sup>5</sup> , L <sub>1</sub> P <sub>3</sub> <sup>5</sup> , L <sub>1</sub> M <sub>1</sub> <sup>5</sup> 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 L <sub>1</sub> M <sub>1</sub> <sup>6</sup> 818

付章 上野園分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
I区4号井戸	平安時代	#	同一個体	R P <sub>1</sub> , R P <sub>2</sub> , R M <sub>1</sub> , R M <sub>2</sub> , L P <sub>1</sub> , L P <sub>2</sub> , L M <sub>1</sub> , L M <sub>2</sub> , L M <sub>3</sub> 819 820 821 822 823 824 825 826 827
I区9号井戸	平安時代 9 C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充墳土中層遺物集中部層より出土	同一個体	R P <sub>1</sub> , R P <sub>2</sub> , R P <sub>3</sub> , R M <sub>1</sub> , R M <sub>2</sub> , R M <sub>3</sub> , L M <sub>1</sub> , L M <sub>2</sub> , 下内歯 828 829 830 831 832 833 834 右下顎体臼歯部内側 右下顎体臼歯部内側 835 836
I区9号井戸	平安時代 9 C代	#	同一個体	牛RM <sup>1</sup> 後葉エナメル質 牛RM <sup>2</sup> 牛LP <sup>1</sup> 後側面 牛RP <sub>1</sub> 837 838 839 840 牛RP <sub>1</sub> 外部エナメル質 牛RP <sub>2</sub> 外部エナメル質 牛右下顎体臼歯部外部側 841 842 843
I区4号井戸	平安時代	I区中央部東端に位置する半月形の4号井戸、充墳土下層の遺物を多く含む層中より出土	同一個体	左上顎歯次歯 左上後臼歯前小窩前側 左上顎歯後側エナメル質 844 845 846 左下後臼歯側面の一部 小骨片 847 848
			同一個体	左上顎歯次歯 下顎歯前下次歯 小骨片 849 850 851
			同一個体	第1切歯内エナメル質輪 右上顎歯後歯 小骨片 852 853 854
I区9号井戸(南)	平安時代 9 C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充墳土中層遺物集中部層より出土	同一個体	R I <sup>1</sup> , R I <sup>2</sup> , R I <sup>3</sup> , L I <sup>1</sup> , L P <sup>2</sup> 855 856 857 858 859
I区9号井戸	平安時代 9 C代	#	同一個体	牛RP <sup>1</sup> 牛RM <sub>1</sub> 牛下顎体臼歯部小骨片 860 861 862
I区9号井戸	平安時代 9 C代	#	同一個体	牛LM <sup>1</sup> 牛LP <sub>1</sub> 牛LP <sub>2</sub> 牛LM <sub>1</sub> 863 864 865 866
I区57号住居 No.20	平安時代 10 C代	I区北部西側住居跡、南西コーナー部近くの床面から6~7cm浮いた位置より出土	同一個体	頬歯歯片 頬歯歯片 頬歯歯片 頬歯歯片 867 868 869 870
I区9号井戸(東)	平安時代 9 C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充墳土中層遺物集中部層より出土	同一個体	牛RP <sup>1</sup> 牛RP <sup>2</sup> 牛RM <sup>1</sup> 871 872 873
I区94号住居 覆土	平安時代 9 C代	I区中央部西側に位置する94号住居跡、覆土中より出土	同一個体	頬歯前小窩の一部 頬歯前小窩の一部 874 875
I区9号井戸(西)	平安時代 9 C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充墳土中層遺物集中部層より出土	同一個体	左上顎骨々体遠位部後端 左上顎骨々体部内側 876 877
I区9号井戸	平安時代 9 C代	#	同一個体	牛下顎歯内側エナメル質の一部 牛下顎骨小骨片 878 879
I区9号井戸	平安時代 9 C代	#	同一個体	牛RP <sub>1</sub> 牛LP <sub>1</sub> 880 881
I区53号住居 覆土	平安時代 10 C代	I区中央部北側に位置する53号住居跡、覆土中より出土	同一個体	牛頬歯エナメル質の一部 LM <sup>1</sup> 頬面エナメル質の一部 882 883
I区9号井戸	平安時代 9 C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充墳土中層遺物集中部層より出土	同一個体	L I <sub>1</sub> 牛LM <sub>1</sub> 舌面エナメル質 884 885
I区196号住居	平安時代 9 C代	I区南部東端に位置する196号住居跡、覆土中より出土	同一個体	左下前臼歯下次歯 886
I区197号住居 No.14	平安時代 10 C代	I区南部東端に位置する197号住居跡、中央やや西寄りの床面から14cm程浮いた位置から出土	同一個体	牛LM <sup>1</sup> 887
I区9号井戸(北)	平安時代 9 C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充墳土中層遺物集中部層より出土	同一個体	RM <sup>1</sup> 888
I区9号井戸	平安時代 9 C代	#	同一個体	牛左上前臼歯舌面 889

## 第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
I区9号井戸	平安時代 9C代	#		牛小骨片 890
I区9号井戸 (北東)	平安時代 9C代	#		牛又は馬小骨片 891
I区9号井戸	平安時代 9C代	#		不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 892 893 894
I区9号井戸 (東)	平安時代 9C代	#		不明小骨片 不明小骨片 895 896
I区188号住居 掘り方覆土	平安時代	I区188号住居跡、掘り方充填土中より出土		不明小骨片 不明小骨片 897 898
I区9号井戸 (北東)	平安時代 9C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充填土中層遺物集中部層より出土		不明小骨片 不明小骨片 899 900
I区9号井戸	平安時代 9C代	#		不明小骨片 不明小骨片 901 902
I区9号井戸 (西)	平安時代 9C代	#		不明小骨片 不明小骨片 903 904
I区24号住居	平安時代	I区中央部西側に位置する24号住居より出土、基底の重複あり		不明小骨片 905
I区197号住居 №14	平安時代 10C代	I区南部東側に位置する197号住居跡、中央やや西寄りの床面より14cm程厚いた位置より出土		不明小骨片 906
I区4号井戸	平安時代	I区中央部東側に位置する半月状の4号井戸、充填土、下層遺物を多く含む層中より出土		不明小骨片 907
I区9号井戸	平安時代 9C代	I区中央部南側に位置する9号井戸、充填土中層遺物集中部層より出土		不明小骨片 908
I区229号址	不明	I区中央部東側に位置する229号址、覆土中より出土		不明小骨片 909
J区41号住居 床敷	古墳時代 6C ～7C代	J区南部東側にある住居跡、カマドの反対側の石の下から床面に密着した状態で出土	同一個体	牛L.M、舌面跡形 牛椎骨柱 910 911
J区5号住居	古墳時代 ～奈良時代 7C ～8C代	J区中央部西寄りに位置する5号住居跡、5号住居を切って掘り込まれた土坑充填土中より出土		牛L.Pの一部 牛左上後臼歯前葉内部エナメル質 912 913 牛上顎歯肉内部エナメル質 牛L.M'歯面 914 915
J区5号住居	古墳時代 ～奈良時代 7C ～8C代	#		馬又は牛小骨片 916
J区32号住居 №25	古墳時代 ～奈良時代 7C ～8C代	J区南部中央に位置する32号住居跡、充填土中より出土		不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 917 918 919
J区河川敷 ガケ中段	近世～近代	J区河川敷ガケ中段より出土	同一個体	猪Ldm <sup>3</sup> 猪Ldm <sup>4</sup> 猪LM <sup>1</sup> 猪Rdm <sub>1</sub> 猪Rdm <sub>2</sub> 猪RM <sub>1</sub> 猪RM <sub>2</sub> 920 921 922 923 924 925 926 猪Ldm <sub>1</sub> 猪LM <sub>1</sub> 猪LM <sub>2</sub> 猪左上顎骨の一部 猪右下顎体臼歯部 927 928 929 930 931 猪左下顎体臼歯部 猪右髌骨 猪左髌骨 猪左頭頂骨 猪左前歯骨 932 933 934 935 936 猪右頭頂骨 猪右後頭骨 猪左後頭骨 猪左尺骨肘頭 猪椎骨の一部 937 938 939 940 941 猪左前歯骨 猪不明骨片 942 943

付章 上野区分借寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
Ⅲ区14号土坑 No.80	不明	Ⅲ区中央部北側に位置する比較的大きい14号土坑中より出土	同一個体	右下顎切歯内部エナメル質輪 右上顎頬歯前縁 右上前臼歯後側 LM <sup>1</sup> 944 945 946 947 左上顎頬歯前縁 左上顎頬歯後側 左上前臼歯小窩 948 949 950 951 右下顎頰下次歯 R P <sub>2</sub> 下内齧谷 左下前臼歯後側 左下顎頰下後齧谷 952 953 954 955
Ⅲ区5号住居	不明	Ⅲ区中央部西寄りに位置する5号住居跡、5号住居を切って掘り込まれた土坑充填土中より出土	同一個体	牛R P <sup>4</sup> 牛RM <sup>2</sup> 牛RM <sup>3</sup> 牛L P <sup>2</sup> 牛LM <sup>1</sup> 頰面 牛LM <sup>2</sup> 牛LM <sup>3</sup> 956 957 958 959 960 961 962
Ⅲ区14号土坑 No.82	不明	Ⅲ区中央部西寄りの比較的大きい14号土坑より出土	同一個体	R P <sup>3</sup> (萌出直後) R P <sup>4</sup> (萌出直後) RM <sup>1</sup> 963 964 965
Ⅲ区14号土坑 No.81	不明	#	同一個体	右上顎切歯内部エナメル質輪 R P <sup>3</sup> 小窩 966 967
Ⅲ区18号住居 フ下	不明	Ⅲ区中央部西側にある住居跡、充填土中より出土	同一個体	L P <sup>1</sup> 次歯 下顎頰歯前縁の一部 968 969
Ⅲ区14号土坑 No.81	不明	Ⅲ区中央部西寄りの比較的大きい14号土坑より出土		左上後臼歯中齧齧 970
Ⅲ区49号土坑 西川敷	不明	Ⅲ区49号土坑、充填土中より出土		LM <sup>1</sup> 前齧歯前縁 971
Ⅲ区14号土坑 No.82	不明	Ⅲ区中央部西寄りの比較的大きい14号土坑より出土		不明小歯片 不明小歯片 972 973
Ⅲ区14号土坑 No.81	不明	#		不明小歯片 974
Ⅲ区河川敷 No.1	不明	Ⅲ区河川敷より出土		不明 975
Ⅲ区河川敷 No.2	不明	#		不明 976
Ⅲ区河川敷 No.3	不明	#		不明 977



第3節 観察について

出土場所	時代	出土状態	個体の同一性	出土遺存体
J区河川敷 No.4	不明	#		不明 978
J区河川敷 No.5	不明	#		不明 979
J区河川敷 No.6	不明	#		不明 980
Z区1号井戸覆土	平安時代	Z区南部東側に位する1号井戸、4C末～5C初葉の住居を切る1号井戸の充填土中より出土	同一個体	R P <sub>2</sub> R P <sub>3</sub> R P <sub>4</sub> R M <sub>1</sub> R M <sub>2</sub> R M <sub>3</sub> R M <sub>4</sub> の一部 L P <sub>2</sub> L P <sub>3</sub> L M <sub>1</sub> 981 982 983 984 985 986 987 988 989 L M <sub>2</sub> 右下顎体臼歯部外側 990 991
Z区1号溝	中世～近代 16C～19C	Z区の北部、換谷川左岸台地に南北に延びる1号溝に伴って出土	同一個体	L P <sub>2</sub> L M <sub>1</sub> L M <sub>2</sub> L M <sub>3</sub> 992 993 994 995
Z区一括へびり表	近代 19C後半～20C	Z区の染谷川左岸台地より河川敷に下るへびり板の遺構に伴って出土		R P <sub>3</sub> 996
出土地不明	不明	不明	同一個体	R P <sup>a</sup> R P <sup>b</sup> R M <sup>a</sup> R M <sup>b</sup> L P <sup>a</sup> L P <sup>b</sup> L M <sup>a</sup> 997 998 999 1000 1001 1002 1003
出土地不明	不明	不明	同一個体	L P <sup>a</sup> (萌出直後) L P <sup>b</sup> (萌出直後) L P <sup>c</sup> (萌出直後) 1004 1005 1006 R P <sup>a</sup> (萌出直後) R P <sup>b</sup> (萌出直後) R P <sup>c</sup> (萌出直後) 小骨片 1007 1008 1009 1010
出土地不明	不明	不明	同一個体	L P <sub>2</sub> L P <sub>3</sub> L P <sub>4</sub> 左下顎体臼歯部外側 L M <sub>1</sub> L M <sub>2</sub> 1011 1012 1013 1014 1015 1016 左下顎体臼歯部外側 L M <sub>3</sub> 左下顎体臼歯部外側 1017 1018 1019
出土地不明	不明	不明	同一個体	L I <sub>1</sub> 前側 L I <sub>2</sub> 後側 右上顎歯小窩 L M <sup>a</sup> L M <sup>b</sup> 1020 1021 1022 1023 1024 左上顎歯の一部 左上顎歯後小窩 1025 1026
出土地不明	不明	不明	同一個体	右上顎歯前縁 右上顎歯前縁 1027 1028
出土地不明	不明	不明	同一個体	L M <sup>a</sup> L M <sup>b</sup> の一部 1029 1030
出土地不明	不明	不明		右上顎歯前縁 右上顎歯中附縁 右上顎歯前小窩 1031 1032 1033 右上顎歯後小窩 右上顎歯短軸後谷 右上顎歯前縁後谷 1034 1035 1036 右上顎歯前縁後谷 左上顎臼歯小窩 左上顎臼歯前縁 左上顎歯前縁 1037 1038 1039 1040 左上顎歯前縁 左上顎歯前附縁 L M <sup>a</sup> 中附縁 左上顎歯前小窩 1041 1042 1043 1044 左上顎歯後縁 左上顎歯後葉舌面 左上顎歯後側 左上顎歯次葉 1045 1046 1047 1048 左上顎歯舌面 左上顎歯前縁 左上顎歯前縁 左下顎歯下後縁 1049 1050 1051 1052 R P <sup>a</sup> 前葉 左脛骨の一部 1053 1054
出土地不明	不明	不明		不明小骨片 不明小骨片 不明小骨片 1055 1056 1057
出土地不明	不明	不明		不明小骨片 不明小骨片 1058 1059

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

附表2 種類別、顎骨別遺存体出土数(歯)

種 類	右上顎	左上顎	右下顎	左下顎	その他の 切歯片	その他の 類歯片	小歯片	計
馬	86	122	87	91	1	9	5	401
牛	24	30	23	31		12		120
馬又は牛							1	1
人	1		1			1		3
猪		3	4	3		7		17
鹿		3		1		2		6
兎	4	3				6		13
不 明							18	18
計	115	161	115	126	1	37	24	579





附表5 遺存体の形態的特徴(歯)

№	種 類	歯の部位	時 代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
1~12	牛	左右上顎前歯6 左右下顎前歯4	古墳時代 7C後半	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等から同一個体である確立は高い。	全体として長目である。	咬耗やや進む。	前臼歯、前部翼状突出部内方に突出。後臼歯舌面主柱の柱状形成強く頬側葉片の柱状の張り出し強い。内部エナメル變太く上部展開す。	
15~24	#	左右上顎前歯10	#	#	細く全体としてやや小さい。	前臼歯咬面磨耗す。	主柱の発達良好。舌面葉片の柱状張り出し強い。後臼歯葉塊に線状結節を認む。内部エナメル變太くして太い。	右側面の外部セメント質遺残良好。歯槽中に植立し、ほぼ完形を保つ。
35~46	馬	左右上顎切歯5 右下顎切歯1 右下顎前歯6	平安時代 10C前半	#	柱状で大きく長く、力強さに満ちている。	咬合面はほぼ平らで咬耗の度合いは極めて軽い。	切歯は大きく唇面に明瞭な縦溝が走っている。内部エナメル質は大きく左右に伸び、外部エナメル質に接している。前歯は下原歯、下次小歯と発達し、下前隆起下次小歯は大きく前後に張り出し、下次小歯が乳歯状で舌面に伸びていることが特長的。	左側切歯を除き良く原形を保っている。右側歯根底部左切歯舌面、前歯咬合面の前後部を欠損している。
52	牛	右前臼歯内部エナメル質	# 9C	#	扁平な三角歯状。	咬 耗 は 軽 い。	長く長く左右に伸びている頬側前歯反折し、外部エナメル質と接続。	内部エナメル質のみ。
53	馬	LM <sup>1</sup>	# 10C	#	柱状でやや長く軽く後方に反っている。	咬合面はほぼ平らで咬耗度合いは軽い。	前小窩は大きく力強い。	後小窩より後及び原歯を失う。
54	馬	左上顎原小歯	#	#	薄くて小さい。	欠損。	咬合面を失い傾き2つに分かれている。	咬合面附近及び頬側を失う。
58~66	馬	左右下顎切歯4 右下顎前歯5	中世 14C後半	#	切歯は柱状で大きく前歯は薄い。	切歯2、前歯3、は未萌出歯。	切歯内部エナメル質は大きく左右の外部エナメル質に接している。前歯は下次歯と下後歯の発達良好である。	頬側歯根部暗紫色。
67~72	#	左右上顎前歯6	中世	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相により同一個体である確率は高い。	著しく小さく短い。	咬合面はほぼ長方形で頬側への傾斜強い。	各歯は小さいが下次歯は良く発達し下後前歯の後展は良好で下内歯谷は前後に伸びている。	歯根先端を失っている。
73	牛	右上乳臼歯舌面	#	#	著しく小さい。	咬耗進む歯。	前後葉の柱状部突出弱く後葉々片の弧は前葉より大きい葉塊ならぬに因んでいる。	頬側及び歯根を失う。
74	馬	LM <sub>2</sub>	#	#	小さく、前方に傾いている。	咬合面の傾斜強く、咬耗の度合いは進んでいる。	各歯はこじんまりしている下原歯及び下次歯の発達良好。	下原歯の咬合面附近を失っている。
90	#	LM <sup>1</sup>	中世—近代 15C—19C	#	柱状で弧状前歯を示し、薄い。	中葉やや凹み咬耗は進んでいる。	原歯後谷は大きく、原歯の後展は顕著である。後小窩の後に小円槽を認む。	前後、部のエナメル質の一部及び歯根を失っている。

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル歯の特徴	
98・99	#	左上頰歯2	古墳時代 7C	出土状態、風化 の度合い、大き き、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 立は高い。	大きくて長く 軽く後方に 反っている。	咬耗の度合 い軽い。	全体として薄く、中附歯、 前歯、後歯の発達良好。	頰歯エナメル 質のみ。
100	不明	小歯片	#					
103	馬	LM <sup>1</sup>	古墳時代 —平安時代 6C—12C	やや小さく、美 しい弧状湾曲を 示す。	咬耗の度合い は軽い。	内部エナメ ル質はやや 複雑である が後小窩は 小さい。	外部エナメル質及び前小窩 より原線にかけて前半分を 失う。	
105	#	小歯片	#		10数片の小歯 片に分かれ る。			小歯片に分か れているが1 歯の歯の量は ない。
107	不明	小歯片	平安時代					
137・138	馬	右下頰歯 2	中世14C後 半—16C前 半	出土状態、風化 の度合い、大き き、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 率は高い。	管状で全体が 後方に反って いる。	欠損してい る。	エナメル質は顎平でやや厚 い下後縁及び下後縁谷はや や小さい。	咬合面及び歯 根を失ってい る。
142	#	RM <sup>2</sup> 頰 面 エナメル質	#		小さくて柱状 を示す。	中葉やや凹 み咬耗の度 合いは進ん でいる。	中附歯細く、後歯の湾曲は 強い。	歯根先端を欠 く。
143	#	RM <sub>2</sub>	#		やや小さく美 しい弧状湾曲 を示す。	咬合面は平 で咬耗の度 合いは進ん でいる。	各歯は小さくentostylidと 下原線の発達良好。	外部セメント 質僅かに遺残 している。咬 合面の一部及 歯根を欠く。
145	#	LM <sup>2</sup> 頰 面 エナメル質 の一部	不明		短い。	咬耗の度合 い著しい。	中附歯はやや細いが輪郭鮮 明で、後方に湾曲す。	中附歯と前・ 後歯の一部で ある。
146	#	LM <sup>2</sup> の前 小窩	#		小さくて扁平	#	底部は前方にはね上がり、 両耳は大きく展開す。	内部セメント 質はしっかり している。
148	#	RM <sup>1</sup>	平安時代		柱状で長い。	咬合やや不 整、咬耗の 合いは軽い。	内部エナメル質やや複雑。 前・後小窩内個耳状部縮毛 状を呈す。	前、後附歯の 大部分を欠 く。
167~169	#	上頰歯2 下頰歯1	中世 15C後半 —16C前半	出土状態、風化 の度合い、大き き、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 率は高い。	小さくて歯冠 は著しく短い	ほぼ平らで あるが咬耗 の度合いは 著しい。	内部エナメル質は単純で、 咬耗のため前・後小窩は細 い。	
171~176	兎	上頰歯6	#	頭蓋歯槽中に植 立。	扁平で軽く内 方に湾曲。	ほぼ平らで ある。	咬合面はやや長いハート形 を示し内部エナメル質が縦 断している。	
198	#	左上切歯	#		やや細く半円 形に湾曲。	#		
199	#	頰歯	#		扁平で軽く内 方に湾曲。	#	咬合面はやや長いハート形 を示し内部エナメル質が縦 断している。	歯根部を欠く
200	#	#	#		#	#	#	#
201	#	#	#		#	#	#	#
202	#	#	#		#	#	#	#

第3節 観察について

No.	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
203	#	#	#	#	#	#	#	#
204	#	#	#	#	#	#	#	#
216	馬	RM <sub>2</sub>	#	#	薄く、やや小さく、美しい弧状歯曲を示す。	咬耗の度合いは軽い。	下原歯の発達良好で、舌面各歯は小さい。	前歯先端及び歯根を欠く。
220~229	#	下顎切歯3 下顎乳切歯2 下顎前歯3 下顎乳前歯2	中世—近代	同一下顎骨に傾立。	薄いけれども大きくて長い。	乳歯は咬耗進み、永久歯は咬耗軽い。	切歯は反り少なく、1本の歯溝が走っている。前臼歯及び乳臼歯はエナメル質薄い。後臼歯は各歯とも小さい。	外部セメント質良く遺残している。
237~252	牛	上顎前歯7 下顎前歯9	平安時代 10C	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等により同一個体である確率は高い。	上顎前歯はやや長く、太い。下顎前歯は太くて短い。	咬耗の度合いは少ない。	上顎前歯は主柱、側柱の発達良好で主柱は太い。下顎前歯・側面葉片の柱状部大は強い。上下前歯とも内部エナメル襞凹字形に展開し太い。	
253~262	#	上顎前歯6 下顎前歯4	#	#	当時の牛としては普通のが大ききであるが歯冠高は短い。	後臼歯の咬耗は山形状形を示しているが歯面咬痕は磨耗している。	内外エナメル質は厚く、主柱側柱の発達良好である。内部エナメル質は大ききくて太く凹字形を示し上方が展開している。	殆ど大部分の歯が内部象牙質を失い歯根を欠いている。
269~271	馬	上顎前歯3	#	#	柱状で太く著しく長い。	中葉及び前縁後凹み咬耗少ない。	中附歯細く原歯極めて長く前後に伸びている。内部エナメル質薄い。両小窩ひらたくMPの後小窩両耳の発達連している。	開放歯根。原歯後谷入口に僅かに外部セメント遺残す
272~275	#	上顎前歯4	#	#	柱状で太く、長く、力強い。	P <sup>3</sup> 咬耗開始直後で一部に未磨耗残り、P <sup>4</sup> 萌出直後歯	P <sup>3</sup> は中附歯の発達悪く、原歯は長く前後に伸びている。P <sup>4</sup> は両小窩朝顔状に開き外部エナメル質と癒着する。	開放歯根である。
276~278	#	上顎切歯3	#	#	太くて大きい	咬耗少なくR1 <sup>1</sup> 未萌出歯。	咬合面横長のハート形で唇側に太い1—2本の歯溝が走る。	舌面歯根部を失いL1 <sup>1</sup> は左側を失う。
279~281	#	上顎前歯3	#	#	萌出後余り経っていないのに短い。	咬頭未熟な姿を残す。	中附歯著しく細く山形をなし、咬合面附近は前方に湾曲し、前葉・後葉咬合面附近内方に湾曲する。	開放歯根。中附歯異常で何か全体的疾患を思わす。
282・283	#	上顎前歯2	#	#	短冊状で咬耗開始間もなくであるのに短い。	咬耗は軽い。	中附歯上下細く中国太く疾病による異常発育を思わす。後葉咬合面附近軽く内方に湾曲し、咬耗開始後余り経っていないことを示す。	短冊状である
284~286	牛	上顎前歯1 下顎前歯2	#	#	平たくて短い。	咬頭及び後葉やや磨減す。	短冊タイプであるので前後臼歯とも彫り深く輪郭鮮明。前臼歯は後葉歯面歯溝太くて深い。後臼歯側面葉片の柱状部明で、舌面の主柱、側柱細いけれども鮮明である。	歯根を欠く。
287~290	馬	上顎切歯3 下顎切歯1	#	#	太くて大きい。	I <sup>1</sup> は咬耗少なくI <sup>2</sup> 萌出後歯。I <sup>3</sup> 萌出後間もない。	I <sup>1</sup> の内部エナメル質輪は横に長く伸び、先端は内方に湾曲している。I <sup>2</sup> の内エナメル質輪はラッパ <sup>2</sup> 状に広がりがり外部エナメル質と癒合している。	ほぼ完形を保っている。

No	種別	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
291~293	鹿	L P <sup>2</sup> 頬面 1 頬面の一部 2	#	#	やや大きい。	咬頭やや磨 減している。	エナメル質やや厚く、輪郭 は鮮明である。側柱の発達 顕著で、頬面歯頸部附近に 連山状の錐状結節を認む。 葉片ノ柱状の張り出し強く 基部は巾が広い。	頬面の一部及び 内部エナメル 質の一部である。
294・295	馬	左上頬歯の 一部2	#	#	細く短冊状を している。	咬耗やや進 む。	前歯は平らで中央に太い褐色 の帯状の結が横ざっている。 中附歯は著しく鋭く 前方に強く傾き後歯とのな す角は鋭角である。	小歯片である。
296~298	#	上顎頬歯の 一部3	#	#	楕状でやや後 方に湾曲して いる。	未咬耗である。	咬合面は丸い。頬側は丸く 湾曲し、舌側は朝顔形に開 いている。	下半分を失う。
299・300	#	右上頬歯の 一部2	#	#	なぞなた状で 軽く後方に 反っている。	未咬耗である。	咬合面は楕状で横線が丁字 状をなしている。	次第のみで本 体を失う。
301・302	#	左上前臼歯 の一部2	#	#	短冊状である が表面波うっ ている。	咬合面欠 損。	外部エナメル質やや薄く、 前附歯の発達良好で、前歯 の反りは強い。小窩の耳状 部の下縁は丸く大きくよく 丸歯の若さを示している	前臼歯頰面 の一部と前小窩 一部である。
303・304	牛	L M <sub>2</sub> の一 部2	# 9 C米 -10C	#	大きくて長い。	咬耗の度合 いは軽い。	中葉の主柱は太くて長く、 後葉との境には側柱が認め られる。頬面の中葉や片は柱 状に膨出している。前葉と の葉境下部に錐状結節の一 部が認められる。	舌面エナメル 質は後葉及び 歯根を失い、 頰面エナメル 質は前葉及び 歯根を失う。
305	馬	左上頬歯小 窩	# 10C	#	四角柱状で細 く後へ僅かに 湾曲している。	萌出直後 歯。	咬合面は朝顔形に開き外方 に湾曲している。両耳の発 達は悪い。	小窩のみである。
306	#	右上前臼歯 後小窩	#	#	四角柱状で薄 い。	咬耗やや進 む。	扁平で底部長く両耳の発達 悪い。	後小窩のみで る。
307	#	左上前臼歯 前小窩	#	#	#	咬合面欠 損。	底部前方にはねえり両耳凹 形に展開。	前小窩のみで ある。
308	#	左上頬歯原 歯	#	#	扁平で長い。	咬耗始ま る。	直角三角形を示し、底辺の 2角は鋭角である。舌面 には太い縦溝が走っている。	原歯のみ。開 放歯根である。
309	#	L M <sub>2</sub>	#	#	薄くて台形で ある。	錐状結節と なっている。	各歯は夫々錐状をなし、僅 かに後方に反っている。下 次歯、下原歯発達良好。	開放歯根である。
310	#	左上頬歯次 歯	#	#	平たく楕状で ある。	萌出直後で 未咬耗。	咬合面丸く内方に湾曲して いる。	開放歯根である。
311	#	右上顎歯原 歯舌面	# 10C	#	短冊状である。	咬耗やや進 む。	平たい楕状をなし咬合面は 小さく波打っている。	歯根を欠く。
312	#	L P <sup>2</sup> 頬面	#	#	やや太くて著 しく長い。	咬耗軽い。	萌出後余り経っていないので 中附歯上部細く前、後歯 咬合面附近内方に湾曲して いる。	開放歯根である。
313	#	R M <sub>1</sub> 前 附歯	#	#	短冊状で湾曲 している。	咬合面丸く 萌出後余り 時間が経っ ていない。	前附歯細く咬合面内方に湾 曲している。	歯根附近を欠 く。
314	#	左上頬歯前 歯	#	#	短冊状である。	咬合面附近 欠損している。	中附歯高く、強く前方に傾 き、前歯の反りは弱い。	咬合面を失う。
315	#	左上頬歯原 小歯	#	#	楕状で長い。	咬耗軽い。	前歯はほぼ平らで前小窩の 張り出しは明瞭である。	開放歯根である。



## 第3節 観察について

No.	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴		欠損状態 その他	
					大きさ及び 全体の形	咬合状態 エナメル質の特徴		
316	#	左上顎歯原 小窩	#	#		#	原小窩の張り出しは強い。	#
317	#	#	#	#	細くてやや短い。	咬合面欠損。	原小窩の張り出しは弱い。	#
318	#	#	#	#	細くて極めて長い。	咬耗軽い。	傾伏で軽く後へ反っている エナメル質は厚い。	#
319	#	左上顎歯原 歯後谷	#	#	扁平で長い。	咬耗やや始まっている。	原歯後谷及び馬歯はやや短く 次窩はやや小さい。	#
320	#	左上顎歯次 齧	#	#	細く傾伏で長い。	咬耗軽い。	咬合面の舌側やや厚く、両 端は薄い。	#
321	#	左上顎歯後 小窩	#	#	細くて薄い。	咬耗やや始まる。	舌面前方にはね上がり、耳部 発達不良。	舌面のみである。
322	#	#	#	#	四角柱状である。	歯出直後である。	咬合面朝顔状に開いている。	中央より下を 失う。
323	#	#	#	#	扁平な四角柱 状である。	咬耗やや進む。	歯面広く著しく扁平で、両 耳の発達殆どない。	歯根先端を欠く。
324	#	左上顎歯原 齧	#	#	細くてV字 形。	#	原歯の後端は鋭角である。	開放歯根。原 歯の後端のみ。
325	#	LM <sub>2</sub>	#	#	長四角柱状で やや歯い。	咬耗少ない。	次小窩大きく後方に突出する。	開放歯根である。
326	#	R P <sup>2</sup> の一部	#	#	やや小さい。	咬耗少ない。	原歯正三角形を示し、前 方への突出はなく舌側に張 り出している。	開放歯根である。
327	#	右上顎歯後 小窩	#	#	四角柱状で細 い。	咬耗やや進む。	舌面広く、両耳基部の陥入 は殆どなくのっぺりしている。	後小窩のみ。
328	#	LM <sup>1</sup> 頰面	#	#	やや細くて長 い。	咬耗少ない。	前・中附歯頰いが发育良好 で美しい。前歯の反りは強 い。	開放歯根である。 歯根部暗 紫色に着色 している。
329	#	LM <sup>1</sup> 舌面	#	#	長い。	#	次窩、原歯後谷やや小さい。	開放歯根である。
330	#	左上顎歯次 齧	#	#	やや短い。	咬耗やや進む。	次窩は丸味を帯びている。 原歯後谷やや短いけれども 馬歯は明瞭である。	歯根を欠く。
331	#	左上顎歯原 齧	#	#	平たくて長 い。	咬耗少ない。	原歯は前後に長く伸びてい る。舌面は中央が軽く凹み、 大きく放打っている。	開放歯根である。
332	#	左上顎歯後 小窩	#	#	平たくてやや 短い。	咬耗やや進む。	平たくて前側の耳の発達悪 い。	後小窩のみ。
334	#	R P <sup>3</sup>	# 後半	#	太く、柱状で 軽く後方へ傾 いている。	#	前附歯、中附歯の発達良好 である。内部エナメル質は やや単純であるが全体の作 りは大きい。	両小窩より舌 側の内部象牙 質を失っている。
335	#	左上顎歯前 小窩	平安時代	#	薄い楕円状の小 歯片である。	咬耗はかな り進んでいる。	小窩の耳状部は単純でつ べりしている。舌面エナ メル質は斜前方に強い鋭角で はね上がっている。	前小窩の前半 を失っている。
336	#	小歯片	# 10C	#				
337	#	#	#	#				
338	#	#	#	#				
341	#	#	# 9C末 —10C	#				
342	#	小歯片	平安時代	#				

No.	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
344~368	馬	上顎切歯2 上顎前歯12 下顎切歯5 下顎前歯6	中世 14C後半	出土状態、風化 の度合い、大き き、年令、形状 歯相観点の一致 等から見て同一 個体である確率 は高い。	切歯やや大き い。前臼歯は 太く柱状で、 後臼歯はやや 細くて長い。	咬耗の度合 いは軽い。 前歯は中葉 の凹み著し く、咬合は 不整である。	切歯は唇面に太い1~2本の 縦溝が走り、内部エナメル 質輪は大きくて横に長く 外部エナメル質に準じて いる。前歯は前・中歯葉の発 達良好で内部エナメル質は 複雑である。両小葉の耳状 部の輪毛紋及び馬質の発 達は顕著である。	外部セメント 質は各歯の間 及び諸所に遺 残している。 歯根開放し先 端は暗紫色に 着色している ものが見られ る。
393~395	#	上顎切歯3	#	#	やや太く前冠 の反りは強い 唇面に1~2 本の縦溝が 走っている。	咬耗はやや 進んでいる。	左右1'の内部エナメル質 輪は菱形を示しやや唇面に 近い。	R1'歯根 部L1'は唇面 及び歯根形、 L1'は前冠 の中央より上 を失っている。
396~397	牛	右下後臼歯 2	#	#	RM <sub>1</sub> は柱状 をし、RM <sub>2</sub> は 三葉性を示 し、共に輪郭 鮮明である。	咬耗は磨耗 しやや平ら である。	各葉々片の頬面への柱状部 大強い。葉葉の歯状結節発 達強い。内部磨耗は大きく 上部の磨耗は強い。内部エ ナメル質は厚い。	歯根を失っ ているが良く 原相を保って いる。歯根基部 外部セメント 質は遺存良好 である。
403~406	馬	右下後臼歯 3	#	#	小さい。	咬耗は少し 進んでいる。	内部エナメル質はやや複雑 である。下後隆起の発達良好 で、下後隆起の大きいことが 目立っている。	外部セメント 質の遺残良好 で良く原相 を保っている。
410・411	#	右下前歯2	#	#	小さくて短 い。	咬耗は進ん でいる。R M <sub>1</sub> 咬合面 の傾斜強 い。	外部エナメル質はやや厚く前 臼歯下後縁、下内面の発達 良好である。後臼歯は下次 小歯の張り出し強い。	#
414・415	#	左後臼歯2	#	#	小さくて前冠 は極めて短 い。	咬耗の度合 いは激し い。	歯面の各歯のエナメル質は 厚い。歯冠小さく、各歯 は小さい。	歯根の一部を 欠くM <sub>1</sub> は下 次歯及び entostylid 唇面を欠く。外 部セメント質 の遺残は良好 である。
416・417	牛	左下顎切歯 2	#	#	L1'は唇面 僅かに張り出 しL1'は小 さくしゃもじ 形をしている。	L1'は咬 耗やや進 みL1'の 咬耗の度合 いは軽い。	L1'の上縁は僅かに左へ 傾き、唇面左側に縦に細か い陥凹部がある。	L1'は唇面 及び唇面の半 分、並びに歯 根基部を失う。 L1'は歯根 部及び内部組 織を失う。
437	馬	RM <sub>2</sub>	#	#	小さいが極め て長く、僅か に後方に湾曲 している。	咬合やや不 整であるが 咬耗の度合 いは軽い。	内部エナメル質はやや複雑 である。下後隆起及び下次 小歯極めて大きい。下次小 歯は乳房状を示す。	歯根先端を欠 く。外部セメ ント質の遺残 良好である。
438	牛	左下乳臼歯 の一部	#	#	小さい。	咬耗の度合 いは進んで いる。	唇面エナメル質は厚くなら かな波形を示している。 後葉内部エナメル質は細い 高脚形を示している。	前葉の前半及 び唇面並びに 歯根基部を失 う。
439	#	右下顎後臼 歯後側歯根	#	#	短いパイプ状 をしている。	欠損してい る。	歯根断面は三角形を示し前 面には縦溝が斜に走ってい る。	歯根部より上 を失っている。

## 第3節 観察について

№	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴		欠損状態 その他	
					大きさ及び 全体の形	咬合状態 エナメル質の特徴		
464	馬	右上前臼歯 中磨歯	#		歯根近くの小 歯片。	# 小さな歯であると思え、全 体に細かく小さい。歯根 附近を示す横線が入っている。	歯根附近の中 磨歯の小歯片 である。	
486	#	LM <sub>2</sub>	#		薄い四角柱を 示し、歯冠は やや前方に傾 いている。	咬耗の度合 いは中程度 である。	下原歯、下次歯良く発達し 下次小歯の大きいことが目 出ている。	歯根部の舌面 側と咬合面の 舌側を失う。
487	#	LM <sub>3</sub>	#		薄い三角柱を 示している。 舌面中央を帯 状陥凹が横 ざっている。 歯冠は左右に 軽くS字状を 示している。	ほぼ平らで 頰面への傾 斜は強い。	歯冠中の少ないことが目立 ている。三葉性を示し、各 葉の長さはほぼ同じである entostylidの発達良好で、 頰面のエナメル質は厚い。	歯根先端を 失っている。
491	#	LM <sup>a</sup>	#		美しい弧状咬 合を示す。	咬耗は余り 進んでいな い。	内部エナメル質は比較的単 純である。前小窩及び原歯 は長く前後に伸びている。	原小窩及び後 小窩の一部、 原歯の咬合面 及び歯根部を 失う。
492	#	LM <sup>a</sup> の一部	#		柱状で長く、 僅かに後方に 反っている。	#	内部エナメル質やや歯端で 前小窩は大きく力強さを示 している。	原歯及び原小 窩を失っている。
493	#	RM <sup>a</sup>	#		大家小さい。 歯冠中央より 強く後方に屈 曲している。	#	内部エナメル質薄く、特に 咬合面が薄くなっている。 また内部エナメル質は比較 的単純である。	歯根開放して る。後磨歯下 部を欠損して している。
502	#	RM <sub>2</sub>	#		柱状で細長く 後方に軽く再 曲している。	咬合はやや 不整である 咬耗の度合 いは軽い。	内部エナメル質はやや複雑 である。前小窩、後小窩は 著しく大きく広がっている。	頰面の咬合面 附近と、小窩 より舌側の粗 織及び歯根部 失っている。
503	#	RM <sub>3</sub>	#		小さくて長方 形である。	咬耗はやや 進んでいる 。	下原歯、下次歯の発達良好 で特に下次小歯の大きいこ が目立っている。	歯根部を欠く 外部セメント 質の遺残はほ ぼ完全である。
504	#	RM <sub>1</sub>	#		極めて小さく 歯冠は短い。	咬耗の度合 いは激し い。	内部エナメル質はやや単純 である。頰面を始め各面の エナメル質は厚い。	下次隆起、下 内歯の一部を 欠く。
505	牛	RP <sub>1</sub>	#		大きくて力強 さに満ちてい る。	中葉やや突 出し咬合面 は台形に近 い。	頰面前歯片は大きくて力強 い。頰面及び各葉のエナメ ル質の厚いことが目立って いる。	前歯歯根を失 う。外部セメ ントは歯根全 面を広く覆っ ている。
511	#	RM <sup>a</sup>	#		美しい弧状咬 合を示す	咬合面は平 らである。	前小窩は大きく前後に伸び ており、原歯の後縁は顕著 である。	中磨歯から後 及び歯根部を 失っている。
512	#	LP <sub>3</sub>	#		歯冠は短い。	咬 耗 著 し い。	内部エナメル質は大きく、 特に下内歯の大きいことが 目立っている。下内歯谷は 大きく前縁は輪状になって いる。	下次隆起の一部 下原歯の前部 下後歯を失っ ている。
514	#	RP <sup>a</sup>	#		柱状でやや長 い。	咬耗の度合 いは少な い。	内部エナメル質はやや複雑 で前・後小窩、原歯後谷は 著しく大きい。馬鬃は深く 明顯である。	原歯の咬合面 附近を欠いて いる。外部セ メント質の遺 残良好である。

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

№	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特徴		欠損状態 その他	
					大きさ及び 全体の形	咬合状態 エナメル質の特徴		
521	#	RP <sub>1</sub>	#		細長く軽くS 字状を示す。	咬合状態や や不整である。 咬耗の 度合いは中 程度である。	各歯は小さいが下後歯の発 達顕著である。	外部セメント 質は厚く全体 を覆っている。
523	#	R1 <sub>2</sub>	#		著しく小さく て短い。	咬耗の度合 いは著し い。	唇面にやや太い稜溝が走っ ている。	唇面エナメル 質のみ。
528	#	RM <sub>1</sub>	# 15C		著しく短い。	#	咬耗著しいため内部エナメ ル質は単純になっている。前 後小窩、原齧後谷、並びに 原齧は欠く細長く前後に伸 びている。	後側部、原小 窩並びに歯根 部を失う。
529	#	小歯片	#					
590~602	#	右下顎歯 4	中世~近世 16C以降	出土状態、風化 の度合い、大き さ、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 率は高い。	歯冠は大き い。	咬耗は余り 進んでいな い。	前臼歯の内部エナメル質は 極めて大きく、特に下内齧 谷は前後に長く、下後附齧 の後翼は顕著である。	エナメル質は 薄くなっている。 歯根の一部を失っている。
603	不明	小歯片	#					
604~616	馬	右下顎歯 6 左下顎歯 6	近世	出土状態、風化 の度合い、大き さ、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 率は高い。左右 の下顎骨に植 立。	やや短くて短 い。	咬耗やや進 んでいる。	エナメル質は厚い。前臼歯 の内部エナメル質は大きく て力強い。下後附齧が細長 く、下次小窩が大きく後方 に張り出していることが特 徴的である。	歯根完全に形 成されている のでかなりな 年令に達して いる。外部セ メント殆ど完 全に連続し、 良く原根を 保っている。
631	#	左上顎歯中 附齧 歯根附近	古墳時代一 奈良時代 7C末~ 8C初		中附齧として は中位の大き さ。	欠損してい る。	中附齧は鮮明で、上部太く 歯根分岐点近くで細くなっ ている。	小歯片である。
633~635	#	左下顎歯 3	平安時代 10C ~11C代	出土状態、風化 の度合い、大き さ、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 率は高い。	薄く、軽く後 方に反っている。	咬耗はやや 進んでい る。	各歯は小さい。下内齧谷長 く前齧は箱状をなしている。	L <sub>1</sub> M <sub>2</sub> は下原 齧の上部を欠 き L <sub>1</sub> M <sub>2</sub> は entostylid 及 び下次小窩の 歯根部分を欠 く。
636~638	牛	類歯 3	平安時代	#	短冊状の歯片 の一部。	欠損してい る。	主柱、側柱間外部エナメル 質は細い棒状で両側が僅か に内部に湾曲している。内 部エナメル質は薄く細く歯 根部が膨れている。外部エ ナメル質は平たく、一歯が 外方に湾曲している。	短冊状の小歯 片である。
639~640	馬	L <sub>1</sub> M <sub>1</sub> の一 部 2	# 9C代	#	いずれも長く 美しい弧状湾 曲を示す。	欠損してい る。	原齧舌面は長く平らで内側 僅かに内側に湾曲している 小窩は断面凹字形に展開し ている。	原齧の舌面 のみで歯根を失 う小窩は舌側 及び中央より 上を失っている。
641~642	牛	類歯の一部 2	平安時代	#	細く短く棒状 である。	欠損してい る。	灰白色不透明ガラス状歯質 で断面鋭利である。細い棒 状である。	短冊状小歯片 である。

## 第3節 観察について

№	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特 徴	
643	馬	右上顎頰歯 小窩	# 10C—11C		軽く後方に湾 曲す。やや小 さい。	咬 耗 は 軽 い。	エナメル質は単純で頰側 に向かって展開している。	咬合面附近の 片側の耳状部 を欠いている。
644	#	#	#		柱状で細い。	咬合面を欠 いている。	底面は前方に強く跡ね上 がり両耳は頰側に大きく展開 している。	咬合面及び歯 根側を欠いて いる。
645	#	右下顎頰歯 下後附歯	#		細く長い。	#	溝状で極めて細く長い。	下後附歯のみ で歯根側を欠 く。
646	牛	R P <sup>2</sup> 頰面	# 10C		極めて小さく て短い。	咬耗の度合 いは著し い。	主柱は太くて短い。前側柱 は欠損して基部が残ってい るが主柱との間は狭く、や や深い谷をなしている。	頰面のみで、 前・後側柱及 び歯根を失 う。
647	#	L P <sup>2</sup> の一部	#		小さくて短 い。	咬耗の度合 いは進ん でいる。	内部エナメル質は厚い。舌 面のエナメル質は四角く、 内部エナメル質は馬蹄形で 比較的大きく頰側に展開し ている。	頰面及び歯根 を失う。
648	馬	左上顎頰歯 小窩の一部	#		細くて薄い。	小さくて不 明。	細くて深く咬合面角形で側 面は細かい波状を示す。	小窩の耳状部 のみで本体及 び歯根側を 失っている。
649	#	右上前臼歯 の一部	# 9C		前縁は広く、 中附歯の中央 に 縦 溝 が 走っている。	咬耗は進ん でいる。	前縁は厚く中附歯とは鋭角 的に接続している。前小窩 の内側耳状部は僅かに波状 を示している。	中附歯、前縁、 及び前小窩の 後半分を除き 他を失っている。
650	#	L P <sub>2</sub>	#		大きく歯頸部 は軽く外側に 湾曲している。	ほぼ平らで 咬 耗 は 軽 い。	下後歯、下後附歯、下内歯 は大きくて力強い。	頰面及び歯根 部を失う。
651	#	右下顎頰歯 下前隆起	#		扁平で薄くて 長い四角柱状 を示す。	咬合やや不 良である。	エナメル質はやや厚く単純 であるが力強い。	本体及び歯根 部を失う。
652	#	小歯片	# 後期					
653	#	#	# 9C					
656	不明	#	#					
657	#	#	#					
661	#	歯根片	#		小歯片。	欠損してい る。	内側に歯根跡が見られ、下 部青く、ろう石状色を示 す。	歯根壁の小歯 片である。
664	#	小歯片	#					
667	#	#	# 10C—11C					
670	馬	L P <sup>2</sup> の一 部	中世 15C		柱状で著しく 大きい。大き い割に前・中 附歯細い。咬 耗は軽い。	咬合やや不 整である。	前・中附歯は馬歯が大きい 割に細く、特に中附歯咬合 面は三角形に突出し特異な 形を示している。前・後小 窩は大きく横に広がっている が耳部は不明瞭である。	後歯より後、 小窩より舌面 側及び歯根部 を失う。
674	不明	小歯片	#					

No.	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴		欠損状態 その他	
					大きさ及び 全体の形	咬合状態 エナメル質の特徴		
686	人	RI*	近世-近代		やや細い。	切縁はほぼ平らで咬耗は進んでいる。舌面磨耗のため刃縁線は消失している。	唇面数本の細い線溝が走り唇面隆線が見られる。舌面磨耗のため刃縁線は消失している。	歯根基部より先が欠損している。
688~716	馬	上顎切歯3 下顎切歯2 上顎前歯12 下顎前歯12	不明。 調査者の所見によれば平安時代となっているが、外部セメント質及び歯根先端の縮毛状波形状完全に連続し、内外エナメル質が同じような厚味を持ち歯の重量が40gを超えること等により平安時代より新しいものと考えられる。	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等により同一個体である確率は高い。	切歯は大きき中等度である舌面の形は豊円である。上下前歯は柱状である。	咬耗はやや進んでいる。	切歯の内部エナメル質は菱形または長楕円形でやや大きい。外部エナメル質はやや厚い。上顎前歯の内部エナメル質はやや複雑である。内・外エナメル質は厚い。内部エナメル質の発達は良好で次歯、原歯の後側は顕著である。両小窩の内側耳状部は縮毛状波形を示し、両M <sup>1</sup> の後小窩の後に小顆円槽を認める。下顎前歯の外部エナメル質は厚く、内部エナメル質の発達良好である。Pの下内齧谷前後に長く伸び前歯は楕状を示す。Mの下次小窩の発達良好で下内齧と共に連続状を示す。	切歯は欠損しているもの多く中程より歯根にかけて欠損している。上下前歯の外部セメント質の連続は殆ど完全に良く原相を保っている。歯根先端は薄くオーロラ状波形をなしている。
725~732	#	右下前歯3 左下前歯5	不明。 調査者の所見によると平安時代になっているが外部セメント質の遺存良好で、特に歯冠上部の外部セメント質は厚く、全体から見て平安時代より新しい感じである。	#	やや小さい。	咬合はやや不整である咬耗の度合いはやや進んでいる。	内外エナメル質は余り厚くはないが全体ある程度の厚味を有している。内部エナメル質は小さいながらも鮮明で力強く、下後隆起深く進入し、下次小窩は大きく下内齧と連続状をなしている。	外部セメントの連続良好で良く原相を保っている。
734	人	RM <sub>1</sub>	不明。		やや細長い。	咬耗は進んでいない。	5つの咬頭は鮮明で中央の各小窩は深く、合流して1つの深い溝となっている。内齧及び次歯の発達良好で内齧は軽く舌側に張り出し次歯は中央がくびれ2つの小咬頭を示している。	歯冠中央より歯根歯根倒を失う。
735	#	白歯片	#		小さな新月状をなす。			歯冠の小歯片である。

## 第3節 観察について

No	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴		欠損状態 その他	
					大きさ及び 全体の形	咬合状態 エナメル質の特徴		
736	馬	左下前臼歯 後葉の一部	#		大きくて長い。	欠損している。	後葉の一部で前側及び下小歯並びに歯根を失う。	
738	#	R P <sup>2</sup>	#		三角形状で太くて力強い。	咬 痕 は 軽 い。	中附歯の発達は良好である 内部エナメル質は大きくて力強くやや複雑である。両小葉は大きくて前後に伸びて平たく前小葉前側の縁毛状放射が目立っている。高葉は長く鮮明である。	歯根及び後附歯並びに後側エナメル質を失う。後葉の歯根解放しているものと推定される。
741~749	馬	左上前歯3 左下前歯3 下顎前歯2 下顎前臼歯1	奈良時代 8 C	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等により同一個体である確率は高い。	短脚状をなしている。	欠損。	淡黄褐色で表面は粗ぞうで極めて固い。中附歯は極めて細くて低い。(市2.6、高2)下後附歯は乳房状を示す等小形馬であることを示している。	歯根先端開放し幼令であることを示している。
750	不明	小歯片						
751	#	#	#					
754・755	馬	左上前歯1 上顎前歯1	中世一近代 15C-16C ~近代	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等により同一個体である確率は高い。	三角形で薄い。	咬痕深み高さも短い。	扁平で横に長く右側の耳状部はやや長い。	小葉耳状部の一部を失う。
756	#	LM <sub>2</sub>	#		やや短く特有の弧状湾曲を示す。	咬痕深み、高さやや短い。	各歯は小さくこじまりとされている。	舌面前葉、咽面後葉エナメル質を失う。
757・758	鹿	左上前歯2	古墳時代 7 C	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等により同一個体である確立は高い。	L P <sup>1</sup> は小さなみ状をなしている。	未だ咬痕が始まっていない。	L P <sup>1</sup> は頰面四側柱の発達が目立っている。舌面は三角鐘状に上がっている。L M <sup>1</sup> 頰面前葉は三角形状に張り出し、後葉の張り出しは豊かである。葉境には小さな鐘状結節を認む。歯頸縁は未だ認められない。	L P <sup>1</sup> は頰面下部と歯根を失い、L M <sup>1</sup> は前葉の上半分を失い、各葉とも歯根を失っている。
760~762	猪	頰歯片3	#	#	三角鐘状或は台形等を示している。	咬痕著しい。	咬頭の頂上は磨耗し平らになっており、稜縁には小さな鐘状結節を認む。	頰歯片で夫々歯根を欠いている。
767・768	牛	頰歯内部エナメル壁2	奈良時代 8 C代	#	小歯片状である。	小さくて不明である。	内部エナメル質の右と左の耳状部である。	咬合面近くの小歯片である。
769	#	頰歯1	#		細い鐘状をなす。	#	細い鐘状をなし、下部は欠損のためやや細く、支柱の咬合面は丸く巾広くなっている。	支柱の小歯片である。
770	鹿	LM <sub>2</sub>	#		2つの山形が連なり前葉小さく後葉やや大きい。	咬痕の山形は顕著である。	エナメル質は薄く弱ましい 支柱の発達は良好である。 舌面の柱状膨大は顕著である。内部エナメル質は三角月状をなし、舌面は三角月状をなし、舌面は三角月状を示している。頰面及び舌面後葉に歯頸縁が見られる。	歯根を失い葉は舌面を欠いている。

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴		欠損状態 その他	
					大きさ及び 全体の形	咬合状態 エナメル層の特徴		
775~792	牛	左下切歯1 左上類歯5 左下類歯4 右下類歯5	平安時代 9C代	出土状態、風化 の度合い、大き さ、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 率は高い。	切歯は楕状で あるが小さい 上顎類歯はや や小さいが M <sup>1</sup> だけがや や大きくて長 い。下顎類歯 はM <sub>1</sub> やや小 さくM <sub>2</sub> 、M <sub>3</sub> は大きい。	咬合面磨耗 をやや開始 している。 歯状結節及び M <sub>2</sub> 後葉磨 耗している	主柱及び歯柱の発達良好で 内部エナメル層は単純で大き く、各葉とも一杯に広が っている。歯根は太く大き い。	大部分歯根を 失う。
794~807	馬	左上切歯1 右上類歯4 右下類歯3 左上類歯4 左下類歯2	平安時代	#	類歯は太くて 柱状を示す。	前臼歯及び M <sup>1</sup> の咬合面 の傾斜が見 られる。咬 耗は進んで いる。	全体として違和感を感じる 前・中附歯著しく発達して いるが、その割には内部エ ナメル層は小さく、また単 純である。前臼歯間小窩前 後に長い。奇形が目立って いる。 ①L P <sup>2</sup> の原歯が前に張り 出さない。②L M <sup>1</sup> 後側歯内 部に陥入し後小窩の後に小 円槽を作る。	歯根部を欠く
808~818	#	右上類歯2 右下類歯3 左上類歯2 左下類歯4	#	#	細く薄くて短 い。	咬合面の傾 斜強く、咬 耗は進んで いる。	前附歯、中附歯、下内歯、 下後附歯はやや発達してい るが、各葉はこじんまりし ている。	歯根部を欠く。
819~827	#	右下類歯4 左下類歯5	平安時代	#	四角柱状で長 い。	咬耗少な い。	下次離、下原歯の発達良好 で、下次小歯、下前隆起は 大ききびのびと発達してい る。	歯根開放して いる。
828~834	#	右下類歯6 左下類歯1	# 9C代	#	全体はやや太 く極めて長 い。	咬合はやや 不整である が咬耗の度 合いは軽 い。	内外のエナメル層はやや厚 く、内部エナメル層は大き き力強い。内部エナメル層 はやや複雑で、下後隆起は 長く、下内歯谷歯面は細か く波打っている。	歯根の先端を 欠くものがある が良く原相 を保っている 歯根開放し、 歯根先端暗黒 褐色に着色す るものが見ら れる。
837~842	牛	右上類歯2 左上類歯1 右下類歯3	#	出土状態、風化 の度合い、大き さ、年令、形状 歯相等により同 一歯体である確 率は高い。	全体としてや や小さく、ま たR M <sup>1</sup> は小 さくて短い。	咬耗の度合 いは軽い。	主柱、歯柱小さく、下顎類 歯の舌面の凹凸は少ない。 M <sup>1</sup> の内部エナメル層は大き く凹形をしていて大きく 展開し、また内部一杯に広 がって力強い。	歯根部を欠く
844~847	馬	左上類歯3 左下類歯1	平安時代	#	小さい歯片、 薄片である。	左上類歯咬 合面は舌面 に向かって 傾斜し、左 下類歯咬合 面は後方に 傾いている。 咬耗の度 合いは不明 である。	次離舌面はゴツゴツと波打 ち、前小窩前側耳状部は軽 く前方にはね上っている。 左上類歯後側面には後の歯 による強い圧迫痕を認む。	小歯片で本体 を欠く。



第3節 観察について

№	種 類	歯の部位	時 代	個体の同一性	特 徴		欠損状態その他	
					大きさ及び全体の形	咬合状態		エナメル層の特徴
849・850	#	左上頬歯1 下顎歯1	#	#	小歯片である	次歯咬合面は舌面に向って傾斜している。咬耗の度合いは不明である。	次歯のエナメル質はやや薄く、舌側のエナメル質は強かに波打っている。下次歯歯根部近くのエナメル質は大きく波打っている。	次歯は咬合面より1cm下迄の小歯片。下次歯は歯根近くの小歯片。
852・853	#	切歯1 左上頬歯1	#	#	第一切歯内部エナメル質輪は小さな角形を示し後歯は小歯片である。	第一切歯内部エナメル質輪の咬合面は舌側に傾斜し咬耗は進んでいる。	内部エナメル質輪は円形に近い楕円形である。後歯はほぼ平らであるが中副歯附近は強い湾曲を示している。	内部エナメル質輪のみで内部セメント質を欠く。後歯は歯根近くの小歯片である
855~859	#	右上切歯3 左上切歯2	9C代	#	切歯は大きく大きく美しい弧状湾曲を示している。	咬耗は進んでいない。	唇面に1-2本の巾広い縦溝が走っている。内部エナメル質輪は左右に長く伸びている。両側壁には左右の歯からの強い圧迫痕を認む。	歯根を失う。
860・861	牛	右上頬歯1 右下頬歯1	#	#	R P'は半開扇形を示しR M <sub>1</sub> は短く横に長い。	R P'の咬耗は軽くR M <sub>1</sub> の咬耗はやや進行している。	R P'の内部エナメル質は大きく左右に伸び外部エナメル質に接す。R M <sub>1</sub> の中葉部は柱状に膨出し、前・中及び中・後葉々境に節状結節を認める。前・中葉々境の節状結節は短い。	R P'は歯根及び後葉を、R M <sub>1</sub> は歯根及び後葉前歯を失う。
863~866	#	左上頬歯1 左下頬歯3	#	#	比較的巾が広い。	P <sub>1</sub> 、P <sub>2</sub> は咬耗少なく咬痕突出しているが、M <sub>1</sub> は咬痕摩耗し咬合面のエッジ強い。	P <sub>1</sub> は頬面強く張り出し舌面凹凸に富む。M <sub>1</sub> は舌面の主柱形強く、前・中葉境巾広い谷間を表す。	歯根を欠く。
867~870	猪	頬歯片4	10C代	#	山形状をなししている。	咬耗は軽い。	NO.867は連山状をなし前列に1つの山と小さな山状部とがあり後側に高く鋭い山状部が重なっている。その他は1つ、または2つの山状部が見られる。	小歯片で本体を欠く。
871~873	牛	右上頬歯3	9C代	#	やや小さくて短い。	咬痕は咬耗のためならかになっている。	主柱、副柱の発達は良好である。	歯根を失う。 R P'は内部エナメル質、R M'は内部エナメル質と前葉エナメル質を失う。
874・875	馬	頬歯2	#	#	短冊状である	咬合やや不整である。	前歯部のエナメル質はやや厚く、前小葉前後の耳状部は短く前縁の耳状部エナメル質は波形を示している。	前小葉前後の耳状部で本体を欠く。
878	牛	下顎歯1	#	#	内部エナメル質の一部で咬合面S字状をなしている。	咬合面耳状部より底部に向かつて傾いている咬耗は進んでいる。	内部エナメル質耳状部薄く底部やや厚い。	内部エナメル質の底部外側面と右半分を失っている。

No	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
880・881	#	下顎前歯2	#	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等により同一個体である確率は高い。	三角錐状或は三角柱状をなして、やや大きい。	咬 耗 は 軽 い。	P <sub>1</sub> は頬面、舌面とも凹凸少なく主柱、側柱が不明瞭である。P <sub>2</sub> は前葉の張り出し少なく薄い。	歯根を欠く。
882	#	頬歯エナメル質の一部	10C代		錐状を示す。	咬 合 面 欠 損。	全体に錐状を示し、上部は細く、歯根部近くは広く、下端は内方に湾曲している。	柱状部大部のエナメル質のみで咬合面附近を失っている。
883	馬	LM <sup>2</sup> 頬面エナメル質の一部	#		薄く中附葉を中心に弧状湾曲を示す。	#	薄く中附葉は細い。後縁の後縁が大きく波打っている。	頬面エナメル質のみで上下を失っている。
884	#	L 1 <sub>1</sub>	9C代		やや太いが全体としてほっそりとした見え湾曲度も少ない。	咬 耗 は 軽 く 咬 合 面 ハート 形 を な す。	唇面に太い1本の縦溝が走っている。	舌面歯根部を欠く。
885	牛	LM <sub>1</sub> 舌面エナメル質	#		甚だ短い。	咬 耗 甚 だ し く 咬 頭 が ほ ぼ 平 ら である。	前後葉とも主柱の発達極めて良好であるが内側の側柱を欠き葉境が巾広い谷になっている。また主柱と外側の側柱との間隔が極めて少ない。	歯根を欠く。
886	馬	左下前臼歯 下次歯	平安時代 9C代		巾の狭い短筒状のエナメル質で舌方向に曲がっている。	不明である。	下次歯は小さくて薄い。	下次歯のエナメル質で歯根部を失っている。
887	牛	LM <sup>2</sup>	10C代		角柱状である。	咬 頭 の 先 端 は 鈍 角 を な している。 咬 耗 は 僅 か に 進 ん で いる。	内外エナメル質は厚い。主柱の発達良好で、舌面各葉とも柱状膨大が顕著である葉境の歯状結節が欠けている。内部エナメル質は大きく凹字状をなしている。	歯根及び舌面の歯状結節を欠いている。
888	馬	RM <sup>2</sup>	9C代		柱状で長く後方にやや傾いている。	ほ ぼ 平 ら である。咬 耗 は 少 ない。	エナメル質全体がやや薄く短筒状にいくつか割れている。内部エナメル質は大きくて力強い。	歯根開放している。歯根部を僅かに欠く。
889	牛	左上前臼歯 舌面	#		小さく、三角形を呈する。	咬 耗 は 可 なり 進 ん で いる。	なだらかなカーブを圍き後面やや直角に屈曲している。	舌面前葉エナメル質のみ。
910・911	#	左下前歯1 前歯1	古墳時代 6C —7C代	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状歯相等により同一個体である確率は高い。	大きくてやや短い。	欠 損 し て いる。	LM <sub>1</sub> の主柱の発達は良好で輪郭鮮明である。	LM <sub>1</sub> は舌面エナメル質で後葉及び歯根を欠く。頬歯は主柱の小歯片である。
912	#	L P <sup>2</sup> の一部	古墳時代 奈良時代 7C —8C代		やや小さい。	咬 耗 は 軽 い。	内部エナメル質はへの字形を示している。	頬面及び後葉並びに歯根を失う。
913	#	左上後臼歯 前葉内部エナメル質	#		大きくて扁平である。	#	扁平で左右に長い。	小葉のみである。短筒タイプ。



№	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特 徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
965・967	#	右上切歯1 右上顎歯1	#	#	やや大きい。	欠損してい て不明。	切歯の内部エナメル質輪は 横に長く、R P <sup>3</sup> 小窩のエナ メル質はやや複雑である両 小窩は大きく、耳状部長い。 咬合部丸く、外方に大きく 反り、歯直後歯である。	切歯内部エ ナメル質輪は咬 合面附近を欠 く。R P <sup>3</sup> 小窩 は外部エナメ ル質及び前小 窩蓋辺を欠 く。
968・969	#	左上顎歯1 下顎顎歯1	#	#	小さくて細か い。	#	淡黄色で光沢を有す。次歯 管状であるが断面先端丸く P <sup>2</sup> を思わす。下顎顎歯の下 次歯または下原歯は平らで 一方が湾曲している。	小歯片であ る。
970	#	左上後臼歯 中附歯	#	#	細くて長い。	咬合面強く 後方に傾き 咬耗やや進 む。	中附歯極めて細く低い。(市 2.4 高1.0)	短冊状であ る。
971	#	L M <sup>3</sup> 前葉 頰面	#	#	細くてやや短 い。	#	茶褐色で光沢あり。前歯は 細いが湾曲は強い。全体が 後方に傾き美しい弧状湾曲 を示す。	中附歯より後 及び歯根を失 う。
972	不明	小歯片	#	#				
973	#	#	#	#				
974	#	#	#	#				
981~990	馬	右下顎歯6 左下顎歯4	平安時代	出土状態、風化 の度合い、大き さ、年令、形状 歯相等により同 一個体である確 率は高い。	太くて著しく 長い。M <sub>1</sub> は薄 い。	咬耗は軽 い。	前臼歯内部エナメル質は大き く強く力強い。下内歯谷著 しく長く、前後に伸び顎歯 は細かく波打つ。後臼歯は 下次歯の発達良好で、下次 歯、下原歯の間は真直に深 く細長く陥没し、その長さは S <sub>2</sub> に達する。	歯根開放す。
992~995	#	左下顎歯4	中世~近代	#	長四角柱状で 太く長く力強 い。L M <sub>1</sub> は三 角柱状で美しく 弧状湾曲を示 す。	咬耗は極め て軽い。	下内歯は大きく左右に伸び 下原隆起の発達と下後附歯 の後展が目立っている。	外部セメント 質の遺残は比 較的良好で良 く歯根を保っ ている。
996	#	R P <sub>2</sub>	近代 19C後半 ~20C	#	長四角柱状で 太くて力強 い。	#	下後歯、下後附歯は大きく 豊門で、下内歯谷は左右に 長く伸びている。内部エナ メル質は大きく、力強さに 満ちている。	下原歯及び下 次隆起と下内 歯の一部を欠 いている。歯 根のすべてを 欠いている。
997~1003	#	右上顎歯4 左上顎歯3	不明	出土状態、風化 の度合い、大き さ、年令、形状 歯相等により同 一個体である確 率は高い。	柱状で太く、 M <sup>2</sup> は美しい 弧状湾曲を示 す。	咬耗はやや進 む。	上下各歯の発達良好で内部 エナメル質は複雑で大きい 特に前小窩、原歯後谷は大き い。前・後小窩の内側は 細い縮毛状歯形を示す。 馬歯は細く長い。	全面に外部セ メント質やや 多く遺残す。 歯根部を失 う。
1004 ~1009	#	左上顎歯3 右上顎歯3	不明	#	短くて大窩薄 い。	磨耗開始直 後である。	この馬は異常発育歯を有し ているが上顎左右前臼歯の みである。いずれも磨耗開 始直後の歯をしており、外 部、内部エナメル質とも極 めて薄い。また歯冠長がある のに歯冠巾著しく少なく 各歯はしなびたように発育 が悪い。粗面タイプで咬耗 が進んでいないのに短い。	歯根開放して いる。

## 第3節 観察について

No	種類	歯の部位	時 代	個体の同一性	特 徴		欠損状態 その他	
					大きさ及び 全体の形	咬耗状態 エナメル質の特徴		
1011 ～1018	#	左下前歯5	#	#	四角柱状である。	咬耗は余り進んでいない。	内外のエナメル質はやや厚く、内部象牙質は硬くエナメル様に光っている。各歯の発達良好で大きくて力強い。特に下内齧谷、下後齧谷、下原齧、下次齧は大きく、entostylidの発達は良好である。	全面に外部セメント質が点々と遺残し、歯根部まで良く原形を保っている。
1020 ～1026	#	左下切歯2 右上前歯1 左上前歯4	#	#	小さくてやや短い。	咬耗やや進んでいる。	切歯エナメル質はやや厚く、I <sub>1</sub> は唇側に太い。本の縦溝が走っている。前歯の前・中附歯は小さくて細い。内部エナメル質は単純である。	外部セメント質路々に遺残している。
1027 ・1028	#	右上前歯2	#	#	短冊状である。	咬耗やや進む。	前附歯細く小さい。	前歯及び前附歯のみである。
1029 ・1030	#	左上後臼歯2	不明	#	やや細くて短く、LM <sup>2</sup> は美しい弧状湾曲を示している。	咬耗やや進んでいる。	内部エナメル質は単純で小窩の耳状部はのっぺりしている。LM <sup>2</sup> の後小窩後側エナメル質は深く陥入す。	外部セメント質全面に点々として遺残し歯根を失う。
1031	#	左上前歯前歯	#	#	長い六角形をしている。	不明である。	前附歯はやや発達し、前歯の反りは強い。	小歯片である。
1032	#	右上前歯中附歯	#	#	短冊状でやや短い。	咬耗やや進む。	中附歯の発達は良好で、後歯の下半分に浅い縦溝が走っている。	#
1033	#	右上前歯小窩	#	#	やや細くて短い。	#	小窩は単純で凹字状を示している。	#
1034	#	右上前歯後小窩	#	#	やや太くて短い。	#	内部エナメル質は単純で両耳部は短い。	#
1035	#	右上前歯原齧後谷	#	#	大きい。	#	大きくて力強い。	#
1036	#	#	#	#	やや小さい。	#	やや小さく原齧は後に長く張り出している。	#
1037	#	#	#	#	#	#	馬歯は細く長い。	#
1038	#	左上前臼歯小窩	#	#	扁平でやや長い。	咬耗やや少ない。	両小窩は横に長く、両耳部は長く歯根に張り出している。	#
1039	#	左上前臼歯前歯	#	#	やや太くて短い。	咬耗やや進む。	中附歯大きく、太い。本の縦溝が走っている。	#
1040	#	左上前歯前歯	#	#	やや太くて、やや長い。	#	中附歯やや細く、前歯の反りやや強い。	#
1041	#	#	#	#	やや長い。	#	前附歯著しく小さくて細い。	#
1042	#	左上前歯前附歯	不明	#	細くてやや短い。	咬耗やや進む。	前附歯著しく細くて小さい。	#
1043	#	LM <sup>2</sup> 中附歯	#	#	平たくて短い。	咬合面後方に突き咬耗の度合いは不明である。	中附歯近く山形をなす。	#
1044	#	左上前歯前小窩	#	#	小さくて細い。	咬耗やや進んでいる。	耳状部細かくて深い輪状凹形を示す。	#
1045	#	左上前歯後歯	#	#	やや太くて短い。	#	細い縦溝の隆起が走っている。	#
1046	#	左上前歯後歯舌面	#	#	太くて短い。	#	原齧後谷は大きく馬歯は細くて長い。	#

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	歯の部位	時代	個体の同一性	特徴			欠損状態 その他
					大きさ及び 全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
1047	#	左上顎歯後側	#		短い。	#	2本の浅い縦溝が走っている。	外部セメント質かなり遺残す。小歯片である。
1048	#	左上顎歯次歯	#		扁平でやや短い。	#	原歯後谷はなだらかに再歯し、馬鬃は細くて長い。	小歯片である。
1049	#	左上顎歯舌面	#		三角柱状を示し、やや長い。	咬耗は軽い。	全体的に大きく輪郭鮮明で力強い。原歯後谷の中央線線状に軽く隆起し、馬鬃は細くて長い。原歯は三角形をなし、歯辺両端はとがっている。	頬歯舌側の一部である。
1050	#	左上顎歯原歯	#		扁平でやや短い。	咬合面欠損している。	原歯舌面は極めて平らで、小さく波打っており、後端は鋭角に屈折している。	小歯片である。
1051	#	#	#		細い三角柱状をなし、やや短い。	咬耗は進んでいる。	舌面側は軽く波打っている。頬面側はへの字形に隆起し、後端はとがっている。	歯根欠損している。
1052	#	左顎歯下後側	不明		大きい。	咬耗はやや進んでいる。	下後歯谷及び下後歯は大きくて力強い。	歯根を欠いている。
1053	#	R P <sub>3</sub> 前葉			大きくてやや長い。	咬耗は軽い。	内部エナメル質は大きくて力強い。	頬面に外部セメント質や多く遺残す。

附表6 遺存体の形態的特徴(骨)

No	種 類	骨の部位	時 代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他	
6, 12~14	牛	左右下顎体 臼歯部2 右顎髁骨1 右上胸骨1	古墳時代 7C後半	#	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相から同一個体である確率は高い。	全体として淡黄褐色で保存処理によって緻密骨等比較的良く遺存している。左右下顎体臼歯部は歯齧が孤立し、骨体は薄い。右上胸骨々体部は前後に大きく大実薄く、上腕筋溝は平らで広い。肘関節窩は大きくて深い。遠位部帯帯は小さく前方への張り出しは少ない。右前胸骨はやや扁平で、骨頭は広い。	No2~No12と同一個体。
25・26	#	上顎骨1 顎蓋骨1	#	#	上顎骨は比較的小さい。右側鼻骨はなだらかに突出し、右上顎骨は前方が急に細くなっている。舌側はなだらかなドーム状を呈し、前方は僅かに上方に湾曲している。前歯骨はほぼ平らで広く僅かに中央部が高くなっている。左側は側頭骨がなだらかな湾曲をみせている。	No16~No25と同一個体。	
27~31	馬	左腕骨2 上腕骨2 肢骨片1	# 6C後半 —7C前半	#	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相から同一個体である確率は高い。	灰白色で風化により表面粗ざうで極めて脆い。腕骨の背面は断面半月状で丸く、掌面は殆ど平らである。遠位部は中央の突起が認められるが関節溝は不明瞭である。	腕骨右側及び上下関節部を失っている。上腕骨は筋溝部及び遠位部の小骨片である。
32	不明	小骨片	奈良時代 8C	#			
33	#	#	#	#			
34	#	#	#	#			
47	馬	上下顎骨小骨片多数	平安時代 9C後半	No35—No46と同一個体。	細かい多数の小骨片。		
48~51	#	右坐骨体1 小骨片3	# 9C—10C	#	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相から同一個体である確率は高い。	全般的に松筒状にひび割れている。坐骨体は細く坐骨切痕は美しい弧を画している。	坐骨棘下より前側及び坐骨切痕基部より下を失う。
55	不明	小骨片	# 10C	#			
56・57	馬	左右後眼顆 2	中世 14C後半	#	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相から同一個体である確率は高い。	緻密骨表面は粗ざうである。大孔側はなだらかに凹み美しい湾曲を示している。	No58~No66と同一個体。前後と外側端を失う。
75	牛	右下顎体臼歯部内側	#	#	淡褐色で緻密骨は光沢を帯びて硬く歯槽縁がそのまま残っている。下顎体は外側に張り出しほぼ平行に多数のひび割れが走っている。歯槽には歯根痕が鮮明に残っている。	前後及び下半分を失っている。	
76	不明	小骨片	#	#			
77	#	#	#	#			
78	馬	左上腕骨々体部	中世—近代 15C—19C	#	全体としてやや細く、骨体断面は扇形を示している。前面は上腕骨棘が頂をなし、上腕筋溝は美しい湾曲を示している。内側面は大円筋粗面は低くやや鮮明さを欠いている。	遠位部、遠位部を失う。	
79	#	左上腕骨遠位部内側筋縁	#	#	骨棘筋縁は美しい弧状湾曲を示している。前面は深く凹み鉤突部への移行部を現している。	骨体部より帯帯部への移行部の小骨片。	
80	#	左大腿骨外側部	#	#	滑車面は広く中央に滑車溝を認む。外側面に僅かに筋窩が認められる。	滑車下面と外側面に僅かな緻密骨。	
81	#	左脛骨々体近位部	#	#	近位部の断面は正三角形で、前面には脛骨棘が突出し、その先端は粗面状をなしている。後面には上外側より下内側に向かって5本の筋線が走っている。	筋部及び近位部の下を失っている。	

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他	
82	#	左大腿骨遠位部後面内側	#		小転子下縁縁後側に傾く。後面は軽くえぐられている。	小骨片である。	
83	#	左大腿骨々体部内側	#		遠位部後面は後に湾曲し、栄養孔下5cmに小粗面が突出している。	栄養孔を含んだ遠位部内側の小骨片。	
84	#	左大腿骨々体部	#		著しく細くて小さい。骨体は前後に細長く、前面は丸く後面は近位部が平らになっている。栄養孔下5cmに粗面状の小さな突起あり。	近位部及び中央部より下を失う。	
85	#	左大腿骨頭	#		骨頭は球形で骨頭窩が深く開孔している。	骨頭のみ。	
86	#	#	#		球形で側面がえぐられて窩状をなしている。	#	
87	#	#	#		骨頭表面は丸く球状をなしている。	#	
88	#	右脛骨外側	#		美しいこの傘状の一部をなしている。		
89	人	右脛骨々体部	#		断面長三角形を示している。後面平らで、一方の側面に小さな栄養孔が開孔している。	近位部、遠位部を失っている。	
91	馬	左橈骨々体部	#		掌面は上下ともやや後方に反り気味で、両側やや高く中央部やや低い。外側部に尺骨附着痕が認められる。	近位部、遠位部及び背面を失っている。	
92	#	右脛骨々体部後面	#		表面は凹み海綿骨が丸く附着し、関節頭を思わせる。	小骨片。	
93	#	右脛骨近位端後面	#			#	
94	不明	肢骨片	#		巾1cmの細長い肢骨片、太い肢骨の一部。		
95	#	#	#				
96	#	小骨片	#				
97	#	#	#				
101	#	#	古墳時代7C				
102	#	#	#				
104	馬	左脛骨々体部内側	古墳時代—平安時代6C—12C		風化により極めて脆い。後面は平らで前面は美しい半月状湾曲を示す。	外側部及び上下を失っている。	
106	不明	小骨片	平安時代				
108—120	馬	左後肢骨13	中世14C後半—16C前半		出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相により同一個体である。大腿骨の骨頭の頭部は丸く、頭窩は一部欠けているがやや大きくて深い。	各部の骨は全般的に小さい。鹿密骨はひび割れているが硬い。中足骨々体部の断面は丸く、近位端近くには中足骨粗面が軽く隆起している。距骨は骨体後面の左上外側より右下内側にかけて斜めに5本の膝窩筋線が走り所々に棘状に突出している。大脛骨の骨頭の頭部は丸く、頭窩は一部欠けているがやや大きくて深い。	中足骨は骨体中央部より下、脛骨は後面全体と近位部外側面及び遠位部の内側面を、大脛骨は骨体部の中央より遠位部及び大転子、小転子を失っている。
121—136	#	下脛骨2 後肢骨2 肢骨片6 小骨片6	#		淡黄褐色で風化により脆くなっているけれども鹿密骨は比較的しっかりしていてやや光沢を帯びている。左脛骨々体近位部、左中足骨々体部の骨組織はやや厚い。右下脛骨内外側に残された歯冠及び歯根痕はやや小さいが歯根分岐部痕は盛り上がり、よく発達した歯根形成が認められ、社会以上のものである。	左脛骨は近位端及び中央より下を失い、左中足骨は近位部及び遠位端を失っている。	
139	#	小骨片	#			№137・№138と同一個体。	
140・141	#	前肢骨1 後肢骨1	#		出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相により同一個体である確率が高い。	右脛骨々体部の後面の上半分は右上より左下にかけて筋線が走っている。左橈骨は径が小さく大変扁平な感じで、手根関節部の腕溝は浅く、それをささむ突起は不明瞭である。	右脛骨は前面と、近位部及び遠位部を失っている。左橈骨は中央部より上を失っている。
144	不明	小骨片	#				
147	#	#	不明				
149	#	肢骨片	平安時代		やや大きい肢骨の一片であり骨組織は厚い。断面半円形を示す。橈骨の感じであるが小さな栄養孔が認められ橈骨と一致しない。内部海綿骨は関節の近くであることを示している。	風化により表面松樹状である。	



## 第3節 観察について

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
150~166	馬	前肢骨1 後肢骨16	中世 14C後半 —15C後半	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相により同一個体である確率が高い。	淡黄褐色で緻密骨質であるが僅かに光沢を失っている。左中手骨は保存状態良好で近位部に中手骨粗面が僅かに残っている。掌面には内外小中手骨附屬部が凹み、表面に細かい凹凸を認む。左寛結節は外側面は平らで中央部より後下半部僅かに低くなっている。寛骨臼は広く美しい凹面を示し後に坐骨体の一部が附着している。	左中手骨は近位部、関節部を失っている。左寛結節は後半と内側を失い、坐骨体は寛骨臼の下半及び前後を欠く。
170	兎	頭蓋の一部	# 15C後半 —16C前半	No171—No178と同一個体。	淡黄褐色で緻密骨は半ば光沢を保っている。左右側頭骨臼歯部は美しい湾曲を示し、左右とも頬骨側頭突起基部が附着している。	外側蓋底の一部のみ
177~179	#	右肋骨3	#	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相により同一個体である確率が高い。	内側はやや太く外側はやや薄い。肋骨結節の発達は悪く肋骨体の両曲は増大であるが肋骨肉の存在は認めにくい。	肋骨の頭頸部である。
180~185	鹿	後肢骨5 前肢骨1	#	#	淡黄褐色で緻密骨はやや光沢を有す。踵骨はやや太くて短い。距骨の距骨体は2個の滑車が進むように見える。左中心足根骨はL字状で、第2、第3足根骨を関節する。	多少の欠損はあるがほぼ完形である。
186・187	小鹿虫類	左・右肩甲骨	#	#	淡黄褐色で極めて薄い。緻密骨は光沢を有している。後縁はなごなた状に後方に反り、前縁は大きく波打っている。肩甲骨は短くて低い。関節面は平らで細く、関節上結節の発達は明瞭である。	右肩甲骨中央より上を失う。左肩甲骨は肩甲骨の上部より前縁の一部を欠く。
188~191	馬	右前肢骨4	# 15C前半	#	灰白色で極めて脆い。断面は半月状である。背面には粗面状に細かい凹凸が認められる。	骨体中央部より下及び関節部並びに掌面を失う。
192	兎	左側頭蓋の一部	# 15C後半 —16C前半	#	淡黄褐色で緻密骨は半ば光沢を保っている。側頭骨臼歯部は美しい湾曲を示している。齒槽は頬骨が全部脱落している。	左側外側蓋底のみ遺残す。
193	#	右側頭蓋の一部	#	#	#	右側外側蓋底のみ遺残す。
194	#	頭頂骨	#	#	淡黄褐色で薄く中央部に向かって穹窿をなしている。内面は帯からか凹凸が少ない。	前頭骨を失っている。
195	#	#	#	#	#	#
196	#	左頭頂骨	#	#	表面に多数の小さな孔が開いており両側縁は極めて細かな矢状縫合線が通っている。外前方より内後方に向かって發線状のものが走っている。	10×18の小骨片。
197	#	右頭頂骨	#	#	#	9×9の小骨片。
205	兎	右側頭骨鼓室部	# 15C後半 —16C前半	#	淡黄褐色で緻密骨は硬くやや光沢を有している。鼓室部に比し外耳孔及び骨胞の大きいことが目立っている。錘体は短く横に広がりが鼓室部の1/3を占めている。窓突起は太いがやや短く前方に伸び外耳孔には大きな骨胞が附着している。	ほぼ完形を保っている。
206	#	#	#	#	#	#
207	#	#	#	#	#	#
208	#	左側頭骨鼓室部	#	#	#	#
209	#	#	#	#	#	#
210	#	#	#	#	#	#
211	#	#	#	#	#	#
212	#	胸椎	#	#	小さな椎体上に棘突起が長く斜後上方に伸びている。椎体に比し椎孔は大きく、長筒円形を示している。	#
213	#	#	#	#	#	#
214	#	#	#	#	#	#
215	#	左上腕骨々体部	#	#	淡黄褐色で緻密骨はやや光沢を有す。管状小骨片で小さい割りには骨組織厚い。(1.6)新面朝円形で一辺は平たい。	近位部、遠位部を失っている。

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No.	種別	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
217	不明	小骨片	# 15C前半			
218	#	#	#			
219	#	#	# 14C後半 —15C後半			
230	馬	左下顎骨の一部	中世—近代	No.220—No.229が 紐立している。	細く長く、また薄い。とくに下顎内の張り出し少 なく全体を細く見せている。翼突筋窩は広くて深 い。	筋突起及び関節突起 を失う。
233	#	右下顎体臼 歯部	#	No.231・No.232が 紐立している。	風化により著しく脆くなっている。臼歯部下縁は 齧骨片になっている。	殆ど齧密骨を失い粗 ぞうである。
234—236	#	左脛骨の一部 3	#	出土状態、風化 の度合い、大き き、年令、形状 色沢、骨相によ り同一個体であ る確率が高い	やや太い管状骨の一部をなし、骨組織は厚い。後 面は平らで左外側より右内側にかけて斜めに数本 の筋線が走っている。	左脛骨の後面及び後 面の一部分の小骨片が ある。
263—268	牛	右下顎骨4 左前肢骨1 小骨片1	平安時代 10C	#	下顎骨臼歯部外側面の3個の表面にある齧密骨の 細かいひび割れは強い湾曲を示し、内側の歯根痕 と共に夫々の位置(R P <sub>1</sub> , R M <sub>1</sub> , R M <sub>2</sub> )を現して いる。臼歯部内側面の一個は齧密骨ひび割れの湾 曲は少なく、内面の歯根痕は細い。(P <sub>1</sub> より後であ るが前臼歯のもの)	拇指頭大の小骨片。
333	#	右上腕骨々 体部	# 後半	#	灰白色で軽い。全体として大変小さい。骨体の新 面は長卵形形である。上腕骨後明瞭で上腕筋溝は 広くて美しい湾曲を示している。内側面下部前縁 に小さな栄養孔を認む。	骨体の上部、下部及 び後端を失う。
339	不明	小骨片	# 10C			
340	#	#	# 9C末 —10C			
343	#	小趾骨片	平安時代 —中世		直径2cm程の小さな肢骨の一部である。淡黄褐色 で齧密骨はしっかりしている。小さな骨片なのに 重い。海綿骨は細かい。	最大長17.9 重1.1
369—376	牛	前肢骨3 後肢骨1 肢骨片4	中世 14C後半	出土状態、風化 の度合い、大き き、年令、形状 色沢、骨相によ り同一個体であ る確率が高い。	風化著しく土壌と共にワックス処理をほどこし崩 壊を防いでいる。左上腕骨遠位部は輪郭で外側部 の増車部を判別し得るのみである。腕骨は一端に 行くに従って太くなっている。背面は半月形をし ており内側の湾曲は強い。右中足骨の断面は四角 く遠位部は多少太くなっている。	上腕骨は骨体内側より 斜めに外側部まで 残っている。骨組織 がくずれているのに 増車骨組織が浮かび 上がり幼骨であるこ とを示している。
377—381	鹿	左右肩甲骨 の一部5	#	#	灰白色で齧密骨の表面は平滑で緻密である。関節 窩以外の骨は薄く、後角部の7.1を除くと薄くし ては1.9—2.3である。後角部高く、内凹は凹んで いる。内面背縁部に棘状の凹部を認める。関節面は 小さい。	頸部後角、背縁後部 関節窩等の小骨片で ある。
382—386	馬	右後肢骨5	#	#	骨体は細くしゃべり感である。齧密骨は硬く 距骨表面は光沢をもっている。右大腿骨々体前 面は丸く、断面はアーチ状を呈しており、後面は平 滑で広い。遠位部関節面の内側増車面は広くて大 きい。右脛骨の骨体前面上部は断面アーチ形をし ており下部は平滑である。後面は外側上部より内 側下部に向かって8本の筋線が斜めに走っている 。	右大腿骨は第3距子 小転子及び骨体の上 下を失っている。右 大腿骨の遠位部関節 面は骨端より脱落し ている。右脛骨は近 位部を失っている。 右脛骨は後面及び外 側面を失っている。

第3節 観察について

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
387~389	#	右前肢骨1 右後肢骨2	#	#	淡褐色で緻密骨は硬い。右上腕骨々々体部前面は内側に斜めに上腕骨が走っており腕骨窩は浅い。右腕骨々々体部後面は斜めに3本の筋線が走り、上部に栄養孔が開孔している。右中足骨は後面に内側小中足骨窩が見られる。	右上腕骨々々体部前面は骨体後面と大臼節前面より下と2つの滑車を失っている。右腕骨々々体部後面は栄養孔周囲の小骨片である。右中足骨は骨体部の上下を失っている。
390~392	#	頰蓋2 左下顎骨1	#	#	左後頰骨の一部は風化により表面粗ざうで極めて脆い。左下顎体内側は表面のひび割れが弧状に配列し、裏面には斜後方に向かう歯根板を認む。	骨棘、後頰顆の外縁の一部及び左下顎体内側の小骨片である。
398	牛	右下顎体臼歯部内側	#	No.396 No.397と同一個体。	骨組織は薄い。頬面は平滑であり、内面には歯冠痕が残っているが、R、M <sub>2</sub> 中葉、後葉の歯冠、歯頸に一致する。	右下顎体臼歯部内側の小骨片である。
399~402	馬	右前肢骨1 右後肢骨1 散骨片	#	#	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相によりほぼ平滑で上部は外上方より内下方にかけて5本の筋線が走っている。	大腸骨上窩は顆上窩の下半分の小骨片である。脛骨々々体部は骨体外側部、近位部、遠位部を失っている。
406・407	#	左腕骨1 右下顎骨1	#	#	腕骨の下部は平滑で、上部は強い反りを見せており頬面全体に斜下に向かって脆いひびが入っている。舌面は割が前後の方向に横切っている。右下顎体内側上縁は、舌面は平らであるが上縁はやや軽く反っている。	頬骨頭後下部の小骨片と、下顎枝内側上縁の小骨片である。
408・409	#	左腕骨々々体部1 散骨片1	#	#	灰白色を呈し小骨片として細い。背面は管状をなし、遠位部内側面は軽い粗面状の凹凸を認む。掌面の近位部は平らで内側縁はやや堤状に高く起っている。遠位部外側に尺骨の附着した痕を認む。	腕骨は外側部、近位部及び遠位部を失っている。
412・413	牛	下顎骨2	#	#	緻密骨は光沢を有して硬い感じであるが骨体は薄い。上縁は平らであるが上縁に沿って隆起部が見られるが下部は平滑である。内面は歯根板が認められP <sub>1</sub> 、M <sub>1</sub> 、M <sub>2</sub> の歯根に符号する。	P <sub>1</sub> -M <sub>2</sub> 間の下顎体臼歯部内側面が前後及び下部を失っている。
418・419	馬	左前肢骨1 右後肢骨1	#	#	左上腕骨は骨体は断面前円形に近い。上腕筋溝は小さいが平らで広く骨後には明瞭である。滑車は小さく鋭尖窩は深い。右大腸骨は細くてきしゃん感である。骨体は前後に長く、前面上部に骨後を認めるが下半部は平らである。後面の上縁に骨後を認めるが下半部は平らである。後面の上縁には大きな顆上窩が存在する。	上腕骨は三角筋粗面より結節部にかけて斜下に近位部を失い滑車外側を失っている。大腸骨は第3転子及び小転子より上の近位部と滑車部を失っている。
420・421	#	左下顎枝上縁2	#	#	緻密骨のまめは細く硬い感じである。上縁はなかなか弧を描いている。頬面は平らで前中は僅かに舌面に傾いている。No.421の頬面には湾曲したひび割れを認める。	小骨片である。
422	#	左肩甲骨関節窩	#	#	淡黄褐色で小さい。関節窩丸く、窩切痕が僅か見られる。窩切痕の外側凹が上がっている。	関節窩の小骨片。
423	#	左肩甲頸外側後縁	#	#	外側面平滑であり、後縁は粗面状凹凸が認められる。遠位部隆起し関節窩につながる。	頸外側の関節窩附近である。
424	#	右肩甲頸外側後縁	#	#	#	#
425	#	左肩甲頸後縁	#	#	後縁丸みを帯び1本の太い血管切痕が斜めに走っている。後縁より外側面への移行部は湾曲している。	後縁の血管切痕附近の小骨片。
426	#	左上腕骨顆	#	#	内側の滑車は比較的大きく美しい球面を呈している。腕骨窩はやや深く広く、後面の肘窩は深く広く、	腕骨窩より近位部及び外側滑車、外側面を欠いている。
427	#	#	#	#	内外滑車の溝は広く、明瞭であり、後面の肘窩は深く広く、	腕骨窩より近位部及び内側滑車外側面を欠いている。

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特徴	欠損状態その他
428	#	左上胸骨々体内側前縁	#		骨片の上端には大円筋粗面が隆起し下端に向かって軽い凹凸が続いている。下端近くに栄養孔が開孔している。	粗面より栄養孔にかけて小さな小骨片である。
429	#	#	#		上端には大円筋粗面の下端が認められ下端に向かって軽い凹凸が続いている。下端近くに栄養孔が開孔している。	#
430	#	左上胸骨外側前縁	#		前縁は美しい湾曲を示し、前面骨車移行部は骨質密につながる溝の端が現れている。	前縁骨車移行部の小骨片。
431	#	右大腿骨内側小転子下部	#		骨組織は厚く縦にし字型を示しており、下端は丸く上縁は角度が強い。下端近くにやや大きな栄養孔が開孔する。	小転子の下の小骨片である。
432	#	右大腿骨顆上窩	#		灰白色で表面は粗ざらで、内面は細かい海綿骨が球状になっている。顆状窩は大きくて深い。	顆上窩を含む小骨片内面海綿骨下向きに交差する。
433	#	左大腿骨内側内個	#		頭骨半球状を呈し、その下に僅かに骨体部への移行部がついている。	大腿骨内側の小骨片である。
434	#	左大腿骨内側骨車移行部	#		灰白色で骨組織表面は厚い。縦直でねっとりしている。大型鉄骨々体部の辺縁でL型を示して湾曲し広い一辺は平帯である。	移行部の小骨片。
435	#	右脛骨遠位端	#		外側ラセン溝はやや深く、内側ラセン溝は浅くやや広い。	脛骨ラセン部のみである。
436	#	右尺骨頭	#		灰白色で極めて緻密で扁平である。内面は平帯である。全体の形は刀の柄頭のように、薄くて断面長楕円形である。近位端にはひょうたんを逆にしたような窩がある。	尺骨頭のみである。
440	#	左上胸骨々部外側後縁	#		上腕筋溝は美しい湾曲を示している。後縁に肘頭窩の上縁が認められる。	外側後縁で前縁及び上下を欠いている。
441	#	左中手骨背面	#		断面ゆるやかな半球状を示しているが近位部僅かに広く、前方に軽く反っている。遠位部に近づくにつれて細くなっている。	背面のみで上下を欠いている。
442	#	右大腿骨頭	#		関節面は大きく丸く、骨体移行部は強く湾曲している。	骨頭の一部のみである。
443	#	左大腿骨々体部内側	#		近位部前、後縁湾曲し小転子の基部が認められ、その下方に栄養孔が開孔している。遠位部は平らで広い。	近位部、遠位部、外側面を欠いている。
444	#	左大腿骨々体部前面	#		前面の近位端の断面はアーチ状を示しており、遠位部は平らになっている。近位部外側面は広がるように横に湾曲し、第3転子の基部を示している外側下部は顆上窩の前縁が認められる。	後面及び近位部、遠位部を欠いている。
445	#	右大腿骨々体部外側	#		前面はなだらかに湾曲し、遠位端に管状部の右後縁が認められる。顆上窩の前縁は鋭角をなし窪は深い。	顆上窩附近の小骨片である。
446	#	左大腿骨顆上窩	#		顆上窩は後上方より前下方に傾き広く深い。	顆上窩の小骨片である。
447	#	左大腿骨遠位部内側後端	#		遠位部は平らで広く、後縁が丸味を帯び後方に湾曲している。遠位端の海綿骨は厚い。	遠位部内側後端の小骨片である。
448	#	左脛骨ラセン	#		関節面はほぼ平らで、関節面の内側部にはラセン溝が認められるが外側部は部分的に緻密骨が脱落しラセン溝は不明瞭である。	脛骨遠位端、関節部のみである。
449	#	右脛骨遠位部後面内側	#		管状骨の一辺であるが後面内側近くを種縁がクランプを圍いて走り、後部中央部がやや凹み関節部近くであることを示している。	遠位関節部に近い小骨片である。
450	牛	左腕骨々体近位部	#		大変太く、大きくて重い。骨体断面は平たい半月状を示し、後面は平らである。後骨頭窩は広く凹面を形成している。掌面外側縁に尺骨附骨痕あり。	骨体中央より下及び近位端の左端を欠いている。
451	#	左脛骨々体部後面外側	#		灰白色で脆い。後面の上部はやや丸味をおびているが下部は平帯である。外縁は鈍角をなし外側面に直なっている。	後面外縁の細長い骨片である。
452	#	左中足骨々体部	#		近位部の断面は四角で下部は丸味を帯びている。近位部、遠位部及び背面は欠損しているが右側に縦溝の内側縁を認む。	近位部、遠位部及び背面を欠いている。

## 第3節 観察について

No.	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特徴	欠損状態その他
453	馬	右橋骨々体 近位部内側	#		近位部わずかに前方に湾曲し、遠位部背面は平らになっている。	近位端、遠位部及び外側面を失っている。
454	#	右中手骨々 体部背面	#		小さいが重くて厚い。緻密骨充訳があって堅い。骨体断面はゆるやかな半円形を示している。	近位部に近い骨体部背面の一部である。
455	#	右中手骨々 体部	#		灰白色で風化のため軽いが骨組織は厚い。遠位端近くより骨組織は急に薄くなり関節部の近いことを示している。	近位部及び遠位端を失っている。
456	#	左大趾骨内 側後縁	#		灰白色で軽い。内側部は平らで直角に後面に移行している。遠位部の後面との境に栄養孔が開口している。遠位部に小さなクレーター状の粗面が認められる。	大趾骨内側後縁の小骨片である。
457	#	右距骨々体 体部	#		淡黄褐色で骨組織は中程度の厚みをもち、やや重い。骨体部は断面三角形に近く後面は平らで広い後面の中程より上部には外側より内側下方に向けて数本の筋線が走っている。	近位部及び遠位部並びに筋線を失っている。
458	#	右距骨々体 部内側	#		灰白色で骨組織はやや厚いが軽い。内側面断面は丸く、後面はやや平らで外側より内側下方に向かって1本の筋線が走っている。	骨体部内側面の小骨片である。
459	#	右中足骨	#		骨体部の断面はほぼ円形を示し、僅かに後面が平らである。近位関節部は広く、後部が欠けている。後面近位端より7cm下中央に栄養孔が開孔している。	骨体中央部より下半分及び近位部後面を失っている。
460	#	右中足骨前 面	#		淡黄褐色で骨組織は厚いが風化のため軽い。近位端の中央より外側にかけてやや大きな粗面が認められる。	遠位部及び後面を失っている。
461	#	左距骨骨体 部内側	#		淡黄褐色で骨組織は厚くて重い。緻密骨は堅く充訳を有している。近位部には外側より内側下方にかけて2本の太い筋線が走っている。	近位部、遠位部及び左半分を失っている。
462	#	中手骨々体 部背面	#		灰白色で骨組織は厚い。背面断面はゆるやかな半円形を示している。	骨体部背面の小骨片である。
463	#	左橈骨々体 部	#		淡黄褐色で硬く緻密骨表面は光沢を有している。全体として細く長い感じであるが、近位部、遠位部は断面に近づくにつれて太くなっており関節部の近いことを示している。遠位端背面中央の突起は不明瞭であるが内側の溝はやや深く奇異な感じを受ける。	近位部、遠位部の関節部を失っている。
465	#	左下顎体臼 歯部内側	#		舌側緻密骨表面は極めて粗ざうで湾曲した多数のひび割れが平行して走っており、頬側には歯冠及び歯根分枝部の痕が残っている。	下顎体と臼歯部の境附近の一小骨片である。
466	#	左肩甲骨後 縁	#		風化のため極めて堅い。全体として大きく起伏に富んでいる。輪郭極めて鮮明であり、血管走路、筋線、線下窩、栄養孔等太くて、大きくて、深く筋線の発達を思わせるものがある。	肩甲骨後縁及びその前半分を失っている。
467	#	左大趾骨々 体部後面	#		大きくて骨組織は厚くて硬い。上部は平らで、下部は湾曲し、外側の面上は広くて浅い。その前方に大きな粗面様凹凸が認められる。	大趾骨後面で第3転子より下部で関節部を失っている。
468	#	右大趾骨々 体部後面内 側	#		骨片はなだらかに湾曲し中央に栄養孔が開孔している。	栄養孔を中心とした小骨片である。
469	#	右大趾骨前 前面	#		骨面より骨体への移行は凹面状の美しい湾曲を示し、表面に低い数本の線が走っている。	大趾骨前下部附近の小骨片である。
470	#	左距骨	#		灰白色で表面風化のため極めて粗ざうである。全体としてはやや大きい。2本の滑車が平行して走り滑車溝は深い。	外側滑車の一部及び前側を失っている。
471	馬	左上腕骨々 体部	#		太くて緻密骨表面極めて緻密でねっとりした感じである。上腕骨後縁は鋭く突出し、上腕筋溝は極めて広い。内側面上部には大円筋粗面が突出している。	近位部、遠位部を失っている。
472	#	左大趾骨後 面外側	#		近位部は平番で広く遠位部中央はやや凹んでいる。	大趾骨後面のやや長い骨片である。

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
473	#	左腕骨前面内側	#		遠位端にすくにつれて太さを増し関節部の近いことを示している。遠位端前面の突起は低く溝は浅い。	近位部及び遠位関節面並びに後面を失っている。
474	#	左上腕骨々体部	#		骨組織は比較的厚くてやや重い。上腕骨棘は鋭角を示し、上腕筋溝は広くて平滑で美しい湾曲を示している。掌面遠位部に肘窩窩の上部が見えている。	近位部、遠位部及び外側上顆を失っている。
475	#	右上腕骨々体部	#		骨体はやや薄くて細く巾が少ない。上腕骨棘明瞭で上腕筋溝は広く平滑である。骨体下部に胸突起が認められる。内側遠位部は平らで下方前縁に栄養孔開孔し、上部に大円筋粗面が認められる。	三角筋粗面より上部及び滑車より下部を失っている。
476	#	#	#		骨体は小さく巾も少ないが、骨組織は厚くて重い。上腕骨棘及び上腕筋溝明瞭であるが胸突起は浅い。内側前縁の栄養孔は著しく小さく、大円筋粗面も小さい。	#
477	#	#	#		骨体は小さく巾も少ないが骨組織は厚くやや重い。上腕骨棘及び上腕筋溝は明瞭である。内側前縁に小さな栄養孔が開孔している。	近位部、遠位部及び掌面を失っている。
478	#	左大腸骨々体部	#		骨体はやや細くて軽い。骨体上部前面は丸く下部は平らである。小転子への湾曲は強く顆上窩は大きくてやや深い。後面は平らで中央内側部に栄養孔開孔す。	近位部、遠位部及び前面上部小転子を失っている。
479	#	左大腸骨遠位部内側前縁	#		骨体はやや厚く大きき割合に重い。前縁は丸く下部は平滑である。この骨には反りが全くない。	遠位部内側の小骨片である。
480	#	左腕骨々体部	#		骨体はやや細いが骨組織は厚く僅かに重い。前面上部断面は半月状を示し、遠位部は平らになっている。後面上部には4本の筋線が斜下方に向かって走っている。遠位関節面にはラセン溝が僅かに残っている。	近位部及び遠位部端外側を失っている。
481	#	鹿 右第11肋骨	#		肋骨体は断面やや丸味を帯びていてなだらかに肋骨頭に移行している。肋骨結節は肋骨骨頭に比較してやや大きい。	肋骨骨角より下を失っている。
482	#	右肩甲骨前縁	#		前縁僅かに丸味を帯びていて外側面は平滑である。	前縁の小骨片である。
483	#	第6または第7頸椎の一部	#		棘突起は低く背面は比較的広く前関節突起の後ろは軽く凹んでいる。椎弓はやや広い。	椎体及び棘突起、後関節突起を失っている。
484	#	馬 左前第1手根骨	#		背面よりみるとほぼ三角形を示している。近位面遠位面は平滑で軽く湾曲し、関節面を示している。	掌面を欠いている。
485	#	左中手骨近位部	#		離密骨は硬く光沢を有している。骨体背面は半月状を示し、内側部上端に大手中骨粗面を認む。掌面には関節に第3、第4手根骨着着面を認め、上縁より5cm下に栄養孔が開孔し、関節面は中央部の凹みが強い。	近位端内側部と骨体の中央部以下を失っている。
488	#	右下顎枝	#		薄くて小さく、内側が凹んでいる。筋突起、関節突起は小さく下顎切痕は浅い。	筋突起先端と関節突起の後側、下顎枝下部を失っている。
489	#	右腕骨後面	#		ほぼ平らで外側上方より内側下方に向かって5本の膝窩筋線が走り、筋線部中央に栄養孔が開孔している。両側は丸まっているが外側は鋭角に曲がっている。	前面及び近位部、遠位部の関節面を失っている。
490	#	左中足骨近位部	#		灰白色で表面極めて粗ざらであるが骨組織は厚い。骨体断面は円形を示し近位部はやや広がっている。	近位部関節面と骨体中央より下及び後面を失っている。
494	#	左肩甲骨の一部	#		大変小さく表面粗ざらで極めて強い。外側面は平滑で後縁部の血管切痕は極めて浅い。関節窩の前縁より上方に筋線が粗開状に走っており、上端近くに栄養孔が開孔している。関節窩は丸く窩切痕に沿って帯状隆起が走っている。	肩甲骨より前及び肩甲顆より上を失っている。
495	#	左距骨	#		やや小さい。前面に2個の滑車を距骨溝をはさんで斜めに走っている。足根関節面は平滑で滑車の接点に栄養孔が開孔している。	滑車後面と外側滑車外側面を失っている。

## 第3節 観察について

No.	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
496	#	左上腕骨	#		骨体の側に滑車が小さい。骨体断面は長卵円形をなし、骨後部は前方に突出し鋭角をなしている。上腕筋溝は広く現代馬を思わせるものがある。内側面上部に明確な大円筋粗面と大きな栄養孔を認む。骨体から滑車部への移行部の湾曲は極めてなだらからで、そのために滑車が小さく見える。滑車の内側上縁は極めて大きく隆起している。掌面の狗突窩は明瞭である。	上腕骨頭及び外側滑車、内側滑車の前後端を失っている。
497	#	左中足骨	#		骨体断面は半円形を示し、骨組織は一端が厚く他端は薄くなっている。	骨体部前側の小骨片である。
498	#	左腸骨翼	#		淡黄褐色で骨片は扇形をなし、表面には細かいひび割れが層の裏に向かって放射状に配列している。背面は僅かに反っている。腹面の裏の内側は骨髄をなしている。翼の一端は粗面が横張り耳状頭が陥凹している。	腸骨翼の耳状頭の一の小骨片である。
499	#	右腸骨々体部外縁	#		腹面は平らで外側縁はなだらかな美しい湾曲を示している。背面後部には粗面状の細かい凹凸を認む。	右腸骨体外縁の細長い小骨片である。
500	#	右橈骨々体部	#		緻密骨やや粗そうで骨組織は厚い。背面の断面はほぼ半円形で掌面は平らであるが内側はやや高く近位部内側に横骨粗面を認め、掌面には外側上部より内側下部にかけて尺骨附着痕を認む。	近位部、遠位部及び掌面の上下を失っている。
501	#	下顎骨小骨片	#			
506	牛	右距骨々体部	#		全体に太く骨体内部は空洞で表面は滑らかである。骨体上部は三角形を示し下部は管状をなしている。外側はやや凹み下部に粗面を認む。後側は平らで内側との境は角ばっている。	近位部、遠位部の関節面と後側上部を欠いている。
507	馬	右中足骨	#		骨体断面は円形を示し、骨組織は厚い。内側滑車面はほぼ楕円形を示している。	骨体遠位部であり、骨体後面と外側滑車を失っている。
508	#	右大腿骨内側後面	#		淡黄褐色で硬く、中央に1本の線維が走っている。線維に向かって斜めに数本の低い階段状隆起が走っている。線維の一端近くに栄養孔が開孔す。	栄養孔周辺の小骨片。
509	人	右大腿骨近位部	#		一端の断面はほぼ三角形の冠状骨で他端はやや平たい楕円形の断面を持っている。三角形の線維の他端はやや平らで粗面が一直線上に隆起している。	近位端関節部及び遠位部を失っている。
510	牛	左距骨々体部内側	#		大きい骨にも関わらず海綿骨は緻密で細かい。内側は滑らかで空洞状である。長三角形を示し近位部は平らで前縁が前側に湾曲し、大きな粗面の一部が認められる。	骨体内側の細長い骨片である。
513	人	左大腿骨遠位部	#		遠位端の後面は粗線の末端が粗面状に軽く突出している。粗線は横をなし近位端に達している。骨体前面はほぼ円に近い半月形を示している。	骨体中央より上及び遠位端関節部を失っている。
515	馬	右中足骨々体遠位部の一部	#		灰白色を呈し、風化激しく表面極めて粗そうであり、また極めて脆い。骨体前面は断面円形を示し後面は平らである。後面外側には第3中足骨附着部の痕が認められる。	中足骨遠位部で関節面及び左半分を失っている。
516	#	左肩甲骨内面	#		全体として小さい。後角はやや厚く、血管切痕が横切っている。関節部は小さくて浅い。	肩甲骨後縁の小骨片である。
517	牛	左中足骨	#		骨体上部断面は四角形で、前面中央に太く強い線溝が走っている。骨体内部の表面は滑らかで空洞状になっている。近位関節部は広く、第3、第4足根骨関節部の境界は明瞭である。	近位端底部後面及び遠位部を失っている。
518	#	左距骨々体部	#		骨体は大きく太く、骨体内部は空洞で内面は滑らかである。骨体上部断面は三角形を呈している。後面には数本の線維が横行して走っており外側寄りに大きな栄養孔が開孔している。内側面は平滑で広い。	近位部、遠位部を失っている。

## 付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
519	馬	左上腕骨々体部	#		骨体は小さくて細い。骨体断面は長卵円形である。上腕骨後肢は明瞭で筋肉をなしており上腕筋溝は平滑で広い。内側面の上部に小さな大門筋粗面と、その下部に栄養孔を認む。	近位部及び遠位部の滑車後面を失っている。
520	#	右腕骨々体部	#		淡黄褐色で極めて脆い。骨体背面の上部は丸味を帯びているが遠位部はやや平らである。遠位端外側はやや大きく張り出し、表面は粗面に細かな凹凸が認められ筋溝は不明瞭である。遠位部外側関節面はやや広く丸く凹んでいる。	近位部及び遠位関節内側部を失っている。
522	#	左距骨ラセン	#		骨体の内側には内側ラセン溝の後端が僅かに見られ美しいラセン溝の一部をのぞかせている。外側にはラセン中央隆起部の後端が認められる。	左距骨ラセンの後側の小骨片である。
524	#	右上腕骨々体部	#		やや小さく骨体中央部断面は長卵円形である。上腕筋溝は広く、美しい反りを見せている。上腕骨後肢はやや明瞭である。	近位部及び遠位部を失っている。
525	#	右腕骨遠位部内側	#		背面断面は丸味を帯び掌面は平らである。関節移行部は内側に反り、掌面によって内側は鋭角をなしている。	右腕骨遠位部内側の小骨片である。
526	#	右大趾骨々体部	#		骨体断面はアーチ状を呈している。外側面の下部は大きく陥没し踵上窩の上部が現れている。後面の上部は平らで僅かに小趾子の下部が認められる。後面内側面に栄養孔が開孔している。	小趾子より上の近位部、踵上窩より下の遠位部を失っている。
527	牛	左中手骨頭部関節	#		外側の関節面は平滑で広く美しい曲線を描いて骨体に移行している。内側関節面は欠損しやや厚い緻密骨の中に細かな海綿骨組織が満たしている。	中足骨近位関節部の一部で骨体を失っている。
530	人	小骨片	#	15C-16C		
531	不明	肢骨片	#	14C後半	淡黄褐色で緻密骨は表面粗ざうで極めて脆い。大きき中等度の肢骨々体部の骨片である。前面の断面は半円形を示し後面は平らである。一方の端に行くに従って太くなっている。	肢骨々体部の片側半分と上下を失っている。
532	#	#	#	#	灰白色で緻密骨は表面粗ざうで極めて脆い。大きき中等度の肢骨々体部の骨片である。前面の断面は半月状を示し後面は平らである。一方の端に行くに従って太くなっている。側面に一部形状扁平部があるがこの骨体本来のものがどうか不明である。	#
533	#	小骨片	#	#		
534	#	#	#	#		
535	#	#	#	#		
536	#	#	#	#		
537	#	#	#	#		
538	#	#	#	#		
539	#	#	#	#		
540	#	#	#	#		
541	#	#	#	#		
542	#	#	#	#		
543	#	#	#	#		
544	#	#	#	#		
545	#	肢骨片	#	#		
546	#	#	#	#		
547	#	小骨片	#	#		
548	#	#	#	#		
549	#	肢骨片	#	#		
550	#	#	#	#		
551	#	小骨片	#	#		
552	#	#	#	#		
553	#	#	#	#		
554	#	#	#	#		
555	#	#	#	#		
556	#	#	#	#		



第3節 観察について

No.	種別	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
557	〃	〃	〃			
558	〃	〃	〃			
559	〃	〃	〃			
560	〃	〃	〃			
561	〃	〃	〃			
562	〃	〃	〃			
563	〃	〃	〃			
564	〃	〃	〃			
565	〃	〃	〃			
566	〃	〃	〃			
567	〃	〃	〃			
568	〃	肢骨片	〃		風化甚しく土壌と共に保存処理がしており、大きい肢骨の一部であるが殆ど土壌であるため詳細不明である。	肢骨片である。
569	〃	小骨片	〃			
570	〃	〃	〃			
571	〃	小肢骨片	〃			
572	〃	小骨片	〃			
573	〃	〃	〃			
574	〃	〃	〃			
575	〃	〃	〃			
576	〃	〃	〃			
577	〃	〃	〃			
578	〃	〃	〃			
579	〃	〃	〃			
580	〃	〃	〃			
581	〃	〃	〃			
582	〃	〃	〃			
583	〃	〃	〃			
584	〃	〃	〃			
585	〃	〃	〃			
586	〃	〃	〃			
587	〃	〃	〃			
588	〃	〃	〃			
589	〃	〃	〃			
590	〃	〃	〃			
591	〃	〃	〃			
592	〃	〃	〃			
593	〃	〃	〃			
594	〃	〃	〃			
595	〃	〃	〃			
596	〃	〃	〃			
597	〃	〃	〃			
598	〃	〃	〃			
610、 617～619	馬	左右下顎骨 4	近世	出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、形状色沢、骨相等により同一個体。 No604～No616と同一個体。	淡黄褐色で緻密骨光沢あり硬い。下顎骨は大きさとしては余り大きい方でないが凹凸に富み輪郭は極めて鮮明で力強い。下顎角腹縁は外方に軽く張り出し、下顎内側面には粗面状の凹凸が見られる髁突筋溝の中心への傾斜は強い。	第2前臼歯より前の下顎体及び筋突起を除く下顎枝を失っている。
620～624	〃	右前肢骨 2 右後肢骨 3	〃	〃	淡黄褐色で緻密骨は光沢を有し硬い感じである。全体に細くて小さい。上腕骨の骨体の断面は卵円形を示し、上腕筋溝、上腕骨棘、不鮮明で滑車は小さくて弱々しい。橈骨は掌面平らで尺骨附着痕及び内側端の粗面状隆起が認められる。大腕骨は骨体内側面上部の断面は楕円形で丸味を帯びているが中央より下は平らになっている。後側内面に栄養孔と粗面状隆起を認める。内側唇は不明瞭であるが外側唇の下部を認む。 中足骨の骨体近位端はやや広がり内側に粗面の下帯が認められる。	上腕骨は骨体中央部より上及び外側遠位部を欠く。橈骨は骨体背面及び近位部を欠く。大腕骨は骨体外側面及び近位部遠位部を欠く。中足骨は骨体後面及び近位部、遠位部を欠く。

付章 上野園分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種 類	骨の部位	時 代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
625	不明	小骨片	#			
626	#	#	#			
627	#	#	#			
628	#	#	#			
629	#	#	#			
630	#	#	#			
632	馬	上顎小骨片	古墳時代 7 C末	No.631と同一個体。		
655	牛	小骨片	平安時代 10C		同一土壌中に牛歯2個混在し、牛骨の可能性高い。	
658	不明	肢骨片	#		茶褐色で極めて脆い。やや短い肢骨の一部で緻密骨のみで松樹皮状を呈している。	
659	#	#	#		茶褐色で極めて脆く、海綿骨のみである。関節面の一部のように思われる。海綿骨の組織は細かい。	
660	#	小骨片	#			
662	#	#	#			
663	#	#	#			
665	#	#	#			
666	#	#	#			
668	#	#	#			
669	#	#	10C代			
671	馬	左脛骨々体部	中世 14C後半		骨体断面半月状で内側の傾斜がやや強い。骨体は上下の太さに余り差がない。掌面は尺骨附着痕が外側上部より内側下部へ斜めに走っている。	遠・近関節部及び背面中央を縦に細く欠けている。
672	不明	肢骨片	#		大動物の中以上の大きさの管状骨の一片片である。	一片片である。
673	#	小骨片	15C-16C			
675	#	#	#		灰白色で光沢なく棒骨状の小骨片である。	小骨片である。
675	#	#	14C後半			
676~685	人	側頭骨2頭骨8	近世-近代		左右側頭骨鼓室部は淡黒褐色を呈していて大きい特以外耳道の大きいことが目立っている。緻密骨はしっかりしていて海綿骨の空洞はやや大きめである。側頭底面は指圧直明瞭で凹凸に富んでいる内耳道は大きく前庭水管口及び弓下窩は鮮明である。離体後縁及び上縁は欠けている。頭骨の一部は淡灰褐色で表面に褐色汚泥状物附着し、比較的薄い。緻密骨はしっかりして海綿骨の組織は細かい。縫合線の形状は寛く縫合線に沿って鋭い隆起が認められる。内面は凹凸が明瞭で指圧痕の直径は25でやや大きい。	左右側頭骨は鼓室部のみである。頸骨はいずれも骨片である。
687	不明	小骨片				
717~724	#	右口蓋臼歯部1 左口蓋臼歯部1 右下顎体臼歯部3 左下顎体臼歯部3	不明	出土状態、風化の度合い、大きさ、年齢、形状骨相等により同一個体である確率が高い。 No.688-No.716と同一個体。	左右口蓋臼歯部は灰白色で緻密骨の表面は粗ざうで極めて脆い。歯槽面は小さな空洞を持った海綿骨が覆っており歯冠、歯根の痕がくっきりと残っている。口蓋面には口蓋溝が鋭い溝をなして歯槽線に平行に走り、口蓋骨は口蓋溝縁で欠損し顎顎壁が一部失しい湾曲を見せている。下顎体臼歯部は緻密骨表面粗ざうで極めて脆い。歯槽面の歯面骨には歯冠、歯根の痕がくっきりと残っている外側面はほぼ平らで下縁は丸味を帯び内側面は僅かに湾曲している。下縁の下顎角にかかる所は辺縁平らでやや広くなっている。	左右口蓋臼歯部の一部と下顎体の臼歯部の一部である。
733	馬	左下顎体臼歯部外側面	明	No.725-No.733と同一個体。	淡黄褐色で脆く、外側面はやや斜めに細かなひび割れが平行して走っている。内側面にはL <sub>1</sub> M <sub>1</sub> 、L <sub>2</sub> M <sub>2</sub> の歯冠部の痕が残っている。	下顎体臼歯部のやや小さい骨片である。
737	#	左中心足骨	#		やや厚い扁平な関節骨で、一面にはやや広く凹面状に凹んだ関節面を有し、扁平な他の一面には湾曲した管状の凹みを有している。	表面の一部は緻密骨を失っている。

## 第3節 観察について

No.	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
739	不明	小骨片	#		薄い小さな緻密骨で一面が凹んだ小骨片。	小骨片である。
740	#	#	#		小さな短い管状骨の小骨片である。	
752	#	#	中世 15C			
753	#	#	#			
759	鹿	#	古墳時代 7C代	No.757-No.758と同一個体。	僅かに骨とわかる程度の小骨片で歯面と共に出土している。	
763	猪	#	#	No.760-No.762と同一個体。	僅かに骨とわかる程度の小骨片で歯面と共に出土している。	
764	不明	#	#		土壌中に小骨片を含む。	
765	#	#	#		土壌中に微細骨片を含む。	
766	#	#	古墳時代 —奈良時代 7C末 —8C初頭		小管状骨の小骨片である。	
771	#	#	奈良時代 8C代		#	
772	#	#	#		#	
773	#	#	#		土壌中に小骨片を含む。	
774	#	#	#		灰白色で小さな管状骨の小骨片である。	
778	牛	右下顎体白 歯部2	平安時代 9C代	No.775-No.792と同一個体。	下顎歯面に僅かに附着して歯槽をなし下顎歯面が植込している。淡灰褐色で極めて脆く表面は極めて粗ざうである。	小骨片である。
782		左下顎体白 歯部1				
789		下顎体白歯 部1				
835・836	馬	右下顎体白 歯部2	#	No.828-No.834と同一個体。	R P <sub>1</sub> 舌面歯槽部の歯槽と、R M <sub>1</sub> の歯冠部の歯槽であるが、いずれも歯根、歯冠の直が強く残っている。	#
843	牛	右下顎体白 歯部外側	#	No.837-No.842と同一個体。	土壌に風化のため半ば融けかかった歯槽骨が附着しR P <sub>1</sub> 、R P <sub>2</sub> の歯根直が鮮明に残っている。	#
848	馬	小骨片	平安時代	No.844-No.847と同一個体。	大量の小土壌中に所々小骨片を認む。	#
854	#	#	#	No.852-No.853と同一個体。	大量の土壌中に微細骨片を認む。	#
862	牛	下顎体白歯 部小骨片	#	No.860-No.861と同一個体。		
876・877	馬	左上胸骨々 体部2	#	出土状態、風化の成合い、大きさ、年令、形状骨相等より同一個体である確率は高い。	土壌上に厚さ1mmの薄い緻密骨の裏面陰影がほりついている。右側は上方に軽く反りを見せており外側上顆縁が鋭め右に向かってくっきりと直を獲している。また骨体部内側は上端に大門筋粗面がやや盛り上がり右側の傾斜はゆるやかで、左側の傾斜はそれより強い。	上胸骨外、内側緻密骨の一部である。
879	牛	下顎骨小骨 片	#	No.878と同一個体。	硬い小骨片に細分化している。	小骨片である。
890	#	小骨片	#			#
891	牛又は馬	肢骨片	#		土壌に風化して半ば融けた中型管状骨の小骨片がへばりついている。	#
892	不明	小骨片	#		大量土壌中に小骨片混在す。	#
893	#	#	#		土壌中に微細骨片混在す。	#
894	#	#	#		#	#
895	#	#	#		土壌中に風化した骨片が附着す。	#
896	#	#	#		土壌中に僅かに小骨片を認む。	#
897	#	#	平安時代		灰白色の扁平な小骨片である。	#
898	#	#	#		灰白色の小さな管状骨の小骨片である。	#
899	#	#	#	9C	中型の大ききの管状骨の小骨片で細分化している。	#
900	#	#	#		土壌中に微細骨片が混在す。	#
901	#	#	#		中型の大ききの管状骨片で比較的に硬い小骨片に細分化している。	#

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	骨の部位	時代	個体の同一性	特 徴	欠損状態その他
902	〃	〃	〃		土壌中に扁平な小骨片混在す。	〃
903	〃	〃	〃			
904	〃	〃	〃			
905	〃	〃	平安時代		やや多量の土壌中に僅かな小骨片を認む。	〃
906	〃	〃	〃		土壌中に微細骨片を認む。	〃
907	〃	〃	平安時代		大量の土壌中に微細骨片を認む。	〃
908	〃	〃	〃			
909	〃	〃	不明		小土塊に薄い管状骨の一部が附着。	〃
917	〃	〃	古墳時代 奈良時代 7C —8C代		黒色の小骨片である。	〃
918	〃	〃	〃		殆ど土塊で僅かに微細骨片混在す。	〃
919	〃	〃	〃			〃
930~943	猪	上顎骨2 下顎骨1 歯蓋骨2 頭骨6 前肢骨1 椎骨1 不明骨1	近世—近代		全体に赤褐色をしていて骨は薄い。緻密骨はやや細く表面は緻密である。左上顎骨の外側はd mの 後方より外方に湾曲し、口蓋には歯列に沿って径 3mmの口蓋溝が走っている。下顎骨は極めて薄い。 左右顴形骨の眼窩窩は中央が凹み、前頭頭縫合が 放射状に配列し美しい羽扇のような姿をしてい る。左頭頂骨の後方はラムダ縫合部で脱落して居 る。左外側は鱗状縫合で脱落している。側 頭線が猪類を表す美しい湾曲を示している。頭骨 の内側には小さな斜明な指圧痕を認む。椎骨は椎 弧や横に長く、乳頭関節突起やや長い。	上下顎骨は夫々臼歯 部のみである。左右 顴形骨、左右及び前 後の頭骨片、椎骨の 一部である。
975	不明	不明	不明		土塊のみで不明である。	
976	〃	〃	〃			〃
977	〃	〃	〃			〃
978	〃	〃	〃			〃
979	〃	〃	〃			〃
980	〃	〃	〃			〃
991	馬	左下顎体臼 歯部外側	平安時代	No981—No990と 同一個体。	L.M <sub>2</sub> 歯面中央に僅かな小骨片として附着してい る。表面灰白色で風化のための白曇状に変質し粘性 を失っている。表面に細かい多数のひび割れが平 行に走っている。	小骨片である。
1010	〃	小骨片	不明	No1004 —No1009と同一 個体。		〃
1014	〃	左下顎体臼 歯部外側3	〃	No1011 —No1018と同一 個体。	淡黄褐色を呈し、全体に平たくて薄い。緻密骨表 面に多数の細かいひび割れが走っている。	L.P <sub>2</sub> 、L.P <sub>3</sub> の外側 L.M <sub>1</sub> 、L.M <sub>2</sub> の外側 L.M <sub>3</sub> の外側に附着 する骨片である。
1054	〃	左脛骨の一 部	〃		淡黄褐色で風化のため極めて細く、緻密骨の表面 は極めて粗ざらである。骨体断面は類半円形を 示し、前面内側がやや突出している。骨組織は前 面から内側にかけて厚く、外側はやや薄い。後面 は平らになっている。	左脛骨近位部の骨片 である。
1055	不明	小骨片	〃			
1056	〃	〃	〃			
1057	〃	〃	〃			
1058	〃	〃	〃		土塊に風化により半ば融解した骨片附着す。	小骨片である。
1059	〃	〃	〃		土塊中に微細骨片を僅かに混入している。	〃

附表7 地区別・時代別・種類別・性・年齢・大きさ一覧表

注 体高はcm、長は前後の距離、巾は左右の距離、5%以内=ほぼ同じ、5-10%=やや、10-20%=大きい・小さい、20%以上=大衆・極めて・著しく。

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年齢		大きさ		備 考
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
A	27~31	馬	前肢骨5	古墳時代 6C後半 ~7C前半	不明	不明	不明	不明	小形馬	左腕骨部位小さい。
#	35~47	#	切歯6、頬歯6 上下顎骨1	平安時代 9C後半	#	4才	幼令	140.5(130~ 143.7)	大形馬の中でも 小さい馬	同時代の馬(注3)と比較すると歯冠長や大きい歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	48~51	#	後肢骨1、小骨 片3	#	#	卒	不明	不明	不明	坐骨体細いので卒と考えられる。
#	53	#	頬歯1	#	不明	4才	幼令	110~130	小形馬の中でも 大きい馬	一部欠損。同時代の馬と比較すると歯冠長はほぼ普通の大きさである。
#	54	#	頬歯1	#	不明	不明	不明	不明	小形馬	欠損。
#	56~66	#	頭骨2、頬歯9	中世 14C後半、	#	2~2.5才	幼令	130	中形馬の中でも 小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともにやや小さい。
#	67~72	#	頬歯6	#	#	21才	老令	115.0	小形馬の中でも 中位の馬	同時代の馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	74	#	頬歯1	#	#	25~26才	老令	110~130	小形馬の中でも 小さい馬	#
#	78	#	前肢骨1	中世-近代 15~19C	#	不明	不明	130.3	中形馬の中でも 小さい馬	骨体最小巾33.4、林田の現代小形馬の成績から体高推定(注2)。
#	79	#	前肢骨1	#	#	#	#	121.6	小形馬の中でも 大きい馬	上腕骨栄養孔径3.8%418左上腕骨とほぼ同大。
#	80	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	
#	81	#	後肢骨1	#	#	#	#	129.4	中形馬の中でも 小さい馬	右脛骨推定中央部巾36.1、No385右脛骨とほぼ同大。
#	82	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	小形馬の中でも 小さい馬	No84左大腿骨とほぼ同大。
#	83	#	後肢骨1	#	#	#	#	121.6	小形馬の中でも 大きい馬	左大腿骨推定中央部巾38.3、No419右大腿骨とほぼ同大。
#	84	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	小形馬の中でも 小さい馬	本馬はNo419の右大腿骨と比較すると著しく小さい。特に骨体巾著しく小さい。栄養孔径3.5。
#	85	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	不明	
#	86	馬	後肢骨1	中世-近代 15~19C	不明	不明	不明	不明	不明	
#	87	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	
#	88	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	
#	90	#	頬歯1	#	#	13~14才	仕令	130~140	中形馬の中でも 大きい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長及び歯冠巾はやや小さい。
#	91	#	前肢骨1	#	#	不明	不明	124.3	小形馬の中でも 大きい馬	骨体中央部巾33.0、林田の成績と比較。
#	92	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	
#	93	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	
#	1~14	牛	頬歯10、下顎 骨2、右前肢骨 2	古墳時代 (7C後半)	不明	不明	仕令	不明	現代黒毛和種 よりやや小さい	下顎骨臼歯部の骨体厚は直良の古墳時代-平安時代秩父市三沢平塚出土の家牛(注7)の骨体厚より3.3%大きいのが現代牛より26.7%小さい。

付章 上野園分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	№	種類	歯骨の部位	時代	性	年 令		大 き さ		備 考
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	15~26	#	頰歯10、頰蓋骨2	#	#	#	社会	#	#	奈良時代—平安時代長野県佐久市安原池畑出土の家牛(注11)の上顎全歯列長と同じ。現代黒毛和種よりやや小さい。
#	52	#	頰歯1	平安時代9C	#	#	不明	#	不明	内部エナメル質の近位端が外部エナメル質と癒着開孔し固定化の進んでいないことを示す。
#	73	#	頰歯1	中世14C後半	#	#	幼令	#	#	
#	75	#	下顎骨1	#	#	#	不明	#	#	
#	89	人	下顎骨1	中世—近代15~19C	不明	不明	不明	不明	不明	
#	32	不明	小骨片1	奈良時代8C	不明	不明	不明	不明	不明	
#	33	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	34	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	55	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	76	#	#	中世14C後半	#	#	#	#	#	
#	77	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	94	#	肢骨片	中世—近代15~19C	#	#	#	#	#	
#	95	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	96	#	小骨片	#	#	#	#	#	#	
#	97	#	#	#	#	#	#	#	#	
B	98	馬	頰歯1	古墳時代7C	不明	5才	社会	130	中形馬の中でも小さい馬	後継の長11.3。
#	99	#	頰歯1	#	#	不明	不明	不明	不明	
#	103	#	頰歯1	古墳時代—平安時代6~12C	#	8才	社会	不明	中形馬の中でも小さい馬	現歯冠長25.2、後小窩底部の長8.5。
#	104	#	後肢骨1	#	不明	不明	不明	不明	不明	
#	105	#	小歯片1	#	#	#	#	#	#	
#	108~120	#	後肢骨13	中世14C後半~16C前半	#	#	社会または老令	109.5	小形馬の中でも小さい馬	中足骨中央部巾25.3、林田の成績と比較。
#	121~136	#	下顎骨2、後肢骨2、肢骨片6、小骨片6	#	#	#	#	116.5(115~118.5)	小形馬の中でも大きい馬	脛骨々体推定中央部巾33.2、中足骨推定中央部巾25.5、終田の成績と比較。
#	137~139	#	頰歯2、小骨片1	#	#	#	不明	不明	不明	
#	140・141	#	前肢骨1、後肢骨1	#	#	#	社会または老令	118.5~120	小形馬の中でも大きい馬	脛骨々体中央部巾31.5、林田の成績と比較。
#	142	#	頰歯1	#	#	13.8才	社会	不明	不明	
#	143	#	頰歯1	#	#	20.2才	老令	133.5	中形馬の中でも中位の馬	同時代の馬と比較すると歯冠長やや小さい。
#	145	#	頰歯1	不明	#	26.6才	老令	不明	不明	中形馬の中でも小さい馬
#	146	#	頰歯1	#	#	不明	不明	#	#	
#	100	不明	小歯片1	古墳時代7C	不明	不明	不明	不明	不明	
#	101	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	102	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	106	#	小骨片1	平安時代	#	#	#	#	#	
#	107	#	小歯片1	#	#	#	#	#	#	

## 第3節 観察について

区	№	種類	歯骨の部位	時代	性	年 令		大 き き		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	144	#	小骨片1	中世 14C後半～ 16C前半	#	#	#	#	#	
#	147	#	小骨片1	不明	#	#	#	#	#	
C	148	馬	頬歯1	平安時代	不明	7.9才	仕令	129	中形馬の中では 小さい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長やや大きい。
#	150～ 166	#	前肢骨1、後肢 骨16	中世 14C後半 ～15C後半	♀	不明	仕令	136	中形馬の中でも 大きい馬	寛筋節形状により♀、骨の 断面の力強いことから見て 仕令中手骨々体中央部巾 32.2、林田の成績と比較。
#	167～ 169	#	頬歯3	# 15C後半 ～16C前半	不明	21.9(18. 8～24)才	老令	130.1(124.3 ～136)	中形馬の中でも 小さい馬	歯冠長は同時代のものより やや大きい歯冠巾はほぼ 同じ。
#	188～ 191	#	前肢骨4	# 15C前半	#	不明	不明	不明	不明	
#	216	#	頬歯1	# 14C後半 ～15C後半	#	#	#	#	#	
#	180～ 185	鹿	前肢骨1、後肢 骨5	中世 15C後半 ～16C前半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	170～ 176	鬼	頭蓋1、頬歯6	中世 15C後半 ～16C前半	不明	不明	不明	不明	不明	現代の家鬼と大きさはほぼ 同じ。
#	177～ 179	#	肋骨3	#	#	#	#	#	#	
#	192	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	193	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	194	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	195	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	196	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	197	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	198	#	切歯1	#	#	#	#	#	#	
#	199	#	頬歯1	#	#	#	#	#	#	
#	200	#	頬歯1	#	#	#	#	#	#	
#	201	#	頬歯1	#	#	#	#	#	#	
#	202	#	頬歯1	#	#	#	#	#	#	
#	203	#	頬歯1	#	#	#	#	#	#	
#	204	#	頬歯1	#	#	#	#	#	#	
#	205	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	206	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	207	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	208	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	209	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	210	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	211	#	頭蓋1	#	#	#	#	#	#	
#	212	#	脚椎1	#	#	#	#	#	#	
#	213	#	脚椎1	#	#	#	#	#	#	
#	214	#	脚椎1	#	#	#	#	#	#	
#	215	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#	
#	186・ 187	小児 虫類	前肢骨2	中世 15C後半 ～16C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	149	不明	肢骨片1	平安時代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	217	#	小骨片1	中世 15C前半	#	#	#	#	#	
#	218	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	219	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	№	種類	歯骨の部位	時代	性	年 令		大 き さ		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
D	226～ 230	馬	切歯5、頬歯5 下顎骨1	中世～近代	♀	2.5～ 3.5才	幼令	131.5(130～ 135)	中形馬の中でも 小さい馬	下顎骨に大歯及びその痕跡 なし。同時代のものよりや や大きいのが歯冠中特に巾率 は35%も小さい。下顎骨全 長359.5で現代小格馬とす ると体高130～135にあたる。
#	231～ 233	#	頬歯2、下顎骨 1	#	不明	18(15.8 ～20.2)	老令	132.1(124.2～ 140)	中形馬の中でも 小さい馬	M <sub>1</sub> はやや大きいのがM <sub>2</sub> が小 さいのでそれ程大きい馬で はないと考えられる。同時 代の馬と比較すると歯冠長 は普通であるが歯冠巾、巾 率ともにやや小さい。
#	234～ 236	#	後肢骨3	#	#	不明	不明	不明	不明	
F	269～ 271	馬	頬歯3	平安時代 10C	不明	4才	幼令	135.8	中形馬の中でも 大きい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長やや大きいのが巾率少な い。
#	272～ 275	#	頬歯4	#	#	4	幼令	136(131～ 141)	中形馬の中でも 大きい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長は普通の大きさである。
#	276～ 278	#	切歯3	#	#	4	幼令	142.5(141～ 144)	大形馬の中でも 小さい馬	同時代の馬と比較すると大 きいが、歯冠巾、巾率とも に小さく、特に巾率が小さ い。
#	279～ 281	#	頬歯3	#	#	3.5～4	幼令	127	小形馬の中でも 大きい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長が小さい。
#	282・ 283	#	頬歯2	#	#	7～9.7	社会	130(128～ 132)	中形馬の中では 小さい馬	萌出後より経っていない歯 であるが小歯片なので歯冠 高によって年令判定した。
#	287～ 290	#	切歯4	#	#	4	幼令	130	中形馬の中では 小さい馬	萌出直後歯、内部メナメル 輪4才、同時代の馬と比較 すると歯冠長は大きい。
#	294・ 295	#	頬歯2	#	#	11.1(7.8 ～14.4)	社会	不明	小形馬	中歯離著しく短くて低い。 巾2.2、高2.5。
#	296～ 298	#	頬歯3	#	#	4	幼令	#	不明	萌出直後。
#	299・ 300	#	頬歯2	#	#	4	幼令	#	#	萌出直後。
#	301・ 302	#	頬歯2	平安時代	#	不明	社会の 内でも 若い	#	#	
#	305	#	頬歯1	#	#	4	幼令	#	小形馬	萌出直後歯。前小窩でこの ように小さいのはM <sup>3</sup> を思 わせるものがある。
#	306	#	頬歯1	#	#	6.5～10. 3	社会	130	中形馬の中では 小さいもの	
#	307	#	頬歯1	#	#	7才以下	社会	不明	中形馬	咬合面欠損しているが全歯 高52.9。
#	308	#	頬歯1	#	#	4.6才以下	幼令	110～130	小形馬	推定萌出歯冠高61.1、開放 歯根部暗赤色。
#	309	#	頬歯1	#	#	3	幼令	110	小形馬の中では 小さい馬	未萌出歯、同時代の馬と比 較すると歯冠長、歯冠巾、 巾率ともに小さい。
#	310	#	頬歯1	#	#	4才以下	幼令	不明	不明	萌出直後歯。
#	311	#	頬歯1	#	#	5.8～7.6	社会	#	小形馬	推定歯冠高52.4。
#	312	#	頬歯1	#	#	4	幼令	132	中形馬の中でも 小さい馬	萌出後開もない。咬面突出 内側へ湾曲。同時代の馬と 比較すると歯冠長やや小さ い。



## 第3節 観察について

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き さ		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	313	馬	頬歯1	平安時代 10C	不明	4	幼令	130~140	中形馬	駒出後間もない。収縮突出し内側へ弯曲。
#	314	#	頬歯1	#	#	4才以下	幼令	不明	不明	開放歯根部暗赤褐色、咬合面附近歯面内方に弯曲。
#	315	#	頬歯1	#	#	4才以下	幼令	#	#	推定頬側歯冠高62.3。
#	316	#	頬歯1	#	#	4才以下	幼令	110	小形馬の中では小さい馬	# 推定頬側歯冠高73.7。
#	317	#	頬歯1	#	#	12才以下	壮令	130	中形馬	原小歯長7.8、現全歯高52.2。
#	318	#	頬歯1	#	#	4	幼令	130	中形馬	原小歯長7.8、推定頬側歯冠高99.0。
#	319	#	頬歯1	#	#	4	幼令	不明	不明	推定頬側歯冠高63.0、開放歯根。
#	320	#	頬歯1	#	#	4	幼令	#	#	# 63.3 #
#	321	#	頬歯1	#	#	9才以下	壮令	#	#	# 48.8、
#	322	#	頬歯1	#	#	4才以下	幼令	#	#	駒出直後歯。
#	323	#	頬歯1	#	#	4才以下	幼令	#	#	# 推定頬側歯冠高56.6。
#	324	#	頬歯1	#	#	7才以下	壮令	#	#	推定頬側歯冠高58.5。
#	325	#	頬歯1	#	#	9.2	壮令	137.4	中形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比較するとやや大きい。歯冠巾、巾率小さい。
#	326	#	頬歯1	#	#	4	幼令	130	中形馬の中では小さい馬	原歯後谷の長5.8。
#	327	#	頬歯1	#	#	4	幼令	130	中形馬の中では小さい馬	後小窩の巾13.6、これ程大きいのはPのみ。
#	328	#	頬歯1	#	#	4	幼令	130	中形馬の中では小さい馬	推定歯冠長24.3。
#	329	#	頬歯1	#	#	4	幼令	130	中形馬の中では小さい馬	原歯後谷+次歯の長15.0、推定頬側歯冠高56.8。
#	330	#	頬歯1	#	#	4~7.2	壮令	130	中形馬の中では小さい馬	原歯後谷+次歯の長15.5、# 65.2。
#	331	#	頬歯1	#	#	4	幼令	130以上	中形馬の中では小以上の馬	原歯の長14.4、# 65.2。
#	332	#	頬歯1	#	#	不明	不明	不明	不明	上腕骨々々体小巾29.7、林田の成績と比較。
#	333	牛	前肢骨1	平安時代後期	#	#	#	127.8	小形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長やや小さい。
#	334	馬	頬歯1	平安時代後期	不明	10.4	壮令	125.5(110~130)	中形馬の中では大きい馬	推定頬側歯冠高35.0。
#	335	#	頬歯1	平安時代	#	不明	老令	不明	不明	推定頬側歯冠高35.0。
#	336	#	小歯片1	平安時代10C	#	#	不明	#	#	同時代の馬と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	344~ 368	#	切歯7、頬歯18	中世14C後半	#	8~10	壮令	140.0	大形馬の中では大きい馬	右大腿骨遠位部関節面が骨端縁より脱落。性は不明であるが大腸骨々々体は細くきゃしゃで予を思わせるものがある右脛骨々々体部中央部巾36.3、中央部径26.5、林田の成績と比較。
#	382~ 386	#	後肢骨5	#	#	4才以下	幼令	129.4(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	左上腕骨々々体部前面はNo519左上腕骨、No496左上腕骨とほぼ同じ大きさのもの。
#	387~ 389	#	前肢骨1、後肢骨2	#	#	不明	不明	131.0	中形馬の中では小さい馬	歯骨骨光沢あり、硬固なので壮令の歯率高い。
#	389~ 392	#	歯冠2、下顎体1	#	#	#	#	不明	不明	歯骨骨光沢あり、硬固なので壮令の歯率高い。
#	393~ 396	#	切歯3	#	#	13	壮令	123.2(110~130)	小形馬の中では大きい馬	

付表 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	No.	種類	歯骨の部位	時代	性	年 令		大 き き		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高分	
#	399~402	#	前肢骨1、後肢骨2、肢骨1	#	#	不明	不明	122.7(118.5~136)	小形馬の中では大きい馬	右脛骨々体中央部径29.9、林田の成績と比較。
#	403~405	#	頬歯3	#	#	17.2(15.2~18.7)	老令	117.6(110~123.8)	小形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともに普通の大きさである。
#	406・407	#	頭蓋骨1、下顎骨1	#	#	不明	不明	不明	不明	
#	408・409	#	前肢骨1、肢骨片1	#	#	#	#	116.8(115~118.5)	小形馬の中では大きい馬	左腕骨々体中央部径30.9、林田の成績と比較。
#	410・411	#	頬歯2	#	#	19.2(18.2~20.2)	老令	114	中形馬の中では中位の馬	同時代の馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	414・415	#	頬歯2	#	#	21.1(18.6~23.6)	老令	110~130	中形馬の中では小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	418・419	#	前肢骨1、後肢骨1	#	#	不明	不明	121.6(118.5~136)	小形馬の中でも大きい馬	上脛骨々体最小巾31.2、最小径36.2、林田の成績と比較。
#	420・421	#	馬 下顎骨2	中世	不明	不明	不明	不明	不明	
#	422	#	前肢骨1	#	#	#	#	108.3	小形馬の中では小さい馬	肩甲骨側部径後径47.8。
#	423	#	前肢骨1	#	#	#	#	101.5	小形馬の中では小さい馬	肩甲骨側部厚11.9。
#	424	#	前肢骨1	#	#	#	#	101.5	小形馬の中では小さい馬	肩甲骨側部厚11.8。
#	425	#	前肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	
#	426	#	前肢骨1	#	#	#	#	121.6	小形馬の中では大きい馬	内側帯車径48.1、No418左上脛骨とほぼ同じ。
#	427	#	前肢骨1	#	#	#	#	121.6	小形馬の中では大きい馬	内側帯車径47.6、No418左上脛骨とほぼ同じ。
#	428	#	前肢骨1	#	#	#	#	不明	中形馬の中では中位の馬	栄養孔上下径3.5。
#	429	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	中形馬の中では大きい馬	栄養孔上下径3.8、軌面及び骨体湾曲やや大きい。
#	430	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	不明	
#	431	#	後肢骨1	#	#	#	#	121.6	小形馬の中では大きい馬	栄養孔上下径3.8。
#	432	#	後肢骨1	#	#	#	#	121.6	小形馬の中では大きい馬	推定頸上窩前後径20.4上下径47.4、No419右大腿骨とほぼ同じ。
#	433	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	
#	434	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	
#	435	#	後肢骨1	#	#	#	#	130	中形馬の中では小さい馬	推定頸骨遠位部巾61.6、No385右脛骨とほぼ同じ。
#	436	#	前肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	
#	437	#	頬歯1	#	#	4	幼令	134.7(130~140)	中形馬の中では中位の馬	同時代の馬と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	440	#	前肢骨1	#	#	不明	不明	121.6(118.5~130)	小形馬の中では大きい馬	上腕骨々体部推定最小径36.0、No418左上脛骨とほぼ同じ。
#	441	#	前肢骨1	中世	不明	不明	不明	136	中形馬の中では大きい馬	中手骨々体推定中央部巾32。林田の成績と比較。
#	442	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	
#	443	#	後肢骨1	#	#	#	#	121.6(118.5~136)	小形馬の中では大きい馬	大腿骨々体近位部径38.2、No419右大腿骨とほぼ同じ。
#	444	#	後肢骨1	#	#	#	#	121.6(118.5~136)	小形馬の中では大きい馬	大腿骨々体推定中央部巾34.2、No419右大腿骨とほぼ同じ。
#	445	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	

## 第3節 観察について

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き き		横 要	
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高分		
#	446	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	#	
#	447	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	#	
#	448	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	#	
#	449	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#	#	
#	453	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#	#	
#	454	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#	#	
#	455	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#	#	
#	456	#	後肢骨1	#	#	#	#	121	小形馬の中では大きい馬	栄養孔上下径3.6、№419右大副骨とほぼ同じ。	
#	457	#	後肢骨1	#	#	#	#	126.4(118.5~136)	小形馬の中では大きい馬	脛骨々体中央部巾36.5、林田の成績と比較。	
#	458	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明		
#	459	#	後肢骨1	#	#	#	#	136	中形馬の中では大きい馬	中足骨々体中央部巾30.9、林田の成績と比較。	
#	460	#	後肢骨1	#	#	#	#	136	中形馬の中では大きい馬	中足骨々体中央部巾29.3、林田の成績と比較。	
#	461	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明		
#	462	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#		
#	463	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#		
#	464	#	頰齒1	#	#	#	#	#	#		
#	465	#	下顎骨1	#	#	#	#	仕令または老令	#	完熟した歯根及び歯根分岐部の痕がある。	
#	466	#	前肢骨1	中世14C後半	不明	不明	不明	133.4	中形馬の中では中位の馬	肩甲骨推定最大長330.0、林田の成績と比較。	
#	467	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	中形馬	栄養孔の高さにおける骨体巾43.6。	
#	468	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	不明		
#	469	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#		
#	470	#	後肢骨1	#	#	#	#	129.4(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	№386右距骨とほぼ同じ。距骨内外着車上端間距離25.8、着車溝深11.1。	
#	471	#	前肢骨1	#	#	#	#	137.4	中形馬の中では大きい馬	林田の成績と比較。	
#	472	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明		
#	473	#	前肢骨1	#	#	#	#	#	#		
#	474	#	前肢骨1	#	#	#	#	136	中形馬の中では大きい馬	上脛骨々体最小巾36.4、林田の成績と比較。	
#	475	#	前肢骨1	#	#	#	#	130.3(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	上脛骨々体最小巾33.4、林田の成績と比較。	
#	476	#	前肢骨1	#	#	#	#	129.8(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	上脛骨々体最小巾33.0、最小径39.6、林田の成績と比較。	
#	477	#	前肢骨1	#	#	#	#	130(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	上脛骨々体最小巾33.6、林田の成績と比較。	
#	478	#	後肢骨1	#	#	#	#	121.6	小形馬の中では大きい馬	№419右大副骨とほぼ同じ、左大副骨々体中央部巾34.3。	
#	479	#	後肢骨1	#	#	#	#	不明	不明		
#	480	#	後肢骨1	#	#	#	#	131.1(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	脛骨々体中央部巾38.1、林田の成績と比較。	
#	484	#	前肢骨1	#	#	#	#	不明	不明		
#	485	#	前肢骨1	#	#	#	#	仕令または老令	115	小形馬の中では中位の馬	骨端端しっかりしている。中手骨々体中央部巾27.9、林田の成績と比較。
#	486	#	頰齒1	#	#	15.8	仕令	140よりやや小さい	中形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに20%以上小さい。	

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き さ		備 考
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	487	#	類歯1	#	#	11.6	壮令	135(130~140)	中形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	488	#	下顎骨1	#	#	不明	不明	不明	不明	
#	489	馬	後肢骨1	中世 14C後半	不明	不明	不明	115よりやや大きい	小形馬の中でも大きい馬	脛骨々体中央部巾34.0、林田の成績と比較。
#	490	#	後肢骨1	#	#	#	#	109.5よりやや大きい	小形馬	No108左中足骨よりやや大きい。
#	491	#	類歯1	#	#	7.5	壮令	130	中形馬の中では小さい馬	原産の長13.3。
#	492	#	類歯1	#	#	4才以下	幼令	140	大形馬の中では小さい馬	
#	493	#	類歯1	#	#	4才以下	幼令	101.2	小形馬の中でも小さい馬	開放歯根、小窩根部膨大、同時代の馬と比較すると歯冠長20%以上小さく歯冠巾も小さい。
#	494	#	前肢骨1	#	#	不明	不明	125(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	推定肩甲頭部巾55.2、林田の成績と比較。
#	495	#	後肢骨1	#	#	#	壮令	129.4	中形馬の中では小さい馬	No386右胫骨とほぼ同じ大きさ。内外骨車上端間距離27.5、骨車溝深13.2。
#	496	#	前肢骨1	#	#	#	不明	131.4	中形馬の中では小さい馬	上腕骨々体部最小巾32.8、最小径42.3、林田の成績と比較。
#	497	#	後肢骨1	#	#	#	不明	不明	不明	
#	498	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	
#	499	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	
#	500	#	前肢骨1	#	#	3才以下	幼令	126.4(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	前部関節面骨端縁より脱落。
#	501	#	下顎骨1	#	#	不明	不明	不明	不明	
#	502	#	類歯1	#	#	5.9	壮令	130よりやや小さい	中形馬の中では小さい馬	推定歯冠長23.9。
#	503	#	類歯1	#	#	15.5	壮令	130よりやや小さい	中形馬の中では小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	504	#	類歯1	#	#	18.8	老令	110~130	小形馬の中では大きい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長20%以上大きい。
#	507	#	後肢骨1	#	#	不明	不明	123.6(118.5~136)	小形馬の中では大きい馬	中足骨推定骨体中央部巾26.9、林田の成績と比較。
#	508	馬	後肢骨1	中世 14C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	511	#	類歯1	#	#	5.3	壮令	135.7	中形馬の中では中位の馬	前附節+中附節外側の長15.6。
#	512	#	類歯1	#	#	21.4	老令	120	小形馬の中では大きい馬	下内齧前後径6.2、左右径5.7。
#	514	#	類歯1	#	#	11.8	壮令	141	大形馬の中では小さい馬	
#	515	#	後肢骨1	#	#	不明	不明	115	小形馬の中では中位の馬	中足骨々体推定中央部巾26、林田の成績と比較。
#	516	#	前肢骨1	#	#	#	不明	不明	不明	
#	519	#	前肢骨1	#	#	#	#	131.5(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	左上腕骨々体部最小巾36.4、林田の成績と比較。
#	520	#	前肢骨1	#	#	#	#	130.9(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	右腕骨々体中央部巾36.4、林田の成績と比較。
#	521	#	類歯1	#	#	10	壮令	110~130	小形馬の中では中位の馬	同時代の馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともにやや小さい。
#	522	#	後肢骨1	#	#	4才以下	幼令	不明	不明	脛骨遠位部関節面骨端縁より脱落。

## 第3節 観察について

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き さ		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	523	#	切歯1	#	#	27.8	老令	110以下	小形馬の中でも小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長が50%以下で極めて小さい。
#	524	#	前肢骨1	#	#	不明	不明	131.1(118.5~136)	中形馬の中では小さい馬	右上腕骨々体部最小市33.9。林田の成績と比較。
#	525	#	前肢骨1	#	#	#	#	不明	不明	
#	526	#	後肢骨1	#	#	#	#	121.6(118.5~136)	小形馬の中では大きい馬	No419右大腿骨とほぼ同じ大きさ。
#	528	#	頬歯1	#	#	27才以上	老令	141	大形馬の中では小さい馬	
#	529	#	小歯片1	#	#	不明	不明	不明	不明	
#	599~602	#	頬歯4	中世—近世16C以降	#	9.3(8.4~10.2)	社会	140	大形馬の中では小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長はやや大きい歯冠巾、特に巾率が20%以上小さい。
#	604~619	馬	頬歯12、下顎骨4	近世	不明	15.9(12.1~20.6)	社会	133.8(124~141)	中形馬の中では中位の馬	同時代の馬と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともに普通である。
#	620~624	#	前肢骨2、後肢骨3	#	#	3	幼令	109.5~120	小形馬	右上腕骨遠位関節面即骨端縁より脱落。
#	237~252	牛	頬歯16	平安時代10C	不明	不明	社会	不明	現代黒毛和種よりやや小さい	同時代の牛と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	253~268	#	頬歯10、下顎骨4、前肢骨1、小骨片1	#	#	#	社会	不明	現代黒毛和種より大変小さい	左中手骨々体部推定中央部巾26.5、推定中央部径21.5、年令は10才を超えている。
#	284~286	#	頬歯3	#	不明	#	社会	不明	現代黒毛和種とほぼ同じ	同時代の牛と比較すると歯冠長ほぼ同じ。歯冠巾、巾率は20%以上小さい。
#	303~304	#	頬歯2	#	#	9C末~10C	#	不明	不明	
#	333	#	前肢骨	#	#	#	#	#	#	現代黒毛和種より大変小さい
#	369~376	#	前肢骨3、後肢骨1、肢骨4	中世14C後半	#	#	幼令	#	#	現代黒毛和種より大変小さい
#	396~398	#	頬歯2、下顎骨1	#	#	#	社会の中でも若い	#	#	現代黒毛和種とほぼ同じ
#	412・413	#	下顎骨2	#	#	#	不明	#	#	不明
#	416・417	#	切歯2	#	#	5才	社会の中では若い	#	#	現代黒毛和種よりやや小さい
#	438	#	頬歯1	#	#	不明	幼令	#	#	不明
#	439	#	頬歯1	#	#	#	不明	#	#	#
#	450	#	前肢骨1	#	#	#	社会または老令	#	#	現代黒毛和種より小さい
#	451	#	後肢骨1	#	#	#	不明	#	#	現代黒毛和種よりやや小さい
#	452	#	後肢骨1	#	#	#	#	#	#	現代黒毛和種より小さい
#	505	#	頬歯1	#	#	#	社会	#	#	現代黒毛和種より小さい
#	506	#	後肢骨1	#	#	#	不明	#	#	現代黒毛和種よりやや小さい

## 付章 上野園分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き き		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	510	牛	後肢骨1	中世 14C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	517	〃	後肢骨1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	現代黒毛和種よりやや小さい
#	518	〃	後肢骨1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	現代黒毛和種より小さい
#	527	〃	前肢骨1	〃	〃	〃	〃	〃	不明	
#	509	人	下肢骨1	中世 14C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	513	〃	下肢骨1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	530	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	291~ 293	鹿	頰歯3	15~16C 平安時代 10C	不明	不明	不明	不明	不明	
#	377~ 381	〃	前肢骨5	中世 14C後半	〃	〃	〃	〃	〃	
#	481	〃	肋骨1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	482	〃	前肢骨1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	483	〃	頸椎1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	484	〃	前肢骨1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	337	不明	小歯片1	平安時代 10C	不明	不明	不明	不明	不明	
#	338	〃	小歯片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	339	〃	小歯片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	340	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	341	〃	小歯片1	9C末~10C	〃	〃	〃	〃	〃	
#	342	〃	小歯片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	343	〃	肢骨片1	平安時代 —中世	〃	〃	〃	〃	〃	
#	531	〃	肢骨片1	中世 14C後半	〃	〃	〃	〃	〃	
#	532	〃	肢骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	533	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	534	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	535	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	536	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	537	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	538	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	539	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	540	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	541	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	542	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	543	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	544	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	545	〃	肢骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	546	〃	肢骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	547	不明	小骨片1	中世 14C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	548	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	549	〃	肢骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	550	〃	肢骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	551	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	552	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	553	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	554	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	555	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	556	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
#	557	〃	小骨片1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

## 第3節 観察について

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年 令		大 き き		摘 要
						推定年齢	年齢区分	推定体高	体高区分	
#	558	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	559	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	560	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	561	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	562	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	563	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	564	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	565	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	566	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	567	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	568	#	肢骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	569	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	570	不明	小骨片1	中世 14C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	571	#	肢骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	572	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	573	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	574	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	575	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	576	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	577	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	578	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	579	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	580	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	581	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	582	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	583	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	584	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	585	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	586	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	587	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	588	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	589	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	590	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	591	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	592	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	593	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	594	不明	小骨片1	中世 14C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	595	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	596	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	597	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	598	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	603	#	小歯片1	中世～近世 16C以降	#	#	#	#	#	
#	625	#	小骨片1	近世	#	#	#	#	#	
#	626	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	627	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	628	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	629	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	630	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
G	631・ 632	#	頰歯1, 頰蓋骨 1	古墳時代 ～奈良時代 7C末～ 8C初期	不明	不明	不明	130～140	中形馬の中では 小さい馬かまた は中位の馬	中貯歯の長さ5.5、この馬は 体高130かまたはそれより やや大きい馬。
#	633～ 635	#	頰歯3	平安時代 10C～11C 代	#	11～13	壮令	130(110-140)	中形馬の中では 小さい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長は普通の大きさである が歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	639・ 640	#	頰歯2	# 9C代	#	10.1	壮令	不明	不明	

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き き		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	643	#	頬歯1	# 10C~11C代	#	5才以下	幼令	119より小さい	小形馬	小寛長10.8、巾3.4、高61.3。
#	644	#	頬歯1	#	#	5才以下	幼令	不明	不明	
#	645	#	頬歯1	#	#	不明	不明	#	#	
#	648	#	頬歯1	平安時代	#	#	#	#	中形馬の中では大きい馬	小寛耳状部の長径3.5。
#	649	#	頬歯1	# 9C代	#	15~18	老令	130~140	中形馬	前歯の長7.5、頬側歯冠高33.4。
#	650	#	頬歯1	#	#	9.9	社会	140よりやや小さい	中形馬の中では大きい馬	推定頬側歯冠高39.8、同時代の馬と比較すると歯冠長は普通の大きさである。
#	651	#	頬歯1	#	#	不明	不明	110以下	小形馬の中では小さな馬	下前歯冠の前後径9.4。
#	652	#	小歯片1	# 後期 9C代	#	#	#	不明	不明	
#	653	#	小歯片1	#	#	#	#	#	#	
#	654	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	670	#	頬歯1	中世 15C	#	4	幼令	130~140	中形馬	推定歯冠長28.6。
#	671	#	前歯骨1	# 14C後半	#	不明	不明	122.4(118.5~136)	小形馬の中でも大きい馬	左脛骨々体推定中央部巾32.0、中央部径22.5、林田の成瀬と比較。
#	688~ 724	馬	切歯5、頬歯24 頭蓋骨2、下顎骨6	不明	不明	8(7.6~ 11.8)	社会	123.5(110.0~ 130.0)	小形馬の中では大きい馬	現代小格馬体高110cmの馬と比較すると歯冠長、歯冠巾は大きいのが巾率は同じである。
#	725~ 733	#	頬歯8、下顎骨1	#	#	9.2(4.2~ 11.7)	社会	110~130	#	現代小格馬体高110cmの馬と比較すると歯冠長は大きいのが巾率は小さい。
#	736	#	頬歯1	#	#	6.7~8.2	社会	120(110~ 130)	小形馬の中では大きい馬	下次歯の長10.8、下内歯の巾5.9。下後射歯の長7.3。
#	737	#	後肢骨1	#	#	不明	不明	不明	不明	
#	738	#	頬歯1	#	#	7.5	社会	133.0(130~ 140)	中形馬の中では中位の馬	現代小格馬体高130cmの馬と比較すると歯冠長はほぼ同じであるが歯冠巾、巾率はともに小さい。
#	636~ 638	牛	頬歯3	平安時代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	641・ 642	#	頬歯2	#	#	#	#	#	#	
#	646	#	頬歯1	# 10C代	#	#	老令	#	#	咬耗激しい。
#	647	#	頬歯1	#	#	#	社会	#	#	咬耗進んでいる。
#	655	#	小骨片1	#	#	#	不明	#	#	
#	676~ 685	人	頭蓋骨10	近世~近代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	686	#	切歯1	#	#	#	#	#	#	
#	734	#	臼歯1	不明	#	#	#	#	#	
#	735	#	臼歯片1	#	#	#	#	#	#	
#	656	不明	小歯片1	平安時代 9C代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	657	#	小歯片1	#	#	#	#	#	#	
#	658	#	肢骨片1	# 10C代	#	#	#	#	#	
#	659	#	肢骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	660	#	小骨片1	# 9C代	#	#	#	#	#	
#	661	#	歯根片1	#	#	#	#	#	#	



## 第3節 観察について

区	No.	種類	歯骨の部位	時代	性	年 令		大 き き		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	662	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	663	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	664	#	小歯片1	10C代	#	#	#	#	#	
#	665	#	小骨片1	9C代	#	#	#	#	#	
#	666	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	667	#	小歯片1	10C~11C代	#	#	#	#	#	
#	668	#	小骨片1	10C代	#	#	#	#	#	
#	669	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	672	#	肢骨片1	中世 15~16C	#	#	#	#	#	
#	673	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	674	#	小歯片1	15C	#	#	#	#	#	
#	675	#	小骨片1	14C後半	#	#	#	#	#	
#	687	#	小骨片1	近世~近代	#	#	#	#	#	
#	739	#	小骨片1	不明	#	#	#	#	#	
#	740	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
H	741~ 746	馬	頰歯9	奈良時代 8C	不明	4才	幼令	110以下	小形馬の中では 小さい馬	中形馬より低い。前後径2. 6高2.0。開放歯列。後歯の 長5.2。
#	754・ 755	#	頰歯2	中世~近代 15~16C ~近代	#	16以上	老令	130前後	中形馬の中では 小さい馬	小馬の長13.2、巾8.2、高20. 6。
#	756	#	頰歯1	#	#	17.4	老令	110	小形馬の中では 中位の馬	推定頰歯冠長29.7。
#	750	不明	小歯片1	奈良時代 ~平安時代 8C後半 ~9C後半	不明	不明	不明	不明	不明	
#	751	#	小歯片1	8C~9C代	#	#	#	#	#	
#	752	#	小骨片1	中世15C	#	#	#	#	#	
#	753	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
I	794~ 807	馬	切歯1、頰歯13	平安時代	不明	14.5(12~ 13.7)	仕令の 中でも 老令に 近い	129.6(110~ 141)	中形馬の中では 小さい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長は普通の大きさである が歯冠巾、巾率ともに小さ い。
#	808~ 818	#	頰歯11	#	#	16.1(14.2 ~18.8)	老令	116(110~ 130)	小形馬の中では 中位の馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長、歯冠巾、巾率ともに 小さい。
#	819~ 827	#	頰歯9	平安時代	#	4	幼令	138.9(131.5 ~141)	中形馬の中では 大きい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長は普通の大きさである が歯冠巾、巾率ともに小さ い。
#	828~ 836	#	頰歯7、下顎骨 2	9C代	#	4	幼令	141.4(130~ 159)	大形馬の中では 小さい馬	同時代の馬と比較すると歯 冠長は普通の大きさである が歯冠巾、巾率ともにやや 小さい。
#	844~ 848	#	頰歯4、小骨片 1	平安時代	#	不明	不明	110よりやや 大きい	小形馬の中では 小さい馬	下原産または下次産の長 10.9。
#	849~ 851	#	頰歯2、小骨片 1	#	#	#	#	不明	不明	
#	852~ 854	#	切歯1、頰歯1 小骨片1	#	#	#	仕令ま た老令	#	#	切歯が上顎切歯のときは 11~18才。下顎切歯のとき は6.1~8.1才。

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	No.	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き き		摘 要		
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分			
#	855~ 859	#	切歯4、類歯1	#	#	9C代	#	5~5.5	牡令	140~141	大形馬の中では小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長極めて大きいが歯冠巾、巾率特に巾率が小さい。
#	874・ 875	#	類歯2	#	#	不明	#	不明	不明	不明	不明	
#	876・ 877	#	前肢骨2	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	883	#	類歯1	#	#	10C代	#	#	#	130~140	中形馬	中形歯巾4.5、前歯巾7.2。
#	884	#	切歯1	#	#	#	#	8.7	牡令	130	中形馬の中では小さい馬	同時代の馬と比較すると歯冠長大きい。歯冠巾、巾率、特に巾率が小さい。
#	886	#	類歯1	#	#	#	#	8.7~11	牡令	109(109~130)	小形馬の中では小さい馬	推定下次歯の長9.6。
#	888	#	類歯1	#	#	#	#	4	幼令	140	大形馬の中では小さい馬	
#	767・ 768	牛	類歯2	奈良時代	不明	8C代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	769	#	類歯1	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	775~ 793	#	類歯15、下顎骨4	平安時代	#	9C代	#	#	牡令	#	現代黒毛和種と同じ	同時代の牛と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともにやや小さい。
#	837~ 843	#	類歯6、下顎骨1	#	#	#	#	#	牡令	#	現代黒毛和種よりやや小さい	咬耗軽い。同時代の牛と比較すると歯冠長、歯冠巾、巾率ともに普通である。
#	860~ 862	#	類歯2、下顎骨1	#	#	#	#	#	牡令	#	現代黒毛和種と同じ	同時代の牛と比較すると歯冠長は普通である。
#	863~ 866	#	類歯4	#	#	#	#	#	牡令	#	現代黒毛和種よりやや小さい	同時代の牛と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	871~ 873	#	類歯3	#	#	#	#	#	牡令	#	現代黒毛和種よりやや小さい	咬耗やや進む。同時代の牛と比較すると歯冠長は普通である。
#	878・ 879	#	類歯1、下顎骨1	#	#	#	#	#	老令	#	不明	内部エナメル質の高11.5。
#	880・ 881	#	類歯2	#	#	#	#	#	牡令	#	現代黒毛和種よりやや小さい	
#	882	#	類歯1	#	#	10C代	#	#	不明	#	不明	
#	885	#	類歯1	#	#	9C代	#	#	牡令	#	現代黒毛和種とほぼ同じ	咬耗かなり進む。同時代の牛と比較すると歯冠長はやや小さい。
#	887	#	類歯1	#	#	10C代	#	#	牡令	#	現代黒毛和種とほぼ同じ	同時代の牛としては大きい。牡令の中では若い。
#	889	#	類歯1	#	#	9C代	#	#	不明	#	不明	
#	890	#	小骨片	#	#	#	#	#	#	#	#	
#	891	馬又は牛	肢骨片	平安時代	不明	9C代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	760~ 763	猪	類歯3、小骨片1	古墳時代	不明	7C代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	867~ 870	#	類歯4	平安時代	#	10C代	#	#	#	#	#	
#	757~ 763	鹿	類歯2、小骨片1	古墳時代	不明	#	不明	2才1ヶ月~2才3ヶ月	牡令	不明	不明	P'面出来咬耗。M'面歯痕跡出現していない。鹿2年1ヶ月で永久歯出そろうので牡令。
#	770	#	類歯1	奈良時代	#	8C代	#	6.5	牡令	#	#	舌側歯冠高(後輩咬頭一歯痕跡)13.8、大歯司の調査成績(注10)と比較。

## 第3節 観察について

区	No.	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き き		摘 要
						推定年齢	存命区分	推定体高	体高区分	
#	764	不明	小骨片1	古墳時代 7C代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	765	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	766	#	小骨片1	古墳時代 ～奈良時代 7C末 ～8C初頭	#	#	#	#	#	
#	771	#	小骨片1	奈良時代 8C代	#	#	#	#	#	
#	772	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	773	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	774	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	892	#	小骨片1	平安時代 9C代	#	#	#	#	#	
#	893	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	894	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	895	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	896	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	897	#	小骨片1	平安時代	#	#	#	#	#	
#	898	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	899	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	900	#	小骨片1	9C代	#	#	#	#	#	
#	901	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	902	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	903	不明	小骨片1	平安時代 9C代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	904	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	905	#	小骨片1	平安時代	#	#	#	#	#	
#	906	#	小骨片1	平安時代 10C代	#	#	#	#	#	
#	907	#	小骨片1	平安時代	#	#	#	#	#	
#	908	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	909	#	小骨片1	9C代 不明	#	#	#	#	#	
J	944～ 953	馬	切歯1、歯槽11	不明	不明	4才以下	幼令	140	大形馬でも小さい馬	現代小格馬体高140cmの馬と比較すると歯冠長はほぼ同じである。
#	963～ 965	#	類歯3	#	#	4才以下	幼令	140	大形馬の中では小さい馬	未萌出歯及び未咬耗歯。現代小格馬体高140cmの馬と比較すると歯冠長はほぼ同じであるが歯冠巾、巾率はともに小さい。
#	966・ 967	#	切歯1、類歯1	#	#	3	幼令	140	大形馬の中では小さい馬	R P推定歯冠長26.5、未萌出歯。
#	968・ 969	#	類歯2	#	#	16.5	老令	不明	不明	推定顎側歯冠長25.8。
#	970	#	類歯1	#	#	9.4以下	壮令	#	小形馬	中附歯細く低い。中附歯前後径2.4高1.0。現金歯高49.4。
#	971	#	類歯1	#	#	11.4以下	壮令	130	中形馬の中では小さい馬	前附歯+前歯の長10.9。
#	910・ 911	牛	類歯2	古墳時代 6C～7C代	不明	不明	不明	不明	現代黒毛和種よりやや大きい	L.M.推定歯冠長39.0。同時代の牛と比較すると歯冠長やや大きい。
#	912	#	類歯1	古墳時代 ～奈良時代 7C～8C代	#	#	#	#	不明	
#	913	#	類歯1	#	#	#	#	#	#	
#	914	#	類歯1	#	#	#	老令	#	#	現金歯高7.0。

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

区	№	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き き		摘 要
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	915	#	頬歯1	#	#	#	老令	#	#	現代黒毛和種より大重小さい
#	956~962	#	頬歯7	不明	#	#	社令	不明	#	現代黒毛和種よりやや小さい
#	916	馬又は牛	小歯片1	古墳時代 ~奈良時代 7C-8C代	不明	不明	不明	不明	不明	現代黒毛和種と比較すると歯冠長中や小さい歯冠巾、巾率ともに大きい。
#	920~943	猪	頬歯10、頭蓋骨9、下顎骨2、椎骨1、前肢骨1、小骨片1	近世~近代	不明	生後 4~6ヶ月	II段階 -3	不明	不明	M <sub>1</sub> 、M <sub>2</sub> は歯冠長現代猪より大きい(9.3~9.9%)。M <sub>3</sub> を除き現代猪より長さの割合に多い。
#	917	不明	小骨片1	古墳時代 ~奈良時代 7C-8C代	不明	不明	不明	不明	不明	
#	918	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	919	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	972	#	小歯片1	不明	#	#	#	#	#	
#	973	#	小歯片1	#	#	#	#	#	#	
#	974	#	小歯片1	#	#	#	#	#	#	
#	975	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
J	976	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	977	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	978	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	979	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
#	980	#	小骨片1	#	#	#	#	#	#	
Z	981~991	馬	頬歯10、下顎骨1	平安時代	不明	4.2	幼令	133.1(123~143)	中形馬の中では中位の馬	同時代の馬と比較すると歯冠長は普通であるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	992~995	#	頬歯4	中世~近代 16C~19C	#	4	幼令	139.5(135~148)	大形馬の中では小さい馬	体高がある割に後臼歯小さい同時代の馬と比較すると全体としては歯冠長、歯冠巾、巾率ともに普通である。
#	996	#	頬歯1	近代 19C後半 ~20C	#	5	社令	139~140	中形馬	下後歯長7.1、巾5.8、下後附歯長7.4、巾6.3。
不明	997~1003	馬	頬歯7	不明	不明	9(7.8~10)	社令	141	大形馬の中では小さい馬	現代小格馬体高140cmの馬と比較すると歯冠長はほぼ同じであるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	1004~1010	#	頬歯5、小骨片1	#	#	不明	幼令	143.3(136.7~159)	大形馬の中では小さい馬	現代小格馬体高140cmの馬と比較すると歯冠長はやや大きい歯冠巾、巾率は尖々25.6%、32.3%小さい。
#	1011~1019	#	頬歯6、下顎骨3	#	#	10.9(8.2~13.6)	社令	135.0(129.4~135)	中形馬の中では中位の馬	現代小格馬体高130cmの馬と比較すると歯冠長はほぼ同じであるが歯冠巾、巾率は尖々25.9%、27.5%小さい。
#	1020~1026	#	切歯2、頬歯5	#	#	14.9(12.8~16.0)	社令	128.6(127.5~130.2)	小形馬の中では大きい馬	現代小格馬体高110cmの馬と比較すると歯冠長は24.7%も大きい巾率は11.2%も小さい。
#	1027・1028	#	頬歯2	#	#	13.0(10.8~15.2)	社令	不明	中形馬	前附歯+前歯の長12.7。前附歯細く小さいので大形馬ではない。

## 第3節 観察について

区	No	種類	歯骨の部位	時代	性	年令		大 き さ		備 考
						推定年齢	年令区分	推定体高	体高区分	
#	1029・1030	馬	頬歯2	馬	馬	1704-30	壮令	140よりやや大きい	大形馬の中では小さい馬	現代小格馬体高140cmの馬と比較すると歯冠長はほぼ同じであるが歯冠巾、巾率ともに小さい。
#	1031	馬	頬歯1	馬	馬	不明	不明	不明	中形馬	前附歯大きく磨滅する。前附歯の大きなことにより中形馬。
#	1032	馬	頬歯1	馬	馬	13-14.8	壮令	139.7	中形馬の中では大きい馬	中附歯+後歯の長14.7。中附歯の前後径5.3。
#	1033	馬	頬歯1	馬	馬	10.2-13.5	壮令	不明	中形馬	小窩の長13.2。巾10.6。
#	1034	馬	頬歯1	馬	馬	12.5-15.6	壮令	不明	小形馬の中でも大きい馬	後小窩の長12.9。巾9.6。
#	1035	馬	頬歯1	馬	馬	10.3-13.5	壮令	不明	大形馬の中では小さい馬	原歯後谷の長7.1推定頬歯歯冠高38.0。
#	1036	馬	頬歯1	馬	馬	11.4-14.5	壮令	120以上(126.8)	小形馬 ～中形馬	原歯後谷の長5.3。推定頬歯歯冠高35.7。
#	1037	馬	頬歯1	馬	馬	12.3-15.4	壮令	122.5以上	小形馬 ～中形馬	原歯後谷の長5.5。推定頬歯歯冠高32.6。
#	1038	馬	頬歯1	馬	馬	8.2	壮令	140	大形馬の中では小さい馬	推定歯冠長28.9。
#	1039	馬	頬歯1	馬	馬	10.8-13.5	壮令	130-140	中形馬	前附歯+前歯の長13.9。 前附歯の前後径5.8。
#	1040	馬	頬歯1	馬	馬	6.7-10.5	壮令	110以下	小形馬の中では小さい馬	前附歯+前歯の長8.1。 前附歯の前後径4.2。
#	1041	馬	頬歯1	不明	不明	6.2-9.8	壮令	110以下	小形馬の中では小さい馬	前附歯+前歯の長7.4。 前附歯の前後径3.8。
#	1042	馬	頬歯1	馬	馬	10.2-14.4	壮令	110	小形馬の中では小さい馬	前附歯の前後径3.6。
#	1043	馬	頬歯1	馬	馬	不明	不明	110以下	小形馬の中では小さい馬	中附歯の前後径2.1。
#	1044	馬	頬歯1	馬	馬	馬	馬	不明	不明	
#	1045	馬	頬歯1	馬	馬	11.5-14.8	壮令	130	中形馬の中では小さい馬	後歯の長11.2。
#	1046	馬	頬歯1	馬	馬	9.2-12.7	壮令	130	中形馬の中では小さい馬	原歯後谷の長5.2。次歯より原歯後谷先歯迄の長14.5。
#	1047	馬	頬歯1	馬	馬	12.8-15.4	壮令	130以上	中形馬	推定頬歯歯冠高32.6。
#	1048	馬	頬歯1	馬	馬	7.8-11.4	壮令	130	中形馬の中では小さい馬	推定頬歯歯冠高43.4。
#	1049	馬	頬歯1	馬	馬	5-8.4	壮令	140	大形馬の中では小さい馬	次歯より原歯後谷先歯迄の長15.5。推定頬歯歯冠高51.5。
#	1050	馬	頬歯1	馬	馬	不明	不明	不明	不明	
#	1051	馬	頬歯1	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
#	1052	馬	頬歯1	馬	馬	6.8-11.8	壮令	130以上	中形馬	推定頬歯歯冠高45.4。
#	1053	馬	頬歯1	馬	馬	6.8-11.8	壮令	130以上	中形馬	下原歯の長10.6。
#	1054	馬	後臼歯1	馬	馬	不明	不明	不明	不明	
#	1055	不明	小骨片1	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
#	1056	馬	小骨片1	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
#	1057	馬	小骨片1	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
#	1058	馬	小骨片1	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
#	1059	馬	小骨片1	馬	馬	馬	馬	馬	馬	

附表 8 出土遺存体(歯)計測値

No	種類	部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頰側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頰側-舌側)	重量	摘 要
1	牛	RP <sup>3</sup> の一部	欠	欠	/	28.8	28.8	1.0-欠	3.9	
2	牛	RP <sub>2</sub> の舌面	11.3	欠	/	舌側 11.9	11.9	欠-1.1	0.4	
3	牛	RM <sub>2</sub>	24.8	15.4	62.1	21.4	27.9	1.3-1.0	6.5	
4	牛	RM <sub>2</sub>	27.4	14.1	51.5	34.6	41.2	1.4-1.1	16.3	
5	牛	RM <sub>2</sub>	40.4	13.8	34.2	歯槽に傾立	41.2	1.6-1.2	41.2	
7	牛	LP <sub>2</sub>	19.9	10.9	54.8	21.8	24.8	1.4-1.2	4.8	
8	牛	LP <sub>2</sub>	欠	11.5	/	24.1	歯槽に傾立	1.4-1.2	111.0	
9	牛	LM <sub>2</sub>	23.1	14.9	64.5	23.6	#	1.5-1.0		重量はNo.8に含まれる。
10	牛	LM <sub>2</sub>	26.8	14.8	55.2	歯槽に傾立	#	1.4-1.1		#
11	牛	LM <sub>2</sub>	40.8	15.4	37.7	#	#	1.5-1.4		#
15	牛	RP <sup>4</sup>	18.1	16.9	93.4	#	/	1.1-0.9	556.0	
16	牛	RM <sup>4</sup>	25.5	21.7	85.1	#	/	1.1-1.3		重量はNo.15に含まれる。
17	牛	RM <sup>2</sup>	29.8	20.8	69.8	#	/	1.4-1.4		#
18	牛	RM <sup>2</sup>	30.8	20.3	65.9	#	/	1.1-1.0		#
19	牛	LP <sup>2</sup>	15.4	15.3	99.4	#	/	1.0-0.7		#
20	牛	LP <sup>2</sup>	20.8	15.7	75.4	#	/	1.0-1.0		#
21	牛	LP <sup>4</sup>	17.8	17.2	95.6	#	/	1.3-1.4		#
22	牛	LM <sup>2</sup>	26.1	20.8	82.9	#	/	1.0-1.5		#
23	牛	LM <sup>2</sup>	29.6	21.1	71.3	#	/	1.4-1.7		#
24	牛	LM <sup>2</sup>	30.9	19.8	64.1	#	/	1.2-1.2		#
35	馬	LI <sup>1</sup>	19.5	8.8	45.1	43.4	54.2	1.3-0.9	5.2	
36	馬	LI <sup>2</sup>	18.2	8.8	48.4	41.8	49.7	0.8-未磨耗	4.1	
37	馬	右上顎切歯歯根	欠	欠	/	欠	28.5	欠	1.9	
38	馬	RI <sup>1</sup>	18.9	欠	/	欠	26.4	1.2-1.0	2.0	重量に修繕材を含む。
39	馬	RI <sup>1</sup>	欠	欠	/	40.8	47.4	1.1-欠	1.8	
40	馬	RI <sub>2</sub>	欠	欠	/	欠	39.3	欠	2.1	
41	馬	RP <sub>2</sub>	32.4	13.2	40.7	40.9	55.5	1.3-0.8	14.3	
42	馬	RP <sub>2</sub>	28.3	15.1	53.4	55.4	70.4	1.2-1.0	21.2	
43	馬	RP <sub>2</sub>	27.0	15.4	57.0	59.6	75.0	1.4-1.2	28.5	
44	馬	RM <sub>2</sub>	24.9	13.2	53.0	55.4	71.3	1.3-1.0	21.3	
45	馬	RM <sub>2</sub>	25.5	12.9	50.6	55.0	74.5	1.4-1.0	20.2	
46	馬	RM <sub>2</sub>	29.3	11.9	40.6	51.2	64.2	1.2-1.0	15.8	
52	牛	右上顎前臼歯内部エナメル質	長 6.9	巾 5.9	/	/	高 14.9	0.6-0.7	1.1	
53	馬	LM <sup>2</sup>	23.6	欠	/	47.9	59.2	1.2-0.6	12.1	
54	馬	左上顎歯根小雛	欠	欠	/	欠	/	/	1.2	
58	馬	RI <sub>2</sub>	16.4	8.4	51.2	34.6	51.5	0.8-/	2.9	
59	馬	LI <sub>2</sub>	15.2	欠	/	35.6	50.1	1.0-/	2.7	
60	馬	LI <sub>2</sub>	15.4	欠	/	25.7	33.8	未萌出歯	1.4	
61	馬	LI <sub>2</sub>	15.2	欠	/	欠	25.9	#	0.4	
62	馬	RP <sub>2</sub>	27.6	14.7	53.3	8.3	22.5	1.0-/	4.6	
63	馬	RP <sub>2</sub>	23.1	13.4	58.0	13.0	32.3	1.3-/	5.3	
64	馬	RP <sub>2</sub>	欠	欠	/	4.4	14.2	1.3-/	1.4	
65	馬	RM <sub>2</sub>	欠	欠	/	38.3	61.6	1.2-/	11.4	
66	馬	RM <sub>2</sub>	24.4	13.1	53.7	56.2	74.4	1.2-/	17.6	
67	馬	RP <sub>2</sub>	29.6	12.4	41.9	24.7	50.6	未萌出歯	11.9	

## 第3節 観察について

No	種類	部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頰側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頰側-舌側)	重量	摘 要
68	馬	RP <sub>1</sub>	24.4	補修	/	36.9	56.4	#	9.2	
69	馬	RP <sub>2</sub>	欠	欠	/	28.4	44.5	#	4.2	
70	馬	LP <sub>2</sub>	欠	補修	/	5.3	21.4	1.0-/	4.0	
71	馬	LP <sub>2</sub>	23.8	14.3	60.1	6.9	34.0	1.1-/	4.9	
72	馬	LP <sub>2</sub>	23.1	11.8	51.1	10.7	28.9	1.3-/	3.9	
73	牛	右上顎乳歯舌面	欠	欠	/	7.9	12.2	1.4-/	0.4	
74	馬	LM <sub>2</sub>	22.0	12.5	56.8	15.2	42.4	1.4-1.0	10.1	
90	馬	LM <sup>a</sup>	25.4	21.3	83.9	34.8	52.1	1.5-1.1	24.4	
98	馬	LM <sup>a</sup> の一部	欠	欠	/	57.4	73.9	0.9-欠	3.4	
99	馬	LP <sup>a</sup> の一部	欠	欠	/	欠	58.7	0.9-欠	3.6	
100	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	13.2	土壌を含む。
103	馬	LM <sup>a</sup> の一部	欠	欠	/	43.7	54.9	欠	9.8	
105	馬	小歯片	/	/	/	/	/	/	3.4	
107	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	3.8	
137	馬	RM <sub>1</sub> の一部	欠	欠	/	欠	42.0	欠-1.1	1.0	
138	馬	RM <sub>1</sub> の一部	欠	欠	/	欠	34.6	欠-1.3	1.3	
142	馬	RM <sup>a</sup> の一部	欠	欠	/	36.9	46.8	1.2-欠	3.3	
143	馬	RM <sub>1</sub> の一部	29.3	13.0	44.4	39.3	54.1	1.4-1.2	16.5	
145	馬	LM <sub>2</sub> の一部	欠	欠	/	19.4	31.2	1.5-欠	1.8	
146	馬	LM <sup>a</sup> の一部	長12.6	巾7.4	/	/	高27.6	1.0-0.8	2.1	
148	馬	RM <sup>a</sup>	25.1	欠	/	48.5	64.2	1.2-0.9	26.3	推定歯冠巾25.0
167	馬	RP <sup>a</sup>	欠	23.9	/	11.7	39.1	1.5-1.0	13.7	# 35.2
168	馬	RP <sup>a</sup>	欠	28.0	/	13.0	38.4	1.6-1.2	15.9	# 26.5
169	馬	LP <sub>2</sub>	欠	欠	/	11.8	22.2	1.5-欠	3.2	
171	兎	RP <sup>a</sup>	4.9	2.1	42.9	歯槽中に植立	/	/		重量No170に含まる。
172	兎	RP <sup>a</sup>	4.6	2.4	48.9	#	/	/		#
173	兎	RM <sup>a</sup>	4.6	2.8	60.9	#	/	/		#
174	兎	RM <sup>a</sup>	4.4	2.2	50.0	#	/	/		#
175	兎	LP <sup>a</sup>	欠	2.4	/	#	/	/		#
176	兎	LM <sup>a</sup>	4.8	2.7	56.3	#	13.8	/		#
198	兎	左上顎切歯	3.3	2.4	72.7	20.5	20.5	/	0.2	
199	兎	頬歯片	4.5	2.4	53.3	/	16.8	/	0.5	
200	兎	頬歯片	4.4	2.4	54.5	/	16.7	/	0.3	
201	兎	頬歯片	4.2	2.2	52.4	/	15.6	/	0.4	
202	兎	頬歯片	4.7	2.4	51.1	/	14.5	/	0.5	
203	兎	頬歯片	4.5	2.4	53.3	/	14.2	/	0.5	
204	兎	頬歯片	4.6	2.3	50.0	/	15.1	/	0.3	
216	馬	RM <sub>1</sub>	欠	13.8	/	54.5	67.4	1.4-0.9	27.1	推定歯冠長27.4
220	馬	RI <sub>1</sub>	16.8	8.6	51.2	下顎骨に植立	/	1.4-未磨耗	589.2	
221	馬	RI <sub>2</sub> 萌出中	16.2	8.6	53.1	#	/	1.0-未磨耗		重量No220に含まる。
222	馬	LI <sub>1</sub>	17.4	8.3	47.7	#	/	1.2-1.2		#
223	馬	Ldi <sub>2</sub>	14.3	8.7	60.8	#	/	1.1-1.1		#
224	馬	Ldi <sub>1</sub>	12.1	9.0	74.3	#	/	1.0-欠		#
225	馬	LP <sup>a</sup>	32.4	10.9	33.6	#	/	萌出中		#
226	馬	Ldm <sub>3</sub>	28.8	14.9	51.7	#	/	0.9-0.9		#
227	馬	Ldm <sub>2</sub>	29.2	14.8	50.7	#	/	1.0-0.9		#
228	馬	LM <sub>1</sub>	28.2	15.6	55.3	#	/	1.1-1.0		#
229	馬	LM <sub>2</sub>	28.2	15.5	55.0	#	/	1.0-0.9		#

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	類別・骨例歯冠高	現全歯高	エナメル厚(磨蝕一舌節)	重量	備 考
231	馬	RM <sub>2</sub>	22.4	14.3	63.8	30.1	51.6	1.4-1.0		重量はNo.233に含まれる。
232	馬	RM <sub>2</sub>				24.2	41.5	1.4-1.2		#
237	牛	RP <sup>+</sup> 顎面	欠	欠	/	28.4	28.4	1.2-欠	0.9	
238	牛	LP <sup>+</sup> 顎面	欠	欠	/	25.4	25.4	1.2-欠	1.0	
239	牛	LP <sup>+</sup> の一部	19.9	欠	/	27.5	27.5	1.2-欠	2.0	
240	牛	LP <sup>+</sup> 顎面	欠	欠	/	27.6	27.6	1.2-欠	0.7	
241	牛	左上顎後臼歯後葉後歯	長19.3	巾 7.3	/	欠	高40.8	厚 0.9	1.5	
242	牛	左上顎後臼歯前葉舌面	# 8.1	# 9.3	/	欠	# 38.8	# 1.4	1.0	
243	牛	左上顎後臼歯後葉の一部	# 8.0	# 8.6	/	欠	# 43.6	# 1.5	3.9	
244	牛	右下顎後臼歯前葉の一部	# 15.5	# 12.0	/	23.3	23.3	1.4-欠	2.3	
245	牛	左下顎後臼歯後葉の一部	# 10.5	# 8.9	/	24.3	24.3	1.1-欠	2.1	
246	牛	左下顎後臼歯前葉の一部	# 10.2	# 10.0	/	27.9	27.9	1.4-欠	1.5	
247	牛	RP <sub>2</sub> 舌面	# 20.4	欠	/	舌面 23.9	23.9	欠 -1.1	0.9	推定歯冠長21.4
248	牛	RM <sub>2</sub> 前葉の一部	# 11.6	巾 5.6	/	/	高38.5	厚 1.4	2.0	
249	牛	LP <sub>2</sub> の顎面	# 18.8	欠	/	18.8	18.8	1.0-欠	0.8	推定歯冠長19.9
250	牛	LP <sub>2</sub> の顎面	# 18.0	欠	/	24.1	24.1	1.2-欠	1.2	推定歯冠長22.2
251	牛	LM <sub>2</sub> 前葉の一部	# 11.4	巾 5.3	/	/	高37.3	厚 1.3	1.1	
252	牛	RM <sub>2</sub> 中葉の一部	# 11.9	# 5.6	/	/	# 37.2	# 1.3	2.0	
253	牛	LP <sup>+</sup> 顎面	18.2	欠	/	17.5	17.5	1.5-欠	1.2	
254	牛	LP <sup>+</sup>	19.5	欠	/	22.4	22.4	1.0-0.9	3.7	
255	牛	RP <sup>+</sup> 顎面	16.9	欠	/	21.3	21.3	1.3-欠	1.3	
256	牛	RM <sup>+</sup>	27.4	21.7	79.1	25.4	26.7	1.5-1.5	10.1	
257	牛	RM <sup>+</sup>	30.8	20.5	66.6	32.4	38.0	1.6-1.5	15.8	
258	牛	LP <sub>2</sub>	19.5	10.8	55.4	16.2	18.7	1.5-1.5	2.2	
259	牛	LP <sub>2</sub>	21.6	12.2	56.5	18.1	20.3	1.6-1.4	3.8	
260	牛	LM <sub>2</sub>	24.5	15.6	63.7	30.4	31.1	1.6-1.5	10.2	
261	牛	LM <sub>2</sub>	37.8	14.2	37.6	33.3	37.5	1.7-1.1	7.4	
262	牛	RM <sup>+</sup>	37.4	14.8	39.6	30.5	34.7	1.9-1.4	15.3	
269	馬	RM <sup>+</sup>	26.5	23.2	87.5	75.1	89.5	1.3-0.9	45.1	
270	馬	LM <sup>+</sup>	25.9	欠	/	64.2	75.6	1.2-欠	29.8	
271	馬	LM <sup>+</sup>	欠	欠	/	舌側 67.9	82.0	欠 -1.1	31.7	推定歯冠長26.2
272	馬	RP <sup>+</sup>	28.6	24.6	86.0	61.2	79.5	1.1-0.9	38.6	萌出後余り、経っていない。
273	馬	RP <sup>+</sup>	27.5	欠	/	60.5	73.6	1.0-欠	32.9	#
274	馬	LP <sup>+</sup> 顎面	28.8	欠	/	欠	59.9	1.2-欠	5.1	
275	馬	LP <sup>+</sup>	欠	欠	/	59.0	69.9	萌出直後歯	17.3	推定歯冠長27.5
276	馬	RI <sup>+</sup>	18.8	10.4	55.3	46.4	55.1	1.0-1.2	4.8	
277	馬	RI <sup>+</sup>	17.8	9.9	55.6	未萌出歯	25.5	未萌出歯	1.7	
278	馬	LI <sup>+</sup>	欠	10.6	/	42.9	52.2	1.0-1.3	2.5	
279	馬	RM <sup>+</sup> 顎面	欠	欠	/	40.9	58.9	1.0-欠	3.4	推定歯冠長24.6
280	馬	LM <sup>+</sup> 後葉	欠	欠	/	48.9	56.6	1.0-欠	2.5	
281	馬	LM <sup>+</sup> 顎面	23.6	欠	/	53.6	70.1	1.3-欠	5.2	



## 第3節 観察について

No	種類	部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	傾側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚(傾側一舌側)	重量	備 考
282	馬	右上前臼歯後歯	欠	欠	/	50.6	62.7	1.1-欠	3.5	推定歯冠長25.4
283	馬	左上前臼歯後歯	欠	欠	/	46.8	56.6	1.0-欠	2.9	推定歯冠長24.6
284	牛	R P*	21.6	欠	/	24.4	24.4	1.4-欠	1.6	
285	牛	R M <sub>2</sub>	39.4	13.4	34.0	37.4	43.0	1.4-1.3	10.1	
286	牛	L M <sub>2</sub>	欠	14.2	/	39.4	43.1	1.4-1.2	8.4	推定歯冠長39.8
287	馬	L I'内部エナメル輪	長13.8	巾3.9	/	/	高29.4	厚0.7	0.9	
288	馬	R I'内部エナメル輪	#11.6	#3.5	/	/	#28.6	#0.6	1.2	
289	馬	L I'	19.6	10.0	51.0	37.4	46.9	1.1-未磨耗	5.3	萌出直后歯
290	馬	R I <sub>2</sub>	欠	欠	/	43.9	51.9	1.0-欠	2.2	#
291	鹿	L P*類面	現前後径11.5	欠	/	齒頸線よりの高10.6	17.2	0.9-欠	0.3	推定歯の前後径12.8
292	鹿	頬歯外部エナメル壁の一部	現前後径8.1	欠	/	齒頸線よりの高4.4	17.0	厚1.0	0.2	
293	鹿	頬歯内部エナメル壁	現前後径7.4	現左右径4.3	/	/	14.7	#1.1	0.1	
294	馬	右上顎歯中附歯	長7.2	巾3.3	/	39.2	50.2	0.8-欠	0.2	中附歯巾2.2, 高2.5
295	馬	左上顎後歯	#7.1	#3.5	/	45.3	56.2	1.0-欠	0.3	中附歯巾2.4, 高2.4
296	馬	右上顎前小窩頬面	#10.2	#4.8	/	欠	52.2	厚0.8	0.8	萌出直后歯 推定頬側歯冠高43.2
297	馬	左上顎前小窩頬面	#10.8	#4.4	/	欠	62.4	#1.0	0.9	萌出直后歯 推定頬側歯冠高52.4
298	馬	右上顎歯後小窩舌面	#6.4	#3.1	/	欠	45.2	#0.8	0.8	萌出直后歯
299	馬	右上顎歯次歯	#8.3	#4.6	/	欠	48.6	未磨耗	0.9	#
300	馬	右上顎歯次歯	#5.4	#4.1	/	舌側45.1	56.9	#	1.1	#
301	馬	左上前臼歯前附歯	#33.3	#11.6	/	欠	欠	0.9-欠	0.2	
302	馬	左上前臼歯小窩頬面	#40.4	#11.1	/	欠	欠	1.3-欠	0.8	
303	牛	L M <sub>2</sub> 舌面	欠	欠	/	欠	50.9	欠-1.2	2.3	
304	牛	L M <sub>2</sub> 類面	欠	欠	/	40.7	51.9	1.2-欠	3.3	
305	馬	左上顎歯小窩	長8.6	巾6.9	/	46.8	52.5	厚0.8	2.5	萌出直後歯
306	馬	右上前臼歯後小窩	#12.8	#8.9	/	46.1	55.9	#1.2	3.9	
307	馬	左上前臼歯前小窩	#13.1	#9.8	/	欠	62.9	欠	5.4	
308	馬	左上顎歯附歯	#10.9	#6.6	/	舌側51.5	64.6	欠-1.2	3.2	推定傾側歯冠高61.1
309	馬	L M <sub>2</sub> 未萌出歯	27.9	11.5	41.2	未萌出	38.5	未萌出歯	6.0	
310	馬	左上顎歯次歯	長6.2	巾4.4	/	舌側41.8	50.5	欠-0.8	1.4	萌出直前歯 推定頬側歯冠高51.8
311	馬	右上顎歯附歯舌面	#10.8	#2.8	/	舌側42.8	50.2	欠-1.0	1.5	推定傾側歯冠高52.4
312	馬	L P*類面	25.5	欠	/	75.1	85.8	1.4-欠	9.8	
313	馬	R M*前附歯	長11.0	巾6.9	/	欠	55.2	1.1-欠	1.9	
314	馬	左上顎歯附歯	#11.5	#5.5	/	欠	58.4	1.2-欠	2.4	
315	馬	左上顎歯附小歯	#11.7	#3.7	/	舌側52.3	66.1	欠-1.1	2.1	推定傾側歯冠高62.3
316	馬	左上顎歯附小歯	#10.2	#3.5	/	舌側63.7	73.4	欠-1.2	2.0	# 73.7
317	馬	左上顎歯附小歯	#9.2	#2.6	/	欠	52.2	厚1.0	1.2	

付表 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頰側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頰側-舌側)	重量	備 考
318	馬	左上頰側前小窩	# 7.8	# 2.5	/	舌面 59.0	67.4	欠 -1.2	1.8	推定頰側歯冠高 69.0
319	馬	左上頰側前歯後 脊	# 12.9	# 3.4	/	舌面 53.8	66.9	欠 -1.1	2.2	推定頰側歯冠高 63.8
320	馬	左上頰側前歯	# 6.5	# 3.2	/	舌面 53.3	64.0	欠 -1.1	1.2	# 48.3
321	馬	左上頰側後小窩	# 8.9	# 4.3	/	欠	高59.8	厚 0.8	0.9	# 48.8
322	馬	左上頰側後小窩	# 11.8	# 8.7	/	/	# 51.9	# 0.6	3.4	歯出直后歯
323	馬	左上頰側後小窩	# 13.1	# 6.2	/	欠	# 67.2	# 1.1	5.1	推定頰側歯冠高 56.6
324	馬	左上頰側前歯	# 6.9	# 5.3	/	舌側 45.5	54.6	0.8	1.4	# 55.5
325	馬	LM <sub>2</sub>	25.5	12.5	49.0	48.9	66.1	1.4-0.8	13.8	
326	馬	RP <sup>2</sup> の一部	欠	欠	/	舌側 42.8	58.9	欠 -1.0	9.9	推定歯冠長30.6 推定頰側歯冠高 52.8
327	馬	右上頰側後小窩	長13.6	巾 9.6	/	/	高59.2	厚 1.2	4.3	
328	馬	LM <sup>1</sup> 頰側	欠	欠	/	66.4	80.8	1.4-欠	5.3	推定歯冠長24.3
329	馬	LM <sup>1</sup> 舌側	欠	欠	/	舌側 55.2	68.4	欠 -1.0	6.4	推定頰側歯冠高 65.2
330	馬	左上頰側前歯	長15.5	巾 5.5	/	舌側 45.8	55.4	欠 -1.0	2.2	# 55.8
331	馬	左上頰側前歯	# 14.4	# 6.7	/	舌側 35.2	68.9	欠 -0.8	4.6	# 65.2
332	馬	左上頰側後小窩	# 14.0	# 8.2	/	47.8	53.9	厚 0.9	4.1	
334	馬	RP <sup>2</sup>	26.9	欠	/	45.5	56.9	1.3-1.2	23.6	
335	馬	左上頰側前小窩	長 7.6	巾 5.1	/	欠	高37.9	/	0.9	
336	馬	小歯片	/	/	/	/	/	/	1.1	
337	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	2.2	
338	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	13.2	
341	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	4.0	
342	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	1.6	
344	馬	L I <sup>2</sup>	18.6	10.5	56.5	47.6	58.6	1.4-1.2	7.3	
345	馬	L I <sup>2</sup>	17.1	9.9	57.9	35.9	50.6	1.0-1.1	3.9	
346	馬	R I <sub>1</sub>	15.3	9.9	64.7	38.6	56.6	1.6-1.0	4.6	
347	馬	R I <sub>2</sub>	17.4	9.5	54.6	39.8	58.3	1.6-0.9	5.1	
348	馬	R I <sub>3</sub>	15.7	8.8	56.1	36.4	55.5	1.5-1.0	4.2	
349	馬	L I <sub>2</sub>	17.3	9.2	53.2	45.7	60.3	1.6-0.9	6.2	
350	馬	L I <sub>3</sub>	14.9	8.4	56.4	37.2	56.4	1.4-1.0	4.4	
351	馬	RP <sup>2</sup>	38.6	23.6	61.6	38.5	59.3	1.3-1.0	23.0	
352	馬	RP <sup>2</sup>	29.1	26.2	90.0	56.1	74.1	1.4-1.0	40.9	
353	馬	RP <sup>2</sup>	27.8	25.3	91.0	60.2	76.5	1.5-1.0	43.4	
354	馬	RM <sup>1</sup>	24.3	24.8	102.1	53.8	70.1	1.4-1.1	30.2	
355	馬	RM <sup>1</sup>	23.8	23.4	98.3	61.2	77.4	1.3-0.9	35.3	
356	馬	RM <sup>1</sup>	25.5	20.9	82.0	59.6	42.4	1.3-1.1	33.9	
357	馬	L P <sup>2</sup>	37.3	23.7	63.5	45.5	64.4	1.4-1.0	28.4	
358	馬	L P <sup>3</sup>	28.7	26.2	91.2	53.1	74.3	1.4-1.0	37.9	
359	馬	L P <sup>4</sup>	27.9	欠	/	58.1	72.7	欠 -1.1	28.8	
360	馬	LM <sup>1</sup>	24.5	25.2	102.9	50.9	68.2	1.3-1.0	30.9	
361	馬	LM <sup>2</sup>	23.8	23.6	99.2	55.8	75.6	1.4-1.0	38.9	
362	馬	LM <sup>3</sup>	25.2	21.2	84.1	60.9	73.5	1.4-1.0	37.6	
363	馬	L P <sub>a</sub>	33.9	14.5	42.8	41.2	60.2	1.3-0.9	20.3	
364	馬	L P <sub>b</sub>	28.7	16.7	58.2	57.1	76.4	1.2-1.0	31.5	
365	馬	L P <sub>c</sub>	27.9	15.9	57.0	68.7	88.6	1.6-1.2	34.2	
366	馬	LM <sub>1</sub>	25.2	14.2	56.3	66.8	82.6	1.1-0.9	22.2	

## 第3節 観察について

No	種類	部 位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頬歯・唇側歯冠高	現全歯高	エナメルの厚 (歯冠一占側)	重量	摘 要
367	馬	LM <sub>2</sub>	25.4	14.3	56.3	65.8	86.8	1.4-1.2	26.8	
368	馬	LM <sub>2</sub> の一部	欠	欠	/	欠	45.1	1.3-1.1	15.9	
383	馬	RI <sup>1</sup>	15.3	11.3	73.9	33.7	44.2	1.2-1.0	6.8	
384	馬	LI <sup>1</sup>	15.1	欠	/	欠	30.0	1.3-欠	3.5	
395	馬	LI <sup>2</sup>	欠	欠	/	欠	24.8	1.4-欠	0.8	
396	牛	RM <sub>2</sub>	25.4	14.1	55.5	29.7	44.5	1.5-1.4	12.3	
397	牛	RM <sub>2</sub>	41.3	14.5	35.1	46.8	59.9	1.4-1.4	29.4	
403	馬	RM <sub>2</sub>	22.9	15.6	68.1	27.9	38.9	1.5-1.2	13.2	
404	馬	RM <sub>2</sub>	20.9	13.1	62.7	20.6	43.1	1.5-1.1	9.8	
405	馬	RM <sub>2</sub>	28.9	11.9	41.2	21.3	40.7	1.5-1.0	10.4	
410	馬	RP <sub>2</sub>	23.0	13.1	57.0	14.4	36.6	1.4-1.0	9.9	
411	馬	RM <sub>2</sub>	22.7	12.8	56.4	15.6	48.6	1.4-1.0	10.2	
414	馬	LM <sub>2</sub>	23.6	14.4	61.0	20.9	37.6	1.4-1.2	13.9	
415	馬	LM <sub>2</sub>	欠	11.6	/	10.1	42.6	1.4-1.0	5.9	推定歯冠長28.8
416	牛	LI <sub>1</sub>	欠	欠	/	19.2	19.2	0.7	0.2	
417	牛	LI <sub>1</sub>	12.4	3.8	/	16.2	16.2	0.8	0.4	
437	馬	RM <sub>2</sub>	24.8	14.4	58.1	67.5	79.7	1.3-1.0	27.8	
438	牛	左下乳臼歯の一部	欠	欠	/	9.5	13.3	欠-1.2	1.7	
439	牛	右下顎後臼歯後側歯根	欠	欠	/	欠	31.8	欠	3.1	
464	馬	右上顎前臼歯中附歯	欠	欠	/	欠	2.1	欠	0.9	
486	馬	LM <sub>2</sub>	25.2	12.7	50.4	29.9	46.2	1.5-1.1	13.7	
487	馬	LM <sub>2</sub>	31.4	12.2	38.9	40.4	50.6	1.5-1.0	17.1	
491	馬	LM <sup>1</sup>	欠	欠	/	53.0	63.3	1.3-欠	12.3	原歯の長13.3
492	馬	LM <sup>1</sup> の一部	欠	欠	/	59.9	70.9	0.9-欠	10.9	
493	馬	RM <sup>1</sup>	22.0	19.6	89.1	44.4	55.5	1.3-1.1	19.3	
502	馬	RM <sup>1</sup>	欠	欠	/	59.4	68.6	欠	28.6	推定歯冠長23.9
503	馬	RM <sub>1</sub>	23.8	15.4	64.7	26.8	40.4	1.4-1.0	13.4	
504	馬	RM <sub>1</sub>	22.3	14.0	62.8	18.1	41.5	1.5-0.9	10.9	
505	牛	RP <sub>2</sub>	21.9	13.8	63.0	15.9	41.4	1.5-1.3	6.2	
511	馬	RM <sup>1</sup>	欠	19.9	/	56.4	68.4	1.3-0.9	19.9	前・中附歯外側径15.6
512	馬	LP <sub>2</sub>	欠	15.3	/	22.1	30.5	1.2-1.1	6.1	下内側前後径5.9 左右径6.2
514	馬	RP <sup>2</sup>	30.7	欠	/	46.8	62.6	1.5-1.0	39.5	
521	馬	RP <sub>2</sub>	23.5	14.1	60.6	44.3	64.4	1.4-1.0	23.1	
523	馬	RI <sub>2</sub>	7.2	欠	/	17.9	28.9	1.2-欠	1.3	
528	馬	RM <sup>1</sup>	欠	欠	/	11.0	20.8	1.6-1.1	6.8	推定歯冠長29.3
529	馬	小歯片	/	/	/	/	/	/	0.5	
599	馬	RP <sub>2</sub>	29.2	14.5	49.7	41.8	61.0	0.8-0.8	17.8	
600	馬	RP <sub>2</sub>	26.9	14.6	54.2	47.6	63.4	1.2-0.8	22.3	
601	馬	RM <sub>1</sub>	25.3	14.0	55.3	47.1	53.3	1.0-0.8	18.4	
602	馬	RM <sub>2</sub>	欠	12.7	/	欠	53.2	1.0-0.9	10.3	
603	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	0.1	
604	馬	RP <sub>2</sub>	30.6	13.2	43.1	27.6	48.6	1.5-1.0	16.1	
605	馬	RP <sub>2</sub>	26.9	19.8	73.6	歯槽に傾立	/	1.8-1.1	189	
606	馬	RP <sub>2</sub>	25.4	18.0	70.9	#	/	1.7-1.3		重量はNo605に含まれる。
607	馬	RM <sub>1</sub>	23.3	15.4	66.1	#	/	1.4-1.0		#

付章 上野区分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部 位	歯冠長	歯冠巾	巾率	脣側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (脣側-舌側)	重 量	備 考
608	馬	RM <sub>2</sub>	25.6	16.1	62.9	#	/	1.4-1.0		#
609	馬	RM <sub>2</sub>	欠	12.2	/	29.1	59.5	1.4-1.0	10.2	
611	馬	L P <sub>2</sub>	31.0	15.8	51.0	25.8	歯槽に植立	1.5-1.1	191	
612	馬	L P <sub>2</sub>	27.5	17.5	63.6	舌側 25.1	舌側 59.7	1.5-1.4	No.399に含	推定脣側歯冠高 27.6
613	馬	L P <sub>2</sub>	25.0	17.8	71.2	舌側 29.3	舌側 61.4	1.6-1.3	#	# 31.8
614	馬	LM <sub>2</sub>	23.4	16.6	70.9	舌側 26.9	舌側 55.2	1.4-1.2	#	# 29.4
615	馬	LM <sub>2</sub>	24.1	15.2	63.0	舌側 24.3	/	1.2-1.4	#	# 26.8
616	馬	LM <sub>2</sub>	33.4	14.6	40.8	舌側 16.4	舌側 58.0	1.8-1.4	#	# 18.9
631	馬	左上顎頬歯中附 歯齒根部分付近	欠	欠	/	欠	13.9	1.6-欠	0.4	中附歯巾 5.5
633	馬	LM <sub>2</sub>	23.9	11.6	48.6	43.3	61.6	1.3-1.3	13.9	
634	馬	LM <sub>2</sub>	29.9	欠	/	39.7	50.9	1.5-欠	14.5	推定歯冠巾11.2
635	馬	左下顎頬歯脣側 エナメル襞	長35.2	巾 3.4	/	/	高10.8	1.0	1.2	
636	牛	脣歯主柱側社間 エナメル襞の一部	# 6.6	# 3.1	/	/	# 41.2	厚 1.0	0.6	
637	牛	脣歯内部エナメル 襞の一部	# 2.9	# 1.4	/	/	# 31.0	# 0.6	0.7	
638	牛	脣歯外部エナメル 襞の一部	# 10.1	# 3.2	/	/	# 28.5	# 1.2	0.7	
639	馬	LM'歯齶の一部	# 10.1	/	/	舌側 43.9	52.4	欠-1.2	1.2	
640	馬	LM'小窩	# 8.2	巾 4.2	/	欠	高37.1	厚 1.4	1.1	
641	牛	脣歯主柱側社間 小歯片	# 6.9	# 2.6	/	/	# 31.9	1.3-1.0	0.9	
642	牛	脣歯内部エナメル 襞歯根部	# 9.1	# 3.4	/	/	# 26.3	1.5-0.6	0.7	
643	馬	右上顎頬歯小窩	# 61.3	# 4.8	/	/	# 11.1	1.1-1.2	1.8	
644	馬	右上顎頬歯小窩	# 60.7	# 8.2	/	/	# 10.1	/	3.7	
645	馬	右下顎頬歯下後 附歯	/	/	/	/	/	/	1.7	
646	牛	R P'脣面	欠	欠	/	15.6	15.6	1.4-欠	0.8	
647	牛	L P'の一部	欠	欠	/	欠	20.9	欠-1.4	3.6	
648	馬	上顎頬歯小窩の 一部	長 3.5	巾 3.4	/	/	高19.8	厚 0.5	0.2	
649	馬	右上顎前臼歯の 一部	# 13.9	# 11.5	/	33.4	42.4	1.2-欠	3.2	前歯の巾 7.5
650	馬	L P <sub>2</sub>	27.1	欠	/	44.8	59.8	欠-1.1	6.5	
651	馬	右下顎頬歯下前 附歯	/	/	/	/	/	/	1.2	
652	馬	小歯片	/	/	/	/	/	/	3.1	
653	馬	小歯片	/	/	/	/	/	/	1.5	
656	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	2.5	
657	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	118.4	土壌を含む。
661	不明	歯根片	/	/	/	/	高16.4	/	1.1	
664	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	3.6	
667	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	1.7	
670	馬	L P'の一部	欠	欠	/	62.1	65.8	1.3-欠	28.7	推定歯冠長28.0
674	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	3.3	
686	人	R I'	近遠心径 8.1	頬舌径 7.5	92.6	近心頬側長11.8	現歯全長 12.9	1.1- /	0.7	
688	馬	R I'	14.6	10.6	72.6	欠	34.7	1.6-1.3	5.7	

## 第3節 観察について

No	種類	部 位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頬側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頬側一占側)	重量	備 考
689	馬	L I <sup>1</sup>	14.4	10.1	70.1	欠	43.4	1.4-1.1	5.8	
690	馬	L I <sup>1</sup> 内側面	欠	10.8	/	欠	30.4	1.5-1.0	2.9	
691	馬	R I <sub>2</sub> 唇面	長11.7	巾 5.2	/	/	高27.1	1.3-1.0	1.1	
692	馬	L I <sub>2</sub>	17.3	欠	/	欠	33.5	1.0-欠	3.5	
693	馬	R P <sup>2</sup>	32.1	23.3	72.6	34.9	55.8	1.6-1.0	30.8	
694	馬	R P <sup>2</sup>	26.1	27.3	104.6	42.2	61.9	1.4-1.3	40.8	
695	馬	R P <sup>2</sup>	25.2	26.8	105.9	49.3	66.1	1.5-1.0	45.6	
696	馬	RM <sup>1</sup>	22.5	26.2	116.4	42.9	66.4	1.4-1.0	34.8	
697	馬	RM <sup>1</sup>	22.3	24.0	107.6	46.1	66.2	1.3-1.1	38.5	
698	馬	RM <sup>1</sup>	25.3	22.2	87.7	47.3	64.6	1.3-1.0	36.6	
699	馬	L P <sup>2</sup>	32.4	23.4	72.2	35.7	33.6	1.6-1.0	28.9	
700	馬	L P <sup>2</sup>	25.6	26.5	103.5	40.2	62.4	1.6-1.2	40.2	
701	馬	L P <sup>2</sup>	24.9	26.0	104.4	46.5	62.1	1.5-1.1	43.9	
702	馬	LM <sup>1</sup>	22.6	24.9	110.2	38.1	56.9	1.5-1.0	34.2	
703	馬	LM <sup>1</sup>	22.6	23.8	105.3	44.2	64.5	1.5-1.2	37.8	
704	馬	LM <sup>1</sup>	25.6	21.8	85.2	46.8	65.8	1.3-0.9	36.2	
705	馬	R P <sub>2</sub>	28.6	24.9	87.1	33.4	53.7	1.2-1.0	29.2	
706	馬	R P <sub>2</sub>	26.3	欠	/	44.5	62.0	1.6-欠	22.9	
707	馬	R P <sub>2</sub>	24.8	18.7	75.4	48.7	66.1	1.4-1.0	33.8	
708	馬	RM <sub>1</sub>	22.4	17.2	76.8	43.0	65.4	1.4-1.0	25.2	
709	馬	RM <sub>2</sub>	21.4	16.1	75.2	49.4	75.2	1.1-0.8	21.2	
710	馬	RM <sub>2</sub>	28.1	11.6	41.3	48.4	64.8	1.4-0.9	21.8	
711	馬	L P <sub>2</sub>	29.5	17.2	58.3	33.1	66.5	1.3-1.1	19.8	
712	馬	L P <sub>2</sub>	26.2	19.2	73.3	42.9	64.3	1.5-1.4	30.3	
713	馬	L P <sub>2</sub>	24.5	19.1	78.0	49.9	69.2	1.4-1.2	33.8	
714	馬	LM <sub>1</sub>	23.2	17.6	75.9	42.3	68.4	1.4-1.1	26.4	
715	馬	LM <sub>2</sub>	21.4	16.2	75.7	47.7	69.3	1.3-1.0	26.2	
716	馬	LM <sub>2</sub>	28.0	13.4	47.9	49.4	64.8	1.3-1.0	22.8	
725	馬	RM <sub>1</sub>	23.9	12.4	51.9	39.4	57.7	1.1-0.9	13.9	
726	馬	RM <sub>2</sub>	欠	11.5	/	38.7	58.7	1.5-1.0	12.3	推定歯冠長22.9
727	馬	RM <sub>2</sub> entostylid	長 5.5	巾 6.5	/	31.9	41.9	1.4-欠	1.9	
728	馬	L P <sub>2</sub>	24.7	16.3	66.0	42.3	63.3	1.4-1.0	20.8	
729	馬	L P <sub>2</sub>	26.2	15.8	60.3	32.7	51.4	1.2-1.0	14.3	
730	馬	LM <sub>1</sub>	22.7	15.6	68.7	37.9	58.5	1.0-0.9	15.4	
731	馬	LM <sub>2</sub>	23.7	14.8	62.5	42.1	60.5	1.4-1.0	16.8	
732	馬	LM <sub>2</sub>	29.3	12.8	62.1	42.7	60.3	1.4-1.1	16.9	
734	人	RM <sub>1</sub>	近遠心径 19.1	頬舌径 9.1	91.1	現歯長 4.1	/	/	0.2	
735	人	頬歯片	長径 8.5	短径 4.4	/	/	高 5.0	0.9	0.1	
736	馬	左下顎前臼歯後葉の一部	欠	14.3	/	50.6	64.0	1.3-1.2	14.5	
738	馬	R P <sup>2</sup>	35.8	21.9	61.2	44.1	55.2	1.3-1.1	24.9	
741	馬	右上顎後臼歯中附歯	長 5.8	巾 2.9	/	/	高35.8	厚 1.1	0.4	中附歯 巾 2.6, 高 2.
742	馬	左上顎前歯小窩	# 10.1	# 4.4	/	/	# 51.6	# 1.4	1.2	
743	馬	左下顎前歯下後附歯	# 6.8	# 4.8	/	/	# 6.2	# 1.0	0.8	
744	馬	左下顎前歯下後附歯	# 7.7	# 3.3	/	/	# 26.9	# 1.0	0.8	
745	馬	下顎前歯下次歯	# 10.1	# 4.3	/	/	# 13.3	# 1.4	0.2	
746	馬	下顎前歯後葉歯根側面	# 10.8	# 4.7	/	/	# 10.9	# 1.4	0.8	

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頰側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頰側-舌側)	重量	備 考
747	馬	左上顎頰歯後齒	長10.8	/	/	/	高48.2	厚 1.0	1.1	
748	馬	下顎前臼歯後葉歯根側面	# 6.8	巾 5.2	/	/	# 20.0	# 1.3	0.3	
749	馬	左下顎頰歯下取歯	# 10.0	# 5.1	/	/	# 44.2	# 1.4	1.1	
750	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	4.6	
751	不明	小歯片	/	/	/	/	/	/	0.6	
754	馬	左上顎頰歯小窩	長13.0	巾 8.2	/	/	高20.6	1.2-1.1	0.8	
755	馬	左上顎頰歯小窩後側	# 9.4	# 4.2	/	/	# 7.7	1.0-1.0	0.1	
756	馬	LM <sub>2</sub>	欠	欠	/	27.8	47.0	1.3-1.0	6.2	推定歯冠長29.7
757	鹿	L P <sup>2</sup>	前後径 9.3	左右径 5.2	55.9	/	18.7	未磨耗	0.2	歯頸線未だ出現せず。
758	鹿	L M <sup>2</sup> 頰面エナメル質	現前後径 15.5	現左右径 4.2	/	/	17.1	厚 0.7	0.2	#
760	猪	頰歯片	現前後径 10.9	現左右径 6.3	/	11.5	11.5	/	0.8	
761	猪	頰歯片	現前後径 10.4	現左右径 3.9	/	9.6	9.6	/	0.3	
762	猪	頰歯片	現前後径 9.4	現左右径 6.9	/	10.6	10.6	/	0.2	
767	牛	頰歯内部エナメル質の一部	長 4.3	巾 2.8	/	/	高17.3	厚 1.0	0.1	
768	牛	#	# 6.5	# 3.1	/	/	# 15.3	1.0	0.1	
769	牛	頰歯主柱の一部	# 7.9	# 3.2	/	/	# 18.1	厚 1.2	0.2	
770	鹿	LM <sub>2</sub>	現前後径 18.2	現左右径 8.2	/	舌側歯頸線までの高13.8	22.4	1.1-1.0	1.4	推定前後径18.8 破損修復
775	牛	L I <sub>3</sub>	14.2	欠	/	17.9	17.9	0.8-1次	0.4	
776	牛	R P <sub>3</sub>	22.4	10.5	46.9	20.3	29.6	1.2-1.3	11.9	
777	牛	R P <sub>2</sub>	22.5	13.4	59.6	17.5	37.7	1.4-1.4		重量はNo.776に含まる。
779	牛	RM <sub>1</sub>	欠	欠	/	20.2	20.2	1.2-1.3	4.6	
780	牛	RM <sub>2</sub>	27.0	15.4	57.0	28.4	36.8	1.3-1.4	118	
781	牛	RM <sub>3</sub>	41.7	13.3	31.9	38.9	45.4	1.3-1.0		重量はNo.780に含まる。
783	牛	L P <sup>2</sup> 後葉舌面エナメル質	欠	欠	/	30.4	30.4	1.5-1次	1.2	
784	牛	L P <sup>2</sup> 舌面エナメル質	欠	欠	/	29.8	29.8	1.1-1次	0.9	
785	牛	LM <sup>2</sup>	欠	欠	/	22.2	26.9	1.2-1次	2.1	
786	牛	LM <sup>2</sup>	30.6	21.4	69.9	34.4	41.9	1.4-1.3	15.3	
787	牛	LM <sup>2</sup> 後葉	欠	欠	/	欠	42.2	欠-1.0	10.2	
788	牛	L P <sub>1</sub>	24.0	12.8	53.3	歯槽に一塊	53.2	1.6-1.5	10.1	
790	牛	LM <sub>1</sub>	欠	欠	/	19.6	19.6	1.5-1.2	4.1	
791	牛	LM <sub>2</sub>	28.2	14.2	50.4	33.3	37.8	1.5-1.4		重量はNo.780に含まる。
792	牛	LM <sub>3</sub>	42.7	12.8	30.0	歯槽に一塊	37.8	1.6-1.4		#
794	馬	L I <sup>1</sup>	15.6	欠	/	35.5	38.9	1.5-1次	2.1	
795	馬	R P <sup>2</sup>	欠	欠	/	24.7	31.8	1.3-1次	5.3	
796	馬	R P <sup>3</sup>	28.6	欠	/	29.6	41.9	1.4-1次	12.8	
797	馬	R P <sup>4</sup>	21.6	欠	/	舌側 28.5	40.3	欠-1.2	13.1	
798	馬	RM <sup>2</sup>	欠	欠	/	舌側 29.8	37.9	欠-1.2	18.7	
799	馬	L P <sup>2</sup>	34.6	22.1	63.9	22.1	33.3	1.3-1.1	13.8	

## 第3節 観察について

No	種類	部 位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頬側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頬側-舌側)	重量	摘 要
800	馬	L P <sup>3</sup>	27.8	27.0	97.1	34.9	43.2	1.4-1.3	17.1	
801	馬	L P <sup>4</sup>	25.9	26.1	100.8	35.9	45.3	1.4-1.2	20.9	
802	馬	LM <sup>5</sup>	26.6	21.2	79.7	31.5	43.8	1.6-1.3	16.8	
803	馬	R P <sub>2</sub>	29.9	14.3	47.8	24.5	35.3	1.5-1.2	7.5	
804	馬	R P <sub>3</sub>	26.4	15.4	58.3	25.1	41.6	1.4-1.2	11.7	
805	馬	R P <sub>4</sub>	25.1	15.0	59.8	32.2	47.1	1.3-1.2	14.5	
806	馬	L P <sub>5</sub>	26.4	15.3	58.0	26.5	44.9	1.6-1.0	13.1	
807	馬	L P <sub>6</sub>	25.3	15.6	61.7	31.4	47.8	1.4-1.1	14.8	
808	馬	R P <sup>3</sup>	欠	欠	/	29.9	34.3	1.4-欠	1.9	
809	馬	RM <sup>1</sup>	欠	欠	/	27.6	37.9	1.3-1.0	19.2	
810	馬	LM <sup>1</sup>	21.5	23.9	81.8	29.3	37.8	1.4-1.3	12.9	
811	馬	LM <sup>2</sup>	22.5	22.8	101.3	32.3	40.5	1.4-1.2	15.8	
812	馬	R P <sub>2</sub>	22.5	13.2	58.7	26.2	37.1	1.2-1.1	8.0	
813	馬	R P <sub>3</sub>	23.1	12.7	55.0	30.3	42.7	1.5-1.2	10.4	
814	馬	RM <sub>2</sub>	28.6	11.7	39.5	26.8	40.2	1.5-1.0	10.2	
815	馬	L P <sub>2</sub>	29.8	13.8	46.3	18.3	35.2	1.3-1.1	7.7	
816	馬	L P <sub>3</sub>	22.8	13.9	61.0	25.0	39.1	1.4-0.9	8.3	
817	馬	L P <sub>4</sub>	23.7	12.6	53.2	30.5	45.8	1.5-1.0	11.2	
818	馬	LM <sub>2</sub>	28.9	11.7	40.1	29.2	38.7	1.6-1.1	11.1	
819	馬	R P <sub>2</sub>	28.4	14.2	50.0	61.3	75.2	1.4-1.2	29.3	
820	馬	R P <sub>3</sub>	28.6	14.7	51.4	57.5	71.1	1.2-1.0	28.7	
821	馬	RM <sub>1</sub>	25.4	13.3	52.4	56.7	69.9	1.4-1.0	21.4	
822	馬	RM <sub>2</sub>	25.5	12.6	49.4	59.8	74.9	1.2-0.9	23.5	
823	馬	L P <sub>1</sub>	欠	34.8	/	54.8	71.1	1.3-1.1	29.2	推定歯冠長28.4
824	馬	L P <sub>2</sub>	27.6	14.6	52.9	61.2	78.0	1.4-0.9	31.5	
825	馬	LM <sub>1</sub>	25.1	13.2	52.6	55.3	73.3	1.4-0.9	21.4	
826	馬	LM <sub>2</sub>	25.7	12.8	49.8	61.7	77.8	1.3-1.0	24.2	
827	馬	LM <sub>3</sub>	28.5	11.4	40.0	63.1	71.7	1.4-1.0	23.8	
828	馬	R P <sub>2</sub>	34.0	14.7	43.2	45.9	62.6	1.3-1.2	22.9	
829	馬	R P <sub>3</sub>	28.1	16.3	58.2	60.8	76.5	1.4-1.2	30.9	
830	馬	R P <sub>4</sub>	27.9	16.2	71.7	73.2	84.3	1.4-1.4	34.6	
831	馬	RM <sub>1</sub>	25.8	14.0	54.3	65.2	81.9	1.3-1.0	26.9	
832	馬	RM <sub>2</sub>	25.2	13.5	53.6	68.6	86.7	1.4-1.2	29.7	
833	馬	RM <sub>3</sub>	29.4	12.7	43.2	63.0	75.4	1.5-1.0	28.6	
834	馬	LM <sub>1</sub> 下内縁	長 8.4	巾 5.1	/	/	高 37.5	厚 1.3	2.2	下内縁の長 5.1, 巾 6.1
837	牛	RM <sup>1</sup> 後葉エナメル葉	欠	欠	/	25.9	25.9	1.5-欠	1.3	
838	牛	RM <sup>2</sup>	欠	26.5	/	46.4	50.4	1.3-1.5	27.7	推定歯冠長32.8 後葉舌面厚
839	牛	L P <sup>1</sup> 後側面	欠	欠	/	23.1	23.1	0.6-欠	0.8	
840	牛	R P <sub>2</sub>	12.0	10.0	83.3	15.9	15.9	1.0-1.0	0.9	
841	牛	R P <sub>2</sub> 外部エナメル葉	18.9	11.8	58.6	18.4	18.4	1.4-1.0	2.1	
842	牛	R P <sub>2</sub> 外部エナメル葉	22.2	12.8	57.7	18.2	18.2	1.5-1.3	2.2	
844	馬	左上顎歯次歯	長 7.9	巾 3.9	/	/	高30.5	厚 1.1	0.9	
845	馬	左上顎後臼歯前小窩前側	# 9.1	# 4.4	/	/	# 18.3	# 1.4	1.0	
846	馬	左上顎歯次後側エナメル葉	# 9.9	/	/	/	# 27.2	# 0.8	0.1	

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部 位	歯冠長	歯冠巾	巾率	頰側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頰側-舌側)	重 量	摘 要
847	馬	左下顎後臼歯頰面の一部	長 7.8	/	/	/	高24.8	厚 1.3	0.3	
849	馬	左上顎頰歯次歯	# 6.1	巾 3.5	/	/	# 6.9	# 0.8	0.3	
850	馬	下顎頰歯下次歯	# 8.9	/	/	/	# 16.4	# 1.1	0.6	
852	馬	第1切歯内エナメル質輪	# 4.8	巾 3.5	/	/	# 12.8	# 0.9	0.1	
853	馬	右上顎頰歯後歯	# 8.5	# 2.8	/	/	# 8.8	# 1.4	0.2	
855	馬	R 1 <sup>a</sup>	18.3	11.8	64.5	45.9	55.2	1.6-1.4	7.2	
856	馬	R 1 <sup>b</sup>	18.3	10.6	57.9	45.8	57.6	1.4-1.1	6.9	
857	馬	R 1 <sup>c</sup>	17.9	10.0	55.9	欠	49.9	1.3-1.3	3.9	
858	馬	L 1 <sup>a</sup>	18.5	11.3	61.1	48.8	55.4	1.5-1.4	7.1	
859	馬	L P <sup>a</sup>	欠	欠	/	56.5	67.6	1.4-欠	7.3	推定歯冠長28.6
860	牛	R P <sup>a</sup>	21.7	欠	/	28.8	28.8	1.3-1.3	4.5	
861	牛	R M <sub>1</sub>	39.7	欠	/	31.0	31.0	1.6-1.3	10.9	
863	牛	L M <sup>a</sup>	欠	欠	/	舌側 19.4	19.4	欠-1.4	2.5	推定歯冠長26.2
864	牛	L P <sub>2</sub>	欠	欠	/	13.8	13.8	1.0-欠	0.3	
865	牛	L P <sub>3</sub>	20.2	11.2	55.4	18.4	18.4	1.4-1.2	2.2	
866	牛	L M <sub>1</sub>	39.1	13.8	35.3	31.2	31.2	1.4-1.2	11.8	
867	猪	頰歯片	現前後径 12.1	現左右径 4.7	/	/	14.2	/	0.3	
868	猪	頰歯片	現前後径 11.7	現左右径 7.6	/	/	12.4	/	0.3	
869	猪	頰歯片	現前後径 9.8	現左右径 7.3	/	/	10.8	/	0.2	
870	猪	頰歯片	現前後径 7.4	現左右径 3.5	/	/	14.2	/	0.1	
871	牛	R P <sup>a</sup>	19.0	欠	/	18.5	18.6	1.2-1.2	2.6	
872	牛	R P <sup>b</sup>	18.2	欠	/	21.2	21.2	1.1-1.0	1.8	
873	牛	R M <sup>a</sup>	26.3	欠	/	19.5	19.5	1.2-1.2	2.1	
874	馬	頰歯前小窩の一部	長 8.2	巾 3.8	/	/	高29.5	厚 1.4	0.8	
875	馬	頰歯前小窩の一部	# 7.9	# 2.0	/	/	# 29.5	# 1.5	0.8	
878	牛	下顎頰歯内面エナメル質の一部	# 22.9	# 6.9	/	/	# 19.4	# 1.2	0.3	
880	牛	R P <sub>2</sub>	12.2	7.8	63.9	14.8	14.8	1.0-0.9	1.1	
881	牛	L P <sub>3</sub>	21.9	10.9	49.8	21.6	21.6	1.2-1.0	2.5	
882	牛	頰歯柱状膨大部エナメル質	長10.5	欠	/	欠	31.2	厚 1.0	0.8	
883	馬	L M <sup>a</sup> 頰面エナメル質の一部	# 16.0	欠	/	/	42.4	1.4-欠	1.3	中附歯巾 4.5 前歯巾 7.2
884	馬	L 1 <sub>1</sub>	15.6	9.9	63.5	44.0	56.9	1.4-0.9	4.6	
885	牛	L M <sub>1</sub> 舌面エナメル質	欠	欠	/	19.4	19.4	1.1-欠	1.2	推定歯冠長26.9
886	馬	左下顎前臼歯下次歯	長 9.8	巾 2.9	/	/	高45.8	厚 1.4	1.2	下次歯の巾 9.6
887	牛	L M <sup>a</sup>	欠	欠	/	41.2	41.2	1.3-1.2	20.5	推定歯冠長32.1
888	馬	R M <sup>a</sup>	25.5	欠	/	欠	74.3	1.3-1.0	22.3	
889	牛	左上顎前臼歯舌面	長11.2	/	/	/	高14.6	厚 0.8	0.2	
910	牛	L M <sub>1</sub> 舌面輪影	欠	欠	/	舌面 36.2	36.2	欠-1.0	158.0	推定歯冠長39.0 土塊に附着
911	牛	頰歯主柱	5.8	3.5	/	/	24.0	1.0	0.3	



## 第3節 観察について

No	種類	部 位	歯冠長	歯冠巾	巾率	傾倒・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚(傾倒・唇側)	重量	備 考
912	牛	LP <sup>1</sup> の一部	欠	欠	/	舌側 12.3	13.8	欠 -1.4	1.3	
913	牛	左上顎後臼歯内部エナメル質	長14.5	巾 6.6	/	/	高27.8	1.0-1.2	2.2	
914	牛	左上顎歯内部エナメル質	# 11.1	# 8.6	/	/	# 7.0	1.1-1.1	1.1	
915	牛	LM <sup>1</sup> 頰面	20.7	欠	/	12.7	12.7	1.2-欠	0.8	
916	牛又は馬	小歯片	/	/	/	/	/	/	1.1	
920	猪	L d m <sup>1</sup>	11.1	7.1	64.0	5.0	16.3	0.6-0.6	6.9	
921	猪	L d m <sup>1</sup>	12.4	9.9	79.8	5.1	齒槽に植立	0.6-0.6		重量はNo920に含まれる。
922	猪	LM <sup>1</sup>	16.4	12.1	73.8	9.5	17.4	未磨耗	#	#
923	猪	R d m <sub>3</sub>	9.4	4.5	47.9	6.1	齒槽に植立	0.6-0.7	11.3	
924	猪	R d m <sub>4</sub>	16.2	8.1	50.0	5.5	#	0.6-0.6		重量はNo923に含まれる。
925	猪	RM <sub>1</sub>	16.8	11.4	67.9	8.2	#	未磨耗	#	#
926	猪	RM <sub>2</sub>	17.5	11.1	60.0	8.2	#	未萌出	0.9	#
927	猪	L d m <sub>1</sub>	16.4	8.1	49.4	4.1	20.2	0.6-0.6	10.2	
928	猪	LM <sub>1</sub>	16.4	11.6	70.7	8.4	齒槽に植立	未磨耗		重量はNo927に含まれる。
929	猪	LM <sub>2</sub>	16.2	11.3	69.8	未萌出	未萌出	未萌出	#	#
944	馬	右下顎切歯内部エナメル質輪	長10.8	巾 4.9	/	/	高29.8	0.5-0.9	0.2	
945	馬	右上顎歯前歯	# 11.8	欠	/	54.3	60.4	1.0-欠	1.9	
946	馬	右上顎前臼歯後側	# 3.2	巾13.7	/	35.4	46.4	1.0-欠	0.8	
947	馬	LM <sup>2</sup>	25.9	欠	/	62.8	71.0	1.2-欠	12.4	
948	馬	左上顎頰歯頰面	長19.4	欠	/	61.8	65.9	1.2-欠	3.9	
949	馬	左上顎頰歯後側	# 9.2	欠	/	60.7	69.8	1.1-欠	1.3	
950	馬	左上顎歯後側	# 15.8	巾10.8	/	欠	40.7	欠 -1.5	1.2	
951	馬	左上顎前臼歯小窩	# 25.4	欠	/	59.8	66.8	1.2-0.6	6.1	
952	馬	右下顎歯下次歯	# 12.1	巾 2.9	/	欠	51.1	0.9-欠	1.8	
953	馬	RP <sub>2</sub> 下内齶谷	# 14.2	# 12.8	/	欠	51.7	欠 -1.2	4.4	
954	馬	左下顎前臼歯後側	# 15.8	# 10.8	/	欠	高40.7	欠 -1.5	1.2	
955	馬	左下顎下後齶谷	# 6.5	# 3.9	/	欠	# 39.9	0.8-欠	0.9	
956	牛	RP <sup>2</sup>	欠	欠	/	舌側 12.1	17.8	欠 -1.4	2.2	
957	牛	RM <sup>2</sup>	欠	欠	/	舌側 20.8	27.0	欠 -1.4	5.2	推定歯冠長26.8
958	牛	RM <sup>2</sup>	31.6	22.4	70.9	27.4	36.4	1.4-1.4	14.8	
959	牛	LP <sup>2</sup>	17.1	14.4	84.2	20.1	20.1	1.3-欠	2.1	
960	牛	LM <sup>2</sup> 頰面	25.7	欠	/	19.9	19.9	1.3-欠	1.8	
961	牛	LM <sup>2</sup>	欠	欠	/	舌側 27.3	27.7	欠 -1.4	5.3	推定歯冠長30.8
962	牛	LM <sup>2</sup>	31.8	22.8	71.7	28.1	32.6	1.5-1.4	13.7	
963	馬	RP <sup>3</sup>	28.6	欠	/	欠	62.5	未磨耗	18.7	萌出直后歯
964	馬	RP <sup>3</sup>	欠	欠	/	欠	59.8	#	15.4	#
965	馬	RM <sup>3</sup>	26.6	24.1	90.6	62.8	68.8	1.1-1.0	20.0	
966	馬	右上顎切歯内部エナメル質輪	長11.0	巾 5.1	/	欠	26.7	厚 0.9	0.7	
967	馬	RP <sup>3</sup> 小窩	# 25.5	欠	/	44.7	52.1	0.9-0.8	3.9	
968	馬	LP <sup>3</sup> 次歯	# 5.5	巾 4.8	/	/	高24.8	厚 0.9	0.8	

付表 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部 位	歯冠長	歯冠巾	巾率	顎型・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (歯冠一名称)	重量	備 考
969	馬	下顎前歯歯面の一部	長 6.6	巾 1.9	/	/	高16.8	厚 0.9	0.1	
970	馬	左上顎後臼歯中附歯	# 6.7	欠	/	/	49.4	0.8-欠	0.8	
971	馬	LM <sup>1</sup> 前葉歯面	# 10.9	巾	/	/	高44.7	1.2-欠	1.5	
972	不明	小歯片							8.7	
973	不明	小歯片							2.8	
974	不明	小歯片							3.1	
981	馬	RP <sub>2</sub>	32.5	15.2	46.8	40.5	59.0	1.5-1.0	22.5	
982	馬	RP <sub>2</sub>	欠	16.2	/	61.4	75.2	1.2-1.0	31.8	推定歯冠長28.1
983	馬	RP <sub>2</sub>	欠	14.7	/	68.2	79.8	1.2-1.0	35.9	推定歯冠長27.9
984	馬	RM <sub>1</sub>	24.9	13.6	54.6	60.4	74.7	1.2-1.0	29.2	
985	馬	RM <sub>2</sub>	24.5	欠	/	63.7	79.8	1.3-1.0	26.5	
986	馬	RM <sub>2</sub> の一部	欠	欠	/	49.4	65.9	1.2-0.9	12.9	
987	馬	LP <sub>2</sub>	欠	欠	/	59.2	76.7	1.2-欠	32.5	推定歯冠長28.4
988	馬	LP <sub>2</sub>	28.6	14.3	50.0	67.3	81.2	1.3-0.9	36.9	
989	馬	LM <sub>1</sub>	24.1	13.3	53.2	62.6	75.4	1.4-0.9	30.4	
990	馬	LM <sub>2</sub>	27.6	11.6	42.0	59.0	69.6	1.4-1.2	24.5	
992	馬	LP <sub>2</sub>	26.9	16.9	62.8	54.8	81.0	1.5-1.2	44.7	
993	馬	LM <sub>1</sub>	27.9	18.3	65.6	52.0	75.0	1.4-1.0	43.9	
994	馬	LM <sub>2</sub>	25.1	15.8	62.9	59.8	82.9	欠-1.0	40.2	
995	馬	LM <sub>2</sub>	28.3	13.3	47.0	51.4	68.5	1.5-0.8	31.1	
996	馬	RP <sub>2</sub>	欠	14.8	/	欠	64.1	欠-1.0	25.2	
997	馬	RP <sup>2</sup>	28.9	欠	/	46.5	54.9	1.3-欠	25.3	
998	馬	RP <sup>2</sup>	28.4	26.9	94.7	43.8	53.7	1.2-1.0	34.8	
999	馬	RM <sup>2</sup>	25.2	24.4	96.8	49.4	59.0	1.1-1.0	29.9	
1000	馬	RM <sup>2</sup>	28.7	21.3	74.2	50.2	63.7	1.3-1.1	31.2	
1001	馬	LP <sup>2</sup>	29.1	25.2	86.6	51.4	54.8	1.2-1.0	21.3	
1002	馬	LP <sup>2</sup>	28.8	26.2	91.0	49.9	64.7	1.3-1.1	37.9	
1003	馬	LM <sup>2</sup>	28.2	21.8	77.3	52.2	61.3	1.5-1.2	28.7	
1004	馬	LP <sup>2</sup>	37.8	18.4	48.7	22.6	28.8	0.7-0.6	9.2	萌出直後歯
1005	馬	LP <sup>2</sup>	31.9	20.8	65.2	27.6	37.2	1.1-0.9	12.1	#
1006	馬	LP <sup>2</sup>	32.2	20.6	64.0	23.0	32.8	1.0-0.9	10.2	#
1007	馬	RP <sup>2</sup>	修復	修復	/	23.4	28.6	0.8-0.7	8.4	#
1008	馬	RP <sup>2</sup>	32.0	20.6	64.6	28.3	38.2	1.3-0.7	12.3	#
1009	馬	RP <sup>2</sup>	28.5	21.7	76.1	24.4	33.4	1.1-0.6	10.6	#
1011	馬	LP <sub>2</sub>	29.4	13.2	38.5	32.2	46.0	1.4-1.0	12.9	
1012	馬	LP <sub>2</sub>	25.9	14.7	56.8	42.3	59.3	1.4-1.0	45.3	
1013	馬	LP <sub>2</sub>	26.1	14.1	54.0	42.2	59.7	1.5-1.1		重量はNo.1012に含まれる。
1015	馬	LM <sub>1</sub>	24.2	13.8	57.0	41.3	55.7	1.2-0.9	38.5	
1016	馬	LM <sub>2</sub>	25.1	12.8	51.0	41.2	60.8	1.4-0.9		重量はNo.1015に含まれる。
1018	馬	LM <sub>2</sub>	29.3	11.7	39.9	37.2	58.4	1.4-0.9	17.9	
1020	馬	LI <sub>1</sub> 唇側	14.1	欠	欠	35.2	44.8	1.3-欠	2.2	
1021	馬	LI <sub>1</sub> 唇側	14.2	欠	欠	26.0	38.5	1.3-欠	1.5	
1022	馬	右上顎前歯小窩	長22.2	巾10.9	/	/	高35.1	厚 0.9	5.4	
1023	馬	LM <sup>1</sup>	22.5	23.6	104.9	28.8	43.2	1.3-1.0	17.9	
1024	馬	LM <sup>1</sup>	22.8	欠	/	35.7	49.3	1.2-欠	18.2	
1025	馬	左上顎前歯の一部	長21.8	巾19.5	/	40.9	46.2	欠-0.9	14.2	推定歯冠長24.4

## 第3節 観察について

No	種類	部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	傾倒・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚(傾倒一舌側)	重量	備 考
1026	馬	左上顎歯前後小窩	長10.1	巾 9.8	/	/	高38.2	厚 0.9	2.9	
1027	馬	右上顎歯前齧	#12.7	# 5.9	/	36.7	45.2	1.3— 次	4.1	
1028	馬	右上顎歯前齧	#12.5	# 4.8	/	33.8	44.9	1.2— 次	2.8	
1029	馬	LM <sup>1</sup>	25.8	23.9	92.6	33.4	50.3	1.2—1.0	22.5	
1030	馬	LM <sup>2</sup> の一部	28.2	20.4	72.3	28.4	49.2	1.4—1.3	20.3	
1031	馬	右上顎歯前齧	長14.2	巾 5.0	/	/	39.5	1.3—1.2	1.3	
1032	馬	右上顎歯中附齧	#15.7	# 5.4	/	34.6	47.4	1.2— 次	2.9	中附齧+後齧の巾14.7
1033	馬	右上顎歯前小窩	#13.2	#10.6	/	38.4	42.7	厚 1.0	2.7	
1034	馬	右上顎歯前後小窩	#12.9	# 9.6	/	33.6	34.8	1.0	3.2	
1035	馬	右上顎歯原齧後谷	#14.6	# 7.0	/	舌側 34.2	47.8	欠 -1.2	3.0	推定傾倒歯冠高38.0 原齧後谷の巾7.1
1036	馬	右上顎歯原齧後谷	# 9.2	# 8.1	/	舌側 31.9	39.1	欠 -1.3	2.3	推定傾倒歯冠高35.7 原齧後谷の巾6.3
1037	馬	右上顎歯原齧後谷	#11.5	# 4.8	/	舌側 28.8	39.2	厚 1.2	1.7	推定傾倒歯冠高32.6
1038	馬	左上顎前臼歯小窩	#26.9	#11.1	/	51.6	58.8	# 1.4	6.9	推定歯冠長28.9
1039	馬	左上顎前臼歯前齧	#13.9	# 4.8	/	36.9	47.4	1.2— 次	2.4	前附齧の巾 5.8
1040	馬	左上顎歯前齧	# 8.1	# 5.9	/	45.1	55.6	1.4— 次	3.2	# 4.2
1041	馬	左上顎歯前齧	# 7.4	# 5.8	/	47.2	56.2	1.2— 次	4.1	# 3.8
1042	馬	左上顎歯前齧	# 7.7	# 7.8	/	38.1	42.8	1.2— 次	2.2	# 3.6
1043	馬	LM <sup>2</sup> 中附齧	#16.7	# 3.8	/	/	高 27.8	1.4— 次	1.3	中附齧巾 2.1 高 1.6
1044	馬	左上顎歯前小窩	#11.2	# 9.9	/	/	#38.2	厚 0.9	1.5	
1045	馬	左上顎歯後齧	#12.2	# 3.9	/	35.2	45.9	1.4— 次	2.1	
1046	馬	左上顎歯後齧舌面	#17.9	# 7.5	/	舌側 37.0	45.1	欠 -1.1	3.5	推定傾倒歯冠高40.8
1047	馬	左上顎歯後齧	#14.4	# 3.3	/	後側 30.4	38.6	厚 1.0	1.8	# 32.6
1048	馬	左上顎歯次齧	#15.4	# 5.3	/	舌側 39.6	51.9	欠 -1.2	3.2	# 43.4
1049	馬	左上顎歯舌面	#19.2	#12.1	/	舌側 47.7	62.4	欠 -1.3	6.5	# 51.5
1050	馬	左上顎歯原齧	# 9.0	# 4.3	/	/	48.2	欠 -1.2	2.8	
1051	馬	左上顎歯原齧	# 9.7	# 5.6	/	舌側 38.1	47.1	欠 -1.4	2.3	推定傾倒歯冠高41.9
1052	馬	左下顎歯下後齧	#19.2	#15.2	/	45.4	61.1	1.3—0.9	11.9	下原齧の巾10.6
1053	馬	RP <sub>2</sub> 前葉	# 8.6	# 7.8	/	/	57.5	1.2— 次	3.5	推定傾倒歯冠高45.4

附表 9 出土遺存体(骨)計測値

No.	種類	部位	測定部位と測定値							重量	備考	
6	牛	右下顎体白歯部	別記									
12	牛	左下顎体白歯部	別記									
13	牛	右上腕骨々体部	現最大長 134.6	現近位部巾 23.9	現近位部径 48.6	現遠位部巾 52.0	現遠位部径 41.7	肘窩寛の大きさ 49.6×24.1	肘窩の深 32.0	93.2	推定骨体最少巾45.2 推定骨体最少径27.3 巾/径=60.4	
14	牛	右前腕骨	上腕骨頭最大長 58.9	同現最大径 42.6	骨体最大長 176.8	骨体最大径 78.8	骨体最大巾 41.5	骨体最大径 36.4	同径 24.6	185.0		
25	牛	上顎骨	別記									
26	牛	顎蓋骨	前後最大径 198.6	内外最大径 123.6	上下最大径 107.9					803.0		
27	馬	左腕骨々体近位部	長径 75.6	短径 25.5	高又は厚 27.9					15.5		
28	馬	左腕骨々体遠位部	〃	〃	〃					10.8		
29	馬	上腕骨頭部	〃	〃	〃					6.5		
30	馬	上腕骨々体遠位部	〃	〃	〃					5.8		
31	馬	肘骨片	89.6	31.7	9.2					2.4		
32	不明	小骨片	41.2	21.3	9.4					5.2		
33	不明	〃								10.8		
34	不明	〃								23.5	土壌を含む	
47	馬	上下顎骨小骨片								17.2		
48	馬	右坐骨体	長径 95.8	短径 28.8	厚 23.6					28.8		
49	馬	肘骨片	〃	〃	〃					11.1		
50	馬	小骨片	82.7	26.9	25.7					20.4		
51	馬	〃								43.1	土壌を含む	
55	不明	〃								4.9		
56	馬	右後頰顆	長径 23.7	短径 21.2	最大厚 15.3							
57	馬	左後頰顆	〃	〃	〃							
75	牛	右下顎体白歯部内側	現下顎骨全長 113.2	現最大高 35.5						19.8		
76	不明	小骨片								43.7		
77	不明	〃								93.9	土壌を含む	
78	馬	左上腕骨々体部	現最大長 171.6	現近位部巾 38.6	現近位部径 49.3	骨体最少巾 33.4	骨体最少径 43.3	現遠位部巾 49.5	現遠位部径 51.8	61.8	最少巾/最少径=77.1	
79	馬	左上腕骨々体遠位部内側面縁	〃	現最大巾 55.1	現最大径 20.6					4.4	栄養孔径 3.8	
80	馬	左大腿骨外側顆	〃	〃	〃					8.9	栄養孔径 2.8	
81	馬	左肘骨々体近位部	〃	現近位部巾 152.8	現近位部径 47.0	現遠位部巾 48.2	現遠位部径 37.7	欠		41.8	推定中央部巾 56.1	
82	馬	左大腿骨遠位部後面内側	現最大長 85.2	現最大巾 35.7	現最大径 32.9					11.9		
83	馬	左大腿骨々体部内側	〃	現近位部巾 182.8	現近位部径 10.9	現中央部巾 31.0	現中央部径 20.5	現遠位部巾 37.4	現遠位部径 19.2	41.2	25.2	推定中央部径 38.3 栄養孔径 4.0
84	馬	左大腿骨々体部	〃	〃	〃	中央部巾 165.6	中央部径 40.2	中央部径 31.6	中央部径 40.3	30.5	38.8	栄養孔径 3.5
85	馬	左大腿骨頭	〃	現最大巾 32.1	現最大径 42.1	現最大径 46.9	大腿骨頭最大径 17.6			8.9		
86	馬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			7.8		
87	馬	〃	〃	〃	〃	〃	〃			4.2		
88	馬	右肘骨外側顆	〃	〃	〃	〃	〃			4.9		
89	人	右肘骨々体部	〃	現最大長 48.2	現最大径 39.4	現最大径 29.9				15.3		

## 第3節 観察について

No	種類	部位	測定部位と測定値							重量	備 考
91	馬	左脛骨々体部	119.8 #	25.8 現近位部巾	17.8 現遠位部径	中央部巾	現中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	35.4	
92	馬	右脛骨々体部後面	173.9 85.3	33.8 34.4	20.9	33.0	20.1	32.4	29.3	19.3	
93	馬	右脛骨々体近位後面	#	#						4.8	
94	不明	肢骨片	84.6	34.4	#	#				4.8	
95	不明	#	84.6	34.4	#	#				4.3	
96	不明	小骨片	57.3	16.4						89.1	
97	不明	#								82.5	土壌を含む
101	不明	#								2.4	
102	不明	#								6.5	
104	馬	左脛骨々体部内側	現最大長 27.2	現最大巾 29.4	現最大径 80.2					11.2	
106	不明	#								6.1	土壌を含む
108	馬	左中足骨の一部	現最大長 137.8	近位部巾 37.9	近位部径 一塊閉着	中央部巾 25.3	中央部径 23.2	現遠位部巾 欠	現遠位部径 欠		
109	馬	左第2中足骨	89.4	#	#						
110	馬	左第4中足骨	#	#	#						
111	馬	左第1・第2足根骨	8.2(閉着)	#	9.3 一塊閉着						
112	馬	左第3足根骨	#	#	#						
113	馬	左第4足根骨	8.4(#)	21.4	#						
114	馬	左中心足根骨	11.1(#)	26.2	20.5						
114	馬	左中心足根骨	10.9(#)	37.6	28.3						
115	馬	左脛骨の一部	#	現近位部巾	現遠位部径	中央部巾	現中央部径	現遠位部巾	現遠位部径		
116	馬	左距骨	242.2 # #	40.8 推車内側径 一塊閉着	23.4 推車外側径 欠	34.2 推車最大巾 40.3	20.4	欠	欠		
117	馬	左足根骨	現最大長 70.5	近位部巾 17.8	近位部径 29.3	最少部巾 14.4	最少部径 34.5	遠位部巾 37.9	遠位部径 43.2		
118	馬	左大腿骨の一部	#	現近位部巾	現遠位部径	現中央部巾	現中央部径	現遠位部巾	現遠位部径		
119	馬	左後基節骨の一部	235.5	38.4	61.4	32.3	38.9	欠	欠		
120	馬	左中足骨遠位部	#	近位部巾	近位部径	#	中央部径	#	遠位部径		
120	馬	左中足骨遠位部	72.8	42.2	23.3	21.4	13.8	17.4	16.2		
121	馬	左脛骨々体近位部	#	現近位部巾	現遠位部径	#	#	#	#		
121	馬	左脛骨々体近位部	25.2	38.3	14.9	欠	欠	欠	欠	23.8	推定中央部巾 33.2
122	馬	左中足骨々体部	122.9	34.7	33.2	欠	欠	31.6	25.3	39.8	推定中央部巾 25.5
123	馬	下顎体外側	#	#	#						
123	馬	下顎体外側	長径 75.1	短径 32.9	最大厚 7.2					6.2	
124	馬	下顎体内側	#	#	#					8.8	
124	馬	下顎体内側	59.9	32.5	11.4						
125	不明	肢骨片								20.0	
126	不明	#	長径 45.5	短径 32.7	最大厚 7.6					3.7	
127	不明	#	#	#	#					5.9	
127	不明	#	74.5	22.9	9.1						
128	不明	#	#	#	#					4.3	
128	不明	#	54.9	25.7	8.6						
129	不明	肢骨陰影								30.9	
130	不明	肢骨片	長径 53.4	短径 38.4	最大厚 18.6					6.5	
131	不明	小骨片								17.6	
132	不明	#								31.3	
133	不明	#								18.7	
134	不明	#								17.6	

付章 上野園分借寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部位	測定部位と測定値						重量	備考
135	不明	#							13.7	
136	不明	#							12.0	
139	馬	#							6.5	
140	馬	右脛骨々体部の一部	現最大長	現最大巾	現最大径					
			227.1	35.5	26.0					
141	馬	左腕骨の一部	現近位部巾	現近位部径	現中央部巾	現中央部径	遠位部巾	遠位部径		
			163.9	欠	欠	31.5	20.8	54.7	30.8	
144	不明	#							13.8	土壌を含む
147	不明	小骨片							46.2	#
149	不明	股骨片	現最大長	現最大巾	現最大径					
			56.4	11.3	25.9					5.9
150	馬	左中手骨	現近位部巾	現近位部径	最少部巾	最少部径	遠位部巾	遠位部径		
			209.1	26.9	25.8	32.2	26.4	44.8	34.1	86.4
151	馬	左寛結節	長径	短径	最大巾					
			41.6	24.8	27.1					5.2
152	馬	右坐骨体	現寛骨白径	現寛骨白高	現寛骨白厚					
			81.8	49.5	39.3	37.4	4.4			29.5
153	馬	左坐骨体(背面)	#	#	#	#	#			
			64.7	40.5	54.9	36.7	5.2			18.4
154	馬	左寛骨白及脛骨体の一部	#	#	#	#	骨体壁厚			
			165.9	81.2	32.9	21.4	16.8			34.8
155	馬	右胸骨背面前縁	#	#	最大厚					
			52.2	36.2	12.5					7.3
156	馬	左胸骨背面前縁	#	#	#					
			97.3	62.0	13.5					14.6
157	馬	左胸骨背面	#	#	#					
			39.3	37.9	6.1					3.5
158	馬	寛骨々片	#	#	#					
			33.1	22.1	10.9					3.8
159	馬	#	#	#	#					
			49.0	32.6	7.3					4.6
160	馬	#	#	#	#					
			37.4	31.5	11.1					5.3
161	馬	#	#	#	#					
			42.4	36.1	10.2					5.1
162	馬	#	#	#	#					
			37.9	20.4	18.8					3.7
163	馬	#	#	#	#					
			34.5	24.2	8.0					2.9
164	馬	#	#	#	#					
			33.1	12.5	8.7					1.9
165	馬	#	#	#	#					
			38.5	19.2	5.9					2.2
166	馬	#							16.8	
170	鹿	頤蓋の一部	現最大長	現最大高	齒列弓巾	IP <sup>1</sup> 骨列長	IP <sup>2</sup> 骨列長			
			20.4	42.8	16.4	24.5	15.6	13.9		2.9
177	鹿	右肋骨の一部	#	肋体幅	現最大巾	現高				
			20.4	8.0	3.2	6.1				0.1
178	鹿	#	#	#	#					
			17.8	8.0	3.0	6.7				0.1
179	鹿	#	#	#	#					
			21.2	6.7	3.1	5.7				0.1
180	鹿	右踵骨	#	近位部巾	近位部径	中央最少巾	現遠位部巾	現遠位部径		
			49.8	13.8	15.3	8.3	20.5	22.2		3.9
181	鹿	左距骨	最大長	骨幹外側径	骨幹外側径	現骨最大巾	現距部巾			
			30.5	7.2	19.5	12.3	14.8			1.9
182	鹿	右中心足根骨	#	骨体最大巾	骨体最大径					
			24.0	22.7	19.7					2.2
183	鹿	右第2+第3足根骨	#	#	#					
			8.1	15.3	9.8					0.8
184	鹿	右距骨	#	骨幹中央側径	現骨外側径	現骨骨内側径	骨幹最大巾	頭部巾		
			31.1	7.4	17.9	14.7	17.6	20.6		4.3
185	鹿	右肘頭	現最大長	現最大巾	現最大径					
			31.3	6.6	13.6					1.2
186	小獣 虫類	左肩甲骨	肩甲骨長	現最大巾	肩甲骨巾	遠位部巾	遠位部径			
			29.8	16.5	7.8	9.3	4.8			1.2

## 第3節 観察について

No.	種類	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値					重 量	備 考
187	小爬虫類	右肩甲骨	現最大長	#	#	#	#	0.2	
			18.2	10.9	10.7	11.2	4.9		
188	馬	右中手骨々体部	#	現定位部巾	現定位部径	現定位部巾	現定位部径	15.2	
			106.3	25.9	18.1	25.2	18.6		
189	馬	右中手骨の一部	#	現最大巾	現最大径			2.9	
			51.8	19.8	6.9				
190	馬	#	#	#	#			1.5	栄養孔径 0.5
			43.4	10.9	5.1				
191	馬	#	#	#	#			1.5	
			32.0	18.1	6.0				
192	兎	左側歯蓋の一部	#	#	現最大高	LP距離		1.2	歯列長は歯槽
			31.4	18.4	19.9	17.1			
193	兎	右側歯蓋の一部	#	#	#	LP距離		1.3	#
			26.4	19.4	17.4	13.3			
194	兎	頭頂骨	#	#	#			0.3	
			19.8	23.2	7.4				
195	兎	#	#	#	#			0.5	
			18.1	24.4	7.8				
196	兎	左頭頂骨	長 径	短 径	高			0.3	
			19.5	12.1	3.4				
197	兎	右頭頂骨	#	#	#			0.2	
			1.2	1.1	3.6				
205	兎	右側歯骨腔室部	現最大長	現最大巾	高	骨腔の直径	外耳孔径	2.0	
			22.8	18.8	13.5	13.4	7.7		
206	兎	#	#	#	#			1.8	
			21.2	18.6	12.4	12.6	7.4		
207	兎	#	#	#	#	#	#	1.5	
			20.4	16.8	12.9	11.7	7.1		
208	兎	左側歯骨腔室部	#	#	#	#	#	1.3	
			19.4	13.1	11.7	12.8	6.9		
209	兎	#	#	#	#	#	#	1.2	
			19.9	16.9	12.7	12.2	7.9		
210	兎	#	#	#	#	#	#	1.1	
			18.8	13.9	12.1	10.2	7.5		
211	兎	#	#	#	#	#	#	1.1	
			20.9	14.1	11.9	10.8	6.9		
212	兎	胸椎	現最大長の高	椎上縁の高	椎孔の高	椎体の長		0.3	
			13.9	10.4	5.5	7.6			
213	兎	#	#	#	#	#	#	0.3	
			14.3	9.3	5.3	7.8			
214	兎	#	#	#	#	#	#	0.4	
			14.0	10.5	5.2	7.8			
215	兎	左上腕骨々体部	現最大長	現最大巾	現最大径	現最少巾	現最少径	0.8	
			23.6	6.8	5.1	5.5	4.8		
217	不明	小骨片						1.9	
218	不明	#						4.5	
219	不明	#						12.3	
230	馬	左下顎骨の一部	別 記						
233	馬	右下顎体白歯部	長 径	短 径	厚			238.0	土壌を含む
			192.4	82.9	24.6				
234	馬	左顎骨々体後面	#	#	#			118.0	土壌に附着
			54.6	17.4	8.6				
235	馬	左顎骨々体前面	#	#	#			6.8	
			64.5	16.4	8.7				
236	馬	左顎骨々体後面	#	#	#			398.0	土壌に附着
			54.2	20.2	7.4				
263	牛	右下顎体白歯部 外側面の一部	#	#	#			2.4	
			39.2	20.1	12.8				
264	牛	右下顎体白歯部 内側面の一部	#	#	#			2.5	
			38.8	20.2	7.6				
265	牛	右下顎体白歯部 外側面の一部	#	#	#			2.7	
			50.8	18.5	9.9				
266	牛	右下顎体白歯部 外側面の一部	#	#	#			2.2	
			37.4	17.9	11.4				
267	牛	左中手骨々体近位部	現最大長	現定位部巾	現定位部径	現定位部巾	現定位部径	12.9	推定中央部巾 26.5 推定中央部径 21.5
			60.2	29.8	21.9	25.3	17.5		

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部位	測定部位と測定値					重量	備考		
268	牛	小骨片						322.0	土壌を含む		
333	牛	右上腕骨々体部	現最大長	最少中	最少径	現遠位部巾	現遠位部径	32.5	最少巾/最少径=73.3		
			107.5	29.7	40.5	64.7	54.4				
339	不明	骨						2.2			
340	不明	小骨片						4.2			
343	不明	小肢骨片	現最大長	現最大巾	現最大径			1.1			
			17.9	9.0	5.2						
369	牛	左上腕骨の一部						115.5	土壌を含む		
			139.1	32.4	52.6						
370	牛	腕骨々体部						35.3			
			89.0	33.8	19.8						
371	牛	中手骨々体部背面						3.9			
			63.2	21.9	7.2						
372	牛	右中足骨々体部						25.8	推定中央部巾 25.0 推定中央部径 26.5		
			166.5	29.9	25.0						
373	牛	肢骨片	長 径	短 径	厚			5.3			
			58.7	20.4	14.1						
374	牛	骨						5.9			
			67.2	23.3	6.2						
375	牛	骨						3.0			
			49.9	23.4	7.0						
376	牛	骨						1.8			
			52.6	7.2	5.6						
377	鹿	左肩甲骨頸部後面			後角厚			9.0			
			88.2	38.2	11.9						
378	鹿	左肩甲骨背面			厚			5.9			
			62.4	47.0	9.6						
379	鹿	右肩甲骨関節窩	現最大径	現最大径	高			3.8			
			28.9	26.8	24.2						
380	鹿	左肩甲骨内側の一部	長 径	短 径	厚			1.3			
			43.6	17.8	5.8						
381	鹿	肩甲骨片						3.6			
382	馬	右大腿骨々体部	長 径	短 径	厚			36.4			
			77.1	51.7	42.1						
383	馬	右大腿骨遠位端後面	現内側部径	中央部径	観測部径			27.9			
			49.3	36.5	6.5						
384	馬	右大腿骨小骨片						11.4			
385	馬	右脛骨の一部	現最大長	現近位端巾	現近位端径	中央部巾	中央部径	現遠位端巾	現遠位端径	129.2	推定遠位部巾 60.9
			242.1	38.3	33.0	36.3	26.5	56.0	36.2		
386	馬	右距骨	骨外側部径	骨上縁部径	骨車溝径			27.7			
			48.5	27.2	12.8						
387	馬	左上腕骨々体部前面	現最大長	現最大巾	現最大径			48.2			
			171.3	47.9	42.9						
388	馬	右脛骨々体部後面	長 径	短 径	厚			10.9			
			88.5	24.0	19.1						
389	馬	右中足骨の一部						21.9			
			15.4	31.7	25.1						
390	馬	左後頭骨々様						3.2			
			28.6	16.9	12.8						
391	馬	左後頭骨外縁の一部						0.3			
			20.2	16.7	5.2						
392	馬	左下顎体内側の一部						1.9			
			39.8	13.6	4.9						
398	牛	右下顎臼歯部内側						1.5			
			30.6	28.9	6.6						
399	馬	右中手骨々体部背面						25.8			
			141.8	32.8	15.0						
400	馬	右大腿骨顆上窩						5.2			
			48.9	32.4	17.8						
401	馬	右脛骨々体部	現最大長	中央部径				60.1	推定中央部巾 37.9		
			188.4	29.9							
402	馬	肢骨片						1.8			
406	馬	左脛骨頭縁の一部	長 径	短 径	厚			22.7			
			83.9	37.9	28.8						
407	馬	右下顎枕上縁内側						2.9			
			60.8	12.6	7.1						



## 第3節 観察について

No	種類	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値						重 量	備 考	
408	馬	左腕骨々体部後面	現最大長	現近位部巾	中央部巾	中央部径	現遠位部径		52.2	推定中央部径 25.5	
			203.8	26.3	30.9						
409	馬	肢骨片								2.8	
412	牛	右下顎体白歯部内側面	長 径	短 径	厚					20.1	
			116.2	50.0	6.8						
413	牛	小骨片								6.7	
418	馬	左上腕骨の一部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	最少巾	最少径	現遠位部巾	現遠位部径	12.8	内側骨車径 48.8
			214.6	39.1	45.8	31.2	36.2	55.4	76.7		
419	馬	右大腿骨の一部	#	#	#	中央部巾	中央部径	#	#	80.8	
			216.2	55.2	37.9	34.2	39.9	48.7	49.4		
420	馬	左下顎枝上縁	長 径	短 径	厚					1.2	
			31.8	9.9	5.8						
421	馬	#	#	#	#					1.9	
			35.4	12.5	8.6						
422	馬	左肩甲骨関節窩	現最大長	関節窩横径	関節窩縦径					14.1	No466 左肩甲骨関節窩横径 58.9
			40.9	47.8	37.5						
423	馬	左肩甲骨外側後縁	#	現最大巾	関節窩縦径	現筋部厚				12.8	No466 筋部厚 15.8
			83.6	35.4	18.6	11.9					
424	馬	右肩甲骨外側後縁	#	#	#	#				12.8	
			84.5	32.5	16.7	11.8					
425	馬	左肩甲骨後縁	長 径	短 径	厚					12.7	
			62.6	27.8	10.9						
426	馬	左上腕骨顆	現最大長	現遠位部巾	現遠位部径	内側滑車径				42.6	No418 内側滑車径48.8
			57.9	64.3	59.5	48.1					
427	馬	右上腕骨顆	#	#	#	#				31.2	#
			50.8	64.1	54.5	47.6					
428	馬	左上腕骨々体部内側の縁	長 径	短 径	厚	栄養孔径				6.4	No474 栄養孔径 3.9 No475 栄養孔径 3.3
			79.1	28.5	7.6	3.5					
429	馬	左上腕骨々体部内側の縁	#	#	#	#				7.9	
			86.8	28.8	7.4	3.8					
430	馬	左上腕骨々体部外側の縁	#	#	#	#				9.4	
			61.9	27.4	18.9						
431	馬	右大腿骨々体部内側	#	#	#	栄養孔径				10.3	No419 栄養孔径 3.7
			78.5	29.4	10.9	3.8					
432	馬	右大腿骨顆上窩	#	#	#	現窩巾	現窩長	現窩深		9.1	推定窩巾 20.4 推定窩長 47.4
			59.1	36.6	9.5	17.2	39.4	4.5			
433	馬	左大腿骨顆内側	骨過巾	現骨過径	窩					14.9	
			45.2	27.8	50.8						
434	馬	左大腿骨々体部内側	長 径	短 径	厚					10.4	
			80.8	29.3	14.8						
435	馬	右距骨遠位端	遠位部巾	現遠位部径	高					7.9	
			59.2	56.8	24.8						
436	馬	右尺骨顆	長 径	短 径	厚					21.1	
			82.3	35.2	14.9						
440	馬	左上腕骨々体外側後縁部	現最大長	現遠位部巾	現遠位部径					29.3	
			134.9	34.2	34.7						
441	馬	左中手骨背面	#	現近位部巾	現近位部径	現中央部巾	現中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	40.8	
			183.6	28.9	21.7	31.4	17.9	32.9	17.2		
442	馬	右大腿骨顆	#	現頭部巾	現頭部径					27.9	
			89.0	52.3	52.4						
443	馬	左大腿骨々体部内側	#	現近位部巾	現近位部径	現中央部巾	現中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	49.1	
			226.2	13.8	38.2	14.1	37.9	40.8	56.5		
444	馬	左大腿骨々体部前部	#	#	#	#	#	#	#	40.8	
			179.8	41.2	29.0	34.2	33.8	45.7	38.9		
445	馬	右大腿骨々体部外側	長 径	短 径	厚					11.4	
			70.9	33.9	17.9						
446	馬	左大腿骨顆上窩	#	#	#					6.9	
			62.3	31.2	15.2						
447	馬	左大腿骨遠位部内側後端	#	#	#					9.1	
			80.8	34.9	19.2						
448	馬	右距骨ラセン	#	#	#					6.8	
			44.4	33.3	34.8						
449	馬	右距骨遠位部後面内側	#	#	#					7.3	
			82.6	22.9	21.9						
450	牛	左腕骨々体近位部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	現遠位部巾	現遠位部径			120.2	推定中央部巾 44.8 推定中央部径 27.4
			184.9	57.1	36.4	44.8	27.4				

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No	種類	部位	測定部位と測定値			重量	備	要	
451	牛	左脛骨々々体部後面外縁	#	現遠位部巾	現遠位部径			23.5	
			261.8	43.2	14.3				
452	牛	左中手骨々々体部	#	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	現中央部径	現遠位部巾	現遠位部径
			131.3	31.7	22.7	28.4	25.2	34.2	21.5
453	馬	右橈骨々々体近位部内側	長径	短径	厚			15.3	
			122.8	27.7	9.8				
454	馬	右中手骨々々体部背面	#	#	#			13.9	
			116.8	32.8	19.1				
455	馬	右中手骨々々体遠位部	#	#	#			20.7	
			160.5	29.9	24.7				
456	馬	左大腸骨々々体部内側後縁	#	#	#	掌寛孔径			13.2
			112.4	29.5	16.2	3.6			
457	馬	右脛骨々々体部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	現中央部径		57.5
			152.5	39.5	32.9	36.5	29.7		
458	馬	右脛骨々々体部内側面	長径	短径	厚			10.4	
			84.2	28.8	14.1				
459	馬	右中足骨の一部	現最大長	近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径		50.6
			144.1	41.2	25.1	30.9	27.2		
460	馬	右中足骨前面	#	現近位部巾	#	#	現中央部径		46.3
			152.2	30.6	19.1	29.3	17.9		
461	馬	左脛骨々々体部内側	長径	短径	厚			32.7	
			158.6	22.4	26.0				
462	馬	中手骨々々体部背面	#	#	#			9.4	
			63.0	23.8	13.3				
463	馬	左橈骨々々体部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径	現遠位部巾	現遠位部径
			294.1	34.2	27.4	28.1	21.2	39.5	21.0
465	馬	左下顎体白歯部内側	長径	短径	厚			2.8	
			36.5	30.7	6.8				
466	馬	左肩甲骨後縁	現最大長	現最大巾	現厚部径	現掌部径			78.2
			222.8	71.9	51.7	58.9			
467	馬	左大腸骨々々体部後面	#	現近位部巾	現近位部径	現中央部径	現上翼部径		34.2
			167.4	47.2	43.6	32.3	33.8		
468	馬	右大腸骨々々体部後面内側	長径	短径	厚			1.6	
			30.3	22.6	8.6				
469	馬	右大腸骨前面	#	#	#			20.9	
			84.4	57.9	36.1				
470	馬	左趾骨	滑車内側径	滑車上縁径	滑車溝径			25.3	
			51.4	25.8	11.1				
471	馬	左上腕骨々々体部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	最少巾	最少径	現遠位部巾	現遠位部径
			163.9	62.3	59.4	37.9	45.9	65.1	48.5
472	馬	左大腸骨後面外側	長径	短径	厚			13.4	
			138.2	33.3	10.4				
473	馬	左橈骨々々体部前面内側	現最大長	現近位部径	現遠位部径			27.5	
			152.6	41.1	29.1				
474	馬	左上腕骨々々体部	#	現近位部巾	現近位部径	最少巾	現最少径	現遠位部巾	現遠位部径
			132.6	43.2	49.9	26.4	48.8	49.8	41.6
475	馬	右上腕骨々々体部	#	#	#	#	最少径	#	#
			193.1	38.1	52.5	33.4	42.4	45.3	71.1
476	馬	#	#	#	#	#	#	#	79.5
			150.8	34.7	49.2	33.0	39.6	46.1	46.4
477	馬	#	#	#	#	現最少径	#	#	39.7
			125.6	32.9	44.8	33.6	40.1	48.8	36.8
478	馬	左大腸骨々々体部	#	#	#	中央部巾	中央部径	#	#
			203.6	57.3	30.4	34.3	44.8	45.7	42.9
479	馬	左大腸骨々々体遠位部内側前縁	長径	短径	厚			21.6	
			115.8	42.7	12.2				
480	馬	左脛骨々々体部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径	現遠位部巾	現遠位部径
			200.5	38.6	28.3	38.1	28.6	40.9	31.2
481	鹿	右第11肋骨	#	肋骨前縁径	骨体巾	骨体径			1.2
			24.3	16.4	3.8	4.0			
482	鹿	右肩甲関節縁	長径	短径	厚			1.1	
			17.8	7.2	2.4				
483	鹿	第6～第7腰椎の一部	腰椎体径	現腰椎体径	現腰椎体径	現腰椎体径	現腰椎体径	現腰椎体径	現腰椎体径
			29.0	25.9	27.2	9.8			
484	馬	左前第1手根骨	長径	短径	高			6.9	
			32.1	30.3	37.8				

## 第3節 観察について

No	種類	部	位	測定部位と		測定値		重量	摘	要
485	馬	左中手骨々体近位部	骨 径	骨 径	骨 径	骨 径	骨 径	32.2		推定中央部巾 27.9 推定中央部径 21.4
			105.1	欠損	31.4	29.9	22.4			
488	馬	右下顎枝	顎頭突起の高	顎頭突起の高	現下縁の長さ	顎頭突起の高	顎頭突起の高	12.9		
			68.1	35.8	76.2	26.3	5.9			
489	馬	右脛骨々体後面	現最大長	中央部巾	現中央部径	現近位部巾	現遠位部巾	46.6		
			225.4	34.8	14.4	36.9	41.9			
490	馬	左中足骨々体近位部	骨 径	現近位部巾	現遠位部巾	現遠位部径		11.3		
			78.6	36.3	30.2	17.2				
494	馬	左肩甲骨の一部	長 径	短 径	胸壁厚	現肩甲高径	現肩甲部巾	31.2		
			118.4	40.7	13.4	29.5	40.7			
495	馬	左距骨	現内側骨径	骨上縁距離	帯末溝深			19.8		
			45.5	27.5	13.2					
496	馬	左上腕骨の一部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	最少巾	最少径	現遠位部巾	現遠位部径	81.3
			206.6	38.0	51.5	32.8	42.3	42.2	39.2	
497	馬	左中足骨の一部	骨 径	骨 径	骨 径	現遠位部巾	現遠位部径	9.2		
			94.3	25.1	10.1	24.0	10.0			
498	馬	左腸骨翼	長 径	短 径	厚			31.2		
			110.5	80.9	22.4					
499	馬	右腸骨体外縁	骨 径	骨 径	高			8.2		
			95.7	17.6	23.4					
500	馬	右橈骨々体部	現最大長	現近位部巾	中央部巾	中央部径	現遠位部巾	76.4		
			251.4	45.9	34.7	23.1	31.2			
501	馬	下顎骨小骨片						21.3		
506	牛	右脛骨々体部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	121.3
			228.2	43.1	29.9	38.5	27.9	45.0	36.5	
507	馬	右中手骨の一部	骨 径	骨 径	骨 径	現遠位部巾	現遠位部径	18.0		
			95.5	28.5	25.8	19.2	31.3			
508	馬	右大腸骨内側後面	骨 径	骨 径	厚	栄養孔径		5.3		
			70.7	17.7	11.6	2.3				
509	人	右大腸骨々体近位部								
510	牛	左脛骨々体部内側	現最大長	現最大巾	現最大径			31.4		
			183.3	36.2	13.8					
513	人	左大腸骨々体遠位部	骨 径	現上横径	現上矢状径	中央横径	中央矢状径	現下端横径	現下矢状径	91.9
			274.6	31.0	27.8	29.8	26.2	35.2	29.0	
515	馬	右中足骨々体遠位部	骨 径	現最大巾	現最大径			10.9		
			94.4	12.2	24.4					
516	馬	左肩甲骨内面	骨 径	骨 径	肩甲甲部巾	現遠位部巾	現遠位部径	25.7		
			124.9	52.8	46.1	34.2	18.6			
517	牛	左中足骨の一部	骨 径	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径	64.7		
			161.6	43.1	37.6	32.5	27.2			
518	牛	左脛骨々体部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	129.1
			205.9	44.6	50.8	34.6	40.8	54.9	52.1	
519	馬	左上腕骨々体部	骨 径	骨 径	骨 径	最少巾	最少径	骨 径	骨 径	46.7
			153.1	44.5	51.9	31.4	37.1	55.4		
520	馬	右橈骨々体部	骨 径	骨 径	骨 径	中央部巾	中央部径	骨 径	現遠位部径	135.3
			282.4	38.1	28.3	36.4	26.8	59.1	42.5	
522	馬	左脛骨ラセン	骨 径	骨 径	高			3.3		
			27.9	13.9	23.0					
524	馬	右上腕骨々体部	骨 径	骨 径	現近位部径	最少巾	最少径	現遠位部巾	現遠位部径	25.6
			96.7	33.9	37.8	33.9	37.4	45.5	35.7	
525	馬	右橈骨々体遠位部内側面	長 径	短 径	高			17.1		
			124.1	23.7	25.4					
526	馬	右大腸骨々体部	現最大長	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	42.9
			154.8	39.5	48.6	34.6	42.1	45.7	31.2	
527	牛	左中手骨頭部腕節	長 径	短 径	高			11.5		
			47.3	41.9	34.7					
530	人	小骨片						9.6		
531	不明	肢骨片	現最大長	現最大巾	現最大径			54.5		土壌を含む
			131.9	34.8	29.3					
532	不明	骨 片	骨 径	骨 径	骨 径			39.3		骨 片
			129.6	34.3	28.6					
533	不明	小骨片						24.6		
534	不明	骨 片						4.0		
535	不明	骨 片						234.5		土壌を含む
536	不明	骨 片						80.2		骨 片
537	不明	骨 片						3.1		骨 片

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No.	種類	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値			重 量	備 考
538	不明	#				10.9	
539	不明	#				12.8	土壌を含む
540	不明	#				65.1	小骨片多数
541	不明	#				172.5	#
542	不明	#				359.0	#
543	不明	#				20.1	土壌を含む
544	不明	#				22.7	#
545	不明	骸骨片	長 径	短 径	厚	13.1	
			83.5	36.5	15.3		
			#	#	#		
			9.9	24.2	6.7		
546	不明	#				4.7	
547	不明	小骨片				122.2	土壌を含む
548	不明	#				119.2	#
549	不明	骸骨片	長 径	短 径	厚	3.4	
			84.5	25.4	2.5		
			#	#	#		
			73.6	18.4	9.3		
550	不明	#				4.1	
551	不明	#				3.4	
552	不明	#				8.3	土壌を含む
553	不明	小骨片				10.2	
554	不明	#				143.3	土壌を含む
555	不明	#				27.2	#
556	不明	#				21.5	#
557	不明	#				162.3	#
558	不明	#				8.1	#
559	不明	#				1.3	
560	不明	#				23.7	
561	不明	#				39.3	土壌を含む
562	不明	#				19.5	
563	不明	#				15.2	土壌を含む
564	不明	#				9.1	
565	不明	#				5.4	土壌を含む
566	不明	#				58.8	#
567	不明	#				1.8	
568	不明	骸骨片	長 径	短 径	厚	13.4	
			58.7	38.6	16.8		
			#	#	#		
			99.4	47.6	16.4		
569	不明	#				10.6	
570	不明	#	縦最大長	縦最大巾	縦最大径	6.7	土壌を含む
			54.1	27.6	11.3		
571	不明	#				5.2	
572	不明	小骨片				2.0	
573	不明	#				2.7	
574	不明	#				1.8	
575	不明	#				18.9	
576	不明	#				23.5	
577	不明	#				8.7	
578	不明	#				0.1	
579	不明	#				33.4	
580	不明	#				68.7	土壌を含む
581	不明	#				22.6	
582	不明	#				90.2	
583	不明	#				29.5	
584	不明	#				2.1	
585	不明	#				28.3	土壌を含む
586	不明	#				16.5	#
587	不明	#				0.1	
588	不明	#				21.9	土壌を含む
589	不明	#				94.7	#
590	不明	#				2.1	
591	不明	#				14.8	
592	不明	#				4.8	土壌を含む
593	不明	#				4.1	
594	不明	#				6.2	
595	不明	#				12.2	
596	不明	#				172.1	土壌を含む

## 第3節 観察について

No	種類	部位	測定部位と測定値					重量	備 考	
597	不明	#						111.2		
598	不明	#						21.2	土壌を含む	
610	馬	右下顎骨	別 記							
617	馬	左下顎体臼歯部	別 記							
618	馬	左下顎枝関節突起	長 径	短 径	厚			3.2		
			27.9	26.8	13.1					
619	馬	左下顎角前面隆起							土壌上	
620	馬	右上腕骨々体遠位部	現最大長	骨体最少径	骨体最少径	現遠位部巾	現遠位部径	52.8	推定遠位部最大径61.2	
			191.4	28.8	35.7	35.6	49.5			
621	馬	右腕骨々体部掌面	#	現遠位部径				40.3	推定中央部巾 33.6	
			215.4	50.1						
622	馬	右大腿骨々体部内面	#	現最小巾	現遠位部径			42.3		
			152.3	39.6	51.6					
623	馬	右中足骨々体部	#	現遠位部巾	中央部巾	現中央部径	現遠位部径	38.9	推定中央部径 22.8	
			189.3	35.2	25.4	20.9	21.0			
624	馬	右大腿骨大転子後部	長 径	短 径	最大厚			3.3		
			35.4	29.6	13.6					
625	不明	小骨片						27.0		
626	不明	#						4.6		
627	不明	#						44.1	土壌を含む	
628	不明	#						32.4	#	
629	不明	#						21.1	#	
630	不明	#						51.4	#	
632	馬	上顎骨小骨片						25.1	#	
654	馬	小骨片						18.0	#	
655	牛	#						165.0	大量の土壌中に風化土化した小骨片	
658	不明	#	長 径	短 径	高			1.5		
			23.5	21.8	10.6					
659	不明	#	#	#	#			3.9		
			34.1	23.3	17.4					
660	不明	#						2.4		
662	不明	#						1.1		
663	不明	#						5.4	土壌を含む	
665	不明	#						2.2		
666	不明	#						1.6		
668	不明	#						935.0	大量の土壌中に風化した小骨片	
669	不明	#						推定中央部巾 32.0	大量の土壌中に風化した小骨片	
671	馬	左腕骨々体部	現最大長	現遠位部巾	現遠位部径	現中央部巾	現中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	39.2
			139.8	34.8	22.6	31.8	22.5	30.8	21.9	
672	不明	肢骨片								13.2
673	不明	小骨片								1.1
675	不明	#								3.4
676	人	右側頭骨鼓室部	現最大長	現最大径	現最大高	外耳孔直径	内耳孔直径			11.4
			54.8	41.2	38.1	12.8	9.6			
677	人	左側頭骨鼓室部	#	#	#	#	#			12.1
			58.8	40.5	36.5	11.8	欠 損			
678	人	顎骨片	長 径	短 径	高					5.9
			51.4	29.9	9.8					
679	人	#	#	#	#					6.9
			46.7	44.7	8.8					
680	人	#	#	#	#					3.9
			36.7	33.4	8.0					
681	人	#	#	#	#					6.2
			47.4	41.8	9.8					
682	人	#	#	#	#					5.2
			45.0	42.7	11.8					
683	人	#	#	#	#					3.5
			39.5	31.4	9.0					
684	人	#	#	#	#					5.1
			43.7	30.4	10.4					
685	人	#	#	#	#					4.7
			44.2	34.2	13.9					
687	不明	小骨片								20.6
717	馬	右口蓋臼歯部	長 径	短 径	厚					20.1
			116.8	51.9	36.1					

## 付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

No.	種類	部位	測定部位と測定値			重量	備考
718	馬	左口蓋白歯部	#	#	#	21.2	
			121.4	49.2	37.8		
719	馬	右下顎体白歯部 外側面	#	#	下縁厚M <sub>2</sub>	21.2	
			145.3	68.4	20.8		
720	馬	右下顎体白歯部 内側面	#	#	骨体厚P <sub>2</sub>	33.3	
			120.1	52.4	24.9		
721	馬	#	#	#	厚	6.6	
			98.6	24.3	10.2		
722	馬	左下顎体白歯部 外側面	#	#	#	34.6	
			160.6	66.7	21.5		
723	馬	#	#	#	#	6.1	
			55.4	59.4	12.6		
724	馬	左下顎体白歯部 内側面	#	#	#	23.9	
			150.1	38.9	15.9		
733	馬	左下顎体白歯部 外側面	#	#	#	3.0	
			45.2	29.8	6.8		
737	馬	左中心足根骨	#	#	#	7.0	
			42.4	35.4	18.9		
739	不明	小骨片	#	#	#	1.1	
			28.5	20.4	2.2		
740	不明	#				1.5	
752	不明	#				8.9	土壌を混す
753	不明	#				11.8	
759	鹿	#				0.1	
763	猪	#				0.6	
764	不明	#				6.4	土壌を含む
765	不明	#					
766	不明	#				1.2	
771	不明	#				1.0	
772	不明	#				2.9	
773	不明	#				13.3	土壌を含む
774	不明	#				2.9	
778	牛	右下顎体白歯部	長径	短径	厚		重量はNo.776に記載
			34.7	31.6	19.1		
782	牛	#	#	#	#		重量はNo.780に記載
			79.7	27.4	49.3		
789	牛	左下顎体白歯部	#	#	#		重量はNo.788に記載
			47.5	26.3	20.3		
793	牛	下顎体白歯部	#	#	#	3.8	
			69.3	17.9	6.9		
835	馬	右下顎体白歯部 内側	#	#	#	2.0	
			36.4	24.7	12.4		
836	馬	#	#	#	#	28.4	土塊に陰影附着
			37.9	20.7	1.2		
843	牛	右下顎体白歯部外側				46.2	土壌を含む
848	馬	小骨片				284.0	大量の土壌を含む
851	馬	#				16.3	土壌を含む
854	馬	#				365.0	大量の土壌を含む
862	牛	下顎体白歯部小骨片				37.0	#
876	馬	左上腕骨々々体遠 進部後端	長径	短径		245.0	#
			58.8	38.2			
877	馬	左上腕骨々々体部 内側	#	#		245.0	#
			58.8	38.2			
879	牛	下顎骨小骨片				14.8	土壌を含む
890	牛	小骨片					
891	馬又 ハ牛	#					
892	不明	#				302.0	土壌を含む
893	不明	#				29.0	#
894	不明	#				49.0	#
895	不明	#					土塊中に骨片附着
896	不明	#				15.1	土壌を含む
897	不明	#				4.6	#
898	不明	#				5.7	#
899	不明	#				27.3	#
900	不明	#				216.0	大量の土壌中に小骨片散見

## 第3節 観察について

No	種類	部位	測定部位と測定値				重量	備 考		
901	不明	#					22.1	土壌を含む		
902	不明	#					460.0	土塊中に存在		
903	不明	#					5.7	土壌を含む		
904	不明	#					48.5	#		
905	不明	#					126.3	大量の土壌を含む		
906	不明	#					4.4	土壌を含む		
907	不明	#					1015.0	大量の土壌を含む		
908	不明	#					61.0	#		
909	不明	#					2.5	土壌を含む		
917	不明	#					2.0			
918	不明	#					53.6	土壌を含む		
919	不明	#					273.0	大量の土壌を含む		
930	猪	左上顎骨の一部	長 径	短 径	厚			重量はNo920に含まる		
			37.4	26.3	19.1					
931	猪	右下顎体臼歯部	#	#	臼歯部厚	下顎枝厚		重量はNo923に含まる		
			78.2	47.2	18.9	1.8				
932	猪	左下顎体臼歯部	#	#	#	#		重量はNo927に含まる		
			65.5	42.4	18.0	2.1				
933	猪	右椎形骨	#	#	#	椎窩寛長	椎窩寛高	小翼孔径	部骨孔径	5.9
			49.7	36.2	24.8	31.4	24.7	2.6	2.7	
934	猪	左椎形骨	#	#	#	#	#	#	#	2.4
			33.7	33.3	20.2	26.6	23.2			
935	猪	左頭頂骨	#	#	#					2.7
			45.4	30.3	19.7					
936	猪	左前頭骨片	#	#	#					2.3
			36.4	28.0	12.1					
937	猪	右頭頂骨	#	#	#					2.9
			43.6	33.8	18.5					
938	猪	右後頭骨	#	#	#	現後頭顱長	現後頭顱巾			2.1
			40.8	31.8	20.4	23.4	12.8			
939	猪	左後頭骨	#	#	#	#	#			1.2
			29.2	23.3	18.8	17.2	11.9			
940	猪	左肘頭	現最大長	現最大巾	現最大径					1.5
			32.1	11.5	17.8					
941	猪	椎骨の一部	椎体の長	椎上1/3部 下椎体の 高さの1/2	椎體部の巾	長 径	短 径	厚		1.0
			16.9	12.0	11.9	29.8	19.6	12.1		
942	猪	左前額骨	長 径	短 径	厚					2.2
			36.3	30.3	11.5					
943	猪	小骨片								10.8
975	不明	不明								土壌中の遺物確認出来ず
976	不明	#								#
977	不明	#								土壌中の骨確認出来ず
978	不明	#								#
979	不明	#								#
980	不明	#								#
991	馬	左下顎体臼歯部 外側	長 径	短 径	厚					重量はNo989に含まる
			37.2	22.4	5.8					
1010	馬	小骨片								3.0
1014	馬	左下顎体臼歯部 外側	長 径	短 径	厚					重量はNo1012に含まる
			59.8	40.9	11.6					
1017	馬	#	#	#	#					重量はNo1015に含まる
			62.6	46.8	10.9					
1019	馬	#	#	#	#					重量はNo1018に含まる
			29.7	29.3	8.9					
1054	馬	左距骨の一部	現最大長	現最大巾	現最大径					25.8
			40.4	42.6	26.8					
1055	不明	小骨片								23.4
1056	不明	#								12.0
1057	不明	#								69.9
1058	不明	#								419.0
1059	不明	#								158.0

附表10 馬下顎骨計測値

No.	種類	骨の部位	測		定					値	重量	備 考
230	馬	左下顎骨の一部	下顎骨全長 〔下顎角からの長〕	現開閉突起からの長	下顎枝市 M <sub>1</sub> 歯槽線	槽間線の長	現開閉突起の高	現下顎莖高 〔現開閉突起の高GOV〕	骨体高 M <sub>1</sub> 後縁	589.0	重量はNo.220～No.229及び230を含む	
			359.5	389.4	95.6	85.2	178.9	188.6	92.5			
			骨体高 M <sub>1</sub> 前縁	骨体高 P <sub>1</sub> 前縁	骨体厚 M <sub>1</sub> 後縁	骨体厚 M <sub>1</sub> 前縁	骨体厚 P <sub>1</sub> 前縁	歯列長 P <sub>1</sub> -M <sub>1</sub>	前臼歯列長 P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub>			
			79.4	53.1	23.2	25.0	20.5	159.1	95.2			
		後臼歯列長 M <sub>1</sub> -M <sub>2</sub>	下顎内腹縁 厚	下顎枝前縁 厚	齒尖筋窩深							
		59.4	10.1	12.1	12.9							
610	馬	右下顎骨	現下顎骨全長	下顎内腹縁 市	骨体高 P <sub>1</sub> 後縁	骨体高 P <sub>1</sub>	骨体高 M <sub>1</sub>	骨体高 M <sub>1</sub> 後縁	189.0	重量はNo.605～No.606及びNo.610を含む		
			288.4	19.4	63.9	65.1	67.9	79.5				
617	馬	左下顎骨臼歯部	現下顎骨全長	骨体高 P <sub>1</sub> 前縁	骨体厚 P <sub>1</sub> 前縁	オトガイ孔の大きさ	現骨体最大高		191.0	重量はNo.611～No.616及びNo.617を含む		
			243.9	45.6	16.1	11.6×6.3	66.4					

附表11 牛上下顎骨計測値

No.	種類	骨の部位	測		定				値	重量	備 考
12	牛	左下顎骨臼歯部	現最大長	現最大高	現骨体厚 P <sub>1</sub>	現骨体厚 M <sub>1</sub>	現骨体厚 M <sub>1</sub> 前縁	現骨体厚 M <sub>2</sub>	現骨体厚 M <sub>3</sub>	111.0	重量はNo.8～No.11及びNo.12を含む
			151.9	51.8	20.3	22.9	22.5	26.2	23.4		
			現骨体厚 M <sub>1</sub> 後縁								
		25.5									
6	牛	右下顎骨臼歯部	現最大長	現最大高	現骨体厚 M <sub>2</sub>	現骨体厚 M <sub>1</sub> 後縁				41.2	重量はNo.5及びNo.6を含む
			66.1	41.4	25.0	18.9					
25	牛	上顎骨	前後最大径	内外最大径	上下最大径	歯列長 RP <sup>a</sup> -RM <sup>a</sup>	歯列長 RM <sup>a</sup> -RM <sup>a</sup>	歯列長 LP <sup>a</sup> -LM <sup>a</sup>	歯列長 LP <sup>a</sup> -LP <sup>a</sup>	556.0	重量はNo.15～No.26を含む
			179.3	130.3	129.6	103.2	84.8	135.2	53.8		
			歯列長 LM <sup>a</sup> -LM <sup>a</sup>	歯列弓巾							
		88.9	119.1								



附表12 集計に用いた遺跡別出土馬歯点数

部位	時代	遺跡名	大形馬	中形馬	小形馬	計
I <sup>1</sup>	古墳時代から 平安時代まで	園分寺中間	5	1		6
		日高	1			1
		小計	6	1		7
I <sup>2</sup>	#	園分寺中間	3	1		4
		日高	2			2
		小計	5	1		6
I <sup>3</sup>	#	園分寺中間	2			2
		小計	2			2
I <sup>4</sup>	#	園分寺中間		1		1
		日高	1			1
		小計	1	1		2
I <sup>5</sup>	#	園分寺中間		4	1	5
		日高		1	1	2
		下東西		1	1	2
		小計		5	3	8
I <sup>6</sup>	#	園分寺中間		4		4
		日高		1	1	2
		下東西		1	1	2
		田端		1	1	2
		小計	4	3	7	
M <sup>1</sup>	#	園分寺中間		2	1	3
		日高	2	1	3	
		下東西		1	1	2
		小計	2	2	3	
M <sup>2</sup>	#	園分寺中間	1	1	2	4
		日高	2			2
		下東西		1	1	2
		小計	3	1	3	
M <sup>3</sup>	#	園分寺中間		1	1	2
		日高	1	1	2	
		小計	1	2	1	
I <sub>1</sub>	#	園分寺中間		1		1
		日高	1			1
		小計	1	1		2
P <sub>1</sub>	#	園分寺中間	2	2	1	5
		日高	1			1
		小計	2	3	1	6
P <sub>2</sub>	#	園分寺中間	2	6	2	10
		小計	2	6	2	10
P <sub>3</sub>	#	園分寺中間	2	6	2	10
		小計	2	6	2	10
M <sub>1</sub>	#	園分寺中間	2	4		6
		小計	2	4		6
M <sub>2</sub>	#	園分寺中間	2	5		7
		下東西		2		2
		小計	2	7		9

部位	時代	遺跡名	大形馬	中形馬	小形馬	計
I <sup>1</sup>	古墳時代一 平安時代計		31	44	18	93
I <sup>2</sup>	中世以降	園分寺中間			2	2
		三ツ寺田			2	2
		小計			4	4
I <sup>3</sup>	#	園分寺中間	1			1
		三ツ寺田			2	2
		下東西		1		1
		田端		1		1
		小計	1	2	2	5
I <sup>4</sup>	#	園分寺中間	1			1
		三ツ寺田			2	2
		田端		1		1
		小計	1	1	2	4
I <sup>5</sup>	#	園分寺中間	2	1		3
		三ツ寺田			2	2
		下東西		2		2
		小計	2	3	2	7
I <sup>6</sup>	#	園分寺中間	2			2
		三ツ寺田			2	2
		下東西	1	1	1	3
		小計	3	1	3	7
I <sup>7</sup>	#	園分寺中間	3	1		4
		三ツ寺田			2	2
		下東西		2		2
		田端		1		1
		小計	3	4	2	9
M <sup>1</sup>	#	園分寺中間	2			2
		三ツ寺田			2	2
		下東西		1		1
		田端		1		1
		小計	2	2	2	6
M <sup>2</sup>	#	園分寺中間	2			2
		三ツ寺田			2	2
		田端		1		1
		小計	2	1	2	5
M <sup>3</sup>	#	園分寺中間	2	2	1	5
		三ツ寺田			2	2
		下東西		1		1
		小計	2	3	3	8
I <sub>1</sub>	#	園分寺中間	1	4		5
		三ツ寺田			1	1
		下東西		2		2
		小計	1	6	1	8

付章 上野園分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

部位	時	代	遺跡名	大形馬	中形馬	小形馬	計
I <sub>2</sub>	#		園分寺中間	2	2		4
			三ツ寺田			1	1
			下東西		2		2
			小計	2	4	1	7
I <sub>3</sub>	#		園分寺中間	2	1		3
			三ツ寺田			1	1
			下東西		2		2
			小計	2	3	1	6
P <sub>1</sub>	#		園分寺中間	1	3	1	5
			三ツ寺田			2	2
			下東西		1		1
			小計	1	4	3	8
P <sub>2</sub>	#		園分寺中間	2	4	3	9
			日高	1			1
			三ツ寺田			2	2
			下東西		3		3
			小計	3	7	5	15
			園分寺中間	3	2	3	8
P <sub>3</sub>	#		三ツ寺田			2	2
			下東西		2		2
			田端		1		1
			小計	3	5	5	13

部位	時	代	遺跡名	大形馬	中形馬	小形馬	計
M <sub>1</sub>	#		園分寺中間	3	4	2	9
			三ツ寺田			2	2
			下東西		2		2
			田端		1		1
			小計	3	7	4	14
M <sub>2</sub>	#		園分寺中間	2	8	3	13
			三ツ寺田			2	2
			下東西	1	3		4
			田端		1		1
			小計	3	12	5	20
M <sub>3</sub>	#		園分寺中間	2	6	1	9
			三ツ寺田			2	2
			下東西		2		2
			田端		1		1
			小計	2	9	3	14
			中世以降計	36	74	50	160
			合計	67	118	68	253

附表13 群馬県内5遺跡における大きさ別出土馬歯の平均値(三ツ寺田遺跡、日高遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、園分寺中間地域遺跡)

1. 古墳時代から平安時代まで

部位	I <sup>1</sup>						I <sup>2</sup>					
馬の大きさ	大			中			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	5	5	4	1			5	5	5			
平均値	18.4±0.9	10.6±1.0	58.0±7.6	15.6			18.4±0.3	10.0±0.6	54.5±3.3			
部位	I <sup>1</sup>						I <sup>2</sup>					
馬の大きさ	中			大			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	1	1	1	2	2	2	1	1	1			
平均値	19.6	10.0	51.0	17.8, 17.9	9.9, 10.0	55.6, 55.9	37.4	25.8	69.0			
部位	P <sup>2</sup>						P <sup>3</sup>					
馬の大きさ	中			中			小			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	1	1	1	5	3	3	3					
平均値	34.6	22.1	63.9	28.6±0.5	26.3±1.1	91.7±4.5	25.3±1.1					
部位	P <sup>4</sup>						M <sup>1</sup>					
馬の大きさ	中			小			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	4	1	1	2	2	1	2	2	2			
平均値	25.1±2.1	26.1	100.8	22.4, 26.4	23.8, 24.0	106.3	24.9, 25.0	25.9, 26.1	102.8, 104.4			
部位	M <sup>1</sup>						M <sup>1</sup>					
馬の大きさ	中			小			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	2			3	2	2	3	1	1			
平均値	25.1, 25.9			21.8±0.6	23.9, 24.3	81.8, 107.5	25.7±0.3	24.6	96.9			
部位	M <sup>2</sup>						M <sup>1</sup>					
馬の大きさ	中			小			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	1	1	1	3	1	1	1					
平均値	26.5	23.2	87.5	23.3±0.6	22.8	101.3	25.8					
部位	M <sup>3</sup>						I <sub>1</sub>					
馬の大きさ	中			小			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	2	2	2	1			1	1	1			
平均値	26.6, 24.6	21.2, 21.2	79.7, 86.2	23.6			16.4	9.2	56.1			
部位	I <sub>1</sub>						P <sub>2</sub>					
馬の大きさ	中			大			中			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	1	1	1	2	2	2	3	2	2			
平均値	15.6	9.9	63.5	32.4, 34.0	13.2, 14.7	40.7, 43.2	31.3±1.1	14.3, 15.2	47.8, 46.8			
部位	P <sub>2</sub>						P <sub>2</sub>					
馬の大きさ	小			大			中			中		
測定部位	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率	歯冠長	歯冠市	市率
例数	1	1	1	2	2	2	4	5	3			
平均値	29.8	13.8	46.3	28.3, 28.1	15.1, 16.3	53.4, 58.2	27.1±0.8	15.2±0.7	55.4±3.8			

付表 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

部位	P <sub>3</sub>						P <sub>4</sub>					
馬の大きさ	小			馬			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	2	2	2	2	2	2	2	2	2	5	6	5
平均値	22.5, 22.8	13.2, 13.9	58.7, 61.0	27.0, 27.9	15.4, 16.2	57.6, 71.7	27.0±1.5	14.8±0.4	55.2±4.7			
部位	P <sub>4</sub>						M <sub>1</sub>					
馬の大きさ	小			馬			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	2	2	2	2	2	2	4	4	4			
平均値	23.1, 23.7	12.7, 12.6	55.6, 53.2	24.9, 25.8	13.2, 14.0	53.6, 54.3	24.9±0.5	13.4±0.2	53.7±1.2			
部位	M <sub>2</sub>						M <sub>3</sub>					
馬の大きさ	大			中			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	2	2	2	6	6	5	2	3	2			
平均値	25.5, 25.2	12.9, 13.5	50.6, 53.6	25.1±0.7	12.8±1.0	50.8±3.2	29.3, 29.4	12.8±0.8	40.6, 43.2			
部位	M <sub>4</sub>											
馬の大きさ	中			小								
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率						
例数	3	2	2	4	4	4						
平均値	28.7±0.9	11.4, 11.6	40.6, 42.0	29.2±0.9	11.6±0.1	39.6±1.3						

## 2. 中世及び中世以降

部位	I <sup>1</sup>						I <sup>2</sup>					
馬の大きさ	小			馬			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	4	3	3	1	1	1	1	1				
平均値	14.6±0.7	11.1±0.7	77.7±6.0	18.6	10.5	56.5	15.8	9.5				
部位	I <sup>3</sup>						I <sup>4</sup>					
馬の大きさ	小			馬			大			中		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	2	2	2	1	1	1	1					
平均値	14.3, 15.4	11.2, 10.9	78.3, 70.8	17.1	9.9	57.9	14.5					
部位	I <sup>5</sup>						P <sup>1</sup>					
馬の大きさ	小			大			中			馬		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	2			2	2	2	2	3	2			
平均値	13.8, 14.8			38.6, 37.3	23.6, 23.7	61.6, 63.5	33.2, 35.0	23.9±0.3	70.8, 69.1			
部位	P <sup>2</sup>						P <sup>3</sup>					
馬の大きさ	小			大			中			馬		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	2	2	2	3	3	3	1	1	1			
平均値	35.8, 37.3	21.7, 23.1	60.6, 61.9	28.8±0.3	26.3±0.1	91.2±1.0	27.2	26.2	96.3			
部位	P <sup>4</sup>						P <sup>5</sup>					
馬の大きさ	小			大			中			馬		
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	3	2	2	3	1	1	3	3	2			
平均値	25.6±0.7	25.1, 24.7	98.4, 99.5	28.8±1.3	25.3	91.0	26.1±0	27.2±0.6	102.7, 102.7			

## 第3節 観察について

部位	P*				M*															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	2	2	2	2		2	2	2	2		2	1		1						
平均値	23.2, 22.6	25.1, 25.0	108.2, 110.6			24.3, 24.5	24.8, 25.2	102.1, 102.9			24.5, 23.8	25.3		103.3						
部位	M*				M*															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	2	2	2	2		2	2	2	2		1									
平均値	21.2, 20.5	21.9, 21.8	103.3, 106.3			23.8, 23.8	23.4, 23.6	98.3, 99.2			23.2									
部位	M*				M*															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	2	2	2	2		2	2	2	2		2	3		2						
平均値	22.2, 22.2	22.6, 22.1	101.8, 99.5			25.5, 25.2	20.9, 21.2	82.0, 84.1			25.4, 23.8	20.5±0.6		83.9, 84.9						
部位	M*				I <sub>1</sub>															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	3	3	3	3		1	1	1	1		6	5		5						
平均値	23.8±1.3	20.4±0.7	85.8±2.6			15.3	9.9	64.7			15.5±1.5	9.1±0.8		59.6±12.0						
部位	I <sub>1</sub>				I <sub>2</sub>															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	1	1	1	1		2	2	2	2		4	3		3						
平均値	10.9	9.8	89.9			17.4, 17.3	9.5, 9.2	54.6, 53.2			14.6±1.3	9.2±0.4		65.1±8.9						
部位	I <sub>2</sub>				I <sub>2</sub>															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	1	1	1	1		2	2	2	2		3	2		2						
平均値	12.4	10.4	83.9			15.7, 14.9	8.8, 8.4	56.1, 56.4			14.1±1.2	10.3, 9.7		70.5, 72.4						
部位	I <sub>2</sub>				P <sub>2</sub>															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	1	1	1	1		2	2	2	2		3	2		2						
平均値						33.9	14.5	42.8			29.4±1.4	14.3±1.0		48.8±3.8						
部位	P <sub>2</sub>				P <sub>2</sub>															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	3	3	3	3		3	3	3	3		6	7		6						
平均値	33.7±3.4	13.1±0.3	43.0±0.6			29.2±0.4	15.9±1.0	54.4±3.5			26.8±1.7	16.8±2.4		64.0±8.2						
部位	P <sub>2</sub>				P <sub>2</sub>															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	4	4	3	3		3	3	3	3		4	5		4						
平均値	25.1±1.0	14.8±0.4	57.8±1.6			27.2±0.5	15.8±0.9	58.0±3.6			25.5±0.3	16.2±1.6		66.1±5.1						
部位	P <sub>2</sub>				M <sub>1</sub>															
馬の大きさ	小		形		馬		大		形		馬		中		形		馬			
測定部位	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率	歯冠長	歯冠	巾	市	率
例数	5	5	5	5		3	3	3	3		6	7		6						
平均値	23.7±0.7	13.6±1.1	57.5±3.6			26.1±1.6	15.5±1.7	59.1±1.7			24.3±1.8	14.8±1.1		62.0±5.8						

部位	M <sub>1</sub>						M <sub>2</sub>								
馬の大きさ	小			形馬			大			中			形馬		
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	4	4	4	3	3	3	12	12	12						
平均値	22.2±0.5	14.2±0.9	63.7±2.8	26.3±1.4	15.0±0.6	56.9±4.0	24.8±1.3	14.0±1.2	56.6±4.8						
部位	M <sub>3</sub>						M <sub>4</sub>								
馬の大きさ	小			形馬			大			中			形馬		
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	5	5	5	1	2	1	7	9	7						
平均値	22.2±0.8	12.3±0.5	55.5±4.5	28.3	12.7, 13.3	47.0	30.6±2.0	12.6±1.0	41.5±3.1						
部位	M <sub>5</sub>														
馬の大きさ	小			形馬											
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	3	3	3												
平均値	30.2±0.9	11.1±0.7	36.8±3.4												

附表14 出土牛歯の大きさ  
古墳時代から平安時代まで

部位	P <sup>1</sup>						P <sup>2</sup>								
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛					
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	1	1	1	1			3	1	1						
平均値	15.4	15.3	99.4	21.6			19.9±0.7	15.7	75.4						
部位	P <sup>1</sup>						P <sup>1</sup>								
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛					
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	1			3	2	2	4	2	2						
平均値	21.7			18.0±0.2	16.9, 17.2	93.4, 95.6	24.4±2.2	21.7, 20.8	85.1, 82.9						
部位	M <sup>2</sup>						M <sup>2</sup>								
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛					
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	2	1	1	3	3	3	4	4	4						
平均値	30.6, 32.1	21.4	69.9	28.9±1.1	21.2±2.1	73.4±4.1	32.5±2.8	18.9±2.4	59.1, 10.1						
部位	I <sub>1</sub>			P <sub>1</sub>			P <sub>1</sub>								
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛			現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛					
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	1			3	2	2	1	1	1						
平均値	14.2			11.8±0.4	10.0, 7.8	83.3, 63.9	22.4	10.5	46.9						
部位	P <sub>2</sub>						P <sub>2</sub>								
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して同じ大きさの牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛					
測定部位	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率	齒冠長	齒冠巾	巾率
例数	4	4	4	2	2	2	3	3	3						
平均値	19.6±0.5	11.2±0.4	56.1±1.5	22.5, 24.0	13.4, 12.8	59.6, 53.2	21.9±0.2	12.0±0.8	54.7±3.5						

第3節 観察について

部位	M <sub>1</sub>						M <sub>2</sub>					
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して 同じ大きさの牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して 同じ大きさの牛					
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	1			3	3	3	2	2	2	2	2	2
平均値	26.9			24.1±0.7	15.3±0.3	63.4±1.0	27.0, 26.2	15.4, 14.2	57.0, 59.4			
部位	M <sub>3</sub>						M <sub>4</sub>					
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して大きい牛			現代黒毛和種と比較して大きい牛			現代黒毛和種と比較して 同じ大きさの牛					
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	2	2	2	1			4	3	3			
平均値	27.4, 26.8	14.1, 14.8	51.5, 55.2	39.0			40.9±1.4	13.2±0.3	32.0±1.6			
部位	M <sub>5</sub>											
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して小さい牛											
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率									
例数	4	4	4									
平均値	39.5±1.2	14.3±0.7	36.2±1.5									

中世以降

部位	I <sub>1</sub>			P <sub>1</sub>			M <sub>1</sub>					
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して小さい牛			現代黒毛和種と比較して 同じ大きさの牛					
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率	歯冠長	歯冠巾	巾率
例数	1			1	1	1	1	1	1			
平均値	12.4			21.9	13.8	63.0	25.4	14.1	55.5			
部位	M <sub>2</sub>											
牛の大きさ	現代黒毛和種と比較して 同じ大きさの牛											
測定部位	歯冠長	歯冠巾	巾率									
例数	1	1	1									
平均値	41.3	14.5	35.1									

## 第4節 観察結果

### 第1項 遺存体の出土状況

#### 1 地区別遺存体の出土点数

中間地域における古墳時代から近世一近代に至る遺構、住居跡、土坑等の埋没土の中から1,059点の動物の歯・骨が出土しているが、その状況は附図43～45及び附表15に示すとおりである。そのうち人の歯・骨が17点出土している。人の歯・骨については聖マリアンナ医科大学森本岩太郎外3名による「第6章 第2節 出土人骨所見」〔上野国分僧寺・尼寺中間地域〕1986(注13)において詳細な報告がなされているが、本稿中の人の歯・骨は整理作業上動物か人か分別困難な個体を動物側に含めたための紛れ込みであると考えられるので、人の歯・骨については記録するにとどめ、集計から除外して考えることとする。以後人を除く1,042点について検討する。

出土点数1,042点のうち最も出土点数の多かった地区はF区の391点で全体の37.5%を占めている。次いでI区の153点、14.7%、G区の97点、9.3%、A区の96点、9.2%、C区の72点、6.9%、J区の71点、6.8%、B区の50点、4.8%、D区の17点、1.6%、H区の16点、1.5%、Z区の16点、1.5%の順である。この他出土不明区より63点、6.0%が出土している。

附表15 地区別遺存体出土点数

区	歯										骨										合計
	馬	牛	馬又は牛	人	猪	鹿	兎	小爬虫類	不明	小計	馬	牛	馬又は牛	人	猪	鹿	兎	小爬虫類	不明	小計	
A	31	22								53	26	7		1					10	44	97
B	10								2	12	33								5	38	50
C	5						13			18	21					6	21	2	4	54	72
D	12									12	5									5	17
F	127	38				3			5	173	107	26		3		8			77	221	394
G	55	7		3					6	71	13	1		10					15	39	110
H	12								2	14									2	2	16
I	60	40			7	3				110	7	8	1		1	1			25	43	153
J	21	13	1		10				3	48					14				9	23	71
Z	15									15	1									1	16
不明	53									53	5								5	10	63
計	401	120	1	3	17	6	13		18	579	218	42	1	14	15	15	21	2	152	480	1059

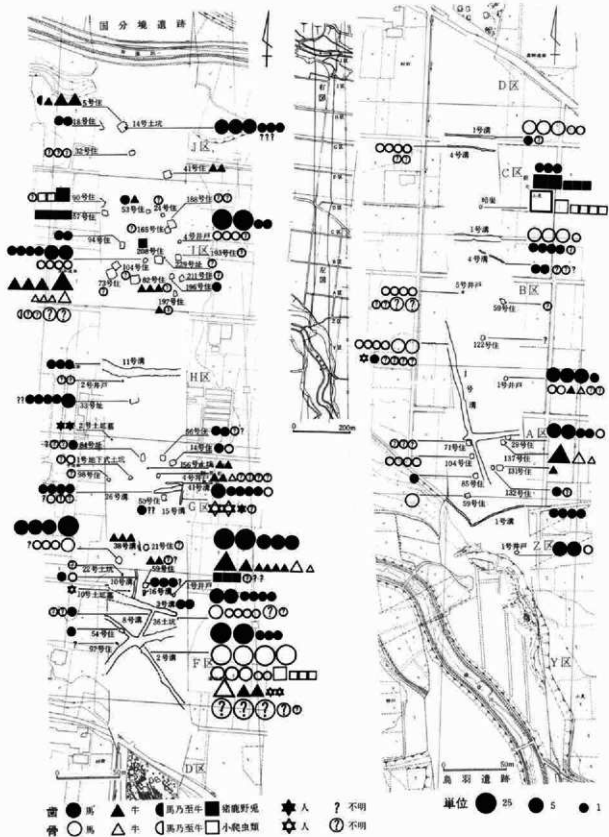
#### 2 時代別遺存体の出土点数

附表16に示すように人を除く1,042点のうち最も出土点数の多い時代は中世の389点、37.3%であり、次いで平安時代の313点、30.0%で、古墳時代49点、4.7%、中世一近代43点、4.1%、近世一近代25点、2.4%の順である。ここで動物の種類別にこれを見ている。

##### (1) 馬

最も出土点数が多いのが馬であり619点で、全体の59.4%を占めている。これを時代別に見ると、中世が231点で最も多く、そのうち馬歯が77点、馬骨が154点であり、馬骨が馬歯に較べて2倍出土している。これに反して、次に多く出土している平安時代は172点出土しているが、そのうち馬歯が158点、馬骨が14点であり、馬歯の方が馬骨の11.3倍も多く出土している。





第801圖 調查区内出土獸骨分布圖

## (2) 牛

次に多く出土しているのが牛であるが、牛は162点出土している。時代別に最も出土点数の多いのは平安時代であり、牛の歯・骨が92点出土している。そのうち牛歯76点、牛骨16点である。次いで中世と古墳時代がいずれも28点である。馬は中世が最も出土点数が多いのに較べると牛は平安時代から古墳時代と、比較的古代に出土点数の多いことが特徴的である。古墳時代の出土点数28点のうち牛歯の出土点数は22点、牛骨の出土点数は6点である。中世の出土点数28点のうち牛歯の出土点数は8点で、牛骨の出土点数は20点である。牛・馬を通覧すると、平安時代には歯の出土点数が骨の出土点数を遙かに上回り、中世になると骨の出土点数の方が歯の出土点数より遙かに多くなることは牛・馬共通的な現象と言わねばならない。

附表16 時代別遺存体出土点数

時代	歯										骨								合計		
	馬	牛	馬又は牛	人	猪	鹿	兎	不明	小計	馬	牛	馬又は牛	人	猪	鹿	兎	小爬虫類	不明		小計	
古墳時代	2	22			3	2		1	30	5	6			1	1				4	17	47
古墳時代～奈良時代	1	4	1						6	1									4	5	11
古墳時代～平安時代	2								2	1										1	3
奈良時代		3				1			4										7	7	11
奈良時代～平安時代		9						2	11												11
平安時代	158	76			4	3		10	251	15	15	1							31	62	313
平安時代～中世																			1	1	1
中世	77	8					13	1	95	153	21		3	14	21	2	79	293	392		
中世～近世	4							1	5												5
中世～近代	20								20	19			1						4	24	44
近世	12								12	9									6	15	27
近世～近代				1	10				11				10	14					1	25	36
近代	1								1												1
不明	115	7		2				3	127	15									15	30	157
計	401	129	1	3	17	6	13	18	579	218	42	1	14	15	15	21	2	152	480	1059	

## (3) 兎、猪、鹿

次に出土点数の多いのが兎であり、出土点数34点で、そのうち兎歯13点、兎骨が21点である。時代的に見ると全部中世である。

猪は32点出土している。そのうち猪歯17点、猪骨15点である。最も多く出土している時代は近世～近代の24点である。続いて平安時代及び古墳時代の各4点であるが、その内訳は平安時代猪歯4点、古墳時代猪歯3点、猪骨1点であり、中世は出土していない。

鹿は21点出土しているが、その内訳は鹿歯6点、鹿骨15点である。最も多く出土している時代は中世の14点であり、次いで古墳時代と平安時代が3点づつ出土している。

## 3 出土場所別遺存体の出土状況

出土場所別遺存体の出土状況は附表17に示すとおりである。出土場所別に見ると最も多いのが溝跡の368点(34.7%)で、次いで井戸跡の318点(30.0%)、住居跡129点(12.2%)、土坑跡120点(11.3%)、その他61点(5.8%)の順である。

人の歯・骨が土坑跡より3点(内2点は土坑墓)、溝跡より14点計17点が出土している。土坑は人が生活するについて生み出した種々の遺構であり、中には土坑墓といったはっきりした目的を持ったものもあったが、大部分のものはその遺構の成立について理由が不特定であるので、それについてはここでは言及をききたい。

中間地域は全体について中世後半におびたしい数の人の墓地化している状況があるので各所に墓坑群が存在し、何処からでも人骨出土の可能性をもっている。そのため埋没した溝跡の中に土坑墓が設けられた場合などは溝跡内から人骨が出土することは当然の可能性をもっている。然しその他の動物については墓坑埋葬は認められないので故意による廃棄が多かったものと考えられる。

土坑が成立の理由が不特定であるのに対して、住居は人が起居生活のために作られ、また井戸は水を得るために掘られ、溝は土地区分の地境や、排水のための道の側溝や水路として使用されるなど、夫々の目的は明確なものである。従ってここでは住居跡、溝跡、井戸跡からの動物の歯・骨の出土率についてふれたい。

## (1) 井戸跡

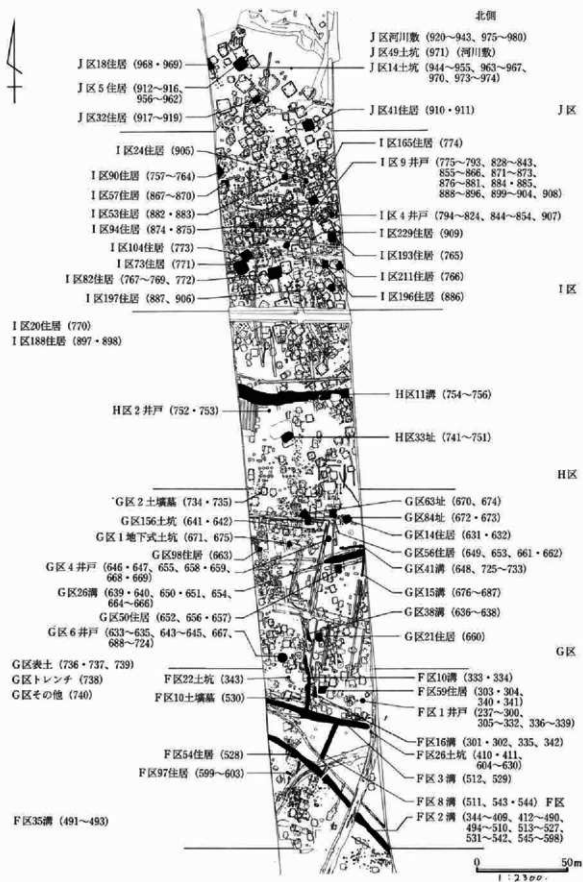
附表17に示すとおり中間地域における動物遺存体の出土点数は歯が579点であり骨が480点で、歯の出土点数の方が骨の出土点数をやや上廻っており、歯/骨の比率は1.2である。ところが井戸跡から出土した動物遺存体のうち歯の出土点数は245点で、骨の出土点数は73点であり、歯/骨の比率は3.4である。この歯/骨の

附表17 時代別、出土場所別、動物の歯・骨の出土状況

時代	住居跡			井戸跡			溝跡			土坑跡			その他			不明			計		
	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計
古墳時代	28	16	44				3	2	5										31	18	49
古墳時代-奈良時代	5	4	9																5	4	9
古墳時代-平安時代													2	1	3				2	1	3
奈良時代	4	7	11							9	9								13	7	20
奈良時代-平安時代										2	2								2		2
平安時代	35	15	50	199	42	241	14	4	18	2	2	2	1	1	2				251	62	313
平安時代-中世												1	1								1
中世	1		1	17	23	40	61	236	297	20	34	54							99	293	392
中世-近世	5		5																5		5
中世-近代							8	19	27				12	5	17				20	24	44
近世												12	15	27					12	15	27
近世-近代							1	11	12					10	14	24			11	25	36
近代												1	1	1	1				1		1
不明	9		9	29	8	37	8	1	9	24	1	25	4	10	14	53	10	63	127	30	157
計	87	42	129	245	73	318	95	273	368	69	51	120	30	31	61	53	10	63	579	480	1059
歯/骨			2.1			3.4			0.4			1.4			1.0				5.3		1.2

附表18 時代別、出土場所別、馬・牛の歯・骨の出土状況

時代	馬												牛											
	住居跡			井戸跡			溝跡			土坑跡			その他			不明			計			計		
歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	歯	骨	計	
古墳時代	1	6	7	0.2					2	2	22	6	28	3.7										
古墳時代-奈良時代																								
古墳時代-平安時代																								
奈良時代											3	3												
奈良時代-平安時代																								
平安時代	21	5	26	4.2	127	8	135	15.9	9	1	10	9.0	5	5	66	15	81	4.4	3	1	4	3.0		
平安時代-中世																								
中世	1	1		16	18	34	0.9	54	135	189	0.4				1	1	2	1.0	7	19	26	0.4		
中世-近世	4		4																					
中世-近代									8	14	22	0.6												
近世																								
近世-近代																								
近代																								
不明	2		2	29	8	37	3.6	8	1	9	8.0	7	7											
計	29	11	40	2.6	172	34	206	5.1	81	151	232	0.5	41	6	47	6.8	67	16	83	4.2	10	20	30	

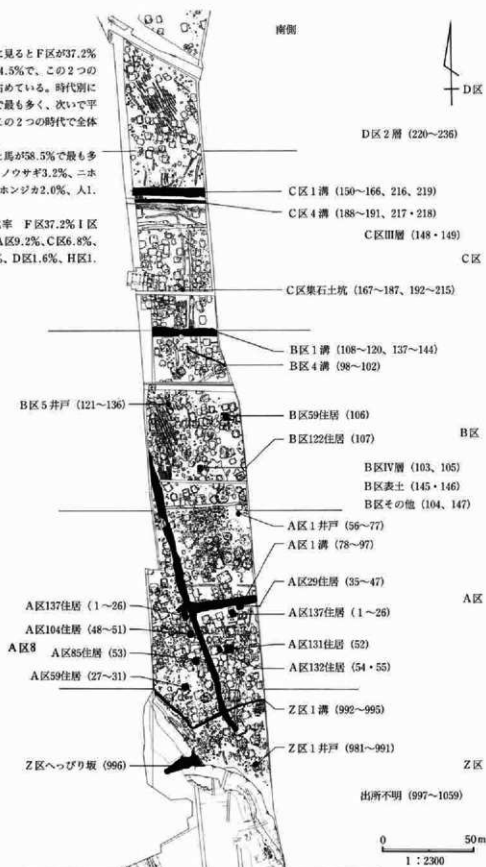


第802図 動物遺存体出土遺構位置図 (北側) 調査表測図に加除筆した

出土点数を地区別に見るとF区が37.2%で最も多く、I区が14.5%で、この2つの区で全体の51.7%を占めている。時代別に見ると中世が37.0%で最も多く、次いで平安時代が29.6%で、この2つの時代で全体の66%を占めている。

また種類別に見ると馬が58.5%で最も多く、次いで牛15.3%、ノウサギ3.2%、ニホンイノシシ3.0%、ニホンジカ2.0%、人1.6%の順である。

地区別出土点数比率 F区37.2% I区14.5%、G区10.3%、A区9.2%、C区6.8%、J区6.7%、B区4.7%、D区1.6%、H区1.5%、Z区1.5%



第803図 動物遺存体出土遺構位置図(南側) 調査実測図に加除筆した

比率が3.4であると言うことは前述の中間地域全体から出土した歯・骨の歯／骨の比率1.2に対して大変大きく、明らかに何等かの目的をもって人為的に歯を井戸内に投入する以外にこのような大きな差異は起こり得ないと考えられる。また附表18に示すように井戸跡から馬及び牛の遺存体の出土状況を見ると、馬歯の出土点数は172点であり、馬骨の出土点数は34点で、歯／骨の比率は5.1である。さらに牛歯の出土点数は67点で、牛骨の出土点数は16点であり、歯／骨の比率は4.2である。この比率は前述のように中間地域全体から出土する動物の歯・骨の歯／骨の比率の1.2より遙かに大きく明らかに何等かの目的をもって人為的に歯を井戸内に投入する以外にこのような大きな差は起こり得ないと考えられる。

以前筆者は日高遺跡の平安154号溝出土の祭祀に用いられたと考えられる馬歯について述べたことがある(注3)。日高遺跡が自然湧水地帯に属する土質で動物遺存体の遺残に適する地帯であるにも拘わらず馬歯のみが遺溝内より出土し、馬骨が出土しないことについて、「これらの馬歯を何等かの目的で使用するための専門職のような人が平常馬歯を抜歯して貯え、その後その目的のため、例えば祭祀のような宗教的目的のために使用したものと考えられる」と述べたが、馬歯を祭祀に用いる理由には2つあるように考えられる。1つには馬の頭蓋や四肢は常に準備しておく訳にはゆかないので突発的な祭祀には間に合わないことが多いと考えられる。そのため歯を抜歯して貯えておけば何時でも使用出来る。この馬歯が馬を代表するものとして選ばれた理由には、大林太良が「馬」(注14)の中で「古代アジアの一部には馬の頭蓋骨は一種の呪術的意味を持っていた」と述べている。また森 浩一は「大化薄葬令の馬の殉殺について」『古代史叢書 上巻』1978の中で古代より馬頭だけの埋葬のあったことを述べ、馬の埋葬の諸例を分類し、次の3類型をあげている。

- ①古墳の周辺に馬が埋葬される場合—宮崎県六野原古墳群
- ②古墳の周溝に馬頭を供献する場合—熊本県塚原古墳群
- ③横穴式石室に馬脚を供献する場合—京都府岡一墳

時代は異なるけれどもこのような宗教性をおびた馬の頭骨の一括埋納の例と思われるものとしては、下東西遺跡(注12)のS K237土坑から平安時代前期に属する「下東西馬A平安」の8個の馬歯が出土している。このS K237土坑はI区の遺溝S D100を切って設けられ、重複して設けられたこの遺跡唯一の古代井戸跡S E21が存在する浄所であり、馬歯はほぼ同一水平面上にあり、1体の馬の頭蓋が鼻端を西に向けて左頬を下に埋納されていた。

次に馬歯を用いる理由であるが、馬に蹴られた瞬間は馬の肢の速度が早いだけに、当たれば少なくとも大怪我をすることはわかっていても、恐ろしさを感じることは極めて少ない。ところが馬の怒った形相は物凄く、口を開けて人に向かってくる時は犬や猫と違って大きいだけに恐ろしいものがある、何とかしてその白い歯を避けたいと思う気持ちだけで一杯であり、そのむき出しになった白い歯は誠に印象的である。そのような訳で馬の歯が馬の恐ろしさや、威力を代表するものとして選ばれたとしても筆者にはごく当たり前のこととして感ぜられる。歯が用いられる今一つの理由としては動物の骨肉を井戸内に投入する時は井戸の汚染は甚だしく、水の使用に支障を来すことも歯を用いる一つの大きな理由ではなからうか。しかし使用しなくなった井戸については動物の頭蓋ばかりでなく四肢の骨肉を祭祀に用いることは、井戸跡と考えられる田端遺跡のB区54号土坑(注4)より奈良時代—平安時代前期の、少なくとも5個体以上と思われる牛歯・牛骨の出土例がある。このB区54号土坑内より藍鉄鉱による置換のためやや化石化の方向に進んでいる「田端牛A奈良—平安」の四肢骨がやぐらを組むように交互に組まれたまま出土したのは印象的であった。

また時代は下るけれども、下東西遺跡の井戸跡S E09より一体の馬歯・馬骨「下東西馬B室町」が出土している。S E09は朝顔形の井筒で井戸の埋土は上半を人頭大の礫で埋設されており、検出面より0.5m下った

箇所から一括して馬歯・馬骨が円礫に押しつぶされ、或は埋った状態で出土した。その状況は馬の埋納を呈しており骨のみを一括廃棄した状態ではなかった。

附表17を見ると井戸跡から動物の歯・骨が数多く出土する2つの時代は平安時代と中世である。附表18に示すとおり、平安時代の馬・牛の歯・骨の出土点数は、馬は190点であり、牛は116点であった。その夫々の歯／骨の比率は馬は22.8、牛は4.5である。これに対して中世は馬・牛の歯・骨の出土点数は馬は34点、牛は2点である。歯／骨の比率は馬は0.9、牛は1.0である。このように中世は馬・牛の歯・骨の出土点数、また歯／骨の比率も著しく減少し、井戸についての祭祀の実施は平安時代が主であったと言いうる。

### (2) 溝跡

附表17に示すとおり溝跡より95点の動物の歯と273点の骨が出土している。出土した歯・骨について歯／骨の比率は0.4である。前述のとおり中間地域全体から出土している動物の歯は579点であり、動物の骨は480点である。その歯／骨の比率は1.2である。この比率は溝跡出土の動物の歯／骨の比率0.4に比較すると3倍も大きい。このことは溝跡には出土する動物の歯・骨の数について何人か人為的な力が加わったことを示している。

附表18を見ると平安時代における溝跡の出土状態は馬歯9点、馬骨1計10点で、牛歯は3点、牛骨1点計4点で誠に少ない。しかし中世に至ると出土する馬歯は54点、馬骨は135点、歯／骨の比率0.4で、出土する牛歯は7点、牛骨は19点、歯／骨の比率0.4と急激に出土点数が増加し、歯／骨の比率は馬・牛ともに0.4である。中世における溝跡より出土した馬・牛の歯・骨の歯／骨の比率が中間地域全体から出土した動物の歯・骨の歯／骨の比率1.2に比較して大変小さいことは前述のとおり、中世においてもなお溝について祭祀が盛んに行われ、井戸に対しては歯の投入が行われたのと反対に、溝においては直接馬・牛の筋肉や肢骨が用いられたことを示している。

当中間地域においても14C後半から16C前半に属する「国分寺中間馬C中世」の左大腿骨から左後膝節骨までの一連の後肢骨がB区1号溝南側斜面から出土しているが、これについては後に述べる。

### (3) 住居跡

附表17に示すとおり古墳時代から平安時代にかけて動物の歯・骨の出土点数が多く、古墳時代には動物の歯・骨が44点、古墳時代一奈良時代9点、奈良時代11点、平安時代50点である。しかし中世及び中世以後になると急に少なくなり、中世では1点、中世一近世では5点である。

附表18を見ると古墳時代には馬は馬歯1点、馬骨6点計7点(歯／骨の比率0.2)しか出土していないが、牛については牛歯22点、牛骨6点計28点(歯／骨の比率3.7)出土している。このように馬についての出土点数は少ないが、牛についての出土点数は馬に比較すると多く、その歯／骨の比率も大きく、人為的な力が加わっているように考えられる。

平安時代には古墳時代と反対に牛より馬の出土点数が多く、馬については馬歯21点、馬骨5点計26点、歯／骨の比率4.2であるが、牛については僅かに牛歯が5点出土しているのみである。馬についての歯／骨の比率は4.2で、明らかに馬歯について人為的な力が加わっているように思える。

上記のように住居については古墳時代と平安時代と2つの山が見られるが、古墳時代には主として牛が、平安時代には主として馬が用いられ、住居については馬・牛ともに歯の方が多く使用されている。

#### 4 種類別、部位別、遺存体出土点数

##### (1) 歯

附表19に示すとおり各動物の歯の出土点数の合計は579点で、人を除く出土点数は596点である。そのうち最も多いのが馬歯の401点、69.6%で、次いで牛歯の120点、20.8%、猪歯の17点、3.0%、兎歯の13点、2.3%、鹿歯の6点、1.0%の順である。576点中切歯の出土点数は53点、9.2%で、頬歯の出土点数は499点、86.6%である。その他種類不明の小歯片が24点ある。切歯の出土率が9.2%で頬歯の86.6%に比べて低いが、これは切歯の数が頬歯に比較して半数以下であることと、頬歯の歯根が複数であるのに対して切歯の歯根は1本しかないで風化によって脱落しやすいためである。

切歯のうち馬の切歯は50点出土しているが、牛の切歯は3点で、他の動物の切歯は全く出土していない。このように馬の切歯の出土数に比較すると牛の切歯の出土数は大変少ない。また他の動物の切歯の出土が皆無である理由は、馬も牛も切歯の歯根は1本で、馬の切歯は歯冠が下に行くのに従って細くなっているのに対して牛や鹿等は歯冠は扁平で大きく、歯根は急に細くなっていて扁平な杓文字（しゃもじ）を思わせるものがあるため歯槽より脱落しやすいかっただけと思われる。また他の動物は切歯そのものが小さく風化による影響を受けやすく、遺存困難が未出土の理由であろう。歯槽の内壁は歯根膜と言う結合組織で出来た軟い組織があって歯根を歯槽に固定する役目を果たしているが、歯根膜が腐敗により消失したとすれば歯根はゆるんで切歯は何時脱落しても不思議でない状態におちいる。

##### (2) 骨

附表20に示すとおり各動物の骨の出土点数の合計は480点で、そのうち人骨の出土点数を除くと466点である。そのうち最も出土点数の多いものは馬の218点、46.8%であり、次いで牛の42点、9.0%、兎の21点、4.5%、猪及び鹿の各15点、3.2%、小爬虫類の2点、0.4%である。これらの他動物の種類不明の小枝片、小骨片が152点、32.6%出土している。この種類不明が152点あったということは歯の種類不明の24点、4.2%に比較すると約8倍も多いが、これは骨の組織が歯の組織に比べて脆弱であるためである。歯のエナメル質の硬度はモース硬度計で7を示し石英と同じ硬さを持っているということである(注19)。部位の判明している骨について種類別に多く出土している骨を見ると次のとおりである。

##### 〔馬〕

最も多く出土しているのは大腿骨で34点、15.6%であり、次いで下顎骨28点、12.8%、上腕骨23点、10.6%、脛骨23点、10.6%、寛骨19点、8.7%、中足骨14点、6.4%、橈骨14点、6.4%、中手骨11点、5.0%、頭蓋骨8点、3.7%の順である。

##### 〔牛〕

最も多く出土しているのは下顎骨17点、40.5%であり、次いで上腕骨3点、7.1%、前腕骨3点、7.1%、脛骨3点、7.1%、中足骨3点、7.1%、頭蓋骨2点、4.8%、中手骨2点、4.8%の順である。

##### 〔猪〕

最も多く出土しているのは頭蓋骨9点、60.0%であり、次いで下顎骨2点、13.3%、尺骨1点、6.7%、椎骨1点、6.7%である。

##### 〔鹿〕





最も多く出土しているのは肩甲骨で6点、40.0%出土しており、次いで足根骨2点、14.2%、距骨2点、14.2%、頸骨、肋骨、尺骨、踵骨各1点づつ、7.1%である。

〔兎〕

14点出土しているが全部頭蓋骨である。

## 5 種類別、時代別、部位別、遺存体の出土状況

### (1) 歯

中間地域では古墳時代から近代に至るまでに人を除く動物の歯が576点出土しているが、そのうち部位の判別出来るものは附表21に示すとおり馬歯では290点、判別率72.3%であり、牛歯では96点、判別率80.0%、猪歯では17点、判別率58.8%、鹿歯では4点、判別率66.7%、兎歯では6点、判別率46.2%である。このうち兎歯は上顎に植立していたので判別出来たが、単独で出土していたならば判別出来なかったと考えられる。動物の中で牛歯の判別率が80.0%で一番高かったが、出土した牛歯のうち87.5%が中世以前に属している。動物の歯の中で中世以前に属する歯の比率が最も高かった牛歯の判別率が一番高かったのは驚くべきことである。参考までに動物別の中世以前の時代に属する歯の出土率は馬は42.9%、猪は41.2%、鹿100%、兎0%である。また鹿歯が、歯自体小さく、しかも中世以前に属する歯ばかりでありながら判別率が66.7%で牛に次いで高かったことは奇異な感じを受ける。

牛歯の部位の判別率が高い原因は、牛歯の外部エナメル層が厚く、社令になってやや咬耗が進む頃になると頰側エナメル層の厚さが1.5を越えるものが多くなることが判別率の高いことの主な原因の一つと考えられる。馬では現代馬の外部エナメル層は社令になり、やや咬耗が進む頃になると頰側エナメル層の厚さが1.4~1.5を越すものが出てくるけれども、平安時代及びそれ以前の出土馬歯は、藍鉄鉱による置換が始まり、化石化の方向にある馬歯を除けば大略頰側エナメル層の厚さは風化のため1.0またはそれ以下になるのが通常であるが、それに対して牛歯は平安時代及びそれ以前の歯でも頰側エナメル層の厚さが1.5を越えることは通常なことで、このことは大変不思議な感じを受けることである。

### (2) 骨

中間地域では古墳時代から近代に至るまで人を除く動物の骨は466点出土している。そのうち部位の判別出来る骨は附表22に示すとおり314点、判別率67.6%であるが、動物の種類別に部位の判別し得る骨の点数と判別率を見ると、馬は194点、89.0%、牛は35点、83.3%、猪は13点、86.7%、鹿は14点、93.3%、兎は21点、100%である。このように骨は歯と比較して判別率が高い。また兎の判別率が高いのは全部中世に属しているためと思われる。動物の種類別に中世以前に出土した骨の割合を見ると、馬は10.1%、牛は50.0%、猪は7.1%（大部分は近世～近代）、鹿7.1%（大部分は中世）である。歯と比較して骨の方が判別率が高いのは、中世以前に出土した割合が50.0%を越している牛を除いては、他の動物は中世及び中世以後に属する骨が多かったことによるものと考えられる。

附表22の中で最も出土点数の多い平安時代と中世における馬と牛の骨のうち部位の判別出来る骨について部位別の出土点数を見ると、平安時代においては馬は頭蓋4点、57.1%、前肢骨2点、28.6%、後肢骨1点、14.3%、計15点であり、牛は頭蓋11点、84.6%、前肢骨2点、15.4%、後肢骨0、計13点である。馬も牛も共に頭蓋の出土点数の比率は57.1%及び84.6%と高く、後肢骨の出土点数の比率は14.3%及び0%と低





い。これに反して中世においては、馬は頭蓋14点、10.0%、前肢骨46点、33.1%、後肢骨79点、56.8%、計139点で、牛は頭蓋4点、25.0%、前肢骨5点、31.3%、後肢骨7点、43.8%、計16点である。馬も牛も共に頭蓋の出土点数の比率は10.0%及び25.0%で余り高くなく、後肢骨の出土点数の比率は56.8%及び43.8%で頭蓋に較べて高くなっている。

このように平安時代には馬も牛も頭蓋の出土率が高く、後肢骨の出土率が低いにも拘わらず、中世においては馬も牛も頭蓋の出土率が低く、後肢骨の出土率が高くなっている。この奇妙な現象の説明は単に風化その他の原因だけでは説明し難いものである。この現象の原因を探るため平安時代と中世における井戸跡と溝跡より出土した馬と牛の骨のうち部位の判別出来る骨について部位を調べて見ることとした。部位の判別出来る出土点数が少ないので馬骨と牛骨、及び井戸跡と溝跡とを合計して平安時代と中世とに分けた。平安時代に井戸跡と溝跡から出土している馬と牛の骨について部位の判別出来るものは18点で、そのうち頭蓋14点、77.8%、前肢骨4点、22.2%、後肢骨0であった。このように後肢骨と判別出来る骨がなかったが頭蓋の出土点数が目立って多かった。これに反して中世においては、馬と牛の骨のうち部位の判別出来るものは153点であり、そのうち頭蓋18点、11.8%、前肢骨49点、32.0%、後肢骨86点、56.2%で、頭蓋の出土点数が減少し後肢骨の出土点数が多くなっている。

このように時代によって動物の骨の部位別の出土点数が異なってくるのは、時代による井戸跡と溝跡の数が異なることが原因の一つではないかと考えて、動物の歯・骨の出土している時代別の井戸跡と溝跡の数を調べてみると、平安時代に動物の歯・骨の出土している井戸跡と溝跡の数は井戸跡6、溝跡5で、中世に動物の歯・骨の出土している井戸跡と溝跡は井戸跡3、溝跡4である。井戸跡では時代による数の差が見られるが、「3 出土場所別遺存体の出土状況」で述べたとおり、平安時代に井戸跡から出土している動物の骨は42点で、中世における井戸跡から出土している動物の骨は23点で少ないように思えるが他方で中世の溝跡から動物の骨が236点も出土しているので井戸跡からの出土量の少なさが結果にあたる影響は少ないと考えられる。

このように考えてみると、これはやはり附表18に示すとおり中間地域においては、平安時代の祭祀は井戸に集中し、井戸には主として馬歯・牛歯が用いられ骨を用いる数が少なく、僅かに廃絶した井戸において頭蓋及び肢骨が用いられている。ただ祭祀の重点が井戸に置かれたと言っても溝における祭祀も行われており、溝跡より出土している馬と牛の骨は、馬は小肢骨片で部位が不明であるが、牛の前肢骨が1点出土している。また日高遺跡において9世紀に属する平安154号溝から馬歯15点、前肢骨4点が出土している。この2つはいずれも前肢骨であり、また附表22に見られるとおり、平安時代に属する馬・牛の前肢骨は馬2点、28.6%、牛2点、15.4%出土しているので、平安時代の祭祀には頭蓋のほか肢骨が用いられ、どちらかと言えば前肢の方が多く用いられていたのではあるまいかと考えられる。

中世になると祭祀の中心が溝に移り、祭祀には馬・牛の肢骨が用いられているが、どちらかと言えば後述の「園分寺中間馬C中世」に見られるような後肢が多く用いられるようになったと考えられる。

このように馬・牛の骨の出土状況は祭祀の影響が大きく、祭祀と切り離して考えることは出来ないことがわかった。また祭祀（古墳時代には葬儀も含まれていたと思われるが）には馬・牛の頭蓋と後肢・前肢を用いているが、森 浩一が述べたように古墳における周溝、石室等に馬頭及び馬脚を供献したしきたりが、古墳時代から中世まで連続として受け継がれてきたことは誠に興味深いことである。このように祭祀の「しきたり」が長い間継承されることは、群馬県富岡市一の宮の貫前神社において豊凶を占う「鹿占（しかうら）の神事」（註20）が現在でも伝承されていることを見てもうなずけることである。

中間地域で祭祀を考える場合、①水田、用水路の祭祀、②陸田、野菜畑の祭祀、③井戸の祭祀、等が考えられるが、②陸田、野菜畑の祭祀にも動物の体の一部が用いられたと考えられるが、群馬県における関東ローム層を主体とした畑地帯では動物の歯・骨の遺残は少ない。筆者は16.4才と4才の2組の馬の頭蓋骨と下顎骨を関東ローム層の中に埋め5年数ヶ月後に掘り出したところ、4才の馬の頭蓋骨と下顎骨は風化のため歯と僅か一握りの軟い海綿骨の弾力を持った海綿骨を残すのみで、それ以外はすべて消失し、16.4才の馬の頭蓋骨と下顎骨とは歯及び下顎体と下顎枝の一部（切歯部と筋突起、関節突起を除く）を残し、その他の骨はことごとく消失していたのを見て唖然とした経験がある。このように畑地からの動物遺存体の出土は少なく、今後の資料の集積に期待をかけた。

## 6 地区別出土個体数

地区別出土個体数は附表23に見られるとおり537個体（最小限度で）であり、人を除く出土個体数は529個体である。種類別に見ると最も多いのが馬で269個体、50.9%である。次いで牛50個体、9.5%、兎26個体、4.9%、鹿8個体、1.5%、猪3個体、0.6%、馬又は牛2個体、0.4%、小爬虫類1個体0.2%である。地区別に見ると出土個体数の最も多い地区はF区の256個体（人を除く）48.4%で、次いでI区58個体11.0%、G区46個体8.7%、A区38個体7.2%、C区37個体7.0%、J区26個体、B区20個体3.8%、H区7個体1.5%、D区及びZ区3個体0.6%の順である。出土個体数の多い地区における種類別出土個体数を見ると、F区では馬149個体58.2%で最も多く、次いで牛20個体7.8%、鹿5個体2.0%の順である。I区では馬及び牛が各14個体24.1%で、次いで猪及び鹿2個体3.4%である。G区においては馬20個体43.5%で最も多く、次いで牛5個体10.9%であり、いずれの地区においても馬及び牛の出土比率が高かった。

附表23 地区別出土個体数

調査区	馬	牛	馬 又 は 牛	人	猪	鹿	兎	小 虫 類	不 明	計
A	23	5		1					10	39
B	13								7	20
C	5					1	26	1	4	37
D	3									3
F	149	20		3		5			82	259
G	20	5		4					21	50
H	4								4	8
I	14	14	1		2	2			25	58
J	6	6	1		1				12	26
Z	3									3
不 明	30								5	35
計	270	50	2	8	3	8	26	1	170	538

## 7 時代別出土個体数

時代別出土個体数は附表24に示すとおりである。動物別に見ると馬は中世が120個体44.6%で最も多く、次いで平安時代73個体、27.1%、中世～近代21個体、7.8%の順である。牛は平安時代23個体、46.0%が最も高く、次いで中世17個体、34.0%、奈良時代4個体、8%である。兎は26個体で、時代別に言えば全部中世である。鹿は中世が5個体、62.5%で最も多く、次いで古墳時代、奈良時代、平安時代の各1個体、12.5%で

附表24 時代別出土個体数

時代	馬	牛	馬又は牛	人	猪	鹿	兎	小爬虫類	不明	計
古墳時代	3	3			1	1			5	13
古墳時代～奈良時代	1	4	1						4	10
古墳時代～平安時代	3									3
奈良時代		2				1			7	10
奈良時代～平安時代	2								2	4
平安時代	74	22	1		1	1			41	140
平安時代～中世									1	1
中世	119	18		3		5	26	1	80	252
中世～近世	1								1	2
中世～近代	21			1					4	26
近世	2								6	8
近世～近代				2	1				1	4
近代	1									1
不明	43	1		2					18	64
計	270	50	2	8	3	8	26	1	170	538

ある。猪は3個体であるが古墳時代、平安時代、近世～近代各1個体、33.3%である。馬が古墳時代から近世に至るまで各時代とも出土しているのに比較すると、牛は古墳時代から中世にかけて出土しているが中世から後の時代には出土していないことが奇異な感じがする。このことについては後述する。また馬が中世において最大値を示しているのに反し、牛は平安時代に最大値を示していることも特徴的である。

## 8 馬・牛の出土個体について固有名稱の設定について

### (1) 中間地域における個有名稱の設定について

馬と牛の出土個体中附表25に記載されている8個体は出土状態、風化の度合い、大きさ、年令、色沢、歯相、骨相が同じで同一個体に属する確立は極めて高く、おのおのの特徴を備え、今後の検討に資することが大きいと思われるので附表25のとおり標式個有名稱で呼ぶこととした。

標式馬・牛に選定した理由は、馬については国分寺中間馬A平安＝大形馬であること、切歯歯冠長極めて大きくアラビヤ馬を想起させるものがあり、頬歯歯冠極めて小さいこと、国分寺中間馬B平安＝小形馬であること、老令であること、巾率特に下顎頬歯巾率少なく上野国の馬の特徴を持っていること、国分寺中間馬C中世＝小形馬であること、左大腿骨より基節骨まで一連の肢骨が接続して出土していること、国分寺中間馬D近世＝中形馬であること、下顎骨輪郭極めて鮮明で、筋線、翼突筋窩極めて明瞭で近世馬らしいこと、である。牛については、国分寺中間牛A古墳＝遺存状態比較的良好なこと、下顎骨は頬歯植立しているが骨体薄く、上腕骨々体部前後に長く薄く、古代牛らしいこと、国分寺中間牛B古墳＝頭蓋口蓋白歯部が頬歯を植立して出土し、歯列弓完全なこと、国分寺中間牛C平安＝遺存状態が良いとは言えないが、3つの小さな下顎体白歯部が歯を植立して中手骨とともに出土している。歯冠長がある割りに中手骨が細く古代牛らしいこと、国分寺中間牛D平安＝遺存状態は余り良いとは言えないが、大きい牛であること、古代牛であるのに上下頬歯が16個そろっていることである。

附表25 出土個体中の個有名称の設定状況

種類	出土場所	時代	NO	遺存体	名称	性	年令	大きさ
馬	A区29号住居	平安時代 10C前半	35~47	上顎切歯5 下顎切歯1 右下顎歯5 歯槽小骨片1	園分寺中間馬A平安	不明	4才 幼令	140.5cm大形馬の中 では小さい馬
#	I区4号井戸	平安時代 10C前半	808~818	上顎歯4 下顎歯7	園分寺中間馬B平安	不明	16.1才 老令	116cm小形馬の中で は中位の馬
#	B区1号溝-1	中世 14C後半 ~16C前半	108~120	左後肢骨13	園分寺中間馬C中世	不明	社令又は 老令	109.5cm小形馬の中 では小さい馬
#	F区26号土坑	近 世	604~619	下顎歯12 左右下顎骨4	園分寺中間馬D近世	不明	15.9才 社令	133.8cm中形馬の中 では中位の馬
牛	A区137号住居	古墳時代 7C後半	1~14	右上顎歯1 下顎歯9 下顎骨1 前肢骨2	園分寺中間牛A古墳	不明	社令	現代黒毛和種より小 さい。同時代の牛と 同じ
#	A区137号住居	#	15~26	右上顎歯4 左上顎歯6 頰蓋2	園分寺中間牛B古墳	不明	社令	現代黒毛和種よりや や小さい。同時代の 牛と同じ
#	F区1号井戸	平安時代 10C	253~268	上顎歯6 下顎歯4 下顎骨4 前肢骨1	園分寺中間牛C平安	不明	社令	現代黒毛和種より大 変小さい
#	I区9号井戸	平安時代 9C	775~793	下顎歯10 上顎歯6 下顎骨2	園分寺中間牛D平安	不明	社令	現代黒毛和種と同じ

## (2) 日高遺跡、三ツ寺III遺跡、下東西遺跡、田端遺跡において個有名称を設定した馬・牛について

既に調査した日高遺跡、三ツ寺III遺跡、下東西遺跡、田端遺跡の中で標式馬・牛と認められるものに個有名称を設定して来たが、今回中間地域の調査成績を分析するにあたり、過去に設定した標式馬・牛を対稱に用いて検討した箇所が多かったのでここで標記4遺跡において個有名称を設定した標式馬・牛の状況を附表26に示した。馬については日高遺跡2、三ツ寺III遺跡1、下東西遺跡2計5であり、牛については下東西遺跡1、田端遺跡1計2である。時代別に見ると、馬については平安時代3、中世2計5であり、牛については奈良時代1、奈良時代—平安時代1計2である。標式馬・牛については一個体分としてよくまとまっており、遺存状態も良く原相を保っているものの中から選定するため、時代別、大きさ別に眞に標式となるべきものと思っていたが実態は仲々遺存状態の良好な例が少なく今後補充を期するため更に例数の蓄積に努めたいと考えている。

既に個有名称を設定した馬・牛7と今回の園分寺中間地域の個有名称を設定した馬・牛8を合せると合計15になるが、その状況は附表27に示すとおりである。種類別に言えば馬9・牛6である。時代別に分けると馬は平安時代5、中世2、中世以降1、近世1である。牛は古墳時代2、奈良時代1、奈良時代—平安時代1、平安時代2である。大きさ別に言えば馬は大形馬2、中形馬2、小形馬5である。牛は大きい牛2、普



附表26 標式馬・牛について個有名称の設定状況

種別	出土場所	時代	NO.	遺存体	名称	性	年令	大きさ	設定理由
馬	日高道路 154号溝	平安時代 9世紀	No.5~No.7	上顎歯槽3	日高馬A平安	不明	老令 22才(18.3 ~24.2才)	体高115.5cm (114.2~ 117.0cm)小形 馬の中では中 位の馬	平安時代の小形馬の代表例。 上顎歯槽3個が同一歯槽に植 立。内部エナメル質極めて單 純な好例
馬	日高道路 154号溝	平安時代 9世紀	No.20~No.23	左前肢骨2 右前肢骨2	日高馬B平 安	不明	幼令 3~4才	体高143cm ~145cm,大形 馬	平安時代の大形馬の代表例。 上腕骨等遺存良好、平安時代 の馬骨調査に好例
馬	三ツ寺山遺 跡、2号土 壙墓	中世以降	No.1~No.43	上下切歯・ 頬骨33、 頭蓋13、前 後肢骨7	三ツ寺馬A	雌	老令 18.7才(18. 2~19.2才)	体高115cm,小 形馬の中では 中位の馬	中世以降の小形馬の代表例。 埋葬様式は中世の埋葬様式の 好例。馬歯は殆んど原形を保 ち標式馬として好例
馬	下東西道路 I区237土 坑埋土	平安時代前 期	No.1~No.8	右上切歯1、 上顎歯槽7	下東西馬A 平安	不明	社令 6~9才	体高121cm (115.5~ 128.5cm)	平安時代の小形馬の代表例。 溝と古代井戸が重複し、場所 は淨所。頭骨の一括埋納の好 例
馬	下東西道路 G区9号井 戸埋土	室町時代後 期	No.9~No.32、 No.42	上下切歯6 上下前歯17 右前肢骨1 右頭骨1	下東西馬B 室町	不明	社令 10.5才	体高130cm,中 形馬の中では 小さい	中世の中形馬の代表例。馬歯 は殆んど原形を保ち標式馬と して好例。井戸埋納の好例
牛	下東西道路 50号溝埋土	奈良時代前 期 8世紀 前半	No.43	下顎体及び 上顎骨の一部	下東西牛A 奈良	不明	老令	小さい牛 現代黒毛和種 より小さい	奈良時代の小さな牛の代表 例。上顎の一部及び下顎体 に上下の歯槽がそろい標式牛と して好例
牛	田端遺跡 B区54号土 坑	奈良時代一 平安時代前 期 8~9世 紀	No.1~No.14	前肢骨8、 後肢骨4、 肢骨の一部 2	田端牛A奈 良一平安	不明	社令	大きい牛 現代黒毛和種 とほぼ同じ	奈良時代一平安時代の大きい 牛の代表例。井戸跡に牛の肢 骨をやぐら状に組み、祭壇に 用いた好例

附表27 時代別、体高区分別の標式馬・牛の一覧表

種別	時代	体高区分	体高	性	年令	名称	遺用
馬	平安時代	大形馬	143~145cm	不明	3~4才	日高馬B平安	上肢骨大、骨体部丸味あり
馬	平安時代	大形馬	140.5cm	不明	4才	国分寺中間馬A平安	切歯歯冠長大、頬骨歯冠小
馬	平安時代	小形馬	121.0cm	不明	6~9才	下東西馬A平安	頭骨一括埋納
馬	平安時代	小形馬	116.0cm	不明	16.1才	国分寺中間馬B平安	内部エナメル質単純
馬	平安時代	小形馬	115.5cm	不明	22才	日高馬A平安	内部エナメル質単純
馬	中世	中形馬	130.0cm	不明	10.5才	下東西馬B室町	井戸埋納跡
馬	中世	小形馬	109.5cm	不明	社令又は老令	国分寺中間馬C中世	左大翼骨より遠の肢骨
馬	中世以降	小形馬	115.0cm	雌	18.0才	三ツ寺馬A	土壙墓埋葬
馬	近世	中形馬	133.8cm	不明	15.9才	国分寺中間馬D近世	下顎骨筋線、窩凹線力強い
牛	古墳時代	普通の大きさ	現代黒毛和種より 小さい	不明	社令	国分寺中間牛A古墳	遺存良、上肢骨々体部小く く怪しい
牛	古墳時代	普通の大きさ	現代黒毛和種より やや小さい	不明	社令	国分寺中間牛B古墳	歯蓋出土、歯槽植立
牛	奈良時代	小さい	現代黒毛和種より 大変小さい	不明	老令	下東西牛奈良	上顎の一部及び下顎体出土、 右上下全歯槽植立
牛	奈良時代一平安時代	大きい	現代黒毛和種と同じ	不明	社令	田端牛奈良一平安	井戸跡に肢骨をやぐら状に組 み祭壇に用う
牛	平安時代	大きい	現代黒毛和種と同じ	不明	社令	国分寺中間牛D平安	頬歯主柱、側性発達、内部エ ナメル質単純
牛	平安時代	小さい	現代黒毛和種より 大変小さい	不明	社令	国分寺中間牛C平安	中手骨やや細い

通常の大きさの牛2、小さい牛2である。時代別に馬の体高をみると馬については平安時代の大形馬2頭の体高が143~145cmと、140.5cmで各時代を通じて一番大きく、また中世になると一番大きい中形馬の体高が130cmで、平安時代より小さくなっていることは附表28「時代別馬の年令と体高」に見られるとおり平安時代の

平均体高が $128.7 \pm 9.6\text{cm}$  ( $n=41$ )であり、中世の平均体高が $125.1 \pm 9.2\text{cm}$  ( $n=74$ )と低くなる傾向と一致している。また牛については古墳時代から平安時代までのものであるが、附表16「時代別遺存体の出土点数」に見られるとおり牛の遺存体の出土点数が古墳時代から平安時代に集中していることと一致しており、馬・牛ともに標式馬・牛としての選定に大きな誤まりはなかったものと考えている。

## 第2項 遺存体の形態

遺存体の形態的特徴は附表5、6及び附図7～42に示すとおりである。なお附図のレイアウト及び附写真の写真撮影並びにレイアウトは国分寺中間地域整理班によってなされた。

## 第3項 遺存体を有する動物の性、年齢、大きさ

### 1 遺存体を有する動物の性

遺存体を有する動物の性別については附表7に示すとおりである。馬は動物の中で大きさについては性差の少ない動物であるので馬歯・馬骨による性の判断は通常犬歯の有無と寛骨によってなされるが、性別を確認出来たものは僅かに3個体だけであった。他の動物については性的特徴を有する部位を確認出来なかったため性別は不明であった。

### 2 遺存体を有する動物の年齢

遺存体を有する動物の年齢については附表7に示すとおりである。

(1) 馬については附表28に示すとおりである。馬の出土個体数269のうち年齢を判定出来る個体数は132(49.1%)である。時代別に見ると平均年齢の最も高い時代は中世の $13.0 \pm 7.9$ 才 ( $n=30$ )であり、平均値を算出出来た範囲内での平均値の最も少ない時代は平安時代の $6.2 \pm 3.4$ 才 ( $n=55$ )であった。下って中世～近代に入ると再び年齢は下り $9.0 \pm 6.8$ 才 ( $n=6$ )であった。

(2) 牛については附表30に示すとおりであり牛の出土個体50のうち年齢区分の判定が出来た個体は25(50%)であった。一般に牛の年齢は若く、幼令に近い仕令が多かった。然し古墳時代～奈良時代及び平安時代に老令が2個体づつ見られ、また中世に幼令が3個体見られ老令の見られないところから、古代においては牛の稀少価値が高く老令になるまで大切に飼育されていたが中世以降になると牛は経済動物として取扱われ、或はまた危険防止のため雄牛の年齢をなるべくおさえる(注15)ようになってきたものと考えられる。

(3) 猪、鹿については附表7に示すとおり年齢を判定出来るものは少く、猪については近世～近代のNo.920～No.943が生後4～6ヶ月(Ⅱ段階-3)(注9)であり、鹿については古墳時代No.757～No.759が2才1ヶ月～2才3ヶ月であるのを判定し得ただけである。猪の出生期が4～5月頃(注9)とするとこの猪の捕獲時期は秋であり、また鹿の出生期が5月初旬～6月末(注16)とするとこの鹿の捕獲時期は夏から秋にかけての時期であったと推定される。

(4) その他の動物は年齢を判定出来なかった。

### 3 遺存体を有する動物の大きさ

遺存体の計測値については附表8、9、10、11に示すとおりであり、また遺存体を有する動物の地区別、

時代別、種類別の大きさについては附表7に示すとおりである。そのうち馬と牛についての時代別の大きさは次のとおりである。

〔馬〕 出土馬歯・馬骨を有する馬の時代別の大きさについては附表28に示すとおりである。全時代を通じての平均体高は $127.2 \pm 9.6\text{cm}$  ( $n=162$ )である。時代別に見ると平均体高の最も大きい時代は平安時代で、 $128.7 \pm 9.6\text{cm}$  ( $n=41$ )であり、平均値の最も低い時代は中世で、 $125.1 \pm 9.2\text{cm}$  ( $n=74$ )であった。下って中世～近代に入ると平均体高はやや大きくなり $127.8 \pm 7.6\text{cm}$  ( $n=11$ )であった。また体高区分で見ると平安時代は大形馬5 (10.6%)、中形馬27 (57.4%)、小形馬15 (31.9%)計47で、中世は大形馬4 (5.2%)、中形馬37 (48.1%)、小形馬36 (46.8%)計77で、中世～近代は大形馬1 (7.7%)、中形馬6 (46.2%)、小形馬6 (46.2%)計13であった。平安時代に比較すると中世は大形馬、中形馬の比率が夫々5.4%、9.3%減少し、その反面小形馬が14.9%増加し、平安時代より中世に入ると馬が小形化したことを示している。

〔牛〕 出土牛歯・牛骨を有する牛の時代別の大きさについては附表30に示すとおりである。既存の牛歯・牛骨の出土例(注7)との比較は既存の出土例が少ないため判断した結果が出てこない。現代黒毛和種と比較を試みる場合牛のように大きさについて性差の大きい動物では性不明のまま大きさ論ずることは全く論外なことだと考えている。しかし出土牛歯・牛骨を有する牛の大きさを論ずる一応の目安として現代黒毛和種との比較を行ったが、その場合黒毛和種は雌を考えている。従って出土牛歯・牛骨を有する牛の中で現代黒毛和種と同じかまたは大きいものは雄である確率が高いと考えている。

昭和63年に農水省が公表した黒毛和種の改良目標では、現在の黒毛和種の雌の平均体高は127cmと言うことである。上坂章次は「第3章和牛の改良」『和牛全講』(注17)の中で「昔の和牛は地方により体型、大きさ、毛色などについてかなり大きな変異のあったことが認められるが、一般に小格(体高が雌で115～117cm、雄では123～125cmぐらい)前勝ちで、役用タイプで、動作も敏捷で牽引力、負重力とも絶対量では現在の和牛にかなり劣ったが、作業意欲、回転動作等はすぐれていた。毛色は黒が大部分を占めていたが、白斑のあるもの、褐色、黄毛のものも少なくなかった。資質特に角、蹄、骨締り等は素晴らしかったようである。また、いわゆる晩熟で、泌乳量も少なく、一般には現在黒毛和種の半分ぐらいであった。」と述べている。上坂の記述から考えると附表30の現代黒毛和種との比較の欄の中で現代黒毛和種より大きいか、または同じである牛はやはり雄が多く含まれている確立が高いのではあるまいか。附表30で見る限りにおいては平安時代に比較して中世の方が現代黒毛和種より小さい牛の比率が増えてくるので、平安時代より中世の方がやや小さくなったのではあるまいかと考えている。

付章 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体

種類	時代	個体数	年				令				
			年齢判定 個体数	平均年齢	不明	年令区分					
						幼令	社令	社令I	老令	不明	
馬	古墳時代	4	1	5	3	1				3	
#	古墳時代—平安時代	3	1	8	2	1				2	
#	奈良時代	1	1	4		1					
#	平安時代	73	55	6.2±3.4	18	34	20	1	3	15	
#	中世	119	30	13.0±7.9	89	8	14	4	11	82	
#	中世—近世	1	1	9.3				1			
#	中世—近代	21	6	9.0±6.8	15	2	1		3	15	
#	近世	2	2	15.9, 3		1	1				
#	近代	1	1	5				1			
#	不明	43	34	11.0±4.3	9	4	29		2	8	
	計	288	132	9.3±5.9	136	50	69	5	19	125	

附表28 時代別馬の年齢及び大きさ

種類	時代	大 き さ													備 考		
		体高判定 個体数	平均体高	不明	大	形	中	形	中	中形	小	形	小	不明			
馬	古墳時代	2	130, 135	2					1	1				1	1		
#	古墳時代—平安時代	0		3					1							2	
#	奈良時代	1	110											1			
#	平安時代	41	128.7±9.6	32			5	6	1	13	7		3	1	5	6	26
#	中世	73	125.1±9.2	46			4	8	5	21	2		24	5	6	1	43
#	中世—近世	1	140				1										
#	中世—近代	11	127.8±7.5	10			1	1		5			3	1	2		8
#	近世	2	133.8, 114.8							1							1
#	近代	1	135								1						
#	不明	29	129.5±10.1	14			9	1	2	5	7	2	5		4	1	7
	計	161	127.2±9.6	107			20	16	9	46	18	2	35	7	18	10	87

附表29 出土馬歯の歯冠巾・巾率について既往の出土馬歯との比較

時代	歯 冠 巾				巾 率			
	馬 歯 数	平均値 (x) a	既往の出土馬 歯(注3,21)の 平均値 (x) b	a / b	馬 歯 数	平均値 (x) c	既往の出土馬 歯(注3,21)の 平均値 (x) d	c / d
平安時代	62	14.42	16.46	87.6	62	55.92	67.66	82.6
中 世	46	15.52	18.36	84.8	46	64.16	73.22	87.6
中世-近世	3	14.37	17.00	84.5	3	53.07	68.47	77.5
中世-近代	13	13.87	16.32	85.0	13	55.42	69.08	80.2
近 代	11	16.36	16.49	99.2	11	61.55	63.25	97.3

附表30 時代別牛の年令及び大きさ

種 類	時代	個 体 数	年 令							大 き さ							遺 棄	
			年令判定 数	平均年令	不明	年 令 区 分				同時代の牛と比較				現代黒毛和種と比較				
						幼令	壮令	壮老令	老令	不明	大きい	同じ	小さい	不明	大きい	同じ		小さい
牛	古墳時代	3	0		3		2			1	1	1		1	1		2	
#	古墳時代- 奈良時代	4	0		4				2	2			1	3			1	3
#	奈良時代	2	0		2				2				2					2
#	平安時代	23	0		23		11		2	10	1	7	1	14		5	6	11
#	中 世	17	1	5	16	3	3	1		10	7	1		9		1	9	7
#	不 明	1	0		1		1							1			1	
	計	50	1	5	49	3	17	1	4	25	10	9	2	29	1	6	19	23

附表31 時代別馬の上腕骨々体部最少巾/最少径の変化

遺 跡 名	時 代	N <sub>c</sub>	部 位	骨体部最少巾	骨体部最少径	巾/径
日 高 遺 跡	平 安 時 代	日高20	右上腕骨の一部	41.4	45.6	90.8
中 岡 地 域	中 世	418	左上腕骨の一部	31.2	36.2	86.2
#	#	471	左上腕骨々体部	37.9	45.9	82.6
#	#	475	右上腕骨々体部	33.4	42.4	78.8
#	#	476	右上腕骨々体部	33.0	39.6	85.6
#	#	524	右上腕骨々体部	33.9	37.4	90.6
#	#	519	左上腕骨々体部	31.4	37.1	84.6
	中世の平均			33.5±2.2	39.8±3.4	84.7±3.6
#	中世-近代	78	左上腕骨々体部	33.4	43.3	77.1

## 4 出土馬歯の歯冠巾、巾率について

出土馬歯の歯冠巾、巾率を既往の出土馬歯（注3、21）と比較した結果は附表29に示すとおりである。平安時代から中世一近代に至るまでの出土馬歯の歯冠巾、巾率は既往の出土馬歯の歯冠巾、巾率に比較して夫々84.5~87.6%、77.5~87.5%を示し余り大きな変動はなかったが、近世に至ってそれらの比率は夫々99.2%、97.3%と急激な上昇を見ている。歯冠巾、巾率が馬の改良度を現わすもの（注41）とするならば、また既往の出土馬歯の歯冠巾及び巾率が一応全国平均を現わすものとするならば、中間地域出土の馬歯を有する馬達は全国的に見てやや改良度が低く体の巾のやや小さい馬であったと考えられる。しかし近世に至って急激に改良度が高まり全国平均の歯冠巾と巾率を示すようになったものと言い得る。ただこの附表の中世一近代、中世一近代の欄の数字の中で近世一近代に属する馬の馬歯がどの程度含まれていたかと言う疑問が残る。

## 5 出土した馬の上腕骨の骨体部最少巾／骨体部最少径について

中間地域から出土した馬の遺存体のうち計測可能な上腕骨の計測値を時代別に分けて最体部最少巾／骨体部最少径を調べたものが附表31である。ただ残念なことに平安時代以前の馬骨の中で上腕骨の計測し得るものがなく、日高遺跡（注3）における平安時代の154号溝より出土した「日高馬B平安」の右上腕骨の計測値を用いることとした。時代別に上腕骨の骨体部最少巾／骨体部最少径の比率を見ると平安時代90.8%（ $n=1$ ）、中世84.7%（ $n=6$ ）、中世一近代77.1%（ $n=1$ ）である。林田の調査（注2）によると体高115cmの現代トカラ馬の上腕骨は、骨体部最少巾／骨体部最少径は72.0%で、中間地域出土の中世一近代の上腕骨の骨体部最少巾／骨体部最少径の比77.1%とほぼ同じである。附表31を見ると平安時代の上腕骨々体部は骨体部巾に比較すると骨体部径が小さく、骨体部は丸みを帯びていることがわかり、時代とともに骨体巾に比較して骨体径が増し、骨体部は前後に長くなる。日高馬B平安は上腕骨後及び上腕筋溝不明瞭で骨体は比較的丸い感じを持っている。現代普通馬の上腕骨は上腕骨後が切り立って骨体の横断面は前後に長く、また上腕筋溝は平らで広く、大きな筋肉を入れる余地を有し現代馬の方が速度も優れていたことを示している。また現代普通馬に見られるように骨後を頂点として骨体が前後に長いことは疾走等の前後の方向の衝撃に対して強いものと考えられる。

中世の6個の上腕骨の骨体部最少巾／骨体部最少径の平均値は $84.7 \pm 3.6\%$ であるが、比率の最も大きいものは90.6%で、最も小さいもの78.6%である。この上下の比率に12%の差が見られるが、これらの比率は中世一近代の77.1%を下ることはなくむしろ平安時代の比率に近い傾向にある。時代別馬歯の歯冠巾及び巾率の項でも述べたように、平安時代から中世までは中間地域の馬の改良速度は極めて遅く、殆んど足踏み状態に近かったと考えられる。また中世の6個の上腕骨の骨体部最少巾／骨体部最少径の比率に見られるとおり常に良・不良が混在する形で改良が進められていたと考えられる。

## 6 出土牛歯の大きさ

出土した牛歯を古墳時代から平安時代までと、中世以降との2つの時代に分け、更にそれを牛歯の部位別に、また現代黒毛和種と比較して大きい、同じ、小さい牛といた3段階に分けて集計したものが附表14である。牛歯の計測値だけでその牛歯を有する牛の大きさを知ることが出来るようにしたいとかねがね考えていた。しかし牛は個体差が大きく、部位によって歯冠長の大きさの逆転も加わり、活用出来る表を作ることは仲々難かしいことだと覚悟はしていたが、集計結果はつくづくと例数の不足を感じさせるようなものであって、歯冠長と牛の大きさが一致しないものが多かった。今後の例数の蓄積に努力したい。

附表32 現代黒毛和種牛畜計測値

種別 No.	測定部位	P <sup>0</sup>	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>0</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	I <sub>3</sub>	I <sub>4</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>	備 考
2	雌 冠 長	17.2	19.1	21.1	23.8	26.8	32.4	18.3	16.4	13.6	12.7	10.8	22.6	27.5	26.9	30.9	39.5	黒毛和種去勢
	雌 冠 巾	13.1	16.2	19.3	21.1	22.8	22.7	10.6	10.1	8.8	8.2	9.7	10.1	12.0	12.6	20.7	14.5	4才産地不詳
	巾 率	76.2	84.8	91.5	88.7	85.1	70.1	57.9	61.6	64.7	64.6	89.8	44.7	43.6	46.8	67.0	36.7	
	頸・背側産冠高	20.4	19.4	21.2	18.4	22.1	28.8	25.2	24.4	20.5	18.7	14.9	24.5	30.2	31.4	42.7	46.2	
	現 全 産 高	35.9	39.8	45.6	46.2	52.4	55.6	46.4	49.5	38.9	34.0	31.4	47.4	53.4	64.2	74.4	80.2	
エナメル厚(横/舌側)	1.0-1.0	1.4-1.0	0.9-0.9	0.9-0.9	1.0-1.0	1.1	0.9	0.8	0.7	0.6	0.8-0.8	1.0-1.0	0.8-0.8	1.4-1.1	1.2-1.3	1.0-1.0	1.0-1.0	黒毛和種去勢
重 量 g	7.1	10.6	14.2	21.3	29.8	39.2	5.7	4.6	3.1	2.2	2.5	11.1	15.9	24.6	39.3	53.5		5才産地不詳
3	雌 冠 長	17.1	21.9	19.4	28.5	32.0	32.1	16.3	15.4	13.9	13.4	11.2	19.2	21.7	25.1	26.6	40.1	黒毛和種去勢
	雌 冠 巾	14.2	15.9	15.7	17.1	19.3	17.1	10.4	10.0	8.8	8.2	8.8	11.7	12.8	14.8	14.4	14.6	5才産地不詳
	巾 率	83.0	72.9	80.9	60.0	60.3	53.3	63.8	64.9	63.3	61.2	78.6	57.7	59.0	59.0	54.1	36.4	
	頸・背側産冠高	26.5	30.4	31.1	34.7	44.3	50.3	18.1	11.2	13.9	10.3	9.9	14.3	19.7	19.4	21.8	27.4	
	現 全 産 高	43.1	47.2	54.6	59.6	69.6	72.2	41.2	41.1	37.1	35.2	24.9	38.7	43.8	45.7	55.4	60.8	
エナメル厚(横/舌側)	0.9-0.8	1.0-0.8	0.9-0.9	1.1-1.2	1.2-1.4	0.9-1.2	1.1	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8-0.8	1.3-1.0	0.8-1.2	1.0-0.8	1.0-1.3	0.8-1.2	黒毛和種去勢
重 量 g	11.2	14.9	18.4	35.4	56.3	56.6	4.8	4.3	3.4	2.7	2.5	7.2	10.4	14.3	24.8	38.4		黒毛和種去勢
4	雌 冠 長	18.9	20.6	19.8	30.2	32.0	31.8	18.4	15.6	14.9	未測定	13.5	22.2	23.4	28.1	32.0	38.6	黒毛和種去勢
	雌 冠 巾	13.9	15.4	17.5	17.2	18.6	17.5	10.5	10.3	9.0	#	9.4	10.9	10.9	12.6	13.1	13.2	2.3才産地不詳
	巾 率	73.5	74.8	88.4	57.0	58.1	55.0	57.1	66.0	60.4	#	69.6	49.1	46.6	44.8	40.1	34.2	
	頸・背側産冠高	32.4	49.5	37.9	40.8	52.9	55.6	25.4	23.2	21.3	#	21.6	27.4	35.4	39.6	48.6	57.9	
	現 全 産 高	44.5	53.1	63.9	70.9	79.8	72.1	50.7	46.4	41.0	#	31.8	51.6	52.8	71.2	79.9	79.3	
エナメル厚(横/舌側)	未測定	未測定	未測定	1.2-1.2	1.3-1.1	1.2-1.2	1.2-1.2	1.2-1.2	1.2-1.2	1.2-1.2	#	1.2-1.2	1.1-1.1	1.1-1.1	1.2-1.2	1.2-1.1	1.0-1.0	黒毛和種去勢
重 量 g	10.5	16.3	18.7	41.9	61.8	60.9	6.1	4.7	2.8	#	2.7	9.9	12.4	28.9	41.8	56.8		2.3才産地不詳
6	雌 冠 長	19.9	21.2	19.2	29.3	33.5	32.2	18.6	17.3	15.7	未測定	11.9	21.9	26.1	27.3	32.9	41.1	黒毛和種去勢
	雌 冠 巾	13.6	15.6	15.9	18.9	19.9	17.2	10.3	10.3	8.9	#	9.2	10.5	11.3	13.4	13.9	13.6	2.3才産地不詳
	巾 率	68.3	73.6	82.8	64.5	59.4	78.2	55.4	59.5	56.7	#	77.3	47.9	43.3	49.1	42.2	33.1	
	頸・背側産冠高	32.9	37.1	38.5	40.0	54.1	58.6	25.6	14.4	21.3	#	15.7	28.1	34.9	39.5	46.5	55.1	
	現 全 産 高	49.5	53.1	58.3	60.1	77.2	79.8	51.9	45.5	38.4	#	30.3	47.6	48.6	65.6	78.3	80.6	
エナメル厚(横/舌側)	1.0-1.0	1.0-1.0	1.2-1.2	1.2-1.2	1.3-1.1	1.1-1.2	1.2-1.2	1.2-1.2	1.2-1.2	1.2-1.2	#	1.2-1.2	1.0-1.0	未測定	1.2-1.0	1.2-1.2	1.2-1.2	黒毛和種去勢
重 量 g	11.2	15.9	18.4	40.8	63.9	59.3	6.1	4.8	2.9	#	2.3	8.4	7.7	25.8	41.9	53.8		

附表33 出土牛歯の歯冠巾・巾率について既往の出土牛歯との比較

時 代	歯 冠 巾				巾 率			
	牛 歯 数	平均値 (Σ) a	既往の出土牛 歯 (注4) の 平均値 (Σ) b	a / b	牛 歯 数	平均値 (Σ) c	既往の出土牛 歯 (注4) の 平均値 (Σ) d	c / d
古墳時代	17	17.00	18.77	90.6	17	68.40	67.00	102.0
平安時代	23	13.71	15.69	87.4	23	55.50	58.85	94.3
中 世	3	14.13	14.63	96.6	3	51.20	52.60	98.5

附表14を集計するため比較に用いた黒毛和種の牛歯の計測値は附表32に示すとおりである。なお既報「下東西遺跡出土の獣歯・獣骨」1987の中で附表7現代の牛歯測定値のうち、 $I_1 \sim I_4$ 及び $P_2$ の歯冠巾を馬同様に咬合面 (at the biting surface) で測定していましたが上記の牛切歯のように咬合面の薄い歯の歯冠巾は歯冠基部附近 (near the base of the crown) で測定しなければならないことを知り今回訂正させていただきましたことをお詫びいたします。

#### 7 出土牛歯の歯冠巾、巾率について

出土牛歯について時代別に歯冠巾、巾率を集計した結果は附表33に示すとおりである。時代別歯冠巾、巾率を既往の出土牛歯の歯冠巾、巾率と比較すると、歯冠巾については古墳時代は90.6%、平安時代は87.4%、中世は96.6%であり、巾率については古墳時代は102.0%、平安時代は94.3%、中世は98.5%である。この比率を見ると中間地域出土の牛歯の歯冠巾、巾率はいつの時代でも既往の出土牛歯の歯冠巾、巾率と殆んど同じ大きさであったと言いうる。今仮に既往の出土牛歯の歯冠巾、巾率を同時代における全国平均の牛歯の歯冠巾、巾率とするならば、また仮に牛の歯冠巾、巾率が馬と同じく牛の改良度現わすものであるとするならば、中間地域出土の牛歯を有する牛はいつの時代でも同時代の全国の牛とほぼ同じ改良度をもっていたと言えることが出来る。牛は直接軍用や公用に関係する馬と異なり、物資の輸送や農耕用の目的で飼育されているものであったため、牛の改良は個々の飼育者にまかされていた。従って牛は中世に至るまで（恐らく近代に至るまでと言っても過言ではないと考える）目に見える程の改良効果が現われなかったと考えられる。前項の出土馬歯の歯冠巾、巾率についての中で、馬については平安時代から中世に至るまで中間地域出土の馬の歯冠巾、巾率は既往の出土馬歯の歯冠巾、巾率よりやや小さく言いかえれば同時代の全国の出土馬歯の歯冠巾、巾率よりやや劣っていた。また先に触れたとおり近世に至って中間地域出土の馬歯の歯冠巾、巾率は全国水準に達していたことが認められたが、牛では残念ながら近世以後の牛歯・牛骨の出土が無いため近世のことが不明であることは誠に残念なことである。



#### 第4項 県下5遺跡における調査結果のまとめ

##### 1 県下5遺跡における時代別出土個体数及び出土点数

現在までに調査を依頼された群馬県下の5つの遺跡(注18)、日高遺跡、三ツ寺田遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、国分寺中間地域遺跡は群馬県の中毛に位置し、馬、牛の遺存体の出土数が群馬県下では多い遺跡である。この5つの遺跡における時代別出土個体数及び出土点数は附表34に示すとおりである。5つの遺跡の動物の出土個体数は合計605個体であるが、時代別に見ると最も多いのが中世の270個体(44.6%)で、次いで平安時代の168個体(27.8%)、中世—近世の26個体(4.3%)の順である。動物の種類別に見れば最も出土個体数の多いものは馬315個体(52.1%)で、次いで牛67個体(11.1%)、兎26個体(4.3%)、鹿11個体(1.8%)の順である。

##### 2 県下5遺跡における出土馬歯の大きさ

県下5遺跡における出土馬歯のうち、歯冠長、歯冠巾、巾率を計測出来た馬歯を時代別、部位別に分けて集計したものが附表12である。時代別に見ると古墳時代から平安時代まで93点、中世及び中世以降160点、合計253点である。この253点の馬歯について「古墳時代から平安時代まで」と「中世及び中世以降」とに分けて夫々が属する個体の体高区分、すなわち大形馬、中形馬、小形馬に分けて部位別に集計記載したものが附表13である。体高区分に従って時代別、部位別に分けて平均値を算出して見ると例数が少なくして適確な数値を把握出来ないものが多く、特に大形馬と中形馬の間で数値が接近しているものや、数値が逆転しているものが見られた。このように大形馬と中形馬の数値が接近しているものが見られる原因は体高140cm以下の馬は体高と歯冠長とは平行しているように思われるが、体高が140cmを越えてくると歯冠長は大きくなるが個体差による影響が強くなり平行線を辿りにくくなっていることによるものである。適確な数値を把握するためにさらに例数を重ねる必要性を痛感している次第である。

##### 3 県下5遺跡における出土馬歯・馬骨を有する馬の時代別、年令及び大きさ

県下5遺跡における出土馬歯・馬骨を有する馬の年令及び大きさは附表35に示すとおりである。出土個体数の合計は265個体であるが、その平均年令は $8.8 \pm 6.2$ 才( $n=124$ )、平均体高は $127.2 \pm 9.5$ cm( $n=163$ )である。

###### (1) 古墳時代

古墳時代、古墳時代—奈良時代及び古墳時代—平安時代については附表28についての国分寺中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達の項で述べたとおりであって、県下5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬達の中では大きくて優れていた。

###### (2) 奈良時代—平安時代

この時代には6個体出土しているが、そのうち5個体は平均年令 $8.8 \pm 6.2$ 才、平均体高 $121.4 \pm 11.2$ cmである。体高が大変小さくなっているが例数が少ないのでこの時代の一般の馬が小さかったかどうか判断し難いところであって今後の調査をまたなければならない。

###### (3) 平安時代

平安時代の平均年令は $6.9 \pm 4.2$ 才( $n=67$ )で、平均体高は $129.4 \pm 9.9$ cm( $n=55$ )である。この数値を附表28の国分寺中間地域における平安時代の平均年令 $6.2 \pm 3.4$ 才、平均体高 $128.7 \pm 9.6$ cmと比較すると、平均

年令は国分寺中間地域出土の馬達の方が0.7才若く、平均体高は同じである。この2つの表を比較すると平安時代には国分寺中間地域も、県下5遺跡も全く同じ傾向を有していたことがわかる。すなわちこの時代には大和朝廷による統制のとれた馬の改良増殖により5遺跡から出土した馬歯・馬骨を有する馬達のように質も優れた多くの馬が生産されていたことがわかる。ただ5遺跡の方が平均年令が0.7才多くなっているが、それでもこの数値が一時代の平均年令としては極めて若いことには変りはない。国分寺中間地域遺跡の集計値が5遺跡の集計値より若いと言うことは国分寺中間地域の方が後述のとおり大和朝廷の蝦夷経営の影響をより一層激しく受け兵馬の供給基地として中心的役割を果たしていたことが分かる。

国分寺中間地域及び県下5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬について時代別に年令分布を調べたものが附表36及び附表37である。5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬達の方が国分寺中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達よりも平均年令が0.7才多くなっていることについては附表36、附表37の年令分布表に見られるとおり県下5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬達の方が、4.9才以下が4.5%少なく、15.1才以上が3.9%多くなっていることによるものであることがわかる。

附表34 県下5遺跡における時代別出土個体数及び出土点数

時代	日 高			三ツ寺		下 東 西			田 端			国 分 寺 中 間 地 域							合計						
	馬	牛	鹿	小計	馬	牛	鹿	小計	馬	牛	不明	小計	馬	牛	馬又は牛	人	猪	鹿		兎	小飛虫類	不明	小計		
弥生時代			2	2																				2	
古墳時代													4	3				1	1				5	14	14
古墳時代 —奈良時代															4	1							4	9	9
古墳時代 —平安時代												3											3	3	3
奈良時代								1	1	2			1	2				1					7	11	13
奈良時代 —平安時代								1			1	8	5										2	2	16
平安時代	11	1		12				2			2	8	6	14	73	23	1	1	1				41	140	168
平安時代 —中世																							1	1	1
中 世	1	3		4	1	1	7				7	5	1	6	120	17		3	5	26	1	80	252	270	
中世—近世														2	3	1							1	2	5
中世—近代															21			1					4	26	26
近 世															2								6	8	8
近世—近代																		2	1				1	4	4
近 代															1									1	1
不 明															43	1		2					18	64	64
計	12	4	2	18	1	1	10	1	1	12	22	12	2	36	269	59	2	8	3	8	26	1	170	537	604
出土点数	23	4	2	29	55	55	42	13	1	56	53	33	2	88	619	162	2	17	32	21	34	2	170	1059	1287

5遺跡は日高遺跡、三ツ寺田遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、国分寺中間地域遺跡、出土点数の中には動物の歯・骨・角を含む

附表35 群馬県内5遺跡における時代別層の年令及び大きさ (三ツ寺III遺跡、日高遺跡、下東西遺跡、田崎遺跡、回分寺中間地域遺跡)

種別	時代	年令						区 分					
		年令 判定数	平均年令	不		幼		幼		幼		不明	
				明	不明	幼令	幼令	幼令	幼令				
馬	古墳時代	3	1	5	2			1				2	
#	古墳時代-奈良時代	1	0		1							1	
#	古墳時代-平安時代	3	1	8	2			1				2	
#	奈良時代-平安時代	6	5	8.8±6.2	1	3	1	1	1	1		1	
#	平安時代	54	67	6.9±4.2	27	38	1	27	1	7	20		
#	中 世	132	39	12.2±7.4	53	9	21	4	12	86			
#	中世-近世	2	2	9.3, 17.5			1	1					
#	中世-近代	21	6	9.0±6.8	15	2	1	3	3	15			
#	近 世	2	2	15.9, 3			1	1					
#	近 代	1	1	5									
	計	265	124	8.8±6.2	141	53	1	56	5	24	127		

種別	時代	大 小 ぎ												大 小 形 明	大 小 形 不明	大 小 形 不明の44 個体を除く				
		体高 判定 数	平均体高	不			大 形			中 形			小 形							
				明	不明	不明	大	中	小	大	中	小	大				中	小		
																			大	中
馬	古墳時代	1	130	2						1							1	1		
#	古墳時代-奈良時代	1	135							1										
#	古墳時代-平安時代	0		3						1								2		
#	奈良時代-平安時代	5	121.4±11.2	1						1			2	2				1		
#	平安時代	55	129.4±9.9	29						11	9	3	15	8	4	3	5	10	26	
#	中 世	85	125.9±9.3	47						6	11	5	24	3	28	5	6	1	43	
#	中世-近世	2	110, 140												1					
#	中世-近代	11	127.8±7.6	10						1	1	5	3	1	2			8		
#	近 世	2	130.8, 114.8										1						1	
#	近 代	1	135											1						
	計	163	127.2±9.5	102						1	18	21	9	46	13	38	10	15	13	81

附表36 出土馬歯・骨を有する馬の年令分布表

年令区分	時 代		
	平安時代	中 世	中世-近代
4.9才以下	32	8	2
5-10才	15	5	
10.1-15	6	5	1
15.1-20	2	5	3
20.1-25		4	
25.1以上		3	
計	55	30	6

附表37 県下5遺跡における出土馬歯・骨を有する馬の年令分布表

年令区分	時 代			摘 要
	平安時代	中 世	中世-近代	
4.9才以下	36	9	2	国分寺中間地域・日高三ツ寺田・下東西・田端遺跡
5-10才	19	10		
10.1-15	7	7	1	
15.1-20	4	5	3	
20.1-25	1	5		
25.1以上		3		
計	67	39	6	

附表38 県下5遺跡における出土馬歯・骨を有する馬の体高分布表

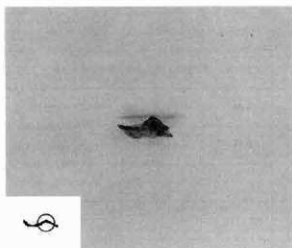
体高区分	時 代			摘 要	
	平安時代	中 世	中世-近代		
100.1-105cm		2		国分寺中間地域・日高・三ツ寺田・下東西・田端遺跡	
105.1-110	8	5	1		
110.1-115		5			
115.1-120	4	12			
120.1-125		16	3		
125.1-130	19	17	2		
130.1-135	9	12	4		
135.1-140	11	14	1		
140.1以上	4	2			
計	55	85	11		

また平安時代における県下5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬達の平均体高が $129.4\text{cm} \pm 9.9\text{cm}$ であったがその状況は附表35県下5遺跡における出土馬歯・馬骨を有する時代別馬の年齢及び大きさに示すとおりである。附表38県下5遺跡における出土馬歯・馬骨を有する体高分布表によれば35.7%の馬が体高 $125.1 \sim 130\text{cm}$ のところに集中し、体高 $125.1 \sim 140\text{cm}$ の馬が71.4%を占めていた。

## (4) 中世

附表35によると中世における県下5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬の平均年令は $12.2 \pm 7.4$ 才で、平均体高は $125.9 \pm 9.3\text{cm}$ である。この数字を附表28の国分寺中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬の平均年令 $13.0 \pm 7.9$ 才、平均体高 $125.1 \pm 9.2\text{cm}$ に比較すると国分寺中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達の方が平均年令が0.8才多く、平均体高は同じである。

5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬達の平均年令が僅かに低いといっても平均年令が $12.2 \pm 7.4$ 才と言う年令は一時代の平均年令として長いことに変わりはなく、中世武士の本領を發揮し馬を可愛がっていたことが窺われる。5遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬の平均体高が $125.9 \pm 9.3\text{cm}$ を示しているが、これを附表38の体高分布表によって見れば39.2%の馬が体高 $120.1 \sim 130\text{cm}$ のところに集中している。この時代について特徴的なことは $115.1 \sim 120\text{cm}$  14.3%、 $120.1 \sim 125\text{cm}$  19.0%、 $125.1 \sim 130\text{cm}$  20.2%、 $130.1 \sim 135$  14.3%、 $135.1 \sim 140\text{cm}$  15.5%、と言うように $115.1 \sim 140\text{cm}$ の間の各階層に等に分布していることである。言いかえればこの時代の馬の改良増殖は個々の馬の飼育者にまかされており、このような時代には体高一つをとって見ても全体の馬のレベルが融合して上って行くと言うのではなく、大きい馬もいれば小さい馬もいる、と言った工合に常に大小混在する形で改良増殖が進んだことを示している。この個々の飼育者にまかされた馬の改良増殖が再び統制のとれた改良増殖に変化する時期は近世に入ってからである。このことは附表29出土馬歯の齒冠巾、



1 奇形の馬歯 中附離山形  
正常な馬歯でも萌出直後は中附離が山形を示すが、奇形の時は中附離に幅がないため歯冠長は少ない割に前離、後離が広い



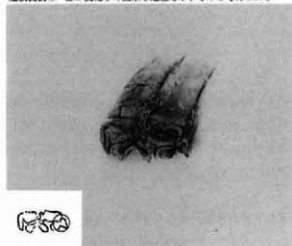
2 奇形の馬歯 後小窩の後小凹槽  
小凹槽が見られるのは上顎第三後臼歯に限られる。第三後臼歯は歯冠前倒壁に較べ後倒壁が狭く鑿に無歯が生ずるためである



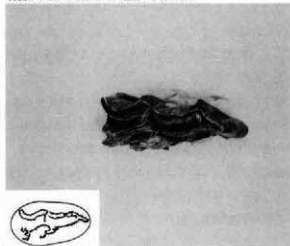
3 奇形の馬歯 後小窩後小袋槽  
小袋槽が見られるのは上顎第三後臼歯に限られる。小凹槽が歯冠後倒壁の一部が変化して出来る過程を示すものと考えられる



4 奇形の馬歯 entostylid 先端舌側に湾曲  
下顎第三後臼歯後翼後端が舌側に湾曲しているが、何故に先端が湾曲しなければならないか理由は不明である



5 奇形の馬歯 下次小窩乳房状  
下次小窩が大きく乳房状を示すのは前後の歯から圧迫がなく現代馬より歯の発達が悪いことを示している



6 奇形の馬歯 永久歯生え換り異常  
遺伝的なものでなく、全身的疾病のため全部永久歯が生え換っているのにいずれの歯も咬耗開始直後の状態を示し、歯冠は極めて短い

附表39 奇形の種類別発生数

奇形の種類	中附歯山形	中低冠歯細くして	後小窩窩入の後	後小窩窩の後の後	後小窩窩の後の後	舌側へ湾曲	下回状小窩乳	下回状小窩乳	下回状小窩乳	下回状小窩乳	下回状小窩乳	永換久り異常	計
発生部位	LM <sup>a</sup>	右上前臼歯	LM <sup>a</sup>	LM <sup>a</sup>	LM <sup>a</sup>	LM <sub>2</sub>	RM <sub>2</sub>	左下前臼歯	RM <sub>2</sub>	RP <sup>a</sup>			
	LM <sup>a</sup>	左上前臼歯		LM <sup>a</sup>	RM <sup>a</sup>	RM <sub>2</sub>	RP <sub>1</sub>	LP <sub>1</sub>	LM <sub>1</sub>	LM <sub>2</sub>	RP <sup>a</sup>		
				RM <sup>a</sup>			RP <sub>1</sub>		LM <sub>2</sub>	RP <sup>a</sup>			
				LM <sup>a</sup>			LM <sub>1</sub>		LM <sub>1</sub>				
				RM <sup>a</sup>					LM <sub>2</sub>				
				LM <sup>a</sup>									
計	2	2	1	6	2	2	4	2	5	3		29	
発生部位の要約		上前後臼歯		M <sup>a</sup>		M <sub>2</sub>			M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>		上前後臼歯		

附表40 県下5遺跡出土馬歯における奇形発生率

時代	奇形発生数	出土点数	発生率%	備 考
奈良時代	2	9	22.2	5遺跡は国分寺中間地域、
平安時代	4	197	2.0	日高、三ツ寺 田、下東西、
中 世	6	140	4.3	田福遺跡
中世一近世	2	37	5.4	
中世一近代	2	20	10.0	
不 明	13	115	11.3	
計	29	518	5.6	

備考 現代馬の奇形発生率1.5% (馬歯66中M<sup>a</sup>後小窩後小円槽1)

巾率について既往の出土馬歯との比較を見ても良く分かるが、国分寺中間地域出土の馬歯の齒冠巾、巾率が既往の出土馬歯の齒冠巾、巾率とほぼ同じになるのは、いいかえれば全国レベルに達するのは近世に入ってからのことである。

(5) 近世

中世以降は出土個体数が少くなりはっきりしたことが分からなくなってくる。ただ中世～近代に21個体出土しているが、その平均年齢は9.0±6.8才 (n=6)、平均体高は127.8±7.6cmで、平均年齢から見ると、平均年齢は中世より下ってきているが平和な時代の馬の平均年齢であると考えられる。平均体高は少し大きくなり改良のあとを示していると見て良いであろう。

4 県内5遺跡の出土馬歯における奇形発生状況

(1) 奇形の発生率

県下5遺跡における馬歯の出土点数は518点である。そのうち咬合面の内外エナメル膜における奇形の発生状況は附表41に示すとおりである。出土馬歯における奇形の発生数は附表41に示すとおり29点であり、奇形の発生率は5.6%である。出土馬歯に破損が多く、また奇形発生馬歯そのものの例数が少ないため時代別の奇形の発生率等については納得の行く数値が得られなかった。

(2) 奇形の種類別発生数

奇形の種類別発生数は附表39に示すとおりである。最も発生数の多いのは後小窩の後に発生する小円槽の6 (1.1%)で次いで下次小窩、小内窩が連珠状を呈するもの5 (0.9%)、下次窩が乳房状を呈するもの4 (0.8%)の順である。

発生部位の要約では中附歯が細くして低い奇形の発生部位は上前後臼歯で、後小窩の後側が陥入したり、小円槽や小袋槽を発生する部位ではM<sup>a</sup>である。下次小窩、下内窩が連珠状を呈する奇形の発生部位はM<sub>1</sub>～M<sub>2</sub>

である。

附表41 県下5遺跡の出土馬歯における奇形発生状況

国分寺中間地域遺跡、日高遺跡、三ツ寺III遺跡、下東西遺跡、田端遺跡

出土遺跡名	No	部位	時代	奇形の発生状況											奇形の概要	
				中副齶山形	中で副齶細く	後側小窩窩入の後	後小凹窩の後	後小窩窩の後	entostylid 舌側へ湾曲	下副齶小窩乳	下副齶状	下副齶状	下内齶小窩球下状	永換久り歯異常生え		
国分寺 中間地域	741	右上後臼歯 中副齶	奈良時代		○											極めて細くて低い 巾2.6、高2.0、前面三角形
#	743	左下前歯下 後副齶	#										○			乳房状を示す
#	43	RP <sub>4</sub>	平安時代									○				乳房状で舌側に伸びて いる
#	802	LM <sup>2</sup>	#			○										後側外部エナメル嚢内 部に陥入し小凹槽を作 る
#	833	RM <sub>2</sub>	#							○						entostylid 大きく舌端 舌側に湾曲す
#	983	RP <sub>4</sub>	#							○						乳房形で乳頭舌側に湾 曲している
#	670	LP <sup>2</sup>	中世	○												三角形に突出し特異な 形を示す
#	356	RM <sup>2</sup>	#					○								楕円形でやや細長く台 形を示す
#	382	LM <sup>2</sup>	#					○								#
#	437	RM <sub>2</sub>	#							○						下次小窩極めて大きい
日高	日高 19	LP <sub>3</sub>	中世										○			乳頭先端やや長い
下東西	下東西 37	LM <sub>2</sub>	#					○								馬歯全体小さく、小凹 槽も小さい
三ツ寺III	三ツ寺 9	LM <sup>2</sup>	中世-近世							○						外部エナメル嚢内部へ 陥入し、小さなキノ子 状槽を示す
#	三ツ寺 18	RM <sup>2</sup>	#							○						後小窩の後側大きく狭 状に分かれ、その間に 外部エナメル嚢やや細 長く陥入す
国分寺 中間地域	90	LM <sup>2</sup>	#					○								楕円形で小さく、やや 三角形を示す
#	229	LM <sub>2</sub>	#							○						乳房状に後に突出す

出土遺跡名	No.	部位	時代	奇形の発生状況										奇形の概要		
				中附歯山形	中て附歯細く	後側小窩の後の	後小円高槽の後の	後小袋槽の後の	小袋槽	舌側へ湾曲	下唇状小歯乳	下唇後附歯乳	下内歯小歯下状		永換入り歯異常え	
#	698	RM <sup>a</sup>	不明				○									小形円形を示す
#	704	LM <sup>a</sup>	#				○									#
#	709	RM <sub>2</sub>	#										○			下次小歯大きい
#	714	LM <sub>1</sub>	#										○			#
#	715	LM <sub>2</sub>	#										○			#
#	710	RM <sub>2</sub>	#						○							先端舌側に湾曲
#	730	LM <sub>1</sub>	#										○			下次小歯やや大きく下内歯とひょうたん形をなす
#	731	LM <sub>2</sub>	#										○			下次小歯後へ突出し下内歯とひょうたん形をなす
#	970	左上後臼歯中附歯	#	○												極めて細くて低い。巾2.4、高1.0
#	1007	RP <sup>a</sup>	#											○		永久歯萌出直後のままの姿で短い
#	1008	RP <sup>a</sup>	#												○	歯冠長はやや長いが歯冠高短い
#	1009	RP <sup>a</sup>	#												○	歯冠巾著しく小、各歯しなびて発育不明瞭
#	1043	LM <sup>a</sup>	#	○												低くて山形を示す

## (3) 奇形の発生している馬歯を有する馬の大きさ

馬の大きさ別の奇形の発生率は附表42に示すとおりである。馬の大きさ別の発生数は大形馬8、中形馬7、小形馬14で、小形馬における発生数が最も多かった。歯は前後の歯から圧迫が加わると圧迫の加わった部分が自然に消滅するなど自在な性質を持っている。M<sup>2</sup>における後小窩の後の小円槽は、M<sup>2</sup>の後側のエナメル膜が前側のエナメル膜に比べて著しく狭いので後側のエナメル膜が余り、一部が小円槽や小袋槽になったりするように思われる。小形馬の馬歯は中形馬や大形馬に比較すると内部エナメル膜は極めて単純で、小窩の両耳部（凹形の展開部）など中形馬や大形馬では美しい縮毛状波形を示しているのに比べて小形馬では単純な凹形を示し、なるべく内部エナメル膜の形を単純化して小さな馬歯の中に内部エナメル膜を納めようとしているので、どこかに無理が生じて奇形となって現れる機会が多いように思えてならない。

## 5 県下5遺跡における牛の時代別出土個体数

県下5遺跡における牛の時代別出土個体数については附表43に示すとおりである。出土個体数67個体のう



附表42 5遺跡における奇形発生馬歯を有する馬の  
大きさ

時代	大形馬	中形馬	小形馬	計
奈良時代			2	2
平安時代	2	2		4
中世	3	3		6
中世—近世			2	2
中世—近代		2		2
不明	3		10	13
計	8	7	14	29

ち出土個体数の最も多いのは平安時代の30個体(44.8%)で、次いで中世の21個体(31.3%)、奈良時代—平安時代5(7.5%)の順である。

一般的に見ると、① 中世以降は出土していないこと、② 古墳時代より少数づつ出土し、平安時代から中世にかけて急激に増えていること、が特徴的である。

平安時代の急激に出土数が多くなっていることについては、やはりこの時代は大和朝廷の蝦夷経営における兵馬の供給基地としての目的を果たすために、食糧の確保と、食糧及び武器の輸送とに必要な牛の増殖が急速に行われたものと考えられる。また中世においては馬に理解の深かった中世武士が自分の管内の農業を振興し武力を蓄えるため牛の増殖にも力を入れたであろうことは想像に難くないことである。中世以降他の動物の歯・骨が出土しているにもかかわらず牛の歯・骨が出土していない理由については後に詳しく述べることとする。

なお中世以降の具体像に関しては多くの絵巻が伝存されており、絵中にある馬・牛の姿を引用しつつ具体像の究明に努めたい。特に馬・牛の大きさ、体形、気性等については文言だけでは仲々理解し難い箇所もあるので絵巻のほか例を引用してそれを示した。

附表43 県下5遺跡における牛の時代別出土個体数  
及び出土数

時代	出土個体数				計
	日高	下東西	田端	中興地城	
弥生時代					
古墳時代				3	3
古墳時代—奈良時代				4	4
古墳時代—平安時代					
奈良時代		1		2	3
奈良時代—平安時代			5		5
平安時代	1		6	23	30
平安時代—中世					
中世	3		1	17	21
中世—近世					
中世—近代					
近世					
近世—近代					
近代					
不明				1	1
計	4	1	12	50	67
出土点数	4	13	33	162	212

## 第5節 考 察

### 第1項 時代別の上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達

時代別の中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達の年齢及び大きさについては附表28に示すとおりであるが、これらの馬達の年齢及び大きさについて今少し掘り下げて考えて見たい。

#### (1) 古墳時代

上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下中間地域と略称する）の北東1.5kmの地点に総社古墳群が群在している。総社古墳群には大形冢形石棺を伴う60～80m級の古墳時代終末期方墳の愛宕山古墳と宝塔山古墳が存在し、被葬者は上毛野を治めた大首長豪族であるという。上野国では古墳時代には大和政権の皇宗と近従の豪族がこの地域を治め、大和政権の東路の防衛線として重要な地位にあった。整理担当者によれば、ここ中間地域における古墳時代は終末期古墳の盛行と時期を同じくする7世紀代に盛期があり、前代から4世紀頃までの間の遺構、遺物の存在は極めて薄く、また遺跡の所在地は発掘された集落の一部と遺物から見て総社古墳群を営んだ人々と有縁でその掌握地域内であったという。従って遺跡の盛行期との関連からは出土した馬歯・馬骨がその頃と直接関連を持っていた可能性があるということである。

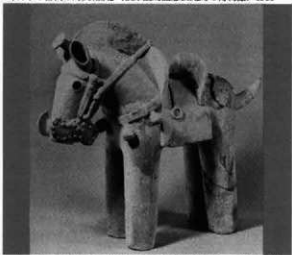
附表28に見られるとおり古墳時代出土の馬歯・馬骨は4例に過ぎなかった。古墳時代に属する馬歯・馬骨が4例存在すると言っても大部分は短冊状に割れ、年齢を判別出来るものは僅かに1例であって、その1例の年齢は5才であった。また大きさの判別出来るものは2例であってその2例の大きさは体高130cm及び135cmである。この130cm及び135cmと言う体高は中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達の中では大きい馬に属しており、上毛野の中核地域で飼育されていた馬にふさわしい優れた馬であったと考えられ、具象化しているといえぬ輸馬の形態とは別の駿馬像が想起される。古墳時代の優れた馬姿像は5世紀代ではあるが県内の古墳時代有力首長館址とされた群馬郡三ツ寺I遺跡居館の濠から出土した馬歯・馬骨があり、宮崎重雄(注22)によれば「1号馬はこれまで、群馬・長野の両県から出土した13個体の歯列長のどれよりも長く、当時としてはかなり大きい馬で、名馬として聞こえた個体であつたらう。大きい馬は飼料代がかさむし背に荷を載せにくく、農民には敬遠されていたと思われるから、経済的にゆとりのある居館居住者あるいはその関係者により乗用又は兵馬として飼養されていたものであろう。」と述べている。三ツ寺I遺跡出土の馬歯の中でNo1号馬は測定値より推定すると体高148cm(144～152cm)、現代馬で言えばアラビヤ馬に相当する程の駿馬であり首長豪族の持ち馬として恥づかしくないものであつたと推定される。宮崎によれば、三ツ寺I遺跡から出土している馬の遺存体は臼歯10、肢骨2、計12、個体数は2～4個体である。No1号馬=年齢6～7才、大形馬、No2号馬=年齢壮令の中でも高令な馬、大きさ不明、No3号馬=年齢若い方の壮令馬、大きさ不明、No712前肢基節骨=年齢不明、体高101.5cm小形馬、であると言う。宮崎が述べているように2～4個体として考えて見ると、4個体の場合は三ツ寺I遺跡、中間地域を通じて年齢を判定出来るものは4個体である。4個体中3個体(75%)は壮令の中でも若い馬であり、1個体(25%)は壮令の中でも高令なものである。また大きさを判定出来る4個体については、3個体(75%)が中形馬～大形馬であり、1個体(25%)は小形馬(101.5cm)である。また仮に、三ツ寺I遺跡出土の馬の遺存体が2個体とした場合は、年齢については3



1 鳥取県平所遺跡出土埴輪馬 古墳時代  
体の各部の釣合いが良い  
『日本の古代の馬文化展』(柳井誠馬記念公園馬の博物館) 1981



2 茨城郡八郷町神岡出土埴輪馬 6世紀  
体全体が細身で高い  
『はにわの世界』(長野市立博物館) 1982



3 群馬県太田市電舞塚廻り第4号墳出土埴輪馬 6世紀前半  
馬姿Ⅱ型  
『群馬のはにわ』(群馬県立歴史博物館) 1979



4 群馬県佐波郡堤町出土埴輪馬 6世紀末～7世紀初頭  
馬姿Ⅰ型  
『群馬のはにわ』(群馬県立歴史博物館) 1979



5 群馬県太田市高林出土「人が乗る探馬」埴輪 6世紀中葉～後半  
馬姿Ⅲ型  
『群馬のはにわ』(群馬県立歴史博物館) 1979

第805図 埴輪馬の形

第805図 埴輪馬の形

森 浩一によると関東地方の埴輪馬は関東以西の埴輪馬に較べると体が細くて高く、馬具や馬装も簡略化されているということである。群馬県の大部分の埴輪馬は、体が細くて胴も短く、すらっとしている。特徴的なことは頭と股が細く、四肢が集まっているので尻が後突き出ているように見え、やや貴弱な感じにするところである。ただこのように体が細くて丈が高い感じの埴輪馬は千葉県の大塚古墳や茨城県八郷町神岡から出土した埴輪馬にも見られることなので関東地方の共通した特徴であると考えられる。これと対照的なのが鳥取県平所遺跡出土の埴輪馬で、頭は軽く、胴の長さも充分で、尻の幅もあり、脚は軽く誠に乗馬らしい馬である。群馬県出土の埴輪馬を分けると3つのタイプに分けられる。Ⅰ型は写真4佐波郡堤町出土の埴輪馬を始め群馬県の大部分の埴輪馬がこれに属していて、顔や股が細く丈が高いように見えるものである。Ⅱ型は写真3太田市電舞塚廻り古墳出土の埴輪馬に見られるように、胴の長さこそやや短い感じがするが、体各部のつり合いは良く、やや太目で群馬県の埴輪馬としては重量感があふれている埴輪馬である。Ⅲ型は写真5太田市高林出土の人が乗っている探馬の埴輪に見られるような一見素人加工とも思える素朴な埴輪馬で、顔から股まで円筒で作ったかと思われる埴輪である。

個体中2個体(66.7%)が5~7才であり、1個体(33.3%)は牡合の中では高令である。大きさについては4個体中3個体(75%)が中形馬~大形馬で、1個体(25%)は小形馬(101.5cm)である。上記のように三ツ寺1遺跡出土の馬の遺存体が2~4個体であると考えた場合、三ツ寺1遺跡並びに中間地域出土の馬の遺存体のうち古墳時代に属するものは、年令については66.7%~75%の個体が牡合の中でも若い馬に属し、25%~33.3%の個体が牡合の中でも高令に近い馬である。また大きさに関しては、75%が中形馬~大形馬であり、25%が小形馬である。後述の中世で詳述してあるが、改良が個々の飼養者にまかせられていた中世においては中間地域の馬達は時代の進むにつれて全体が融合して改良方向、例えば大形化の方向に進むのではなく、大形馬もいれば小形馬もいると言った具合に「常に大、小混在する形」で改良が進められている。附表48中間地域出土の馬達の体高分布表に見られるとおり、体高120.1cm~125cmの階級に最大値(21.9%)が見られるが、それを除けば115~140cmの間の各階級にほぼ同じ程度の個体数が分散しているのが見られ、小形馬である120cm以下の階級に属する個体が28.6%いる。このことから考えると、古墳時代の馬のうち25%が小形馬であることは、三ツ寺1遺跡、中間地域における古墳時代の馬の改良増殖が個々の飼養者の判断にまかせられていたことを示しており、大形馬、中形馬、小形馬が全体に占める割合も正常なものであり、この2つの遺跡における馬の繁殖と育成が或る程度永い年月行われたことを示している。

埴輪馬については西中川 駿の調査(注23)によれば、全国の埴輪馬の出土数は297個であり、そのうち群馬県内の出土数は65個で全国の21.9%を占め、2位の千葉県35個を遙かに抜いていると言うことである。森 浩一は著書「馬」(注24)の中で、「千葉県山武郡横芝町鉅塚古墳の馬形埴輪は和歌山市岡崎井辺八幡山古墳の馬形埴輪にくらべて体軀が全体に細くかつ高い。馬具や装備も簡略化され関東地方のこの時期の馬形埴輪を代表すると見てよい。」と述べている。森 浩一は千葉県の埴輪馬について体軀が細いと述べているが上野国の埴輪馬はどうであろうか。上野国の埴輪馬には時代や製作上の差はあるかも知れないが、それを形質的に見ると3類型ある。1つは佐波郡東村雷電神社古墳出土No.1(高123cm古墳時代)、No.2(高116cm古墳時代)埴輪馬に代表されるもので、体全体がやや細いのが特徴であり、細かく言えば顔が細く、胴が浅く(胴の上下の長さが少ないこと)、股の後への張り出しが少なく、四肢がやや集合している。2つ目は太田市竜舞塚廻り第4号墳出土埴輪飾り馬(高86cm、6C前半)、同(高70cm、6C前半)で、この2つは飾り馬であるので大きな鍔枝や鞍及び降泥等の飾り付けがあることも美しさを引き立てることに役立っているが、頸も太く美しい屈撓を示し、四肢も太く、体全体の釣り合いも良いものである。3つ目はその中間であって太田市高林出土埴輪「人の乗る裸馬」(高71cm、6C中葉~後半)で、一寸見ると素人細工のように見えるが、全体が円筒状を示し、額及び鼻袋は丸太状で太く、胴は円筒形で巻き上がっている。以上の3つのタイプを述べたが大部分はI型を示し細形のものである。これに反して島根県平所遺跡出土埴輪飾り馬(高さ不明、古墳時代)は体の中に富み、頸は軽く、胸は深く(上下の長さが長いこと)、尻は水平に近く中に富み、四肢は軽やかで、少し背位置の低いことを除けば体全体がいかにも乗馬らしい釣り合いをもっている。県内出土の埴輪馬は殆どI型であり、I型に属する主なものは次のとおりである。(注25)○頭及び胴細くやや足長なもの、佐波郡埴塚町出土埴輪馬(高99cm、6C末~7C初)、太田市成塚出土埴輪飾り馬(高114cm、6C末~7C初)、藤岡市白石出土埴輪馬(高120cm、古墳時代)、邑楽郡大泉町出土埴輪馬(高、時代不詳)、○頭細く四肢やや集合していて、やや足長なもの、佐波郡東村東小保方東村第7号墳出土埴輪馬(高121cm、7C初)、佐波郡赤塚村下触出土埴輪飾り馬(高98.5cm、6C末)以上のことから森 浩一が関東の埴輪馬は体軀全体が細く、かつ高い(足が長いということ)と述べていることは概ね群馬の埴輪馬にもあてはまり島根県平所遺跡等の埴輪馬と比較すると体軀が細く多少見劣りすることは避けられない。このように埴輪馬を形質上から見ると

差があり、造形上の均整観は馬の実態を僅かではあっても反映していると考えられる。そのため考古学に携わっておられる方々に投合復元や記録、観察の際特に注意をお願いしたい視点である。現状では僅か4個体の上毛野の馬の実態しか把握出来なかったことは誠に残念なことであった。

中間地域出土の古墳時代の1例が5才で死亡した原因については、はっきりしたことはわからないが、この馬の馬歯がB区北部を北西から南東にかけて走る小さな4溝の底面に近いところから出土しているの、或は祈願祭事に供されたことも考えられる。

## (2) 奈良時代

附表28に見られるとおり奈良時代に属するものは僅かに1例に過ぎなかった。この1例は、年令4才、体高110cmであり小形馬の中でも小さい馬であった。この1例が小形馬の中でも小さい馬であったと言うことは、古墳時代と平安時代を結ぶ重要な時代である奈良時代の馬が小さかったと言うことではなく、前述のとおり日本の馬の改良は「常に大きな馬もいれば小さな馬もいる」といった「常に大小混在する」形で改良が進められているので、この奈良時代に属する馬の1例がたまたま小さい馬であったと言うことに過ぎない。特に奈良時代は律令制による機構編成によって古墳時代からの伝統的な馬の飼育や改良にもなんらかの質的变化があったはずであり、その意味では過渡的に重要な変換点の時代であるが残念ながら1例では形質上に触れることは出来ず、真の姿を知るためには更に資料の蓄積を計る必要を痛感した。

## (3) 平安時代

### ① 中間地域の持つ性格から見た馬の年令分布

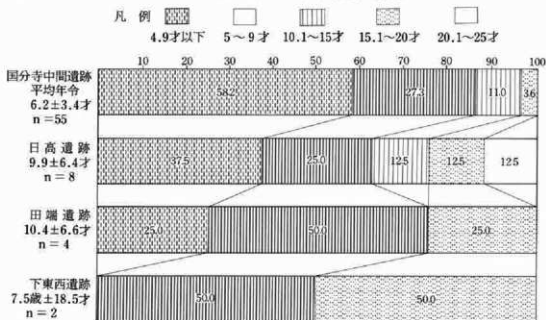
整理担当者によれば奈良時代は上野国分二寺が建立される前後から集落の再編成があり、集落は二寺の活動と直結するようになったが、それが平安時代全般を通じて言えるのかどうかは目下検討中とのことである。住居跡はその後11世紀頃まで続いていると言う。このため平安時代に属する時代と判定した馬歯・馬骨は9世紀から11世紀頃までの幅の広い時間帯の中で捉えざるを得ない。

また中間地域の立地は隣接する上野国府や公の鍛冶工房を有する鳥羽遺跡などがあり、言うならば上野国の中枢施設の置かれた地域の中にあつた。このような訳で中間地域の持つ性格は既報の日高遺跡や、田端遺跡とは対照的で公の力が強かつたであろうと思われる。

日高遺跡における平安時代の年令分布は第806図に示すとおり平均年令は9.9±6.4才(n=8、範囲4才~21.4才)であり、4.9才以下が37.5%を占めている。今5才以下で死ぬことを幼年死、5.1~7才で死ぬことを若年死、7.1才~17才で死ぬことを壮年死、17才以上で死ぬことを老年死と呼ぶこととする。中間地域のような上野国の中枢施設が置かれ公の力の強かつた地域と比較して民の力の強かつたと思われる日高遺跡における馬の平均死亡年令の区分は壮年死であり、中間地域の平均死亡年令の区分が若年死であったことは対照的であった。また中間地域では幼年死が58.2%を占めていたが、日高遺跡では幼年死は37.5%で低く、また中間地域では老年死が1例もなかつたが、日高遺跡では老年死が25%見られた。

同じく中間地域と比較して民の力の強かつたと思われる田端遺跡では平安時代の馬の年令分布は第806図に示すとおりであるが、平均年令は10.4±6.6才(n=4、範囲3.8~18.5才)で壮年死である。内訳を見ると幼年死は25%で、中間地域の幼年死が58.2%であったことと比較すると遙かに低く、また老年死について

第806図 平安時代における遺跡別出土馬歯馬骨を有する馬の年令分布の変化



注 日高遺跡における15.1～20才、20.1～25才は夫々17.5才である  
下東西遺跡における15.1～20才は18.5才である。

は中間地域の0に比較して田端遺跡では25%見られる。このように田端遺跡の平均年令は3つの遺跡の中で最も高かったが、これは幼年死が少なく、老年死が25%見られるほか5～10才が50%を占め比較的安定した飼養がなされていたことを物語る。

下東西遺跡は調査担当者によれば7世紀末～8世紀頃の上毛野氏と有縁または血族と見られる豪族の居館跡が調査され、その竪穴住居跡群は平安時代に継続されるということである。従って出土している馬歯・馬骨は階層社会の上級に位置する人々が飼育していたと考えられる馬の馬歯・馬骨が出土している。附表45～50及び第806図に示すとおり、僅か2例ではあるが7.5才及び18.5才の馬歯・馬骨ということになる。このように下東西遺跡では幼年死が無く、5～10才が50%を占め、また老年死が50%を占めており、中間地域の幼年死が50%を占め、老年死が皆無であったことと対照的である。

このように4つの遺跡を通覧すると平安時代には中間地域のように国の中枢機関の所在地であって公の力の強かった地域においては馬の平均死亡年令は若年死であり、幼年死が50%を越え、老年死が0であった。これに対して民の力の強かったと思われる日高遺跡及び田端遺跡においては平均死亡年令は壮年死を示し、中間地域に比較して幼年死の比率が小さく、老年死が25%を占めていた。また階層社会における上級の人々が居住していたと思われる下東西遺跡においては幼年死がなく、老年死が50%を示していた。このように出土馬歯・馬骨は遺跡の性格や特徴をそのまま反映した形での結果が得られたことになる。

② 中間地域における平安時代の特異な平均年令と、北海道における現代馬の平均死亡・廃用年令との比較

第806図に示すとおり中間地域における平安時代に属する馬の遺存体を有する馬は73例であり、そのうち年令及び大きさを判定出来る馬の平均年令は6.2±3.4才(n=55)であり、平均体高は128.7±9.6cm(n=41)

附表44 日高遺跡における出土馬歯・馬骨を有する馬の年齢分布表

年代区分	時代	平安時代	中 世	計
4.9才以下		3例, 37.5%		3例
5~10才		2例, 25.0%	1例	3例
10.1~15		1例, 12.5%		1例
15.1~20		1例, 12.5%		1例
20.1~25		1例		1例
25.1以上				
計及び平均年齢		8例, 9.9±6.4才	1例, 8.8才	9例, 9.8±6.1才

#### 日高遺跡の特徴

日高遺跡の154号溝から22点の馬歯・馬骨が出土した。

154号溝は灌漑水路として機能し、9世紀後半頃に埋没した大溝で、馬歯・馬骨は東縁の集落側からもたらされたとの推定がなされている。集落の位置は上野国府推定地より南方約1.2kmにあり、しかも古道の国府道に東面する位置関係から、一部には公の影響を受けているが、一部には出土の瓦や土器から推定されるように村落内小寺院を有する私的な集落活動が考えられ、集落像に公と民との両面の性格を合わせてもつ形が想定されている。なお設定した模式歯・骨は「日高馬A平安」及び「日高馬B平安」である。

附表45 下東西遺跡における馬歯・馬骨を有する馬の年齢分布表

年代区分	時代	奈良時代 ～平安時代	平安時代	中 世	計
4.9才以下				1例, 16.7%	1例
5~10才			1例, 50.0%	4例, 57.1%	5例
10.1~15				2例, 28.6%	2例
15.1~20	1例		1例, 50.0%		2例
20.1~25					
25.1以上					
計及び平均 年齢	1例, 20才	2例, 7.5, 18.5才	7例, 8.2±2.6才	10例, 9.4±7.2才	

#### 下東西遺跡の特徴

下東西遺跡は7世紀代における上毛野氏の基盤地帯の一角にあり、発掘調査では7世紀末～8世紀頃の土毛野氏と有縁または血縁と見られる豪族居館跡が調査され、遺構に楕円柱建物群と区画、変形または大形竪穴住居跡を含む竪穴住居群が見られ、その竪穴住居跡群は平安時代に継続するという。出土馬歯・骨は、奈良時代屋敷外馬淵から願骨が、馬歯・馬骨は奈良時代および平安時代の遺構から10点が出土している。ここでは出土の背景を履歴社会の上層に位置する人々の私的な生産活動の所産として捉えたい。なお設定した模式骨は「下東西牛A奈良」がある。

である。この6.2±3.4才と言う平均年齢は1時代の平均死亡年齢とすると極めて短く、何等かの凄まじい外力の消耗が加わらなければこのような低い平均年齢は考えられないことである。

現代馬の平均年齢は馬の飼養頭数が激減している現在ではなかなか把握出来ないが、附表47現代馬における死亡・廃用年齢は北海道農業共済組合連合会が昭和63年4月～平成1年3月の間に農業共済に加入している競走用馬、農用馬27,747頭についてその死亡・廃用状況を調査したものである。加入頭数の殆どはサラブレッド種及びアングロアラブ種で、競走用の目的で繁殖育成しているものであり、残りの殆どはベルシュロン種のような農耕用または鞍曳用（ハンエイヨウ）の目的で繁殖育成しているものである。ただ農耕用及び鞍曳用の目的で繁殖育成された馬の多くがグルメブームにより肉用に供する目的で購買されて行くことはテレビ等で報ぜられているとおりである。馬は青草のみで太る力は牛よりも優れており、赤肉生産用の家畜としては極めて効率の高いものであるが、このことも馬の肉用化に拍車をかけている原因の一つである。北海道における現代馬の死亡率は1.73%、死亡・廃用を入れても死亡・廃用率は2.56%で予想外に低いものであった。死亡・廃用馬の約7割（27.1%）が2～3才の時に死亡・廃用されていることは、一部には能力の不足から競走用馬を除外される馬もあると考えられるが、大部分は肉用の目的で廃用されていることを示している。12才以上に再び約7割（29.3%）が死亡・廃用されているが、年齢の上昇と共に繁殖率の低下すること、更に高い能力の繁殖用雌馬と入れかえるために（10年前に雌馬を購入したときより更に一般の競走馬の能力が高

附表46 田端遺跡における出土馬歯・馬骨を有する馬の年令分布表

時代 年令区分	奈良時代 —平安時代	平安時代	中世	計
4.9才以下		1例, 25.0%		1例
5~10才	1例, 50.0%	2例, 50.0%	1例	4例
10.1~15	1例, 50.0%			1例
15.1~20		1例, 25.0%		1例
20.1~25			1例	1例
25.1以上				
計及び平均年令	2例, 5才、11才	4例, 10.4±6.6才	2例, 8.47、20.3才	8例, 8.3±6.0才

## 田端遺跡の特徴

田端遺跡の地は和銅4年(711)に建都された多胡郡内の山寺郷にあり、そして同郷は天平10年(738)、宝亀11年(780)の記事に見える法隆寺封戸にはほ誤りない史的背景が存在するという。発掘調査では7世紀終末に存在した田端廣寺(推定片岡郡名寺院)の隣接地と8世紀以降の集落が調査されている。牛歯・骨は奈良時代の推定井戸跡などから推定個体が、馬歯・骨は平安時代住居跡から24点出土している。法隆寺の封戸としてどのくらいの時代まで下るかはおそらく出た出土牛歯・骨は封戸であった段階の可能性が高い。馬歯・馬骨については、平安時代の集落内容が、公の影響よりも民的な活動の下での展開と考えられているので、馬歯・馬骨の所産の背景を本稿では民の有様を示す例として扱いたい。なお設定した模式骨は「田端牛A産食—平安」である。

附表47 現代馬における死亡・廃用年令  
昭和63,4~平成1,3

年令	死亡頭数	死亡利用率	備 考
2才以下	65頭	9.2%	北海道農業共済組合連合会
2-3才	192	27.1	農業共済加入頭数 27,747頭
4-5才	55	7.8	種類 2/3サラブレッド、アン
6-7才	65	9.2	グロウラブ、1/3ベルシロン等
8-9才	64	9.0	重種
10-11才	60	8.4	死亡頭数 479頭
12才以上	208	29.3	死亡率 1.73%
			死亡・廃用頭数 709頭
計	709	100.0	死亡・廃用率 2.56%

附表48 出土馬歯・骨を有する馬の体高分布表

体高区分	時 代		
	平安時代	中世	中世—近代
100.1-105cm		2	
105.1-110	6	5	1
110.1-115		5	
115.1-120	3	9	
120.1-125		16	3
125.1-130	17	13	2
130.1-135	6	12	4
135.1-140	5	10	1
140.1以上	4	2	
計	41	74	11

まってきたるために) 廃用になって行くものと考えられる。この表から見ると現代馬では繁殖馬からの除籍の下限が12才ということに思われるが、このことについて延喜式(注26)によると、繁殖用雌馬の除籍は20才とされ、また第2次大戦前の軍馬が華やかであった頃は12才と言う繁殖用雌馬は繁殖用馬の中では中堅と目される馬であったことから見て時代の流れをつくづくと感じさせるものがある。ただ2~3才を除けば各クラスとも死亡・廃用頭数が殆ど同数を示しており、北海道における馬飼養技術の高さを現すものとして賞賛に値することである。これに反して中間地域における平安時代に属する馬の年令分布は第806図に示すとおりであり、4.9才以下58.2%、5~10才27.3%、10.1~15才11.0%、15.1~20才3.6%と年令の上昇とともに極度に急カーブを画いて減少して行くことも飼養技術以前に大きな問題が存在していることを示している。

また附表47は死亡・廃用頭数を示すものであり、特に2~3才で廃用と思われる頭数が多く、また12才以上が一括されているため、死亡年令を把握することが出来ないが、現在の推定平均年令は5~7才と考えら



附表49 日高道跡における出土馬歯・馬骨を有する馬の体高分布表

年代区分	時代	平安時代	中 世	計
95.1~100cm				
100.1~105				
105.1~110		2例, 20.0%		2例
110.1~115				
115.1~120				
120.1~125				
125.1~130		1例, 10.0%		1例
130.1~135		2例, 20.0%		2例
135.1~140		4例, 40.0%	1例	5例
140以上		1例, 10.0%		1例
計及び平均体高		10例, 112.8±11.97	1例, 140cm	11例, 135.4±11.5cm

附表50 下東西道跡における馬歯・馬骨を有する馬の体高分布表

年代区分	時代	奈良時代 -平安時代	平安時代	中 世	計
95.1~100cm					
100.1~105					
105.1~110					
110.1~115					
115.1~120			1例, 50.0%	1例, 16.7%	2例
120.1~125					
125.1~130				2例, 33.3%	2例
130.1~135			1例, 50.0%		1例
135.1~140		1例		3例, 50.0%	4例
140以上					
計及び平均体高		1例, 140cm	2例, 120.1, 135cm	6例, 133.4±7.4cm	9例, 132.8±7.3cm

れる。従って中間地域における平安時代の平均死亡年齢と殆ど同年令と考えられる。現代馬については馬肉需要の急激な上昇と、経済効果を高めるための繁殖年限の短縮とが馬の平均年齢を引き下げているが、中間地域における平安時代の馬達については現代と同じような馬についての何等かの凄まじい消耗が行われていたものと考えられる。

③ 一時代の馬の平均死亡年齢が若年死を示す場合とその理由

上記のように一時代馬の平均死亡年齢が若年死を示す場合を想定して見ると、

- ㉞ 現代のように肉用需要が急激に増大したとき。
- ㉟ 信仰でと殺したり、祭祀に用いる目的で他の若馬の死体から馬歯・馬骨を採取し大量に持ちこんだとき。
- ㊱ 馬の取り扱いが悪く公用馬を酷使して大量に若令死させたとき。
- ㊲ 戦闘その他公用のため徴発し壮令馬以上の馬がいなくなったとき。  
等が考えられる。
- ㉚ については「巻二十九天武天皇四年四月の條」「日本書紀」に、「牛馬犬猿之穴（シシ、肉のこと）を食う莫（ナカ）れ」との詔が出されており、その後数度にわたり食肉を禁ずる旨の詔が出されていることから、一時代の大部分の馬が若くして肉用に供されたとは考えられない。
- ㉛ 信仰及び祭祀の問題については、いかに信仰上のためとは言え、このように結果的ではあるが大量の若馬をと殺し、または他の地の若馬の死体から大量の歯・骨を持ち込んできたとは考えられない。
- ㉜ 馬の取り扱いが悪く、公の馬を酷使し、若馬の間については死に至らしめたと言うことについては、確かに駅馬のように乗り手が代わるような場合は無責任な取り扱いを受けがちだと言うことは考えられ

附表51 田沼遺跡における出土馬骨・馬骨を有する馬の体高分布表

体高区分	時代 奈良時代 —平安時代	平安時代	中世	計
95.1~100cm				
100.1~105				
105.1~110				
110.1~115				
115.1~120			2例	2例
120.1~125	1例, 50.0%			1例
125.1~130	1例, 50.0%	1例, 50.0%	2例	4例
130.1~135		1例, 50.0%		1例
135.1~140			1例	1例
140以上				1例
計及び平均体高	2例, 120.9, 126.2cm	2例, 126.1, 133.6cm	10例, 125.3 ±7.7cm	10例, 125.9 ±6.5cm

## 〔軍団所属の馬の規模〕

中間地域は上野国の軍団推定所在地の前橋市大友町から西方2kmの地点にある。〔群馬県史 第1巻〕(注27) 堀田璋左右によれば「諸国には大抵五、六部毎に一軍団を置く、我上野国の軍団は、群馬に在りしもの外は詳ならず」とあり、上野国には少なくとも1つの軍団はあったと考えられる。軍団の規模については、堀田によれば「男子20才以上60才以下を正丁とし、正丁の総数の約半を徴して、一軍団を編成す。故に各軍団は兵数を同せず。依てこれを3等に分ち、1,000人満つるを大、600人以上を中、600人未満を小とす」とある。上野国の軍団の人員は何人であったか不明であるが、ただ「巻第三四 元慶二年七月一日」〔日本三代実録〕に「上野押領使権大掾南河秋郷等上野国見討兵(新しく到着した兵、この場合出発時とほぼ同数の兵と見て良いであろう)六〇〇余りを率いて秋田河南に屯(たむろす、駐屯する)す」とあり、また「巻三五 元慶三年三月一日」に藤原朝臣保明が戦況の進まないことを奏上した中に「臣等賜りし諸国の兵は一八〇〇余人、上野、下野両国各八〇〇人、陸奥国の追還(ツイカン、追われて帰ってきた)せる散卒(サンソツ、戦に負けてちりぢりになった兵)二〇〇人」とあるので、当時は既に辺境の地以外の諸国の軍団が廃止されているが、東北の蝦夷経営上重要な地にある上野国としてはそれに代るべきものが存在したことは想像に難しくない。

軍団所属の軍馬の数であるが「軍防令 軍団大殺條」〔令義解〕に、「凡そ軍団の大殺は一〇〇〇人を領(リョウ、ひきいる)せよ」とあり、また「兵士為火條」に「凡そ兵士は一〇人を一火(カ)と為(セ)よ。火別(各々の火)に六の駄馬を宛よ(あてよ、割り当てよ)」とある。軍団所属の軍馬の数について栗田 寛(注28)は「凡そ軍行に従ふときは一〇人に六駄馬とあれば(中略)一団に六〇〇匹の馬を備ふべし」と述べており、全国の軍団所属の軍馬の頭数を計算し「当時天下諸国の軍団数は總計131ヶ所であって兵士総員は12万9,100人であるといへば、之に属する馬数は7万7,460頭となるべき筈と、馬の多かった実況察するに余りあ

るが、この時代は、「律逸文、乘駕官馬牛條」〔厩庫律〕に「凡そ官馬牛に乘駕して、背を破り、領(クビ)を穿(ウガ)たば、創二寸は若(ムチ、罰)に用いる竹のむち)二〇、五寸以上は若五〇」とあるように、馬の損耗に対する処罰は極めて厳しかったので国府を中心とした中枢機関の人々が多くの馬を若年死させる程の悪い取り扱いをしていたとは考えられない。

このように考えてくると中間地域における平安時代に属する馬が若年死をしている原因には③を除いては考えられない。8世紀~9世紀には上野国は蝦夷経営に対する兵馬の供給基地であったが、中間地域はその中枢である国府に隣接し、上野国の兵馬の供給の中心的機構に接し、自らも兵馬の供給を全面的に担ってその生産力の中で馬を飼育していたであろうことを前提として考えて行かねばならない。検討を加えるについて上野国の馬の背景を考えたい。

りと言わねばならない」と述べている。栗田の計算によれば1軍団所属の馬は平均591.3頭となるが、このような多数の軍馬が配属されていたかどうかについて橋本 裕(注29)は「古代軍制と騎馬兵力について」[律令国家の構造]の中で、軍団制騎兵隊が果たして軍防令にいうように実際に編成されたかどうかについて「征夷政策に見られるように東國の軍団の中にはかなり多数の騎兵を確保しえたのではないかと推測している。」と述べている。このように軍防令に言っているように多数の軍馬を配置し得たかどうかについては、兵馬の供給基地であった上野国としては多数の馬が戦闘に参加するため蝦夷地に出動したことは橋本が「かなり多数の騎兵を確保し得たのではないかと」と述べていることでも推測されることである。

東北の蝦夷地に多数の馬が参加していることは「巻一二 天平二年三月一日」[続日本紀]に大野朝臣東人が多賀柵から色麻柵を経て出羽国大室駅に進出した際、「騎兵一九六八、歩兵四九九八、当国兵五〇〇〇人、帰服狄俘二三九八人を師(ヒキイ)していたことが記されてある。また「巻三三 元慶二年」[日本三大実録]に、藤原朝臣興世が秋田城で大敗した際「甲冑三〇〇領、米桶(コメホシイ)七〇〇石、衾(フスマ、夜着)一〇〇〇條、馬一五〇〇匹、盡(コトゴトク)賊の取る所と為(ナル)る」と記されている。このように上野国としては栗田が試算しているような軍防令にのっとった多数の軍馬が生産され、また出動したかは別として上野国で可能な限りの馬を徴発して軍の装備を整える努力を惜しまなかったであろうことは想像に難しくない。

#### 〔新馬〕

軍団に編入される馬の年令は、「巻二八 兵部省 諸国牧の條」[延喜式]に、「諸牧馬五、六才、牛四、五才。毎年左右馬寮に進めよ」とあり、馬が公用馬に編入される年令は5〜6才であった。戦前軍馬は軍馬補充部において馬具の装着や、一応の使役するのに必要な簡単な乗馬訓練を施されて各部隊に補充されていた。しかし、補充されたばかりの若い馬は驚きやすく、とても古馬(以前から軍隊にいる馬)と一緒に隊伍を整えたり、荷物を駄載させたり、砲を曳いたりなど出来るものではない。馴致(ジュンチ)もしないで古馬同様の要求をすれば周囲の環境や人を恐れて癖馬になり、ひいては戦闘を敗北に追いこむことになるので1〜2年の間は新馬として経験の積んだ古参兵がやさしく訓練を行って1人前の軍馬として仕上げて行くものである。前述のように公用馬編入の年令が5〜6才であり、中間地域における平安時代の平均死亡年令が6.2±3.4才であるとする、これらの馬は新馬である。このように多くの馬が新馬のまま死んで行った理由はいかなる理由であったのであろうか。

上野国から軍隊が東北の蝦夷地へ出動する際に問題となったと思われることは、①、軍隊の規模として考えられている軍馬の頭数を確保するには生産が追いつかなかったと思われるので、不足分は生産された次第後日補充したであろうと思われること。②、新馬では困ること。③、出動した後蝦夷地での戦闘及び警備の間に戦死・廃用した馬の補充と、上野国から出動した部隊の食糧や兵器の補給を継続して行わなければならないこと。等であろう。従って新馬を戦場へ連れて行くことは死を意味することになるので、何とかして新馬を連れて行くことを避けるため、国司としても国府その他中枢機関で飼育していた古馬を部隊に配属させ、留守機関は自ら新馬を用いたことであろう。また、軍隊の規模として考えられている軍馬の頭数にはとても生産が間に合わなかったであろうし、戦場で死亡・廃用になった軍馬の補充、食糧の補給運搬のためにも、その後生産された馬を引き続き蝦夷地に送ったであろう。その時はまた国府その他中枢機関で馴致調教済みの古馬を出動させ、自らはまた新馬を飼育し馴致調教をくりかえしたであろう。このように馬の補充が継続的に行われたであろうことは、中間地域の平安時代に属する馬の平均死亡年令が6.2±3.4±(n=55)であっ

たことがこの間の事情を如実に物語っているのではなかろうか。

〔軍隊の糧まつ（リョウマツ、兵糧と軍馬の飼料）〕

馬の飼料は別としても、兵士の食糧だけでも膨大な数量に達するが、「巻四〇 恒武天皇 延暦八年六月九日」[『純日本紀』]に、出羽国の5,000人の兵が蝦夷軍の包囲を受けて敗退したとき征夷将軍が奏上したことに、**「膳沢の地は賊奴の奥区である。(中略) 臣等遠く攻めんと慾すれども玉造の塞(サイ、とりで)より子波地までは往還24日の程(テイ、みちのり)なり、途中賊に逢(アツ)て相戦い、及び雨に妨(サマタ)げられて進まざるの日は程の内に入らず。河陸両道に輻重(シチョウ)一二四四〇人、一度に運ぶ所の糧(ホシイ)六二一五斗。征軍二七四七〇人、一日食う所は五四九斗なり、此をもって支度するに一度の運ぶ所、僅かに一日を支う。(中略) 征兵を割(サキ)て輻重に加ふる時は則ち(スナワチ) 征軍の數少なくして征討するに足らず」と記されている。このように1万2,000人余りの輻重が苦心して運んだ食糧は2万7,000人余りの兵士の僅か11日分の食糧にしか過ぎないと言うことである。この食糧ですら兵が腹一杯食べられる量ではなく、1日1人当たり僅かに2合弱の量である。このように食糧の必要量がいかに膨大で、その輸送にいかにも多くの人手を要したかがわかる。古代の東北の軍団が耕作しながら守備をする屯田兵的なものであったとしても戦乱の中では満足な収穫を得られる筈はなく、また戦乱の中で8世紀から9世紀にかけて何度となく上野国を始め、坂東、東海、東山、北陸等の農民を移住させたことも軍団その他の食糧確保の目的もあったことと考えられる。ただこれとても農業技術が低く、育種が農民の手にゆだねられ、対寒性品種の育種も進んでいない状態の中でどれ程の収穫が期待出来たか危ぶまれてならない。そのため、「巻四〇 恒武天皇 延暦九年三月二九日」[『純日本紀』]に「東海は相模国以東、東山は上野以東の「東山上野以東」の諸国に勤し、軍糧の糧(ホシイ)一四万斗を乾しとのえしむ。蝦夷を征せんがためなり」とあるように、東北の戦國に必要な食糧は膨大な量であるだけに大部分は東海、東山等の諸国で準備しなければならなかったと考えられる。中央政府はこの膨大な食糧の確保と輸送に大変な苦心と努力を払っており、次に示すように兵糧を献ずるもの、兵糧を輸送したものにはその量に応じて位が授けられている。「純日本紀」の中で、「巻三二 光仁天皇 宝亀四年二月一日」に「出羽国の人正六位上吉弥候部の大町に外従五位を授く、軍糧を助くるを以てなり」。「巻三六 光仁天皇 宝亀一年八月一日」に「越前の国の人従六位大荒木の臣忍山に外従五位下を授く、兵糧を運ぶを以てなり」。「巻三六 光仁天皇 天応元年一〇月一日」に「尾張、相模、越後、甲斐、常陸等の國人、総て二人、私力をもって軍糧を陸奥に輸送す。其の運ぶ所の多少によって位階を加授す」。「巻三七 恒武天皇 延暦元年五月三日」に「陸奥国の人安倍信夫の臣麻呂等軍糧を献ず、外従五位下を授く」等が記されている。このようなことから食糧の確保と補給には想像以上に力をそそいでおり、蝦夷地に近い上野国としては上野国から出動して行った部隊の軍馬や兵糧の不足に苦しんでいるのを見越さず管がなく、上野国司や留守を預かる原隊の指揮官は何としても馬や食糧の補給を続けるべく努力したのに違いない。そのため前述のように補充部隊には国府や中樞機関で馴致調教した古馬を与え、国府や中樞機関は常に新馬を馴致調教しながら政務を行っていたと考えられるし、また当然中間地域としても飼育していた馬をそれに参加させたであろうし、結果的に出土した馬歯・馬骨の年令分布の中に若令を越えた馬が少ない理由もそこにあると考えられる。**

〔中間地域における平安時代に属する出土馬歯・馬骨を有する馬の大きさ〕

附表28に示したとおり平安時代に属する馬の大きさは $128.7 \pm 9.6\text{cm}$  ( $n=41$ ) である。この大きさは中間

地域における出土馬歯・馬骨を有する馬の一時代の平均値としては大きいものである。中央政權としては上野国に九牧を置き、或は種雄馬を配置するなどの馬についての基本的な改良施策をとり、また国司、牧監は自ら陣頭立って馬の改良の指揮をとるなど統制のとれた改良と繁殖に努めた結果平安時代が中間地域における出土馬歯・馬骨を有する馬達の一時代の平均体高としては最も大きい体高を示したものと考えられる。また「源政令 牧馬付軍団條」[令義解]に、「凡そ牧の馬はまさに乗用に堪うべくは、皆軍団に付けよ」とあり、補記に「体骨強壯でやや乗用に堪うべきもの也」とあるので、この地で生産された馬の中で体骨強壯な優れた馬が公用馬、軍馬に編入されていたことも平均体高の大きい理由の一つであろう。

蝦夷地へ出動して行った馬は下野国を経て那須野原を横ぎって北上し、陸奥国へ行くと言う正規ルートを通って行った馬もあったと推定されるが、中には源 義家が通ったと伝承されている尾瀬附近の道を通り、標高1,700mの帝釈山脈を越えて陸奥国へ出動した馬もあったと考えられる。筆者はその行軍状況と似た体験をしたことがある。筆者は第2次大戦の時中国湖南省の標高1,700m～1,800mの雪嶺山脈での戦闘(注54)に参加した。雪嶺山脈にかかると中国軍は道路を破壊しながら後退して行った。筆者は標高は低いし、日本の軍馬は7～8年間中国のクリークにかかる細い(幅約30cm)石橋等を通過することに慣れており、人の通れる所ならばいかなる道でも通れる、と信じ切っていたが、しかし雪嶺山脈にかかると、始めの1～2週間は毎日のように馬が谷底に落ちて行くのに大変あわてもし、信じられないような驚きを感じた。馬は前後の方向の地形の変化には強く出来ているが斜めの方向に働く力には弱く、山腹を斜めに走っている悪路で足を踏みはずした場合は体位を元にもどし難い弱点を持っている。大きな、巾の広い馬程足を踏みはずしやすいので、前述のとおり上野国の馬達のように歯冠巾のやや狭い、体のやや細身形質をもつ馬達は帝釈山脈を越えて蝦夷地へ行く時には大変な威力を発揮したのに相違ないと考えられる。主人のために重い荷物を背負って黙々と山坂を越えて行く上野国の馬達の姿が目に見えようである。

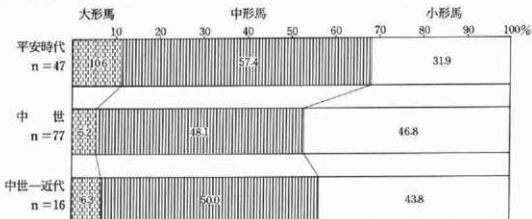
弘仁式、延喜式、令義解、続日本紀等の馬に関する古代の公式文書、記録の中における上野国の馬達は決して検舞台の上にあつたとは考えられなかった。しかし東北の蝦夷経営においては指揮官の中に上野国に関係ありと思われる指揮官が多く見られたので、当然上野国の馬達もその指揮官に従って東北に出動して行ったと推定される。上記のように中間地域における平安時代の馬達の平均年令が低かったことや、公式記録の指揮官の中に上野国ゆかりの人達と推定される指揮官が多かったことから考えると、蝦夷地に出動した上野国の馬達は公式記録を遙かに越えた数であったと考えられ、蝦夷経営における上野国の馬達の功績は公式記録以上のものがあつたと考えざるを得ない。

#### (4) 中世

##### ① 中間地域における中世に属する出土馬歯・馬骨を有する馬の年令と大きさ

中世に入ると出土個体数は急進的に増加し、時代別に見ると中間地域では最大の出土個体数を示している。平均年令は $13.0 \pm 7.9$ 才( $n=30$ )で各時代を通じて最も高い年令を示しているし、また1時代の平均年令としては極めて高い数字である。この時代の中間地域は上野における有力武士として頭角を現しはじめた長尾氏の居住城下であり、馬揃えとしては多様な大きさの幅の広さが考えられ、比較上はまさに好条件となっている。整理担当者によれば、調査区内において14世紀代に小溝を囲繞させた館状の遺構が確認され、15世紀代には小見麻寺と仮稱された長尾氏ゆかりの氏寺の出現を見、中間地域での中世の盛行期がそこに認められると言う。そして16世紀後半には中世の営みはほとんど停止していたという。したがって中世の馬歯・馬骨の所産は中世中頃から後半にあると推定される。そのため級別としては階層社会の上部にいる人も存在し、

第807図 中間地域における出土馬歯・馬骨を有する馬の体高区分による時代別比率の変化



注 附表 17により体高区分判定可能個体を集計した。

血縁・郎党なども考慮すると、それ以下の版の人達も多かったと考えられる。

中世は日本の歴史の中で最も馬を可愛がった時代で人馬一体となって歴史が展開したと言っても過言でない。馬の墳墓が見られるのもこの時代以降であり、このことだけを見ても中世の人々がいかに馬を可愛がったかと言うことを知ることが出来る。

この時代の平均体高は $125.1 \pm 9.2\text{cm}$  ( $n=74$ ) で平安時代より馬は小さなものとなっている。林田重幸が鎌倉市材木座で中世の馬骨128例を調べた結果鎌倉馬の推定体高は $109\text{cm} \sim 140\text{cm}$ の範囲内でその平均体高は $129.477 \pm 1.030\text{cm}$ であることを明らかにしており、大形馬が存在する点は当然ながら小形馬が10数%含まれていたことは、中世都市鎌倉に於て飼養されていた馬が戦闘の巻き添えとなったと考えられるよりも、小形馬といえども愛馬をいかなる戦闘においても手放さなかった武士がいたように思えてならない。また中間地域の馬歯・馬骨の所産年代に近い例として埼玉県行田市本丸にある関東7名城の一つである忍城跡(注30)の堀の最下層から15世紀後半に属する馬の頭蓋骨1点、鳥の腰骨1点、不明骨4点を始め、第2次調査により堀の最下層から犬、鹿、鳥、その他数10点の獣骨が出土している。忍城は沼に囲まれた平城であるため第1次調査の際出土した馬の頭蓋骨の遺存状態は、写真で見える限りにおいては極めて良好で、最大長は $56\text{cm}$ であるということである。ただこの堀は15世紀後半に作られているが、この堀には数度にわたる橋がかけられている。第1回目の橋は15-16世紀に作られているがその橋の脚部材が頭蓋骨の右顔後部附近を打ち抜いているのが残念であるが、この頭蓋骨の属する年代を示している。この最大長を林田の体高推定公式に当てはめると、体高は $147.7\text{cm}$ と推定される。この馬は当時とすると大きい、諸領15,000貫、将兵1,000騎の家臣(2代目長泰の時の諸領)を抱える戦国大名としての成田親泰が力を外に誇示するとしたならその所有の馬としてふさわしいものであったと考えられる。いずれにしても、鎌倉攻めに参加した馬や、忍城跡出土の馬はエリートであり、一般の馬はそれより小さかったことは当然であると考えられる。

## ② 中世における出土馬歯・馬骨を有する馬達の体高が小さくなった理由

この時代にはもはや朝廷による統制のとれた馬の改良は行われなくなり、馬の改良は個々の飼育者の努力によって行われていた。個々の改良がいかに効果の少ないものであったかはサラブレットの改良を見ても良くわかることである。野村晋一は著書『サラブレット』(注20)の中で、イギリスが紀元前一世紀にローマによって占領されて以来貴族達は私財を投じてヨーロッパやアジア、特にアラビヤから多くの良馬を輸入して

改良に努めた。しかしこれらの努力もイギリス全体の馬の改良には殆ど効果がなかったと言うことである。サラブレッドが良くなったのは近々200年の間のことであつて、1711年にイギリスで最も有名なアスコット競馬場が落成し、1725年に「競馬成績書」(注31)が出版され、公的な血統登録制度が完備されてからであると述べていることから家畜の改良がいかに難しいものであるかと言うことがわかる。要するにイギリスで行われたサラブレッドの改良は各繁殖家が自分の好みに応じて勝手に雄馬と雌馬とを交配させることではなく、競馬という一種の能力検定方法で能力検定を行い、その結果を競馬成績書で一般に公表し、各繁殖家はその成績に基づいて最も速力の早い雄馬と最も速力の早い雌馬とを交配させるように努力したと言うことのように、極めて単純明解で科学的な形で行われ、それが名種サラブレッドを生み出す基本であつた。

中間地域の中世の馬は平均体高が平安時代の馬の平均体高より小さくなっている。そのことについて、この地域の馬がなぜ平安時代より平均体高が小さくなってしまったのか仮説をたてて考えてみたい。

- ・中世は戦乱の時代であり、大きい馬を守備や合戦のために他の地域に出動させたことによる。
- ・農民が飼料を余り食べない小さい馬を好んだので小さい馬が多くなったことによる。

等が考えられるが、「守備や合戦のため大きな馬を他の地域に出動させた」ことについては、東北の蝦夷経営のときのように国をあげて長い間抗争が行われた場合と異なり、中世の争いは各地で散発的に、断片的に行われたので、中間地域の馬歯・馬歯が出土した約150年の間継続した形の守備や合戦に出動していたとは考え難い。また林田が調査した鎌倉馬は体高109~140cmの範囲の馬であつた。見るからに名声を博したであろうと思われる体高140cmの馬に伍して体高109cmの馬に乗っていた武士はどんなにか肩身の狭い思いをしていたであろうか、と考えると必ずしもそうではなく、馬の大小は持ち主の資力の問題もさることながら武用や使役に使う場合など目的に則した価値感の問題であり、武士団の頭領は大きい馬に乗っていたとしても、下級武士といえども小さい馬ばかりに乗っていたとは考えられないのである。またこれに続く仮説の「農民が飼料を余り食べない小さい馬を好んだので小さい馬が多くなった」と言うことについては、その領地を治める武士達が馬の大きさについてどのように考えているかを知る必要があるが、「第1巻、第5編、第2章、室町幕府時代」「日本馬政史」(注32)に武田信玄が家人を集めて馬についての意見を求めたとき、横田備中守、小幡山城守、多田淡路守は何れも、「軍馬の寸幹長大を有利」と主張したが、横田備中守の申し分として、「五寸余り(四尺五寸余り)の大馬に乗りたる敵に一寸、二寸(四尺一寸、四尺二寸)の小馬に乗っては、いかに覺の人成共(おぼえのひととなりとも、腕に自信のある人でも)その敵を組みふせることは成まじく候。(中略)我等の所存には軍馬場(いくさばうま)には大馬にこすこと御座あるまじく存じ候」と述べている。このように領地を治める武士達が軍・武用として大きい馬の生産を奨励したと考えられる時代であつたので、農民は大形の馬を供出し、好むと好まざるにかかわらず農民は小形の馬を使役したことに外ならない。

これらのことから考えても中世の馬の平均体高が平安時代の馬の平均体高より小さくなったことは合戦や農民の好みと言った問題ではなく、やはり前述のように各繁殖者が各自の資力や価値感に基づいて別々の目標に向かって交配した、と言った改良上の問題が結果的に生産される馬の平均体高を左右したものと考えられる。

### ③ 中間地域における平安時代から近世に至るまでの馬の改良上の特徴

#### ア 中間地域における時代別馬の大きさの分布状況

中間地域における時代別の大きさの分布状況は附図109に示すとおりである。平安時代から中世一近代に至

るまで、大形馬は全体の5.2%~10.6%、中形馬は48.1%~57.4%、小形馬は31.9%~46.8%である。(この場合中世一近代の16例は中世一近世1例、中世一近代13例、近世1例、近代1例の成績を集計したものである)。今ここで軍・武用の目的で大きい馬が必要で、大きいことが改良目標であったとすると、常識的に考えると時代の進行とともにその地域の馬は次第に大きくなるものと考えられるが、中間地域においては平安時代から中世一近代に至るまで、大ざっぱに言えば大形馬、中形馬、小形馬の比率は大差がなく、いつの時代にも同じ比率であったと言うことになる。中間地域においては時代とともに全体が融合して次第に大きくなるということではなく、いつの時代にも常に大小混在する形で馬の改良が進められていたが、このことは中間地域ばかりに起こった現象でなく改良や進化の過程では常識的なことである。それでは何故いつの時代にも常に大小混在する形で改良が進められてきたかと言う原因を考えてみたい。

イ 日本の馬の改良を阻(はばむ)んだ最も大きな障害

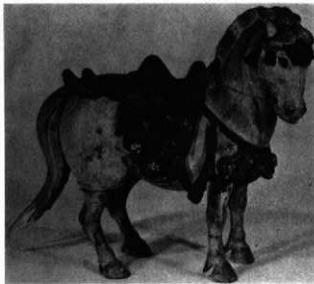
日本の馬の改良を阻んだ最もおおきな障害は去勢が行われなかったことである。欧州、東アジア、中国、朝鮮を始め東南アジアですら家畜の改良の有力な手段として去勢が行われて来たが日本では、「第3巻、第6編、第3章江戸幕府末世期」『日本馬政史』によると文化5年、仙台藩において実験馬を用いて去勢(割辜と記載)が行われたことが記載されているが、一般に去勢が行われるようになったのは明治34年4月馬匹去勢法が制定されて以来のことである。去勢は馬の改良と飼養管理上欠くことが出来ない手段であるのに、また古代から中国、朝鮮と交流があったにも拘わらず日本に去勢の技術が輸入されなかったのはやはり仏教の根底概念である生に対するあわれみの情の影響が最も大きいと考えられ、また今一つには米が主食で、肉を主

第808回 馬の改良進まず

この木馬は鎌倉時代の作であって神馬として神社に奉納されたものである。良く中世の馬の姿を表現している。1は重要文化財に指定されているだけあって2つの木馬の中では特に中世の馬の姿を良く現わしている。頭は体の頸には大きく、頸は厚くて短かく、脚は浅く(上下の長さが少ないこと)、尻は丸くて貴弱である(尻の傾斜が強く尻の長さが短い)、四肢は集合姿勢をとり、後の飛節から下の折り込み強く(曲飛という)ややX状姿勢を示している。2の木馬は上体の欠点が修正されている代りに股が短くて地盤く(体の低いこと)で後肢の曲飛が目立っている。これらの欠点は馬の改良が個人個人の飼育者の意志にまかされていたような改良方式の中では改良効果は殆ど現われず、1、2の木馬に見られるように良い馬もいれば悪い馬もあるし、また大きい馬もいれば小さい馬もある、と言った、常に大・小、良・不良混在する形で改良が進められた。(圖が箱形であるのも在来馬の特徴でもある。)



1 木製馬形 頭大きく、尻小さく、後肢折り込み深い  
『繪馬』(法政大学出版局)岩井宏実1974より。鎌倉時代  
広島・厳島神社



2 木製馬形 体は重く、尻短かく、後肢折り込み深い  
『繪馬』(法政大学出版局)岩井宏実1974より。鎌倉時代  
滋賀・兵主大社

第808回 馬の改良進まず





1 聖徳太子の像を拝むえみしの図  
佐々木利和「羅語大明神絵詞」朝日百科日本の歴史9—蒙古襲来  
1986、佐々木氏挿入の上宮寺本『聖徳太子絵伝』より、鎌倉時代



2 弓馬の合戦 騎馬団による弓矢の戦い。前方への騎射  
『蒙古襲来絵詞』「日本の絵巻13」(中央公論社)小松茂美ほか1988  
より。鎌倉時代

#### 第809図 中世弓馬の合戦

写真1は鎌倉時代末期の作で額夷(えみし)を表現した唯一の図とされている。風貌豊かでもいかに額夷らしい4人がひざまずいて合掌した姿が画かれている。服装としては毛皮または鹿の羽の肩当てをしていて(寒さを防ぐためで、毛皮と鹿の羽は東北地方の特産である)、長靴をはいているところが珍らしい。武器としては半弓と鏝(ぼこ)と矢筈を持っている。弓は鎌倉時代では武將が常用しただけであるが、図中の額夷は4人のうち3人までが半弓を持ち、額夷の主要武器が半弓であったことを示している。鏝は鎌倉時代以後は儀礼に用いられていたが、図中ではなお実戦用として用いられている。矢筈は矢全体を包蔵する特殊な形を呈し、当時の武士達が胡蝶(ころう)や雁(えびら)を用いたのとは異なり額夷の武装の一端が伺われる。写真2は蒙古襲来の折肥後国竹崎末長軍が苦戦に陥入り、後陣の白石六郎等が駆けつけて、手に手に矢をつがえて突入するところで、これは前方騎射の例である。写真3は後三年の役の折、新 義家の部下末割四郎が清原武衛軍に突入する時の図で、これは後方騎射の例である。馬の斑毛は改良の進んでいない種馬の馬に多く見られる毛色である。斑毛は古代中世の牛についても見られるところである。また騎射のときは手綱は鞍に固定するが腹巻を履まなければ出来るものではない。被打っている手綱に注意



3 後方への騎射 馬は全鬃に近い。馬は肥後改良を示す  
『後三年合戦絵詞』「日本の絵巻14」(中央公論社)小松茂美ほか1988  
より。南北朝時代

#### 第809図 中世弓馬の合戦

#### (3) 古代中世の馬・牛の蹄壁欠損について

古代中世の馬・牛が蹄壁欠損をおこしていたかどうかについてこれを知り得る機会に恵まれていないため、絵巻その他で推察するだけである。

第2次大戦中華者は蹄鉄不足から「はだし」の馬で毎日乗馬訓練を受けていた。馬は蹄鉄をはずして土の上を歩かせると次第に蹄が硬くなり蹄壁欠損が少なくなると聞かされていたので、それを信じて毎日乗馬訓練にいそしんだ。残念ながら馬の蹄が硬くなったことが確められる前に戦地へ行ったのでその結果を知ることが出来なかった。乗馬訓練を終えたとすぐに馬からおりて蹄壁欠損の状態を調べるのが日課であった。蹄壁欠損を起していることに気がつくすぐに鏝(やすり)をかけて蹄の修正と欠損の予防に努めた。研究室では先輩達が断片蹄鉄(蹄壁欠損を起しやす蹄の前と横の3ヶ所に小さな鉄片をつける)等の研究が進められていたが重い馬の体重によりそのような小さな鉄片は1日ともたずにはずれてしまうのが常であつて、代用蹄鉄の開発は夢で終わった。

絵巻の解説の中で「蹄壁欠損を起していない馬・牛を絵巻の中で見出すことは骨が折れる」ことを述べたが、絵巻の中では数種の絵巻が蹄鉄欠損をしていない馬・牛を画しているが、何故に蹄壁欠損が画されなかったのか考えてみた。次にその推測した理由を述べる。

#### ① 蒙古襲来絵詞

この絵詞には蹄壁欠損が画されていない。この絵詞は文永・弘安二度にわたる元寇に取材するもので、これに従軍した肥後の後家人竹崎季長が軍功により肥後国の地頭職に補せられその神恩に報ずるため自ら参戦の様子を画工に画かせ宇佐大名神家の宝前に描入したものである。もともと蹄壁欠損は管理不十分により起るものとされており馬にのるものとして誰に恥づべきことであるので専長としても蹄壁欠損のような恥づべき有様を画工に画させることは避けたのではあるまいかと考えられる。

#### ② 法然上人絵伝

この絵伝には蹄壁欠損が画されていない。この絵伝は浄土宗の開祖法然上人の一代の行状を絵巻にしたものである。この絵伝は後伏見天

皇の勅命により比叡山功徳院の辨昌が著作し、訓書きは伏見、後伏見、後三條天皇の 筆をはじめ尊円法親王、三條実重ら八人の寄合書きであるという。または当時の宮廷の給所合作で土佐理隆ら四人の筆と伝えられる。この給伝のように三人の天皇や親王が自ら手を下して作られたものであるだけに宮廷給所として御筆欠損のような生々しい姿を画くことを意識的に避けたのではあるまいかと考えられる。

以上のように給書その他に御筆欠損が画かれていない場合は夫々何か意識的に避けた方がよいと思われる理由があったものと推測される。

(4) 鞍馬(えんま)を描いた部分について

8世紀から9世紀にかけて大和政権が東定の順興経営にいかにか苦しんだかということは経日本記、日本後記等によって伺い知ることが出来る。附表280年代別馬の年令及びたきさに見られるとおり平安時代の中間地域出土の馬齒・馬骨を有する馬の平均年令は6.2才(10=5)であり、一時代の馬の平均年令としては極めて若いことを述べたが、馬の平均年令の若い原因については後の考察の項で詳しく述べるが、今その原因の主なものをおあげれば、

- ・上野国から多くの兵士達が馬と共に東北に出勤し、その数は公式記録以上のものであったと想像されること。
- ・国司や出勤した兵士達の属する原隊の長としては上野国から出勤した部隊に対して歴史的に養馬や馬の補給を続けていたと想像されること。
- ・そのため国府を始め中継機関に所属していた職政調教の古馬を出勤させ、国府を始め中継機関では引続き若馬を調教しては歴史的に東北に補給していたと想像されること。

等である。

① 戦争の継続期間がそのように長かったかどうかという点。

このことについて清水潤三は「蝦夷の文化とその振興」[史学第二十五巻 第三号] (注45)の中で「奈良朝の初頭に於ては信白平野の南端に近い雄鷹平に軍団が置かれたに止るが、神亀年間に多賀城を築き、色麻、玉造、北庭、新田の諸郡を前進地視地として漸く信白平野一帯を制圧するに至ったらしい。次いで北上川下流域では天平字二年に桃生城に遷出、山地に渉るには神皇正統記二年信白平野北西端の伊治城を宮造するに及び若手原城附近に遷した。続く延暦の征討によって衣川を越えることが出来、膽沢城が築かれ、ほぼ時を同じうして志波城に遷り、弘仁年間に至って熊鷹城、磐伊附近に前線を推進し得たのである。かくして六国史の最末期に至り、漸く若手背嶽原附近に中央の勢力が及んだのであって、信白平野からここまで実に百年を要している。蝦夷との境界線の北方への移動が明瞭であって、史上に現われたエミシとの接觸は実にこの境界線を中心に行われたものである。(中略)しかも職調教を命じられ前線より遠く後方の多賀城が古蹟されたり、秋田城が長年互って放棄された事実が見られる」と述べており職調教が長年にわたり断絶し続いたことが良くわかり、平安時代における阪東各県の国府及び中継機関が常に新しい若馬を職政調教しては東北に補給を続けていたであろうことがわかった。

② 官軍が何故に苦戦を強いられていたか。

官軍が何故に苦戦を強いられていたかと言うことについては第1に馬と弓が考えられるが、それにもまして重要なことは蝦夷の力の増大であるが、このことについて清水潤三は同書の中で「宝亀以後エミシの判乱が規模となり朝廷の国力を削ぐては征討も屢次失敗に帰するに至ったのは全くエミシの人口増加、団結力の強化と共に文化の灌漑、経済力の発展をその根拠に見出すべきである」と述べている。

③ 蝦夷の武器

蝦夷の使用する武器は弓矢が主であるが、それについて清水潤三は同書の中で「対夷戦闘の状況を換すると統紀延暦八年六月三日衣川の戦に於て官軍の戦死二五、矢に当たるもの三四五、箭死者一、〇三六とあって箭死者を除く戦傷者の悉くが敵のものと思われる。(中略)その伝説は遙か後代に及んで遺矢の猛威と結び「エゾの射矢」として貨幣と興味の的となっている。また背旗大明神絵詞に「彼等が用いる所の箭は鳥骨を鏝として毒塗をぬりわがりに皮膚にふれりてその人斃すと云事なし」と述べている。また骨鏝を用いることについては「骨鏝の鏝が皮等の間に古骨を透して一般の透ったことが知られているが骨鏝が毒塗を塗る調等を射すのに便利なり」と述べている。なお骨鏝を用いては「正倉院展」1986 (注46)に10数本の骨鏝の写真が掲載されている。骨鏝は細長く鏝の基部は四角形で先にくいて従って薄くなっている。鏝の両側に溝溝がついている。

また矢羽には腰の強い鷲の尾羽が最高とされているが「重修本朝事草三十三部家禽 動物部十二 鳥五」[故事類聚 動物部] (注47)によれば「鷲(わし) 鷲の尾を以て箭羽とす和漢共に上品とす。本邦にては(中略) 尾の羽の和十枚以上あるものを大鳥といひ矢に用いるに上品とす」とある。森森兵衛は「吾手巻の歴史」の中で「円隆寺の本尊は聖徳太子の刻むもの、その礼物は弓金一〇〇、箭、鷲羽一〇〇、風、七品間中一木杓の皮六〇枚、安達絹一、〇〇〇疋、(中略) 鞍部の鞍馬五〇匹、(中略) このほか山海の珍物をそめてもたらす、生美類を船三艘につみ、船頭を三艘に配してえたものである。」と述べており、文化というものがいかに得難く、いかに高価なものであるかと美言をしようされるが、いずれにしても鷲の尾羽が礼物の筆二にあげられ、また一〇〇疋文と云うその数にまた当時東北地方にいかにか鷲が多く生息していたかを知ることが出来る。「日本武勲観」に「れば矢羽には鷲、鷹、鶴、鳥等を用いたと云うことである。

④ 蝦夷の風貌について

蝦夷の風貌について清水潤三は同書の中で「性重集、源政大明神繪詞、或は氏輝記などの記載は悉く彼等の多毛を特徴とし、その目のくぼんだ状を寫し南部根原記の松前アイヌを表現した「深目長鼻」の語と一致している」としている。

食として食べる必要がなかったためであると考えられる。肉を始め畜産物を生産して生計をたてるには、改良目標に従って繁殖用として今迄以上に生産性の高いものを残し、肉用・役用にするものを去勢して、計画的に生産、と殺を行い、そうしなければたちまち群の能力の低下と頭数の激減をまねき畜産経営を破局に追い込むことになるので、去勢は畜産経営には絶対不可欠な手段であった。

前述のように平安時代には上野国に9牧が置かれ、また「尾張国正税帳」に見られるとおり中央より上野国に種雄馬が派遣されるなど中央政権が基本的な馬の改良施策をとり、また国司、牧監などが自ら陣頭に立つて馬の改良の指揮をするなどの統制のとれた改良増殖に努めた結果、中間地域出土の馬齒・馬骨を有する馬

達の平均体高は一時代の平均体高としては最も高い平均体高を示していた。それにも拘わらず中世に入ると、中間地域における馬の平均体高は一時代の平均体高としては低いものとなっている。このことは一種の改良上の停滞であり、また後退を意味している。中世において上野国で仲々馬の改良が進まなかった根本原因を筆者の村巡り獣医の経験を基に考えると、繁殖農家戸毎に、或は近所に交配に使用出来る雄がいた場合には、繁殖農家はあえて他に優良雄馬を求めなければならない必要性は無かったものと考えられる。しかしそうは言っても中世において繁殖農家は良い種雄馬を交配しなければならないと言うことは充分に承知していたと考えられるので、中には遠く優良雄馬を求めて交配した人もいたと考えられるが、大部分の繁殖農家にとつ

## 第810図 牛の大きさ

改良目標に示されている現代黒毛和種の平均体高は127cmである。上坂章次(注17)によると「昔の和牛は雄が平均体高115~117cm、雌で123~125cmぐらいで、前脚らで役用タイプであった」と述べている。現代牛との体高の差は種か10~12cmに過ぎないが、馬の場合は体高160cmの現代大形馬と体高90cmの小形の在来馬との体高の差が70cmもあるのと異なり、絵を見て牛の大小を判断することは困難である。写真2の牛は雄牛でそれ程雄大な姿ではない。写真1と3は太っているが体の長さがない。現代牛の雄の特徴は長大であるが、この2期の雄牛は長大な感じがなく、それ程大きい牛ではないと考えられる。また写真4は雌牛であって哺乳中の子牛と比較して小さい感じがするので余り大きい牛ではあるまいと考えられる。母牛のやせた姿と比較して子牛の内付が中位い程度であることに何か変わった気がする。



1 闘争する雄牛 体の長さが短い  
『鳥獣人物戯画』『日本の絵巻6』(中央公論社)小松深美ほか1987より。平安時代中期~後期



2 目つきの悪い雄牛 頭から肩までが短い  
『鳥獣人物戯画』『日本の絵巻6』(中央公論社)小松深美ほか1987より。平安時代中期~後期



3 闘争する雄牛 体の長さは余りない  
『鳥獣人物戯画』『日本の絵巻6』(中央公論社)小松深美ほか1987より。平安時代中期~後期



4 哺乳中の母牛 子牛に比べて小さい  
『鳥獣人物戯画』『日本の絵巻6』(中央公論社)小松深美ほか1987より。平安時代中期~後期

## 第810図 牛の大きさ

て「良い種雄馬」とは「自分または近所の農家の所有する雄馬の中での良い種雄馬」を意味していたと推察され、極めて狭い範囲の中で一番良い雄馬を交配していたものと考えられる。そのように「自分または近所の経営」内で種雄馬を選ぶ場合色々な弊害が起こってくると考えられるので今その弊害について考えて見たい。

〔近親交配による弊害が起こりやすいこと〕

僅かな飼養頭数の時代であったので近親交配になる恐れがあった。近親交配の弊害は誠に大きく、日本ホルスタイン登録協会の調査(注33)によれば、近交係数25%(父・娘交配)のとき生産された娘牛の能力は年間泌乳量について545kg少なくなり、1才の時の体高は2.4cm低くなり、また死亡率は150%高くなるということであった。

〔1回の交配による改良の期待値は小さいこと〕

現在日本の乳牛は家畜改良事業団に繋養されている能力検定済の種雄牛の凍結精液によって人工授精を受けている。その能力検定済の種雄牛を交配し、その娘牛の年間泌乳量がどれ程向上するかと言う改良期待値は概ね僅かに100kg前後である。現在農林省が樹てている家畜改良増殖目標によると、日本の乳牛の泌乳能力は1年間に5,700kgであるが、それを平成7年までに6,400kgに引き上げるというものである。種雄牛を交配して生産された娘の能力を年間100kg引き上げるのに1世代必要と仮定すると、母からの改良度を考慮に入れないと1,000kg能力を引き上げるのに10世代を必要とすることになる。このように改良の歩みは誠に僅かなもので、しかも環境からの影響が60%程あることを考えると、気の遠くなるような話である。このように1回の交配による改良の期待値は小さなものであるので優秀種雄馬を求めて交配に力を入れて行かなければ向上を見ることは出来ない。僅かな飼養頭数の中で、自己の経営や隣近所の経営内で種雄馬を求めるときは改良期待値は益々小さくなるばかりか結果がマイナスの方向に進むことが多くなると考えられる。明治以後多数の

第811図 牛の姿勢

平安時代から近世までの和牛の体形について上原章次が「昔の和牛は前勝ちで役用タイプであった」と述べているが、写真1に見られるように古代から近世に至るまでの和牛は、頭は体の側に大きく、頭はやや下に附いているために(胴體が低い)頭と背(肩)の間に段が出来ていて、頭と頭を下方に延ばしている。肩は肩甲骨の附着が悪いため肩端(肩甲骨の下端)が前に突出している。背は多少ゆるく、腰と尻の間に段がついている(腰背)。尻はやや傾斜が強く、後肢の飛節から下が膝端に前方に曲り(曲飛)、また右下の牛の後姿に見られるようにX状姿勢をとっている。このように肩肘が低く、肩先が突出し、後肢が曲飛またはX状姿勢であるのが特徴的である。



1 平安時代の牛の側面と後姿 曲飛、X状姿勢強い  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか1987より。平安時代後期



2 平安時代の牛車をひく牛 頭大、曲飛  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか1987より。平安時代後期

第811図 牛の姿勢



1 放牧中の馬 胸狭く、緩背と斜尻  
【鳥獣人物戯画】「日本の絵巻6」(中央公論社)小松茂美ほか1987より。平安時代中期～後期



2 放牧中の馬 頸しさを表すためのお互いの毛づくろい  
【鳥獣人物戯画】「日本の絵巻6」(中央公論社)小松茂美ほか1987より。平安時代中期～後期



3 放牧中の馬 肩先突出、背ゆるい、斜尻  
【鳥獣人物戯画】「日本の絵巻6」(中央公論社)小松茂美ほか1987より。平安時代中期～後期



4 主人の補りを持つ馬達 凹背、集合姿勢、曲飛  
【鳥獣人物戯画】「日本の絵巻6」(中央公論社)小松茂美ほか1987より。平安時代中期～後期



5 出陣する馬 肢の集合姿勢  
【蒙古襲来絵詞】「日本の絵巻13」(中央公論社)小松茂美ほか1988より。鎌倉時代

#### 第812図 馬の姿勢

明治時代の陸軍の検査官が各県の馬検査を行った時の記録を見ると各県の馬の体形は多少異なっており一定の体形を持っていた訳では無いらしい。従って体形の細部については絵巻によってその特徴が多少異なっていることはやむを得ないことである。そのような理由でここでは平安時代から近世に至る馬の特徴について最大公約数的な事項について述べることにする。写真1～3は少年の頃から動物の間で育った人でなければ書けないような運動感を持っている。まず目につくのは「たてがみ」と「まえがみ」と後肢の脛の上の枝の後側に生えている距毛(キョモク)である。この距毛が無いのはアラビヤ馬とサラブレッド種の純血馬だけである。顔では頸(下顎体白歯部)から前の細いことが目につくが、肩は肩甲骨の附着が悪いため肩端(肩甲骨の下端)が前に突出している。背骨(せばね)の線はたるんでいる(ゆるいか又は凹背)。尻と背は移行が悪くて段差(接背つぎせ)がついている。写真1に見られるように胸は狭く(上下の長さが少ない)、尻の傾斜は強く(斜尻)、後肢の飛節から下が前方に折れ曲がっている。(曲飛)。写真4は凹背と、四肢の集合姿勢と曲飛が目立っている。写真5は手綱を引いている故もあって脚が余計に集合姿勢をとっているが、特に集合姿勢が目立っている。正常な姿勢では手綱を引いて追い込むと前肢は前に上る

#### 第812図 馬の姿勢



1 正常な蹄  
【蒙古騎米絵詞】「日本の絵巻13」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1988より。鎌倉時代



2 蹄壁欠損のひどい蹄 長く使役された馬  
【伴大納言絵詞】「日本の絵巻2」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



3 蹄壁欠損を起している後肢  
【伴大納言絵詞】「日本の絵巻2」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



4 牛でも蹄壁欠損ひどい  
【鳥獣人物戯画】「日本の絵巻6」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1987より。平安時代中期～後期

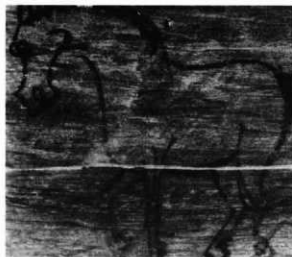


5 蹄壁欠損を起している牛の後肢  
【鳥獣人物戯画】「日本の絵巻6」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1987より。平安時代中期～後期

第813図 蹄壁欠損など

第813図 蹄壁欠損など

馬や牛の蹄は蹄骨(末節骨)の周囲を軟部組織(血管や神経がある)がとり囲み、その上を蹄壁が覆っている。蹄壁の厚さは馬では1cm余り、牛では蹄の先で0.5～1cmの薄いものである。そのため尖った石などを踏んだ時はすぐに蹄壁欠損や、ひどい時は裂蹄(蹄壁が割れる)を起し、出血して歩けなくなる。勿論人や荷を乗せることは出来なくなる。昔の馬は蹄が硬くて蹄壁欠損など起さないと考え勝ちであるが、それは草地のように石の少ない所で放牧され馬が自分で自由に道を選べる時の話である。蹄壁欠損を起す部分は蹄尖(蹄の前面)では小さな欠損を起す、最悪の場合に裂蹄を起す部分は蹄踵が多い。ひどい蹄壁欠損を起すのは蹄の横の部分であって、一寸したことで大きく欠損する。絵巻に出て来る馬・牛では蹄壁欠損を起していない馬・牛を見つめるのに骨が折れる程である。戦時中蹄軟が不足し「はだし」の馬で乗馬訓練を受け、毎日蹄壁欠損に苦しんだ筆者の経験から言えばこのことは当然すぎることに感じる。写真1は蹄壁欠損していない蹄で、下駄のボックリのような箱形の蹄が平安時代～近世の馬の特徴である。写真2は蹄壁欠損著しく、また前蹄をしないので蹄が伸びすぎて、足首(製部)がねすぎている。馬の蹄の正しい角度は前の蹄が50度、後の蹄が55度である。



1 絵馬 静岡興伊場遺跡出土の絵馬 奈良時代末期  
【絵馬】(法政大学出版局) 岩井宏美1974



2 水辺に遊ぶ馬 平等院鳳凰堂願絵 平安時代  
【図説日本文化史体系5】「平安時代下」(小学館) 見玉幸多1957より。平安時代



3 馬に乗ろうとする官人 乗り手の肩より馬の背が低い  
【信貴山縁起】「日本の絵巻4」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



4 喧嘩をながめる官人 馬丁の胸より馬の背が低い  
【伴大納言絵詞】「日本の絵巻2」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



5 貴人を警護する近侍 馬の背が人の肩の高さよりやや大  
【長谷雄草紙絵師草紙】「日本の絵巻11」(中央公論社) 小松茂美ほか  
1988より。鎌倉時代末期

第814図 古代中世の馬の大きさ

中間地域における平安時代の馬の平均体高は $128.7 \pm 9.6$ cm ( $n=41$ )で、中世における平均体高は $125.1 \pm 9.2$ cm ( $n=74$ )である。絵画から馬の大きさを知ることは難しいが、①馬の風貌(馬相)から大きさがわかる場合があるが、この時は大きい、小さいと言う体高区分がわかるだけで体高を知ることは出来ない。②馬丁や乗り手が馬の背について間接的に馬の体高を知ることが出来る、と言った二つの場合がある。①の場合、写真1は静岡興伊場遺跡出土の奈良時代末期の絵馬である。この馬は頭、頸が大きく、胸も深く(胸の上下の長さが長い)大形馬らしい風格を持っているが、上毛野の古墳時代の曲・骨の馬に大形馬が見られることから、この絵馬の馬が大形馬であったとしてもうなずけることである。写真2は平安時代に画かれた平等院鳳凰堂願絵の水辺に遊ぶ4匹の馬であるが右の馬は背が凹み、胸が細く、尻も丸く、足は短くて小さい馬の感じである。②の場合、写真3は官人が馬に乗る所である。人の肩の高さは約130cmである。この馬は乗り手の肩よりやや低い感じであるので中形馬と考えられる。写真4は官人と馬丁が背伸びして喧嘩を見ているところである。人の胸の高さは約110cmであるのでこの馬は小形馬である。写真5は人と比べて堂々たる中形馬である。

第814図 古代中世の馬の大きさ



1 警護する騎馬武者達 馬の背が騎の軍兵の肩より高い  
『平治物語絵詞』「日本の絵巻12」(中央公論社)小松茂美ほか  
1988より。鎌倉時代

第815図 古代中世馬の大きさ 常に大小混在の形で改良進む  
中間地域から出土した馬歯・馬骨を有する馬を時代別に大形馬、中  
形馬、小形馬に分けて見ると、いつの時代にも大形馬が5.2%~10.6%、  
中形馬が48.1%~67.4%、小形馬が31.9%~46.8%いることがわかっ  
た。このように日本の馬の改良上の特徴としてその時代の馬全体が次  
第に改良されていって平均体高が大きくなって行くのではなくて、い  
つの時代にも大きい馬もいれば小さい馬もいる、常に  
大小混在すると言った形で改良が進められてきた。平安時代には大和  
朝廷直轄の9牧が置かれ、中央より種雄馬が派遣され、国守や牧監が  
指揮指揮して改良に努めたが、中世以後は馬の改良繁殖は個人個人の  
馬の繁殖家にかまされた結果、馬の改良は繁殖家の實力と価値感に  
よって左右され、全体から眺めると足踏み状態であった。

写真1は平治の乱の前後白河上皇を警護する騎馬武者達である。い  
ずれも大きい良い馬であって、併せて馬の口を持つ軍兵の肩の高さより  
馬の背がやや高い。繪巻の中には全部の馬が鞭で良馬ばかりは出て  
こない。写真2は伴大納言都に向う検非違使の一行である。追贈使は  
この図の左について見えなが、この図の右側は三騎の部使であり、右  
側が三騎の隨兵である。さすがに部使の馬は良い馬で、隨兵の馬は悪い。  
写真2は部使の馬である。人の座高が約85cmであるので、この馬  
は中形馬である。写真2の隨兵の馬は貧弱で、人の座高から小形馬



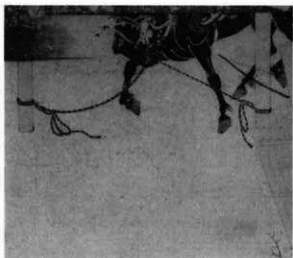
2' 部使の馬 人の座高と比較すると馬の背は1.5倍ある  
『伴大納言絵詞』「日本の絵巻2」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



2'' 隨兵の馬 人の座高と比較すると馬の背は1.2倍しか  
ない  
『伴大納言絵詞』「日本の絵巻2」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期

第815図 古代中世馬の大きさ

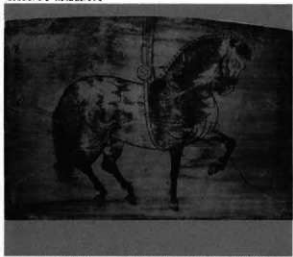




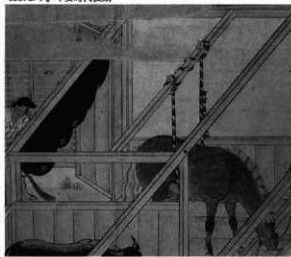
1 厩屋の中で繋かれた馬 手綱を下方に繋ぐ  
【後三年合戦絵図】「日本の絵巻14」(中央公論社)小松茂美ほか  
1988より。南北朝時代



2 意味もないのに転倒する 遼軍行列の隨員、人馬転倒  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



3 馬の繋留方法 手綱を下方に繋ぎ、吊つて前に出さない  
【繪馬】(国立歴史博物館)1963より。江戸時代寛永九年



4 厩の中の繋留方法 前に馬栓があるので後の方をつるす  
【石山寺縁起】「日本の絵巻16」(中央公論社)小松茂美ほか  
1988より。巻1~3及び巻5鎌倉時代、巻4室町時代



5 頭を下に巻き込んだ馬 細かい指示など馬に伝わらない  
【蒙古襲来絵詞】「日本の絵巻13」(中央公論社)小松茂美ほか  
1988より。鎌倉時代

第816節 普通の馬でも古代中世の馬は荒い

古代中世を通じて絵巻の中の家畜は野生のものであって馴化(馴いならずこと)と言うものが殆んど進んでいなかった。絵巻の中で馬が狂奔している姿を見ることは極めて稀であった。絵巻の中で馬が狂奔している姿を見ることはごくあたりまえのことであって、たまに静止していると思えば餌を食べている時だけである。日本の家畜がおとなしくなったのは第2次大戦以後のことであって、家畜人工授精網が確立されて以来のことである。近々20年程度のことである。それまでは雄の選定の第1条件は雄らしいこと(悪く言えば荒々しさである)であったし、飼い主にしても人の扱えない荒い家畜を扱うことが一種の誇りでもあった。寫真1、3、4は馬を繋いでおくことがいかに大変だったかと言う図である。寫真1は厩屋の中で繋留されている馬であるが、馬の騒ぎ方は大変なもので、手綱は頭が高くあがらないように下方に繋いである。前肢が手綱から離れた時は馬が狂乱することであろうとはらはらする繋ぎ方である。寫真4は式部少輔の厩に繋留された馬である。馬がひどく動かないように繋からつてある。珍らしく静止している餌を食べている。寫真4は繋からつてあるので病気がと思われ膝であるが健康な馬でも繋からつる。寫真5馬は手綱に抵抗して頭を下に巻き込んで鞭の痛みから少しでも口を守ろうとする。馬と人の綱引きになる

第816節 普通の馬でも古代中世の馬は荒い



1 奉幣使に従う近衛の使い 口を取る2人はおよび腰  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



2 行列解散後の馬 乗り手のいない馬は妙に騒ぐもの  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



3 狂奔する紙園祭馬長(うまおさ)の馬  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



4 狂奔する紙園祭神主の馬  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期



5 狂奔寸前の賀茂詣の走馬出場を待つ馬  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社)小松茂美ほか  
1987より。平安時代後期

第817図 普通の馬でも古代中世の馬は荒い  
絵巻を見ていると「良くまあこんな騒動(人や物にならずこと)の行きとどいていない馬を使って行けるなあ」とつくづく感心させられることばかりである。人間がこのような荒い家畜を見放さず人間に友として飼育し続けた理由は、荒い家畜から受ける不利益よりも家畜から受ける利益の方が遙かに大きかったからであろう。写真1は賀茂祭の奉幣使に従う近衛の使いであるが、将官と将生とに両手綱を引かれている姿は誠に運々しいが、近衛の馬と言えど馴致調教の良い代表馬で両手綱で引かれることなど考えられない。写真2は天皇の明勸行幸の列が解散し主人を降ろした馬であるが、これも両手綱でひかれている。天皇行幸の随行員の馬となれば馴致調教の良い馬の代表であるべき筈であるが、この程度が荒いには馴致調教の良い馬と考えられていたのかも知れない。去勢をしていなかったことも人に不従順の原因の一つであったであろう。写真3、4、5はいずれも紙園祭や賀茂詣の天皇や閑白の随行員達の馬であるが、一寸としたことに驚いて狂奔している図である。絵巻では馬が狂奔したり、驚ろいたりしていることは極くあたりまえのことである。馬の耳は180度回転し、小さな音でも良く聞こえることも馬が一寸したことに驚く原因の一つである。人は2万ヘルツの音を聞くことが出来、馬は2万5千ヘルツの音まで聞える。(H55)

第817図 普通の馬でも古代中世の馬は荒い

## (1) 古代中世の馬・牛の体形について

絵巻や彫刻、木製馬形等を見ると、天々の絵巻等で解説したように古代中世における馬・牛の体形の中で一番目につきやすいのは後肢の飛節より下が地端に前折れ込んでいたり(曲飛)、X状姿勢をとりたりしていることである。古代中世の馬や牛が著しい曲飛であることについて、日高遺跡の平安水田から出土した1頭の牛の足跡をふりかえてみたい。この足跡は牛の右後肢であって蹄底と思われる部分は長さ10cm、幅10cmで、2つの蹄跡が認められている。足跡の外側の深さが3.9cm、内側の深さが3.2cmで外側の方が深く、しかも足跡の内側後端が長いのでこの足跡は右後肢が内側から外側へ内弧を画しながら内側後端の地面をかすめるようにして外側より着地した足跡と考えられる。また足跡に蹄跡が見られること、歩様について後肢が強い内弧を画して進むことの、2つの理由からこの牛の姿勢は後肢の折り込みが深い(曲飛)かまたはX状姿勢をとり、後肢を支える上体としては尻の傾斜が強くて(斜尻)家畜化があまり進んでいない牛であったと考えられる。なお蹄の大きさから見て【現代黒毛和種の停止時における蹄の大きさ(注44)は、後肢では長さ12.5cm±0.63cm、幅10.0cm±0.44cm、 $n=6$ 】現代黒毛和種よりやや小さい牛であると考えられる。日高遺跡の牛の足跡型取資料は僅か1例に過ぎないが、絵巻その他に見られる古代中世の馬・牛が著しく曲飛またはX状姿勢が多かったことを裏付けているものと考えられる。

それでは何故に古代中世の馬・牛が曲飛またはX状姿勢であったかと言うことであるが、昭和24年～25年に群馬県種畜場(現在の群馬県畜産試験場)で生後10ヶ月前後のホルスタイン種の子牛4頭を用いて放牧試験をしたことがあった。4頭のうち2頭を赤城山の一つ(赤城山は7つの山からできている三重火山である)標高1,300mの鈴ヶ原の比較的傾斜が強く、地形の悪い、前芝の多い雑草地に福山半とにも6ヶ月開放し、2頭は対称として場内で飼育したことがあった。放牧終了後の体尺測定で鈴ヶ原に放牧した子牛は2頭とも場内で飼育した子牛より尻の傾斜が強くなっていくことがわかった。尻が斜尻になれば当然姿勢は曲飛になりながらざるを得なくなる。このように斜尻と曲飛は傾斜の強い山道を歩くには必要條件と考えられる。現在のように山野が切り開かれたような時代と異なり、自然のままの山野が多かった時代の家畜としては曲飛やX状姿勢は自然の地形に対応した当然の姿であったと考えられる。それだけにまだ余り家畜化も進んでいなかったといえる。それに対して広大な地形による例として中国の齊始皇陵から出土した多くの陶馬と陶馬とその製作の美事さと寫実的な技法に深い感銘をうける。陶馬の体形をみると、体の各部の釣合は良く、背線(背のトップライン)は平らで美しく長い。欠点としては眼がやや大きく、脚が浅く(脚の上下の長さが短い)、筋張りが悪くて丸脚であり、股の発達が悪いことが目につくが、どの陶馬を見ても決して曲飛やX状姿勢は見られない。やはり中国の広い平らな地形の中では曲飛やX状姿勢は発達しなかったのではなかったかと考えられる。

## (2) 家畜の体形改良が如何に難しかったかという一例

前述のように家畜の後肢の曲飛やX状姿勢は日本の地形もその一因であったと考えられるだけに、後肢の曲飛やX状姿勢の改良は体形の改良の中で最も難しい形質の一つであって、日本の家畜は現代までこの改良に苦しんだ。群馬の乳牛について曲飛やX状姿勢が減少したのは第2次大戦後のことである。昭和56年4月に群馬県で全国ホルスタイン共進会が開催された。群馬県は全国共進会で全国第一位を目指し、全共対策推進協議会を設立して乳牛改良に努力した。その実施事項は次のとおりであった。

## 例) 計画交配 出品牛造成のため

- ・指定交配 昭和51年10月～52年10月、毎年高等登録雌牛100頭に日本のトップレベルの種雄牛を交配。種雄牛の指定、精液確保、納成

- ・精液補助 昭和52年4月～54年3月、延2,000頭の雌牛に一頭5,000円の精液代助成

## 例) 優良雌牛導入 昭和51年～55年 米国より40頭、北海道より135頭計175頭導入。導入費助成。

- 奨励助成155頭、協議会助成20頭

## 例) 指導 候補牛登録台帳、育成指導指標配布。各戸を指導班が2回以上巡回指導

## 例) 共助会、講習会

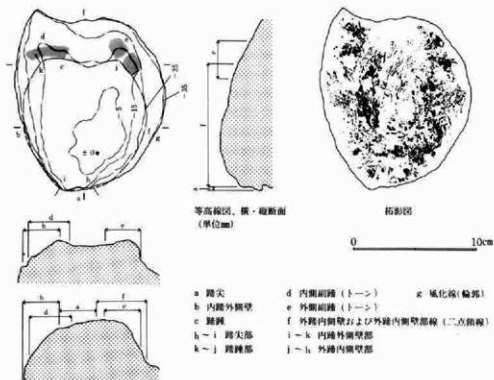
- ・育成共進会年2回、講習会年1回、審査講習会年1回

## 例) 候補牛の選抜 昭和55年候補として未経産牛361頭、経産牛401頭計762頭選定。

- 候補牛761頭を各都の共進会で180頭に選抜。その中から更に昭和55年第1回予選会で120頭に選抜し、昭和56年2月最終予選会で30頭の代表牛を選定した。(代表牛に選ばなければ俺は死ぬ)と勇気に決意していた篤志家もいて、その牛が代表牛に選ばれてホットした家屋話もあった。)

このように文字通り官民一体となつて努力した結果群馬県の乳牛は全国第2位の団体賞を獲得した。酪農王国北海道の代表団は「完全に群馬に負けた」と言い獲して群馬を去っていった。

全国共進会による品種改良と不良牛の淘汰の結果、気がついた時は頼りてどうしても群馬の乳牛からとることが出来なかった後肢の曲飛とX状姿勢とは急になくなって影をひそめた。血液更新を除く普通的手段ではとても曲飛とX状姿勢などとういう改良できるものではない、と言うことが実感であった。



第818図 平安水田2面におけるNo26足跡石膏型実測図 1 : 3



1 暴走する公卿の牛車 速度が早くて車輪が同心円に回転  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社) 小松茂実ほか  
1987より。平安時代後期



2 暴走する朝見物の牛車 接衝事故で車輪破れる。牛吐息  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」(中央公論社) 小松茂実ほか  
1987より。平安時代後期

第819図 古代中世の頃は牛だって荒かった

古代中世の頃は馴化が遅れていたのは馬ばかりに限ったことではなく牛も荒かった。絵巻では暴走している牛の姿を良く見かけるところである。牛に突かれて人が死人だと言う話を聞かなくなったのは第2次大戦後で、近々20~30年のことである。戦後米国より随のようによくやさしい姿と気性を持った種牛が輸入され聞いたものである。家畜人工授精の成果と悪質家畜の淘汰とは家畜の能力を高めたばかりでなく気性もやさしいものに変えた。写真1は天竺行幸を見物に来た公卿の牛車が一寸としたことに驚いて暴走を始めたところである。写真2は極高祭を見物に来た牛車が突然暴走を始めたところであり、牛の吐息は火災のように怒気天をついている。

第819図 古代中世の頃は牛だって荒かった



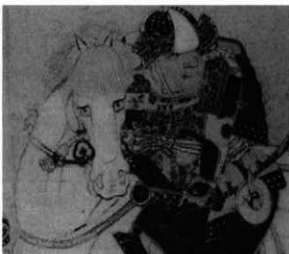
1 現代の北海道和種 顔にはやさしさが満ちている  
江戸時代に北海道で南馬を漁業に使い、それが風土に順化した馬  
〔狩野馬供審定試験場〕1983



2 木製馬形 鋭い目付きは生きているように人を射る  
【繪馬】(法政大学出版局) 岩井宏実1974より。鎌倉時代



3 平治の乱における一部騎の馬 眼の鋭さは気性を現わす  
【平治物語繪詞】『日本の繪巻12』(中央公論社) 小松茂美ほか  
1988より。鎌倉時代



4 後三年の役における清原武衡方の部騎の馬 眼の鋭さ  
【後三年合戦繪詞】『日本の繪巻14』(中央公論社) 小松茂美ほか  
1988より。南北朝時代



5 後三年の役における源 義光の馬 今にも食い付きそう  
【後三年合戦繪詞】『日本の繪巻14』(中央公論社) 小松茂美ほか  
1988より。南北朝時代

#### 第820図 馬の鞍相 (体高の不足は馬の気性で補う)

平安時代の後半から戦国方法は次第に騎馬戦に変わり、部騎の鞍相も大膽(おおよしい)に変化した。平安時代より体の小さくなった体重僅か250kg~300kgの小さな馬が部騎と大膽その他を合せて100kg弱の荷を背負って敵陣に突入しなければならなくなった。部騎達は小さくなった馬の体高の不足を馬の気性で補おうとした。中世の良馬の相は「シヤクミ」(能面で狂女その他の面)で眼が光り、荒馬であること、であった。前述のように普通の馬でも荒かったのに、更に一段と眼が光り、荒馬を運んだとするとその良馬の恐ろしさは想像外であって、余程主人が愛憎をもって撫しなければ到底その馬を乗りこなせるものでない。主人は馬を可愛がり、馬はそれに答えて主人になつき、中世の歴史は馬と共に展開した。

写真1は現代の北海道和種の顔である。2頭とも眼はやさしさに満ちている。写真2は総島神社に奉納された木製神馬である。重要文化財に指定されるだけあって馬の顔は生ききているようである。その眼光の鋭さは人を射るようである。写真3は信賴、義朝が無罪に後白河上皇をお連れする時の圖であるが、その軍勢の中の一武将である。馬の眼光の鋭さは気性の激しきものである。写真4は後三年の役の清原武衡軍の武將である。異様に光る眼付きが恐ろしい。写真5はその時の源 義光の馬で今にも食い付きそうである。

#### 第820図 馬の鞍相

種雄牛が輸入されたが、そのうち改良に役立った種雄牛は僅かに3分の1と言われている。昭和30年頃筆者は畜産の指導者として農家の指導に廻っていたが、軍用の目的（軍服用のラシャ布・毛布原料ほか）を失ったため人羊等は経営内に種雄畜を求めている農家を良く見かけた。いうならば旧態飼育然としたものがあつた。

#### ④ 戦闘方法の変化と馬の用法の変化

中世における軍馬の用法を考えるうえで中世に至るまでの戦闘の変化と、戦闘での馬の用法の変化を次に見たい。奈良時代の朝廷軍は唐制を手本とした軍団条に基づいて編成された部隊であった。平安時代初頭軍団が廃止されたが平安時代になっても軍防令に代わるべき法令が制定された訳ではないので、部隊の編成、装備、戦闘方法に至るまで総て従前通り唐制に習っていたと考えられる。これに対して蝦夷軍は騎馬による遊撃戦を得意としていた。その蝦夷軍の戦闘方法については「巻六 仁明天皇 承和四年二月二八日」〔統日本後紀〕に陸奥国主が蝦夷軍の攻撃方法について「弓馬の戦闘は夷（イリョウ、異民族）の生習（セイシュウ、生きるための業）なり平民（ヘイミン、一般の人）の十其の一に敵する能（あたわず）わず」と述べている。また蝦夷軍の遊撃戦法については「巻三六 恒武天皇 天応元年六月」〔統日本紀〕に陸奥按察使藤原朝臣小黒麻呂等に勅があり、その中に「去る五月二四日の奏状を得て、且（つぶさ）に消息を知る。但だ彼の夷俘の性為（た）る也（や）、蜂の如く屯（たむろし）し、蟻の如くに聚（あつまり）て（中略）、攻むるときは則ち山藪に奔逸（はしりのがれ）れ、放つときは則ち城塞を侵掠（おかしかすむ）む」と記されている。またその行動の素早さについては「巻五 天明天皇 和銅五年九月二三日」〔統日本紀〕に大政官議が奏上した中に「其の北道の蝦狄（カテキ、えびす）遠く阻険に憑り（より）（中略）官軍雷の如く撃ちてより凶賊霧の如く消え」とある。

このような戦闘方法の相違から朝廷軍は大変な苦しみを味わい、当然戦闘方法が変化して来たことと考えられる。ただその戦闘方法が変化して来た時期は資料が少なく不明であるが、このことについて小笠原伸雄

#### 第821回 瘦せた一般の馬

古代中世を通じて一般大衆の飼育する馬の姿が我々の目にふれることは誠に少ない。我々の目にふれるのは軍馬公用馬ばかりである。直良信夫がその著書の中で「江戸時代の後身馬捨馬など調査して見ると絵に表示された軍馬とは締造り馬や老馬の遺骸が検出され、一般庶民が所有していた役馬がどんなに劣勢な体格であったか窺知されよう」と述べている。写真1は端午の節句の石合戦の行事の傍を遡って行く馬子と馬である。馬子は急ぎたがっているが、馬は背が重くて抵抗して「早く歩けないよ」と言っている。写真2は平安時代の物合せの遊びの一つである草合せの遊びの傍を通る年老いた馬子とやせ馬である。軍馬に見られる恐ろしさも、みじんの抵抗もない。



1 端午の肉餅（むかいつぼ）の傍を通る馬子と馬  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」（中央公論社）小松茂実ほか  
1987より。平安時代後期



2 草合せの遊びの傍を通る年老いた馬子とやせ馬  
【年中行事絵巻】「日本の絵巻8」（中央公論社）小松茂実ほか  
1987より。平安時代後期

#### 第821回 瘦せた一般の馬

(注34)は「刀剣の歴史と様式の変遷」『月刊文化財 8 平成元年』の中で「我国において刀剣の歴史と様式が直刀から湾刀へと変化した時期はほぼ平安時代中期、平将門、藤原純友の乱(天慶の乱)よりやや遡った頃と推定されている。この時期は律令社会の班田制がくずれ荘園制の発達と武士と言う新しい階層が生まれた。甲冑において挂甲、短甲から大鎧へと変化した。平安時代の初期の人である板上田村麻呂の佩刀と伝える黒漆太刀が京都の鞍馬寺に現存しているが切刃直刀であった。そして平将門の乱の際に藤原秀郷が佩用したという鎧包毛抜形太刀(公家の兵仗の太刀)が伊勢神宮に現存している。この様式は鑷(しのぎ)の稜線が中央にあり、柄から茎にかけて大きく反りがつく造り込みとなっている。また平安後期から鎌倉初期にかけての太刀の寸法は2尺5寸前後で、江戸時代の打刀の寸定が2尺3寸であるのに比較して遙かに長いが騎馬と徒歩の使用条件の差と考えた方がよいようである」と述べている。日本刀の特色は鑷造りの湾刀であるが、唐様式の直刀から鑷造りの湾刀、言い換えれば和式の日本刀に変化したのは天慶の頃が過渡期と考えられ、いずれにしても平安時代の中期以後のことで、長目の刀で反りを持つようになったのは騎馬戦に用いるため、と言うことであった。このように戦闘方法は徒歩戦より次第に騎馬主力の戦闘法に徐々に変わって行ったことは確かである。

#### ⑤ 中間地域における中世に属する出土馬歯・馬骨を有する馬達の平均年令

前述のとおり中世に属する出土馬歯・馬骨を有する馬達の平均年令は13.0±7.9才(n=30)であり、各時代を通じて最も高い平均年令である。また1時代の平均年令としても極めて高いものである。中世は日本の歴史の中で最も馬を老令に至るまで可愛がった時代であるが、何故に中世の馬の平均年令が高かったか考えて見たい。

④で述べたように平安時代後半より次第に騎馬による戦闘方法に変わってきた。一般的には部将が馬に乗りその周囲を徒歩の一族郎党が囲んで一団となり、またはその複合体で敵陣に突入する合戦の形がとられた。その場合馬は戦車のような役目を果たして戦を有利に導き、馬が敵陣につこんでくれるか、くれないか、

で勝負が決定もした。しかし中世は馬にとって誠に不利な条件が加わった。部将の装備が大鎧(おおよろい)という重装備に変わってきたことである。「第3章(二) 第一甲冑」『日本武器概説』(注35)に大鎧のことに付いて末永雅雄は「毅然たる威容と周到な素材の取扱いはまさに甲冑の最高峰を示すものと言える」と記されているように、最高峰であるだけに重量も重く、「日本武器概説」によると約16.6kg(背旗を立てた具足、冑、頬当、旋輪3.7kg、胴6.2kg、袖、籠手3.2kg、佩盾1.9kg、胴当1.2kg)と記されている。この大鎧のほか、刀、鞍及び鞍下一式、食糧、衣類等装備すると40kgを下るまいと考えられる。部将達は大きな馬を望んでいたにも拘わらず中間地域出土の馬歯・馬骨を有する馬達の体高は平安時代より小さくなっていった。いざ合戦と言う場合には体重250kg~400kgの小さな馬が装備40kg弱、部将の体重を60kgとしても、100kg前後の重量を背負って



1 石山寺の前を通る漁夫か農民の馬  
『石山寺縁起』『日本の絵巻16』(中央公論社)小松茂美ほか  
1988より。巻1~3及び巻5鎌倉時代、巻4室町時代  
第822図 一般馬はのびのびしている。

写真1は石山寺の前を通る近郷の漁夫か農民である。一般大衆の馬は飼料も不足気味で労働もきついで馬はつかれ気味である。ここにいる馬は全無歯で本来ならうさぎくで気の許せない馬である。驚いたことに全部無歯で(轡を使わず頭路に手綱を結んだだけのもの)、その手綱も裏鞍にかけたままで手をふれていない。

第822図 一般馬はのびのびしている

敵陣に突入しなければならなかったので部将達は馬の小さくなった不利な条件を馬の気性で補おうとした。「歴史への招待」(注21)によると、保元平治の乱を始め院政時代の打続く戦闘体験から「良馬の相」は実戦向きに変わった。当時の良馬の相は「シヤクミ」(能面の一つで中年の女の面、狂女その他に用いる)で、しゃくれた顔、とんがった顔つきのものが珍重され、なかでも眼が光り、首と足が太くて荒馬であること、が名馬の第一条件である、と言うことが述べられているが誠に正答を得たことである。良く言えば「根性のある馬」であるが、悪く言えば人を寄せつけない癖馬であって、俗に言う「かむ、ける、抱きこむ」と言った恐ろしい馬であったと想像される。この良馬の相のうち「気性のあらいこと」については「第2章室町幕府時代」「日本馬政史」に武田信玄が家人を集めて馬に関する意見を求めたときに、多田淡路守が「大馬の一曲(ひとくせ)あるならば戦場にて用に立ち申さず候(中略)平常乗合い能(よき)き馬は大勢の中にては人に酔ひ馬にせかれて(いらだって着落がなくなる)進む気をなくし仲々気の毒なる物にて御座候。一氣勝て、つよき馬ならでは大勢の中へ乗込とても業は之無きものに候」と述べている。この様な癖馬は傍に行けばけられ、乗ろうとすればいくつかたれりした害だと考えられる。このような癖馬を取扱ったり、乗ったりするためにはどうしても愛情をもって接する以外に方法がなかった。主人は馬を可愛がり、癖馬はそれにこたえて主人になつき、主人のためには命を捨てたと考えられる。このようになると主人と馬とのきずなは固く、主人がその馬を死ぬまで大切に飼っていたであろうことは想像に難しくない。平均年令13.0才がそれを如実に語っている。ことわざに「びっこ馬、主(ヌシ)がホメる」と言った心境である。筆者も第2次大戦中癖馬に乗っていたためどれ程助かったかわからなかった。癖馬は戦闘間でも丸々と肥えていて長い行軍でもびくともしない。素直なやさしい馬はすぐにやせてしまって、長い行軍に腰がふらふらする「腰い」と言う栄養失調症にかかって使えなくなる馬が出てくるほどであった。

##### (5) 近世

中間地域において中世以降に属する出土馬歯・馬骨を有する馬の個体数は25例であるが、その内訳は中世一近世1例、中世一近代21例、近世2例、近代1例である。この内訳のとおり近世に属する個体数は僅かに2例に過ぎないが、この2例の年令は15.9才及び3才であり、体高は133.8cm及び114.8cmである。

中間地域の馬歯・馬骨の所産年代に近い例として、宮崎重雄(注37)が群馬県藤岡市上栗須の上栗須遺跡で江戸時代中期の馬歯・馬骨28個体(最小限で)を調査している。この遺跡のI区北辺にある3号古墳は地元の人達から馬捨場と呼ばれていた所である。3号古墳中央部より多量の馬骨が出土し、古墳上を走る農道脇には馬頭観世音の石造塔が建てられている。石造塔には宝暦元年(1751)の銘が刻まれており、この石造塔建立前後より馬の埋葬所として使用されていたと考えられる。調査結果によると、当遺跡で検出され、年令の判定出来る27例のうち、20才を超える老令馬は10頭、10~15才の壮令馬7頭、幼令馬1頭であり、約70%が老令馬である。また体高については平均体高126.4cm(n=28、最小116.1cm、最大135.1cm)であると言うことである。江戸時代の馬捨場の馬については、直良信夫が「1地質時代末期の大陸馬と日本の馬」「日本および東アジア発見の馬歯・馬骨」(注38)の中で、「江戸時代の後年馬捨場などを調査して見ると、繪に表示された軍馬とはおおそ縁遠い矮馬や老馬馬の遺骸がしばしば検出されるのである。一般庶民階級が所有していた役馬がどんなに劣勢な体格で矮性のものであったか窺知されよう」と述べている。宮崎によれば、上栗須遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬は約70%がどんなに老令馬であり、また平均体高が126.4cmで小形馬の比率が高いと言うことである。これらのことから直良の言っているように上栗須遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬達は一般庶民の馬であったと考えられる。ただ直良の言っている程矮少でないのは上野国が馬の生



産地であることを示しているためであろう。

中間地域における近世に属する2例の年令は、1例は3才であるが、他の1例は16才に近く、僅かな例数ではあるが50%が老令に近い壮令であることは馬にとっては比較的平穏な時代であったことを示唆している。前述のとおり中世以後に属する出土馬歯を有する馬の個体数は25例であるが、中世—近代の21例を除けば中世—近世1例、近世2例、近代1例で、いずれも極めて少ない。この25例のうち年令、体高の判定出来るものについての平均年令は $10.6 \pm 1.9$ 才 ( $n=10$ ) で、平均体高は $128.6 \pm 8.3$ cm ( $n=15$ ) である。勿論この数字の中には中世と近代が何例含まれているかが不明であるが、平安時代及び中世と比較すると、平均年令については中世より低いが平安時代より高く安定した時代であったことを示している。また平均体高は中世よりやや大きく、平安時代とほぼ同じ体高を示している。この平均体高の中には一部平均体高の低かった中世の馬が含まれているにも拘わらず中世より高くなっているのは、近世に至り各藩とも馬の改良に力を入れており改良の跡が現れているものと考えられる。

また近世における2例の体高が133.8cm及び114.8cmであったこと並びに中世—近代の25例の平均体高が $128.6 \pm 8.3$ cmであったことを次に記録にある江戸時代の馬の体高と比較して考えて見たい。

#### ① 江戸時代における馬の改良と繁殖の奨励について

江戸時代になると平和な時代が続き、一つには産業振興のため、今一つには公用馬の確保のために各藩とも馬の改良と繁殖に力を入れるようになった。「日本馬政史」によれば、家康、秀忠の時代には武家法度の第1条において「文武弓馬の道、専ら相い嗜(たしなむ)むべき事」と述べ、間接的に馬の飼養を促したにすぎなかったが、寛永元年家光は「五石七石の作仕(つかまつり)、収穫をあげている)俵者、馬一匹づつ堅く持ち(必ず一匹づつ飼い)夫より高く之有る百姓とも(それ以上の収穫をあげている百姓は)器量次第手入申す可候(出来るかぎり飼養すべし)」と命じている。また慶長2年には慶長の御觸書書が出て、「何卒して牛馬のよきを持つように仕るべし、よき牛馬ほど肥を多くふむもの也・牛馬を購うこと能はざるものは是非に及ばざれども斯くの如く心掛け申すべし」と訓示している。

これらの訓示により各藩とも藩主が率先して馬の改良と繁殖に力を入れるようになった。その一例として、「第2巻、第6編上、第2章江戸幕府中期」「日本馬政史」によれば、津輕藩においては「寛政四年八月二四日御召馬(藩主の乗馬)若波之御馬此度父馬仰付けられ候、右同鷲尾御馬是亦父馬仰付けられ候」とあり、また「安政二年六月二七日南部信濃守此度卒去に付、生前召され候御馬二匹七戸御代官所へ里父馬(民間の父馬)として明日直に遣わさる」とある。さらに「木曾の産馬について繁殖を図ったのは寛文7年のことで当時の種雄馬は藩主尾州家の乗馬に供せるものなり」と記されている。このように種雄馬は藩主の乗馬か、藩殿飼立の馬か、若しくは2才競り市でこれを買上げ、いわゆる予備種馬としてこれを供給しているが、「津輕、南部、仙台、薩摩、秋田、米沢、三春、水戸にかかる例證は夥多之れあるもここに之を省く」と記されている。

また農民に対する奨励策としては白河藩の例があげられており、寛永6年「二才駒(体高4尺以下を駒という)の内て優良なものは藩で買上げ、種馬として人民に下付し、これにより生じた雄馬は2才に至り競り売りとなし、競り中優等の馬匹を出したるものは其賞として1割5分税を免除して改良奨励の法を講じた」と記されている。

#### ② 江戸時代における馬の大きさ

江戸時代の馬の大きさについて、まず第一に農民と武士の馬の大きさについての考えを知る必要がある。  
〔武士の馬の大きさについての考え〕

幕府及び各藩は弓馬と馬の改良及び繁殖に力を入れ、各藩は夫々「騎法に通達しているもの」を召し抱えるようになった。しかしこの「騎法に通達している」ことは平和な時代であるのでどうしても馬場馬術に秀れていることを意味するようになった。また江戸時代の相馬書について「第3巻、第6編下、第3章、(六)馬格と馬産」『日本馬政史』の中で、元和8年の相馬書に「馬は口の強きは捨物也」とあり、馬の選定の第一条件は口強き馬(くつわに従順でない馬で、いいかえれば手綱さばきに従わない馬のこと)を避けることで、馬場馬術に必要な主人の細かな指示に従順であることが要求されていて、馬の大きいことは必要とされなくなった。

〔農民の馬の大きさについての考え〕

市川健夫は「日本で飼われている馬と牛」「日本の馬と牛」(注39)の中で江戸時代の農民の間で馬について言われていた言葉の中で「一寸倍と言うのは体高が一寸大きくなると飼料が二倍となると言う意味である。表現はオーバーだが飼料を多く要する大形馬は農民から嫌われていた」と述べている。

このように武士も農民もあまり大きな馬を必要としなくなっているが実際にはどのようであったかを記録によって調べてみたい。残念ながら一般の使役馬及び農耕馬についての記録は殆どないため、南部藩の献上馬その他279頭の馬についてその大きさを調べて見る。

- ・宝暦3年南部藩の9つの藩牧における父馬の平均体高 $4.5 \pm 0.01$ 尺 ( $n = 9$ , 135cm)
- ・享保3年函館奉行新たに牧場を開設するため南部藩より購買した牝馬の平均体高 $4.4 \pm 0.1$ 尺 ( $n = 15$ , 132cm)
- ・文化6年函館奉行新たに牧場を開設するため南部藩より購買した牝馬の平均体高 $4.4 \pm 0.2$ 尺 ( $n = 28$ , 132cm)
- ・天保4年南部藩主上府のための行列に参加した馬の平均体高 $4.7 \pm 0.2$ 尺 ( $n = 9$ , 141cm、御召馬の体高4.7尺)
- ・元保元年～慶応3年の間6回にわたる南部藩の献上馬等江戸への「登せ馬」の平均体高 $4.5 \pm 0.1$ 尺 ( $n = 86$ , 135cm)
- ・文化2年3月天子様加茂宮へ行幸の際のお召馬2頭体高4.7尺及び4.6尺。

〔その他参考事項〕

- ・寛政3年津軽藩の献上馬、進上馬14頭の平均体高は3才4.3尺、4才4.35尺、5才4.48尺、6才4.52尺。
- ・寛政5年津軽藩の献上馬、進上馬17頭の平均体高3才4.3尺、8才4.35尺、4才4.4尺、5才4.48尺、6才4.35尺。

津軽藩の江戸への登せ馬は6才で4.55尺あるもの最大で、大体は4.45尺で4.3尺～4.4尺が普通であったと記されている。

- ・宝暦9年南部藩の藩牧において不良母馬を淘汰し、村民から年令4才～22才の一等の優良母馬98頭を購入してこれを補ったが、その時の補充馬の体高は、大きいものとしては4.65尺のものが1頭いたが、最も多かったのは体高126cm～130.5cm(4.2尺～4.35尺)であった。

上記のとおり朝廷へのお召馬及び南部藩主の行列の参加馬のように威儀をととのえる場合は大体140cm程度の馬を用いており、江戸への献上馬、進上馬等は135cm程度の馬であった。また生産の基礎馬である南部藩の種雄馬の平均体高が135cmで、函館奉行が購買した牧場用繁殖牝馬の平均体高が132cmであること、並びに南部藩の藩牧の繁殖牝馬として村民より購入した中で最も多かったのは体高126cm～130.5cmであったこと、等から見て江戸時代における南部藩及び函館奉行の基礎牝馬の体高は126cm～132cm(4.2尺～4.4尺)程度の

ものが多かったと考えられる。これらは公用馬もしくは公用馬生産を目的とした藩牧場、官牧場における繁殖用馬であるので一般の馬はややそれより劣るものと考えられる。

中間地域における近世に属する2頭の馬の体高が133.8cm及び114.8cmであるが、上記の南部藩その他の馬の平均体高と比較すると133.8cmの馬は南部藩公用馬と比較しても恥ずかしくない体格の馬であったと想像される。また体高114.8cmの馬はいつの時代にも大小混在の形で改良が進められていたことを物語る。前述のように南部藩の藩牧における繁殖牝馬の平均体高が126cm～130.5cmであることと、また宮崎による上栗遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬の平均体高が126.4cmで、さらに中間地域における中世～近代の平均体高が128.6±8.3cmであることから見て、近世における中間地域の一般の馬の平均体高は126.4cm～128.6cm程度のものであったと考えても大きな誤りはないものと考えられる。いずれにしても中間地域における近世に属する馬が僅かに2例に過ぎないので、更に例数を重ねる必要性を痛感している。

### ③ 江戸時代における中間地域における馬の改良についての成果

江戸時代の主要な馬の生産地についての記録の中には残念ながら上野国の名は見当たらないが、各藩が馬の改良と繁殖とに努力していた時、中間地域、特に親藩、天領を主とした上野国はどのようにしていたであろうか。

附表127「出土馬歯の歯冠巾・巾率について既往の出土馬歯との比較」の中で、時代別の歯冠巾について「中間地域出土の馬歯の歯冠巾の平均/既往の出土馬歯の歯冠巾の平均」の比は平安時代87.6% (出土点数でn=62)、中世84.8% (n=46)、近世99.2% (n=11)である。また時代別巾率については「中間地域出土馬歯の巾率の平均/既往の出土馬歯の巾率の平均」は平安時代82.6%、中世87.6%、近世97.3%である。このように中間地域出土の馬歯の歯冠巾・巾率は平安時代～中世を通じて既往の出土馬歯の歯冠巾・巾率と比較して80%代を示していたが、近世に入り97～99%を示すようになった。G、G、Gimson(注40)及び吉倉真(注41)が述べているように馬の歯冠巾・巾率が馬の進化と改良の度合いを示すものとするならば、また既往の出土馬歯の歯冠巾・巾率を全国平均と仮定するならば、次のようなことが考えられる。

中間地域出土の平安時代～中世に属する馬の歯冠巾・巾率が全国平均に比較して80%代であることは、中間地域においては平安時代及び中世には、特に平安時代には統制ある改良が行われていたとしてもまだ庶民の綱々まで馬の改良が浸透していなかったことを示している。しかし近世に至り中間地域出土の馬歯の歯冠巾・巾率が全国平均と比較して97～99%と、ほぼ同じ水準に達したことは、たとえ体高が低くとも(武士及び農民の体高についての改良目標は余り高いものではなかった)、またたとえ結果的に見て大小混在の形で改良が進んだとしても(体高114.8cmの小さな馬がいたこと)この地域の人々が力を合わせて改良に努力していたことを物語るのではなからうか。

## 第2項 中間地域における出土馬歯の歯冠巾、巾率から見た上野国の馬の体格

中間地域における出土馬歯の歯冠巾、巾率については第3項4において、歯冠巾、巾率が馬の改良度を現わすもの(注41)とするならば、また既往の出土馬歯の歯冠巾、巾率が全国平均の歯冠巾、巾率を現わすものとするならば中間地域における古代～中世に属する出土馬歯を有する馬達は全国的に見て改良度もやや低く、体の巾のやや小さい馬であったと考えられる。しかし近世に至って急速に改良度も高まり全国的水準の歯冠巾と巾率を示すようになったと述べた。

弘仁式(注42)によると諸国の駅馬の価格が定められているが、上位のものから見て行くと次のとおりである。

- ① 陸奥国、上馬600束、中馬500束、下馬300束
- ② 信濃、出羽2国 上馬500束、中馬400束、下馬300束、常陸、下野2国 上馬500束、中馬400束、下馬350束
- ③ 甲斐、相模、武蔵、安房、上總、下總、上野等16国 上馬400束、中馬350束、下馬300束

このように上野国の馬は栃木、茨城を除く他の関東の馬達とともに第3位に評価されている。この上野国の馬の体格はその後永く維持され第2次大戦迄持ち越されたと推定されることは誠に驚くべきことであると言わねばならない。それは明治以後群馬の馬の軍事上の改良増殖目標は軽駄馬、軽鞍馬(ケイバンバ)の生産であり、決して立派な乗馬や重駄馬や重鞍馬の生産ではなかった。戦後馬匹組合の技術員として群馬の馬の改良に情熱を燃やしていた筆者は国から交配のため群馬県前橋市附近に派遣されてくる軽鞍馬生産用の種雄馬の貧弱さに言いようのない口惜しい経験をした。いわば古代における牧監の心境であろう。平安時代の馬の改良のための交配は中央より種雄馬が派遣(注43)されたことが記録に残されているが、派遣される種雄馬の選択は現代と同じく派遣された国々に既存した馬の良否によって決定され、それによって生産された馬達の血液が永く維持され、後の上野国の馬の体格が定形的な資質となって近代にまで至ったものと推定される。

## 第3項 中間地域における近世以降の牛の飼養状況について

中間地域における近世以降に属する牛の遺存体の出土が皆無であり、また県下5遺跡(日高遺跡、三ツ寺田遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、国分寺中間地域)についてのまとめの項で県下5遺跡においても近世以降の牛の遺存体の出土が無いことを述べた。附表43県下5遺跡における牛の遺存体の出土状況では、牛の遺存体出土点数212点、出土個体数67個体(最少限で)の中で平安時代30個体、中世21個体を除けば古墳時代から中世まで各時代とも3～5個体づつ出土しているにも拘らず近世以後は出土数が皆無になっている。前述のとおり馬の遺存体が近世以後も出土していることから考えると誠に奇異に感ずる。

このことについて山藤修一、大熊晋雄が「北関東における皮革を中心とする一仲買商人の活動について」『群馬文化 第207号』(注48)で林屋と言う皮革仲買人の活動を通じて当時の鞆牛馬皮の流通について「近世社会の仕組においては鞆牛・馬皮の取得・流通には強い規制が行われていた。(中略)先ず近世の長吏が各地域集団ごとに旦那場(いわゆる綱張り)を持ち相互にその境界を定めていた。特に東日本では江戸浅草新町に居住し役所機構を設けた長吏頭彈左衛門を頂点とする賤民支配体制に組み込まれていたこと等の前提をふまえておく必要がある。(中略)即ち近世社会においては誰の所有する牛馬であろうとも死ねば附近の定め

られた捨場にだされそれを取戻す権利を持った長吏が無償で入手する仕組みになっていた。関東では実際の解体をおこなうのは非人であり長吏は自分で手を下すことなく皮・爪その他を取戻す定めとなっていた。」と述べている。ただこの林屋という皮革仲買商人が扱った皮革その他の品目について山藤らは「本史料には牛馬皮の記載が予想されたのであるが、実際には馬皮のみで牛皮は一枚も記載されていなかったのである。これは決して偶然のことでなく西日本では牛耕が主流であったのに対して東日本では馬耕が主流であったと言う傾向があり、林屋の買付けにもその傾向が如実に反映していると思われるべきである。爪の項で見られるように林屋と牛との関わりは僅かに牛爪一組の買付けだけである。東日本で馬皮の産出が圧倒的であったことは埼玉県教育委員会編刊「鈴木家文書」所載諸史料や佐野小頭太郎兵衛職場における牛馬皮の取得表を見ても明瞭である」と述べており、さらに佐野職場における牛馬皮の取得表には安政元年から慶応二年までの牛馬皮の取得状況が記載されており合計馬皮三、三六〇枚牛皮一六六枚となっていたという。

山藤らが述べているように林屋の取扱った牛関係のものが牛爪一組となっており、更に佐野職場における牛皮の取得が馬皮の僅かに4.9%に過ぎなかったことから見れば確かに馬に比較すると牛の飼養頭数が少なかったことは事実であろう。

このことについて近世における中間地域の牛の飼養実態を知るために、明治時代初期における中間地域周辺の牛の飼養頭数を調べた結果は次のとおりであった。

『群馬県誌4』（注49）によると明治13年における群馬県の馬の飼養頭数は42,629頭であるが、牛の飼養頭数は僅かに419頭で馬の1.0%に過ぎない。また附表52明治初頭（明治8年）における中間地域附近の牛の飼養状況を見ると、僅かに前橋市において雄牛15頭、雌牛30頭計45頭が飼養されているだけで、中間地域を中心とした前橋市、高崎市及び群馬郡群馬町の一部には一頭も牛が飼養されていなかった。更にこの地域の市町村誌の中に見られる江戸時代及び明治初頭における牛の飼養状況は次のとおりである。

## 勢多郡宮城村誌（注50）

・文化三寅年十一月（一八〇六）苗ヶ嶋村明細書上帳 一、馬数五拾疋 内弱馬御座候

附表52 明治初頭における中間地域附近の牛の飼養状況

旧 郡 市 町 村 名	現市町 村名	馬 牛 飼 養 頭 数		旧 郡 市 町 村 名	現市町 村名	馬 牛 飼 養 頭 数	
		馬	牛			馬	牛
上野国群馬郡前橋市	前橋市	雄馬 群馬部分28頭勢多部分7頭計35頭	雄牛 群馬部分12頭勢多部分3頭計15頭 雌牛 群馬部分30頭計45頭	上野国群馬郡植野村	前橋市 群馬町	雄馬 15頭 # 10頭	
# 大友村	#	雄馬 7頭		# 東国分村	#	# 8頭	
# 大蔵村	#	# 4頭		# 西国分村	#	# 7頭	
# 内藤分村	#	# 28頭		# 塚田村	#	# 17頭	
# 小相木村	#	# 11頭		# 後引間村	#	# 2頭	
# 古市村	#	# 15頭		# 冷水村	#	# 7頭	
# 江田村	#	# 28頭		# 金古駅	#	# 60頭	
# 鳥羽村	#	# 13頭		# 高井村	前橋市	# 8頭	
# 福荷台村	群馬町	# 4頭		# 北原村	群馬町	# 8頭	
# 中尾村	高崎市	# 36頭		# 上青梨子村	前橋市	# 8頭	
# 正観寺村	#	# 13頭		# 青梨子村	#	# 35頭	
# 小八木村	#	# 36頭					
# 日高村	#	# 41頭					
# 井野村	#	# 20頭					
# 辰民村	#	# 20頭					
# 貝原村	#	# 45頭					
# 新保村	#	# 40頭					
# 元橋社村	前橋市	# 79頭					
# 徳社村	#	# 41頭					

飼養 上野国郡村誌 第4—第6巻 1981による  
 明治8年6月5日太政官通達により編纂され内務省地理局に提出されたもの。  
 前橋市は群馬郡、勢多郡の2つの郡にまたがっていた。  
 上野国分寺中間地域は前橋市と群馬郡東国分村にまたがって存在している。

- ・明治四辛未年八月市之関村銘細書上候 一、馬三拾式疋、一、牛ハ御座無候

勢多郡横野村誌（注51）

- ・寛延二巳二月（一七四九）持柏木村明細帳 一、牛一疋も無く、馬十一疋御座候（馬持百姓なし）

勢多郡敷島村誌（注52）

- ・万延元庚申年（一八六〇）津久田村書上帳 家数三百七軒、馬五十五疋、牛御座無候
- ・明治三十五年本村（敷島村）には牛皆無で馬三八二頭であってその他小家畜は一頭もいなかった。
- ・敷島村の統計に牛が現われるのは昭和二年三八頭が始めてである。

群馬郡塙ヶ岡村誌（注53）

- ・享保五年（一七二〇）棟高村明細帳 馬六拾九疋、牛御座無候
- ・享保二十年（一七三五）棟高村差出帳 馬五十三疋、牛御座無候、馬区馬苦勞御座無候
- ・役肉用牛の飼育は観音寺田中織司が大正の初期に朝鮮牛を導入したあたりが初めてである。

このように明治13年に群馬県内に牛が419頭しか飼養されていなかったこと、明治8年に中間地域付近では前橋市に牛が45頭飼育されている以外に牛が見当たらないこと、勢多郡及び群馬郡下の町村誌には江戸時代中期以後の飼養の記事の外、牛の飼養の記事が見当らず、牛については「牛御座無候」の記事が各所に見られることから、江戸時代の少くも中期以後において中間地域附近における牛の飼養頭数の極めて少なかったことがわかった。またこうした状況を史料すると中間地域における近世以後に牛の遺存体の出土がないのもむしろ当然のことと考えられる。

それでは中世まで上野国に普遍的に飼養されていた牛が近世に至って何故に急速に減少したのであろうか。永い間人が田を耕す人力耕地帯であった東日本に馬耕が普及し始めたのは明治初期のことであり、それまで馬は農業には代掻き（しろかき、田植のために耕起された水田に水を入れた際、堆肥や緑肥等の肥料を踏み込むと同時に土壌を均平にならす作業である。田起し（耕起）は農閑期に人力で行っていた）と運搬に使われていただけであった。

平安時代までは上野国では主として扇状地のような水の豊富な自然湧水地帯で水稻栽培を行っていた。中世に入り荘園の発達とともに次第に水の少ない土地に用水堀や天水溜池を設けて開田を行った。そのため上野国の大多数の水田では僅かな水で田植を行わざるを得ないような宿命を長い間担うようになり、田植時期はさながら戦場のような様相を呈した。水田に入れる水量と代掻きは不可分の関係にあるが、畜力耕起用の犁については、「VI和犁の形成過程と役割」「日本の鎌、鉄、犁」の中で清水 浩は「我が国の犁は奈良時代の『因果経』の牛耕図に見られるように下に安定板のない犁を用いていたと考えられるが、安定性に欠けるため犁は犁の下に安定板を持つ長床犁に改良して行った。長床犁はその長大な安定板のために速度は遅いが牽引力の大きい牛に適し、速度が早く牽引力の弱い馬には適さなかった。犁の下に安定板のない馬用の無床犁は西日本の馬の多い筑前西北部で馬耕に使用されていたが、この無床犁は安定性が悪くて操作が難しかったため東日本に普及しなかった。（中略）この無床犁から安定性の高い長床犁への変化は12世紀～14世紀の頃と考えられ荘園の発達を基軸に農業技術の大変革が封建制農業の形成とともに進んだ」と述べている。平安時代の水の豊富な扇状地形における自然湧水地帯での稲作には上野国の牛遣は大きなおきをしたに相違ないと考えられる。その後水稻栽培は水の少ない地帯へと伸展して行った。そのような訳で田植は用水や天水に頼っている地帯が多くなり1戸の水田に水を引ける時間または期間は極めて僅かであった。そのため代掻きは速度の早い馬でなければ間に合わなかった。また牛に適するとは言っても長床犁にはおおきな欠点があった。このことについて清水 浩は「長床犁は土壌抵抗が大きいために深耕が出来ず、また運動性に欠け

るので狭少な田区には使いにくく、田区の四隅は畝による手直しを要した。いいかえるならば、長床犁は安定性が良い反面耕作上に欠点多く、粗放的な低い生産段階の農法に対応した犁であったと言える」と述べている。水稻の生産性は時代と共に高まり、益々集約化して行く中で粗放的な低い生産段階の農法は自然にうとんぜられて行ったものと考えられ、自然湧水地帯で稲作を行っていた時代と異なり、僅かな水で水田経営を展開して行かなければならなくなり、それに加えて度重なる検地に一分の隙もなくなった近世において、農業経営の中から浮き上がった上野国の牛の飼養頭数が急速に減少して行ったことは当然のことのように考えられる。

馬耕が東日本に普及したのは明治初期に長床犁と無床犁の両者の長所を生かした近代的短床犁が開発された以後のことである。明治20年頃から各県で行った区画整理事業と結びついて発展して行った。その後明治33年に往路、復路とも同一方向に土壌を反転出来る双用犁の開発によって東日本における馬耕は飛躍的に発展した。この馬耕の発展とともに東日本の農業経営の中における馬の地位は強固なものとなった。

#### 第4項 国分寺中間馬C中世について

国分寺中間馬C中世は腓骨、種子骨を除きNo108～No120の左大腿骨から左後基節骨までの一連の後肢骨がB区1号溝の南側斜面上にカギの手になってはりつくように配列して出土している。そのうち脛骨には足根骨と距骨が附着し、中足骨には第2、第3中足骨と、第1、第2、第4足根骨及び中心足根骨が附着し、基節骨には中足骨遠位部が附着して出土している。特に各足根骨や第2、第4中足骨のような遺存しづらい小さな細い骨までが接続して出土していることは大変珍しい遺存例である。調査者の所見によると馬の片股が1号溝の上面南斜面上にはり付くような形で出土し、検出作業は約50cm上方の骨を埋没させていた同一層から手掘り排土しているので残りの骨が存在したときは見逃すようなことはなく、またその附近の入念な精査においても同一の他の部位の骨は発見されなかったという。調査所見によれば1号溝の埋没土はPHが高いと考えられる有機質砂質土で、さらに基盤は榛名山麓の扇状地形に伴う自然湧水地帯に属し骨の遺存に必要な適度な湿土を保ち、この二者が相乗作用して遺体の遺体に適する条件を作り出したものと考えられる。このような遺体の遺存に適する条件が整っている中で他の部分の骨が存在した場合には当然その骨も遺残した可能性が高いと考えられるが前述のとおり入念な検出作業にも拘らず他の部位の骨は検出されなかった。このため小さな肢骨までが完全な形で、しかも連結するような形で出土したのは旧時の状態をそのまま留めている可能性は極めて高く片股のまま切りとられ何等かの目的例えば祈願祭事に供された場合が考えられる。日高遺跡では平安時代中期における祭事に供した抜歯の可能性が考えられたが、時代が下って14世紀後半から16世紀前半に至るまでこのような祭事の存続が示され興味深いものがあった。

## あとがき

昭和61年に群馬県埋蔵文化財調査事業団より中間地域の調査の依頼を受けてから年を経過したが、その5年間に先輩達の立派な研究が実を結んだものが多かった。特に西中川 毅氏の「古代遺跡出土骨から見たわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究」で、数多くの在来馬、在来牛の骨格を計測された結果、欠損している骨の計測値からその骨の最大長を推定する公式を策定された。(その骨の最大長を林田の体高推定公式にあてはめると推定体高が得られる。)この研究が完成された後で中間地域の調査が実施されたとしたならば、中間地域の成績は更に精度の高いものとなったであろうと考えている。

中間地域の調査が終盤に入ったときに中間地域の北側に近接する国分境遺跡より出土したNo.1馬歯LP<sub>2</sub>及びNo.2牛歯LP<sub>2</sub>を調査するよう依頼を受けた。この馬歯及び牛歯は古墳時代～平安時代(7世紀～10世紀)に属し、時代的に貴重なものである。担当者の所見によればこの馬歯・牛歯が出土した場所は牛池川の河川敷で、国分尼寺に近接した対岸にあり、そこは山王院寺と同一台地・近接地で、上毛野園の筆頭豪族の氏寺と有縁の氏族、または血縁の氏族が居住していた場所であるという。このNo.1馬歯を有する馬は年令4～5才、体高140cmで大形馬の中では小さい馬である。しかし同時代の馬と較べると歯冠長、歯冠巾ともに大きく、歯率は同じであり改良度も高い馬であったと考えられ、上毛野園の筆頭豪族と有縁または血縁の氏族の首長が飼育したとしても恥ずかしくない立派な馬であった。中間地域、三ツ寺1遺跡、国分境遺跡を通じ古墳時代に属すると思われる馬は三ツ寺1遺跡のNo.712の101.5cmと言った小さな馬も見られるが、中形馬以上の大きい馬が多く、1時代の馬の平均体高を算出したとすると、平均体高の最も大きい時代ではなかったかと考えられる。若しも国分境出土のNo.1馬歯を有する馬が古墳時代に属する可能性が大きいとするならば、古墳時代に属する馬の平均体高は130.9±15.9cm(n=5)となり、1時代の平均体高としては最も高いものとなる。

記載すべき事項でありながら書き落した事項としては動物の歯の磨耗度による年令判定であるが、餌料が現代と異なっているので現代の動物の歯の磨耗度をもって古代～近世の動物の年令を類推することは妥当でないと考えているが、一応現代の動物の歯の磨耗度により年令を判定したことを記載すべきであった。

また第809図中の蝦夷の肩当て羽の気にかかることである。その肩当て羽の描寫が事実であったと仮定すると肩当てに用いた猛禽類の種類が何であったかが問題になる。それと言うのもこのことが蝦夷の生業(なりわい)にも関係しているためである。更に聖徳太子の前に膝まずき、信服している立居振舞いの良さから、その数人の人達は族長であるかも知れない。従ってその服飾は種族の族長階級を表わす服飾が示唆される。この肩当てに用いた尾羽は大きい尾羽である。鷹は殆んど全部の品種が尾羽に横縞を持っている。鷹は尾羽に横縞を持っている品種は少く、鷹の中でも体が大きく東北に多い「オジロワシ」や「オオワシ」の尾羽は白くて横縞がない。また比較的大きくて尾羽に横縞のある「イヌワシ」や「クマタカ」は主として高山に生棲しているのて蝦夷の絵の中に見られる尾羽は鷹の中でも大きい品種の尾羽であろうことを加えておきたい。

報告書を纏めてつくづくと感じたことは動物達の力である。人間が旧石器時代より幾多の困難を克服しながら今日の繁栄を築いてきたが、それは人間一人の力ではなく多くの動物達が人間を支えてくれたからであって、そのことを我々人間は片時も忘れてはならないと言うことである。動物達の人を見る眼の輝きの中に常に人に対する愛と信頼とがあることを忘れないようにしなければならないと考えている。



謝辞：猪歯の測定方法について資料の御提供と種々御教導を賜りました鹿児島大学農学部家畜解剖学教室西中山駿氏、日本大学農学部獣医学科望月公子氏、東京大学農学部家畜解剖学教室伊東信夫氏、並びに動物の骨格標本について種々御教導と御便宜とを賜りました東京大学農学部家畜解剖学教室西田隆雄氏、国立科学博物館分館動物研究部動物第1研究室吉川瑞子氏、また人歯・人骨及びその測定法について種々御教導を賜りました群馬大学医学部第2解剖学教室石川春律氏、藤巻昇氏、獨協医科大学第一解剖学教室茂原伸生氏、東京医科歯科大学歯学部口腔解剖学教室山下靖雄氏さらに家畜の体各部の測定についてお力添えを賜りました群馬県家畜試験場森村隆作氏、及び牛骨の御提供を賜った群馬県畜肉事業共同組合小林次郎氏に深甚な感謝の意を表します。

また本文中の実測図のレイアウト、写真撮影並びに写真のレイアウト、ワープロによる本文及び附表の精書並びにレイアウト等全面的にお力添えをして下さった群馬県埋蔵文化財調査事業団国分寺中間地域整理班の皆さんに心から感謝いたします。更に動物遺存体出土状況について膨大な資料をととのえ、種々御教導を賜った群馬県埋蔵文化財調査事業団の皆さんに心から感謝いたします。

## 注

- 1 「巻12 聖武天皇 天平9年2月」『巻21 淳仁天皇 天平宝字2年12月』「巻22 淳仁天皇 天平宝字3年8月」『巻33 光仁天皇 宝龜5年8月』『続日本紀』〔国史大系 第2巻〕 上野国をはじめ坂東諸國の騎兵を豫備、出羽に発し之を伐たしむ
- 2 林田重幸 『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬会 1978 日本及び東アジア地域の在来馬について小形馬と中形馬とに大別し、小形馬は105cm-122cm、中形馬は129cm-138cmの範囲内にあることを述べている。
- 3 大江正直 『日高遺跡出土の馬歯・馬骨 日高遺跡出土の牛歯・牛足跡について』 『日高遺跡』 (群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982
- 4 大江正直 『日高遺跡出土の獣歯・獣骨について』 『日高遺跡』 (群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1988
- 5 市井正次 『第24章 令鑑定』 『馬学精説』 1943 5才以下を幼令、6才以上15-16才迄を壮令、17才以上を老令としている。
- 6 豊田 裕 (並河 澄外10名) 『V.4 性成熟と性周期』 『新畜産学』 1985 主要家畜の性成熟と繁殖利用期間について、牛の繁殖利用開始は14-18ヶ月であり、繁殖利用限界は14-15年であり、馬の利用開始は34-36ヶ月、繁殖利用限界は15-20年としている。直良信夫は『古代遺跡発掘の家畜遺体』の中で「生後おそらくは10年を経過していた老牛と思われる」と言う表現を用いている。
- 7 直良信夫 『古代遺跡発掘の家畜遺体』 (日本中央競馬会弘済会) 1973
- 8 R. BARONE ANATOMIE COMPAREE DES MAMMIFÈRES DOMESTIQUES. TOME 3. SPLANCHNOLOGIE (FETUS ET SES ANNEXES) FASCICULE 1. APPAREIL DIGESTIF. APPAREIL RESPIRATOIRE. LABORATOIRE DANATOMIE ÉCOLE NATIONALE VÉTÉ. RINAIRE LYON. PP. 155-179 1976
- 9 林 貞博 『日本産インシシの歯牙による年令と性の判定』 『日本獣医学雑誌』 39 165-174 1977
- 10 大塚司記之 『遺跡出土ニホンジカの Unterkiefer による性別・年令・死亡季節判定法』 『考古学と自然科学』 第13号 51-74 1980
- 11 宮崎重雄 『長野県佐久市池田遺跡出土の馬と牛の骨について』 『岡谷遺跡発掘・盛久保遺跡群西御堂』 (佐久埋蔵文化調査センター) 1986
- 12 大江正直 『下東西遺跡出土の獣歯・獣骨について』 『下東西遺跡』 (群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1987
- 13 森本岩太郎外3名 『第6章 第2節 出土人骨所見』 『上野国分寺・日寺中間地域』 (群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1986
- 14 大林太良 『神馬の事象について』 『日本古代文化の探求 馬』 1974 印欧諸國の馬祭祀および馬供犠の複合における南方的諸要素の一つとして馬の頭蓋骨突衝をあげている。
- 15 社会の進歩は年をとるに従って危険度を増し、1945年当時ですら米國において種痘牛の取扱ひのために年々100人の人が死んでいったと語られている。
- 16 大塚司記之 『シカ』 『縄文文化の研究 第2巻 生業、3狩猟』 1983
- 17 上坂章次 『第3章 和牛の改良』 『増訂版 肉用種牛全書』 1973
- 18 5遺跡の所在地 日高遺跡 (高崎市日高町) 三ツ寺田遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺) 下東西遺跡 (前橋市青梨町・高井町) 田端遺跡 (高崎市阿久津町田端) 国分寺中間地域 (前橋市元郷社町・群馬郡群馬町東国分)
- 19 藤田恒太郎 『附表1 歯の分析値』 『歯の話』 1965 歯の硬さ エナメル質 7~6 (石英~正長石)、象牙質 5~4 (燧石~螢石)、セメント質 5~4 以下
- 20 文化財保護部 『鹿古習志』 (財団法人国土地理協会) 1984 この神事は延喜八年の記録にもあるように以前は春期を期年二回行われたが、明治四年社格の制度により國幣中社となるに及んで年一度の神事となった。
- 21 大江正直 『三ツ寺田遺跡2号土壇墓出土の馬歯・馬骨について』 『三ツ寺田遺跡・保原田遺跡・中里天神古墳』 (群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1985
- 22 宮崎重雄 『4 三ツ寺田遺跡出土の獣骨類について』 『三ツ寺田遺跡』 (群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1988 5世紀後半中世から6世紀前半に属する獣骨が出土している点で貴重である。
- 23 西中川 敏 『V. 馬の関連遺物、特に地輪馬と土馬に関する調査研究』 『古代遺物出土骨から見たわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究』 (鹿児島大学農学部獣医学科) 1989

- 24 森 浩一 「考古学と馬」 『日本古代文化の探求 馬』 1974
- 25 『群馬のはにわ 開館記念録』 (群馬県立歴史博物館) 1979
- 26 『伝書式 巻 28 兵武書』 (『国史大系第 26 巻』) 藤岡牧保 凡そ牧化馬計載己上の者。譯之例に在らず。とあり繁殖用種馬は 12 才位ではまだまだ繁殖に使用出来る年齢である。
- 27 堀田輝左右 『第二期 第七章 第七節 兵制』 『群馬縣史 第一巻 復刻』 (群馬県教育会) 1972 諸国には大抵五六部毎に一軍団を置く。我上野園の軍団は群馬に在りしもの外は群ならず。と述べている。
- 28 『第二編 第一章 (四) 軍団組織』 『日本馬政史 一』 (帝國騎馬協会) 復刻 1982 の中で栗田 寛が其の著書「上下の兵制」において軍団の仕組に附て詳述していることが記載されている。
- 29 吉沢幹夫 「古代軍制と騎馬兵力について」 『律令国家の構造』 1989 吉沢幹夫は榎本 裕が史料上にもられる諸国騎兵や騎兵という語は直ちに軍団制騎兵を示すとは限らないが、征夷政策にみられるように東国の軍団の中にはかなり多数の騎兵を確保したてではないかと推測していることを述べている。
- 30 「1」 第 1 次調査 (2) 遺物』 『行田市郷土博物館研究報告 Vol. 1 芝城跡の発掘調査』 (行田市郷土博物館) 1989
- 31 野村晋一 「11, 2 鏡馬とサラブレッドの歴史」 『サラブレッド』 1985
- 32 『第五編 第二章 室町幕府時代』 『日本馬政史 一』 (帝國騎馬協会) 復刻 1982 の中で武田信玄自身相馬法に通じ、よく馬を相し、また馬を重んじた人で、軍馬の運び方の意見を家人に問うたことが記載されている。
- 33 『第 6 編 登録の活用』 『ホルスタイン登録必携』 (日本ホルスタイン登録協会) 1986 近親交配の弊害としては遺伝的劣化現象の発現と近交退化が起こり、近交係数の上昇が 12.5% になるような交配 (半きょうだい交配や祖父×孫娘交配) を行いとその改良効果は近交退化によりマイナスと相殺されて、改良の期待は出来なると述べている。
- 34 小笠原信夫 「刀剣の歴史と様式の変遷」 『月刊 文化財 8 平成元年』 (文化庁文化財保護課第一法規出版株式会社) 1989
- 35 末永雄郎 「第三章 各説 第一甲冑」 『日本武器概説』 1971
- 36 『義経騎馬軍団』 『歴史への招待 6』 (日本放送出版協会) 1980
- 37 宮崎直雄 「4 上栗原遺跡の馬骨」 『上栗原遺跡、下大塚遺跡、中大塚遺跡』 (群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1989
- 38 直良信夫 「日本および東アジア発見の馬骨・馬骨」 (日本中央競馬会) 1970
- 39 市川健夫 「日本在来牛馬のルーツと多み」 『日本の馬と牛』 1981 江戸時代の馬馬は体高 4 尺を「定尺」と言って標準としており、この定尺より一寸高いもの「一寸」、二寸高いものを「二寸」と呼び、「一寸信」等体高と飼料の必要量等について述べている。
- 40 G. G. SIMPSON 著 原田俊治訳 『馬と進歩』 1979
- 41 吉倉 鏡は「塚原古墳群出土の馬骨」 『塚原』 (熊本県教育委員会) 1975 の中で「咬合面の狭いことは原始的な 1 つの表徴」と述べている。また G. G. SIMPSON は「馬と進化」の中で「歯冠の大きさと高さは植物食性と体の大きさに対する進化の現われである」と述べている。
- 42 「主税 鞍馬直法」 『弘仁式』 (『国史大系 第 26 巻』)
- 43 『塚原国正関係』 (『大日本古文字』) の中に上野園に下る種馬 10 頭が尾張国を通過する際馬糧が正税より支出されたことを記している。
- 44 現代馬毛和種の子調値は群馬県畜産試験場の計測値である。足跡の測定法は安間繁樹「第 1 部 III 1 足跡」『アニマル・ウォッチング』 1982 による。長さ=蹄尖より踵まで、巾=外路の外側より内路の外側まで。
- 45 清水潤二 「鯨肉の文化とその種族」 『史学 第二十五巻 第三号』 (慶応義塾大学史学会) 1963
- 46 『第三十八回 正倉院展』 (奈良国立博物館) 1986 蘇は通常鉄線であるがここには珍しい竹籠 50 隻、長 78.5~81.0、骨線 12 隻、長さ 75.0~79.0 が展示されている。シノダケの先に蘇を差し込み、元に弦を番 (つら) えるための管 (はず) が切り込んであり、箭 (やがら) は環を穿つてある。
- 47 「重勝本綱草巻第三十三山典 動物部十二 鳥五」 『古事類集 動物部』 (神宮司廳) 1985
- 48 山藤新一大熊吉雄 「北関東における皮革を中心とする一件買商人の活動について—幕末・明治初期の『万葉帳』の分析から」 『群馬文化 第 207 号』 (群馬県地域文化研究協議会) 1986
- 49 「第七期 第七章 第 3 節 産業職別勤勞施設と其発達」 『群馬縣史 四』 (群馬県教育会) 1927
- 50 「第五章 第七節 近世資料」 『宮城村誌』 (宮城村誌編纂委員会) 1973
- 51 「第十三章 第一節 農業」 『横野村誌』 (横野村誌編纂委員会) 1956
- 52 「四、四 畜産」 『敷島村誌』 (敷島村誌編纂委員会) 1959
- 53 「産業外経済 農業 (五) 畜産」 『境ヶ岡村誌』 (境ヶ岡村誌編纂委員会) 1955
- 54 防衛庁防衛研究所 「第二章~第四章 正作戦—準備—進攻—後退」 『昭和二十年の支那派遣軍 (2)』 1973
- 55 DESMOND MORRIS 著 渡辺政雄訳「耳はどのくらいいいから」 『鏡馬の動物学』 1989

群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第103集  
上野国分僧寺・  
尼寺中間地域(4) 《本文編(2)》  
一関越自動車道(新路線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第33集一

---

平成2年3月15日印刷

平成2年3月20日発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県教育委員会  
前橋市大手町1丁目1番1号  
電話(0272)23-1111

印刷／朝日印刷工業株式会社

---